

瑞穂遺跡 5

～第 3・4・7・8・10次調査～

大野城市文化財調査報告書 第200集

2022

大野城市教育委員会

み ず ほ い せ き
瑞穂遺跡 5

～第 3・4・7・8・10次調査～

大野城市文化財調査報告書 第200集

2022

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野南部に位置し、市域は中央がくびれ南北に細長いひょうたん形をしています。その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来し、北部に大野城跡、中央に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡とそれぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

瑞穂遺跡は市域のほぼ中央、牛頸川左岸の微高地上に位置しています。これまでの発掘調査により古墳時代中期の集落跡、奈良時代や中・近世の遺構が確認されていました。本書で報告する発掘調査のうち、特に7・8次調査では甕棺墓を中心とする弥生時代の墓地を確認し、大野城市を代表する弥生時代の遺跡であることが明らかになりました。また、10次調査では中国・四国地方から持ち込まれたと考えられる瀬戸内系の弥生土器が発見され、古くより遠隔地の人々と交流があったことがわかりました。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、我々にたくさんのことを教えてくれます。こうした遺跡を記録し、報告書というかたちで広く一般に公開するとともに、後世へと伝えていけるよう努めています。本書が文化財の理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究や教育の面で広く活用していただけたら幸いです。

最後になりましたが、事業関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した大野城市曙町1丁目、瑞穂町2丁目所在の「瑞穂遺跡第3・4・7・8・10次調査」の報告書である。
2. 発掘調査は各事業者の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は3・4次調査を徳本洋一、7・8次調査を早瀬賢、10次調査を山崎悠郁子が担当した。
4. 遺構写真は調査担当者が撮影した。遺跡全景写真は(有)空中写真企画に委託した。
5. 遺物写真撮影のうち、7・8次調査の弥生時代甕棺を(株)アーキジオ九州に委託した。その他の遺物については、牛嶋茂が撮影した。
6. 遺構平面実測図は、7・8次調査の全体図を(株)埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託し、このほかの全体図及び個別の実測図は調査担当者のほか、天野正太郎・梶原詩織が実施した。
7. 出土人骨の保存・分析については九州大学アジア埋蔵文化財研究センター舟橋京子氏(九州大学アジア埋蔵文化財研究センター)に依頼し、人骨出土状況の実測・取り上げは田中良之・石川健・舟橋京子・高棕浩史・端野晋平・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・李ハヤン・中井歩が実施した。
8. 3・4次調査の遺構実測図中の方位は磁北、7・8・10次調査の方位及び図上の座標は国土座標(第Ⅱ系)を示す。
9. 遺物のうち、7・8次調査の弥生時代甕棺の実測・拓本・製図、遺構のうち、7・8次調査の弥生時代甕棺墓の製図は(株)アーキジオ九州が、このほかの遺物実測・拓本・製図、遺構図製図は(株)タクトが担当した。また、10次調査の一部の遺物実測については、上田龍児が担当した。
10. 遺物観察表は、(株)タクトが作成した。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用した。
12. 7・8次調査の遺構番号のうち、弥生時代甕棺墓については、文章中では「○号甕棺墓」、挿図中では「K○」と表記している。
13. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については平城京分類、輸入陶磁器については太宰府分類(太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV』2000年(太宰府市の文化財第49集))による呼称を用いる。
14. 本書に掲載した資料は、大野城市教育委員会が管理・保管している他、出土人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室が管理・保管している。
15. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用している。
16. 本書の執筆は、各遺物文章は(株)タクトが担当し、澤田康夫・上田が加筆・修正したほか、Ⅶ章を舟橋・米元・梶佐古幸謙・富田啓貴・足達悠紀・松尾樹志郎・植野律子・白 楊・Stephen Nguyen Si Minh・出見優人・小高蒼大・田渕朱莉・松村祐奈・足立達朗・中野伸彦・小山内康人が、これ以外は上田が執筆した。編集は(株)タクトの協力のもと、澤田・上田がおこなった。
17. 発掘調査・報告書作成に関しては以下の方々から、ご教示を得た。(五十音順・敬省略)
牛嶋茂・久住猛雄・舟橋京子・溝口孝司・山崎頼人

本文目次

I. はじめに

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 整理作業の経過	3
3. 調査・整理の体制	4

II. 位置と環境

1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	7

III. 瑞穂遺跡第3次調査

1. 調査概要	13
2. 遺構と遺物	13
(1) 溝状遺構	13
(2) 竪穴状遺構	15
(3) その他の出土遺物	15
3. 小結	15

IV. 瑞穂遺跡第4次調査

1. 調査概要	16
2. 遺構	16
(1) 土坑	16
(2) 溝状遺構	16
3. 小結	16

V. 瑞穂遺跡第7・8次調査

1. 調査概要	17
2. 遺構と遺物	17
(1) 弥生時代の遺構	17
① 甕棺墓	17
② 土坑墓・木棺墓	52
③ 石蓋土坑墓	62
④ 石棺墓	66
⑤ その他の弥生時代遺構	69
(2) 古墳時代の遺構	73
(3) 近世・近現代の遺構	81

①甕棺墓	81
②桶棺墓・縦棺墓	105
③木棺墓・土坑墓	121
④その他の遺構	146
(4) その他の出土遺物	150
3. 小結	152

VI. 瑞穂遺跡第10次調査

1. 調査概要	153
2. 遺構と遺物	154
(1) 溝状遺構	154
(2) 木棺墓	160
(3) 横口式土坑墓	161
(4) 土坑	162
(5) その他の出土遺物	163
3. 小結	164

VII. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土人骨について

1. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土の弥生時代人骨の埋葬状態と形質的特徴	175
2. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴	184
3. 瑞穂遺跡出土弥生時代人骨の歯牙のストロンチウム同位体比分析	209

VIII. 総括

1. 瑞穂遺跡における土地利用の変遷	221
2. 弥生時代～古墳時代墳墓の変遷とその背景	222
3. 近世墓地の変遷	230

表 目 次

表1 発掘調査履歴	2
表2 第3次調査出土遺物観察表	165
表3 第7・8次調査出土遺物観察表（甕棺）	165
表4 第7・8次調査出土遺物観察表（土器・土製品・磁器・瓦器）	167
表5 第7・8次調査出土遺物観察表（金属製品）	170
表6 第7・8次調査出土遺物観察表（玉・ガラス製品）	172
表7 第7・8次調査出土遺物観察表（石製品）	173
表8 第7・8次調査出土遺物観察表（その他の出土遺物）	173
表9 第10次調査出土遺物観察表	174

挿 図 目 次

第 1 図	調査地点位置図 (1/3000)	3
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	9 ~ 10
第 3 図	遺構配置図 (1/100)	13
第 4 図	竪穴状遺構 (SX01) 実測図 (1/30)	14
第 5 図	出土遺物実測図 (1/3)	14
第 6 図	遺構配置図 (1/60)	16
第 7 図	土坑実測図 (1/30)	16
第 8 図	遺構配置図 (1/150)	19 ~ 20
第 9 図	1 号 ~ 6 号甕棺墓実測図 (1/40)	21
第 10 図	7 号 ~ 11 号甕棺墓実測図 (1/40)	22
第 11 図	1 号・2 号甕棺実測図 (1/6)	23
第 12 図	3 号・4 号甕棺実測図 (20・21 は 1/6、22 ~ 24 は 1/10)	24
第 13 図	5 号 ~ 7 号甕棺実測図 (25・26・29・30 は 1/10、27・28 は 1/6)	25
第 14 図	8 号 ~ 10 号甕棺実測図 (1/10)	26
第 15 図	12 号 ~ 17 号甕棺墓実測図 (1/40)	28
第 16 図	11 号 ~ 14 号甕棺実測図 (37・38・41 は 1/6、他は 1/10)	29
第 17 図	15 号・16 号甕棺実測図 (1/10)	30
第 18 図	17 号 ~ 19 号甕棺実測図 (1/10)	32
第 19 図	18 号 ~ 23 号・25 号・26 号甕棺墓実測図 (1/40)	33
第 20 図	20 号 ~ 22 号甕棺実測図 (52・53 は 1/6、他は 1/10)	35
第 21 図	23 号・25 号・26 号甕棺実測図 (58・59 は 1/6、他は 1/10)	36
第 22 図	27 号 ~ 29 号・31 号・33 号 ~ 35 号甕棺墓実測図 (1/40)	37
第 23 図	27 号・28 号甕棺実測図 (1/10)	38
第 24 図	29 号 ~ 34 号甕棺実測図 (69・70・75 は 1/10、71 ~ 74・76・77 は 1/6)	39
第 25 図	36 号 ~ 41 号甕棺墓実測図 (1/40)	41
第 26 図	35 号・36 号甕棺実測図 (78・79 は 1/10、80・81 は 1/6)	42
第 27 図	37 号 ~ 40 号甕棺実測図 (82・83 は 1/6、84 ~ 87 は 1/10)	43
第 28 図	42 号 ~ 45 号甕棺墓実測図 (1/40)	45
第 29 図	41 号 ~ 43 号甕棺実測図 (90 は 1/6、他は 1/10)	47
第 30 図	44 号・45 号甕棺実測図 (1/10)	48
第 31 図	46 号・47 号・49 号 ~ 51 号甕棺墓実測図 (1/40)	49
第 32 図	46 号・47 号甕棺実測図 (1/10)	50
第 33 図	49 号 ~ 51 号甕棺実測図 (103 は 1/6、他は 1/10)	51
第 34 図	SK02・SX13・20・23 実測図 (1/30)	53

第 35 図	SX24・25・35・56 実測図 (1/30)	54
第 36 図	SX64・65 実測図 (1/30)	55
第 37 図	SX72・77・155・156 実測図 (1/30)	57
第 38 図	SX182・183・185 実測図 (1/30)	59
第 39 図	SX186・187 実測図 (1/30)	60
第 40 図	SX188・194 実測図 (1/30)	61
第 41 図	SX200・201 実測図 (1/30)	62
第 42 図	1・2 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	63
第 43 図	3・4 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	64
第 44 図	5・6 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	65
第 45 図	7 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	66
第 46 図	1・2 号石棺墓実測図 (1/30)	67
第 47 図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (1)	
	(104・117 は 2/3、108～111 は原寸、115・116 は 1/2、他は 1/3)	68
第 48 図	SX26・74・75・86・121 実測図 (1/30)	69
第 49 図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (2) (120～124 は 1/8、他は 1/3)	71
第 50 図	SX138・191・197・198 実測図 (1/30)	72
第 51 図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (3) (1/3)	73
第 52 図	1 号墳実測図 (1/100)・周溝 (SD03) 土層図 (1/60)	74
第 53 図	1 号墳主体部検出状況実測図・土層図 (1/30)	75
第 54 図	1 号墳主体部掘方実測図・土層図 (1/30)、鉄器出土状況実測図 (1/20)	76
第 55 図	1 号墳出土遺物実測図 (1)	
	(128 は 1/3、129～131 は 1/2、132～135 は原寸)	77
第 56 図	1 号墳出土遺物実測図 (2) (142・143 は 2/3、他は 1/3)	78
第 57 図	2 号墳実測図 (1/60)・主体部実測図 (1/30)	79
第 58 図	3 号墳実測図 (1/60)	80
第 59 図	3 号墳出土遺物実測図 (1/3)	81
第 60 図	SX01・04・05・07・10 実測図 (1/30)	83
第 61 図	SX12・80・81・87・88 実測図 (1/30)	84
第 62 図	SX04・05・07・10・12・80 甕棺実測図 (1/10)	85
第 63 図	SX89・92 実測図 (1/30)	86
第 64 図	SX96・97 実測図 (1/30)	87
第 65 図	SX100・107 実測図 (1/30)	88
第 66 図	SX88・92・97・107・158・161 甕棺実測図 (1/10)	89
第 67 図	SX01・04・87～89・97・107 出土遺物実測図 (160 は 1/2、他は原寸)	91
第 68 図	SX158・159・161・166・169 実測図 (1/30)	92

第 69 図	SX170・171・172・174・175・176 実測図 (1/30)	94
第 70 図	SX166・169・171・172・174・175 甕棺実測図 (1/10)	95
第 71 図	SX161・166・169・170 出土遺物実測図 (179・190・199～201 は 1/2、他は原寸)	97
第 72 図	SX178～181・189 実測図 (1/30)	99
第 73 図	SX178～181・189・190 甕棺実測図 (1/10)	101
第 74 図	SX174・176・178～181 出土遺物実測図 (213・214 は 1/3、215・216・221・222 は 1/2、他は原寸)	102
第 75 図	SX190・196・199 実測図 (1/30)	103
第 76 図	SX196・199・帰属不明甕棺実測図 (1/10)	104
第 77 図	帰属不明甕棺実測図 (1/10)	106
第 78 図	SX02・06・09・11・14 実測図 (1/30)	107
第 79 図	SX15～17・27・31 実測図 (1/30)	108
第 80 図	SX38・39・44・49 実測図 (1/30)	110
第 81 図	SX50～54・59 実測図 (1/30)	111
第 82 図	SX78・79・83・84・90 実測図 (1/30)	112
第 83 図	SX02・06・14・39・52・78・84・91 出土遺物実測図 (237～243・253 は 1/2、244 は 2/3、249 は 1/3、他は原寸)	114
第 84 図	SX91・93・94・101・104 実測図 (1/30)	115
第 85 図	SX105・106・108・110・113 実測図 (1/30)	116
第 86 図	SX108・110・122 出土遺物実測図 (260・265 は 1/3、他は原寸)	118
第 87 図	SX122・130・131・150 実測図 (1/30)	119
第 88 図	SX163～165・167 実測図 (1/30)	121
第 89 図	SX130・131・150 出土遺物実測図 (269・270・280 は 1/3、274 は 1/2、他は原寸)	122
第 90 図	SX03・18・19・21・22 実測図 (1/30)	123
第 91 図	SX32～34・37 実測図 (1/30)	124
第 92 図	SX41・45・48・55・57 実測図 (1/30)	126
第 93 図	SX58・60・61・62 実測図 (1/30)	127
第 94 図	SX63・67～70 実測図 (1/30)	128
第 95 図	SX18・21・22・32～34・37・41・45・55・61・63 出土遺物実測図 (282・283・291・297・299～304・308・309 は 1/3、他は原寸)	131
第 96 図	SX73・82・85・95 実測図 (1/30)	132
第 97 図	SX98・102・103・112 実測図 (1/30)	133
第 98 図	SX67・95・102 出土遺物実測図 (317 は 1/3、318 は 1/8、他は原寸)	134
第 99 図	SX114・116～119 実測図 (1/30)	136

第 100 図	SX120・125～129 実測図 (1/30)	137
第 101 図	SX132～135 実測図 (1/30)	138
第 102 図	SX136・137・139・146 実測図 (1/30)	140
第 103 図	SX103・114・118・119・125・129・134・137 出土遺物実測図 (331・337・343～346・353 は 1/3、他は原寸)	141
第 104 図	SX147～149・151・152 実測図 (1/30)	142
第 105 図	SX153・154・168・173・195 実測図 (1/30)	144
第 106 図	SX139・146・149・154 出土遺物実測図 (359～361・368 は 1/3、他は原寸)	145
第 107 図	SX71・99・109 実測図 (1/30)	147
第 108 図	SX111・115・162・177 実測図 (1/30)	148
第 109 図	SX99・109・177・SP02 出土遺物実測図 (382・387 は原寸、他は 1/3)	149
第 110 図	SX28・56・60-69 周辺、その他の出土遺物実測図 (388～390 は 1/3、他は原寸)	150
第 111 図	カクラン・表土・その他の出土遺物実測図 (1/3)	151
第 112 図	遺構配置図 (1/80)	153
第 113 図	SD01 ①・②・SD02 土層実測図 (1/40)	154
第 114 図	SD01 出土遺物実測図 (1) (403 は 1/8、他は 1/3)	155
第 115 図	SD01 出土遺物実測図 (2) (1/3)	156
第 116 図	SD01 出土遺物実測図 (3) (415・416 は 1/3、他は 1/8)	157
第 117 図	SD01 出土遺物実測図 (4) (1/3)	158
第 118 図	SD01 出土遺物実測図 (5) (1/3)	159
第 119 図	ST01・SX03 実測図 (1/30)	161
第 120 図	ST01 出土遺物実測図 (1/3)	161
第 121 図	SX02・04・05 実測図 (1/30)	162
第 122 図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	163
第 123 図	波状文を施す壺と石勺遺跡の凹線文土器	221
第 124 図	墓地変遷図 1・2 段階 (1/300)	223
第 125 図	墓地変遷図 3・4 段階 (1/300)	224
第 126 図	墓地変遷図 5・6 段階 (1/300)	225
第 127 図	大野城市における弥生時代の主要遺跡分布図 (1/50000)	226
第 128 図	森園遺跡の墓地と周辺の集落と墳墓	227
第 129 図	原門遺跡遺構配置図と 8 号墓出土内行花文鏡	228
第 130 図	瑞穂墓地と対応する集落の想定	228
第 131 図	瑞穂遺跡 7・8 次調査近世墓 (1/300)	230

図 版 目 次

図版 1

- (1) 3次東半部全景（南から）
- (2) 3次東半部全景（西から）
- (3) 3次西半部全景（東から）

図版 2

- (1) 4次全景（北から）
- (2) 4次溝全景（北から）
- (3) 4次土坑全景（南から）

図版 3

- (1) 7・8次調査区南東側全景（北から）
- (2) 7・8次調査区東側全景（南から）

図版 4

- (1) 7・8次調査区東側全景（北から）
- (2) 7・8次調査区中央部全景（北から）

図版 5

- (1) 7・8次調査区全景（上空から）
- (2) 7・8次調査区南西部全景（上空から）

図版 6

- (1) 7・8次1号・3号甕棺墓全景（北西から）
- (2) 7・8次1号甕棺墓全景（北西から）
- (3) 7・8次3号甕棺墓全景（北西から）

図版 7

- (1) 7・8次2号甕棺墓全景（北から）
- (2) 7・8次2号甕棺墓完掘状況（北から）
- (3) 7・8次3号甕棺墓人骨出土状況（西から）

図版 8

- (1) 7・8次4号甕棺墓人骨出土状況（北から）
- (2) 7・8次4号甕棺墓全景（北から）

図版 9

- (1) 7・8次5号甕棺墓全景（西から）
- (2) 7・8次6号甕棺墓全景（西から）
- (3) 7・8次7号甕棺墓完掘状況（北西から）

図版 10

- (1) 7・8次7号甕棺墓全景（北から）
- (2) 7・8次8号甕棺墓全景（西から）
- (3) 7・8次8号甕棺挿入状況（南から）

図版 11

- (1) 7・8次8号甕棺墓全景（西から）
- (2) 7・8次8号甕棺墓人骨出土状況（西から）

図版 12

- (1) 7・8次8号・9号甕棺墓検出状況（西から）
- (2) 7・8次9号甕棺墓完掘状況（北西から）
- (3) 7・8次10号甕棺挿入状況（南から）

図版 13

- (1) 7・8次10号甕棺墓全景（東から）
- (2) 7・8次10号甕棺墓人骨出土状況（南西から）

図版 14

- (1) 7・8次 11号甕棺墓全景(南から) (2) 7・8次 12号甕棺墓全景(北東から)
(3) 7・8次 15号・17号・19号甕棺墓全景(西から)

図版 15

- (1) 7・8次 15号甕棺墓全景(北西から) (2) 7・8次 15号甕棺挿入状況(北西から)
(3) 7・8次 15号甕棺墓完掘状況(西から)

図版 16

- (1) 7・8次 16号甕棺墓全景(西から) (2) 7・8次 16号甕棺墓人骨出土状況(西から)

図版 17

- (1) 7・8次 16号甕棺挿入状況(北西から) (2) 7・8次 16号甕棺墓全景(西から)
(3) 7・8次 16号甕棺墓掘方全景(西から)

図版 18

- (1) 7・8次 17号甕棺墓全景(北東から) (2) 7・8次 17号甕棺墓人骨出土状況(北東から)
(3) 7・8次 17号甕棺挿入状況(北東から)

図版 19

- (1) 7・8次 19号甕棺墓全景(東から) (2) 7・8次 21号甕棺墓半裁状況(西から)

図版 20

- (1) 7・8次 21号甕棺墓全景(西から) (2) 7・8次 21号甕棺墓人骨出土状況(西から)
(3) 7・8次 21号甕棺墓検出状況(西から)

図版 21

- (1) 7・8次 22号甕棺墓全景(西から) (2) 7・8次 22号甕棺墓完掘状況(東から)
(3) 7・8次 22号甕棺挿入状況(北から)

図版 22

- (1) 7・8次 26号・27号甕棺墓検出状況(東から) (2) 7・8次 26号甕棺墓全景(東から)

図版 23

- (1) 7・8次 26号甕棺挿入状況(北から) (2) 7・8次 27号甕棺墓人骨出土状況(北から)
(3) 7・8次 27号甕棺挿入状況(北から)

図版 24

- (1) 7・8次 28号甕棺墓全景(北から) (2) 7・8次 28号甕棺墓検出状況(北から)

図版 25

- (1) 7・8次 28号甕棺墓半裁状況(北東から) (2) 7・8次 29号甕棺墓全景(東から)
(3) 7・8次 29号甕棺墓検出状況(南東から)

図版 26

- (1) 7・8次 33号甕棺墓人骨出土状況(東から) (2) 7・8次 33号甕棺墓検出状況(南東から)

図版 27

- (1) 7・8次 34号甕棺墓全景(東から) (2) 7・8次 35号甕棺墓全景(北東から)

図版 28

- (1) 7・8次 35号甕棺墓人骨出土状況（北から） (2) 7・8次 36号甕棺墓全景（東から）

図版 29

- (1) 7・8次 36号甕棺挿入状況（東から） (2) 7・8次 36号甕棺墓全景（北から）
(3) 7・8次 37号甕棺墓全景（南から）

図版 30

- (1) 7・8次 38号甕棺墓全景（北東から） (2) 7・8次 38号甕棺墓人骨出土状況（北東から）
(3) 7・8次 38号甕棺墓調査状況（北から）

図版 31

- (1) 7・8次 39号甕棺墓検出状況（北から） (2) 7・8次 39号甕棺墓全景（南から）
(3) 7・8次 41号甕棺墓全景（東から）

図版 32

- (1) 7・8次 43号甕棺墓全景（南から） (2) 7・8次 44号甕棺墓検出状況（北から）
(3) 7・8次 44号甕棺墓全景（北西から）

図版 33

- (1) 7・8次 35号・45号甕棺墓全景（東から） (2) 7・8次 45号甕棺墓全景（東から）
(3) 7・8次 45号甕棺挿入状況（北から）

図版 34

- (1) 7・8次 46号甕棺墓全景（北西から） (2) 7・8次 46号甕棺墓検出状況（西から）
(3) 7・8次 47号甕棺墓全景（北東から）

図版 35

- (1) 7・8次 49号甕棺墓全景（南から） (2) 7・8次 49号甕棺墓検出状況（南西から）
(3) 7・8次 49号甕棺墓半裁状況（西から）

図版 36

- (1) 7・8次 50号甕棺墓全景（北東から） (2) 7・8次 50号甕棺墓全景（西から）

図版 37

- (1) 7・8次 SX20 全景（北から） (2) 7・8次 SX23 土層（南から）
(3) 7・8次 SX23 周辺全景（西から）

図版 38

- (1) 7・8次 SX64 周辺全景（東から） (2) 7・8次 SX64 全景（東から）
(3) 7・8次 SX155・156 全景（北から）

図版 39

- (1) 7・8次 SX183 全景（北から） (2) 7・8次 SX185 全景（北東から）

図版 40

- (1) 7・8次 SX188 全景（北から） (2) 7・8次 SX194 土層（北から）

図版 41

- (1) 7・8次1～3号石蓋土坑墓周辺全景（北から） (2) 7・8次1・2号石蓋土坑墓全景（東から）

図版 42

- (1) 7・8次3号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次3号石蓋土坑墓完掘状況（北西から）
(3) 7・8次3号石蓋土坑墓顔料検出状況（西から）

図版 43

- (1) 7・8次4号石蓋土坑墓全景（北東から） (2) 7・8次5号石蓋土坑墓全景（西から）

図版 44

- (1) 7・8次5号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次5号石蓋土坑墓遺物出土状況（西から）
(3) 7・8次5号石蓋土坑墓遺物出土状況（西から）

図版 45

- (1) 7・8次6号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次7号石蓋土坑墓全景（東から）

図版 46

- (1) 7・8次7号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次7号石蓋土坑墓人骨出土状況（南東から）
(3) 7・8次7号石蓋土坑墓人骨出土状況（南から）

図版 47

- (1) 7・8次1号石棺墓周辺全景（北東から） (2) 7・8次1号石棺墓全景（北東から）

図版 48

- (1) 7・8次1号石棺墓小口（西から） (2) 7・8次1号石棺墓南側壁（北から）
(3) 7・8次1号石棺墓北側壁（南から）

図版 49

- (1) 7・8次1号石棺墓遺物出土状況（東から） (2) 7・8次1号石棺墓遺物出土状況（北東から）
(3) 7・8次1号石棺墓土層（北から）

図版 50

- (1) 7・8次1号墳全景（西から） (2) 7・8次1号墳主体部全景（北から）

図版 51

- (1) 7・8次1号墳南側小口部（北から） (2) 7・8次1号墳北側小口部（南から）
(3) 7・8次1号墳主体部完掘状況（南から）

図版 52

- (1) 7・8次1号墳主体部検出状況（南から） (2) 7・8次1号墳主体部半裁状況（西から）
(3) 7・8次1号墳主体部土層（西から）

図版 53

- (1) 7・8次1号墳主体部土層（北から） (2) 7・8次1号墳主体部土層（北から）
(3) 7・8次1号墳周溝（SD03）土層（南から）

図版 54

- (1) 7・8次2号墳主体部全景（西から） (2) 7・8次3号墳（SD01・02）全景（西から）

(3) 7・8次3号墳周溝 (SD01・02) 土層 (東から)

図版 55

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX01 全景 (東から) | (2) 7・8次 SX04 全景 (西から) |
| (3) 7・8次 SX04 人骨出土状況 (西から) | (4) 7・8次 SX05 全景 (北から) |
| (5) 7・8次 SX07 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX07 人骨出土状況 (北から) |
| (7) 7・8次 SX10 検出状況 (北から) | (8) 7・8次 SX10 遺物出土状況 (北から) |

図版 56

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX10 全景 (北から) | (2) 7・8次 SX80 全景 (北から) |
| (3) 7・8次 SX87 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX87 人骨出土状況 (南から) |
| (5) 7・8次 SX88 全景 (西から) | (6) 7・8次 SX88 人骨出土状況 (西から) |
| (7) 7・8次 SX92 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX97 検出状況 (北から) |

図版 57

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| (1) 7・8次 SX97 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX97 人骨出土状況 (西から) |
| (3) 7・8次 SX100 全景 (東から) | (4) 7・8次 SX158・159 全景 (南東から) |
| (5) 7・8次 SX161～163 全景 (南東から) | (6) 7・8次 SX161 全景 (南西から) |
| (7) 7・8次 SX166 全景 (北西から) | (8) 7・8次 SX169 検出状況 (北から) |

図版 58

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| (1) 7・8次 SX169 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX169 人骨出土状況 (南から) |
| (3) 7・8次 SX170 全景 (北から) | (4) 7・8次 SX170 人骨出土状況 (北から) |
| (5) 7・8次 SX172 全景 (北西から) | (6) 7・8次 SX174 全景 (東から) |
| (7) 7・8次 SX176 全景 (北西から) | (8) 7・8次 SX176 人骨出土状況 (北西から) |

図版 59

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX178 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX178 人骨出土状況 (西から) |
| (3) 7・8次 SX179 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX179 人骨出土状況 (南から) |
| (5) 7・8次 SX180 全景 (北から) | (6) 7・8次 SX181 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX189 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX190 全景 (東から) |

図版 60

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX196 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX199 全景 (北西から) |
| (3) 7・8次 SX02 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX06 全景 (南東から) |
| (5) 7・8次 SX09 全景 (南東から) | (6) 7・8次 SX09 人骨出土状況 (北から) |
| (7) 7・8次 SX14 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX15 全景 (東から) |

図版 61

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX17 全景 (北から) | (2) 7・8次 SX50 全景 (東から) |
| (3) 7・8次 SX51 人骨出土状況 (東から) | (4) 7・8次 SX78 全景 (北から) |
| (5) 7・8次 SX79 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX83 人骨出土状況 (西から) |
| (7) 7・8次 SX83 全景 (西から) | (8) 7・8次 SX84 全景 (南から) |

図版 62

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| (1) 7・8次 SX91 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX94 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX104 全景 (西から) | (4) 7・8次 SX122 全景 (東から) |
| (5) 7・8次 SX130 全景 (北西から) | (6) 7・8次 SX131 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX164 全景 (南東から) | (8) 7・8次 SX18 全景 (南から) |

図版 63

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX19 全景 (東から) | (2) 7・8次 SX21 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX21 人骨出土状況 (南から) | (4) 7・8次 SX22 全景 (南東から) |
| (5) 7・8次 SX32 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX33 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX34 全景 (南東から) | (8) 7・8次 SX34 漆器検出状況 (南西から) |

図版 64

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| (1) 7・8次 SX37 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX41 全景 (北西から) |
| (3) 7・8次 SX45 全景 (南西から) | (4) 7・8次 SX58 全景 (東から) |
| (5) 7・8次 SX61 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX62 全景 (西から) |
| (7) 7・8次 SX63 全景 (南西から) | |

図版 65

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX67 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX68 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX69 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX70 全景 (南から) |
| (5) 7・8次 SX82 全景 (西から) | (6) 7・8次 SX85 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX95 全景 (南西から) | (8) 7・8次 SX95 人骨出土状況 (南西から) |

図版 66

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX98 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX102 遺物出土状況 (北から) |
| (3) 7・8次 SX102 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX103 全景 (南から) |
| (5) 7・8次 SX116 全景 (北東から) | (6) 7・8次 SX117 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX118 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX125 全景 (南から) |

図版 67

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| (1) 7・8次 SX126 全景 (南東から) | (2) 7・8次 SX127 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX128 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX128 漆器出土状況 (北西から) |
| (5) 7・8次 SX128 漆器出土状況 (北西から) | (6) 7・8次 SX129 全景 (東から) |
| (7) 7・8次 SX129 玉類出土状況 (南から) | (8) 7・8次 SX132 全景 (北から) |

図版 68

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| (1) 7・8次 SX133 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX134 全景 (西から) |
| (3) 7・8次 SX134 人骨出土状況 (南から) | (4) 7・8次 SX135 全景 (南西から) |
| (5) 7・8次 SX136 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX137 全景 (南東から) |
| (7) 7・8次 SX137 人骨出土状況 (南東から) | (8) 7・8次 SX139 全景 (南東から) |

図版 69

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| (1) 7・8次 SX146 全景 (北から) | (2) 7・8次 SX147 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX148 全景 (北西から) | (4) 7・8次 SX149 全景 (南から) |
| (5) 7・8次 SX150 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX151 全景 (南東から) |
| (7) 7・8次 SX153 全景 (北から) | (8) 7・8次 SX173 全景 (南から) |

図版 70

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 7・8次人骨調査状況 | (2) 7・8次人骨調査状況 |
| (3) 7・8次人骨調査状況 | (4) 7・8次調査風景 |
| (5) 7・8次調査風景 | (6) 7・8次調査風景 |
| (7) 7・8次調査風景 | (8) 7・8次調査前風景 |

図版 71

- | | |
|------------------|--------------------|
| (1) 10次全景 (北西から) | (2) 10次 SD01 (西から) |
|------------------|--------------------|

図版 72

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| (1) 10次 SD01 (東から) | (2) 10次 SD01 東壁土層 (西から) |
| (3) 10次 SD01 土層 (西から) | |

図版 73

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| (1) 10次 ST01 遺物出土状況 (北から) | (2) 10次 ST01 完掘状況 (北から) |
| (3) 10次 ST01 遺物出土状況 (南から) | |

図版 74

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| (1) 10次 ST01 土層 (北から) | (2) 10次 SX03 全景 (東から) |
| (3) 10次 SX03 下部全景 (西から) | |

図版 75 出土遺物 1

図版 76 出土遺物 2

図版 77 出土遺物 3

図版 78 出土遺物 4

図版 79 出土遺物 5

図版 80 出土遺物 6

図版 81 出土遺物 7

図版 82 出土遺物 8

図版 83 出土遺物 9

図版 84 出土遺物 10

図版 85 出土遺物 11

図版 86 出土遺物 12

図版 87 出土遺物 13

図版 88 出土遺物 14

図版 89 出土遺物 15

图版 90 出土遺物 16
图版 91 出土遺物 17
图版 92 出土遺物 18
图版 93 出土遺物 19
图版 94 出土遺物 20
图版 95 出土遺物 21
图版 96 出土遺物 22
图版 97 出土遺物 23
图版 98 出土遺物 24
图版 99 出土遺物 25
图版 100 出土遺物 26
图版 101 出土遺物 27
图版 102 出土遺物 28

I. はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

瑞穂遺跡は市域中央部、御笠川西岸の沖積微高地上に位置する。戦後までは農村地帯として田園風景が広がる景観であったが、JR鹿児島本線や西鉄天神大牟田線の沿線沿いであったこともあり、昭和40年代から都市化が進み、現在では低層・高層の住宅が建ち並ぶ住宅地となっている。本書で報告する瑞穂遺跡第3・4・7・8・10次調査も様々な開発が要因となり調査を実施した。各調査地における経緯・経過は以下のとおりである。なお、瑞穂遺跡におけるこれまでの発掘調査履歴および調査地点の位置を、表1・第1図に示す。

【瑞穂遺跡第3次調査（平成20年度調査）】

幼稚園の増築に伴い、事業者より平成20年6月9日付で文化財保護法93条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（20大教文第280号）、同6月16日付（20教文第1号-136）で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成20年7月18日より発掘調査を開始した（担当：徳本）。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。同8月28日に全ての作業を終了し、調査を完了した。

【瑞穂遺跡第4次調査（平成21年度調査）】

個人住宅建設に伴い、事業者より平成21年6月15日付で文化財保護法93条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（21大教文第323号）、同6月22日付（21教文第1号-162）で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成21年6月25日より発掘調査を開始した（担当：徳本）。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。同7月14日に全ての作業を終了し、調査を完了した。

【瑞穂遺跡第7・8次調査（平成23・24年度調査）】

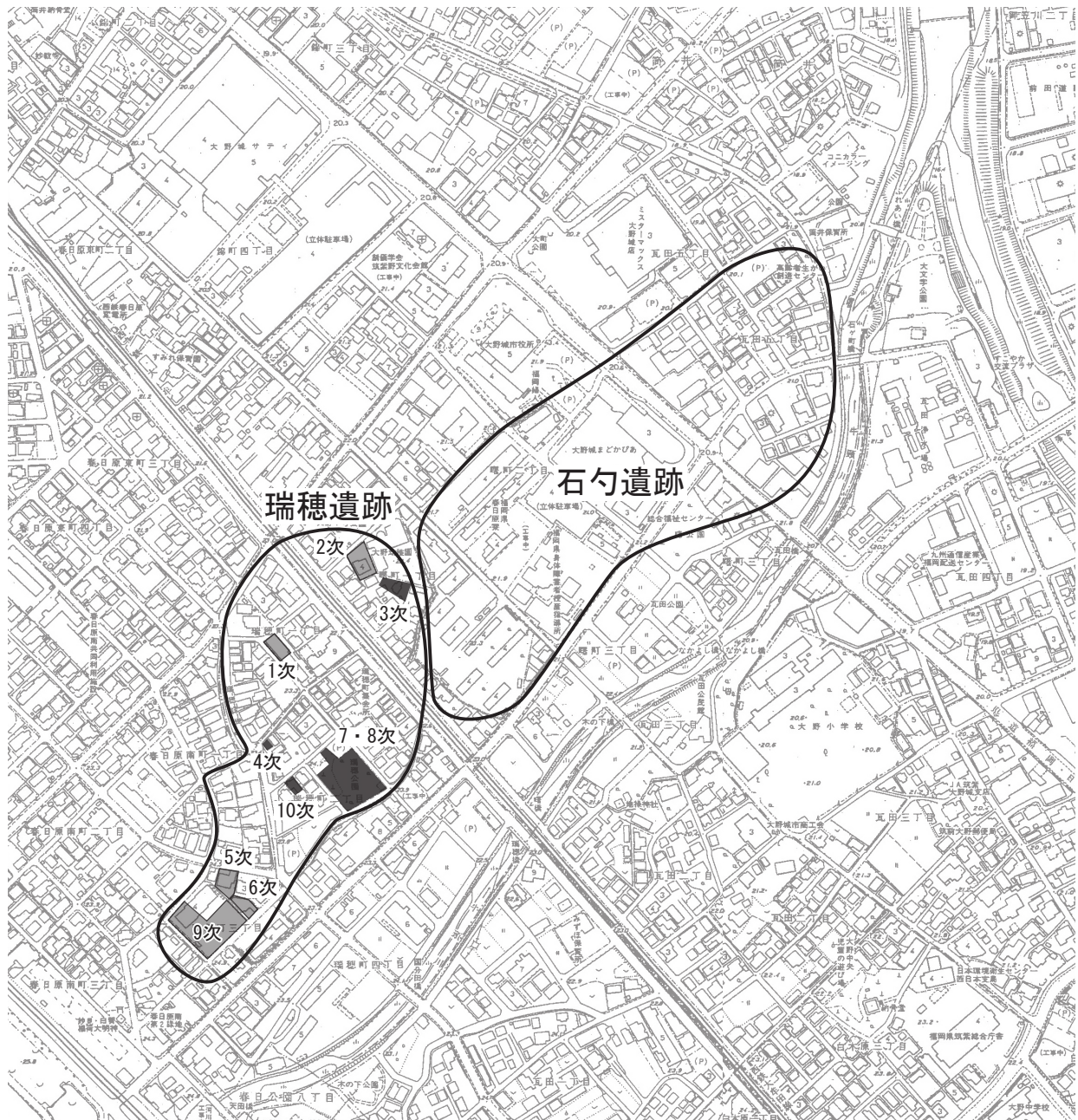
公園整備に伴う調査である。平成23年度調査は、平成23年10月5日付で文化財保護法94条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（23大教文第813号）、同10月14日付（23教文第1号549）で発掘調査を実施する旨の通知があった。平成24年度調査は、平成24年4月17日付で文化財保護法94条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（24大教文第93号）、同5月7日付（24教文第1号63）で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成23年10月30日より発掘調査を開始した。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。また、弥生時代の墳墓および近世・近現代の墳墓から多数の人骨が出土したことを受けて、委託事業として九州大学基層構造講座に人骨出土状況の記録・取り上げおよび分析を依頼した。平成24年8月23日に全ての作業を終了し、調査を完了した。なお、平成23年度を7次調査、平成24年度8次調査として実施したが、同一の調査のことである。

表 1 発掘調査履歴

調査回数	調査年月	調査面積 (㎡)	調査概要	報告書
1	1991年9月～10月	200	溝・ピット	2001『瑞穂・原ノ畑遺跡』 (市第57集)
2	1998年4月～5月	200	古墳時代集落(井戸1基：5世紀前半頃)	
3	2008年7月～8月	100	竪穴状遺構・溝・ピット(古墳時代～平安時代)	本書
4	2009年6月～7月	30	土坑・溝(時期不明)	本書
5	2010年4月～5月	175	溝4条(近世?)、ピット	2011『瑞穂遺跡Ⅱ』 (市第95集)
6	2011年6月～7月	150	古墳時代集落 (住居4基：5世紀前半頃、土坑墓：7世紀か)	2012『瑞穂遺跡3 横峰遺跡Ⅰハザコ遺跡』 (市第105集)
7・8	2011年10月～ 2012年8月	1400	弥生時代墓地(甕棺墓・土坑墓・木棺墓) 古墳時代墓地(古墳3基：古墳時代初頭) 近世～近現代墓地(甕棺墓・桶棺墓・土坑墓・木棺墓)	本書
9	2012年12月～ 2013年4月	1800	古墳時代集落(住居1基：5世紀前半頃) 奈良時代墓地?(土坑墓?1基) 近世大溝	2014『瑞穂遺跡4』 (市第116集)
10	2013年2月～3月	100	弥生時代墓域?(溝1基：弥生時代中期後半) 奈良～平安時代初頭墓地(土坑墓1基) その他時期不明遺構	本書

【瑞穂遺跡第10次調査(平成24年度調査)】

住宅建設に伴い、事業者より平成25年1月31日付で文化財保護法93条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ(24大教文第1440・1441号)、同2月15日付(24教文第1号1116)で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成25年2月19日より発掘調査を開始した(担当：山崎)。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。同3月11日に全ての作業を終了し、調査を完了した。



第1図 調査地点位置図 (1/3000)

2. 整理作業の経過

瑞穂遺跡第7・8次調査の弥生時代甕棺墓に関する遺物の洗浄・展開・接合・実測・製図・写真撮影、遺構図の整理・製図・レイアウト等については、平成25年度に(株)アーキジオ九州に委託し、事業を進めた。3・4・10次調査の遺物洗浄については、市単費事業として随時実施した。これ以外の整理作業については、令和3年度に(株)タクトに委託し、遺物の展開・接合・実測・製図・写真撮影、遺構図の整理・製図・レイアウトおよび執筆作業・編集作業を進め、報告書の印刷製本を行った。

3. 調査・整理の体制

【平成 20 年度（瑞穂遺跡第 3 次調査）】

大野城市教育委員会	教育長	古賀宮太
	教育部長	森岡勉
	ふるさと文化財課長	舟山良一
	文化財担当係長	中山宏
主 査		徳本洋一、石木秀啓、丸尾博恵
主任技師		林潤也、早瀬賢
技 師		上田龍児
嘱 託		石川健、遠藤茜、大里弥生、甲斐康大、 玉ノ井博紀、中島圭、能塚由紀

発掘調査作業員

岡本妙子、大海雅子、高木幸子、藤田和子、前田チエ子、田中照子、中垣親、岩切ふえ、日野律子

【平成 21 年度（瑞穂遺跡第 4 次調査）】

大野城市教育委員会	教育長	古賀宮太
	教育部長	森岡勉
	ふるさと文化財課長	舟山良一
	文化財担当係長	中山宏
主 査		徳本洋一、石木秀啓、丸尾博恵
主任技師		林潤也、早瀬賢
技 師		上田龍児
嘱 託		石川健、遠藤茜、大里弥生、甲斐康大、 玉ノ井博紀、中島圭、能塚由紀

発掘調査作業員

岡本妙子、大海雅子、高木幸子、藤田和子、前田チエ子、田中照子、中垣親、岩切ふえ、日野律子

【平成 23・24 年度（瑞穂遺跡第 7・8・10 次調査）】

大野城市教育委員会	教育長	吉富修
	教育部長	藤島正明
	(平成 23 年 10 月～24 年 3 月ふるさと文化財課長兼務)	
	ふるさと文化財課長	浦山敏弘 (平成 23 年 4 月～9 月)
		藤島正明 (平成 23 年 10 月～24 年 3 月)
		鐘ヶ江義則 (平成 24 年 4 月～)

文化財担当係長	中山宏（～平成 24 年 3 月） 徳本洋一（平成 23 年 10 月～） 平田哲也（平成 24 年 4 月～）
主 査	徳本洋一（～平成 23 年 9 月）、石木秀啓
主任技師	林潤也、早瀬賢、上田龍児
技 師	齋藤友紀（平成 24 年 4 月～）
主任主事	岡本晃一（平成 24 年 4 月～）
文化財専門員（再任用）	舟山良一
嘱託（調査関係）	梶原詩織、山崎悠郁子、渡邊和子、國分ゆみ（～平成 24 年 5 月）、白石溪牙（平成 24 年 4 月～）、茂友美、無津呂健太郎（平成 24 年 5 月～）、主税英徳（平成 24 年 4 月～6 月）、天野正太郎（平成 24 年 8 月～）
嘱託（歴史資料展示室）	境聡子、馬場麗菜、柳屋あづさ（～平成 24 年 4 月）
嘱託（庶務）	井上絵美子

発掘調査作業員

岡本妙子 大海雅子 高木幸子 藤田和子 織田徹 坂本泰子 小林敏子 広渡隆子 田中照子
 岩切ふえ 大藺英美 深野一美 舩越桃子 穴井和子 仲前富美子 井口るみ子 日野律子 川岸
 晶子 溝口忍 山下隆子 団野ハマ子 篠崎繁美 東島真弓 安里由利子 中山文子 槇坂陽子
 大島五津子 大浦旗江 松尾純子 田中悦子 田野和代 宮原ゆかり 戸渡京子 野崎美智子 倉
 住孝枝 杉森宏治 有水友晴 井口薫 岩石いづみ 大津幸男 梶原久美子 西浦喜久子 花田博
 雄 林祥夫 平江信子 酒井笑子 手嶋敏則 平江武士 香野博通 西依榮 川崎敏次郎 佐藤寛
 行 吉田秀俊 田中良一 諏訪博恭 松尾茂彦 塚副義一郎 諸岡俊弘 前原幸男 前原光恵 片
 田清子 加藤美智子 松尾千代子 高月敬信 橋口真敏 佐々田薫 平田敏雄 瀧口松夫 森山武
 雄 藤木亮介 福永将大（当時九州大学学生）

【令和 3 年度（整理作業）】

大野城市教育委員会	教育長	吉富修（～令和 3 年 6 月） 伊藤啓二（令和 3 年 7 月～）
	教育部長	日野和弘
	ふるさと文化財課長	石木秀啓
	係長	林潤也、上田龍児
	主査	徳本洋一
	主任主事	秋穂敏明
	主任技師	山元瞭平

技師 齋藤明日香

主事 鮫島由佳

会計年度任用職員（調査・啓発）

澤田康夫

石川健（12月～）

山村智子

深町美佳

会計年度任用職員（庶務）

荒牧美佐子（10月）

光原 乃里子（～9月）

三好りさ

野上知則（11月～）

山上敬子

井之口彩子

整理作業員

小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江

Ⅱ．位置と環境

1．地理的環境

大野城市が位置する福岡平野は、南を背振山地、東を三郡山地に挟まれ、北は博多湾に面している。平野中央部に那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。大野城市は福岡平野東南の最奥部に位置し、最も平野が狭くなる地峡部にあたる。古代以来この地峡部は交通の要衝で、現在でも九州縦貫自動車道・ＪＲ鹿児島本線・西鉄天神大牟田線・国道３号線など九州の南北を結ぶ幹線道が走っている。市域は東側を月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側を牛頸山に挟まれ、中央に御笠川が貫流する。山地は早良花崗岩からなり、風化が著しく真砂土となっており、山麓部から平地丘陵部にかけて段丘が発達する。高位段丘は開析がすすみ、中位段丘は平坦部も多く、平野部では沖積地が広がる。

2．歴史的環境

旧石器時代 市域北東部の松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など、丘陵上の遺跡でナイフ形石器・細石刃が確認されている。周辺地域では南八幡遺跡、諸岡遺跡、諸岡城館遺跡、井尻Ｂ遺跡、門田遺跡などで後期旧石器時代に属する遺物が分布する。

縄文時代 市域で草創期の遺構・遺物は確認されていないが、周辺では門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期になると遺跡の数が増加し、市域北東部の善一田遺跡、古野遺跡、薬師の森遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の本堂遺跡といった丘陵地で押型文土器や石器が出土している。このほか、石勺遺跡などの平野微高地上にも遺跡が展開する。前期～中期の遺跡は市域では確認されておらず、周辺地域でも遺跡の数が増加する。後・晩期の遺跡として牛頸塚原遺跡、牛頸日ノ浦遺跡で後期後半～晩期にかけての竪穴住居・土坑が確認されているほか、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡、薬師の森遺跡で、後・晩期の遺物が分布する。なお、薬師の森遺跡や石勺遺跡では落とし穴状遺構を確認しており、これらは縄文時代の所産である可能性が高い。

弥生時代 弥生時代には福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が展開する。市域では北部～中央部の丘陵・平野部に遺跡が多い。

【前期】 板付Ⅰ式期にさかのぼる集落として仲島本間尺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などがある。前期の墳墓は、御陵前ノ椽遺跡（前期中頃）、中・寺尾遺跡（前期中頃～中期）、塚口遺跡（前期後半～末）で甕棺墓・土坑墓・木棺墓などが展開する。南部では牛頸日ノ浦遺跡で前期後半の甕棺墓・土坑墓がある。また御陵遺跡では前期中頃～末の集落が確認されている。前期末頃には仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など平野部で集落の数が増加し、これら集落の多くは中期に継続する。周辺地域では板付遺跡や那珂遺跡で早・前期の環濠集落が成立し拠点集落となる。

【中期】 市域では平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期末から中期に継続する集落である。丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で中期前半～後半に集落が展開し、南部でも本堂

遺跡で小規模な集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や、森園遺跡で中期後半を中心にした甕棺墓群があるほか、平野部の石勺遺跡や瑞穂遺跡で甕棺墓を主体とする墳墓が展開する。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、青銅器生産も開始される。特に須玖岡本遺跡D地点甕棺は約30面の前漢鏡・ガラス璧・多数の青銅器を副葬し「王墓」と称されている。

【後期】 中期以来の集落である仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などが継続するほか、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡片や青銅器鋳型などが出土しており拠点的な集落となる。周辺地域では中期以降春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、特に春日丘陵一帯は『三国志』『魏書』東夷伝倭人条に記された「奴国」の中心的な地域と位置づけられる。

古墳時代

【前期】

〈墳墓〉 古墳時代になると福岡平野でも前方後円墳が出現し、那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。福岡平野最古式の前方後円墳として、三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳（全長75m）がある。これに後続する盟主墳として安徳大塚古墳（全長62m）や三角縁神獣鏡が出土したとされる卯内尺古墳がある。市域において明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群周辺にはかつて前方後円墳があったという指摘があるほか、江戸時代には三角縁神獣鏡が出土しており、有力な在地勢力が存在したと考える。

〈集落〉 福岡平野の拠点集落としては、博多湾沿岸の西新町遺跡、博多遺跡群や那珂・比恵遺跡群がある。市域では仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡などでも集落が出現する。この他、森園遺跡や本堂遺跡でも再び集落の形成が認められる。

【中期】

〈墳墓〉 福岡平野の盟主墳として初期横穴式石室を導入した老司古墳（全長76m）があり、博多遺跡群でも博多1号墳（全長56m）が築造される。また剣塚北古墳、井尻B1号墳、野藤1号墳、貝徳寺古墳など中規模の前方後円墳・円墳がある。市域では5世紀前半の笹原古墳（円墳：30m）があり、隣接して5世紀後半の成屋形古墳（帆立貝式前方後円墳：32m、太宰府市）が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられている。5世紀後半には牛頸塚原古墳群や古野古墳群で群集墳の形成が始まり、このうち古野古墳群では、鏡・鈴・鉄剣・農工具類といった豊富な副葬品を有する古墳もあり、成屋形古墳につぐような有力な人物がいたことを示す。

〈集落〉 集落遺跡は福岡平野全域で非常に希薄で、前代までの拠点集落である那珂・比恵遺跡群や西新町遺跡は消滅する。周辺では高畑遺跡、立花寺B遺跡などで滑石製品の生産を伴う集落が展開する。市域では石勺遺跡が弥生終末から継続する大規模な集落で、初期のカマドや朝鮮半島系の軟質系土器が出土し、滑石製品の生産も伴うことから拠点集落と位置づけられよう。このほか仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、金山遺跡、原田遺跡、上園遺跡などで集落が展開する。

【後期】

〈墳墓〉 福岡平野の盟主墳として6世紀中頃築造の東光寺剣塚古墳（75m）や日拝塚古墳（46m）といった前方後円墳がある。6世紀後半には大型前方後円墳は姿を消し、これに代わり6世紀後半

第 2 図 遺跡分布図（A3 折込）

第 2 図 遺跡分布図 (A3 折込)

以降、福岡平野一帯の丘陵上には直径 10 m ほどの小円墳を主体とした群集墳が爆発的に増加する。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が展開し、善一田古墳群・王城山古墳群をはじめとする乙金古墳群がこれに該当する。善一田古墳群は朝鮮半島系資料や鉄器生産に関わる資料が豊富であり、王城山古墳群では 7 世紀を中心とした新羅土器が集中することが特徴である。このうち、善一田 18 号墳が最古・最大（6 世紀後半築造・直径約 25 m の円墳）で、豊富な副葬品を有することから当地域の盟主的な墳墓に位置づけられる。また市域南部では須恵器工人の墓と考えられる牛頸中通・後田・小田浦古墳群や、6 世紀後半の大型円墳である日ノ浦 1 号墳がある。また、特殊な墳墓として梅頭窯跡では窯跡を転用した墳墓があり象嵌大刀を副葬する。これらの横穴式石室を主体部とする古墳や群集墳は 6 世紀後半～7 世紀にかけて築造し、8 世紀代まで追葬を行うものもある。

〈集落〉 6 世紀中頃以降、福岡平野の各地で集落が再び増加する。比恵遺跡群では 6 世紀後半に大型建物群が出現し、「那津官家」の可能性が指摘される。市域では仲島遺跡、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開し、7 世紀代まで継続するものが多い。仲島遺跡は集落規模が大きく、多数の掘立柱建物の存在や多量の馬骨・子持ち勾玉などの存在から、拠点的な集落と考えられる。牛頸窯跡群周辺の塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡などは須恵器工人集落と位置づけられる。薬師の森遺跡は、一部に渡来人が居住し鉄器生産・須恵器生産に関わる集落であることが明らかになっており、先述の乙金古墳群との対応関係が確認できる。なお、牛頸窯跡群の開始は 6 世紀中頃に求められ、乙金・四王寺山麓の乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡もこれに近接した時期に須恵器生産を開始する。

飛鳥時代 7 世紀前半代は集落・墳墓ともに古墳時代後期の様相を踏襲する。墳墓で注目すべきは大野城市と福岡市博多区の境界に位置する今里不動古墳で、7 世紀前半前後の大型円墳（直径約 30 m）とされ、御笠川右岸地域の盟主墳である。また 6 世紀後半の比恵遺跡群に展開した大型建物群は那珂遺跡群に移動する。この時期牛頸窯跡群の須恵器生産はひとつのピークを迎える。また野添窯や月ノ浦窯などでは初期瓦を生産しており、那津官家比定地の那珂遺跡に供給されたことが知られる。牛頸窯跡群周辺では集落の数や住居の数が飛躍的に増加し、牛頸塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡などは前代から継続する須恵器工人集落と考えられている。7 世紀中頃～後半には、中国・朝鮮半島を含む東アジア世界が激動の時代をむかえる。日本も白村江の戦（663 年）で敗戦を経験し、日本史上初の国際的な危機に直面する。これに伴い 664～665 年にかけて水城・大野城が相次いで築造される。国内情勢でも壬申の乱（672 年）が起これ、これを機に律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していくことになる。また大宰府では第 I 期政庁が成立する。このような背景の中、市域全体で遺構・遺物の減少が認められる。例えば、薬師の森遺跡で 7 世紀中頃～後半段階に一時的に遺構・遺物が希薄となる。乙金古墳群では 6 世紀末～7 世紀初頭前後に古墳築造のピークを迎え、7 世紀後半にかけて順次築造数が減少していく。また、牛頸窯跡群における窯の数も減少し、一時的に須恵器生産も停滞期を迎える。

奈良時代 奈良時代には律令国家が成立し、九州も大宰府を中心とした支配体制が整い、各地に官衙が設置される。この時期には官道も整備され、井相田 C 遺跡、板付遺跡、那珂久平遺跡や谷川

遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡などで道路状遺構が確認されている。集落遺跡として市域では仲島遺跡や隣接する井相田C遺跡で掘立柱建物を中心とした集落が展開する。周辺の高畑遺跡は「高畑廃寺」あるいは那珂郡衙の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡で大規模な村落が成立し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や村落が展開している景観が復元できる。牛頸窯跡群では8世紀前半に窯の数が増加し、供膳具を中心に大量生産がおこなわれる。この他、本堂遺跡群では村落内寺院と考えられる遺構が確認されている。また、薬師の森遺跡では集落の経営を再開し、鍔帯金具・ヘラ書き須恵器・越州窯系青磁・製塩土器などの特殊遺物が分布する。鍛冶炉に加え、須恵器窯に関連する遺構もあり、古墳時代に引き続き手工業生産に関わる集落と考えられる。なお、水城では8世紀前半に門の建て替えがあり、東西門や欠堤部周辺を中心に水城に関わる遺構・遺物が展開する。

平安時代 平安時代前半の9・10世紀代は福岡平野全域で遺跡数が減少する。牛頸窯跡群も規模が縮小し、9世紀中頃には操業を停止する。市域の遺跡も減少し、前代に見られた仲島遺跡、井相田C遺跡や麦野遺跡の集落も9世紀代に消滅する。9～10世紀代では牛頸月ノ浦窯跡、本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡で土坑墓、薬師の森遺跡で土坑墓や掘立柱建物が展開する。

なお、9世紀前半に改称した鴻臚館は対外交渉の窓口として機能し、9世紀後半以降は中国商人の滞在・交易施設となり、初期貿易陶磁器が大量に出土している。平安時代後半になると、11世紀中頃～後半に大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、かわって博多遺跡群において中世都市「博多」が成立する。律令制は完全に崩壊し、各地で武士が活躍する時代を迎える。市域においては塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を埋納する土坑墓が確認されており、有力者の存在を示す。集落は松葉園遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡、上園遺跡で確認されている。なお、水城の外濠は平安時代末頃にはほぼ埋没し、西門周辺では経塚の造営や棒状土製品など土器生産に関わる遺物が集中することから、律令制の弛緩とともに本来的な役割が終焉を迎えていくこととなる。なお、土師器・瓦器焼成に関わる棒状土製品は、水城西門周辺～上園遺跡・本堂遺跡周辺にかけて濃密に分布し、牛頸窯跡群終焉以降の土器生産の再開を示す。

鎌倉時代～戦国時代 市域では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12世紀後半～14世紀にかけての中世墓が多数営まれているほか、集落を囲むと考えられる区画溝やピット群が広範囲に広がっており、比較的有力な集団が存在していたと考えられる。御笠の森遺跡は11世紀後半以降継続して集落が展開し、16世紀後半～17世紀中頃に多数の方形区画溝があり、有力農民層の集落跡と考えられている。なお、市域の戦国期山城として乙金の唐山城、牛頸の不動城があるが、未調査のため詳細不明である。

近世 後原遺跡、御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、村下遺跡、川原遺跡、屏風田遺跡などで遺構・遺物が確認されるが、当該期の遺跡の多くは現在の集落域と重複していると考えられる。このうち、市域中央部の後原遺跡は「白木原村」の本村にあたり、屋敷地や墓地が確認されており、地祇神社を中心とした集落景観が復元できる。また、市域東北部の薬師の森遺跡・原口遺跡・古野遺跡では近世～近現代にかけての墓地が展開し、乙金村の集団墓地と位置づけられる。

近代・現代 市域東北部の王城山遺跡・古野遺跡・原口遺跡で太平洋戦争時の防空壕跡を調査しており、このうち王城山遺跡のものは規模や遺物の内容から地下疎開工場と位置づけられる。また、市域中央部の野添遺跡では、本土決戦に備え野砲を設置したと考えられる洞窟壕が確認されている。

Ⅲ. 瑞穂遺跡第3次調査

1. 調査概要

調査地は瑞穂遺跡の北東端部、大野城市曙町1丁目12-3に所在し、低地部分にあたる。調査面積は100 m²である。調査地の現況は宅地で、表土・客土(25～35 cm)、暗灰褐色土(20～30 cm)を除去したところで淡黒灰色土～褐色土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、調査区東側で溝状遺構1条、竪穴状遺構1基、調査区中央～西側にかけて多数のピットを検出した。遺物は古墳時代の土師器の他、瓦器や白磁が出土した。なお、調査区西側には近代遺構の攪乱が複数ある。

第3次
調査

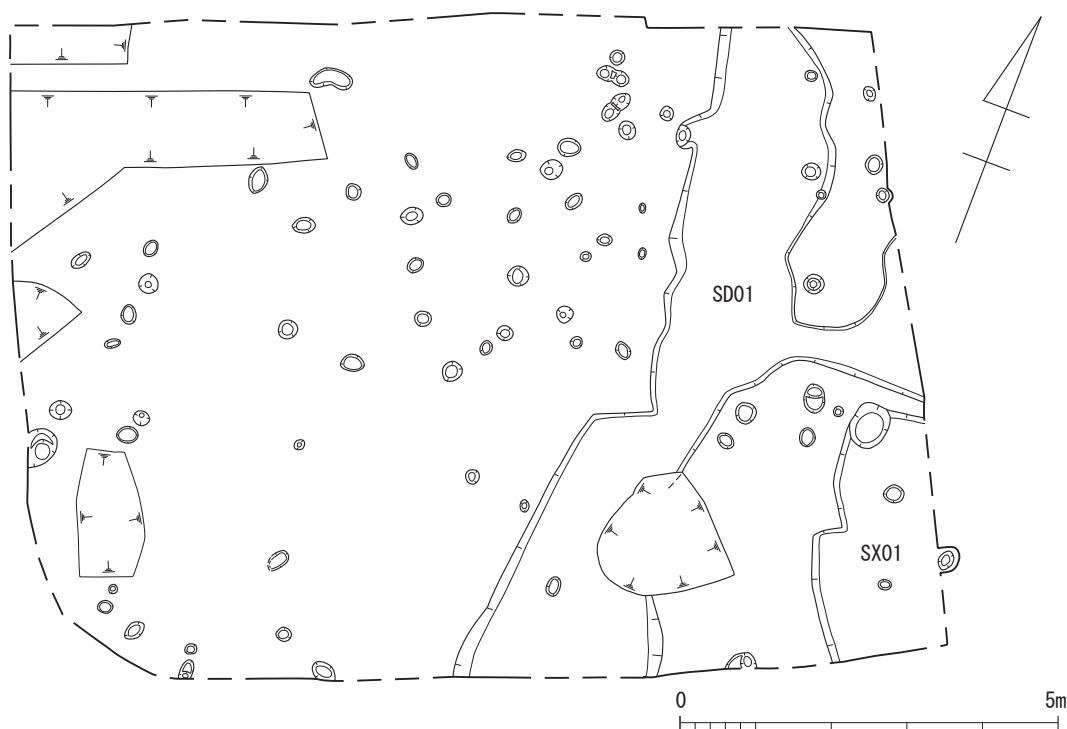
2. 遺構と遺物

(1) 溝状遺構(第3図、図版1)

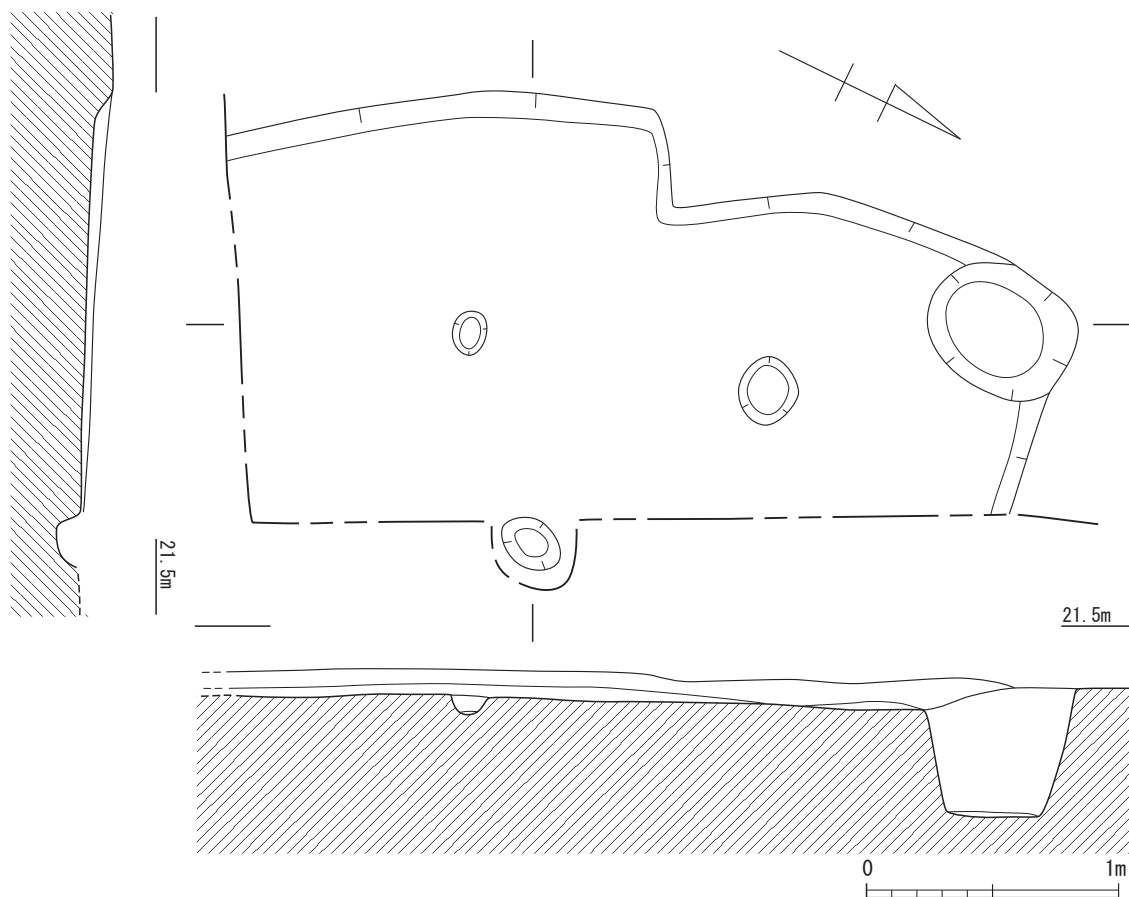
SD01 調査区東側を南北方向にのびる溝状遺構である。中央部で二股に分岐し、南北ともに調査区外にのびるため、全形は不明である。長さ9.5 m以上、最大幅2.3 m、深さ0.1 mである。埋土中から古墳時代の土師器や平安時代の土師器が出土した。

出土遺物(第5図、図版75)

土師器(1～4) 1は甕の頸部片で、口縁端部は欠損する。内外面ともにナデ調整。2はミニチュア土器だが、器種は不明。脚裾部を欠損する。外面はナデ調整で、内面はヨコ方向のケズリ。3はミニチュア土器の高杯で、口縁部・脚裾部ともに端部は欠損する。内外面ともにナデ調整。4は椀

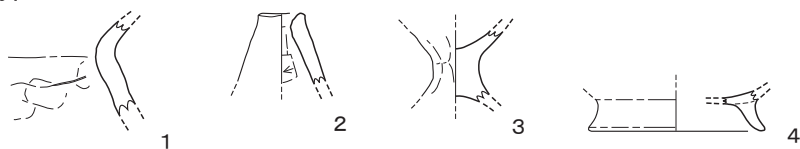


第3図 遺構配置図(1/100)

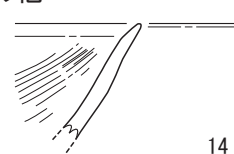


第4図 竪穴状遺構 (SX01) 実測図 (1/30)

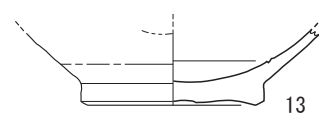
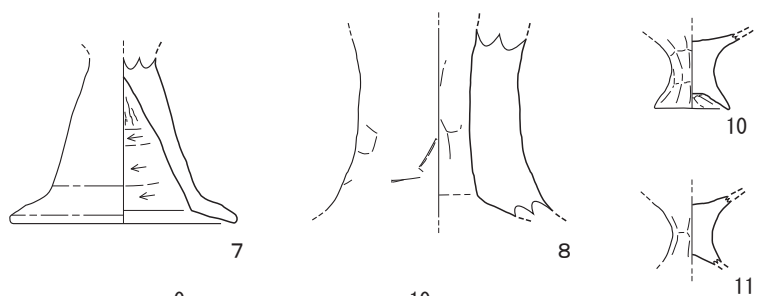
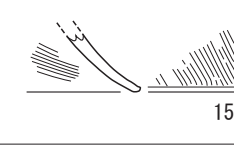
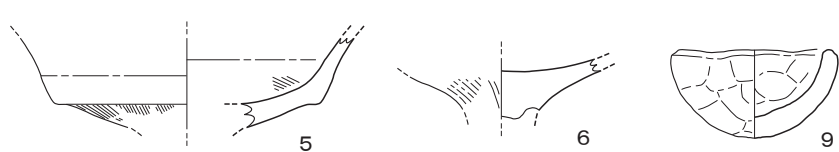
SD01



その他



SX01



第5図 出土遺物実測図 (1/3)

の高台部片。底部内面はナデ、高台部は内外面ともにヨコナデ。

（２）竪穴状遺構（第４図、図版１）

SX01 調査区南東隅部に位置する。東側・南側は調査区外に展開するため全形は不明であるが、南北 3.3 m 以上、東西 1.7 m 以上の不整形で、深さは 0.1 m である。古墳時代の土師器のほか、瓦器や白磁碗が出土した。

出土遺物（第５図、図版 75）

土師器（５～１１） ５は高杯の杯部。外面は屈曲部から上位はヨコナデ、屈曲部より下位はハケメの後にナデ。６も高杯の杯部。外面はハケメ、内面はナデ。７は高杯の脚部で、脚柱部が少し膨らむものである。脚柱部外面と裾部内外面はナデで、脚柱部内面はヨコ方向のケズリ。８は支脚。内外面ともにナデ。９はミニチュア土器の鉢。内外面ともにナデ。１０はミニチュア土器の高杯で、杯部端は欠損する。内外面ともにナデ。１１もミニチュア土器の高杯で、杯部・裾部ともに端部は欠損する。内外面ともにナデ。

瓦器（１２） 碗の口縁部片。内外面ともにミガキ調整。

磁器（１３） 白磁碗Ⅳ類の底部である。内面に１条の沈線を施し、高台は低く削り出す。体部下位から底部外面は露胎。

（３）その他の出土遺物（第５図、図版 75）

土師器（１４・１５） １４は高杯の杯部片。内外面ともにハケメの後研磨しており、内面にはハケメが残る。１５は高杯の脚裾部片。外面はハケメ後ヨコナデ。内面はハケメ後ナデで、端部はヨコナデ。

３．小結

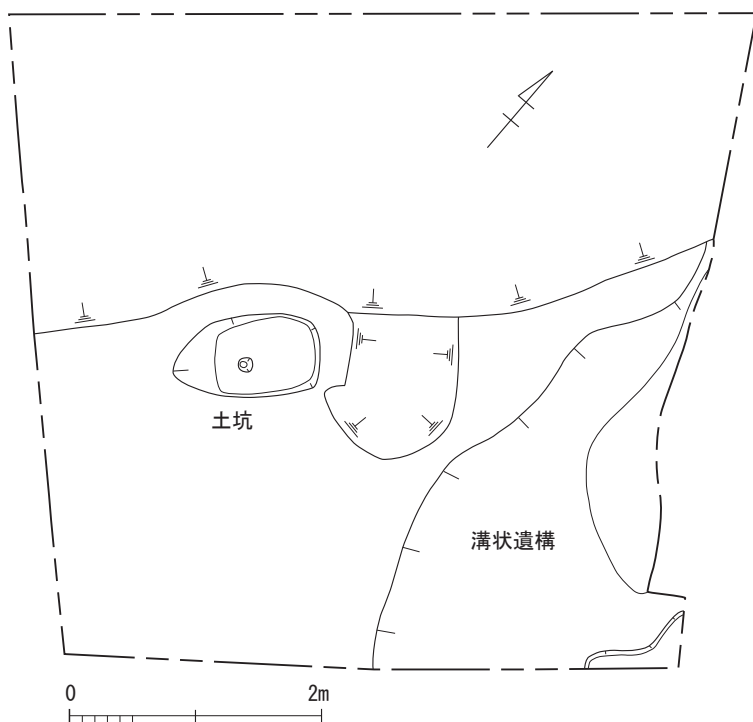
現場の所見では、溝状遺構は古墳時代の所産と考えていたが、土師器碗も含まれていることから、平安期まで下る可能性もある。竪穴状遺構も 5 世紀前半頃の遺物を中心に 12 世紀までの遺物を含んでおり、この幅の中で考えておきたい。いずれの遺構も性格については不明と言わざるをえない。

古墳時代の遺物に関してはミニチュア土器を多く含むことから、周囲で何らかの儀礼の場があった可能性がある。

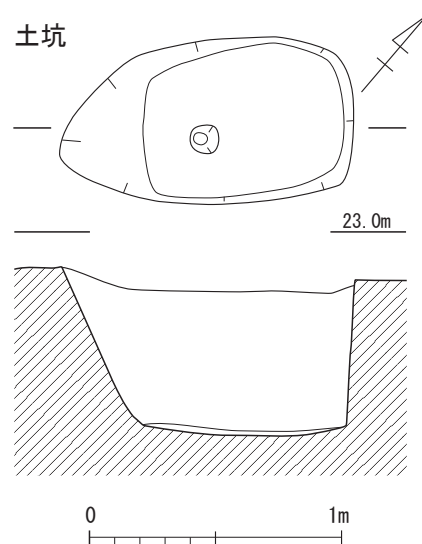
IV. 瑞穂遺跡第4次調査

1. 調査概要

調査地は瑞穂遺跡の中央部、大野城市瑞穂町2丁目1-5に所在し、低地部分に位置する。調査面積は30 m²である。調査地の現況は宅地で、客土（15 cm）、褐色土（15 cm）、黒色土（15 cm）を除去したところで灰褐色土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、調査区東南部で溝状遺構1条、調査区中央部で土坑1基を検出した。調査区北半部はカクランのため遺構面が消滅する。出土遺物はない。



第6図 遺構配置図（1/60）



第7図 土坑実測図（1/30）

2. 遺構

（1）土坑（第7図）

調査区中央部に位置する。長軸1.2m、短軸0.7mの平面楕円形である。深さは0.6mで、西壁は緩やかに立ち上がり、他は直立する。出土遺物はない。

（2）溝状遺構（第6図）

調査区南東部に位置する南北方向の落ち込みである。長さ4.0m以上、幅1.8m以上、深さ0.8mで、西壁は緩やかに立ち上がり、現状の床面は平坦である。出土遺物はない。

3. 小結

土坑・溝状遺構ともに出土遺物がないため時期的な位置づけは不明である。また、性格についても不明と言わざるをえない。

V. 瑞穂遺跡第7・8次調査

1. 調査概要

調査地は瑞穂遺跡の中央部、大野城市瑞穂町2丁目30-1の一部、31-1に所在し、微高地の最高所付近にあたる。

調査地の現況は公園で、表土直下で橙色粘質土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、弥生時代の甕棺墓・木棺墓・土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓、古墳、近世～近現代の甕棺墓・桶棺墓・土坑墓・木棺墓などを確認した。

第7・8次
調査

2. 遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構

① 甕棺墓

1号甕棺墓（第9・11図、図版6・76）

調査区中央部に位置し、5号甕棺墓に寄生する小型棺である。壺と壺を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸11.5m（床面で0.45m）、短軸0.7m（床面で0.4m）の楕円形を呈し、深さは0.35mで、上甕側にテラスがある。甕棺の主軸はN-14°-Eで、傾斜角度は約20°である。

16は上甕の壺である。口縁部はやや外傾する鋤先形で、胴部最大径付近と上位に1条の三角突帯を貼り付け、頸部内面に横方向のミガキが残る。17は下甕で、胴部上位が張る壺である。胴部2ヵ所に2条の三角突帯を貼り付ける。

2号甕棺墓（第9・11図、図版7・76）

調査区中央部に位置し、5号甕棺墓に寄生する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.5m（床面で0.65m）、短軸1.2m（床面で0.5m）の楕円形を呈し、深さは0.65mで、下甕は南側壁面に0.15mほど挿入される。甕棺の主軸はN-30°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

18は上甕。口縁部は内傾する逆L字状を呈す。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、外面にはタテ方向のハケメが残る。19は下甕。上甕と同様に内傾する逆L字状口縁で、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。最大径が胴部上位にあり、外面はタテ方向のハケメである。

3号甕棺墓（第9・12図、図版6・7・76）

調査区中央部に位置し、5号甕棺墓に寄生する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.05m（床面で0.3m）、短軸0.6m（床面で0.4m）の楕円形を呈し、深さは0.55mで、上甕側にテラスがある。甕棺の主軸はN-76°-Wで、傾斜角度は約13°である。

20は上甕で口縁部は逆L字状を呈し、直下に1条の三角突帯を貼り付ける。最大径は胴部上位にあり、外面はハケメ調整である。21は下甕である。内傾する逆L字状口縁をもち、口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部が張る。

4号甕棺墓（第9・12図、図版8・76）

調査区中央部に位置する。5号甕棺墓の東側に隣接する大型棺で、鉢(上甕)・甕(中甕)・甕(下甕)を組み合わせた、いわゆる多連棺である。墓坑は長軸2.15m(床面で0.35m)、短軸1.65m(床面で0.7m)の隅丸方形を呈し、深さは1.15mである。棺の主軸は墓坑主軸と平行せずに、45°ほど振れる。床面は上甕側から階段状のテラスが3段あり、下甕は南側壁面に0.7mほど挿入される。甕棺の主軸はN-10°-Eで、傾斜角度は下甕はほぼ水平、中甕・上甕が14°である。

22は上甕の鉢である。口縁部は逆L字状となり、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部中位から下位にかけて黒斑がある。23は中甕で、口縁部と底部を打ち欠く。胴部が張り、最大径付近に1条のM字突帯を貼り付ける。24は下甕。胴部は砲弾形である。口縁部はT字状でやや外傾し、内側に大きく張り出す。胴部中位に1条のM字突帯を貼り付け、わずかにハケメが残る。胴部下位に大きく黒斑が残る。

5号甕棺墓(第9・13図、図版9・76)

調査区中央部に位置する大型棺で、1号・2号・3号甕棺墓が寄生する。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸2.5m(床面で2.4m)、短軸1.6m(床面で1.0m)の隅丸方形を呈し、深さは1.25mである。床面は上甕側に階段状のテラスが2段あり、下甕は東側壁面に0.6mほど挿入する。甕棺の主軸はN-60°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

25は上甕である。口縁部はT字状でやや外傾する。胴部は砲弾形で胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。底部はやや上げ底である。26は下甕。口縁部はやや外傾するT字状で、胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。底部はやや上げ底である。

6号甕棺墓(第9・13図、図版9・77)

調査区中央部に位置し、SX35の北側に隣接する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.15m(床面で1.0m)、短軸0.8m(床面で0.4m)の楕円形を呈し、深さは0.2mである。甕棺の主軸はN-10°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

27は上甕で、28は下甕である。上下甕とも同様の器形で、胴部上位が内湾し、逆L字状の口縁をもつ。いずれも外面はタテ方向のハケメが残り、底部は上げ底となる。

7号甕棺墓(第10・13図、図版9・10・76)

調査区中央東側に位置し、15号甕棺墓の東側に隣接する大型棺である。近世墓に切られるため、遺存状況は悪い。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.1m以上、短軸1.05m(床面で0.6m)の不整長方形を呈し、深さは0.45mである。甕棺の主軸はN-33°-Wで、傾斜角度は約5°である。

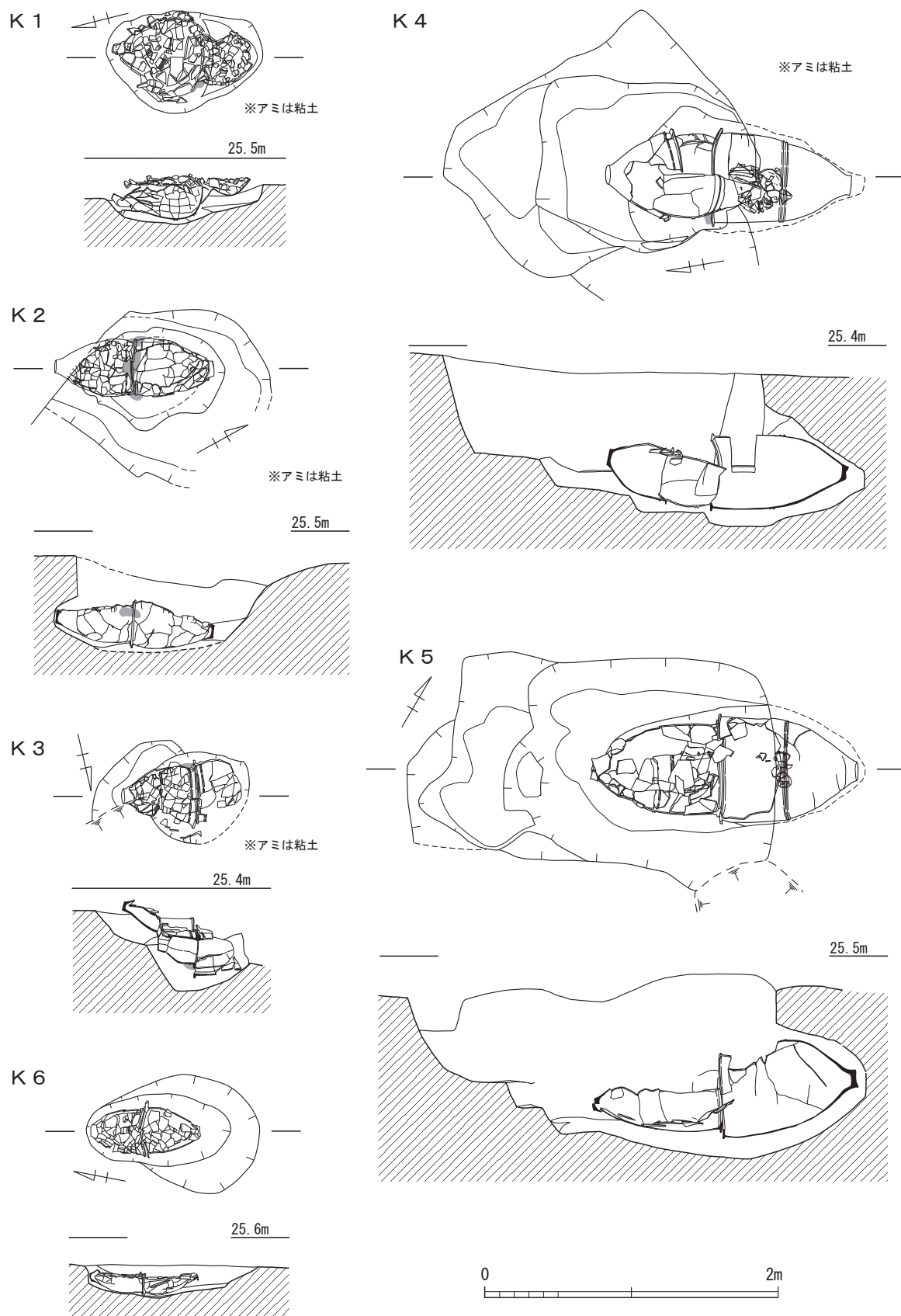
29は上甕の鉢である。口縁はT字状で端部に刻目を施し、口縁下に三角突帯を2条貼り付ける。30は下甕で、胴部がほぼ直立する砲弾形の器形をもち、口縁はT字状で内側に張り出す。中位にM字突帯を1条貼り付ける。

8号甕棺墓(第10・14図、図版10～12・77)

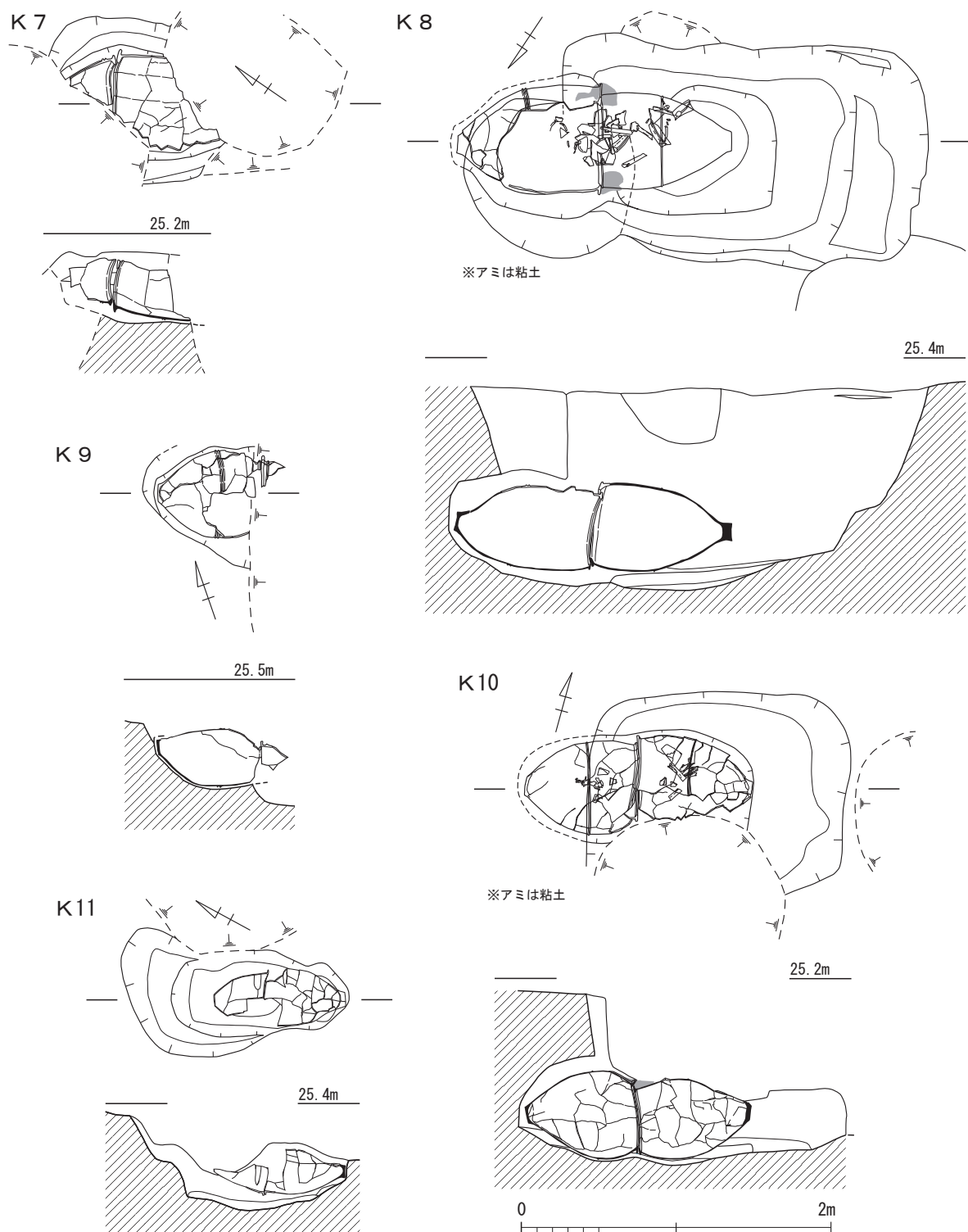
調査区中央東側に位置し、15号甕棺墓の西側に隣接する大型棺である。一部は近世墓により破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.35m(床面で2.5m)、短軸1.45m(床面で0.6m)の長方形を呈し、深さは1.3mである。床面は上甕側に2段のテラスがあり、下甕

7・8次遺構配置図 A3

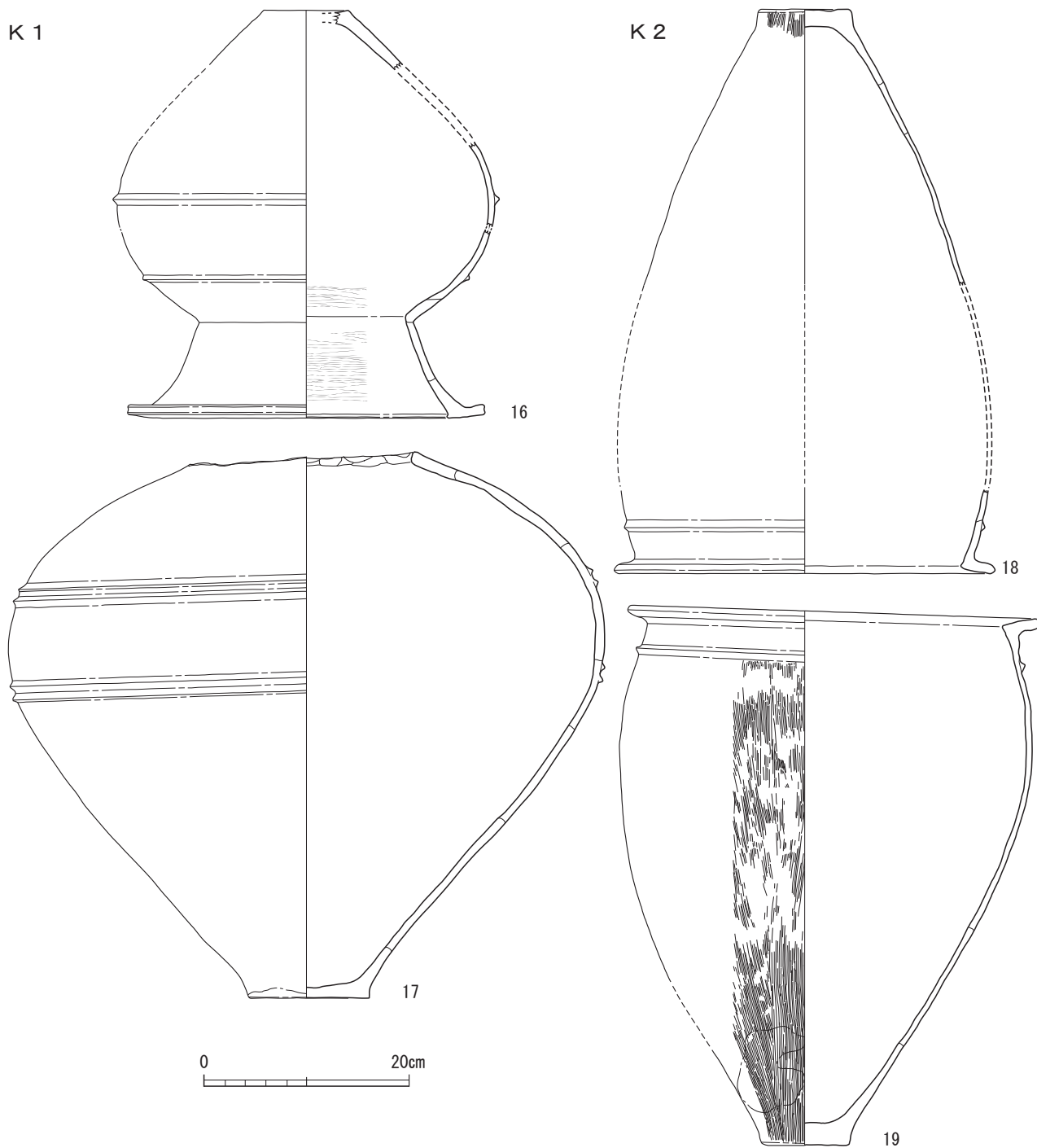
裏白



第9図 1号～6号甕棺墓実測図 (1/40)



第10図 7号～11号甕棺墓実測図 (1/40)



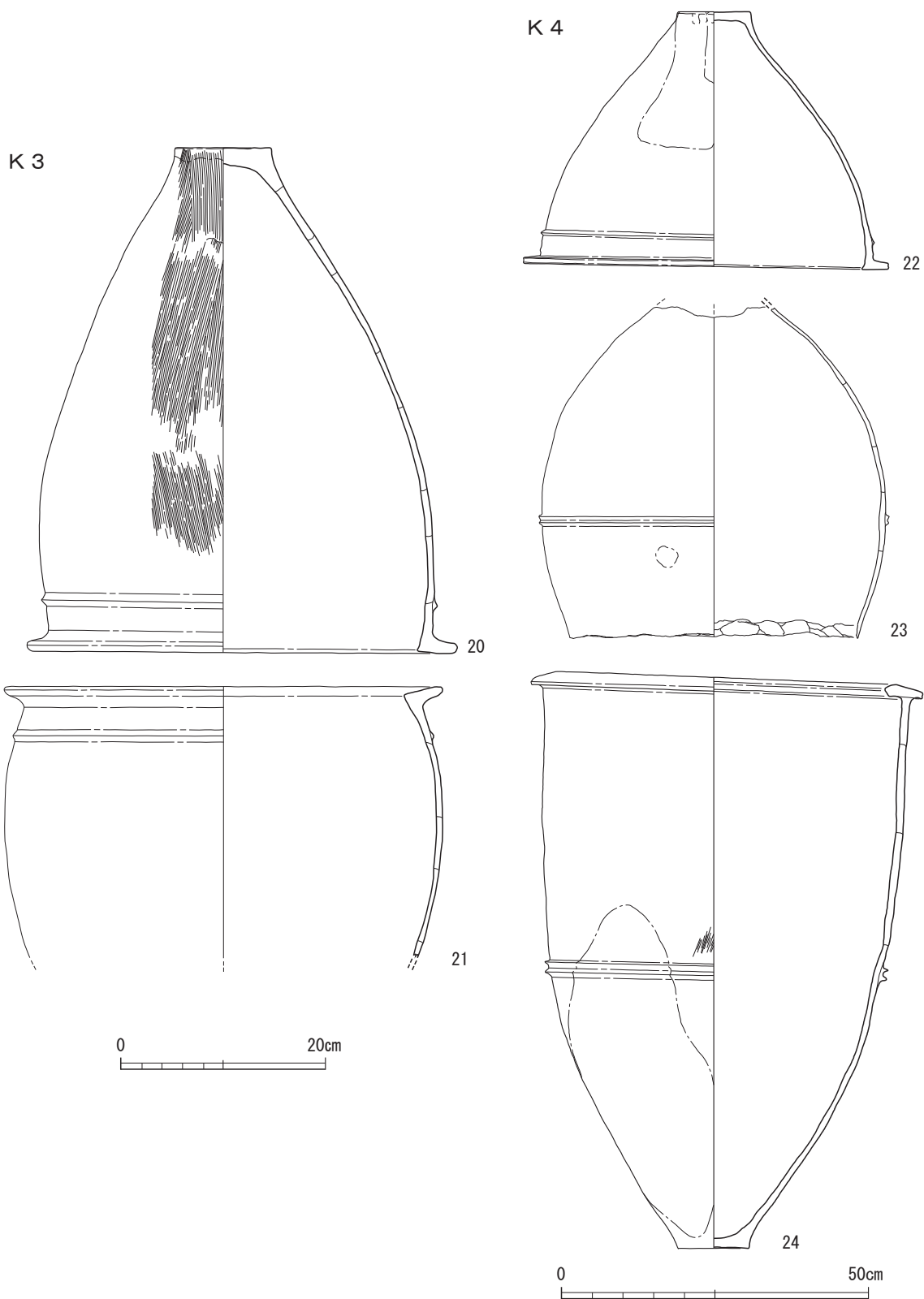
第11図 1号・2号甕棺実測図(1/6)

は北側壁面に0.35mほど挿入する。甕棺の主軸はN-56°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

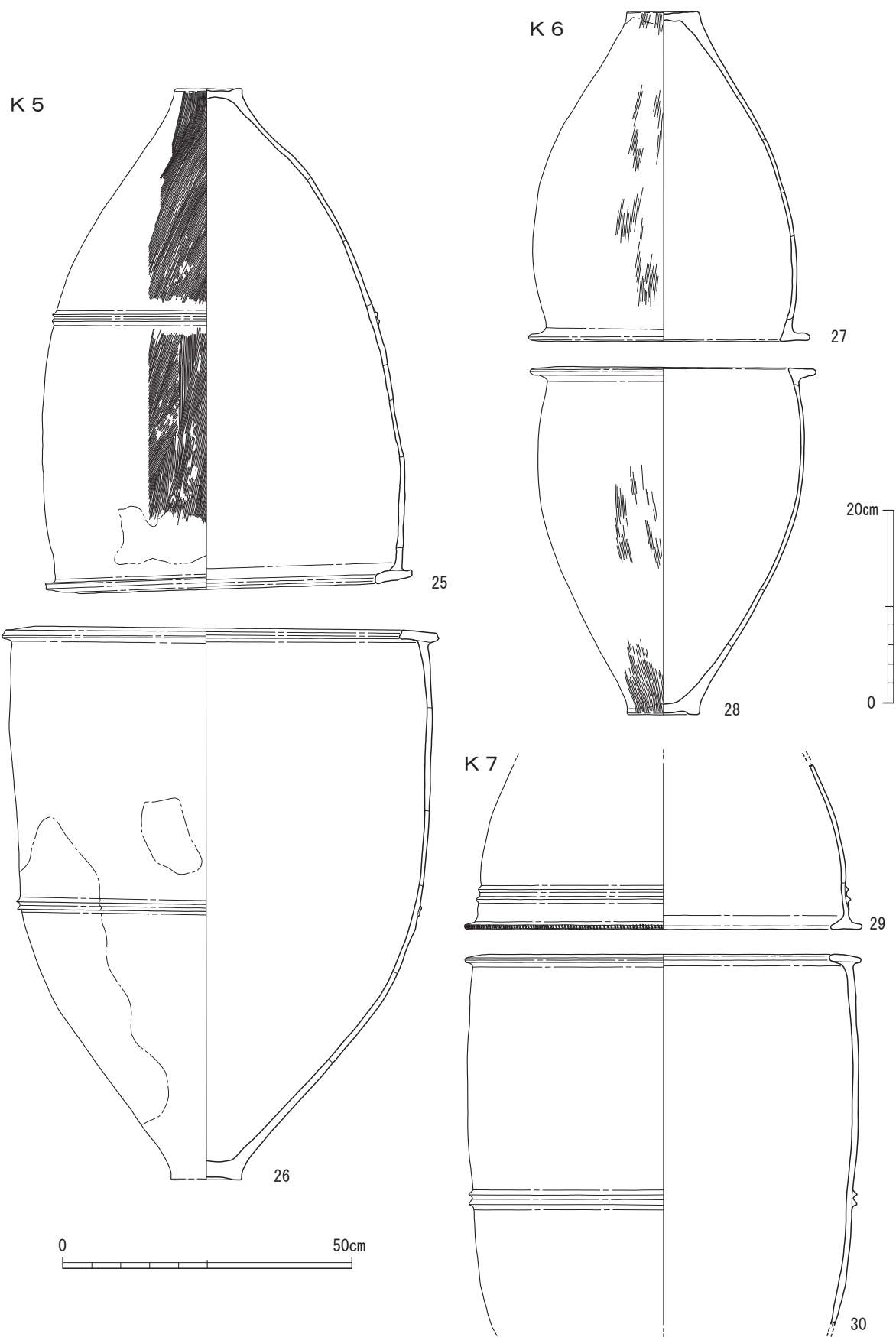
31は上甕である。丸みを帯びた砲弾状の器形で、口縁部は外側に傾斜するT字状である。胴部中位に1条の三角突帯を貼り付ける。32の下甕は、砲弾形を呈する。口縁部はT字状で、上面はやや外傾する。胴部中位に1条のM字突帯が貼り付く。胴部中位から下位に大きく黒斑が残る。

9号甕棺墓(第10・14図、図版12・77)

調査区中央東側に位置し、16号甕棺墓を切る大型棺である。近世墓に切られるため、遺存状況

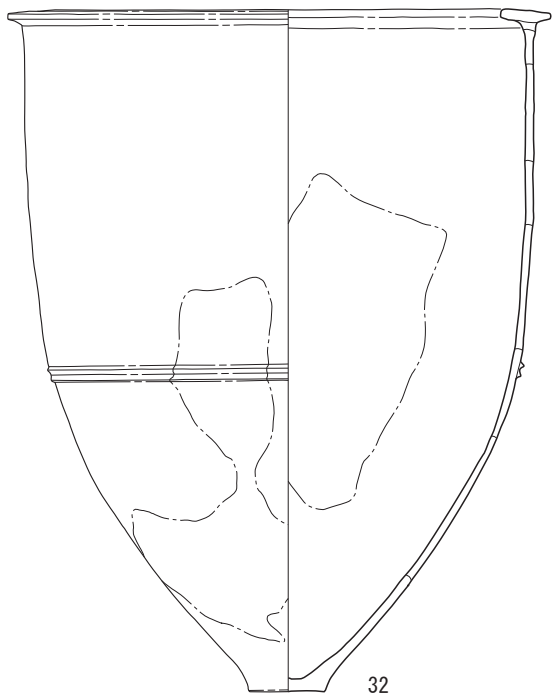
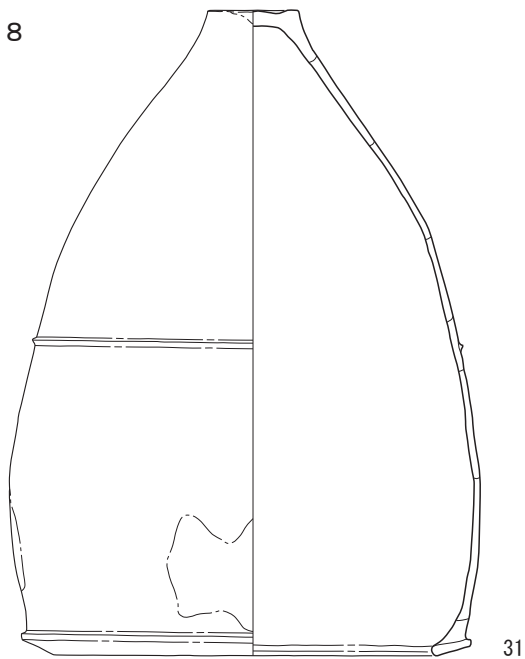


第12図 3号・4号甕棺実測図（20・21は1/6、22～24は1/10）

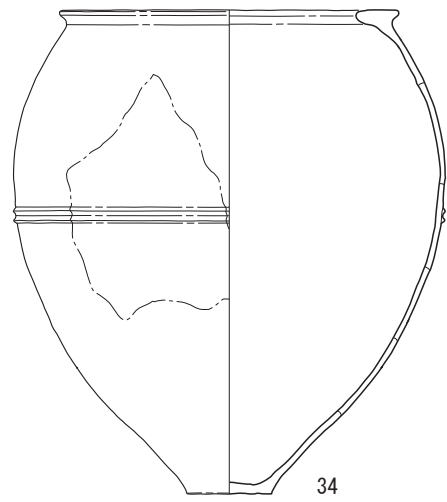
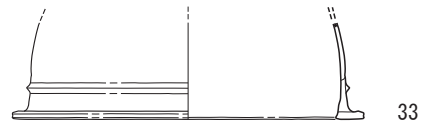


第13図 5号～7号甕棺実測図 (25・26・29・30は1/10、27・28は1/6)

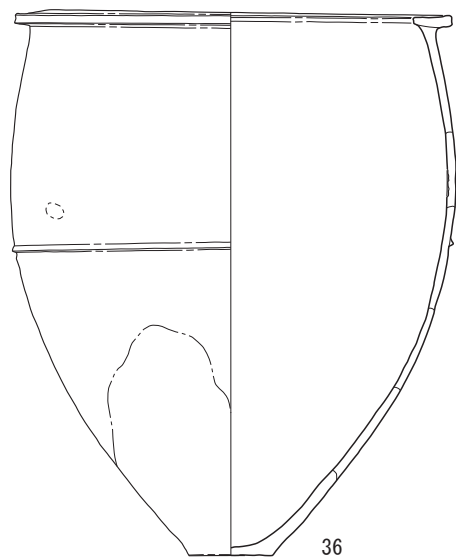
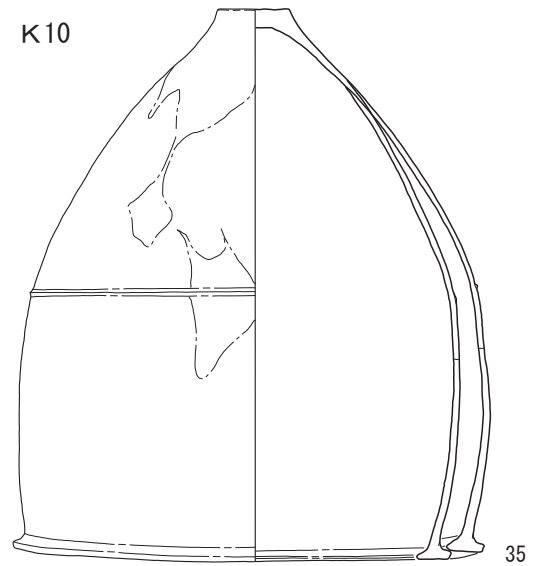
K 8



K 9



K10



第14図 8号～10号甕棺実測図 (1/10)

は悪い。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 0.7m 以上、短軸 0.8m 以上で楕円形を呈し、深さは 0.45m である。甕棺の主軸は N-71°-W で、傾斜角度はほぼ水平である。

33 は上甕である。胴部下位を欠損、口縁部は逆 L 字状で口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。34 は下甕。口縁は水平で、内側に張り出し厚みがある。胴部最大径は上位にあり、丸味を帯びた器形である。胴部中位に 2 条の三角突帯を張り付ける。胴部に大きな黒斑が残る。

10 号甕棺墓（第 10・14 図、図版 12・13・77）

調査区南東部に位置し、SX20 の東側に隣接する大型棺である。一部、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 1.7m（床面で 1.9m）、短軸 1.3m（床面で 0.5m）の長方形を呈し、深さは 1.1m である。下甕は西側壁面に 0.5m ほど挿入する。甕棺の主軸は N-81°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

35 は上甕で胴部の歪みが大きい。口縁部はほぼ水平な T 字状で、胴部中位に低い三角突帯を 1 条貼り付ける。胴部から口縁部にかけややすぼまる砲弾形の器形である。36 の下甕は、口縁部は逆 L 字状となり、胴部中位に 1 条の三角突帯を貼り付ける。胴部は上甕と同様に口縁に向かってややすぼまる。

11 号甕棺墓（第 10・16 図、図版 14・77）

調査区中央部に位置し、12 号甕棺墓に近接する小型棺である。一部、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 1.4m（床面で 0.4m）、短軸 0.75m（床面で 0.2m）の不整楕円形を呈し、深さは 0.6m である。床面は上甕側にテラスを有する。甕棺の主軸は N-28°-W で、傾斜角度は約 7° である。

37 は上甕で、胴部下位を欠損する。口縁部は逆 L 字状で内傾する。口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付け、外面にハケメが残る。38 は下甕。胴部上位に最大径がある。口縁部は逆 L 字状で内傾し、口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。外面はハケメである。

12 号甕棺墓（第 15・16 図、図版 14・77）

調査区中央部に位置し、SX64 に切られる大型棺である。近世墓に破壊されるため、遺存状況は悪い。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.3m、短軸 1.35m（床面で 0.5m）の楕円形を呈し、深さは 1.0m である。甕棺の主軸は N-58°-E で、傾斜角度は 13° である。

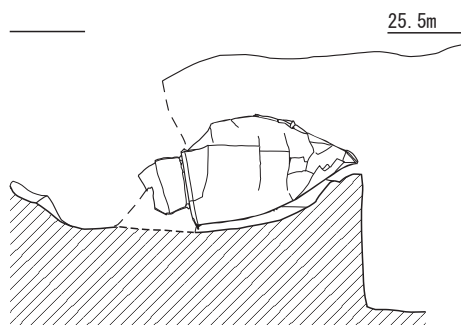
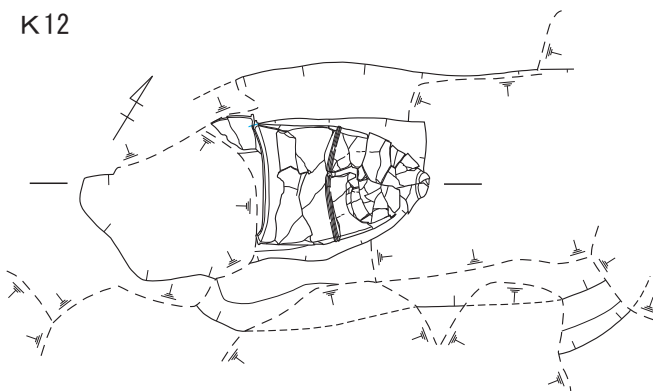
39 は上甕である。口縁部は水平な T 字状で、内外への張り出しは小さい。胴部から口縁部へゆるやかに内湾する。40 の下甕は、胴部は砲弾形で上位は外湾気味である。口縁部は T 字状で、内側に張り出してやや外傾する。胴部中位に 1 条の M 字突帯を貼り付ける。胴部下位に黒斑が残る。

13 号甕棺墓（第 15・16 図、図版 78）

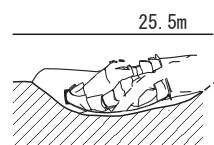
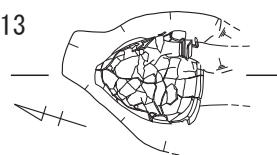
調査区中央東側に位置し、16 号甕棺墓に寄生する小型棺である。上面を削平され下甕のみ遺存するため合口甕棺か単棺かは不明である。墓坑は長軸 0.8m 以上、短軸 0.75m（床面で 0.4m）の楕円形を呈し、深さは 0.35m である。甕棺の主軸は N-18°-W で、傾斜角度は 16° である。

41 は下甕。全体的に歪み、大きく傾く。口縁部は逆 L 字状で、口縁下に 2 条の三角突帯を貼り付ける。内外面ともハケメである。

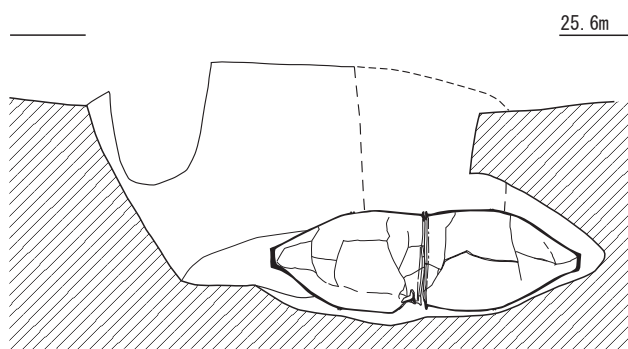
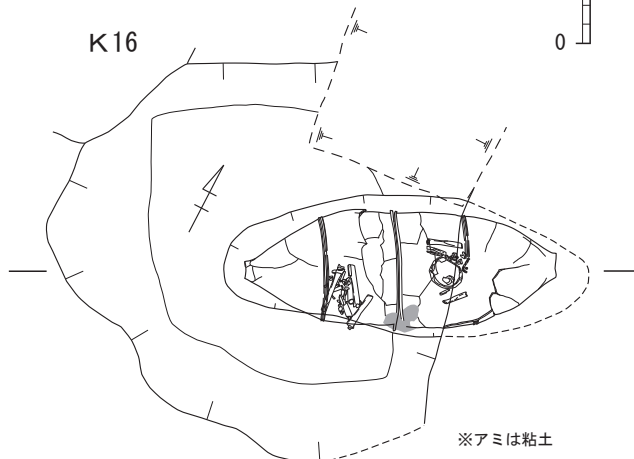
K12



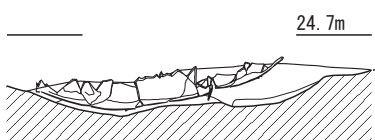
K13



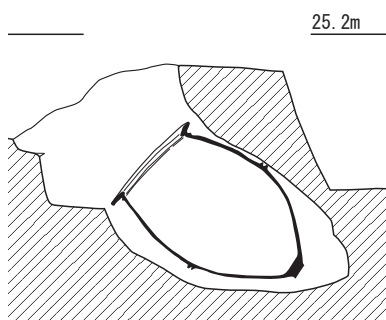
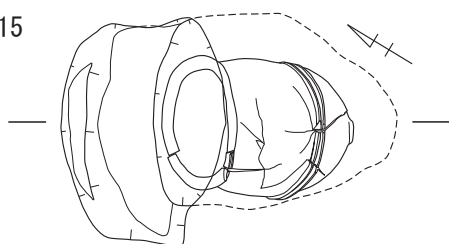
K16



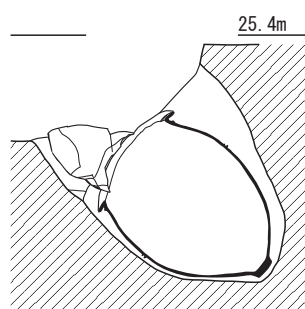
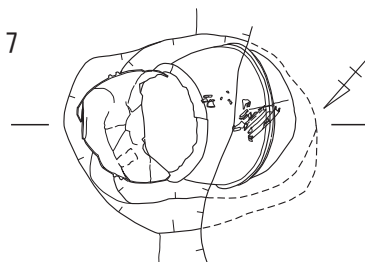
K14



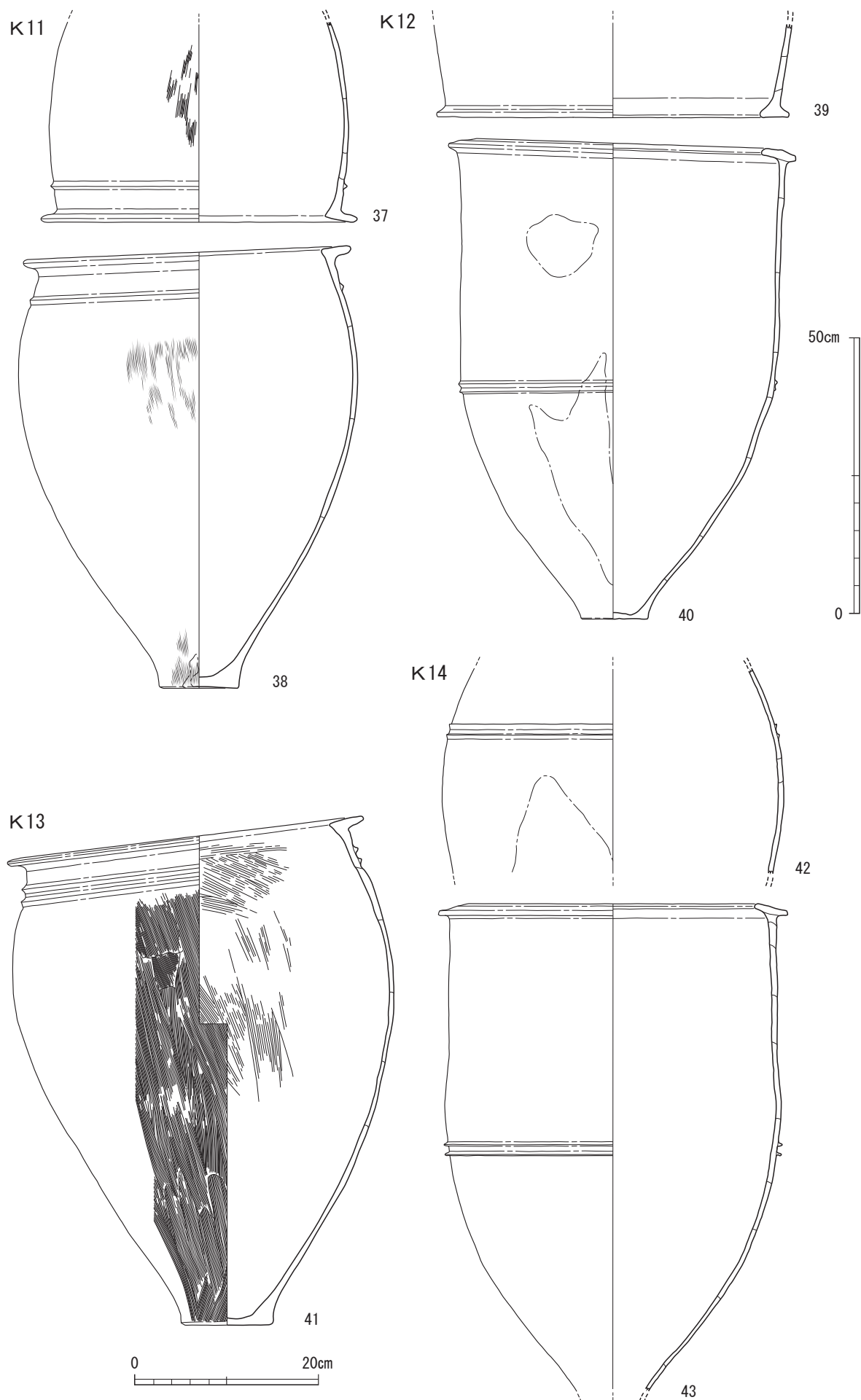
K15



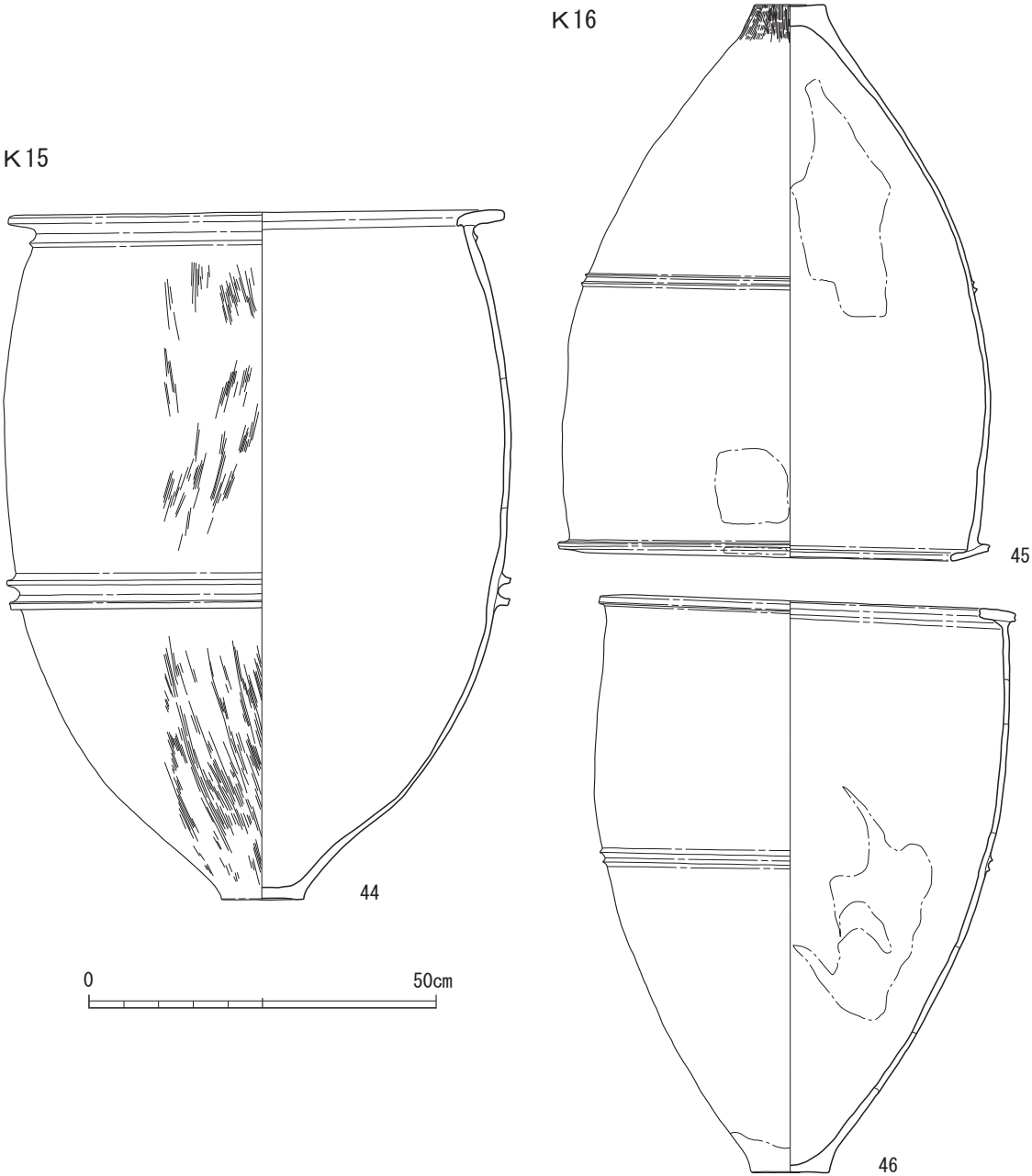
K17



第 15 図 12 号～ 17 号甕棺墓実測図 (1/40)



第16図 11号～14号甕棺実測図 (37・38・41は1/6、他は1/10)



第 17 図 15 号・16 号甕棺実測図 (1/10)

14 号甕棺墓 (第 15・16 図、図版 78)

調査区中央東端に位置する大型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。上面が大きく削平されるため、規模・形状は不明確であるが、墓坑は長軸 1.8m 以上、短軸 0.6m 以上 (床面で 0.5m) の細長い楕円形を呈し、深さは 0.3m である。甕棺の主軸は N-53°-W で、傾斜角度は 13° である。

42 は上甕である。胴部は丸みを持ち、中位に 2 条の低い三角突帯を貼り付ける。43 は下甕で、口縁部は T 字状で外傾する。胴部は砲弾形となり、中位に 2 条の細い三角突帯が貼り付く。

15 号甕棺墓 (第 15・17 図、図版 14・15・78)

調査区中央東側に位置し、7 号・18 号甕棺墓に近接する大型棺で、甕を用いた単棺である。墓坑上面は 0.9m × 1.2m の楕円形で、横口状に掘り込んでおり、甕の大半は南側壁面に挿入する。深

さは1.2m、甕棺の主軸はN-31°-Wで、傾斜角度は38°である。

44は下甕である。胴部は丸味をち、口縁部は逆L字状で、内側は僅かに突出する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に2条のコの字突帯を貼り付ける。外面にタテ方向のハケメが残る。

16号甕棺墓（第15・17図、図版16・17・78）

調査区中央東側に位置し、9号甕棺墓に切られる大型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.2m（床面で8.3m）、短軸2.1m（床面で0.7m）の不整形を呈し、深さは1.4mである。上甕側の床面にテラスがあり、下甕は東側壁面に0.7mほど挿入する。甕棺の主軸はN-62°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

45は上甕である。胴部は砲弾形で、口縁部が内側に大きく張り出し外傾する。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。底部側面にハケメが残る。46は下甕。胴部は砲弾形を呈す。口縁部上面はほぼ水平で、内側に大きく張り出す。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付け、上下甕とも黒斑が残る。

17号甕棺墓（第15・18図、図版18・78）

調査区中央東側に位置し、13号・16号・19号甕棺墓に近接する大型棺で、甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑上面は0.9m×1.0mの楕円形で、横口状に掘り込んでおり、下甕の大半は南側壁面に挿入する。深さは1.25mで、甕棺の主軸はN-51°-Eで、傾斜角度は51°である。

47は上甕である。口縁部は逆L字状でやや内傾し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。器形は卵形で丸味をもち、胴部中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面ともハケメを施す。48は下甕。胴部は丸味を持ち、口縁部は逆L字状で内傾する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。胴部中位に黒斑が残る。

18号甕棺墓（第18・19図、図版80）

調査区中央東側に位置し、19号甕棺墓に寄生する大型棺である。上面が削平されるため、上甕の有無や墓坑の規模・形状は不明だが、甕棺の主軸はN-76°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

49は下甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は鋤先状である。胴部最大径付近に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に大きく黒斑が残る。

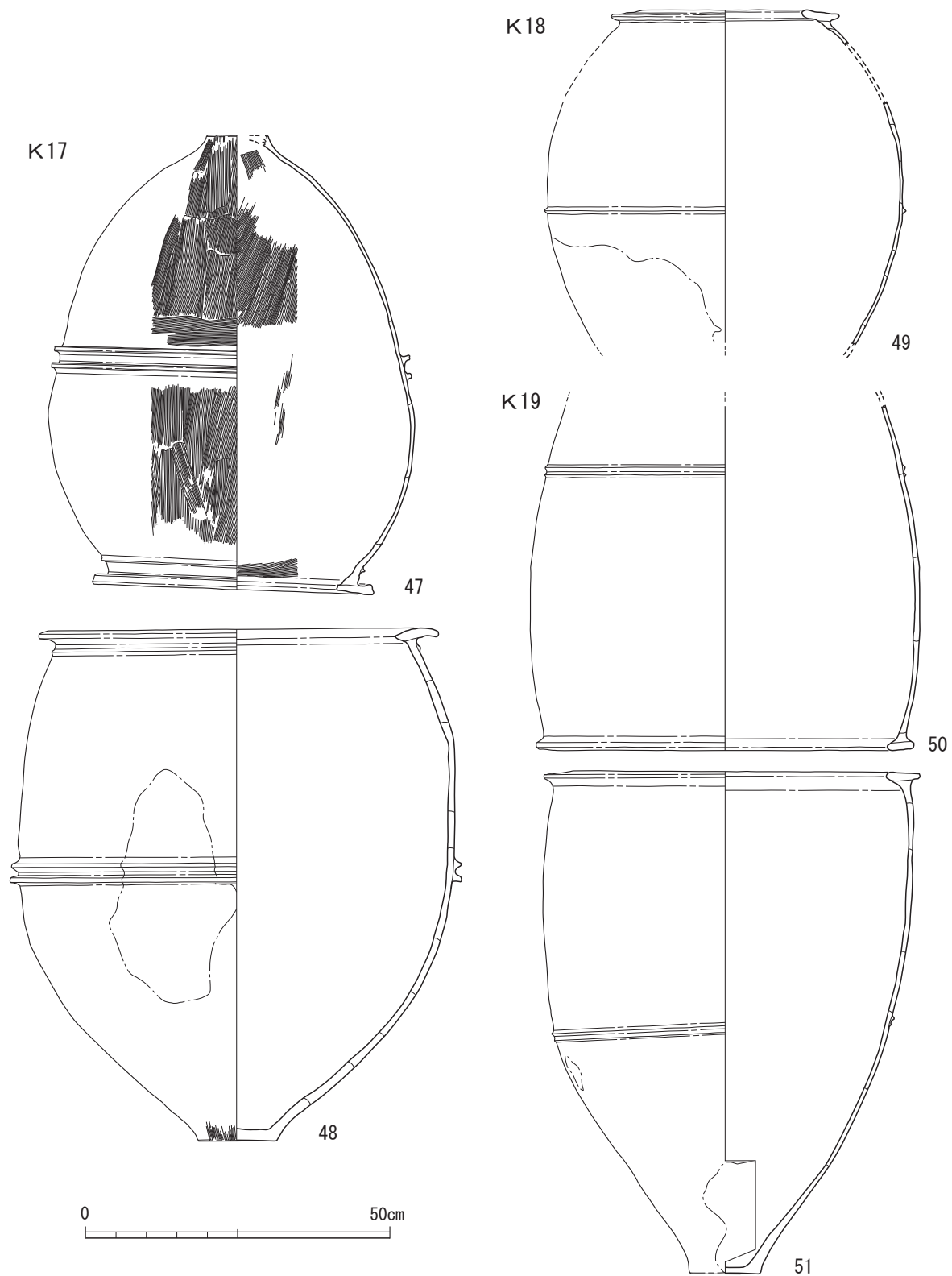
19号甕棺墓（第18・19図、図版19・78）

調査区中央東側に位置し、18号甕棺墓が寄生する大型棺である。一部は近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.3m以上、短軸1.1mの不整楕円形を呈し、深さは0.65mである。下甕の大半は西側壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-75°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

50は上甕である。口縁部は小さめのT字状を呈し、やや外傾する。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。51は下甕で、胴部は砲弾状を呈す。口縁部はほぼ水平なT字状を呈し、胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。

20号甕棺墓（第19・20図、図版78）

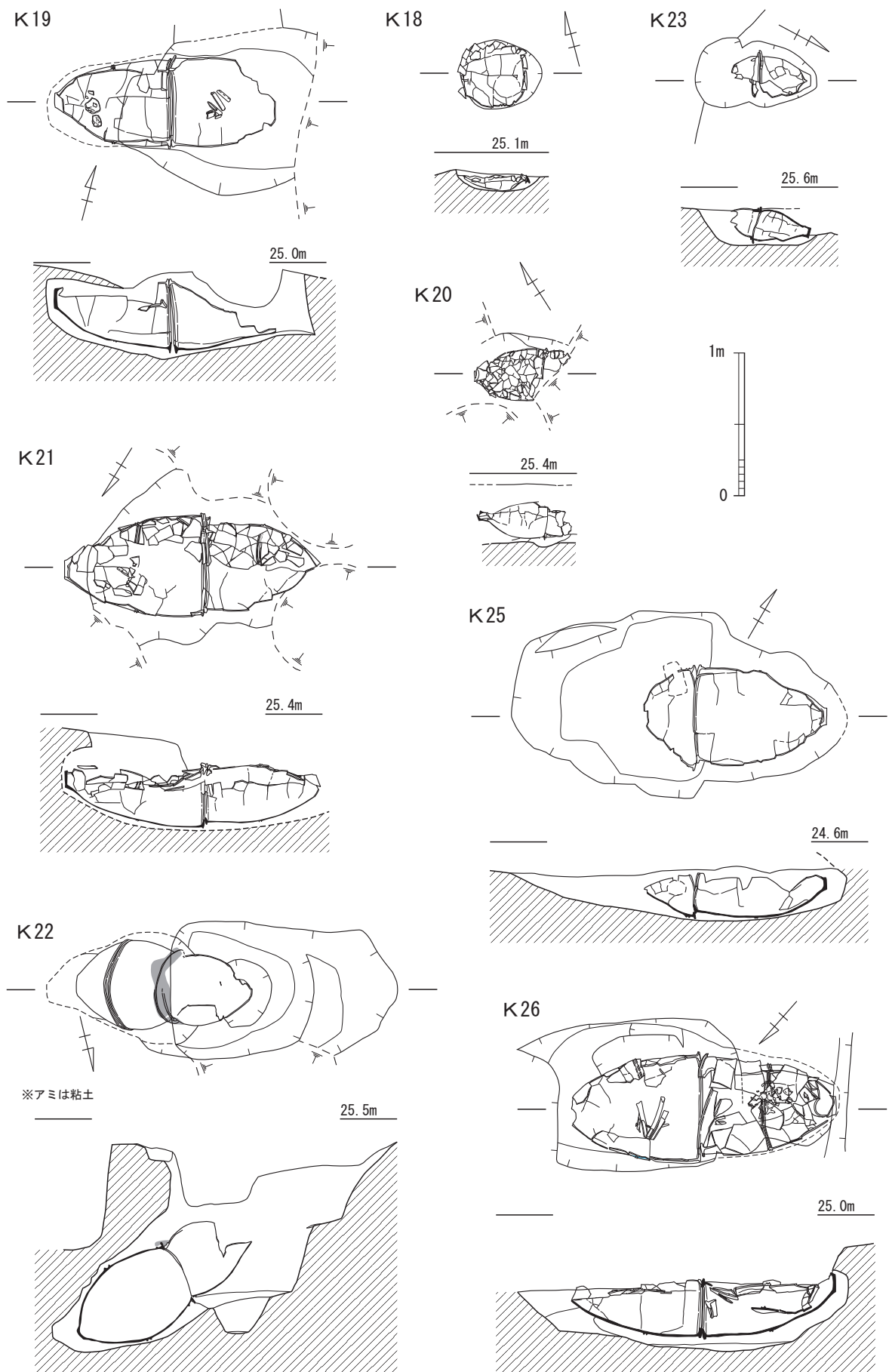
調査区中央部に位置し、21号甕棺墓に寄生する小型棺である。近世墓に破壊されるため遺存状



第18図 17号～19号甕棺実測図 (1/10)

況が悪く、墓坑の規模・形状は不明であるが、甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。深さは0.45mである。甕棺の主軸はN-58°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

52は上甕である。口縁部は鋤先状で口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位は欠損する。53は下甕。胴部上位はやや内湾している。口縁部は内側にやや張り出す鋤先状で、口縁下に1条



第19図 18号～23号・25号・26号甕棺墓実測図 (1/40)

の三角突帯を貼り付ける。底部側面にハケメが残り、胴部に大きく黒斑が残る。

21 号甕棺墓（第 19・20 図、図版 19・20・79）

調査区中央部に位置し、20 号甕棺墓が寄生する大型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、近世墓に破壊されるため墓坑の規模・形状は不明であるが、墓坑は長軸 1.6m 以上、短軸 1.23m 以上、深さは 0.7m である。下甕の一部は、北側壁面に 0.2m ほど挿入する。甕棺の主軸は N-59°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

54 は上甕である。胴部はやや丸味をもつ。口縁部は内側に大きく張り出しやや外傾する。胴部中位に 2 条の三角突帯を貼り付ける。内面にハケメが残る。胴部下位に黒斑が残る。55 は下甕。口縁部は内側に大きく張り出し外傾する。胴部中位に 2 条の三角突帯が貼り付く。

22 号甕棺墓（第 19・20 図、図版 21・79）

調査区中央部に位置し、21 号甕棺墓を切る大型棺である。一部、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 1.6m（床面で 0.6m）、短軸 1.0m（床面で 0.45m）の隅丸長方形を呈し、深さは 0.85m である。上甕側に一段のテラスがあり、床面中央部には直径 0.4m の円形ピットがある。東側は横口状に掘り込んでおり、下甕の大半が東側壁面に挿入する。甕棺の主軸は N-78°-W で、傾斜角度は 34° である。上下甕の合わせ目には、粘土の目張りがある。

56 は上甕である。口縁部を打ち欠くが、くの字状で内湾すると思われる。最大径は胴部上位にあり、口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付け、内外面ともハケメである。57 は下甕。胴部は丸味をもち、口縁部は逆 L 字状で内傾し、口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。胴部中位に断面台形の突帯が 2 条貼り付く。胴部に黒斑が複数残る。

23 号甕棺墓（第 19・21 図、図版 79）

調査区中央東側に位置し、19 号甕棺墓に近接する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 0.85m（床面で 0.6m）、短軸 0.5m（床面で 0.45m）の楕円形を呈し、深さは 0.25m である。甕棺の主軸は N-28°-W で、傾斜角度は 14° である。

58 は上甕である。口縁部は逆 L 字状で、口縁下に三角突帯を貼り付ける。59 は下甕で、口縁部は鋤先状でやや内傾する。外面はハケメである。

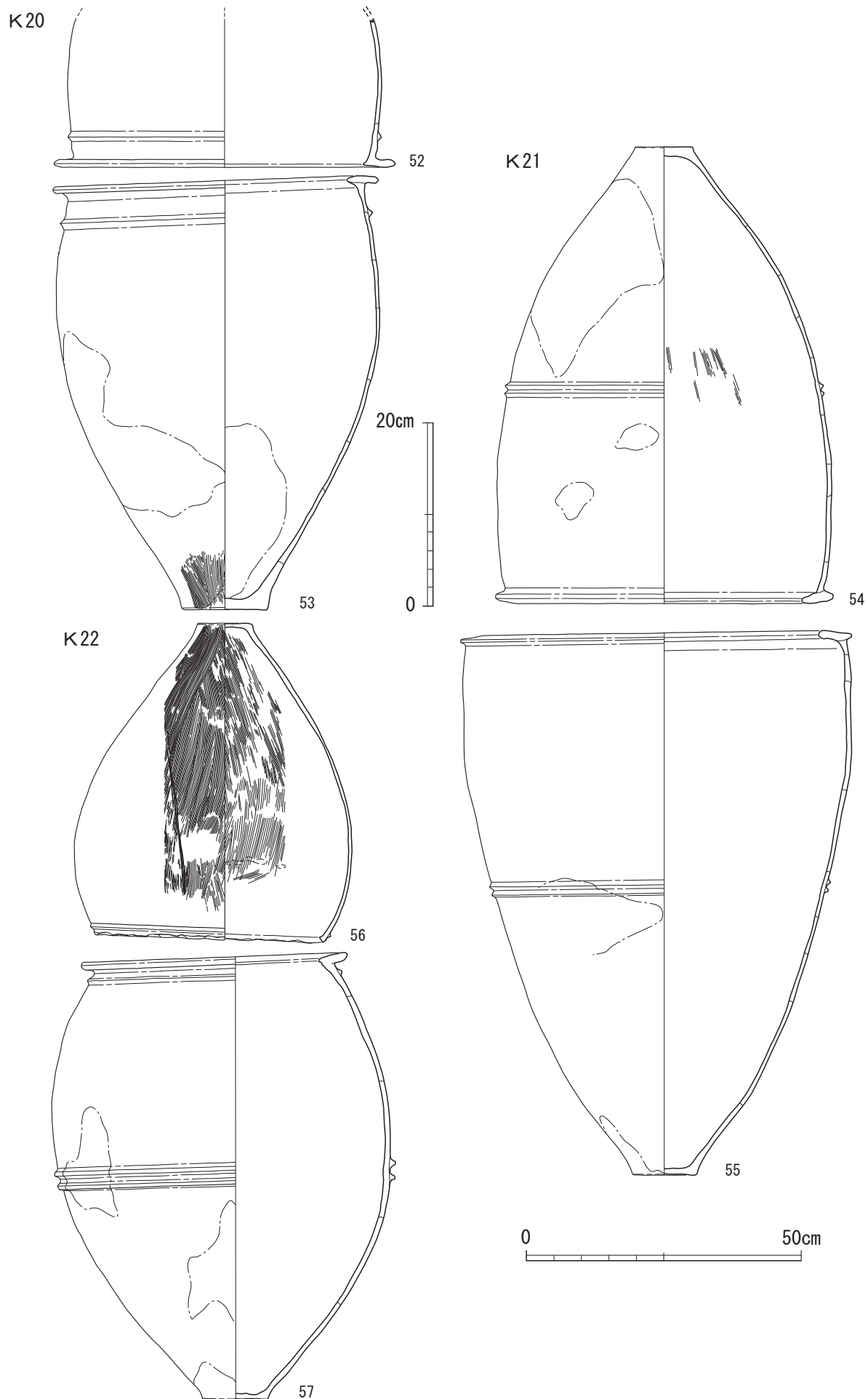
25 号甕棺墓（第 19・21 図、図版 79）

調査区中央東端に位置する大型棺である。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.35m（床面で 2.0m）、短軸 1.3m（床面で 0.7m）の不整な楕円形を呈し、深さは 0.35m である。東側壁面を横口状に掘り込み、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸は N-60°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

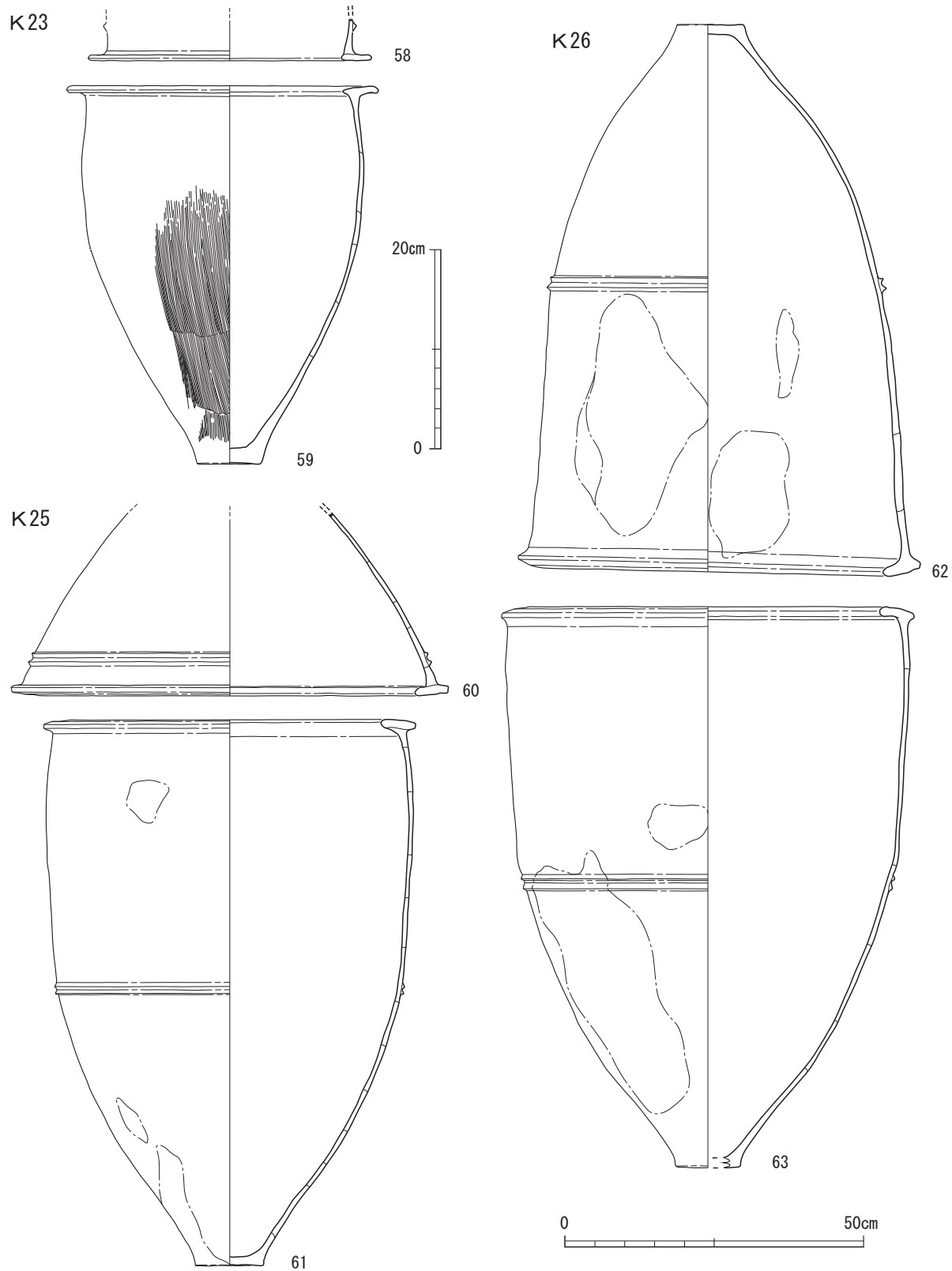
60 は上甕の鉢である。口縁部は T 字状でやや外傾し、口縁下に M 字突帯を貼り付ける。61 は下甕で、胴部は砲弾形を呈す。口縁部は T 字状で内側の張り出しが強く、やや外傾する。胴部中位に M 字突帯を貼り付ける。

26 号甕棺墓（第 19・21 図、図版 22・23・79）

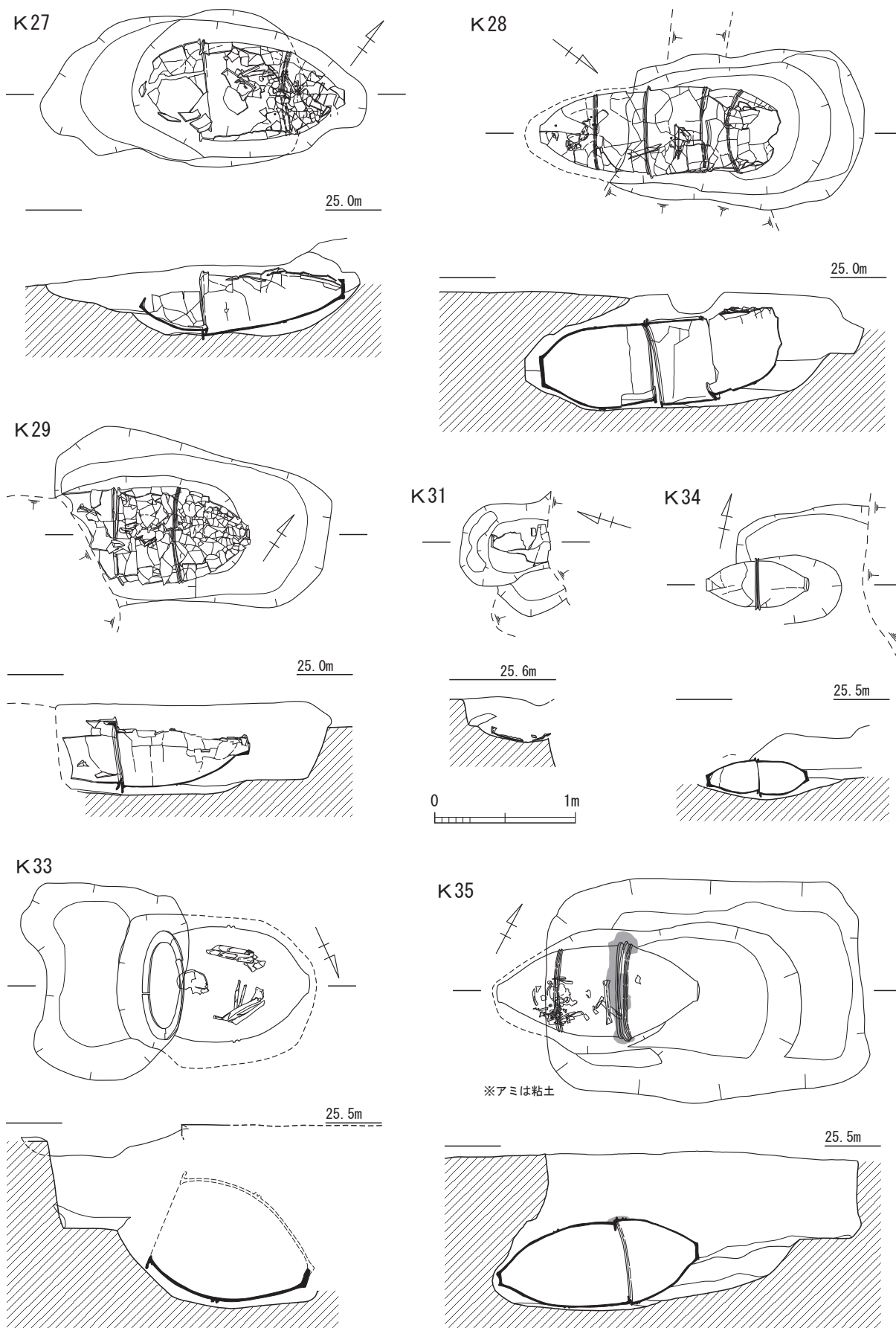
調査区中央東端に位置し、27 号甕棺墓に平行する大型棺である。一部は、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 1.6m 以上（床面で 1.05m）、短軸 1.1m（床



第20図 20号～22号甕棺実測図（52・53は1/6、他は1/10）

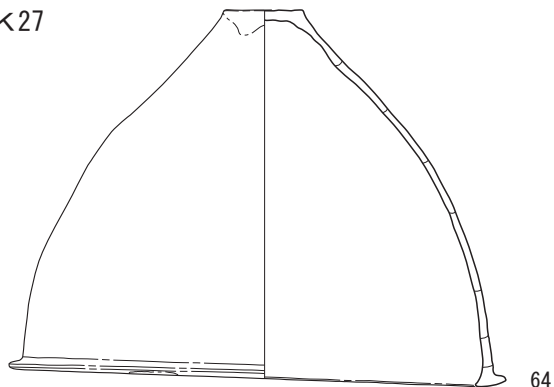


第21図 23号・25号・26号甕棺実測図 (58・59は1/6、他は1/10)

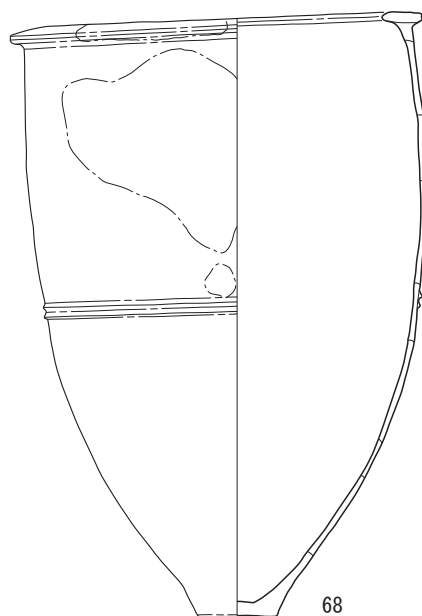
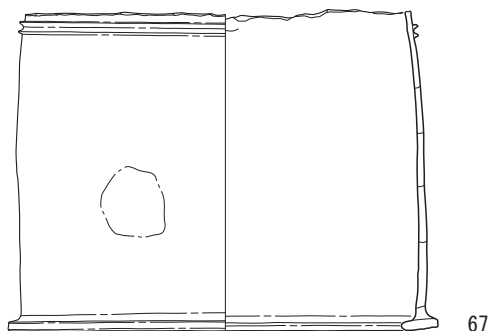
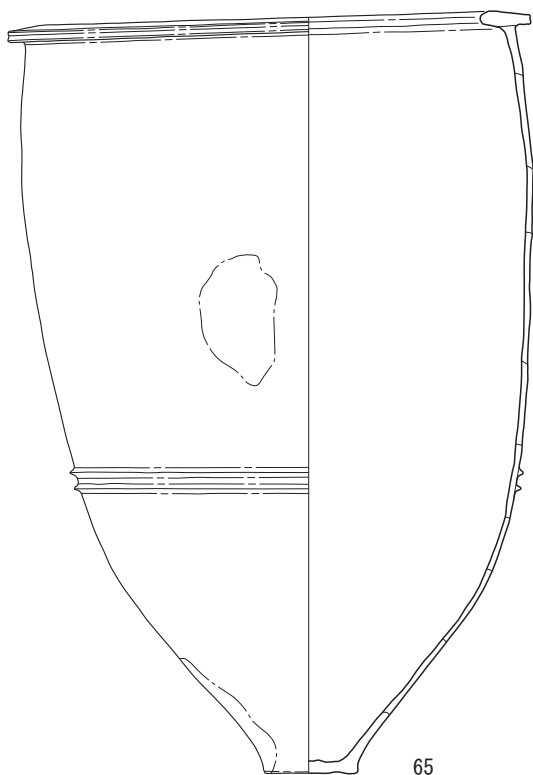
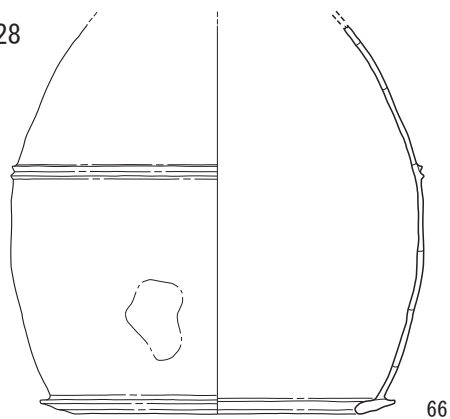


第22図 27号～29号・31号・33号～35号甕棺墓実測図 (1/40)

K27



K28



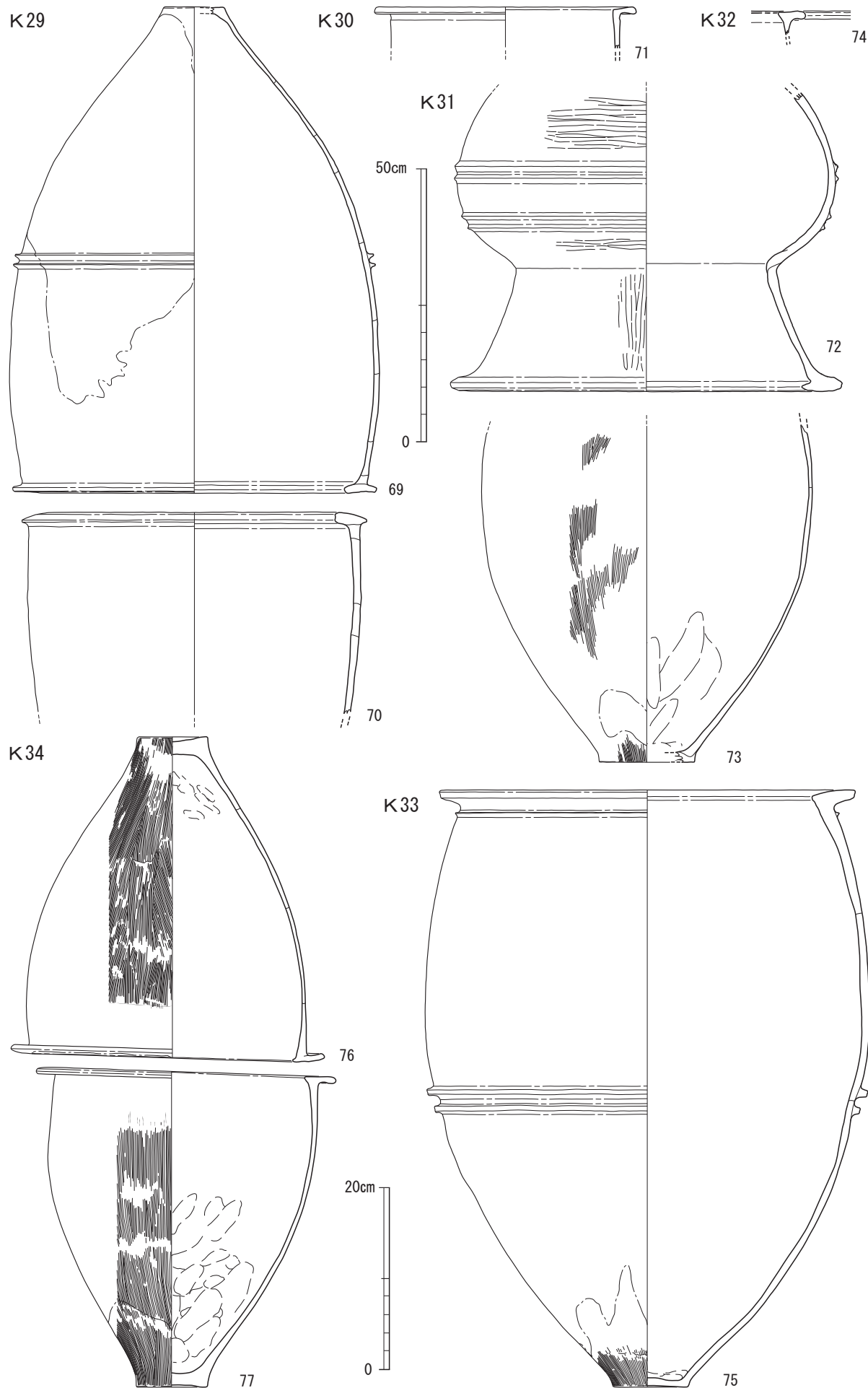
第23図 27号・28号甕棺実測図 (1/10)

面で0.4m)の隅丸長方形を呈し、深さは0.75mである。甕棺の主軸はN-55°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

62は上甕である。胴部は砲弾形を呈し、口縁部はT字状で内側に大きく張り出し、外傾する。胴部中位にM字突帯を貼り付ける。63は下甕。胴部は砲弾形を呈し、口縁部はT字状で内側に大きく張り出し、外傾する。胴部中位にM字突帯を貼り付ける。上下甕とも大きく黒斑が残る。

27号甕棺墓 (第22・23図、図版23・79)

調査区中央東端に位置し、26号甕棺墓に平行する大型棺である。鉢と甕を組み合わせた接口式



第24図 29号～34号甕棺実測図（69・70・75は1/10、71～74・76・77は1/6）

の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.3m（床面で 1.1m）、短軸 1.1m（床面で 0.65m）の楕円形を呈し、深さは 0.65m である。甕棺の主軸は N-54°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

64 は上甕の鉢。口縁部は逆 L 字状で、外傾する。口縁部上面の 3 ケ所に、小さい黒斑が残る。65 は下甕。胴部は砲弾形で、全体が歪む。口縁部は T 字状で、やや外傾する。胴部下位に 2 条の三角突帯を貼り付ける。

28 号甕棺墓（第 22・23 図、図版 24・25、図版 80）

調査区中央東側に位置する大型棺で、甕を 3 つ組み合わせた、いわゆる多連棺である。墓坑は長軸 1.7m（床面で 1.0m）、短軸 1.15m（床面で 0.75m）の隅丸長方形を呈し、深さは 0.8m である。南側は横口状に掘り込んでおり、下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸は N-38°-W で、傾斜角度は 8° である。

66 は上甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は T 字状で内側に大きく張り出し、外方に垂れる。胴部中位に M 字突帯を貼り付ける。67 は中甕。胴部の M 字突帯付近から下を打ち欠く。口縁部は T 字状で外傾する。胴部は砲弾形になると思われる。68 は下甕である。胴部は砲弾形を呈し、口縁部は T 字状で外側に低く傾斜する。胴部中位に M 字突帯を貼り付ける。

29 号甕棺墓（第 22・24 図、図版 25・80）

調査区中央東側に位置する大型棺で、一部を近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.0m（床面で 1.1m）、短軸 1.3m（床面で 0.45m）の隅丸長方形を呈し、深さは 0.65m である。下甕は壁面に挿入されたものと考えられるが、近世墓に切られるため詳細は不明である。甕棺の主軸は N-56°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

69 は上甕である。胴部中位から口縁部まで緩やかに内湾する砲弾形を呈している。口縁部はほぼ水平な T 字状である。中位に 2 条の三角突帯を貼り付ける。胴部から底部に大きく黒斑が残っている。70 は下甕。口縁部から胴部上位が残存。口縁部は内側に大きく張り出し、上面は外傾する。

30 号甕棺墓（第 24 図、図版 80）

小型棺で、残存状況が悪く遺構図の記録はない。71 は下甕の口縁部片である。口縁部は逆 L 字状でやや内傾する。

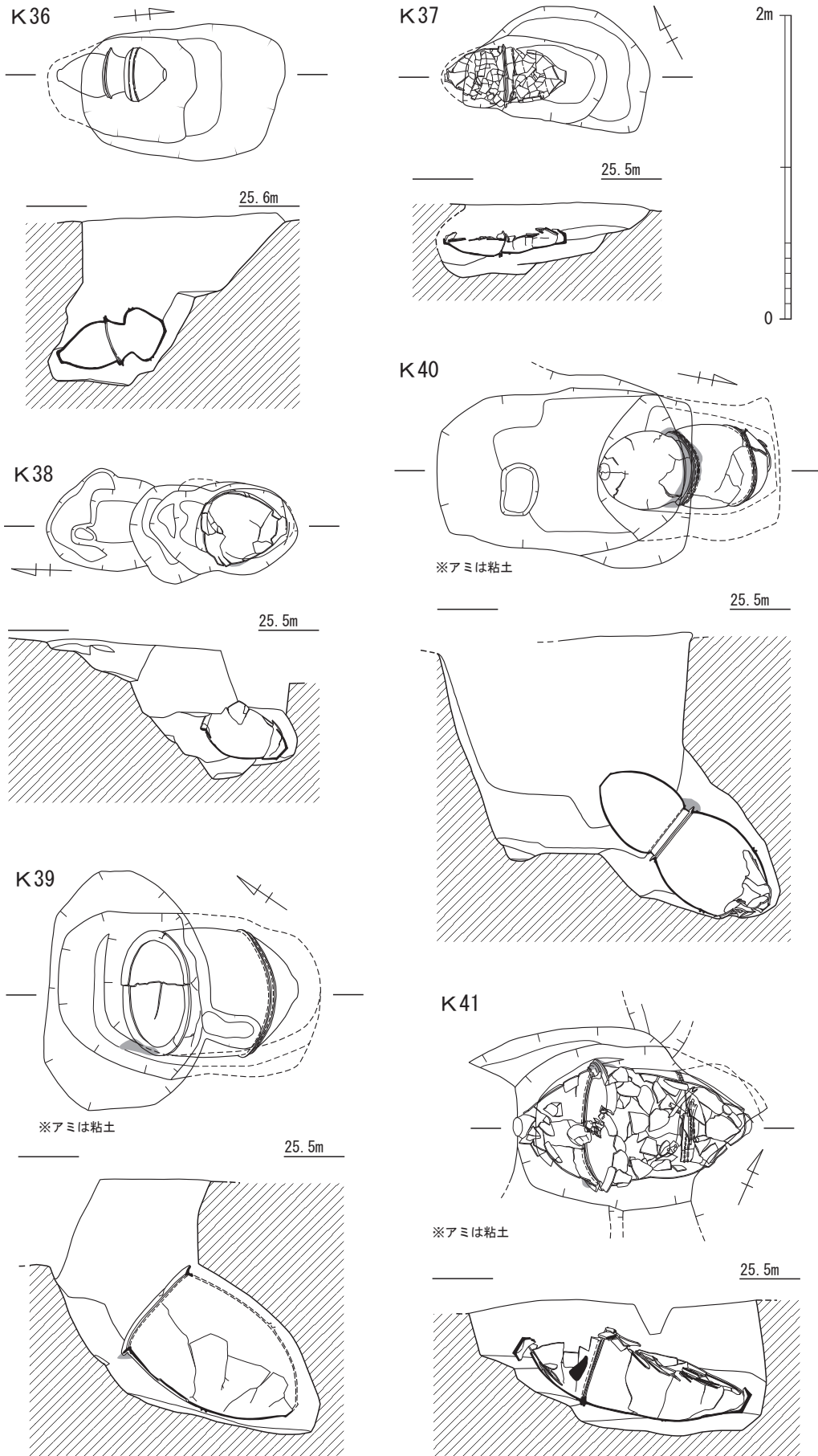
31 号甕棺墓（第 22・24 図、図版 80）

調査区中央東側に位置し、19 号甕棺墓に寄生する小型棺である。カクランにより遺存状況は悪い。壺と甕を組み合わせた合口甕棺で、墓坑は長軸 0.6m 以上、短軸 0.8m（床面で 0.4m）の楕円形を呈し、深さは 0.3m である。甕棺の主軸は N-17°-W で、傾斜角度はほぼ水平である。

72 は上甕の壺である。口縁部は鋤先状で、頸部はほぼ直線的に外反する。胴部は丸みを持ち、上位 2 か所に 2 条の三角突帯を貼り付ける。73 は下甕である。口縁部から胴部上位は欠損する。胴部外面はハケメで、内面下位は強くナデる。

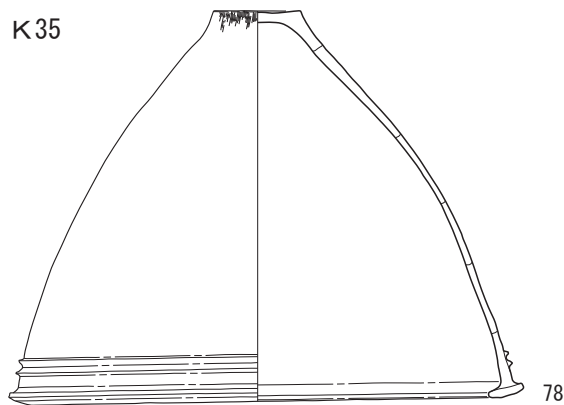
32 号甕棺墓（第 24 図、図版 87）

調査区中央西端に位置する小型棺である。残存状況が悪く遺構図の記録はない。なお、遺構に伴うものではないが、黒曜石の石核が出土した。74 は下甕の口縁部片である。鋤先状を呈す。

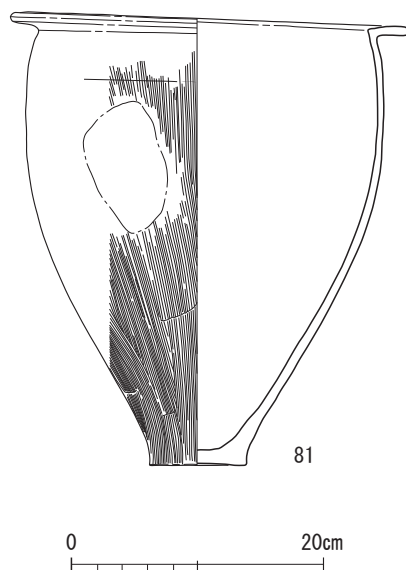
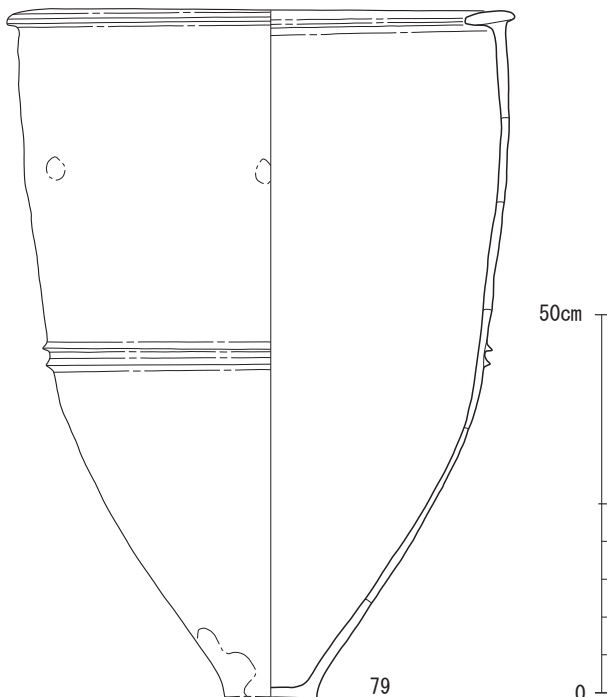
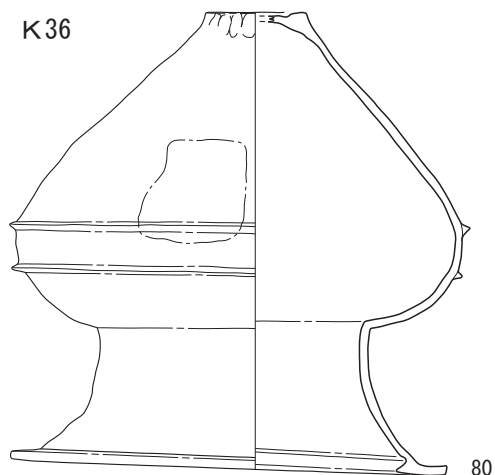


第25図 36号～41号甕棺墓実測図 (1/40)

K35



K36



第 26 図 35 号・36 号甕棺実測図 (78・79 は 1/10、80・81 は 1/6)

出土遺物 (第 47 図、図版 83)

石製品 (104) 黒曜石製の細石刃核。自然面以外の全面で細石刃を剥離している。

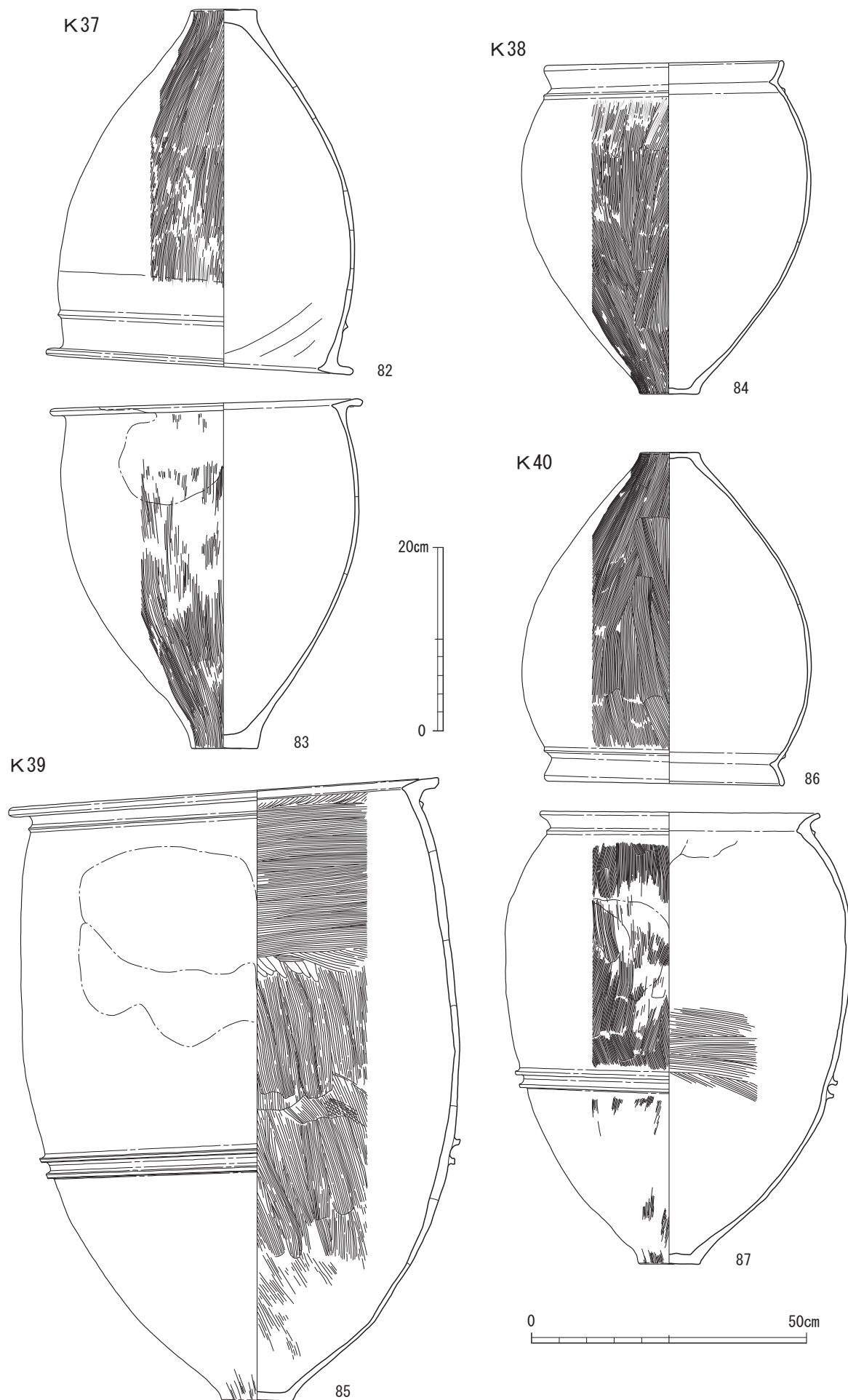
33 号甕棺墓 (第 22・24 図、図版 26・80)

調査区中央西側に位置する大型棺で、SX197 に切られ 34 号甕棺墓を切る。甕を使用した単棺で、墓坑上面は 1.4m × 0.95m の楕円形を呈し、深さは 1.3m である。西側壁面を横口状に掘り込み、甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸は N-65°-W で、傾斜角度は 19° である。

75 は下甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は逆 L 字状でやや内傾する。口縁下に 1 条の小さい三角突帯を貼り付ける。胴部中位に断面台形の突帯を 2 条貼り付ける。底部側面にハケメが残る。

34 号甕棺墓 (第 22・24 図、図版 27・80)

調査区中央西側に位置し、35 号甕棺墓に寄生する小型棺で、33 号甕棺墓に切られる。墓坑の残存状況は悪い。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.8m の隅丸長方形を呈し、深さは 0.5m である。甕棺の主軸は N-72°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。



第27図 37号～40号甕棺実測図（82・83は1/6、84～87は1/10）

76は上甕である。口縁部は鋤先状で外側に垂れる。外面はハケメで、底部は上げ底である。77は下甕。口縁部はほぼ水平な鋤先状を呈し、外面はハケメである。

35号甕棺墓（第22・26図、図版27・28・33・80）

調査区中央西側に位置する大型棺である。34号甕棺墓・4号石蓋土坑墓に切られる。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、粘土目張りがある。墓坑は長軸2.25m（床面で0.95m）、短軸1.6m（床面で0.45m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.1mである。上甕側にテラスがあり、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-61°-Eで、傾斜角度は8°である。

78は上甕の鉢である。口縁部はT字状で内側の張り出しがやや強く、外傾する。口縁下に2条の三角突帯を貼り付け、底部側面にハケメが残る。口縁部上面の3ヵ所に黒斑が残る。79は下甕。胴部は砲弾状で、口縁部はやや内傾するT字状を呈し内側に張り出す。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。

36号甕棺墓（第25・26図、図版28・29・81）

調査区中央西側に位置する小型棺で、51号甕棺墓に切られる。壺と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.55m（床面で0.5m）、短軸0.9m（床面で0.2m）の楕円形を呈し、深さは1.15mである。上甕側にテラスがあり、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-5°-Eで、傾斜角度は17°である。

80は上甕の壺である。口縁部は鋤先状で頸部は外湾し、胴部上位が張る。底部はやや上げ底である。胴部上位に2条の三角突帯を貼り付ける。81は下甕。最大径が胴部上位にあり、口縁部は逆L字状で外に長く伸びる。外面はタテ方向のハケメである。

37号甕棺墓（第25・27図、図版29・81）

調査区南西端に位置する小型棺である。SX194に近接する。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.2m（床面で0.4m）、短軸0.75m（床面で0.25m）の不整な楕円形を呈し、深さは0.5mである。床面は上甕側から下甕側にかけて階段状のテラスが3段ある。主軸はN-62°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

82は上甕である。最大径が胴部上位にあり、口縁部は鋤先状で内側にやや突出する。口縁下に1条の三角突帯が貼り付く。胴部外面はタテ方向のハケメである。83は下甕。胴部は口縁部に向かって内湾し、口縁は鋤先状を呈し内傾する。外面はハケメである。

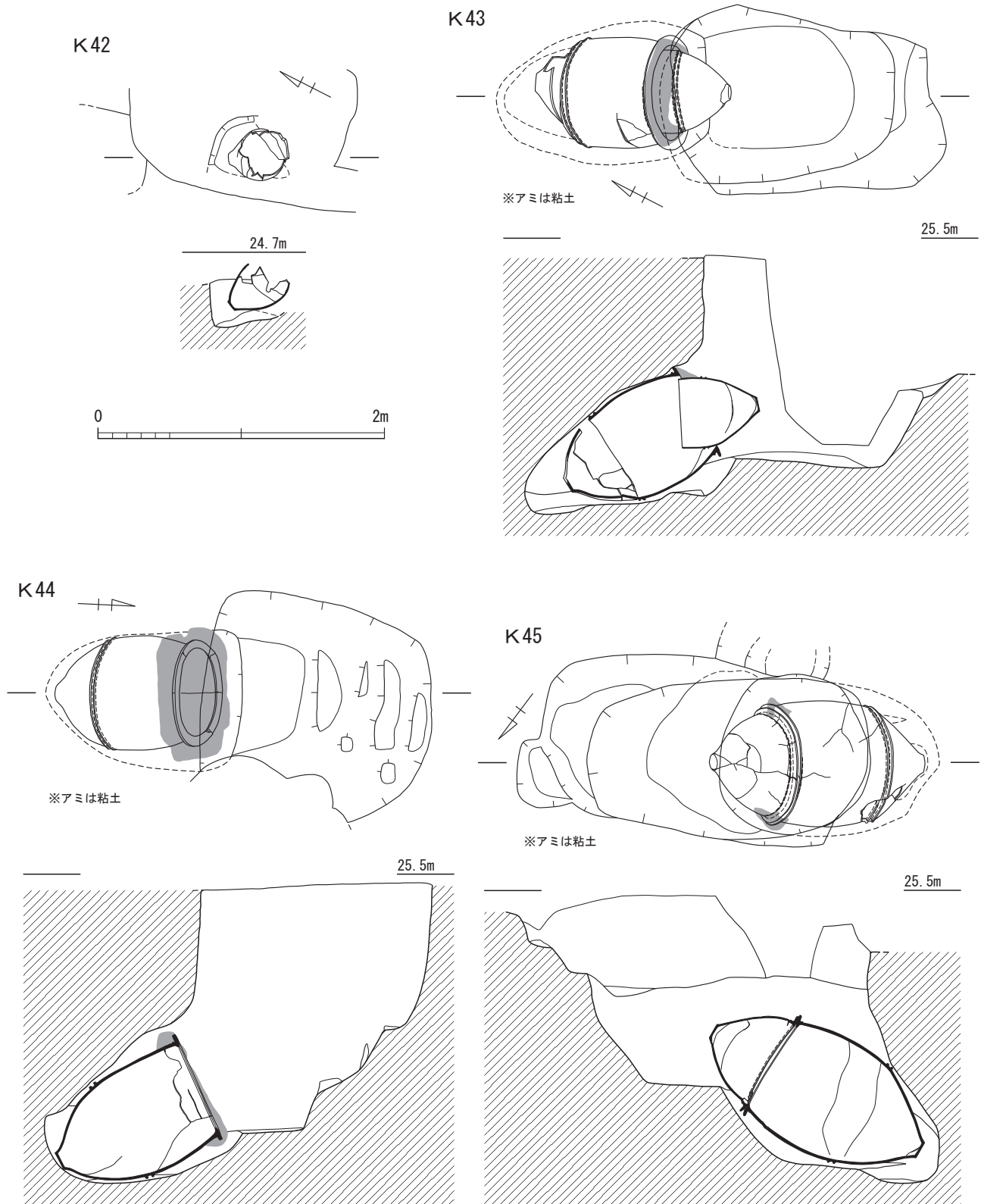
38号甕棺墓（第25・27図、図版30・81）

調査区中央西端に位置する大型棺で、1号石棺墓に切られる。甕を使用する単棺で、墓坑は長軸1.6m、短軸0.65mの不整楕円形を呈し、深さは0.9mである。北側にテラスがあり、床面中央はピット状に窪む。南側壁面を横口状に掘り込んでおり、甕の一部を壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-1°-Wで、傾斜角度は25°である。

84は下甕である。最大径が上位にある丸味を持った器形である。口縁部はくの字状で内湾する。屈曲部近くに1条の三角突帯を貼り付け、外面はハケメである。

39号甕棺墓（第25・27図、図版31・81）

調査区南西端に位置する大型棺で、SX186を切る。甕を使用した単棺で、口縁部に粘土目張りが



第28図 42号～45号甕棺墓実測図(1/40)

あることから、木蓋を伴う可能性がある。墓坑は1.6m×1.1mの楕円形を呈し、深さは1.7mである。南側壁面を横口状に掘り込み、甕の大半を挿入する。甕棺の主軸はN-35°-Wで、傾斜角度は39°。

85は下甕である。胴部は砲弾形で、口縁部は内傾するくの字状となる。口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付け、胴部内面に横方向と縦方向のハケメを施す。胴部上位に大きく黒斑が残る。

40号甕棺墓（第25・27図、図版81）

調査区南西端に位置する大型棺で、41号甕棺墓・SX183を切る。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、合わせ目に粘土目張りがある。墓坑は長軸1.7m（床面で0.95m）、短軸1.25m（床面で0.7m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.9mである。上甕側にテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半を挿入する。甕棺の主軸はN-10°-Wで、傾斜角度は37°である。甕棺のほか、筒形器台の破片が出土した。

86は上甕である。最大径が胴部上位にあり、丸味をもった器形。口縁部はくの字状で、内湾する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、外面はハケメである。87は下甕。胴部上位から口縁部に向かって内湾する。口縁部はくの字状で内傾し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面ハケメである。

出土遺物（第47図）

弥生土器（105～107）いずれも筒形器台で同一個体と考えられる。105は透かしと透かしの間のほぼ直立する部分、106は透かしから下位の裾部片、107は脚裾部である。いずれも外面は丹塗りで、外面がタテ方向のミガキ、内面はナデ、裾端部はヨコナデである。

41号甕棺墓（第25・29図、図版31・81）

調査区南西端に位置する大型棺で、40号甕棺墓に切られSX183・SX188を切る。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.95m以上（床面で1.15m以上）、短軸1.2m（床面で0.6m）の楕円形を呈し、深さは0.9mである。上甕側に2段のテラスがある。甕棺の主軸はN-66°-Eで、傾斜角度は20°である。

88は上甕の鉢である。口縁部はT字状を呈し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。外面の底部側面にハケメが残る。口縁部上面の3か所に小さい黒斑が認められる。89は下甕。胴部は砲弾形を呈す。口縁部は水平なT字状で、内側に大きく張り出す。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付け、突帯から概ね直立して立ち上がる。

42号甕棺墓（第28・29図、図版82）

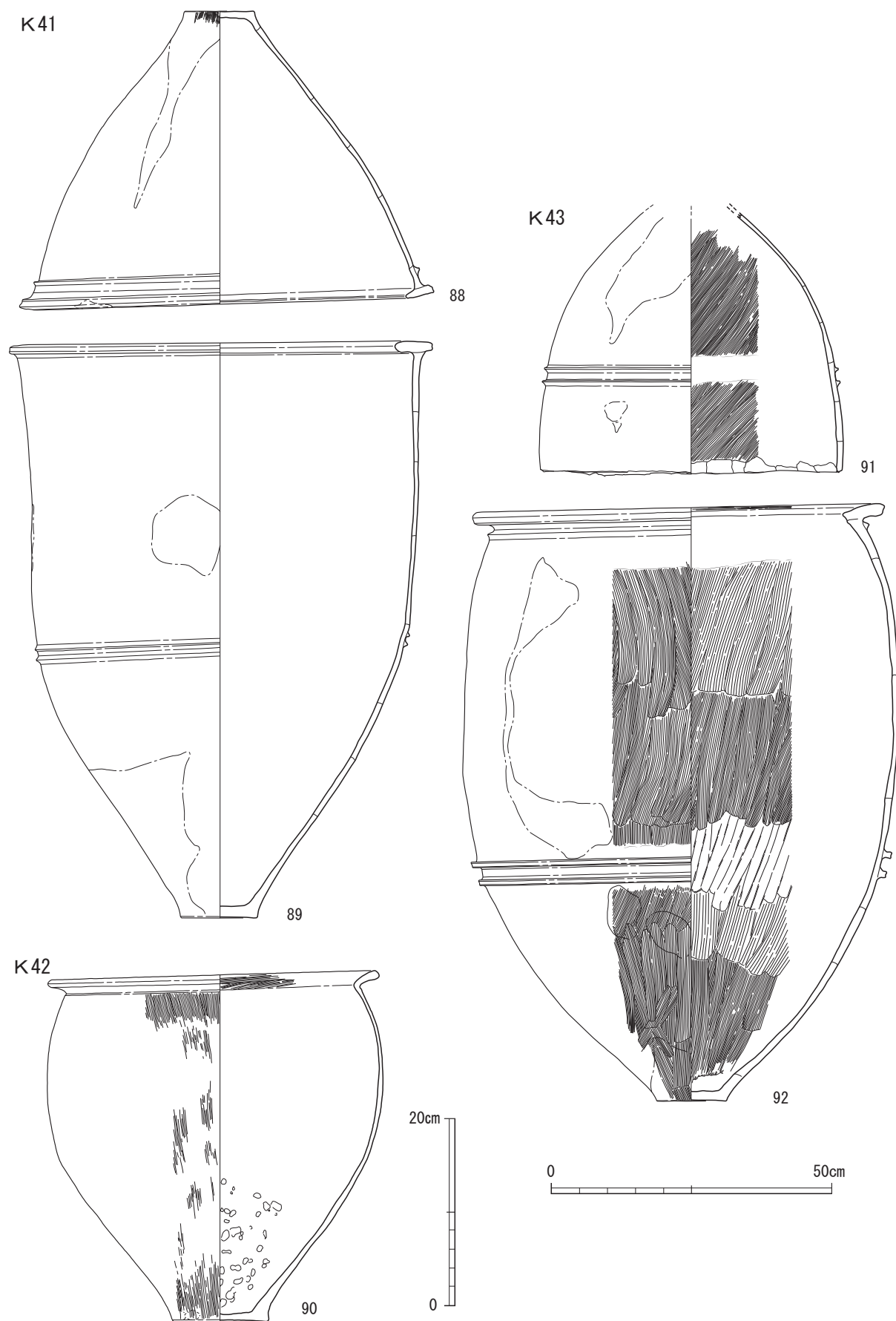
調査区南西端に位置する小型棺で、43号甕棺墓を切る。遺存状況が悪く規模・形状等は不明な点が多いが、甕を使用した単棺の可能性が高い。墓坑の深さは0.35mで、甕棺の主軸はN-27°-Wで、傾斜角度は34°である。

90は下甕である。口縁部よりも胴部が外側に若干張り出す。口縁部はくの字状で、口縁部と胴部にハケメを施す。

43号甕棺（第28・29図、図版32・81）

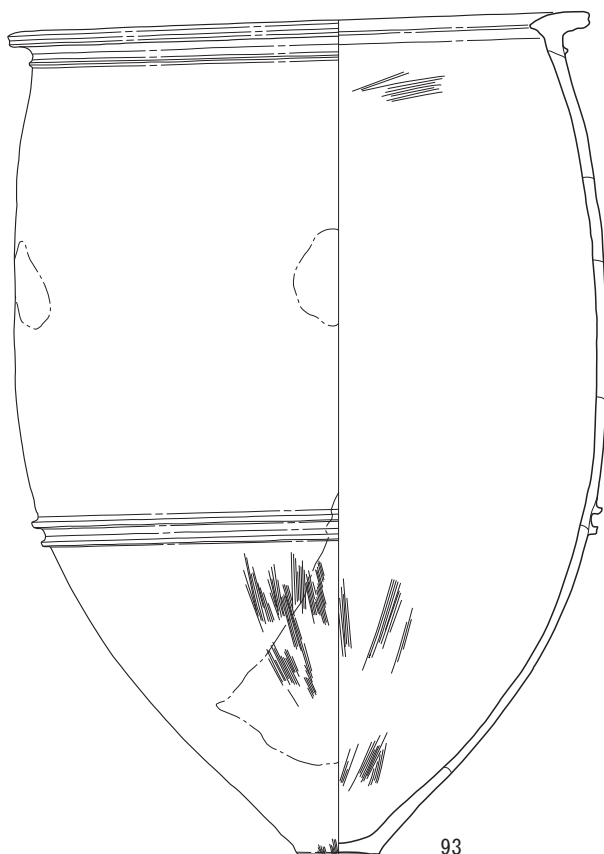
調査区南西端に位置する大型棺で、42号甕棺墓に切られる。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、合わせ目に粘土目張りがある。墓坑上面は長軸1.8m（床面で1.2m）、短軸1.3m（床面で0.75m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.8mである。上甕側に広いテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込み、下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-28°-Wで、傾斜角度は33°である。

91は上甕である。胴部中位で打ち欠き、底部は欠失する。胴部に2条の三角突帯を貼り付け、内面はハケメである。92は下甕で胴部から口縁部に向けて丸みを帯びた器形である。口縁部はく



第29図 41号～43号甕棺実測図（90は1/6、他は1/10）

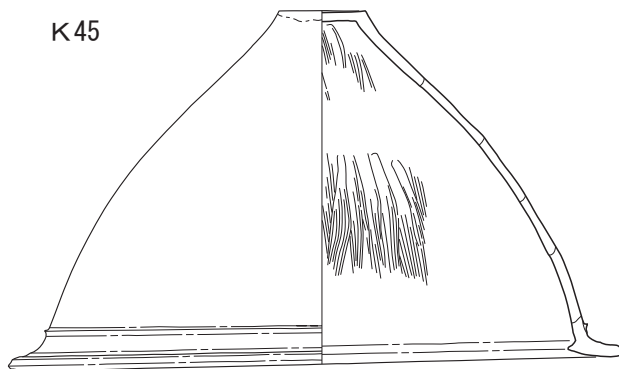
K44



93

0 50cm

K45



94



95

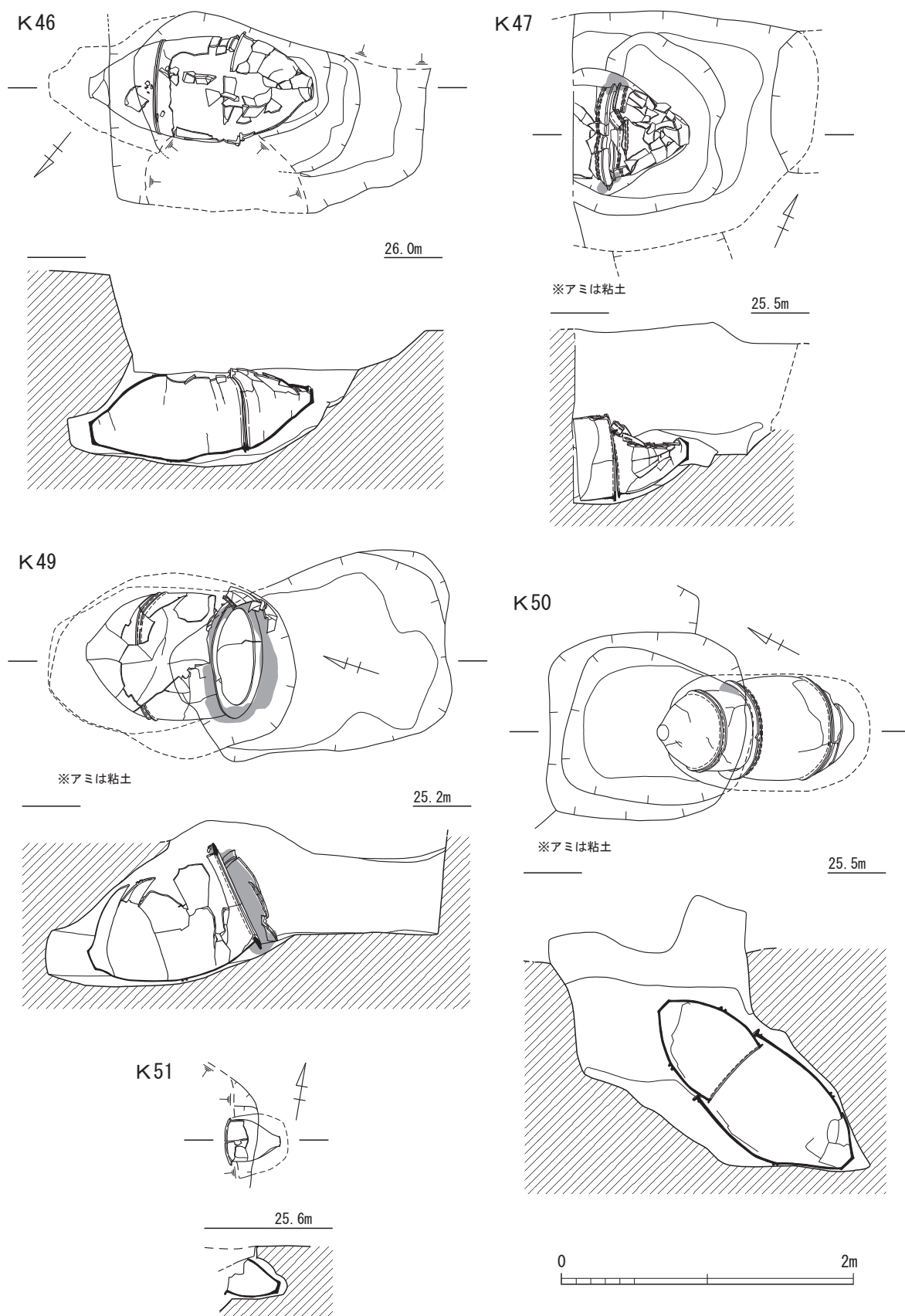
第30図 44号・45号甕棺実測図(1/10)

の字状で内傾し、端部が肥厚する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面ともハケメで、内面の一部は工具ナデである。

44号甕棺墓(第28・30図、図版32・82)

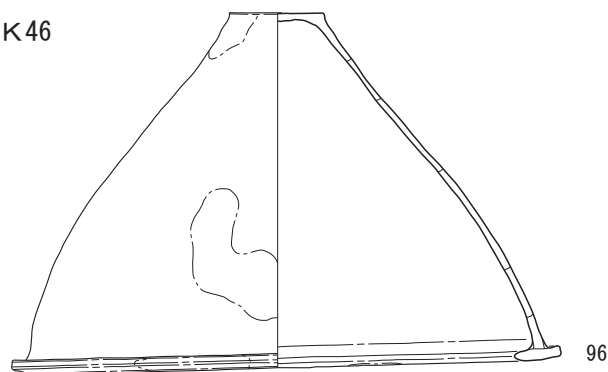
調査区南西端に位置する大型棺で、7号石蓋土坑墓に切られる。甕を使用した単棺で、口縁部付近に粘土目張りがあることから木蓋を伴う可能性が高い。墓坑上面は長軸1.6m(床面で0.6m)、短軸1.5m(床面で0.55m)の隅丸方形を呈し、深さは2.1mである。北側に複数の小さなテラスがあり、南側壁面を横口状に掘り込んで、甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-3°-Wで、傾斜角度は26°である。

93は下甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は鋤先状でやや内傾する。口縁下に1条の三角突

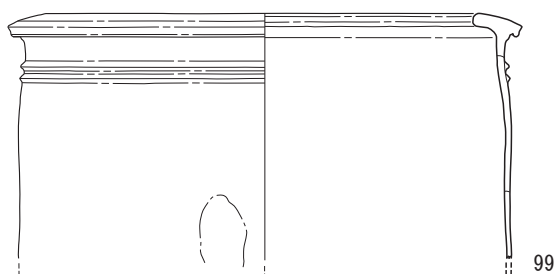
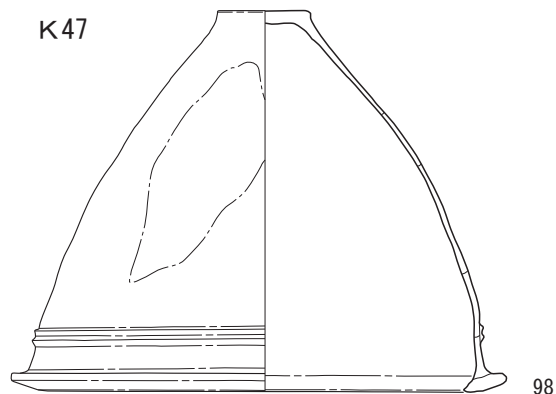


第31図 46号・47号・49号～51号甕棺墓実測図 (1/40)

K46



K47



0 50cm

97

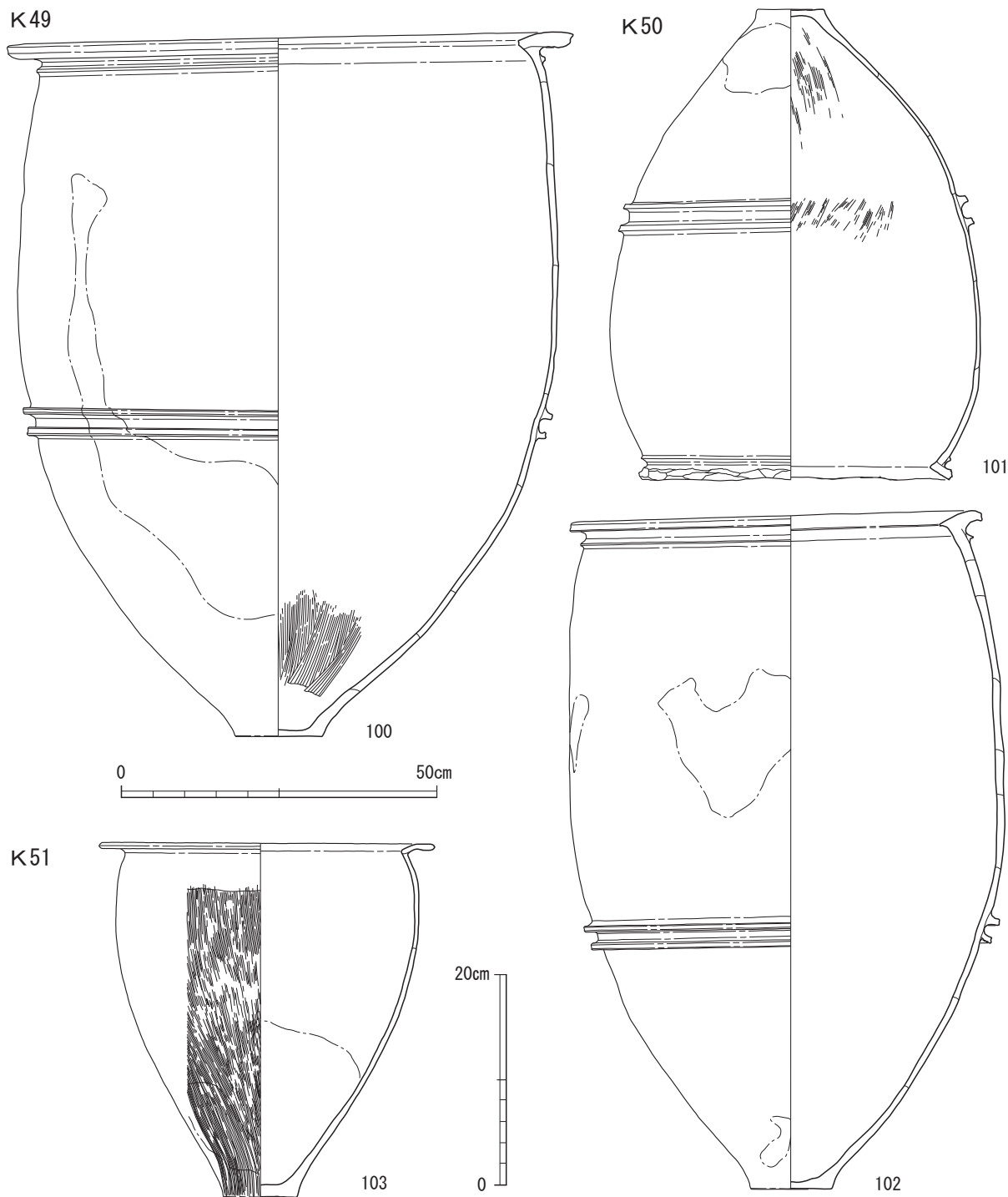
第 32 図 46 号・47 号甕棺実測図 (1/10)

帯を貼り付ける。胴部下位に断面台形の突帯を 2 条貼り付け、内外面にハケメが残る。

45 号甕棺墓 (第 28・30 図、図版 33・82)

調査区南西端に位置する大型棺で、46 号甕棺墓・SX198 を切る。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。合わせ目に粘土目張りがある。墓坑は長軸 2.45m (床面で 1.5m)、短軸 1.25m (床面で 0.9m) の隅丸長方形を呈し、深さは 2.0m である。上甕側にテラスがあり、南側壁面を横口状に掘り込み、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸は N-53°-W で、傾斜角度は 30° である。

94 は上甕の鉢である。口縁部は鋤先状で、口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。内面はハケメである。95 は下甕である。上位がやや内湾して丸みを持つ器形で、口縁部はくの字状でやや内傾する。口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付け、胴部下位に断面台形の突帯を 2 条貼り付ける。内外面にハケメを施す。



第33図 49号～51号甕棺実測図（103は1/6、他は1/10）

46号甕棺墓（第31・32図、図版34・82）

調査区南西端に位置する。45号甕棺墓に切られる。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.2m（床面で1.15m）、短軸1.35m（0.55m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.3mである。南側に階段状のテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込んで下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-51°-Eで、傾斜角度は9°である。

96は上甕の鉢である。口縁部はT字状で、口縁上面の3ヶ所に小さい黒斑が認められる。97は下甕で、胴部は砲弾形となり口縁部に向けて外側にやや広がる。口縁部はT字状で外傾し、胴部中に2条の三角突帯を貼り付け、内面にハケメがわずかに認められる。

47号甕棺墓（第31・32図、図版34・82）

調査区南西端に位置する大型棺で、38号甕棺墓に切られるため、遺存状況は悪い。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.6m以上、短軸1.5mの楕円形を呈し、深さは1.25mである。東側にテラスがあり、階段状に底面に至る。甕棺の主軸はN-67°-Eで、傾斜角度は5°である。

98は上甕の鉢である。口縁部はT字状で外傾し、口縁下にM字突帯を貼り付ける。胴部に大きく黒斑が残る。99は下甕。胴部中位から下は欠損するが、器形は砲弾形になると思われる。口縁部はT字状で内側に大きく張り出し、外傾する。口縁下に2条の三角突帯を貼り付ける。

49号甕棺墓（第31・33図、図版35・82）

調査区南西端に位置する大型棺で、1号石棺墓に切られSX182を切る。接口式の合口甕棺と考えられるが、上甕の遺存状況が悪く、詳細不明である。合わせ目に粘土目張りが残る。墓坑上面は長軸1.9m（床面で0.5m）、短軸1.35m（床面で0.9m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.15mである。上甕側に広いテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-17°-Wで、傾斜角度は24°である。

100は下甕である。胴部中位から上位にかけてゆるやかに内湾し、底部がすぼまる器形である。口縁部は逆L字状でやや内傾し、口縁下に断面台形の突帯を1条、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内面下位にハケメが残り、外面に大きく黒斑が残る。

50号甕棺墓（第31・33図、図版36・82）

調査区南西端に位置する大型棺で、2号石棺墓に切られる。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、合わせ目に粘土目張りが残る。墓坑上面は長軸1.35m（床面で1.0m）、短軸1.3m（床面で0.55m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.9mである。上甕側がテラス状となり、南側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-28°-Wで、傾斜角度は41°である。

101は上甕である。胴部に丸味をもつ。口縁部は内側が低いくの字状で端部を打ち欠いている。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内面にハケメがわずかに残る。102は下甕。やや胴長の砲弾状を呈する器形で、口縁部は内傾するくの字状となる。口縁下に1条の三角突帯、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。

51号甕棺墓（第31・33図、図版82）

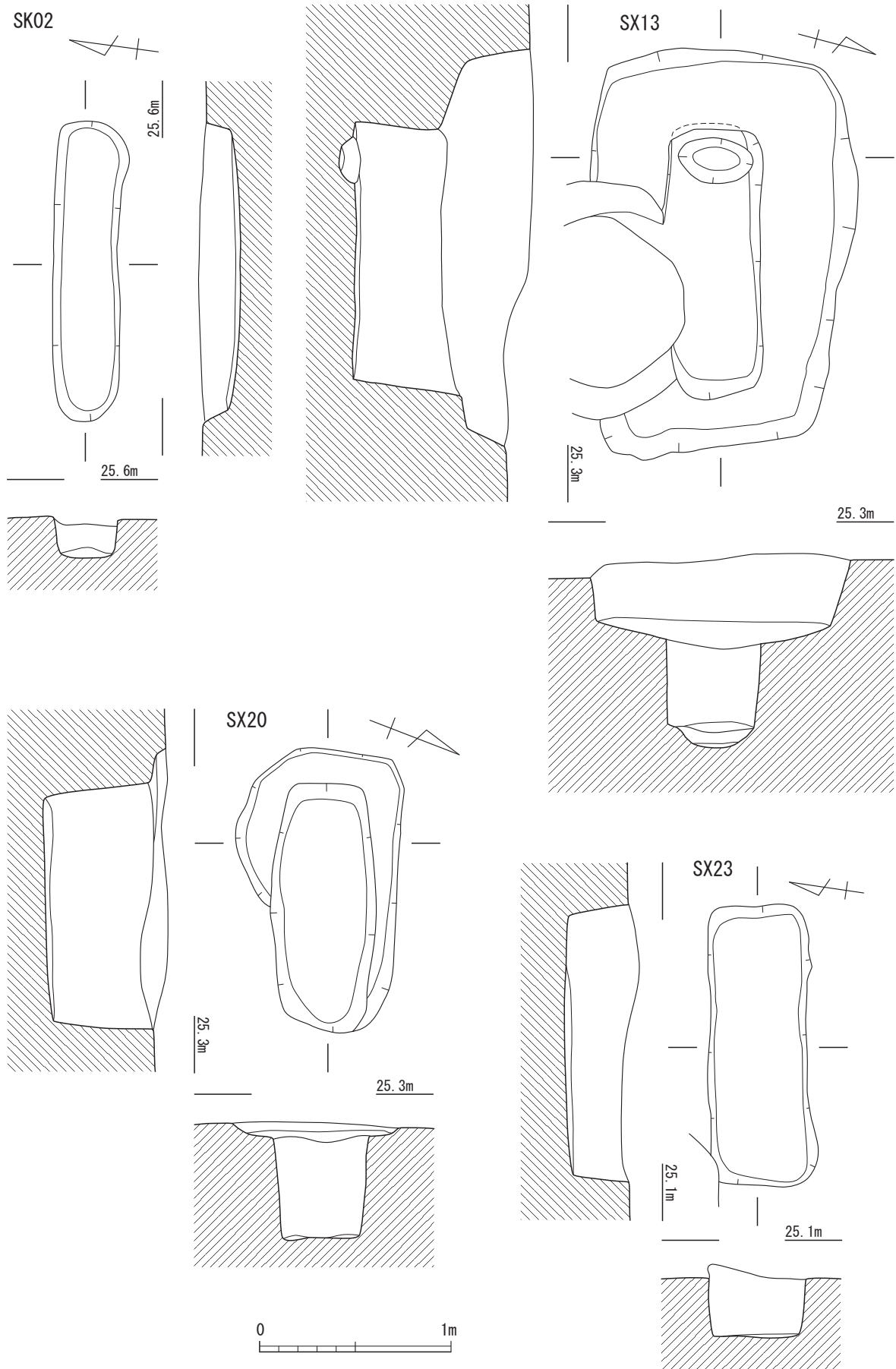
調査区南西部に位置する小型棺で、36号甕棺墓を切る。遺存状況が悪く詳細不明であるが、東側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-81°-Eで、傾斜角度は15°である。

103は下甕である。最大径が胴部上位にあり、口縁部は逆L字状で、外側に長く伸び下方に湾曲する。外面にハケメを施す。

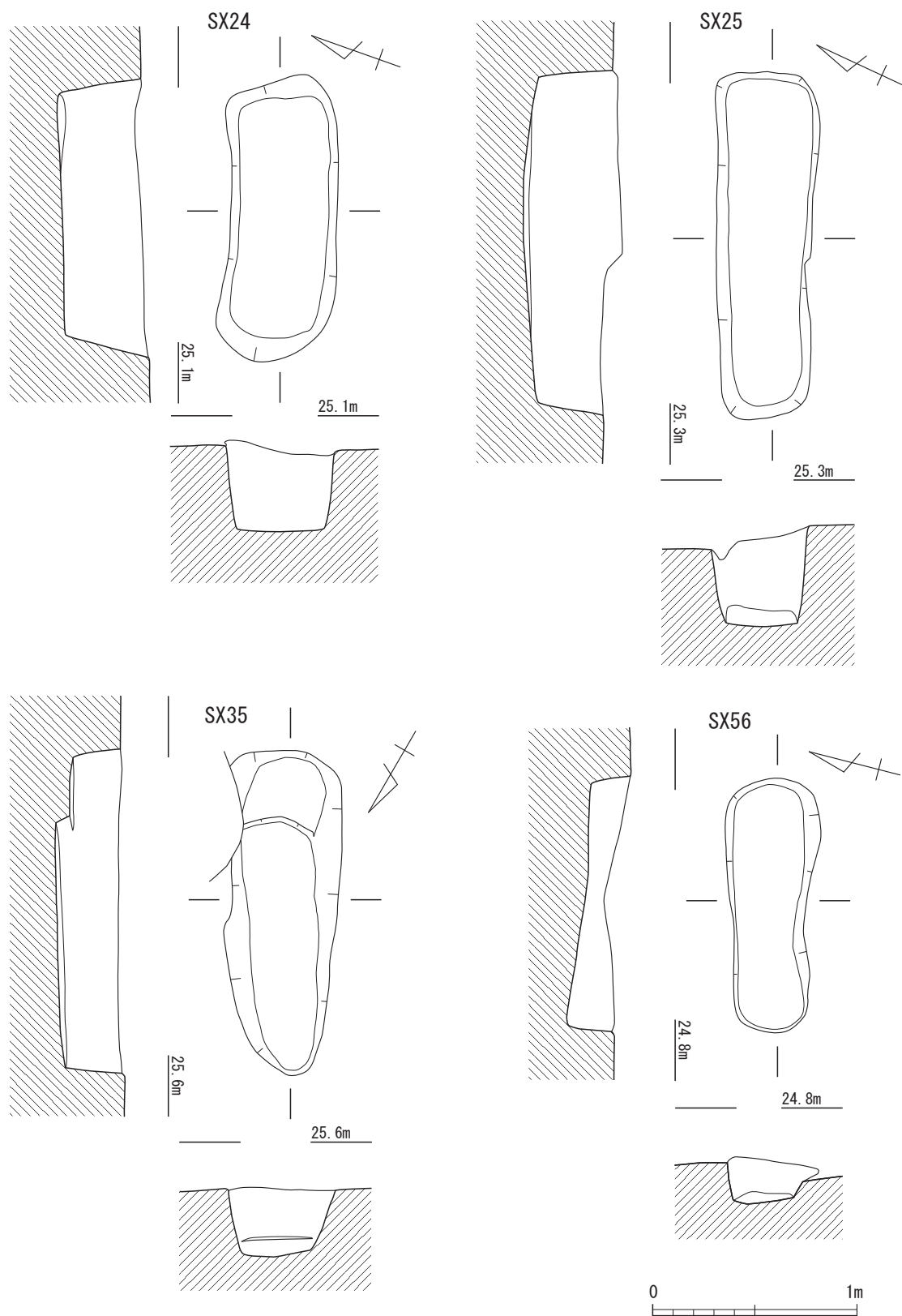
②土坑墓・木棺墓

SK02（第34図）

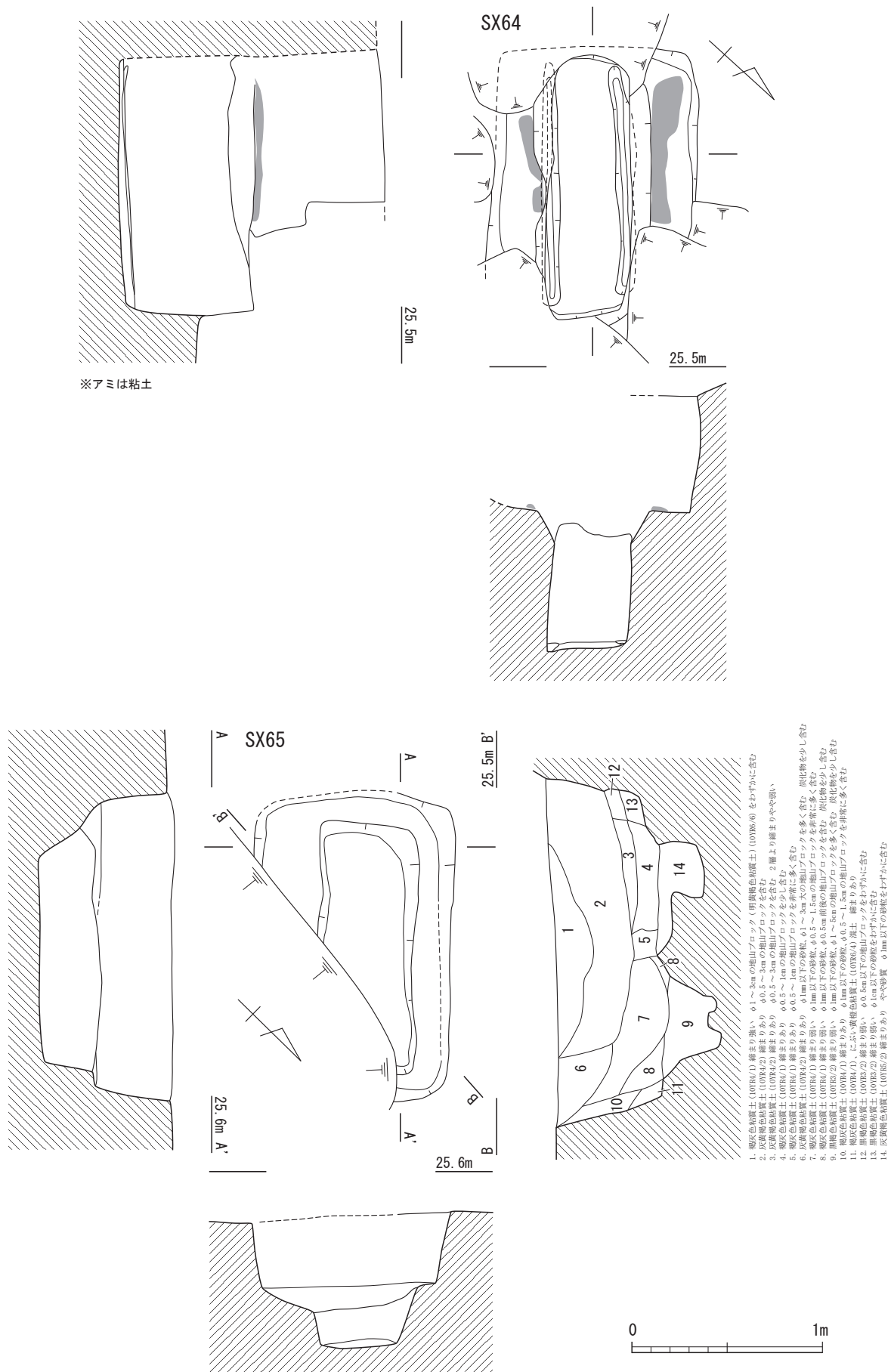
調査区南端部に位置する。平面は隅丸長方形で、長軸1.6m（床面で1.5m）、短軸0.35m（床面で0.3m）、深さ0.2mである。出土遺物はない。



第34図 SK02・SX13・20・23実測図(1/30)



第 35 図 SX24・25・35・56 実測図 (1/30)



第 36 図 SX64・65 実測図 (1/30)

SX13（第34図）

調査区南東部に位置する。平面は長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 2.1m、短軸 1.4m、深さ 0.5m で、二段目は長軸 1.4m（床面で 1.3m）、短軸 0.5m（床面で 0.4m）、深さ 0.5m である。西側の小口部床面には長軸 0.4m、短軸 0.2m、深さ 0.1m のピットがあり、木棺小口板を固定する掘り込みの可能性がある。出土遺物はない。

SX20（第34図、図版37）

調査区南東部に位置する。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.5m、短軸 0.9m、深さ 0.1m で、二段目は長軸 1.3m（床面で 1.2m）、短軸 0.55m（床面で 0.4m）、深さ 0.5m である。木蓋を伴うものであろうか。出土遺物はない。

SX23（第34図、図版37）

調査区南東部に位置する。平面は長方形で、長軸 1.45m（床面で 1.4m）、短軸 0.5m（床面で 0.45m）、深さ 0.4m である。出土遺物はない。

SX24（第35図）

調査区南東部に位置する。平面は隅丸長方形で、長軸 1.3m（床面で 1.15m）、短軸 0.55m（床面で 0.45m）、深さ 0.4m である。出土遺物はない。

SX25（第35図）

調査区南東部に位置する。平面は長方形で、長軸 1.7m（床面で 1.6m）、短軸 0.5m（床面で 0.4m）、深さ 0.5m である。出土遺物はない。

SX35（第35図）

調査区中央部に位置し、SX34 に切られる。平面は長楕円形で、長軸 1.6m（床面で 1.2m）、短軸 0.6m（床面で 0.35m）、深さ 0.3m である。南側に 0.3m 四方のテラスがある。出土遺物はない。

SX56（第35図）

調査区南東端に位置し、SX55 に切られる。平面は長楕円形で、長軸 1.25m（床面で 1.2m）、短軸 0.45m（床面で 0.35m）、深さ 0.25m である。出土遺物はない。

SX64（第36図、図版38）

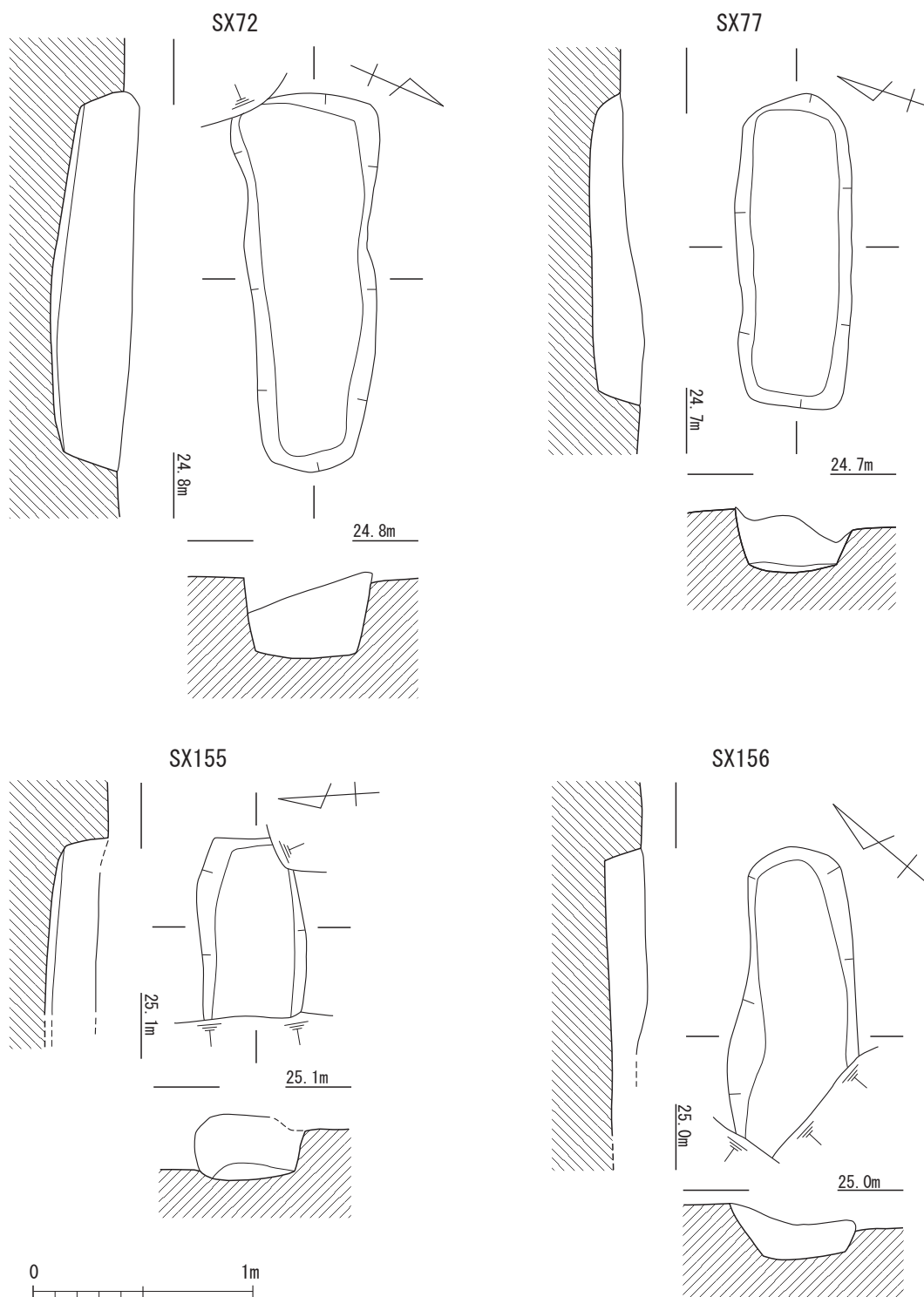
調査区南東部に位置し、SX65 を切る。平面は長方形で、二段掘りとなる。一段目の長軸は 1.5m 以上、短軸は 1.05m、深さ 0.65m で、二段目は長軸 1.35m（床面で 1.3m）、短軸 0.5m（床面で 0.3m）、深さ 0.7m である。テラス上の床面に粘土が分布することから、調査時の所見では木蓋土坑墓としている。また、側壁側の床面には幅・深さ 5cm の溝状の掘り込みがあることから、組合式の木棺の可能性もある。出土遺物はない。

SX65（第36図）

調査区中央部に位置し、SX37・64 に切られ、SX66 を切る。平面は長方形で、二段掘りとなる。一段目の長軸は 1.6m、短軸は 1.1m、深さ 0.4m で、二段目は長軸 1.3m（床面で 1.2m）、短軸 0.5m（床面で 0.4m）、深さ 0.3m である。調査時の所見では木蓋土坑墓としている。出土遺物はない。

SX66

調査区中央部に位置し、SX65 に切られる。一部のみの遺存であり、規模・形態等の詳細は不明



第 37 図 SX72・77・155・156 実測図 (1/30)

である。出土遺物はない。

SX72 (第 37 図)

調査区南東端に位置し、SX71 に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 1.75m (床面で 1.55m)、短軸 0.5 ~ 0.7m (床面で 0.3 ~ 0.5m)、深さ 0.35m である。出土遺物はない。

SX77 (第 37 図)

調査区南東端に位置する。平面は隅丸長方形で、長軸 1.4m (床面で 1.3m)、短軸 0.5m (床面で 0.4m)、

深さ 0.2m である。出土遺物はない。

SX155 (第 37 図、図版 38)

調査区中央部に位置し、1 号墳・SX126 に切られる。全形は不明であるが、平面は隅丸長方形もしくは長楕円形と考えられる。長軸 0.8m 以上、短軸 0.5m (床面で 0.35m)、深さ 0.3m である。

SX156 (第 37 図、図版 38)

調査区中央部に位置し、1 号墳・SX125・SX128 に切られる。全形は不明であるが、平面は隅丸長方形と考えられる。長軸 1.4m 以上、短軸 0.45m (床面で 0.3 ～ 0.4m)、深さ 0.2m である。東小口部の床面上よりガラス玉、勾玉が出土した。

出土遺物 (第 47 図、図版 83)

石製品 (108) 108 は小型の勾玉で灰緑色の石材を用いる。

ガラス製品 (109 ～ 111) 109 ～ 111 は青緑色のガラス小玉。いずれも同系色だが 109 は一回り小さい。

SX182 (第 38 図)

調査区南西部に位置し、49 号甕棺墓に切られる。平面は長楕円形で、長軸 1.75m (床面で 1.6m)、短軸 0.65m (床面で 0.4m)、深さ 0.3m である。西側が広く、東側が狭いことから、頭位は西側と想定される。出土遺物はない。

SX183 (第 38 図、図版 39)

調査区南端部に位置し、40・41 号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.6m、短軸 1.0m、深さ 0.35m、二段目は長軸 1.15m (床面で 1.15m)、短軸 0.45m (床面で 0.45m)、深さ 0.7m である。南側の床面には、長軸 0.5m、短軸 0.3m、深さ 0.1m のピット状の掘り込みがある。出土遺物はない。

SX185 (第 38 図、図版 39)

調査区南端部に位置し、48 号甕棺墓に切られ、SX186 を切る。平面は隅丸長方形で、長軸 1.9m (床面で 1.3m)、短軸 1.3m (床面で 0.3m)、深さ 1.35m である。長軸方向壁面沿いの床面付近には幅 0.15 ～ 0.3m のテラスがある。床面はわずかに U 字状を呈しており、刳抜形木棺の可能性もあるが、土層観察では確認できていない。出土遺物はない。

SX186 (第 39 図)

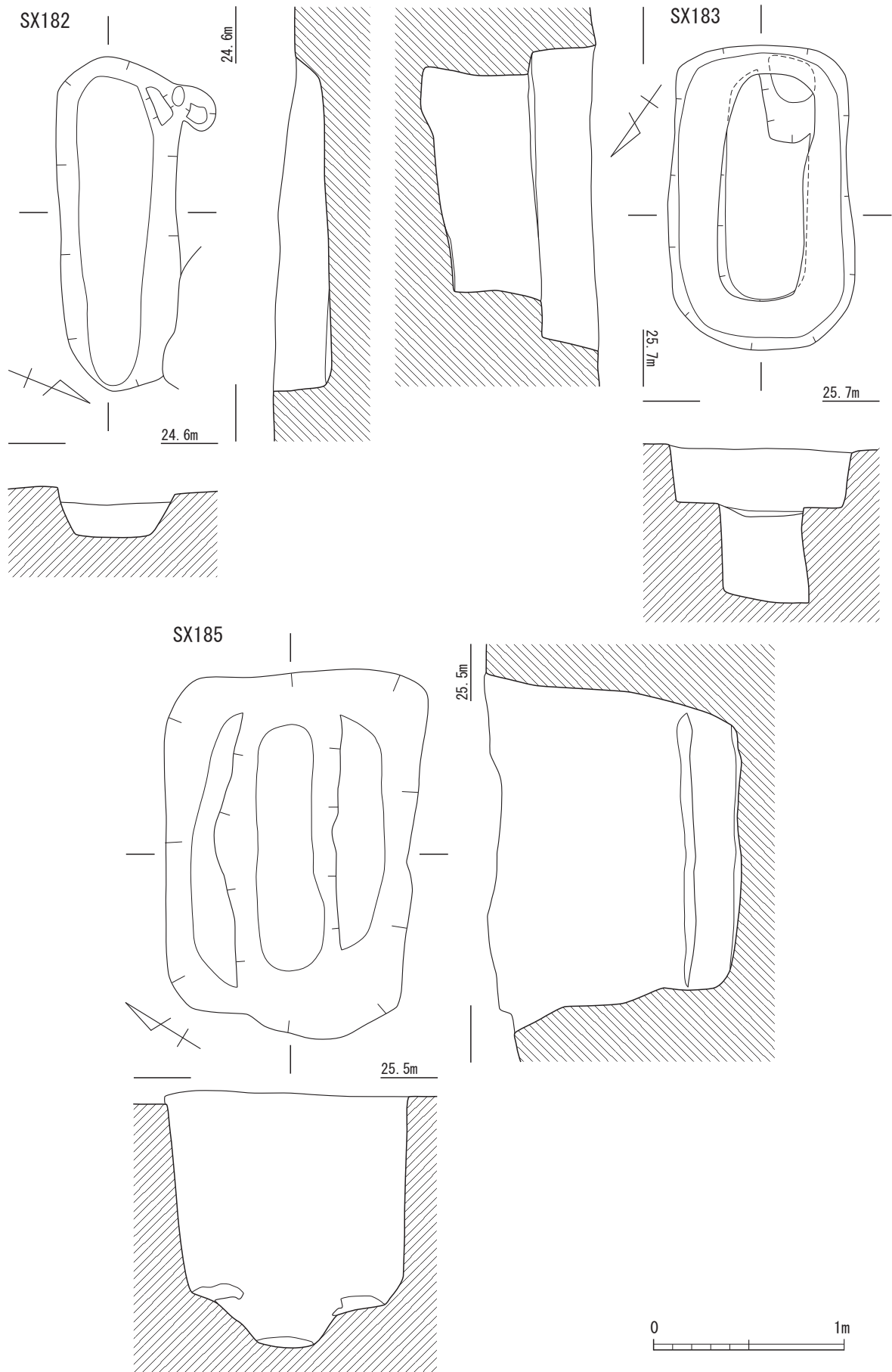
調査区南端部に位置し、SX185・39 号甕棺墓に切られる。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.4m、短軸 0.9m、深さ 0.65m、二段目は長軸 1.1m (床面で 1.0m)、短軸 0.5m (床面で 0.4m)、深さ 0.5m である。出土遺物はない。

SX187 (第 39 図)

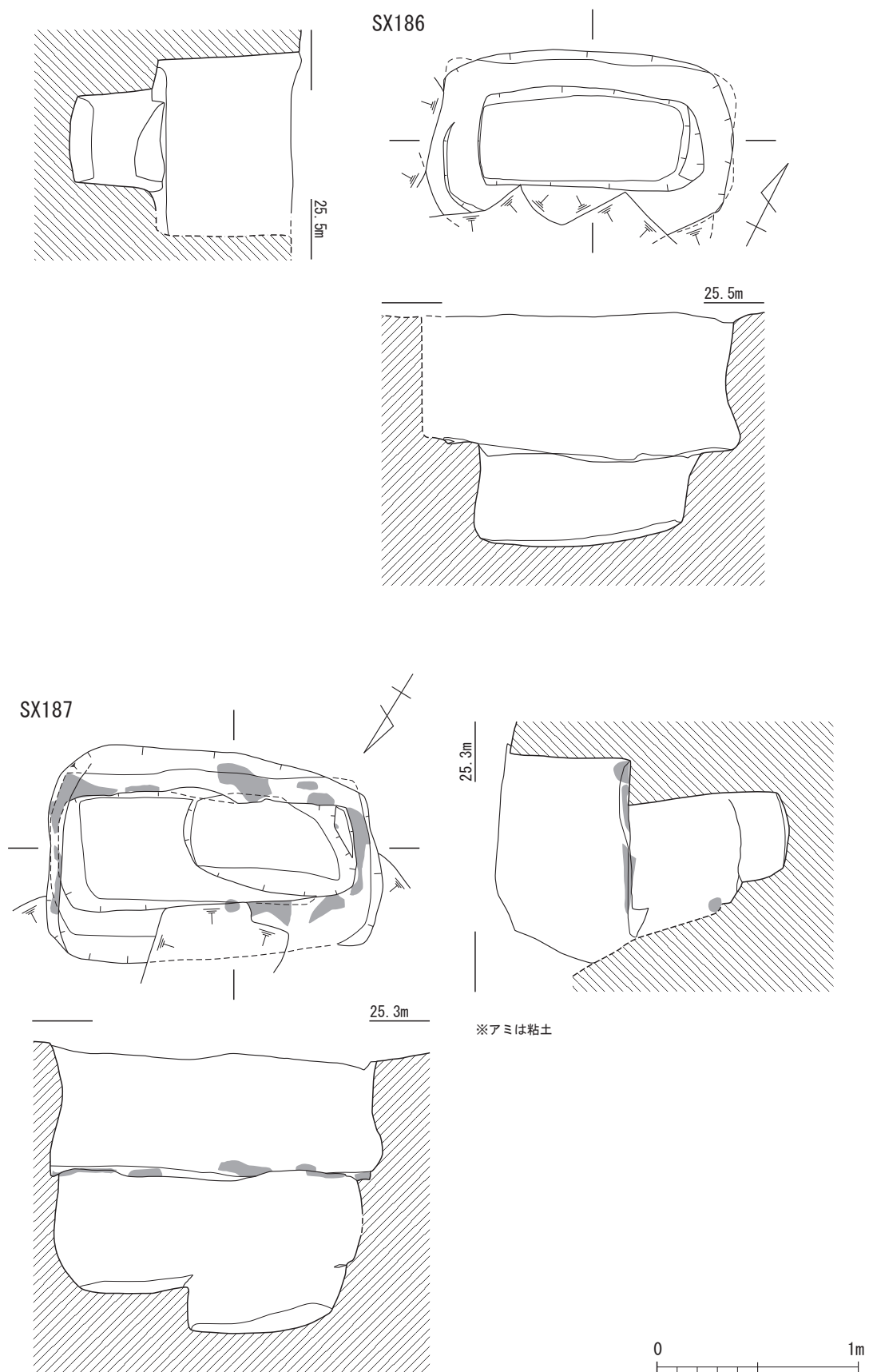
調査区南端部に位置し、SX200 に切られる。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.65m、短軸 1.05m、深さ 0.5m、二段目は長軸 1.4m (床面で 1.25m)、短軸 0.6m (床面で 0.5m)、深さ 0.55m である。床面には長軸 0.8m、短軸 0.5m、深さ 0.3m の楕円形の掘り込みがある。出土遺物はない。

SX188 (第 40 図、図版 40)

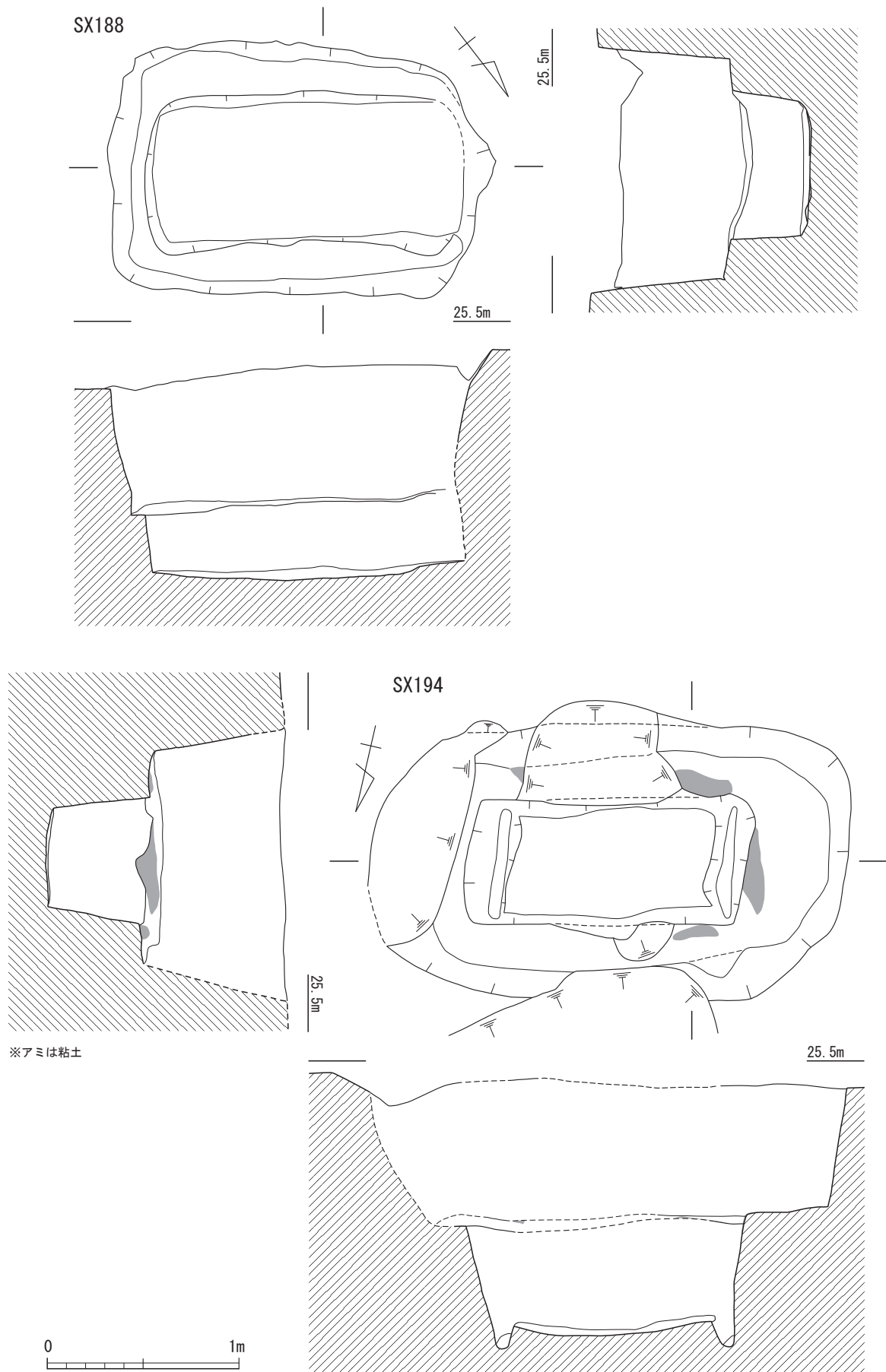
調査区南端部に位置し、41 号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は



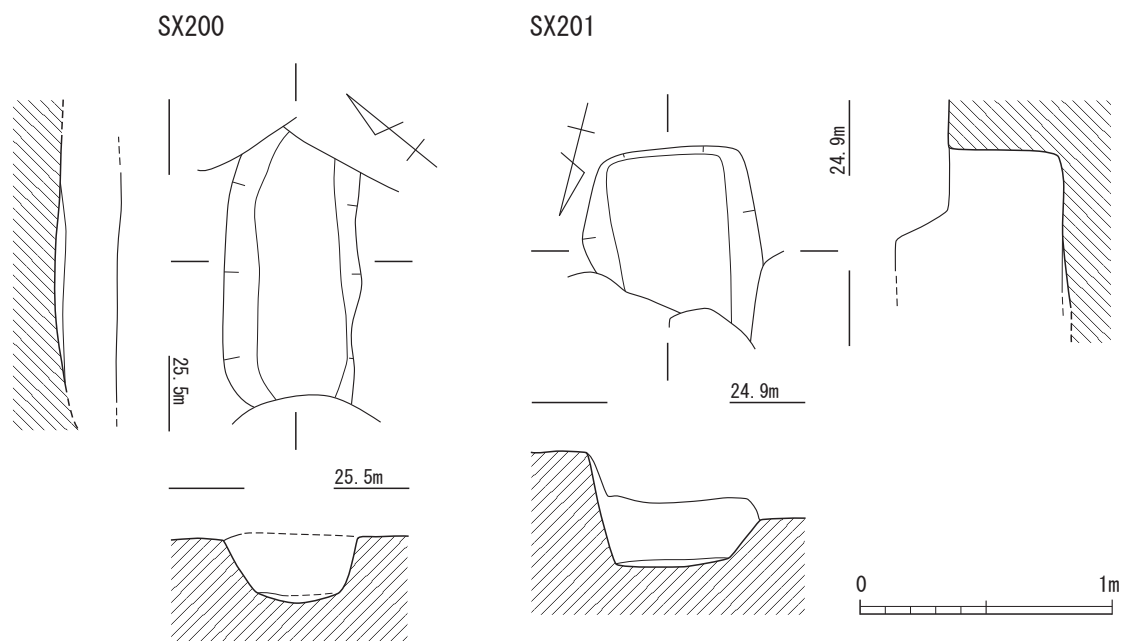
第 38 図 SX182・183・185 実測図 (1/30)



第 39 図 SX186・187 実測図 (1/30)



第40図 SX188・194実測図(1/30)



第41図 SX200・201 実測図 (1/30)

長軸 1.9m、短軸 1.3m、深さ 0.7m、二段目は長軸 1.6m (床面で 1.6m)、短軸 0.8m (床面で 0.75m)、深さ 0.4m である。埋土中から弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第47図、図版83)

弥生土器 (112・113) 112は壺の口縁部で、内外面ともに丹塗り。口縁端部はヨコナデ、他はミガキ。外面のミガキは暗文状で、タテ方向のミガキの後、上部にナナメ方向のミガキを施す。内面のミガキはヨコ方向。113は筒形器台の破片で透かしがある。外面は丹塗り。外面は縦方向のミガキ、内面はナデ。

SX194 (第40図、図版40)

調査区南端部に位置し、37号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 2.5m、短軸 1.4m、深さ 0.7m、二段目は長軸 1.5m (床面で 1.0m)、短軸 0.65m (床面で 0.5m)、深さ 0.5m である。両小口部の床面には幅 0.15m、深さ 0.1m の溝状の掘り込みがあり、木棺小口板を設置した痕跡と考えられることから、組合式木棺の可能性が高い。出土遺物はない。

SX200 (第41図)

調査区南端部に位置し、SX187を切り、SX195に切られる。平面長楕円形で、長軸 1.1m 以上、短軸 0.5m (床面で 0.3m)、深さ 0.25m である。出土遺物はない。

SX201 (第41図)

調査区中央部に位置し、SX152・153に切られる。平面隅丸長方形で、長軸 0.8m 以上、短軸 0.7m (床面で 0.5m)、深さ 0.65m である。出土遺物はない。

③石蓋土坑墓

1号石蓋土坑墓 (SX30) (第42図、図版41)

調査区中央部に位置し、SX63に切られる。平面は不整な隅丸長方形で、長軸 1.9m (床面で 1.7m)、

短軸 0.8m (床面で 0.4m)、深さ 0.3m である。墓坑上位の南側・東側にテラスがあり、テラス上に平面方形・多角形のやや扁平な石材を平置きして蓋とする。床面の東側は数cm程度高く、東側が頭位となろうか。出土遺物はない。

2号石蓋土坑墓 (SX29) (第42図、図版41)

調査区中央部に位置し、SX31 に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 2.0m (床面で 1.8m)、短軸 0.6～0.8m (床面で 0.4m)、深さ 0.35m である。墓坑上～中位にテラスがあり、テラス上に平面方形・多角形のやや扁平な石材を平置きして蓋とする。出土遺物はない。

3号石蓋土坑墓 (SX40) (第43図、図版41・42)

調査区中央部に位置し、SX41 に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 1.85m 以上 (床面で 1.5m)、短軸 0.65m (床面で 0.4m)、深さ 0.3m である。墓坑上面に平面長方形・楕円形のやや扁平な石材を平置きして蓋とする。蓋石の範囲と西側床面に朱の散布が認められる。出土遺物はない。

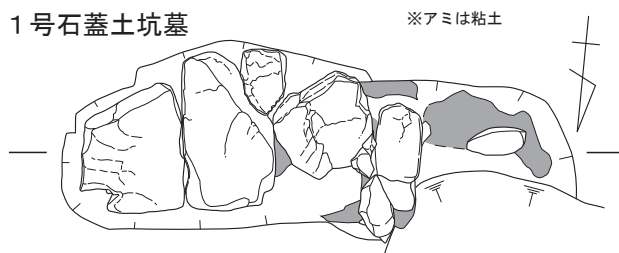
4号石蓋土坑墓 (第43図、図版43)

調査区南西部に位置し、5号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。上面で長軸 2.1m、短軸 1.1～1.2m、一段目の深さは 0.05m である。二段目は長軸 1.75m (床面で 1.7m)、短軸 0.45m (床面で 0.35m)、深さ 0.4m である。蓋石は、西側小口部のテラス上に扁平な石材が 1 石残るが、他は消失する。北東側のテラス上から、弥生土器壺が出土しており、棺外副葬と考えられる。なお、床面は、西側が狭く、東側が広いことから、頭位は東側と考えられる。

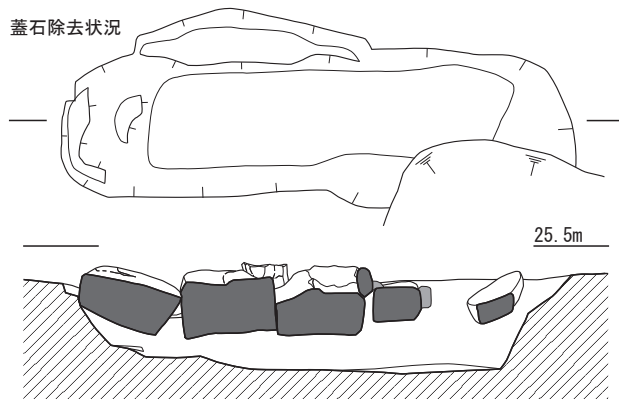
5号石蓋土坑墓 (第44図、図版43・44)

調査区南西部に位置し、SX197 に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 2.1m (床面で 2.0m)、短軸 0.55m (床面で 0.4m)、深さ 0.4m である。西側の床面にはピット状の掘り込みがあり、足元掘り込み式と考えられる。また、東側の床面は数cmほど高くなっており、朱の散布があることから東

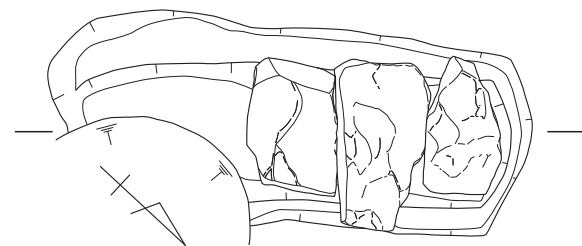
1号石蓋土坑墓



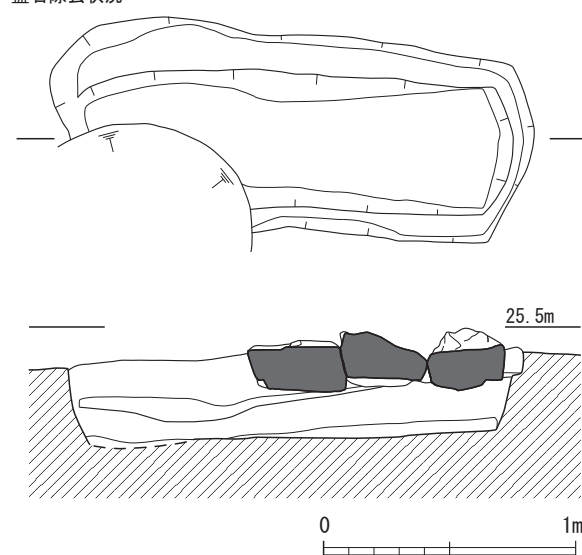
蓋石除去状況



2号石蓋土坑墓



蓋石除去状況



第42図 1・2号石蓋土坑墓実測図 (1/30)

側が頭位の可能性がある。
蓋石はほぼ完存し、平面長
方形・方形のやや扁平な石
材を5～6石配置する。出
土遺物はない。

6号石蓋土坑墓（第44図、
図版45）

調査区南西部に位置し、
2号石棺墓に切られる。平
面は隅丸長方形で、二段掘
りとなる。上面は長軸1.1m
以上、短軸0.7m以上、深
さ0.1mである。二段目は
長軸0.9m（床面で0.9m）、
短軸0.2～0.3m（床面で
0.15～0.25m）、深さ0.4m
である。床面は東側が狭く、
西側が広いことから、西側
が頭位の可能性がある。蓋
石は完存し、平面長方形・
方形の扁平な石材を3石配
置する。西側蓋石の北側で
土器が出土しており、棺外
副葬品と考えられる。また、
土器の西側で朱を確認し
た。

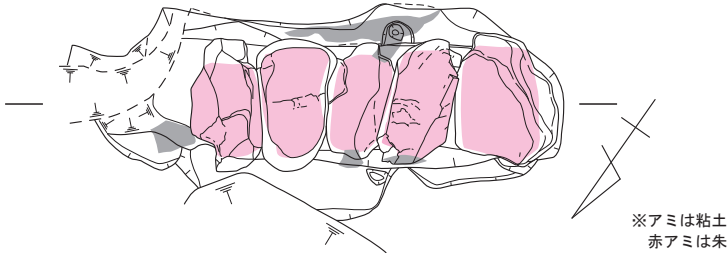
出土遺物（第47図）

弥生土器（114）壺で、口
縁部から胴部上位は欠損す
る。外面はハケメで、底部
は一部ヘラケズリ。内面は
ナデで、工具痕がある。

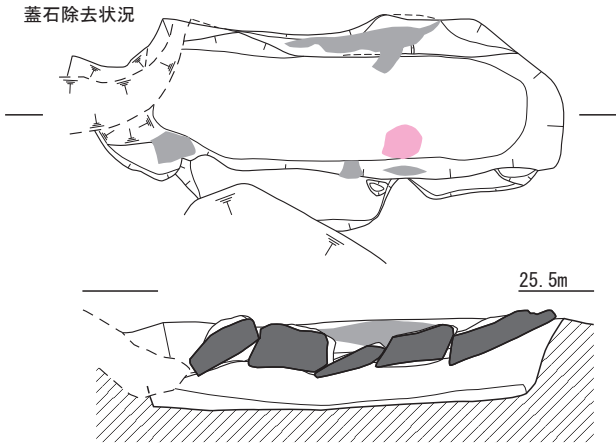
7号石蓋土坑墓（第45図、図版45・46）

調査区南西部に位置し、2号石棺墓に切られ、44・50号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。上面は長軸2.1m、短軸1.5m以上である。二段目は長軸1.6m（床面で1.45m）、短軸0.2～0.6m（床面で0.15～0.3m）、深さ0.3mである。床面は西側が狭く、東側が広く床面

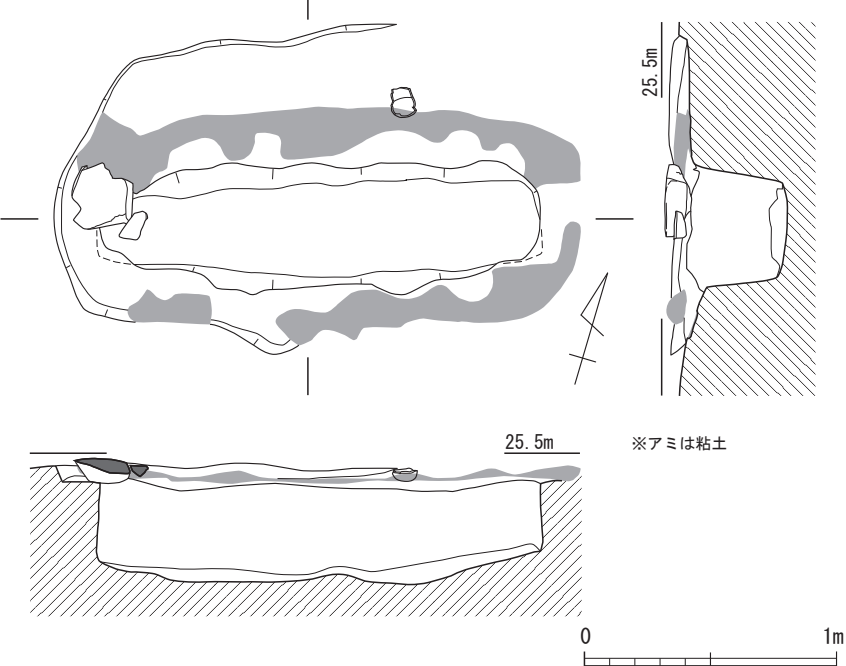
3号石蓋土坑墓



蓋石除去状況

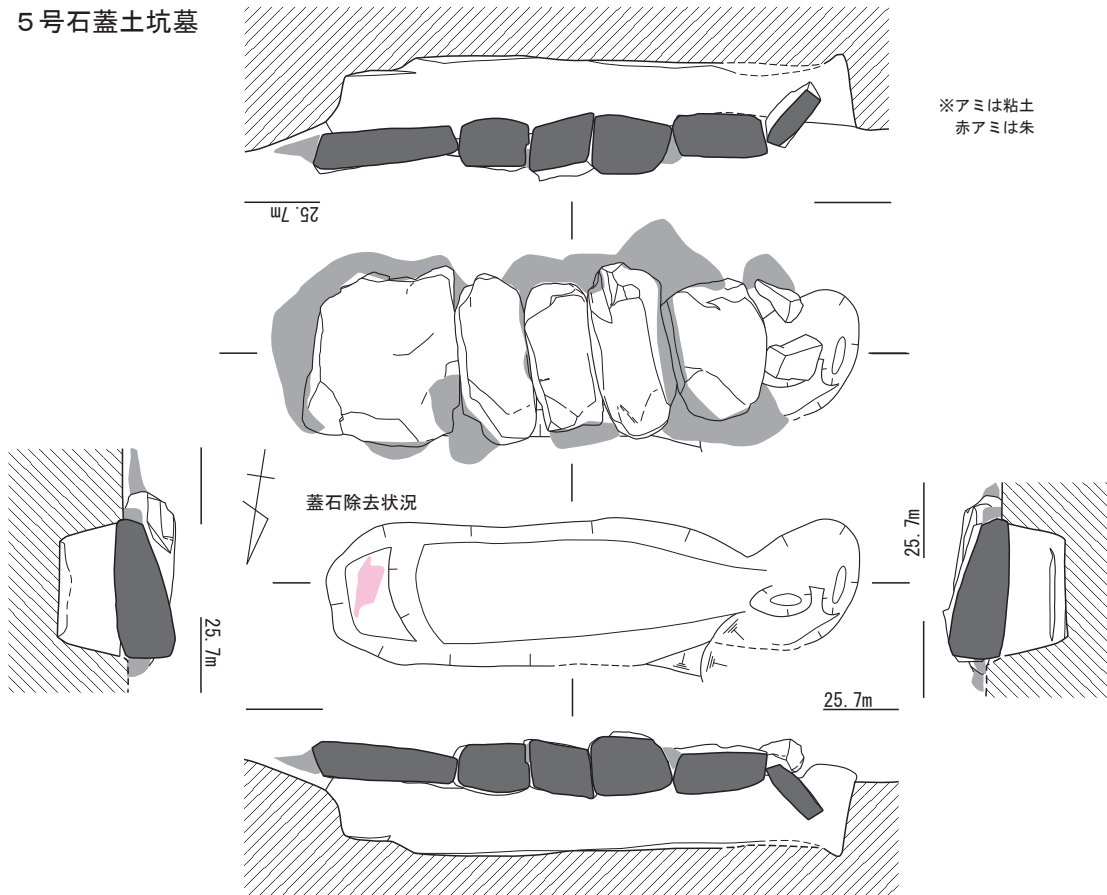


4号石蓋土坑墓

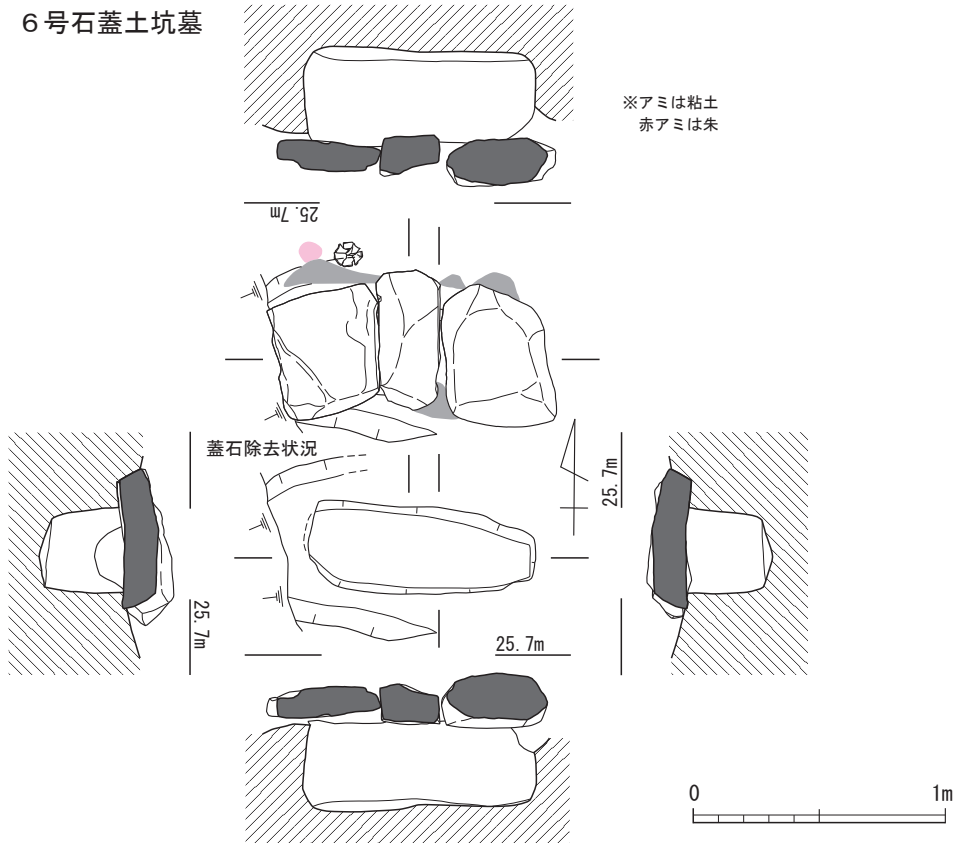


第43図 3・4号石蓋土坑墓実測図（1/30）

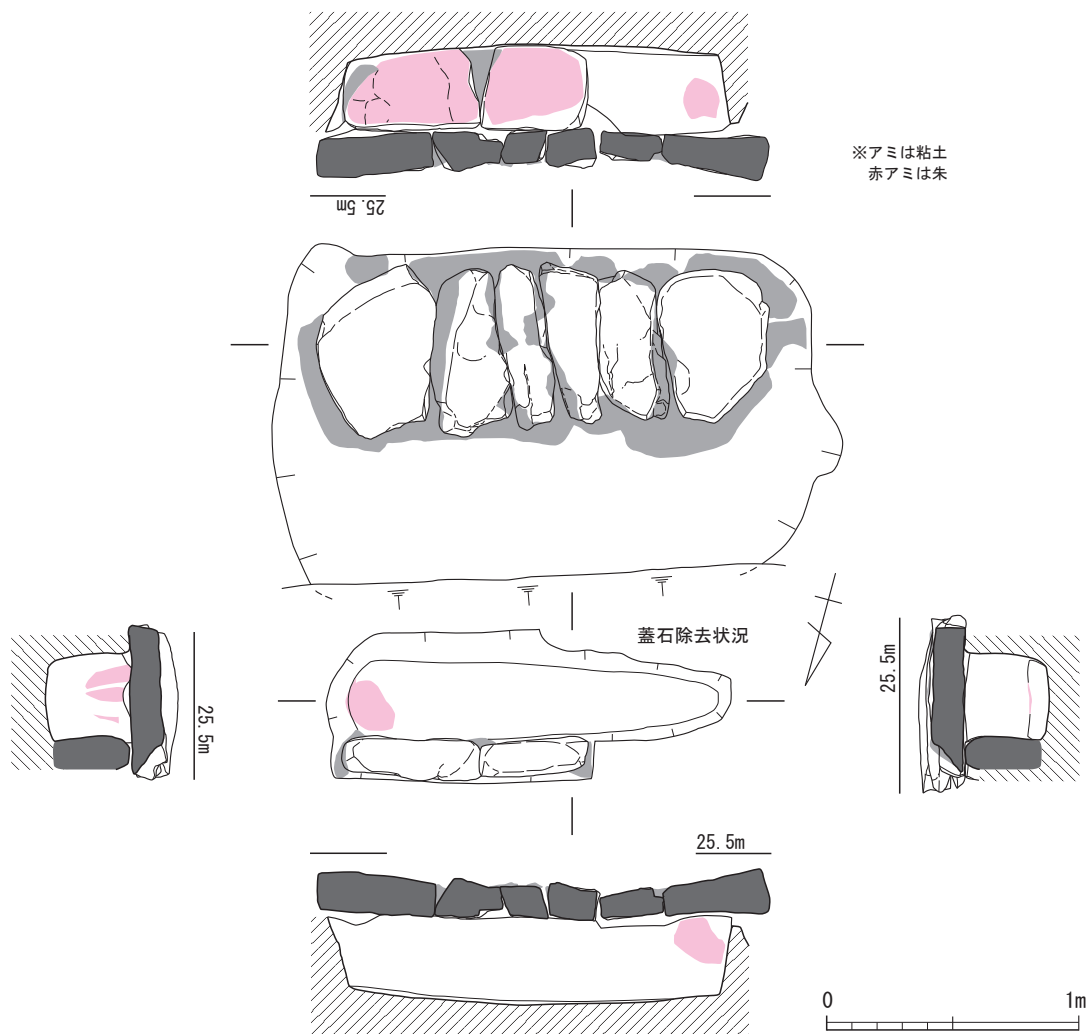
5号石蓋土坑墓



6号石蓋土坑墓



第44図 5・6号石蓋土坑墓実測図 (1/30)



第45図 7号石蓋土坑墓実測図 (1/30)

に朱の散布があることから東側が頭位の可能性がある。蓋石は完存し、平面長方形・方形の扁平な石材を6石配置する。また、北側の壁面の一部には、扁平な石材を2石立てて側壁とし、この上に蓋石がのる。出土遺物はないが、西側壁と東側小口部に朱が認められる。

④石棺墓

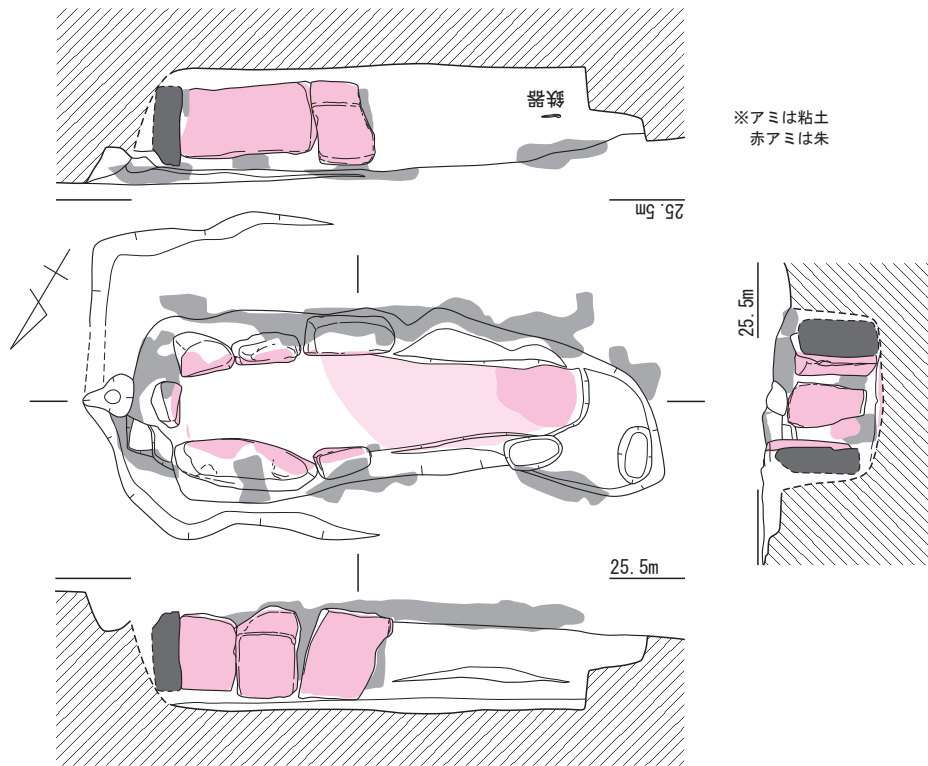
1号石棺墓 (第46図、図版47～49)

調査区南西部に位置し、38・47・49号甕棺墓を切る。掘方の平面は不整な長方形で、二段掘りとなり、長軸2.2m、短軸1.8mである。石棺掘方は、長軸1.6m、短軸0.65m、深さ0.35mで、壁面に接するようにやや扁平な方形・長方形石材を立てて設置する。西側の小口壁・側壁の一部を失うが、小口壁は1石、側壁は4～5石で構成するものと考えられる。石棺の床面は長軸1.55m、短軸0.3mで、西半分の床面と壁面の石材に朱が認められる。鉄器が出土した。

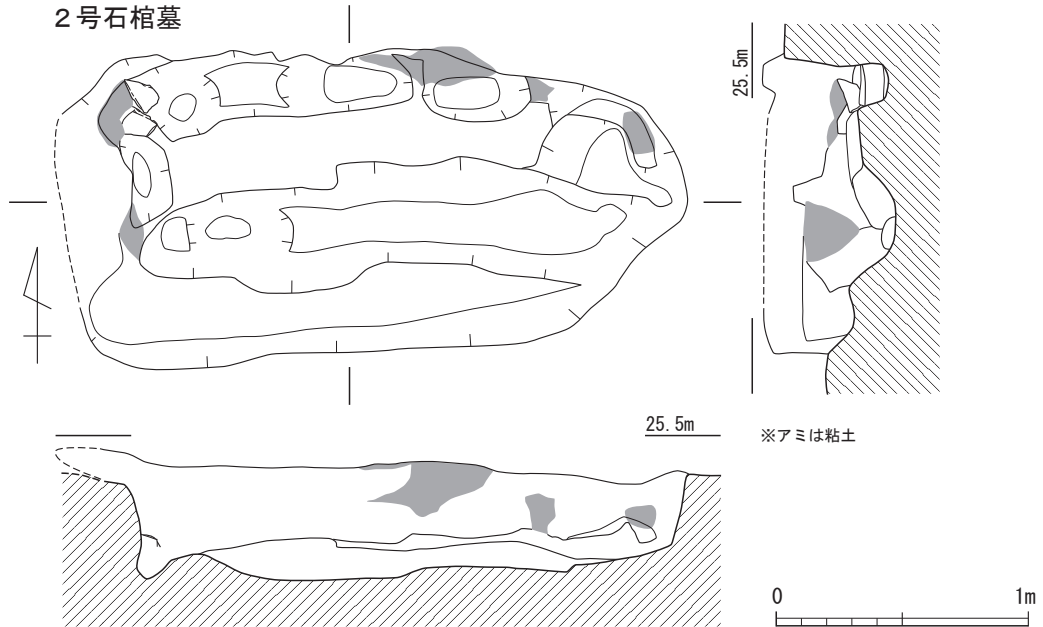
出土遺物 (第47図、図版83)

鉄製品 (115・116) 115は平根式の方頭鏃。鏃身には錆膨れのため判別しがたいが細長い透かしがある。116は穂摘鎌。直刃で両端を折り曲げる。

1号石棺墓

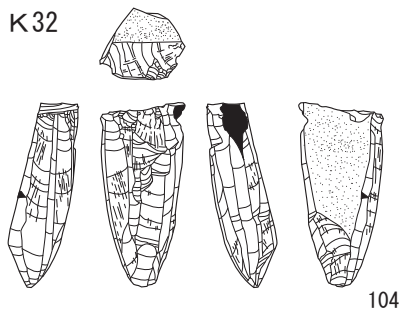


2号石棺墓

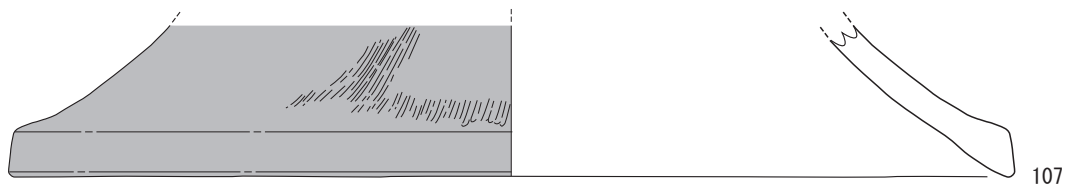
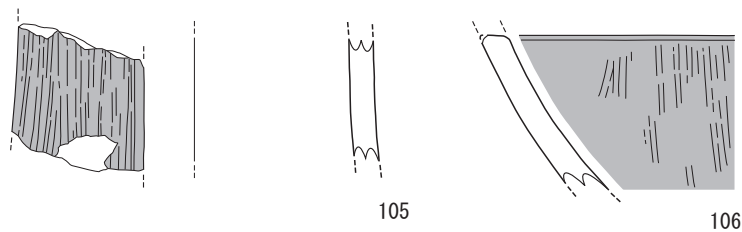


第46図 1・2号石棺墓実測図 (1/30)

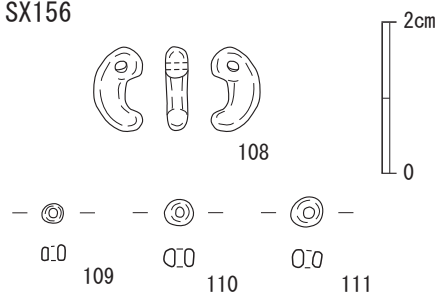
K32



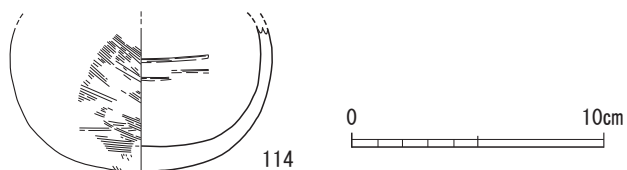
K40



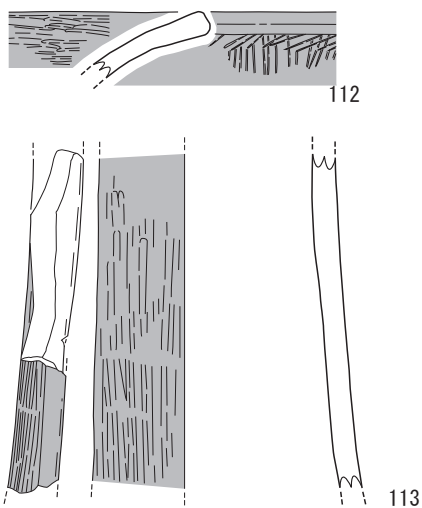
SX156



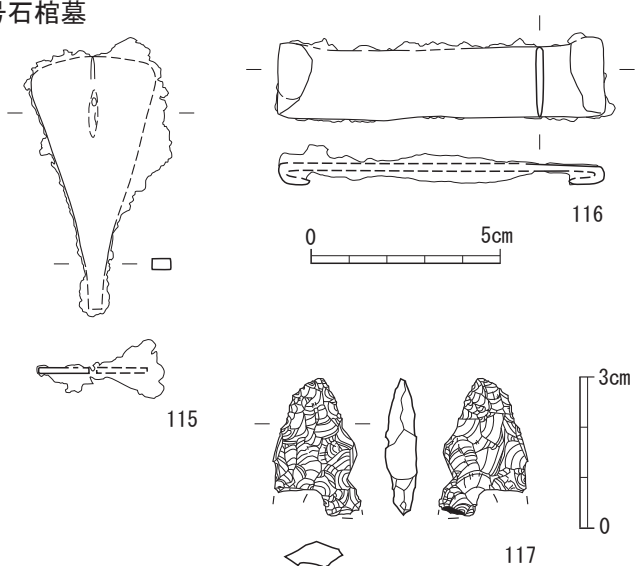
6号石蓋土坑墓



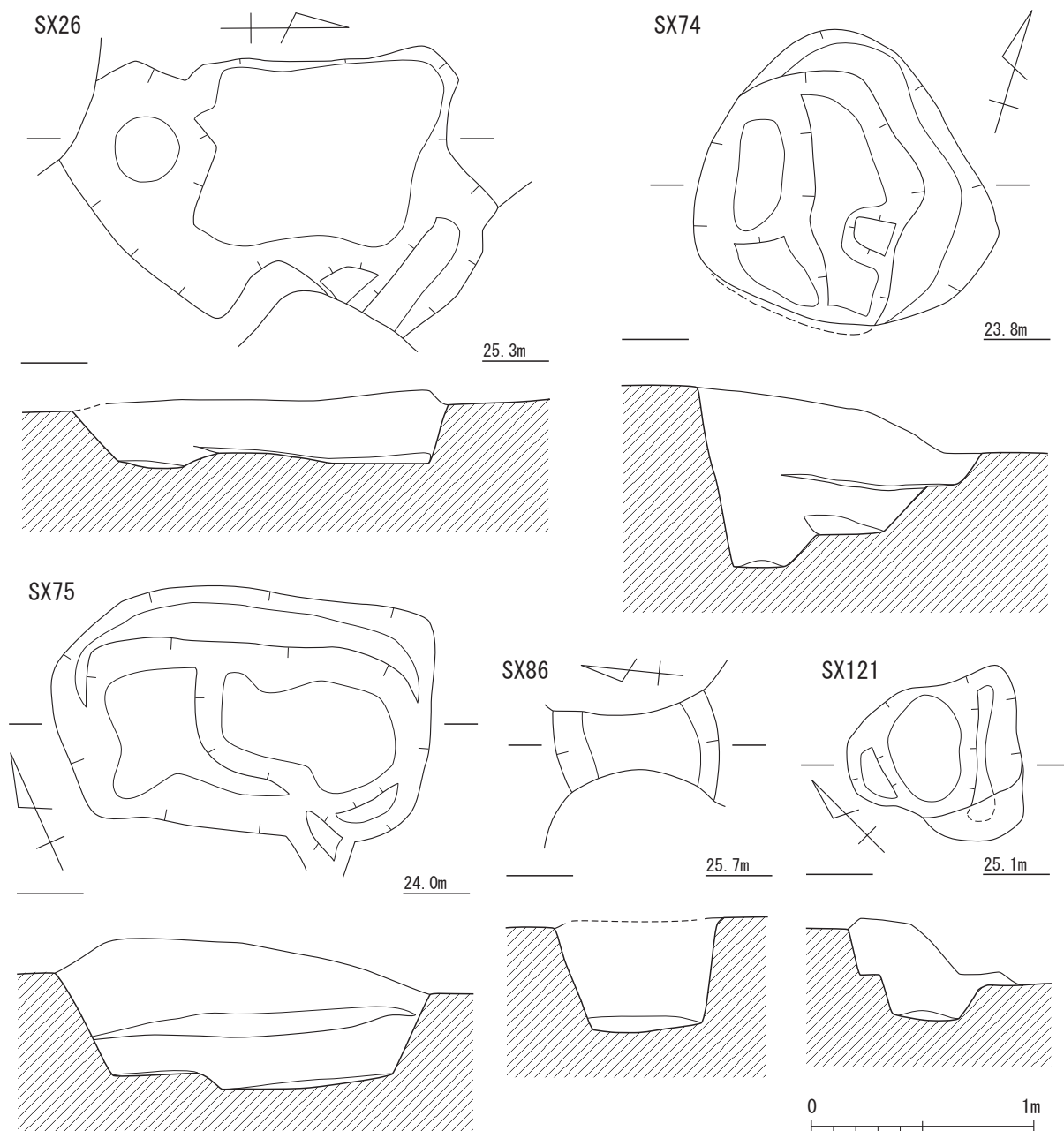
SX188



1号石棺墓



第47図 弥生時代遺構出土遺物実測図(1)
(104・117は2/3、108～111は原寸、115・116は1/2、他は1/3)



第48図 SX26・74・75・86・121 実測図 (1/30)

石製品 (117) 黒曜石製の石鏃。分厚く雑な作りである。

2号石棺墓 (第46図)

調査区南西部に位置し、6・7号石蓋土坑墓を切る。石材は抜き取られているが、石材を設置した掘方痕跡から石棺と判断した。掘方の平面は不整な長方形で、長軸2.5m、短軸2.0m、深さ0.6mである。石材の掘方痕跡から小口は1石、側壁は4石程度と想定される。石棺の床面は長軸1.2m、短軸0.2～0.25mで、わずかに朱の痕跡が認められる。

⑤その他の弥生時代遺構

SX26 (第48図)

調査区中央に位置し、SX17に切られる。平面は不整な長方形で、長軸2.0m、短軸1.1m、深さ0.3m

である。床面は北側がテラスとなり、南側がピット状に深くなる。弥生土器の広口壺が出土した。

出土遺物（第49図、図版83）

弥生土器（118） 広口壺で、口縁部は素口縁である。頸部内面から外面にかけて丹塗りである。口縁部は外湾して外に大きく開く。胴部上位に最大径がある肩の張る形態で、最大径の位置に1条のM字突帯を貼り付ける。突帯の上位には、三角形状の線刻があり、頂点から放射状に浅い線刻を施す。現状では2か所が残存するが、両者の間隔から推定すると本来は4か所にあったと思われる。口縁部と突帯はヨコナデ。頸部は外面がタテ方向のミガキで、内面はヨコ方向のミガキ。胴部外面の突帯から上はヨコ方向のミガキで、突帯から下は磨滅で不明。胴部内面と底部内外面はナデ。

SX74（第48図、図版83）

調査区南東部に位置し、SX75と接する。平面は円形で、直径1.3mである。床面は東側がテラス状となり、西側がピット状に深くなる。深さは0.8mである。SX74・75周辺で、弥生土器・甕棺片が出土した。

SX75（第48図）

調査区南東部に位置し、SX74と接する。平面は楕円形で、長軸1.7m、短軸1.1mである。床面は北側・西側がテラス状となり、東側がピット状に深くなる。深さは0.7mである。SX74・75周辺で、弥生土器・甕棺片が出土しており、ここで報告する。

SX74・75 出土遺物（第49図）

弥生土器（119～124） 119は鋤先状の口縁部片で、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部内面がナデ、他はヨコナデ。120～124は甕棺の破片である。120は胴部に丸みをもつものと思われる。口縁部内外面はヨコナデ、胴部はナデ。121は口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。口縁部内側は外側に比べて薄く長く張り出す。口縁部内外面と突帯はヨコナデ、他はナデ。122・123は口縁部片で、いずれもT字状を呈す。122は口縁部が外側へ強く張り出す。122・123ともにヨコナデである。124は甕の底部片で内外面ともにナデ。

土製品（125） 不明土製品で、軽石のように軽い。軽さの要因は胎土の空隙の多さにあると考えられるが、肉眼観察では全くわからない。

SX86（第48図）

調査区北側に位置し、SX87・88に切られる。平面は円形で、直径0.7m、深さ0.5mである。近世墓の可能性もある。出土遺物はない。

SX121（第48図）

調査区中央東側に位置し、SX118に切られる。平面は不整な楕円形で、長軸0.8m、短軸0.75m、深さ0.45mである。出土遺物はない。

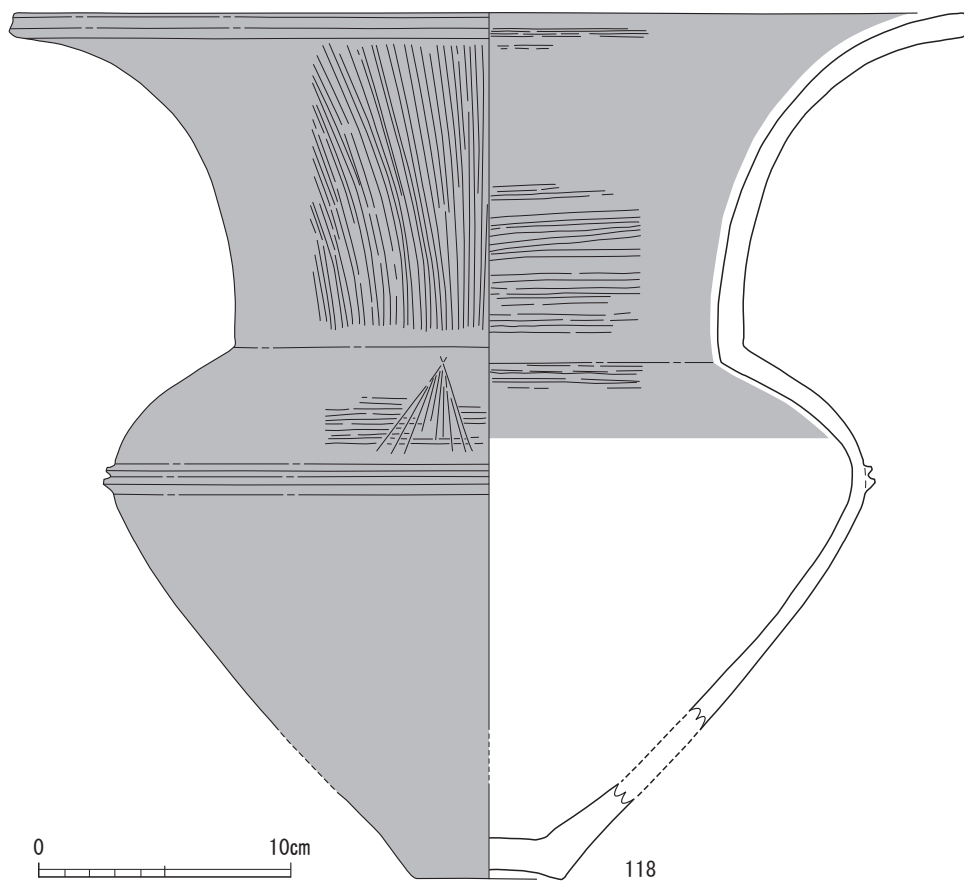
SX138（第50図）

調査区中央東側に位置する。平面は不整な円形で、直径1.3mである。床面は周囲がテラス状となり、中央部がすり鉢状に深くなる。深さは0.6mである。埋土中から弥生土器が出土した。

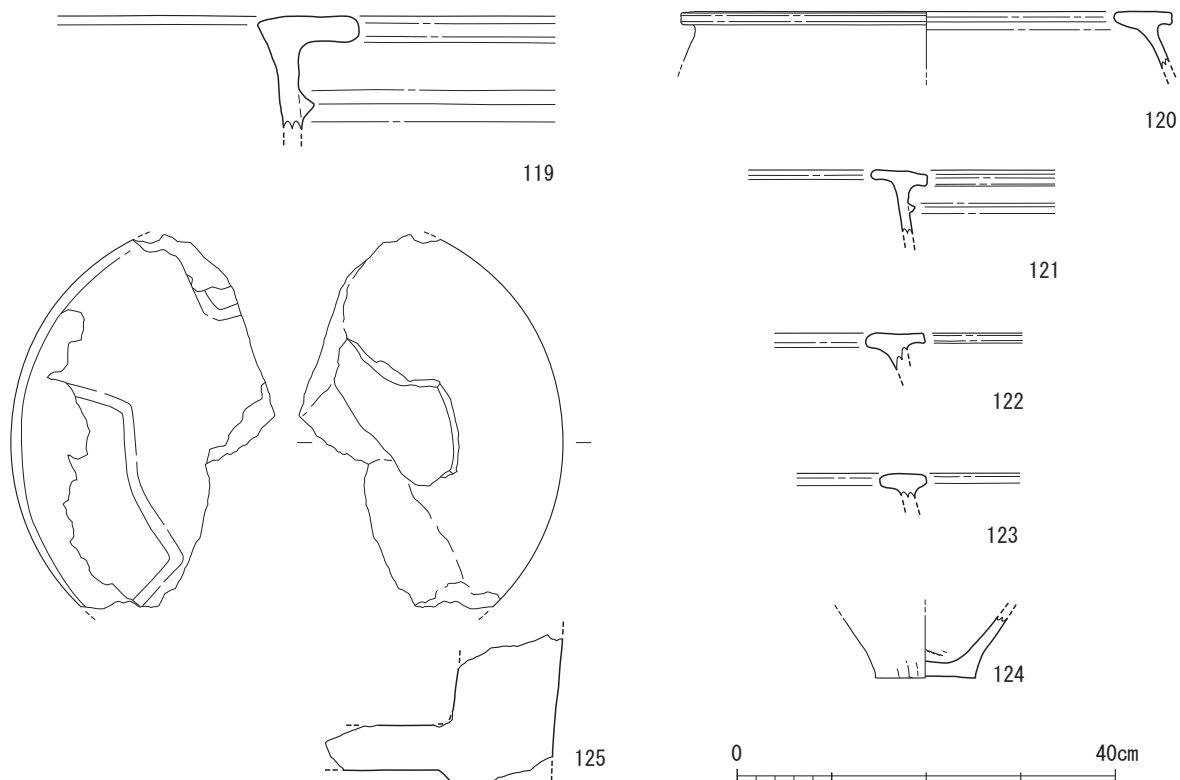
出土遺物（第51図、図版83）

弥生土器（126） 広口壺の胴部片で、外面は丹塗りである。胴部最大径付近に1条のM字突帯を貼

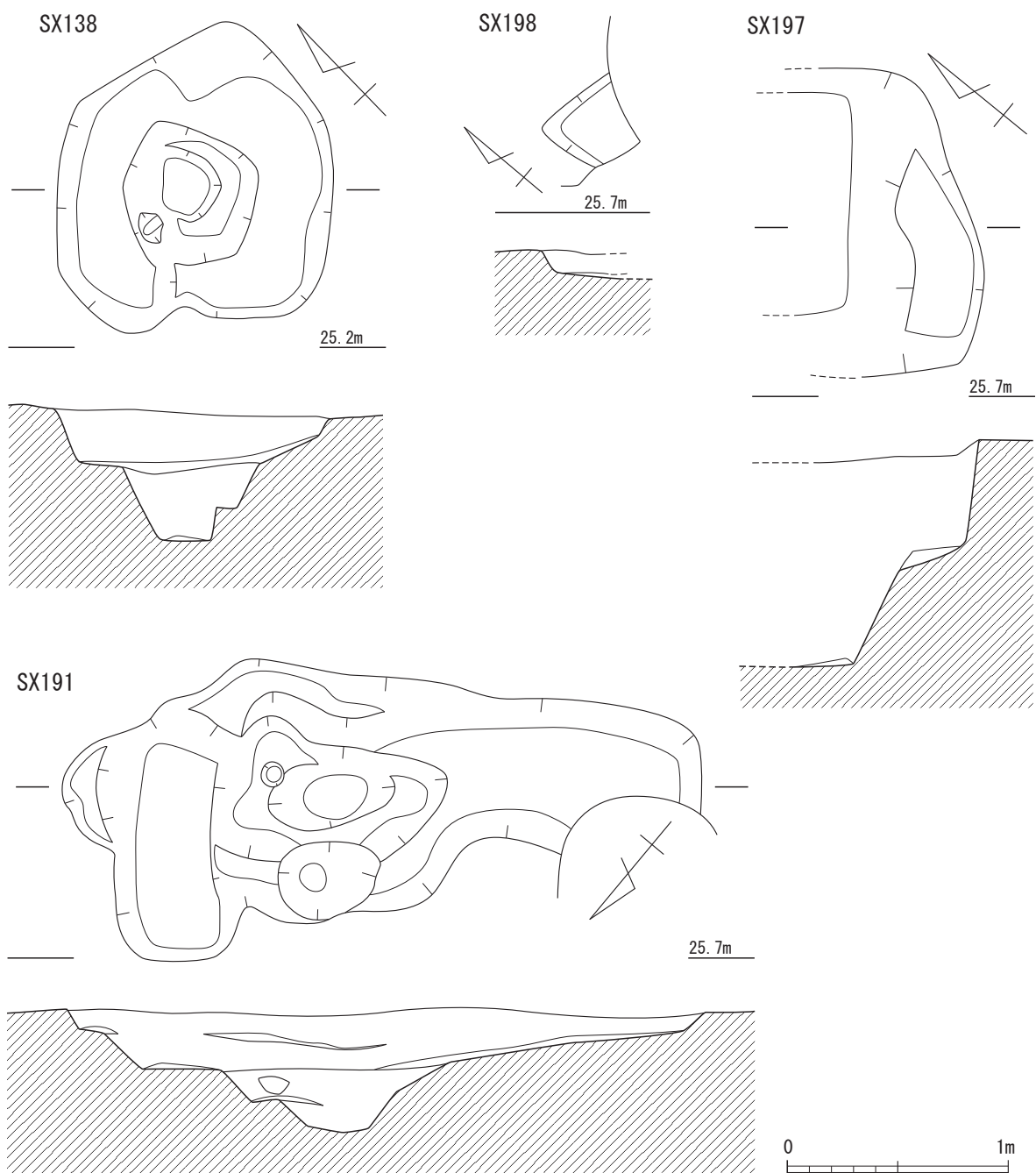
SX26



SX74・75



第49図 弥生時代遺構出土遺物実測図(2)
(120～124は1/8、他は1/3)



第 50 図 SX138・191・197・198 実測図 (1/30)

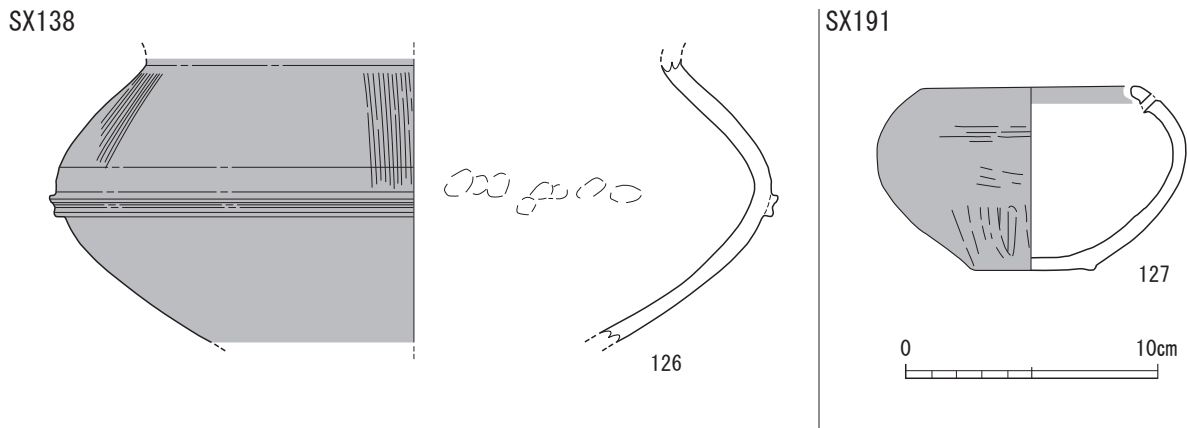
り付け、頸部と突帯の間には、タテ方向の暗文を4か所施す。突帯部はヨコナデ、他は内外面ともにナデ。

SX191 (第 50 図)

調査区中央東側に位置し、列状墓に平行する。平面は不整形で溝状を呈し、長軸 2.9m、短軸 0.7～1.1m である。東西にテラスがあり、中央部がすり鉢状に深くなる。最深部で 0.5m である。埋土中で弥生土器無頸壺が出土した。

出土遺物 (第 51 図、図版 83)

弥生土器 (127) 完形品の無頸壺。口縁部内面から外面は丹塗り。口縁端部下に1つつ2か所の



第 51 図 弥生時代遺構出土遺物実測図（3）（1/3）

穿孔がある。器面は摩耗するが、胴部外面下位はタテ方向、上位から中位はヨコ方向のミガキ調整。胴部内面と底部外面はナデ。

SX197（第 50 図）

調査区南西部に位置し、33 号甕棺墓に切られる。平面は略方形を呈するものと考えられる。長軸 1.0m 以上、短軸 1.4m、深さ 1.0m で、南側にテラスがある。土坑墓の可能性もある。出土遺物はない。

SX198（第 50 図）

調査区南西端に位置し、45 号甕棺墓に切られる。残存状況が悪いため、平面形や規模は不明であるが、弥生時代甕棺墓に切られることから、弥生時代の遺構である可能性が高い。出土遺物はない。

（2）古墳時代の遺構

1 号墳（SD03）（第 52 ～ 54 図、図版 50 ～ 53）

調査区北部に位置し、西側に 2 号墳、東側に 3 号墳が隣接する。東西 10.5 ～ 11m、南北 8.5 ～ 9m の方墳で、四周に周溝が巡る。墳丘はほとんど遺存しないが、北側の一部に盛土が残る。墓坑南小口に接する墳丘盛土最下層（地山整形面直上）で袋状鉄斧が 2 点出土した。周溝は幅 0.8 ～ 1.5m、深さ 0.3 ～ 0.4m、断面逆台形を呈する。周溝内からは土師器壺の他、多数の弥生土器片が出土した。

主体部は中央やや東よりに 1 基ある。主軸を N-39°-W にとる割竹形木棺である。墓坑は平面長方形で二段掘状となり、上段は長さ 3.5m、幅 1.4 ～ 1.5m、深さ 0.3 ～ 0.35m、下段は長さ 2.95m、幅 0.5m、深さ 0.25m である。木棺を下段墓坑床面に設置した後、棺全体を粘土で被覆したのと考えられる。棺材は遺存せず、棺内には棺が腐朽した後に流入したと考えられる粘質土が堆積する。南北小口部は粘土の痕跡が「凹」字状となっており、棺小口部の痕跡と考えられる。木棺は推定で全長 2.3m、幅は 0.5m ほどとなる。床面は北側が広いことから、頭位方向は北側の可能性がある。なお、南側小口部の裏込め粘土下（墓坑下段床面直上）には朱の散布が認められ、棺設置前の儀礼の痕跡と考えられる。また、下段西側の床面付近では、壁面の立ち上がりに接する状態で鉄製刀子が出土した。



第 52 図 1号墳実測図 (1/100)・周溝 (SD03) 土層図 (1/60)

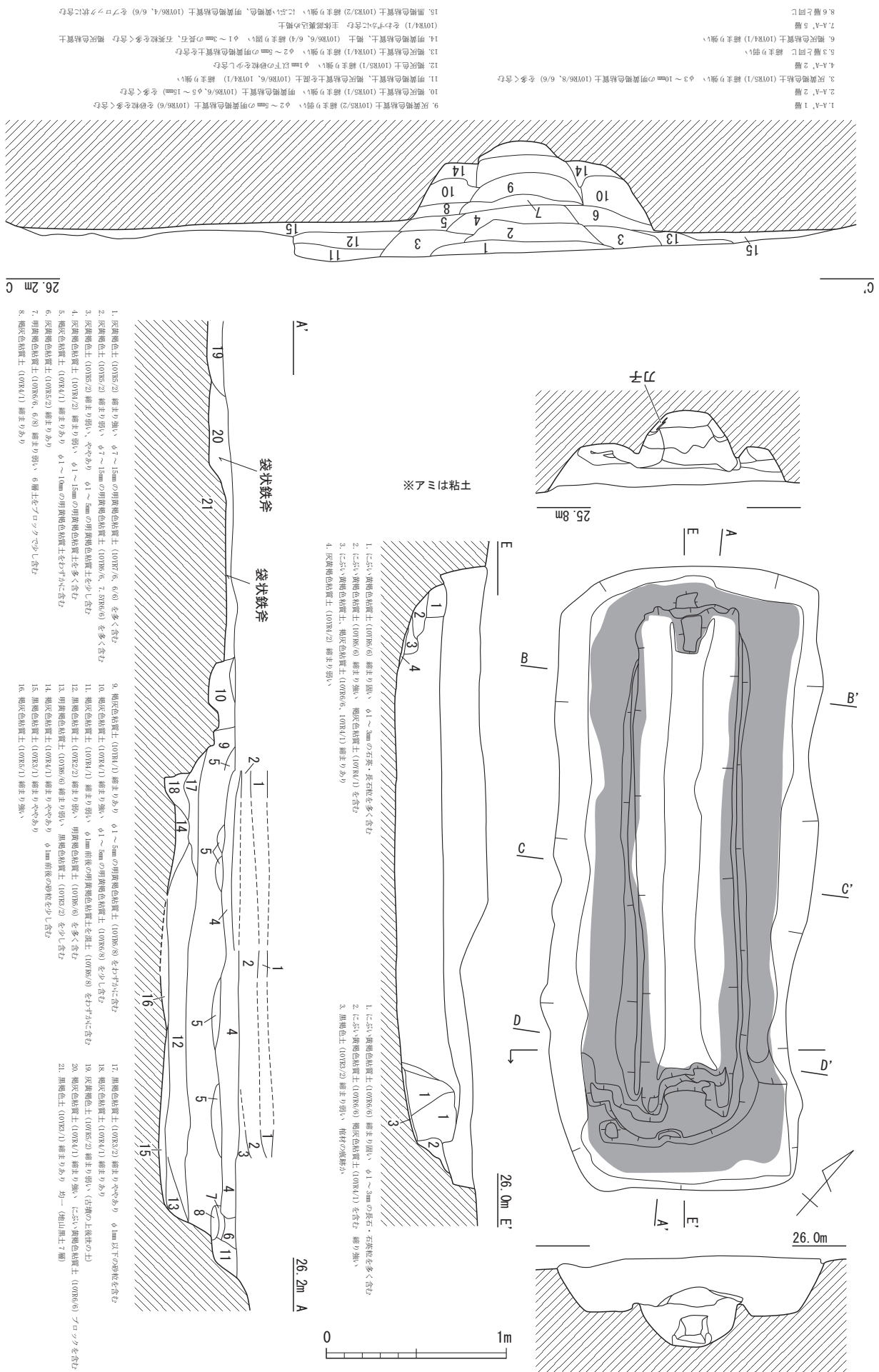
周溝出土遺物 (第 55 図、図版 83)

土師器 (128) 小型丸底壺。胴部上位が膨らみ、底部は尖底気味となろうか。口縁部はわずかに内湾気味にのびる。内外面ともにヨコナデで外面は磨滅するが、一部にハケメが残り内面はナデ。

墳丘盛土出土遺物 (第 55 図、図版 84)

鉄製品 (129・130) いずれも鍛造の袋状鉄斧。129 は劣化が著しく詳細不明であるが、袋部の折り曲げは確認できない。130 の袋部は折り曲げて作るが、劣化が著しく一方は破損する。

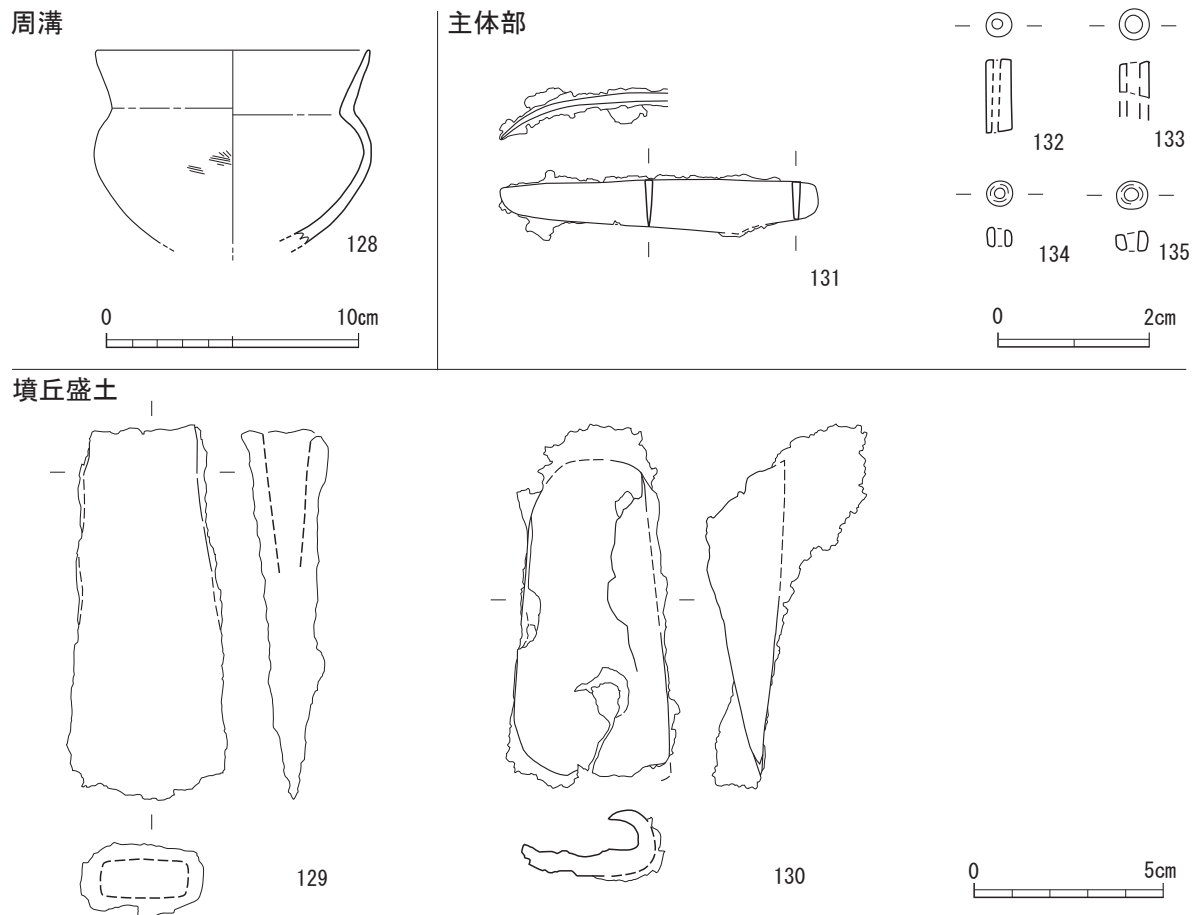
主体部出土遺物 (第 55 図、図版 84)



第 53 図 1 号墳主体部検出状況実測図・土層図 (1/30)



第54図 1号墳主体部掘方実測図・土層図(1/30)・鉄器出土状況実測図(1/20)



第 55 図 1 号墳出土遺物実測図（1）
（128 は 1/3、129 ～ 131 は 1/2、132 ～ 135 は原寸）

鉄製品（131）刀子。身の中程から鋒にかけて湾曲する。

石製品（132・133）いずれも碧玉製管玉。片側穿孔である。

ガラス製品（134・135）134 は青色の小玉で、135 は青緑色の小玉。

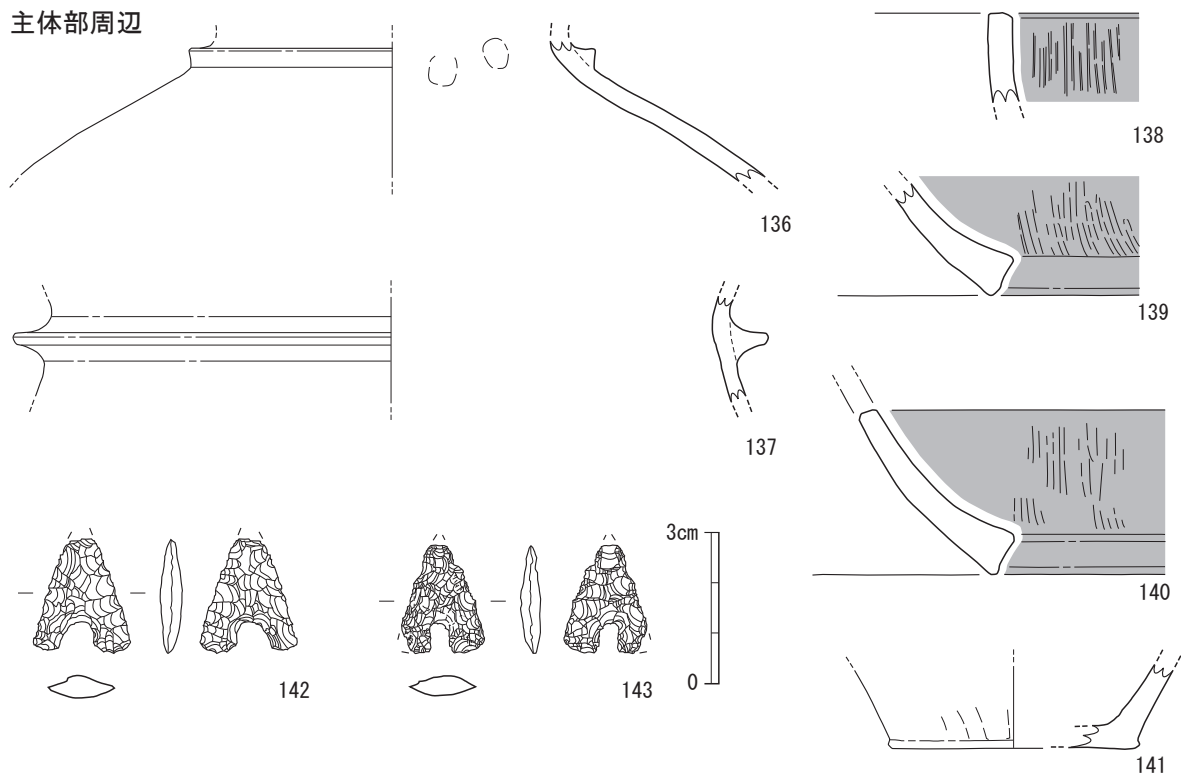
主体部周辺出土遺物（第 56 図、図版 84）

弥生土器（136 ～ 141）136 は壺。頸部に 1 条の三角突帯を貼り付ける。突帯はヨコナデ、内外面ともにナデ。137 は瓢形土器の胴部上位の破片。端部に丸みがあるコの字状突帯を 1 条貼り付ける。外面ヨコナデ、内面ナデ。138 は筒形器台の口縁部と思われる。口縁端部から外面は丹塗り。口縁端部はヨコナデ、外面はタテ方向のミガキである。内面はナデで、下位はヨコナデ。139・140 は筒形器台の脚裾部片で同一個体と考えられる。いずれも外面は丹塗りで、外面はタテ方向のミガキ、裾端部から内面はヨコナデ。140 は透かしの下端が残存する。141 は甕の底部。内外面ともにナデで、外面の底部側面は工具ナデである。

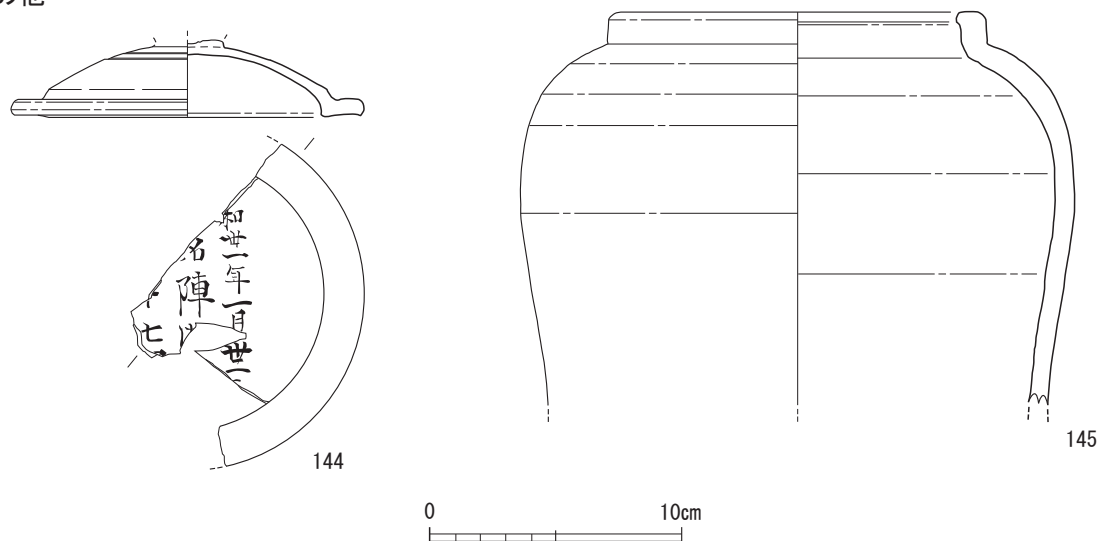
石製品（142・143）142 は黒曜石製の石鏃。鋒を欠失する。143 は黒曜石製の石鏃。鋒と片側の脚部をわずかに欠失する。

土師質土器（144・145）144 は 145 の蓋と考えられるが、144 は 145 よりも胎土中の雲母の量が多い。内面に「□和卅一年一月卅一日」「名陣内」「十七□」と墨書がある。摘みは欠損する。口縁部

主体部周辺



その他



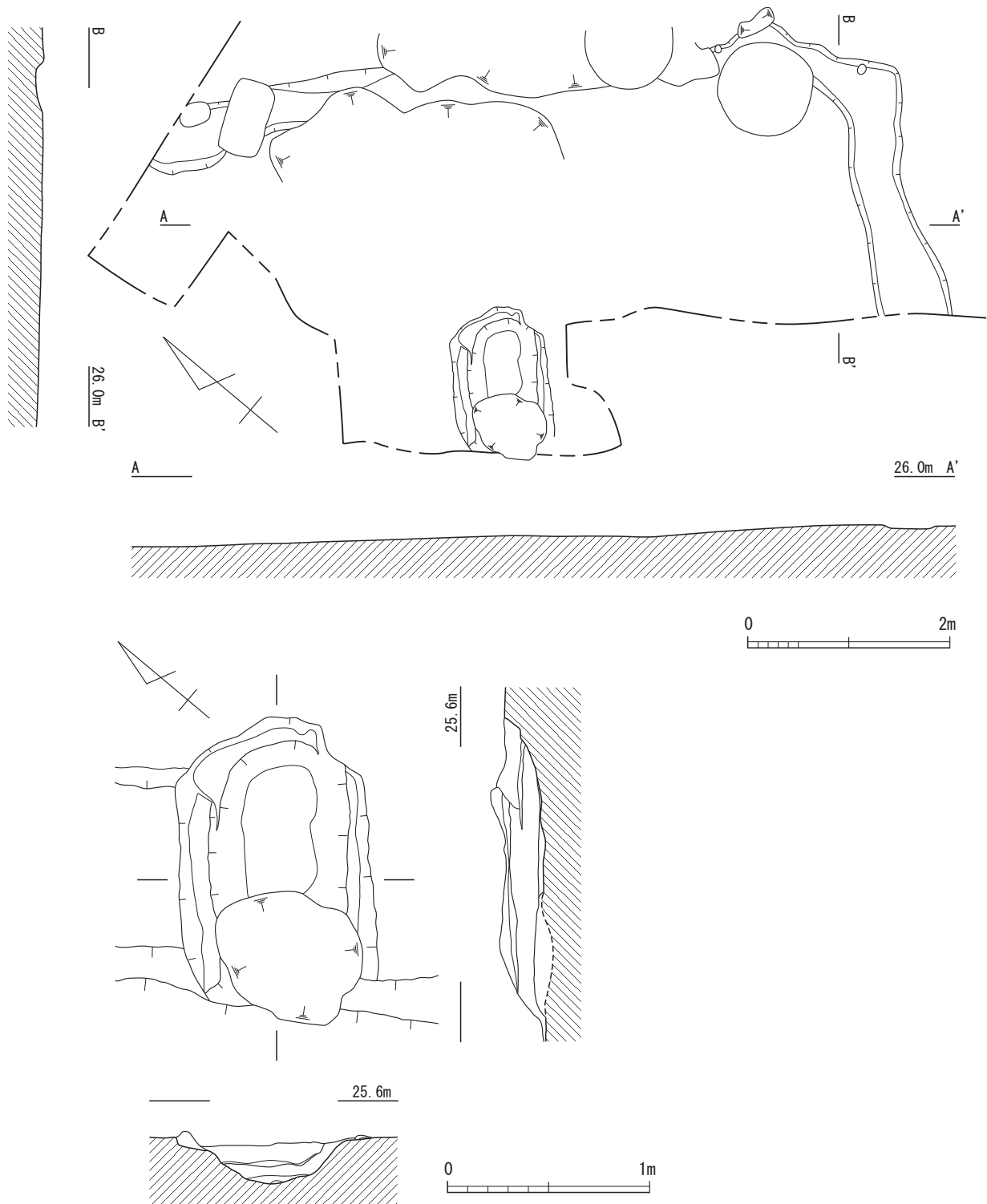
第 56 図 1 号墳出土遺物実測図（2）（142・143 は 2/3、他は 1/3）

内外面と体部内面は回転ナデ。口縁部と欠損する摘み以外の外面は回転ヘラケズリ。145 は短頸の壺で、内外面ともに回転ナデ。

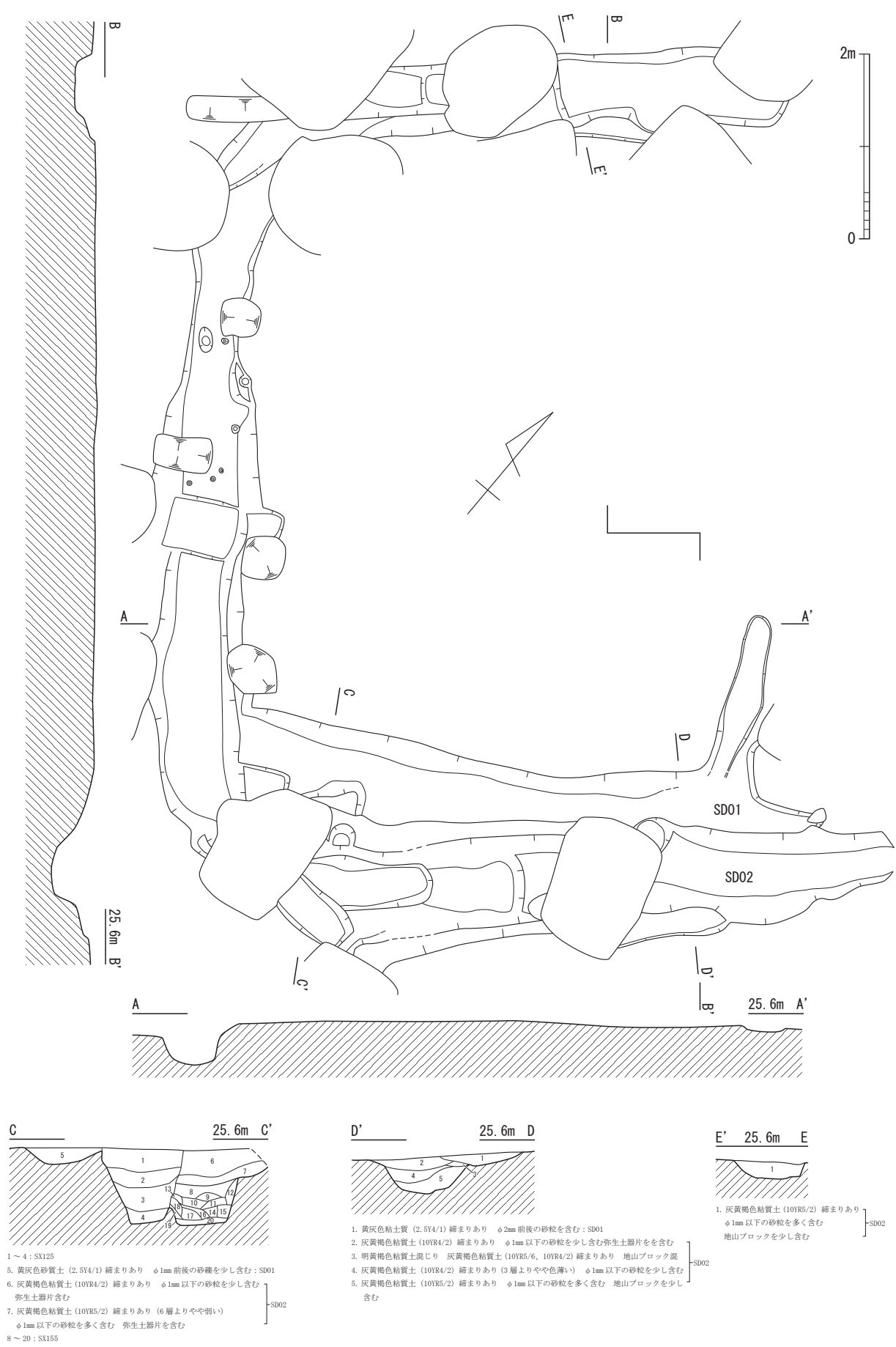
2号墳（SD05）（第 57 図、図版 54）

調査区北部に位置し、東側に 1 号墳が隣接する。東側・南側の周溝の一部が残るのみであるが、主体部の位置から東西 7～8m、南北 6m 前後の方墳と考えられる。墳丘は遺存しない。周溝は幅 0.5～0.7m、深さ 0.1m、断面逆台形を呈する。

主体部は墳丘中央付近に 1 基ある。主軸を N-44°-E にとる土坑墓と考えられる。墓坑は平面隅丸長方形で、長さ 1.4m 以上、幅 1.0m（床面で 0.4m）、深さ 0.2m である。出土遺物はない。



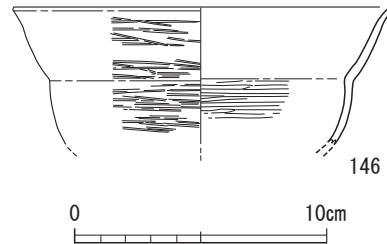
第57図 2号墳実測図 (1/60)・主体部実測図 (1/30)



第58図 3号墳実測図 (1/60)

3号墳 (SD02) (第 58 図、図版 54)

調査区北部に位置し、西側に1号墳が隣接する。東側の周溝は削平されるが、東西7m以上、南北7.5m前後の方墳と考えられる。墳丘は遺存しない。周溝は幅0.7～1.1m、深さ0.4～0.8m、断面逆台形を呈する。周溝内より小型丸底壺が出土した。主体墓は削平を受けるため、詳細は不明である。



第 59 図 3号墳出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第 59 図、図版 84)

土師器 (146) 146 は小型丸底壺。口縁部は内湾気味に大きく開き、端部はわずかに外反する。口縁部外面と胴部内外面は横方向の緻密なミガキで、口縁部内面は工具によるヨコナデ。

(3) 近世・近現代の遺構

① 甕棺墓

SX01 (第 60 図、図版 55)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.8m の平面楕円形を呈し、深さは 1.65m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部からは銭が出土した。

出土遺物 (第 67 図、図版 99)

銅製品 (159) 6 枚が錆のため重なって固着する銅銭である。銭文は不明。

SX04 (第 60・62 図、図版 55)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.8m、短軸 0.75m の平面楕円形を呈し、深さは 1.8m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残り、銭・鉄釘が出土した。

147 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）である。口縁はやや外反し端部は内側に肥厚して玉縁状となる。中位に鈍い段がつく。胴部の張りは小さい。内外面を格子目叩きの後、ヨコナデ調整する。底部に歪みがあり、口縁部が傾いている。内外面に暗褐色の釉を施し、口縁部に目跡がつく。

出土遺物 (第 67 図、図版 94・99)

鉄製品 (160) 角釘。頭部の形状は不明で、先端は欠損する。

銅製品 (161・162) 161 は 2 枚が錆のため重なって固着する銅銭である。銭文は不明。162 は 2 枚がずれて錆のため固着する銅銭。植物繊維と靱が付着する。銭文は不明。

SX05 (第 60・62 図、図版 85)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 1.2m の平面楕円形を呈し、深さは 1.85m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残り、鉄釘・煙管が出土した。

148 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反気味で端部は内側に肥厚し、玉縁状となる。胴部中位に 2 条の沈線が巡る。胴部の張りはほとんど無い。口縁部と胴部の境は釉剥ぎし、胴部外面にタタキ痕はほとんど残っていないが、内面上位にわずかに格子目が残る。底部内面も格子目で螺旋状に叩いている。肩部に縦 2cm 程の「丂 製」の刻印があり、口縁部に目跡がある。底部外面を除いて内外面に暗褐色の釉を施すが、内面下位はハケ塗りされている。

SX07（第 60・62 図、図版 55・85）

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.95m の平面円形を呈し、深さは 1.95m である。墓坑内に甕棺を埋置し、人骨が残る。銭・金属片・木材が出土した。

149 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反気味で端部は内側に肥厚して玉縁状とし、中位に段がつく。内外面に格子目のタタキ痕残り、底部内面にもわずかに格子目タタキが見える。底部外面を除いて内外面に明褐色の釉を施し、胴部上位に釉の上から「十」と指で描いた痕がある。口縁部には目跡が薄く残る。

SX10（第 60・62 図、図版 55・56・85）

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.85m、短軸 0.75m の平面円形を呈し、深さは 0.8m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部からは小玉・陶器片が出土した。改葬を受けているものと考えられ、毛髪が残る。

150 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち上がり、端部は玉縁状である。胴部の張りは小さい。胴部上位に螺旋状に沈線を巡らせ、胴部内外面と、底部内面に格子目のタタキ痕が残る。釉は内外面に施して明褐色を呈す。口縁部は釉剥ぎし、目跡が残る。

SX12（第 61・62 図、図版 86）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 1.2m の平面円形を呈し、深さは 1.25m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部からは陶器片が出土した。

151 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち上がり、端部は内側に折り曲げる。胴部の張りは無く、寸胴形となる。口縁部と胴部に 2 条から 3 条の沈線が巡り、底部外面を除き暗褐色の釉を全面に施すが、口縁部と胴部の境は釉剥ぎする。胴部にタタキ痕は観察されないが、底部内面は格子目で叩いている。口縁部には目跡が残る。

SX80（第 61・62 図、図版 56・86）

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 1.1m の平面楕円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。陶器が出土した。

152 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に鈍い段がある。口縁端部、口縁部と胴部の境は釉剥ぎし、胴部上位に 2 条、中位に 2 条、下位に 3 条の沈線が巡る。頸部から底部まで肉厚で、外面にわずかに格子目のタタキ痕が観察され、底部内面にも格子目のタタキ痕が残る。内外面に暗赤褐色の釉が施され、口縁部には目跡が残る。

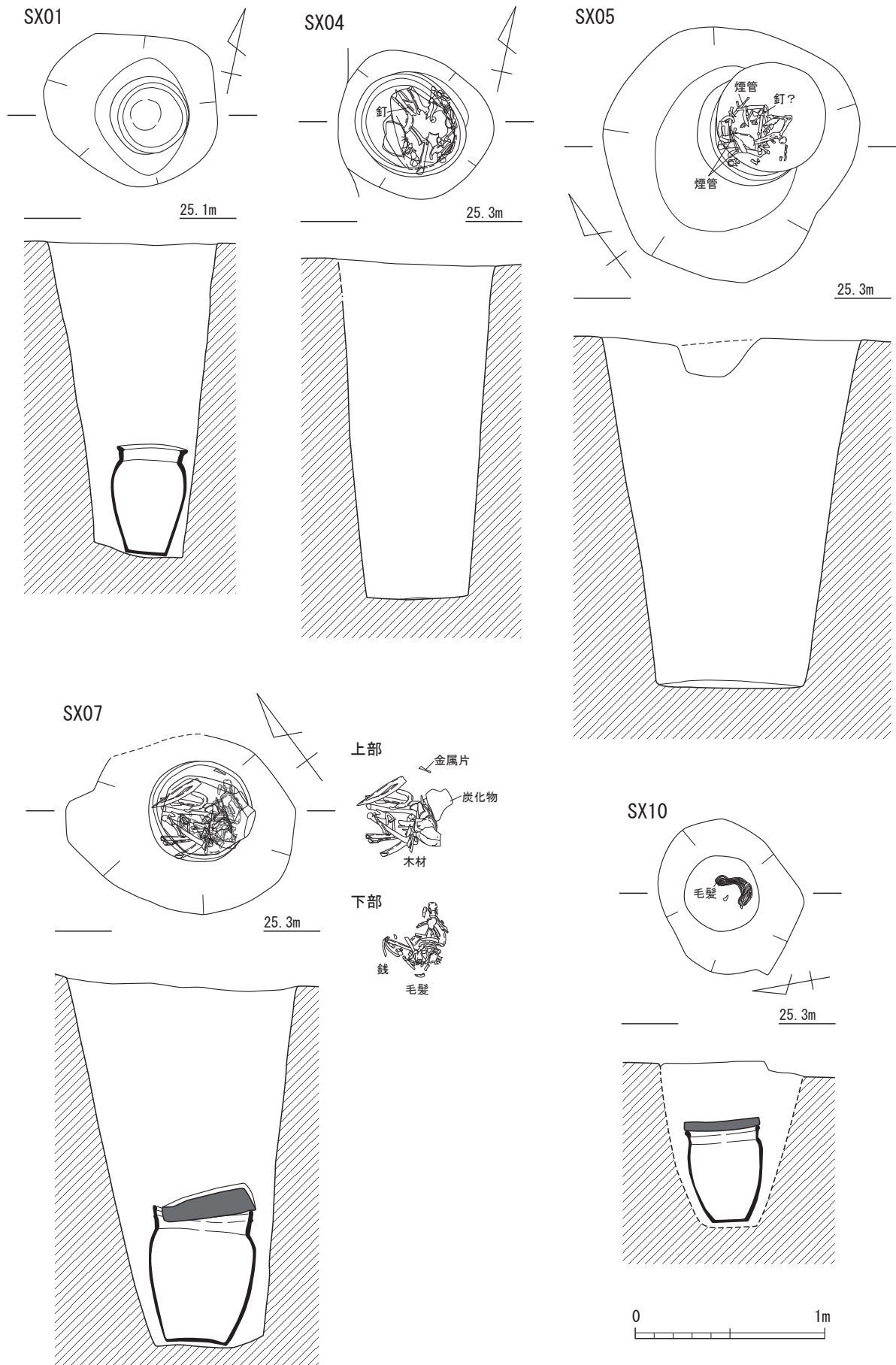
SX81（第 61 図）

調査区東側に位置する。墓坑は長軸 0.45m、短軸 0.45m の平面円形を呈し、深さは 1.1m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

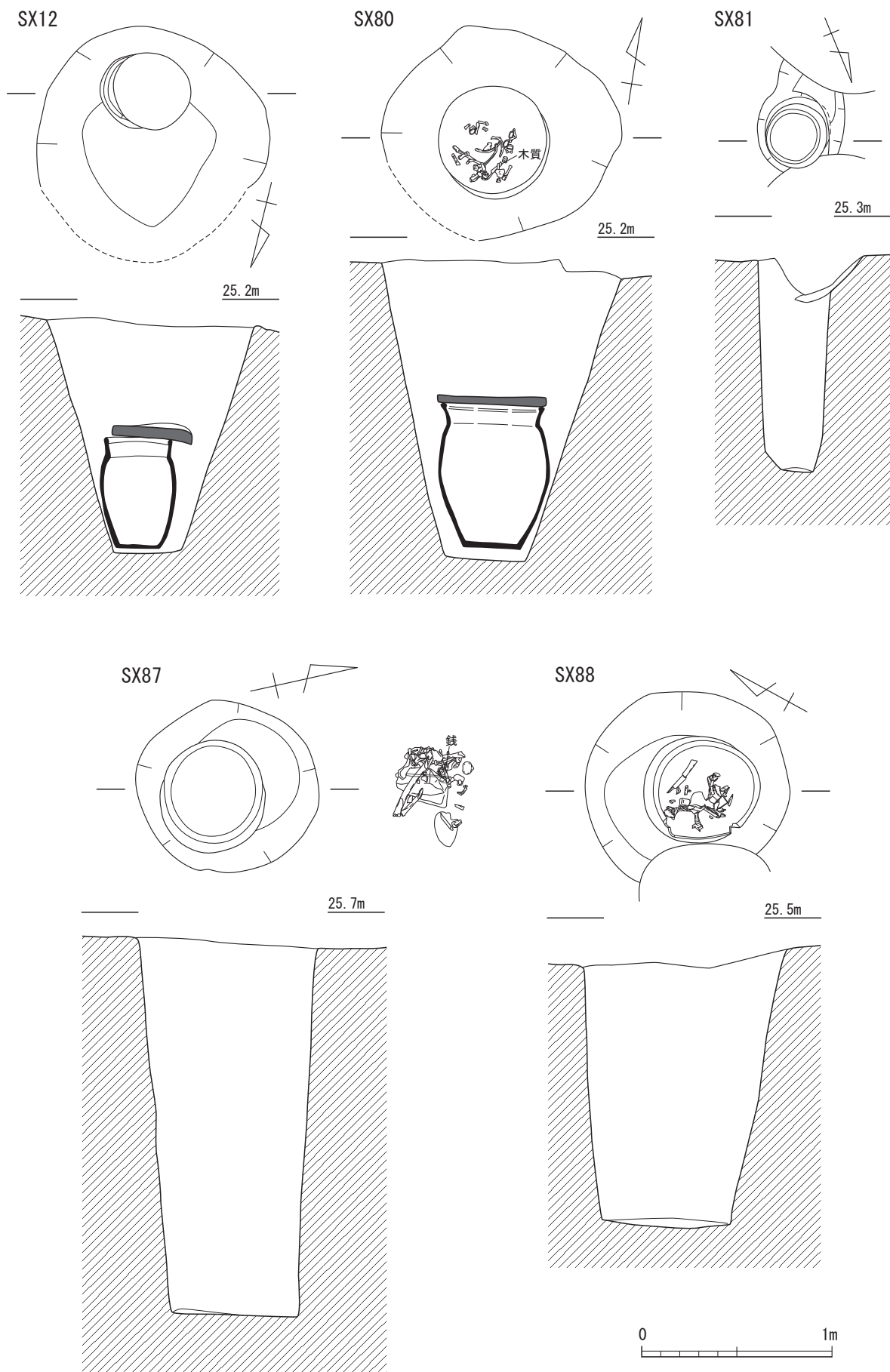
SX87（第 61 図、図版 56）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 2.0m である。墓坑内に甕棺を埋置し、人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・磁器片・ガラス片が出土した。

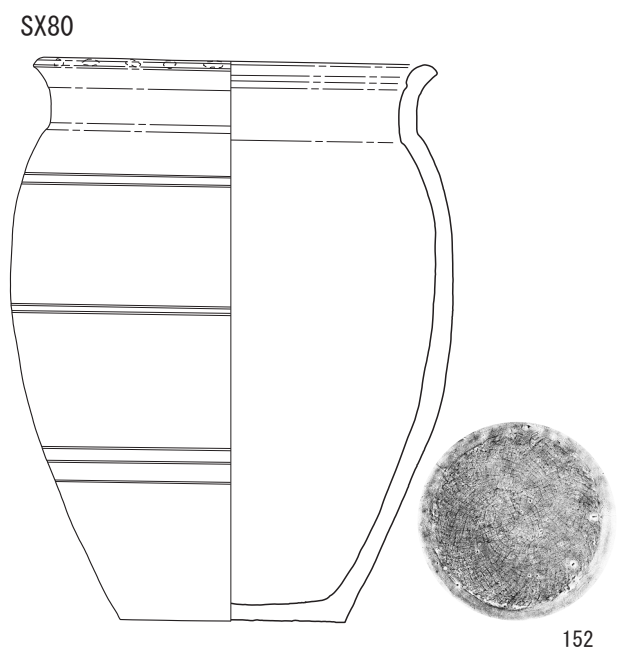
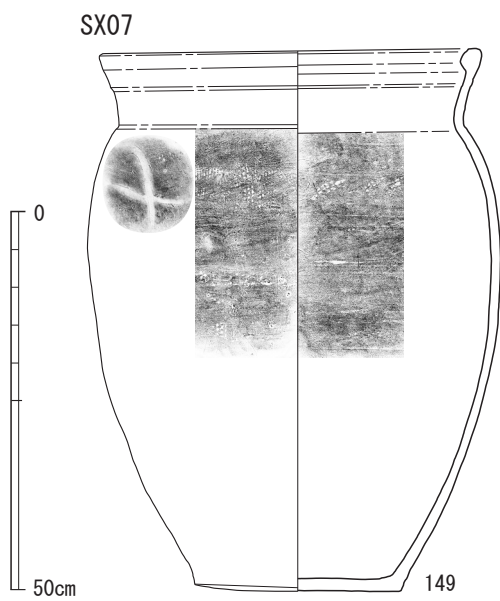
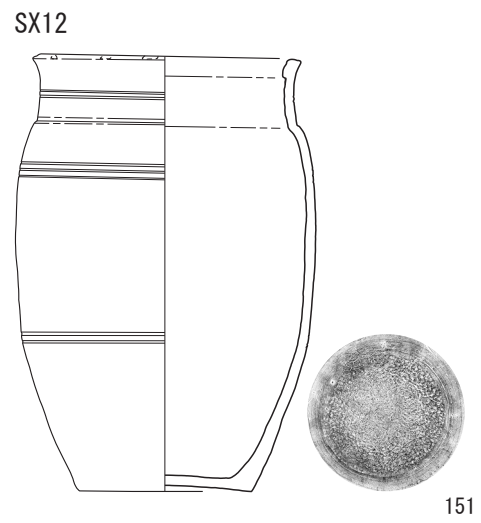
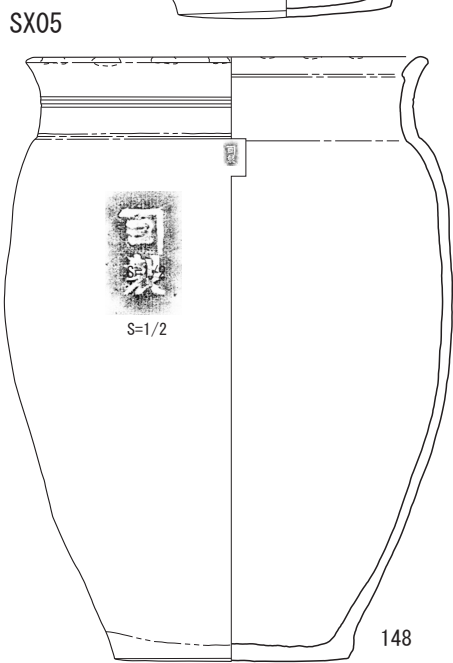
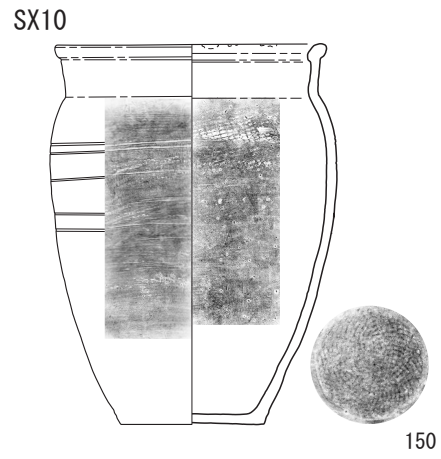
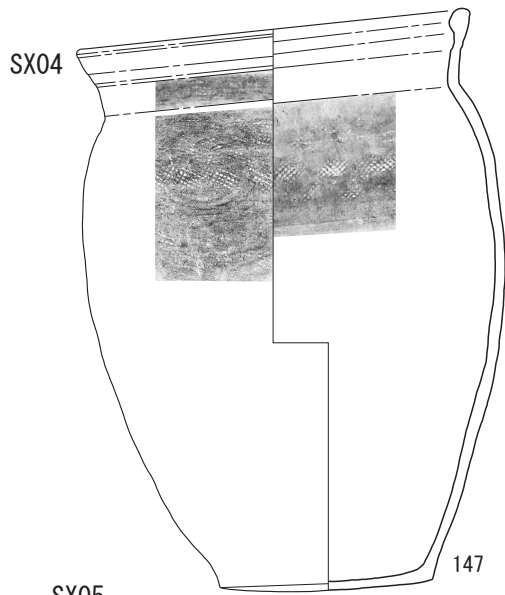
出土遺物（第 67 図、図版 99）



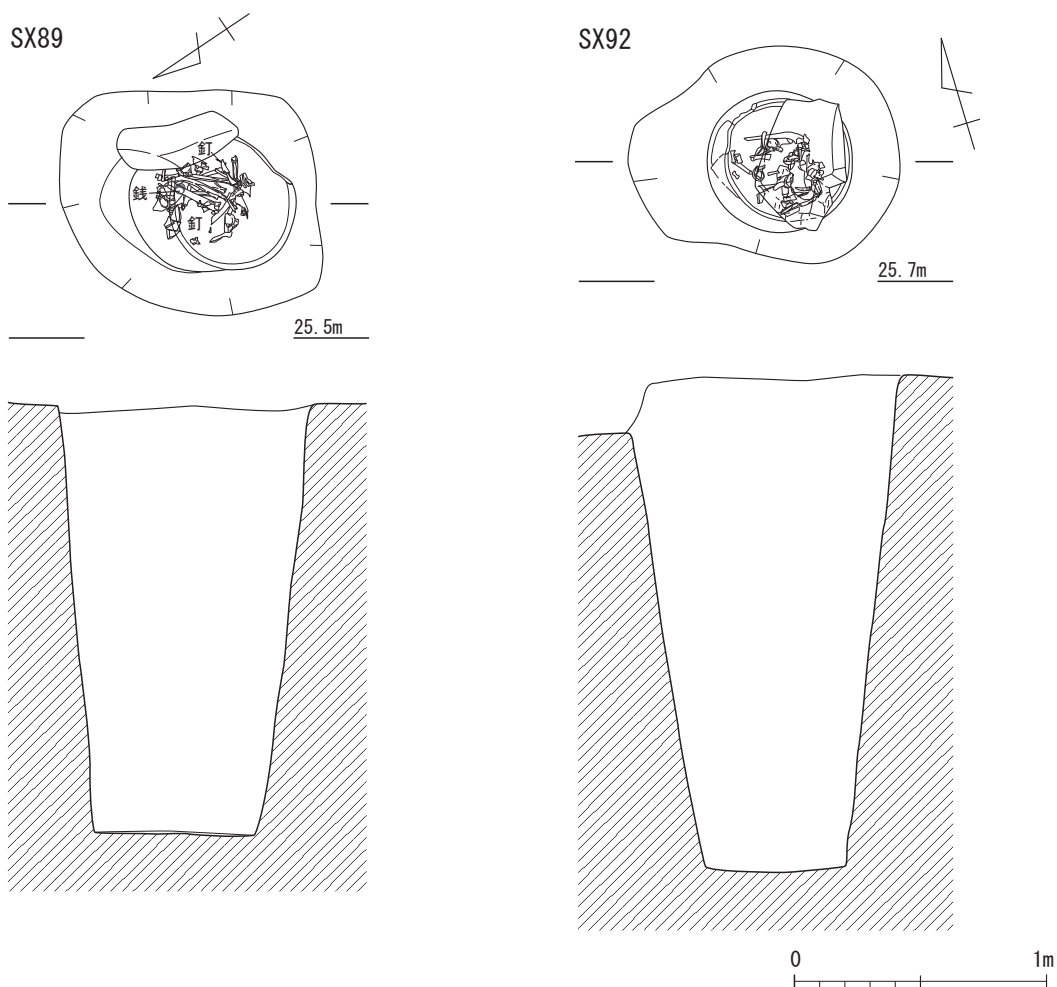
第60図 SX01・04・05・07・10実測図(1/30)



第 61 図 SX12・80・81・87・88 実測図 (1/30)



第 62 図 SX04・05・07・10・12・80 甕棺実測図 (1/10)



第 63 図 SX89・92 実測図 (1/30)

銅製品 (163) 4 枚が折り重なって錆のため固着する銅銭で銭文は不明。他に図化していないが鉄銭の破片が 2 個体分出土している。

SX88 (第 61・66 図、図版 56・86)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.1m の平面円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置し、人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・磁器片・ガラス片が出土した。

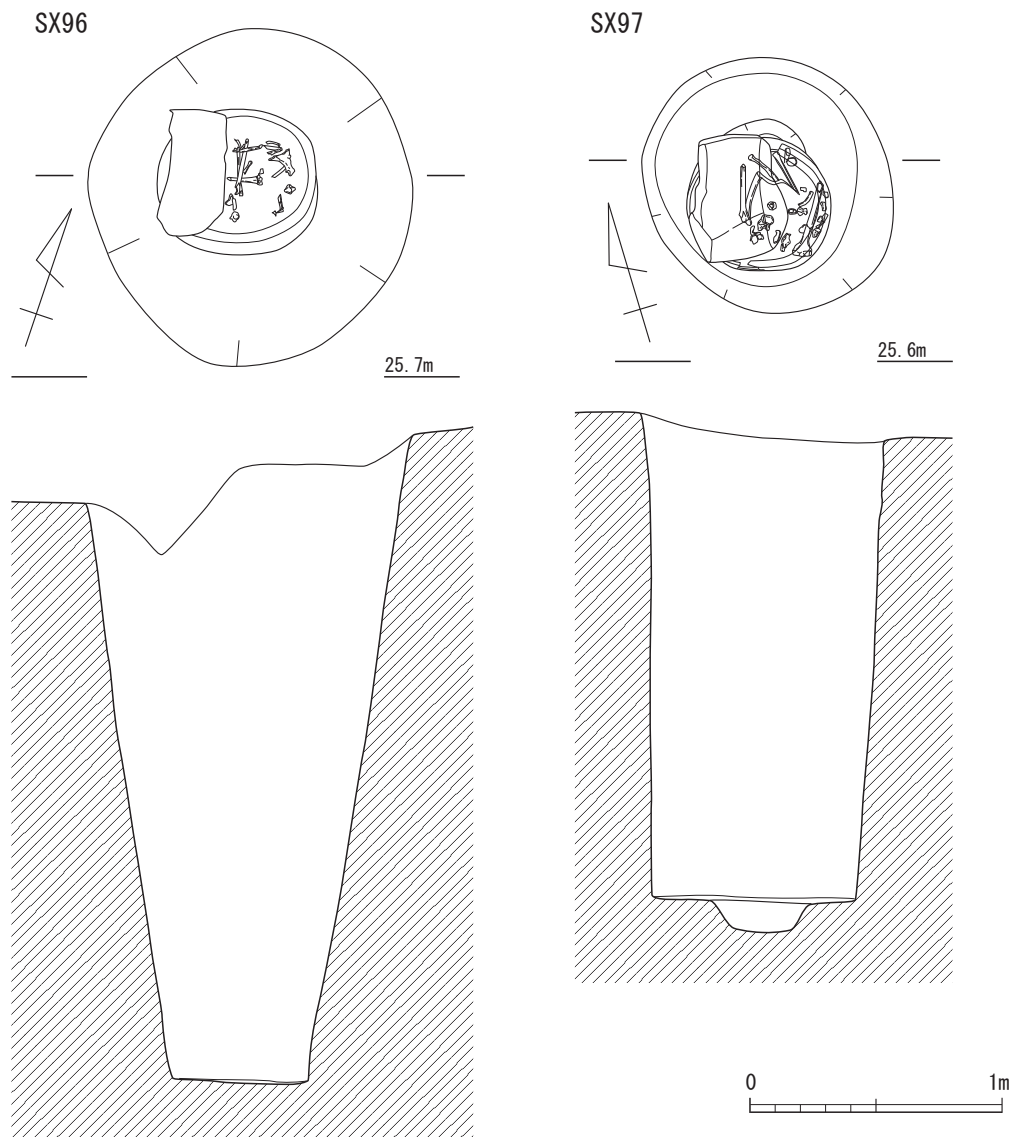
153 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側に折り曲げて玉縁状とするが、コの字状に外方へ突出している。胴部には 2 条と 3 条の沈線が巡る。胴部内面に粘土の継ぎ目があり、工具でヨコナデ調整されて、格子目タタキ痕が外面にわずかに残る。底部外面を除いて、暗褐色の釉を内外面に施し、上から薄く黄灰色釉を流し掛けする。底部内面には銅銭 2 枚が付着した痕が観察される。

出土遺物 (第 67 図、図版 99)

銅製品 (164・165) いずれも銭文不明の銅銭で、165 は 3 枚が錆のため重なって固着する。

鉄製品 (166) 2 枚が重なる固着する鉄銭で、実測図の上 1 枚はほとんど欠損する。

SX89 (第 63 図)



第 64 図 SX96・97 実測図 (1/30)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の隅丸方形を呈し、深さは 1.7m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・鉄釘が出土した。

出土遺物 (第 67 図、図版 99)

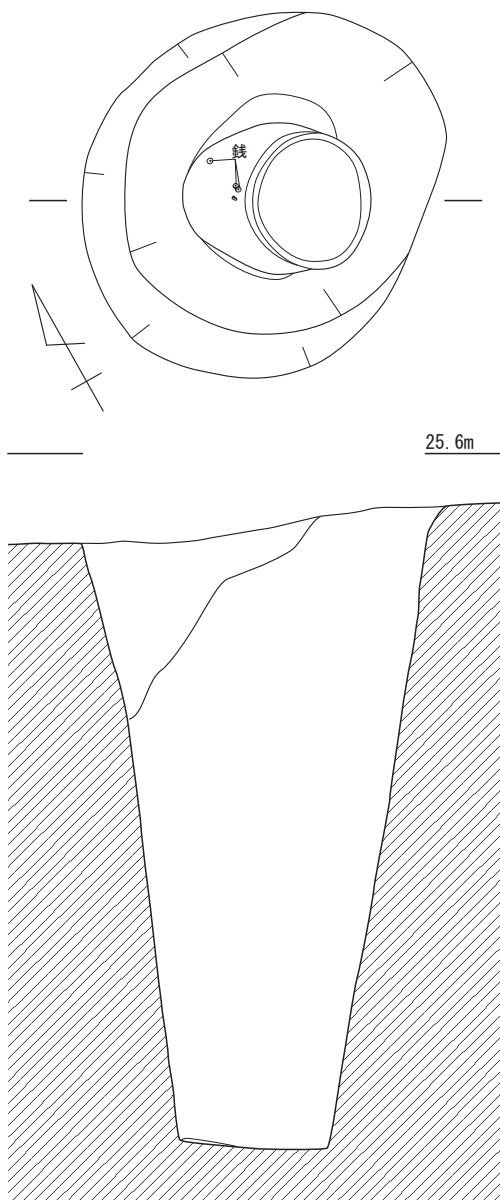
鉄製品 (167・168) 189・190 は銹のため重なって固着する鉄銭である。いずれも 3 枚と思われる。

SX92 (第 63・66 図、図版 56)

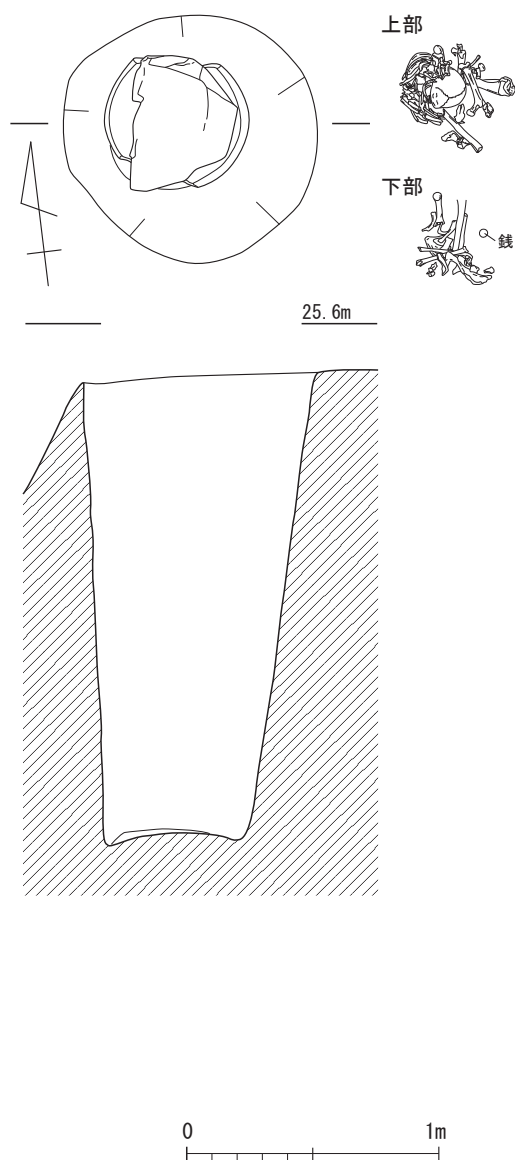
調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 1.95m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。副葬品はない。

154 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側に肥厚させて玉縁状とする。中位に段がつく。胴部内外面を格子目で叩いて、内面は工具を使用してヨコナデ調整し

SX100



SX107



第 65 図 SX100・107 実測図 (1/30)

ている。内外面に暗褐色の釉を施し、その上から灰黄色の釉を流し掛けする。口縁部に明瞭な目跡は残っていない。

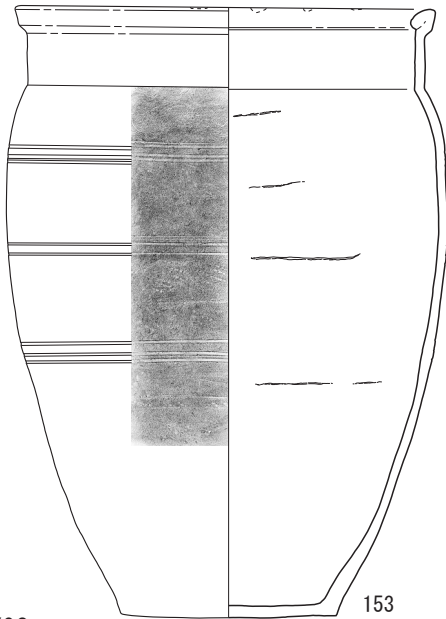
SX96 (第 64 図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 1.1m の平面楕円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。副葬品はない。

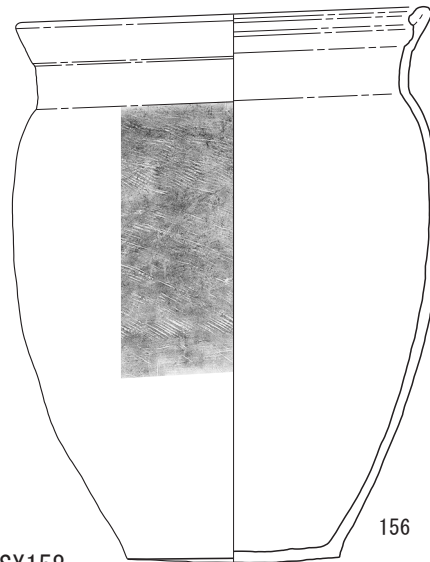
SX97 (第 64・66 図、図版 56・57・87)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 1.0m の平面円形を呈し、深さは 1.9m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。埋土中から銭が出土した。

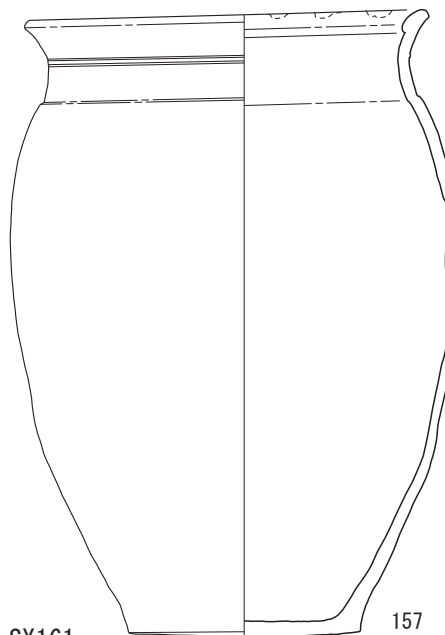
SX88



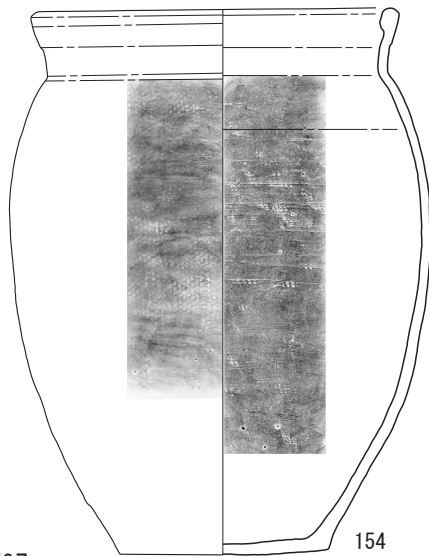
SX107



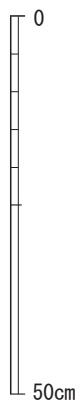
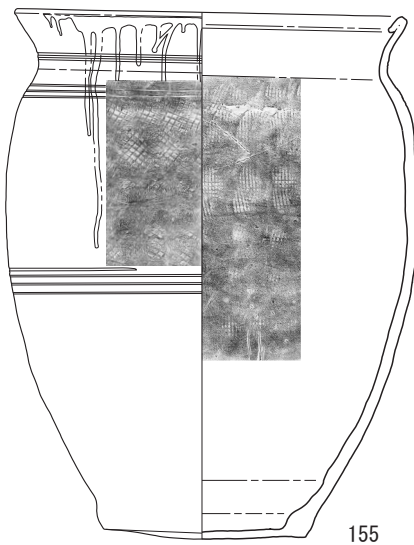
SX158



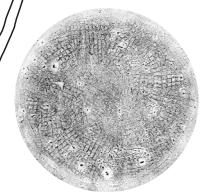
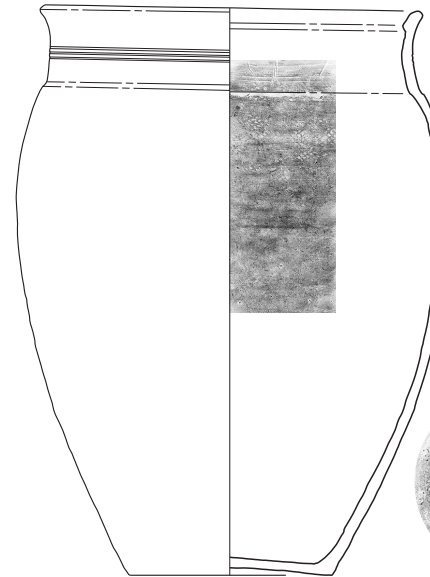
SX92



SX97



SX161



第66図 SX88・92・97・107・158・161 甕棺実測図 (1/10)

155 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に2条の沈線が巡る。端部は内側に折り曲げ玉縁状にしている。胴部には内外面に明瞭な格子目のタタキ痕が残り、底部内面にもわずかに格子目が残る。外面上位と中位に3条の沈線が巡る。内外面に暗赤褐色の釉を施し、さらに口縁部から肩部にかけて黄褐色の釉を流し掛けする。内面はハケ塗りである。

出土遺物（第67図、図版99）

銅製品（169） 6枚が錆のため固着する。5枚が重なり、その上に1枚が斜めに固着する。6枚のうち5枚は銅銭だが、実測図の下から2枚目は錆の色調から鉄銭の可能性はある。

SX100（第65図、図版57）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.6m、短軸1.2mの平面楕円形を呈し、深さは2.5mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部から銭が出土した。

SX107（第65・66図、図版87）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面楕円形を呈し、深さは1.8mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭が出土した。

156 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に段がつく。端部は内側に折り曲げ玉縁状とする。胴部の叩きは平行タタキに見えるが、一部格子目になっている。内外面に明褐色の釉を施した後、灰黄色の釉を流し掛けする。口縁端部は釉を剥ぎとっており、わずかに目跡が残る。底部外面は露胎。

出土遺物（第67図、図版99）

銅製品・鉄製品（170～172） 170は銅銭の寛永通宝。171は銅銭3枚と鉄銭1枚がずれて錆のため重なって固着する。実測図の上から3枚目が鉄銭で他は銅銭である。実測図の上から2枚目の銅銭は1/2程欠失する。銭文は不明。172は鉄銭で銭文は不明。

SX158（第66・68図、図版57・87）

調査区北側に位置し、SX159を切る。墓坑は長軸1.0m、短軸1.0mの平面楕円形を呈し、深さは2.2mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭が出土した。

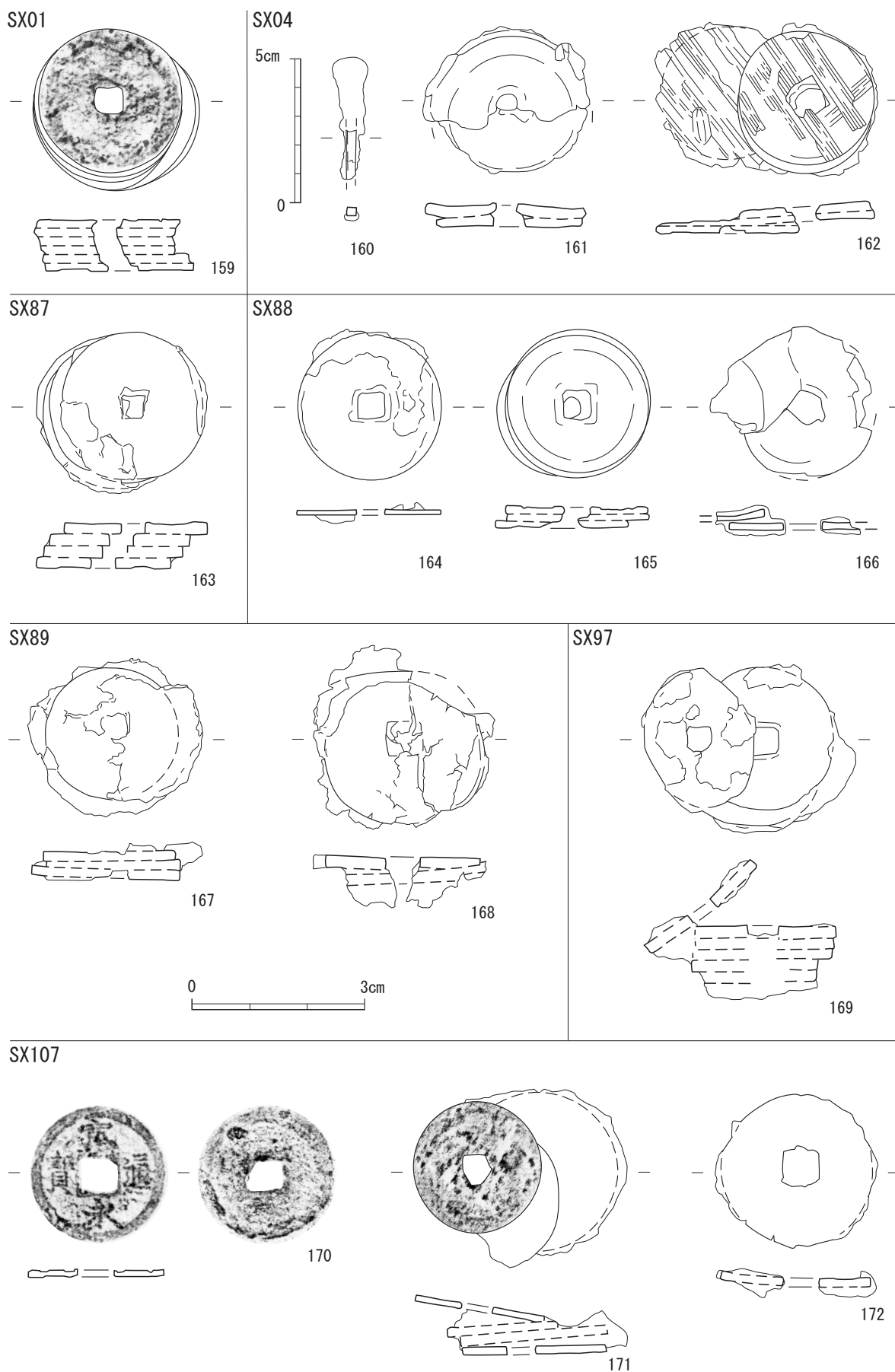
157 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、中位に沈線が巡る。端部は内側に折り曲げ玉縁状にして目跡がつく。胴部外面は工具を使ったヨコナデ調整をしている。内外面に褐色の釉を施すが、内面上位はハケ塗りし、外面はさらに灰黄色の釉を流し掛けする。口縁部と胴部の境は釉を剥ぎとり、底部外面は露胎である。

SX159（第68図、図版57）

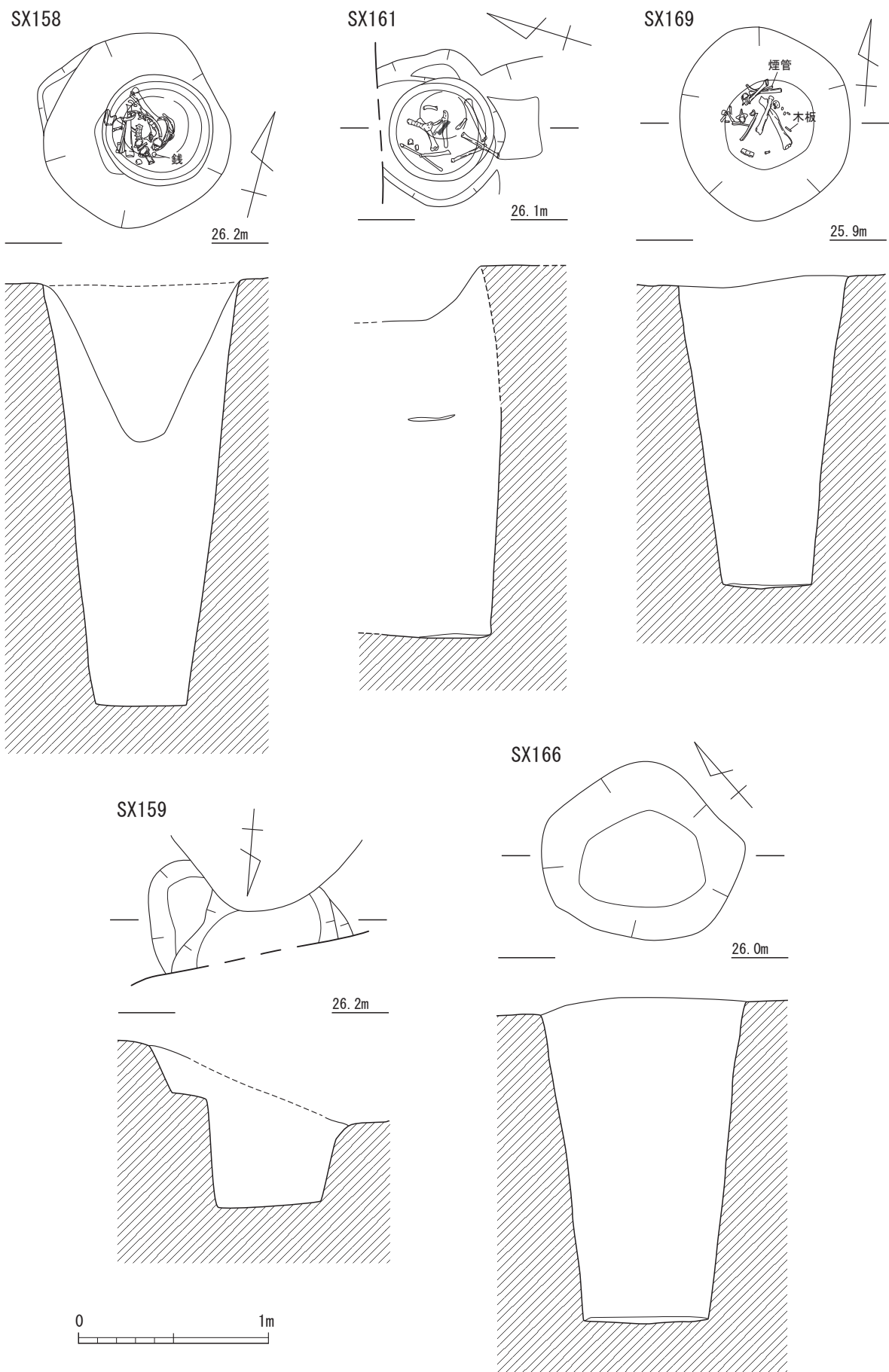
調査区北側に位置し、SX158に切られる。墓坑は直径1m前後の平面円形を呈するものと考えられる。深さは0.85mである。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

SX161（第66・68図、図版57・87）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸0.8m、短軸0.65m以上、平面円形を呈し、深さは1.95mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。櫛・数珠



第 67 図 SX01・04・87～89・97・107 出土遺物実測図
(160 は 1/2、他は原寸)



第 68 図 SX158・159・161・166・169 実測図 (1/30)

玉が出土した。

158は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部はやや外反して、中位に3条の沈線が巡る。端部は内側に肥厚し玉縁状になっている。胴部内面と、底部内面に格子目のタタキ痕が残っている。内外面に暗赤褐色の釉を施すが、口縁部と胴部の境は釉を剥ぎとり、内面はハケ塗りされる。

出土遺物（第71図、図版93・97）

木製品（179） 柁目材の櫛。

ガラス製品（180） 白色のガラスと赤褐色で半透明のガラスを組み合わせた瑪瑙のような玉である。数珠玉と思われるが他の数珠玉と比べ極端に大きく確実ではない。白色ガラスの表面部分に細かい亀裂が入る。孔には細い棒状の種類不明の金属が嵌る。

ガラス製品（181～186） 白色で半透明の数珠玉。透明度は高くない。気泡を多量に含む。多面体の玉で孔の部分2か所を除いて40面ある。

SX166（第68・70図、図版57・88）

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸1.1m、短軸0.9mの平面不整な円形を呈し、深さは1.7mである。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受ける。数珠玉が出土した。

173は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は強く外反し、中位に3条の沈線が巡る。端部は内側に肥厚し玉縁状で、目跡が残る。口縁部と胴部の境は釉を剥ぎとり、内面と底部内面に格子目のタタキ痕が残っている。外面は平行タタキに見えるが一部格子目になっている。全面に褐色の釉を施すが、上から灰黄色の釉を流し掛けしている。内面はハケ塗りで、底部外面は露胎である。

出土遺物（第71図、図版97）

ガラス製品（187・188） 白色の数珠玉の親玉。T字状の孔がある。

SX169（第68・70図、図版57・58・88）

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸0.9mの平面円形を呈し、深さは1.7mである。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受ける。銭・煙管・ボタン等が出土した。

174は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は上方で外反する。中位に3条の沈線を巡らせ、端部は内側に肥厚し玉縁状とする。胴部にタタキの痕は観察されず、内面を工具でヨコナデし、底部内面に格子目のタタキが残る。全面に明褐色の釉を施すが、上から黄褐色の釉を流し掛けしている。内面はハケ塗り。口縁部と胴部境は釉を剥ぎとり、底部外面は露胎である。口縁部に目跡が残る。

出土遺物（第71図、図版93）

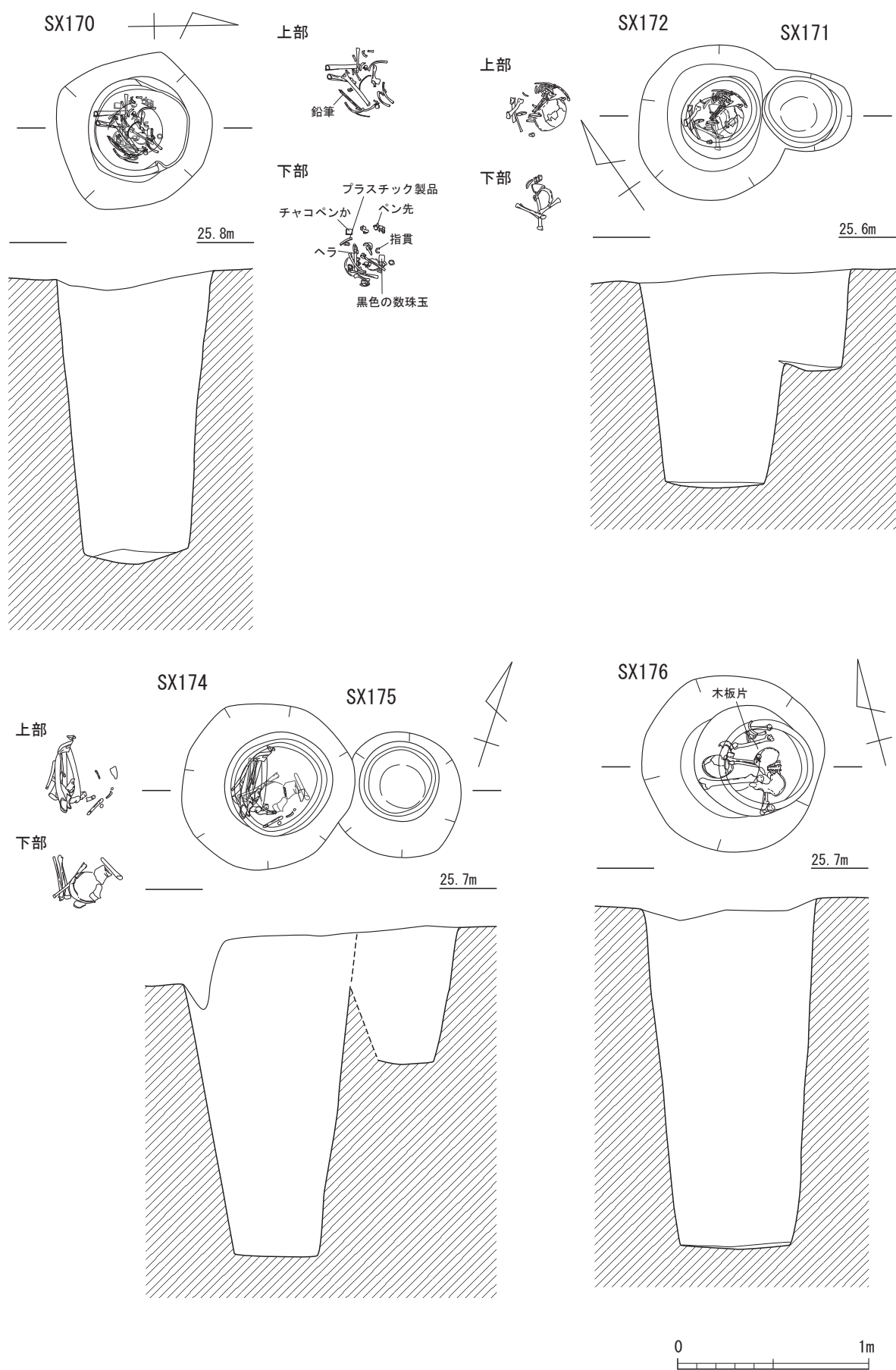
銅製品（189・190） 189は大正九年発行の桐模様の一銭銅貨。190は銅に銀鍍金か錫鍍金をした煙管で、羅字がない延煙管である。中央付近に円形で断面形が平たい台形の金具を嵌める。

SX170（第69図、図版58）

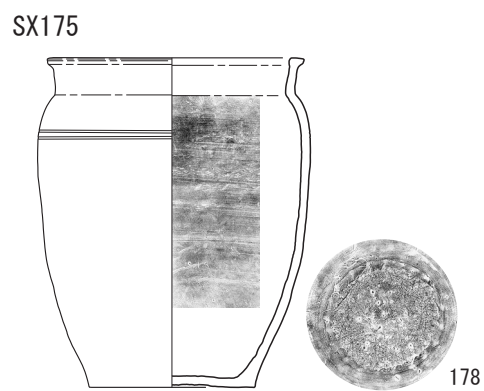
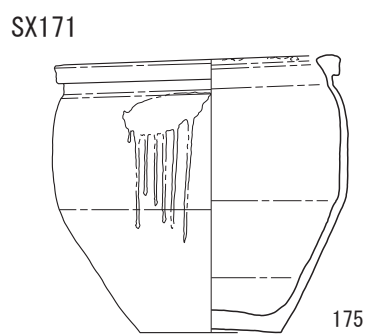
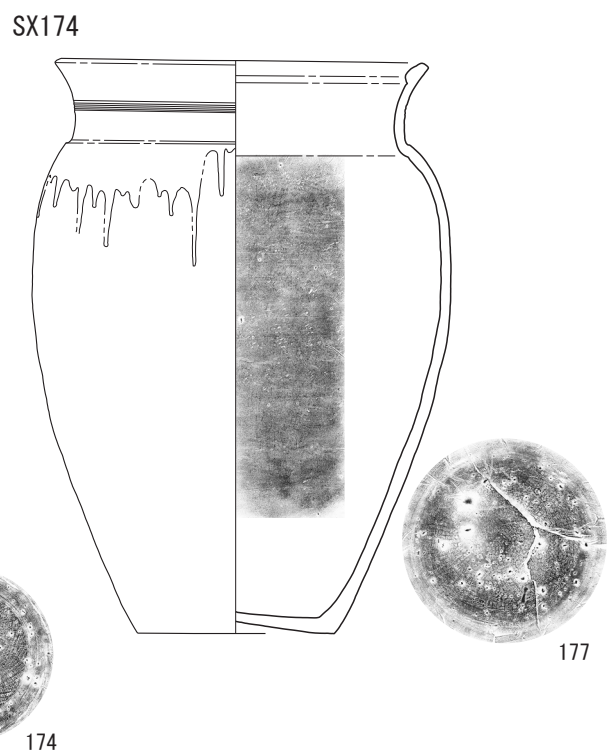
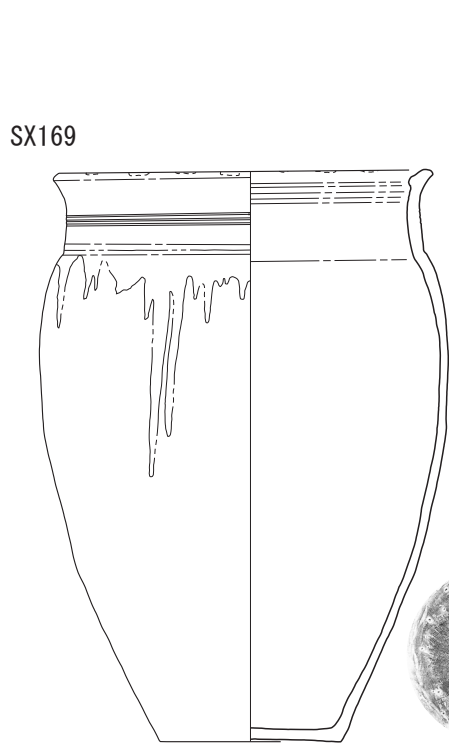
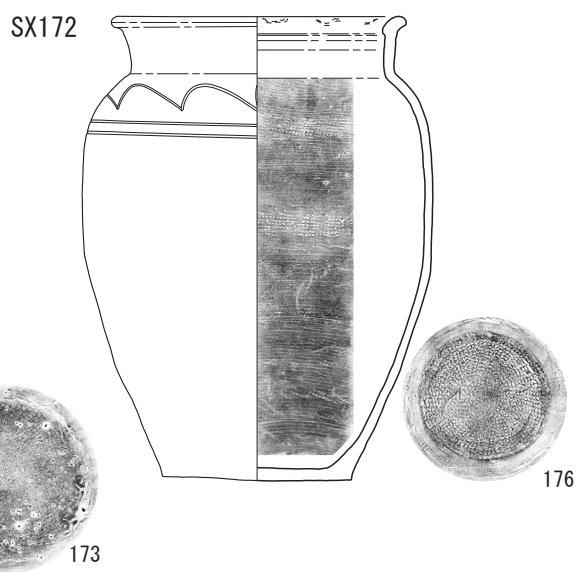
調査区北西部に位置し、SX171と重複する。墓坑は長軸0.8m、短軸0.8mの平面不整円形を呈し、深さは1.5mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。漆器・銭・指貫・へら・銭・プラスチック片が出土した。

出土遺物（第71図、図版94）

アルミ製品（191・192） 191は昭和十七年発行の十銭アルミ貨。拓本では鮮明に出ないが実測図左



第 69 図 SX170・171・172・174・175・176 実測図 (1/30)



第70図 SX166・169・171・172・174・175 甕棺実測図 (1/10)

側の模様は菊花である。192 は昭和十六年発行の一銭アルミ貨。実測図左側の模様は富士山の上に菊花である。

ガラス製品（193～198） 赤橙色の数珠玉が3点と黒色の数珠玉が52点出土し、黒色の数珠玉は3点図化した。193～195 は赤橙色の数珠玉で白玉状である。196～198 は黒色の数珠玉。

革製品（199） 指貫である。幅1cmの革に、縦横そろえて配列した点状の凹みを型押し、革の両端を紐綴りする。

骨製品（200） 裁縫に使用するへう。材質は動物の骨と思われる。赤・緑・白の塗装が一部に残存する。

木製品（201） 鉛筆である。断面六角形で14cmほど残存。外面は濃緑色の彩色が残り、端部に「N0」・「1988」の刻印が確認できる。

SX171（第69・70図）

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸0.4mの平面円形を呈し、深さは0.5mで、墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

175 は小形の甕。口縁部は短く立ち上がり、端部を外側にコの字形に作る。端部の釉は剥ぎとり、目跡が残る。内外面に光沢のある明褐色の釉を施し、一部肩部から黒色の釉を流し掛けしている。見込みに重ね焼きの痕があり、底部外面は露胎である。

SX172（第69・70図、図版58・88）

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸0.8m、短軸0.8mの平面円形を呈し、深さは1.1mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。木製品・布・むしろが出土した。

176 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち上がり端部を玉縁状にする。端部の釉は剥ぎとり、わずかに目跡が残っている。肩部に波状沈線、その下に2条の沈線が巡る。胴部・底部内面に格子目のタタキ痕が残るが、内外面とも工具を使ったヨコナデ調整を行い、褐色の釉を全面に施す。底部外面は露胎で、目跡が残る。

SX174（第69・70図、図版58・89）

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸0.9m、短軸0.9mの平面円形を呈し、深さは1.7mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭が出土した。

177 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し端部を玉縁状に作る。中位に3条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。胴部内面と底部内面に格子目のタタキが残り、外面は工具を使ってヨコナデ調整される。暗赤褐色の釉を全面に施し、さらに肩部は灰黄色の釉を流し掛けしている。口縁部に目跡がある。

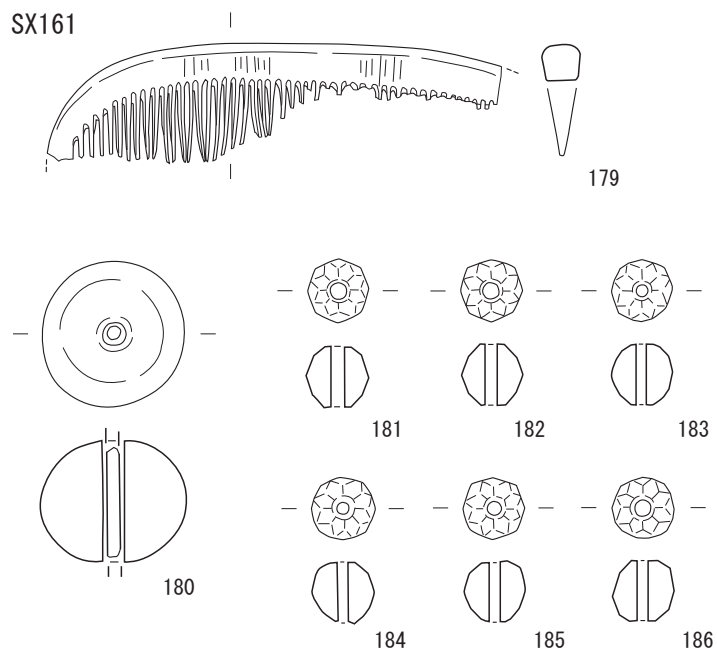
出土遺物（第74図、図版99）

銅製品（208・209） 208 は銭文不明だが、直径から判断すると桐模様の一銭青銅貨か鳥模様の黄銅貨と考えられる。209 は銭文不明の銅貨。

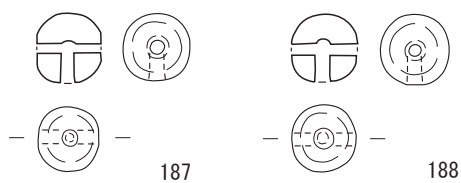
SX175（第69・70図、図版89）

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸0.6m、短軸0.6mの平面円形を呈し、深さは0.7mである。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

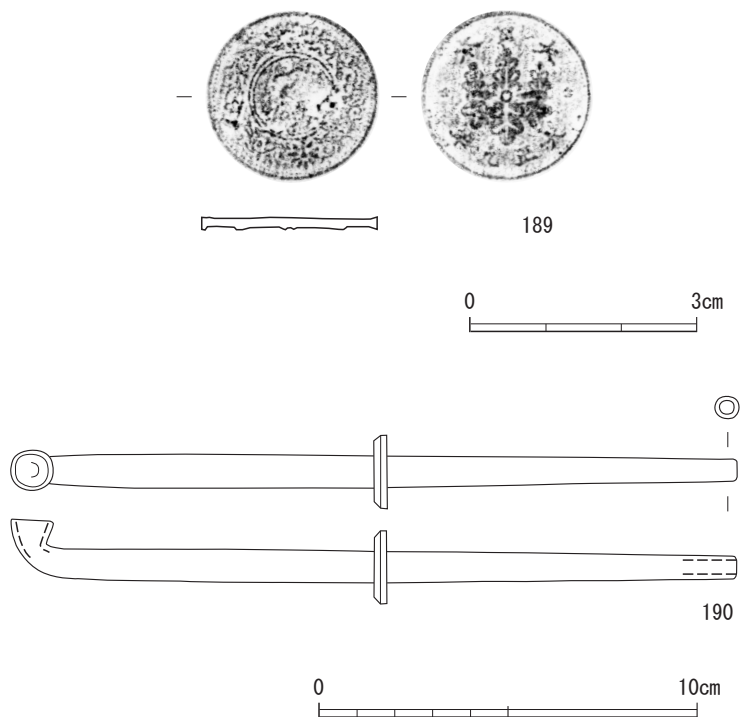
SX161



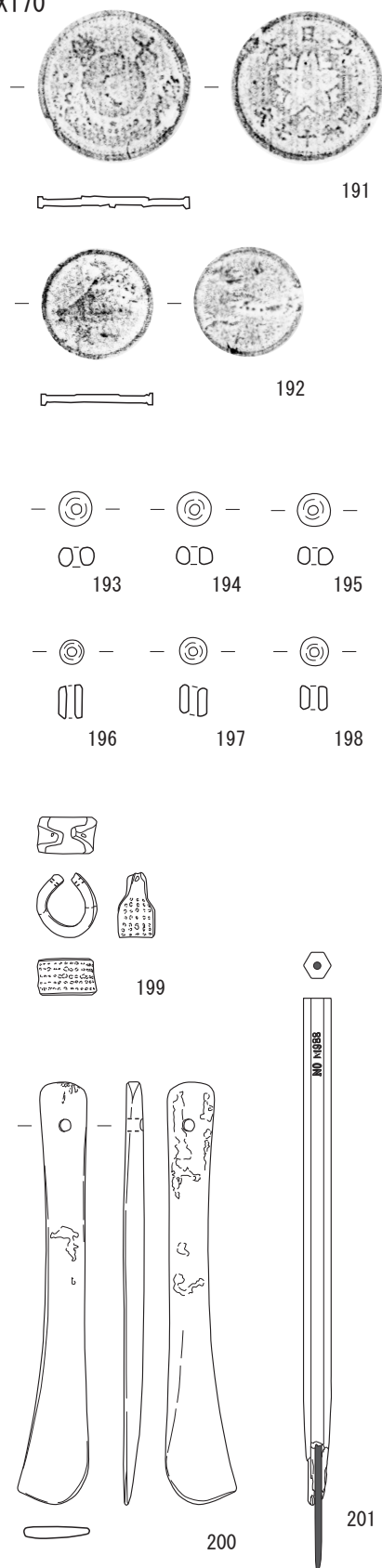
SX166



SX169



SX170



第 71 図 SX161・166・169・170 出土遺物実測図
(179・190・199～201は1/2、他は原寸)

178 は小形の甕。口縁部は立ち上がり、端部は逆L字状に近い。調整は大甕とほぼ同じで、胴部上位に2条の沈線を巡らせ、胴部内面と底部内面に格子目のタタキが残る。底部外面を除いて、光沢の無い暗褐色の釉を施す。

SX176 (第69図、図版58)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸0.9mの平面円形を呈し、深さは1.8mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・布・板片が出土した。

出土遺物 (第74図、図版99)

銅製品 (210) 桐模様の一銭青銅貨である。元号の部分が錆のために判読できないが大正九年か昭和九年発行のものである。

SX178 (第72・73図、図版59・89)

調査区北西部に位置する。墓坑は長軸0.9m、短軸0.9mの平面円形を呈し、深さは1.7mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。木片・銭・足袋金具が出土した。

202 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は立ち気味で、端部を玉縁状に作る。中位に2条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。肩部に直径1.5cm弱、厚さ0.2cmほどのボタン状の浮文を貼り付ける。胴部内面と底部内面に格子目のタタキを行って、外面は平行タタキと思われ、内外面とも工具でヨコナデ調整を行っている。全面に暗褐色の釉を施し、さらに口縁から胴部上位は灰黄色の釉を流し掛けしている。口縁端部には目跡が残る。

出土遺物 (第74図、図版99)

銅製品 (211・212) 211 は錆のために銭文は不明瞭であるが、銅銭の寛永通宝である。212 は左側で「1/2 SEN」の文字が判読できるのと、直径から判断して半銭青銅貨である。

SX179 (第72・73図、図版59・89)

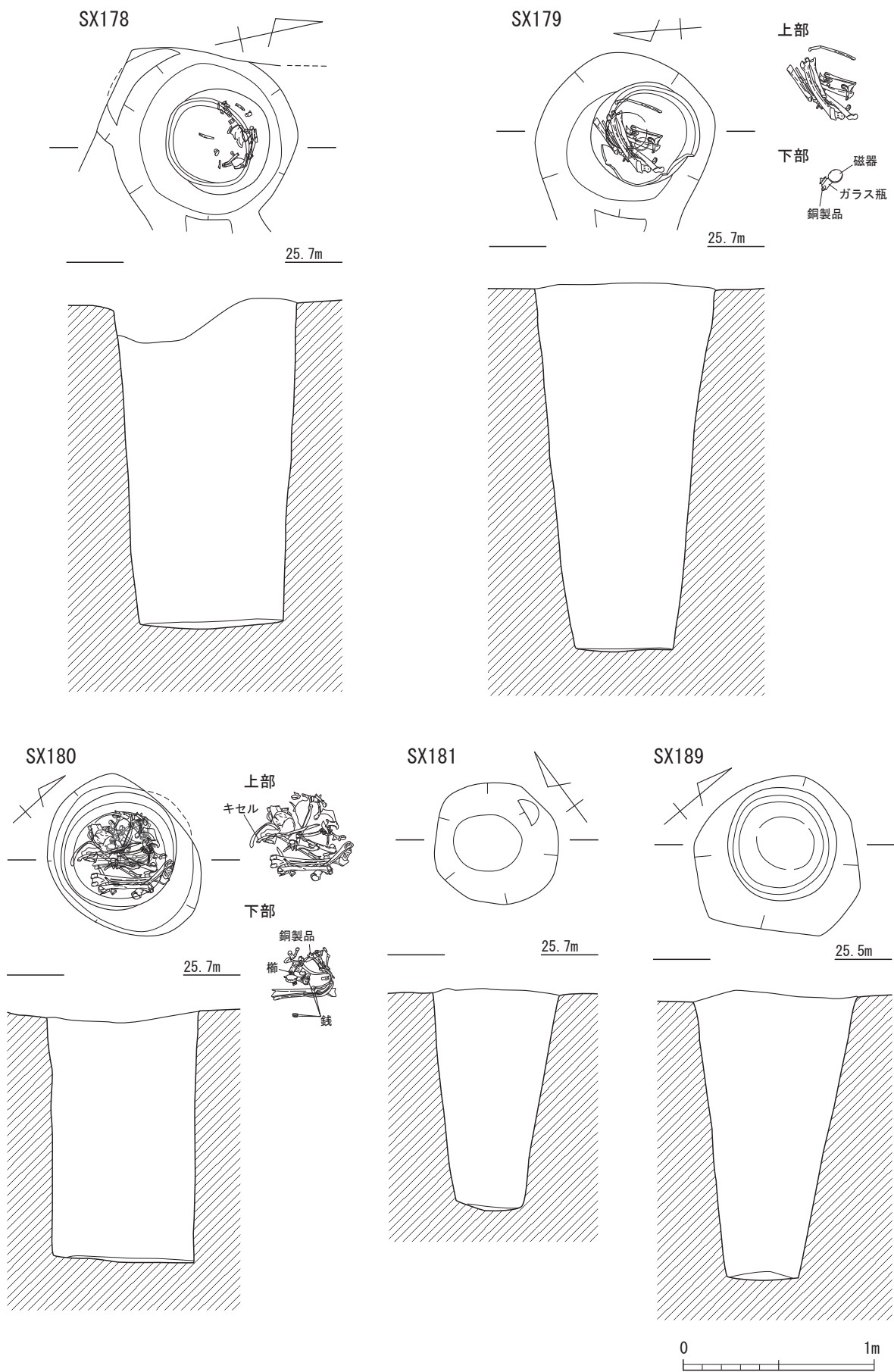
調査区北西部に位置する。墓坑は長軸0.9m、短軸0.9mの平面円形を呈し、深さは1.9mである。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。磁器碗・猪口・ガラス瓶・銅製品が出土した。

203 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状に作る。中位に3条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。タタキの痕は、わずかだが胴部内面と底部に格子目の痕が観察される。全面に暗赤褐色の釉を施して、内面はハケ塗りである。口縁端部には目跡が残る。

出土遺物 (第74図、図版94)

陶磁器 (213・214) 213 は染付磁器の紅皿。外面に蛸唐草風の模様と「京都」・「紅清」・「都紅」の文字を印刷絵付する。全面に施釉した後、高台畳付の釉を剥ぎとる。214 は小碗。外面に緑色と褐色の絵の具を使った風景の印刷絵付をした後、全面に透明釉を施釉し、高台畳付の釉を剥ぎとる。外面高台内には「柏山精製」の緑色の文字。

ガラス製品 (215) 蓋付瓶で化粧品の瓶と思われる。内面の器壁には白色の内容物が付着する。蓋は身に固く嵌り、取り外せない。



第72図 SX178～181・189実測図(1/30)

銅製品 (216) 指貫と思われる。端と端を重ねた円環で、重ねた部分と反対側の使用部分の方が幅広である。

SX180 (第 72・73 図、図版 59・90)

調査区中央西側に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.8m の平面楕円形を呈し、深さは 1.25m である。墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残るが改葬を受けているものと考えられる。銭・銅製品・櫛・煙管が出土した。

204 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は外反し、端部は内側に肥厚して玉縁状となる。中位に 2 条の沈線を巡らせ、胴部との境は釉を剥ぎとっている。胴部外面と底部内面には格子目のタタキ痕が残るが、上から工具を使ったヨコナデ調整を行っている。全面に施釉され暗褐色を呈す。内面はハケ塗りしている。口縁端部に目跡が残る。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (217～222) 217～220 は銭で、217～219 の銭文は不明である。217・219 は、直径から判断すると桐模様の一銭青銅貨か鳥模様の一銭黄銅貨である。218 は直径から判断すると小型の五銭白銅貨か五銭アルミ青銅貨と考えられる。219 は木質が付着する。220 は二銭銅貨。221 は煙管の雁首で、羅字が一部残存する。劣化はするが布でくるまれていた状態である。222 は鳥形の金具で銅に銀鍍金か錫鍍金をしている。輪郭を少し突出させ、裏側には L 字状の突起がある。突起があることから何かに嵌めて使用したものだろう。

SX181 (第 72・73 図、図版 59・90)

調査区中央西側に位置する。墓坑は長軸 0.65m、短軸 0.65m の平面円形を呈し、深さは 1.15m である。銭が出土した。

205 は肥前産陶器の中甕 (ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状に作る。中位に 1 条の沈線を巡らせ、胴部との境の釉は剥ぎとる。胴部の張りは小さく寸胴形である。沈線は胴部の上位に 3 条、中位に 2 条巡る。底部内面は格子目のタタキが残っているが、胴部には観察されず、工具を使ったヨコナデ調整を行っている。内外面に赤褐色の釉を施し、上から灰黄色の釉を流し掛けする。口縁部には目跡が残る。

出土遺物 (第 74 図、図版 99)

銅製品 (223) 銭文不明だが、直径から判断すると竜模様の一銭銅貨である。

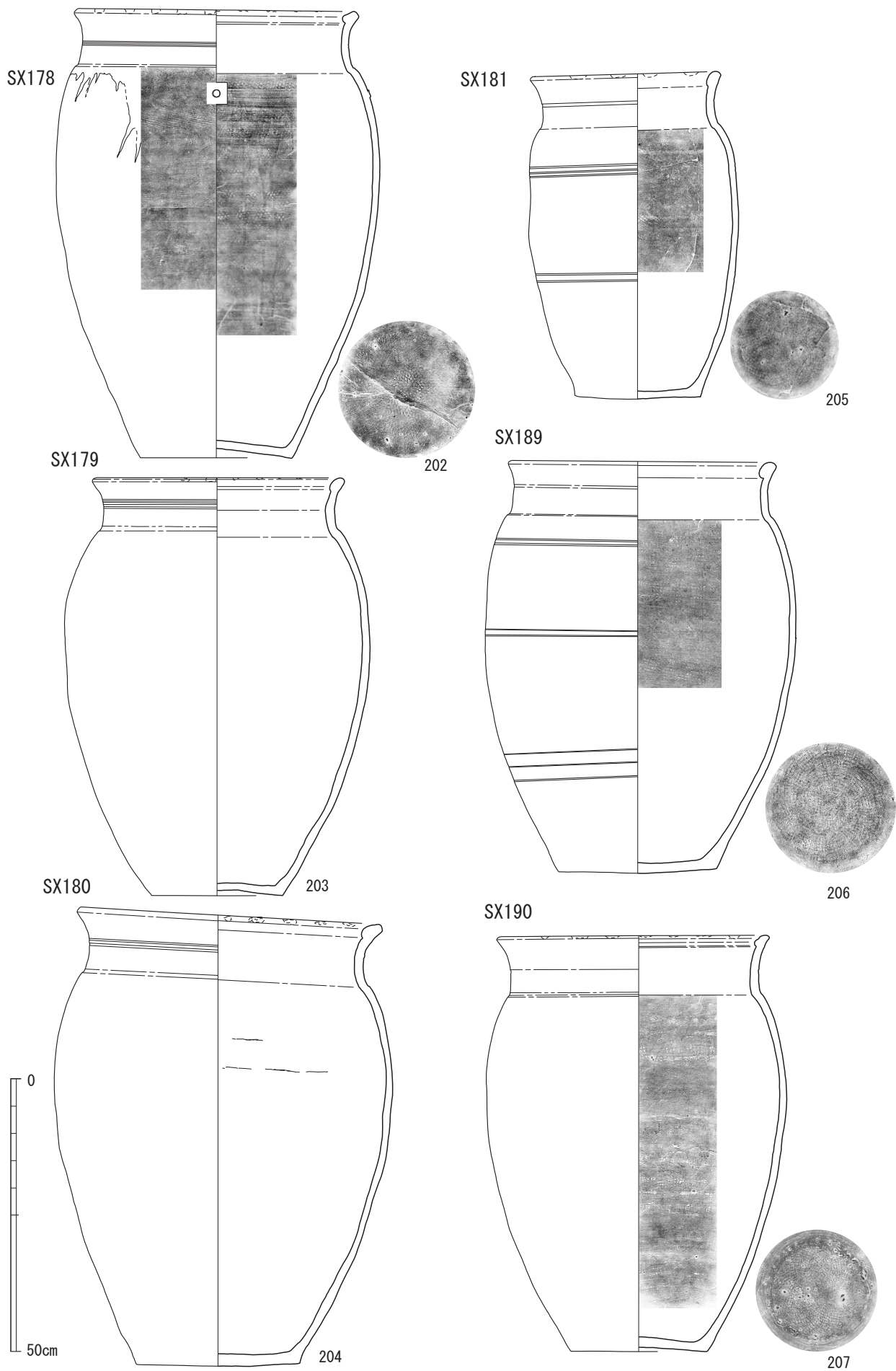
SX189 (第 72・73 図、図版 59・90)

調査区南西部に位置する。墓坑は長軸 0.85m、短軸 0.85m の平面円形を呈し、深さは 1.5m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

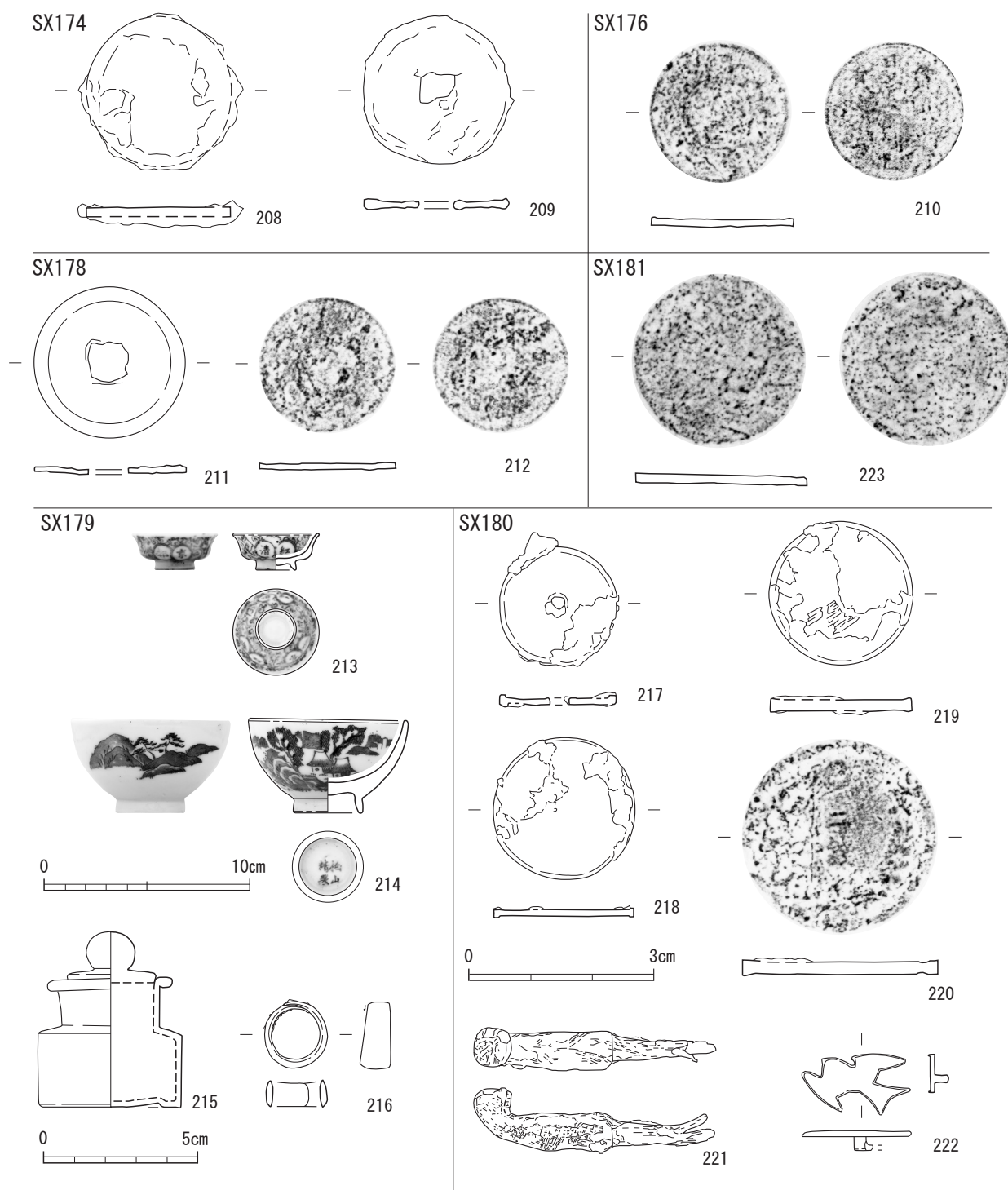
206 は肥前産陶器の大甕 (ハンズーガメ)。口縁部は立ち気味で、端部を玉縁状に作り、中位に浅い段がつく。胴部上位に 2 条、中位に 2 条、下位に 3 条の沈線を巡らす。胴部内面に格子目のタタキ痕がわずかに残り、底部内面も格子目で螺旋状に叩いている。底部外面を除いて暗褐色の釉を施し、上から灰黄色の釉を流し掛けする。口縁端部は釉が剥ぎとられ、わずかに目跡が残っている。

SX190 (第 75・73 図、図版 59・90)

調査区南西部に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.95m である。



第 73 図 SX178 ～ 181・189・190 甕棺実測図 (1/10)

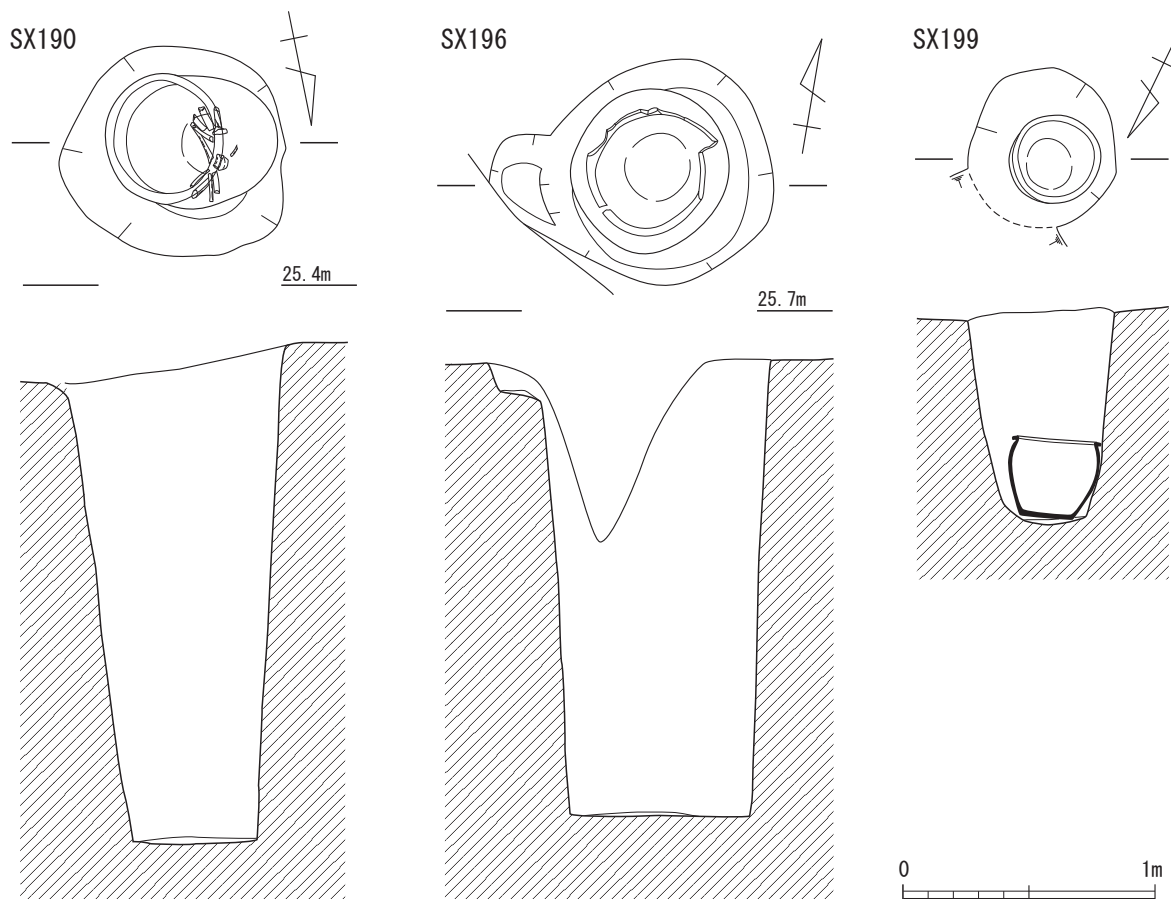


第74図 SX174・176・178～181 出土遺物実測図
(213・214は1/3、215・216・221・222は1/2、他は原寸)

墓坑内に甕棺を埋置し、甕棺内部には人骨が残る。青磁片が出土した。

207は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、端部は小さい玉縁状となる。中位には段がつき、胴部との境の釉を剥ぎとる。胴部内面、底部内面に格子目叩きを行っている。全面に明褐色の釉を施しているが、内面は粗くハケ塗りされている。口縁端部に目跡が残る。

SX196（第75・76図、図版60・91）



第 75 図 SX190・196・199 実測図 (1/30)

調査区中央西側に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.85m の平面円形を呈し、深さは 1.8m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

224 は肥前産陶器の大甕（ハンズーガメ）。口縁部は外反し、端部は玉縁状となる。中位に 2 条の沈線を巡らせ、胴部との境の釉を剥ぎとっている。口縁部には目跡が残る。胴部内面にはわずかに格子目と思われるタタキ痕が残し、外面は工具を使ってヨコナデ調整を行っている。底部外面を除き明褐色の釉を施す。

SX199（第 75・76 図、図版 60・91）

調査区南西部に位置する。墓坑は長軸 0.6m、短軸 0.6m の平面円形を呈し、深さは 0.85m である。墓坑内に甕棺を埋置する。副葬品はない。

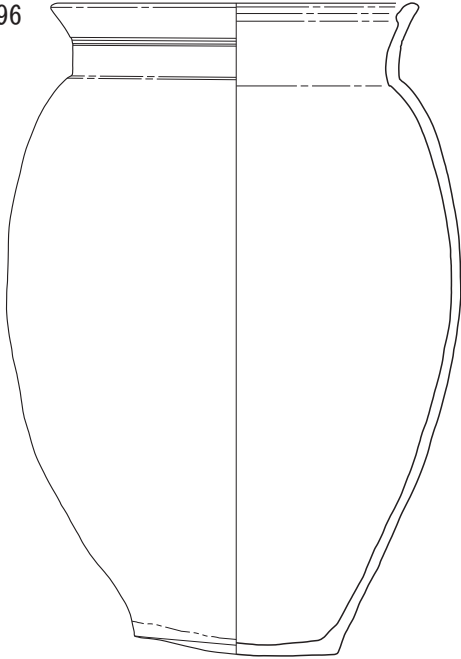
225 は小形の甕。口縁端部は外側にコの字形に作る。底部外面を除いて全面に暗赤褐色の光沢のある釉を施している。底部外面に緩くカーブした平行線の圧痕がある。

帰属不明甕棺（第 76・77 図、図版 91～93）

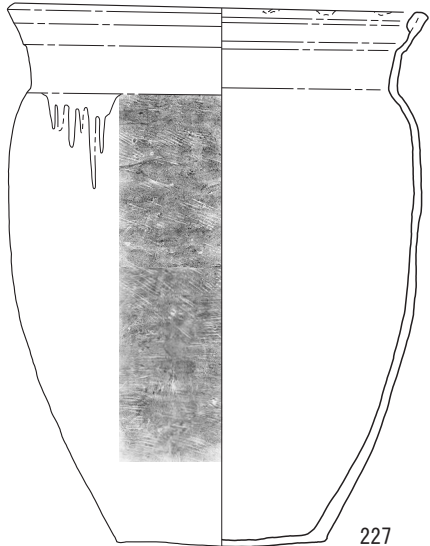
ここでは、収蔵の過程で遺構番号が不明となった近世甕棺について報告する。

226 は肥前産の中甕（ハンズーガメ）。口縁部は立ち気味で端部は玉縁状にする。胴部は内外面を格子目叩きし、工具を使ってヨコナデ調整している。外面には螺旋状に沈線が巡っている。暗褐色の釉を施すが、口縁部と底部外面は露胎で、それぞれに目跡が残る。227 は肥前産陶器の大甕

SX196

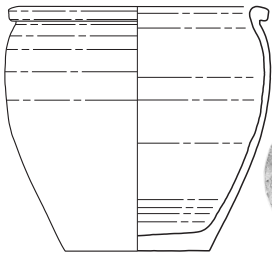


224

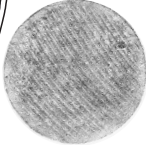


227

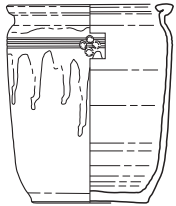
SX199



外底

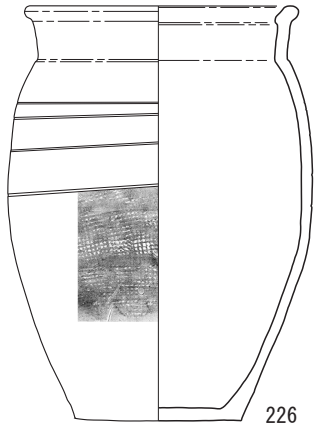


225

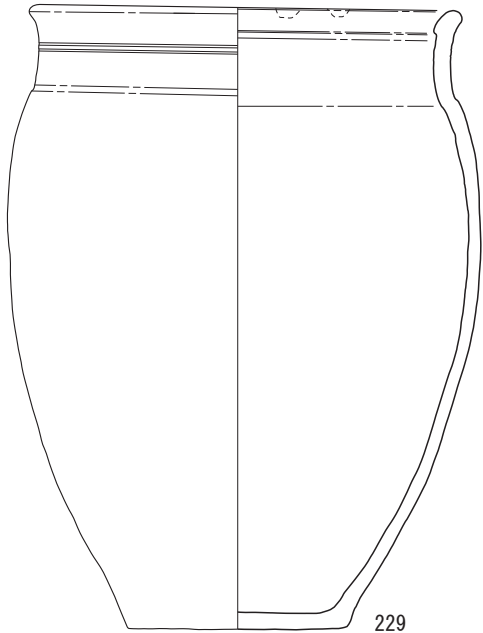


228

帰属不明



226



229

第 76 図 SX196・199・帰属不明甕棺実測図 (1/10)

(ハンズーガメ)。口縁部は外反させ中位に段がつく。端部は内側に折り曲げて玉縁状にする。胴部外面の叩きは平行タタキに見えるが一部は格子目である。全面施釉され、上から灰黄色の釉を流し掛けする。底部内面には鉄銭と思われる痕が残っている。228 は小形の甕。口縁部は短く立ち上がり、端部を内側に折り曲げ内外に肥厚させて上面は水平である。寸胴形で、肩部に3条の沈線を巡らせ、その上の対称位置に4個の円を花文のように押圧している。内外面に黄褐色の釉を施し、さらに肩部に白釉を流し掛けする。底部外面は露胎である。229 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側を肥厚させた玉縁状である。中位に2条の沈線が巡る。胴部に張りとはほとんど無い。胴部にタタキ痕は観察されず、内外面ともヨコナデ調整を行っているが、底部内面には、わずかに格子目が残っている。底部外面を除いて全面に赤褐色の釉を施し、口縁と胴部の境の釉は剥ぎとる。口縁部と底部外面に目跡が付く。230 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は外反し、端部は玉縁状で外側にも肥厚させる。胴部はほとんど膨らまず、胴部上位、中位にそれぞれ3条の沈線が巡る。上位沈線の下に工具の当たりのような傷が残り、中位の沈線上に刷毛状の工具で横方向に引っ掻いた線刻が25cmほど残る。胴部には内外面ともタタキ痕は残らず、底部内面にわずかに格子目が観察される。暗褐色の釉を施すが、底部外面は露胎である。口縁部と底部外面に目跡が付いている。231 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部は立ち上がり、端部は内側に肥厚させた玉縁状で、外側は上位に段がつく。胴部内面と底部に格子目のタタキ痕があるが、外面はカキ目調整されている。胴部上位に2条、中位に2条、下位に3条の沈線が巡る。暗褐色の釉の上に黄褐色の釉を流し掛けし、底部外面は露胎、内面は刷毛塗りである。口縁部に目跡が付く。232 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状にする。中位には3条の沈線が巡っている。胴部には内外面ともタタキ痕は残っていないが、底部内面に格子目タタキがわずかに観察される。底部外面を除いて、全面施釉されるが、口縁と胴部の境は釉を剥ぎとり、内面は刷毛塗りである。口縁部に目跡が残っている。233 は肥前産陶器の大甕(ハンズーガメ)。口縁部はやや外反し、端部を玉縁状にする。中位には段が付いている。胴部外面にはタタキ痕は残らないが内面下位に、平行タタキの痕が見える。また底部内面には格子目のタタキが明瞭に残っている。胴部上位に2条、下位に3条沈線が巡る。明褐色の釉が内外面に施され上から灰黄色の釉を重ね掛けする。口縁部と胴部の境の釉は掻きとって、底部外面も露胎である。口縁部は釉を剥ぎとり目跡がつく。

②桶棺墓・縦棺墓

SX02 (第78図、図版60)

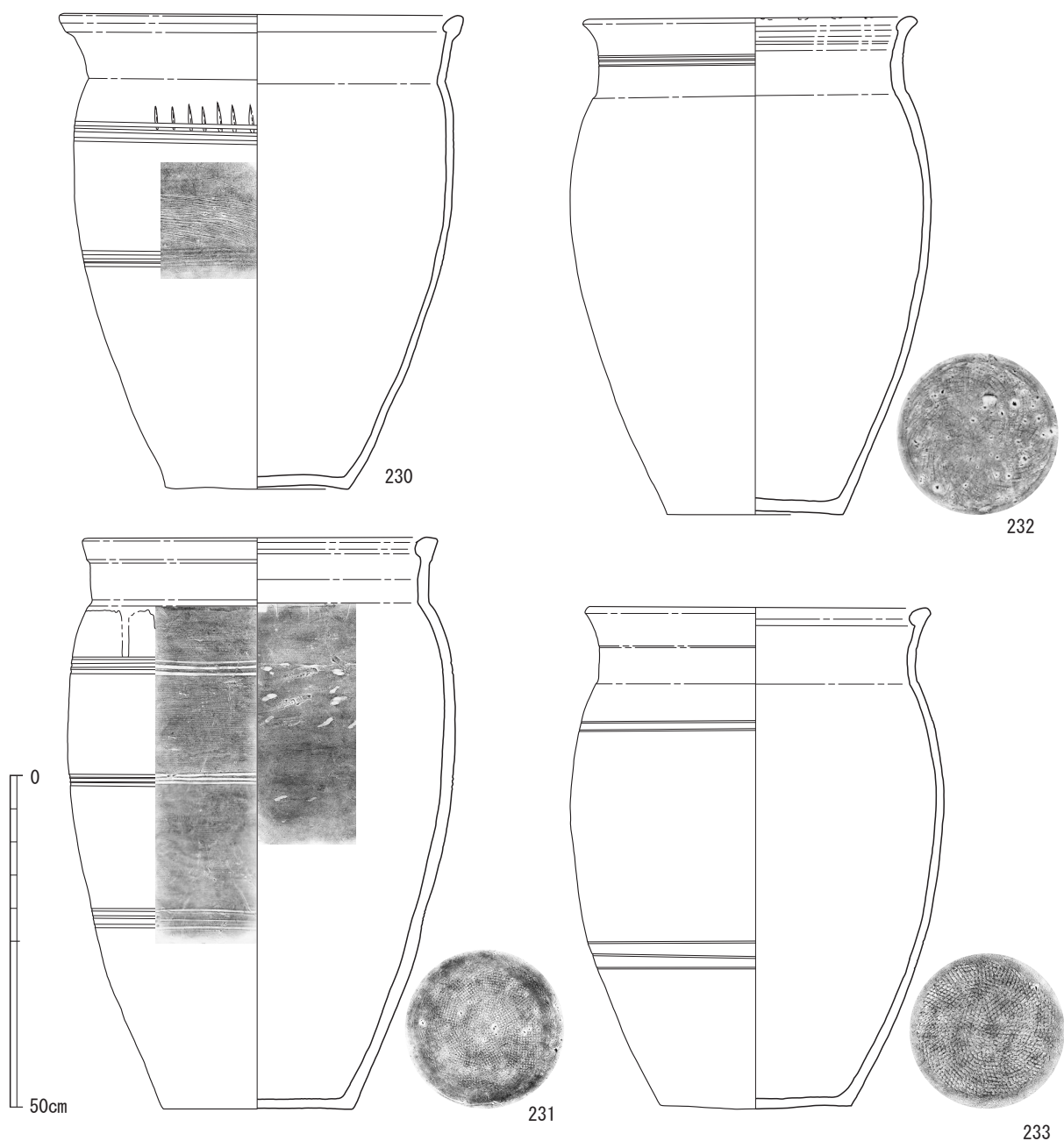
調査区南側に位置する。墓坑は長軸1.0m、短軸0.9mの平面楕円形を呈し、深さは0.7mである。墓坑内から銭・陶器片・釘が出土した。

出土遺物 (第83図、図版94・99)

銅製品 (234～236) 234・235 は銅銭の寛永通宝である。236 は4枚が銹のため重なって固着する銅銭で、うち1枚は寛永通宝である。

鉄製品 (237～242) いずれも丸釘で、棺材が残存する。

SX06 (第78図、図版60)



第 77 図 帰属不明甕棺実測図 (1/10)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の平面円形を呈し、深さは 1.75m である。墓坑内から釘が出土した。

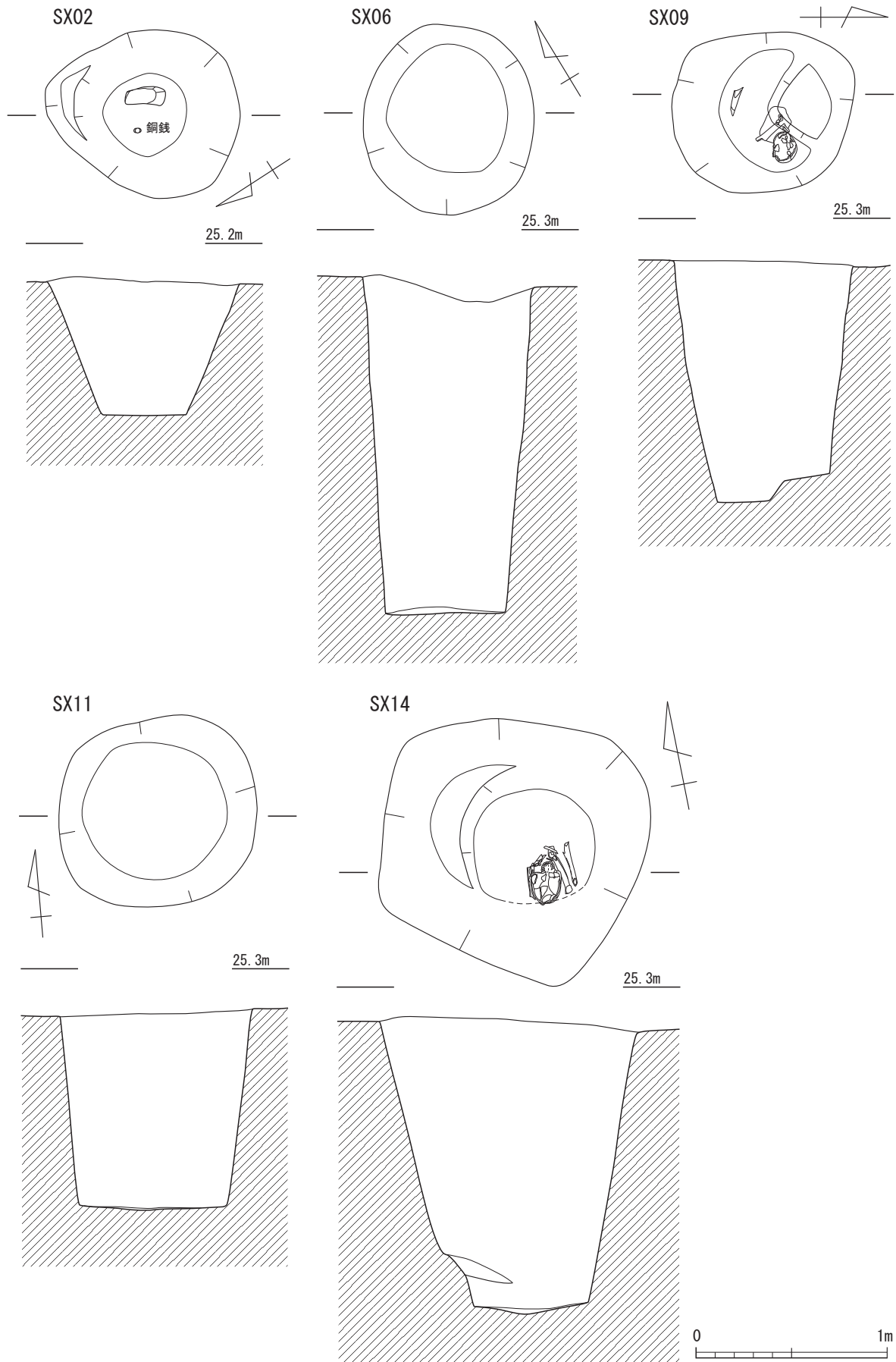
出土遺物 (第 83 図、図版 83・94)

鉄製品 (243) 角釘で、棺材が残存する。先端は折れ曲がり、頭部は欠損する。

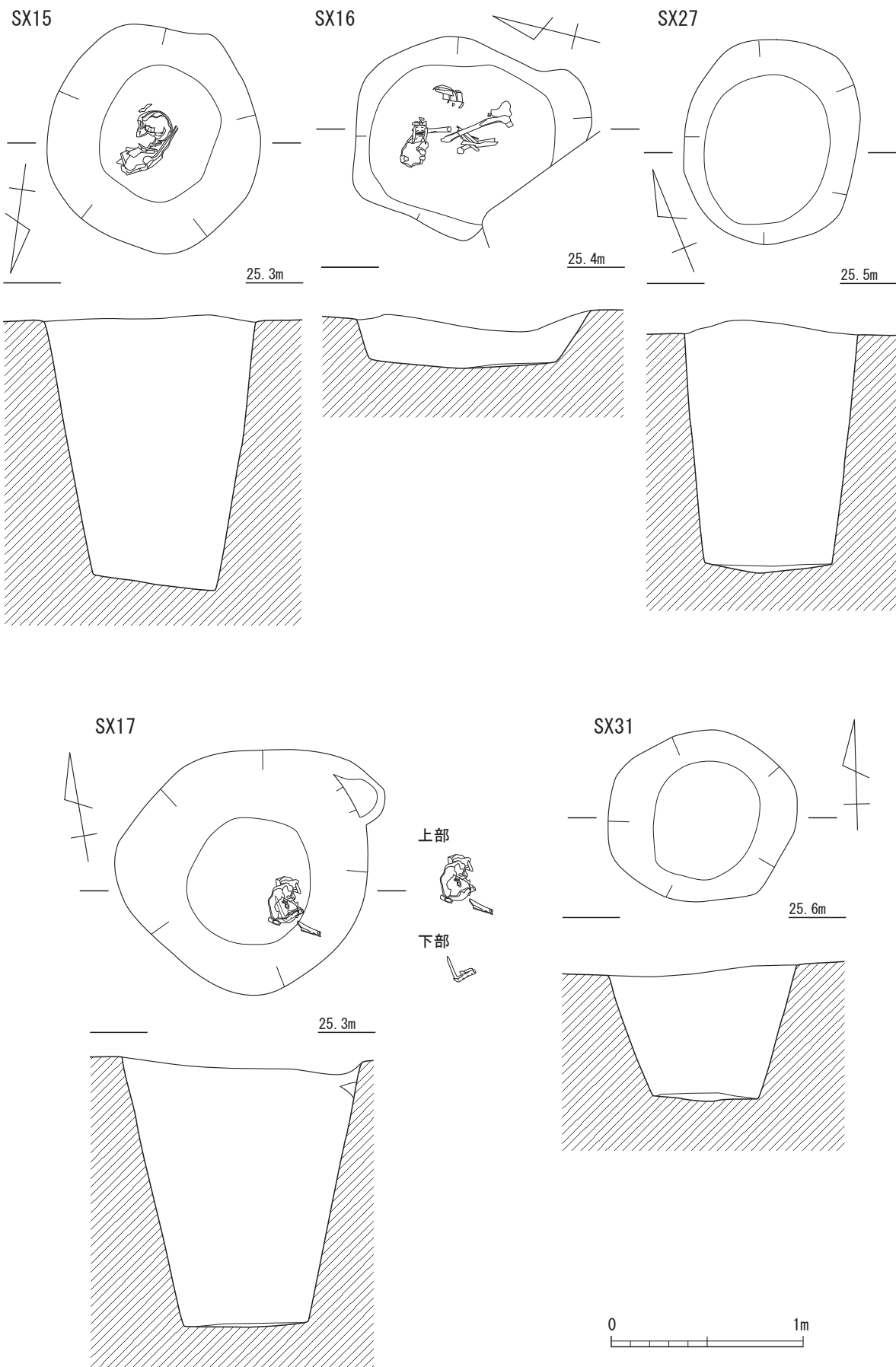
石製品 (244) 黒曜石製の石鏃で、先端を欠失する。

SX09 (第 78 図、図版 60)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.85m の平面楕円形を呈し、深さは 1.25m である。人骨が残る。副葬品はない。



第 78 図 SX02・06・09・11・14 実測図 (1/30)



第 79 図 SX15 ~ 17・27・31 実測図 (1/30)

SX11（第78図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.05m、短軸 0.95m の平面楕円形を呈し、深さは 1.0m である。副葬品はない。

SX14（第78図、図版60）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.4m、短軸 1.4m の平面不整な円形を呈し、深さは 1.55m である。墓坑内に人骨が残り、銭・木質・土器片が出土した。

出土遺物（第83図、図版99）

銅製品・鉄製品（245） 6枚が銹のため重なって固着する銅銭と鉄銭である。実測図の上から4枚が銅銭で、下2枚が鉄銭である。銭文は不明。

SX15（第79図、図版60）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.15m、短軸 1.1m の平面円形を呈し、深さは 1.4m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX16（第79図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 0.65m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.25m である。墓坑内に人骨が残り、磁器片が出土した。

SX17（第79図、図版61）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸 1.3m の平面円形を呈し、深さは 1.4m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX27（第79図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 1.3m である。墓坑内から土師器片が出土した。

SX31（第79図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 0.7m である。墓坑内から土器片が出土した。

SX38（第80図）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.1m の平面円形を呈し、深さは不明である。墓坑内に人骨が残り、銭が出土した。

SX39（第80図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸 1.3m の平面不整な円形を呈し、深さは 1.75m である。墓坑内から土器片・棺材や銭が出土した。

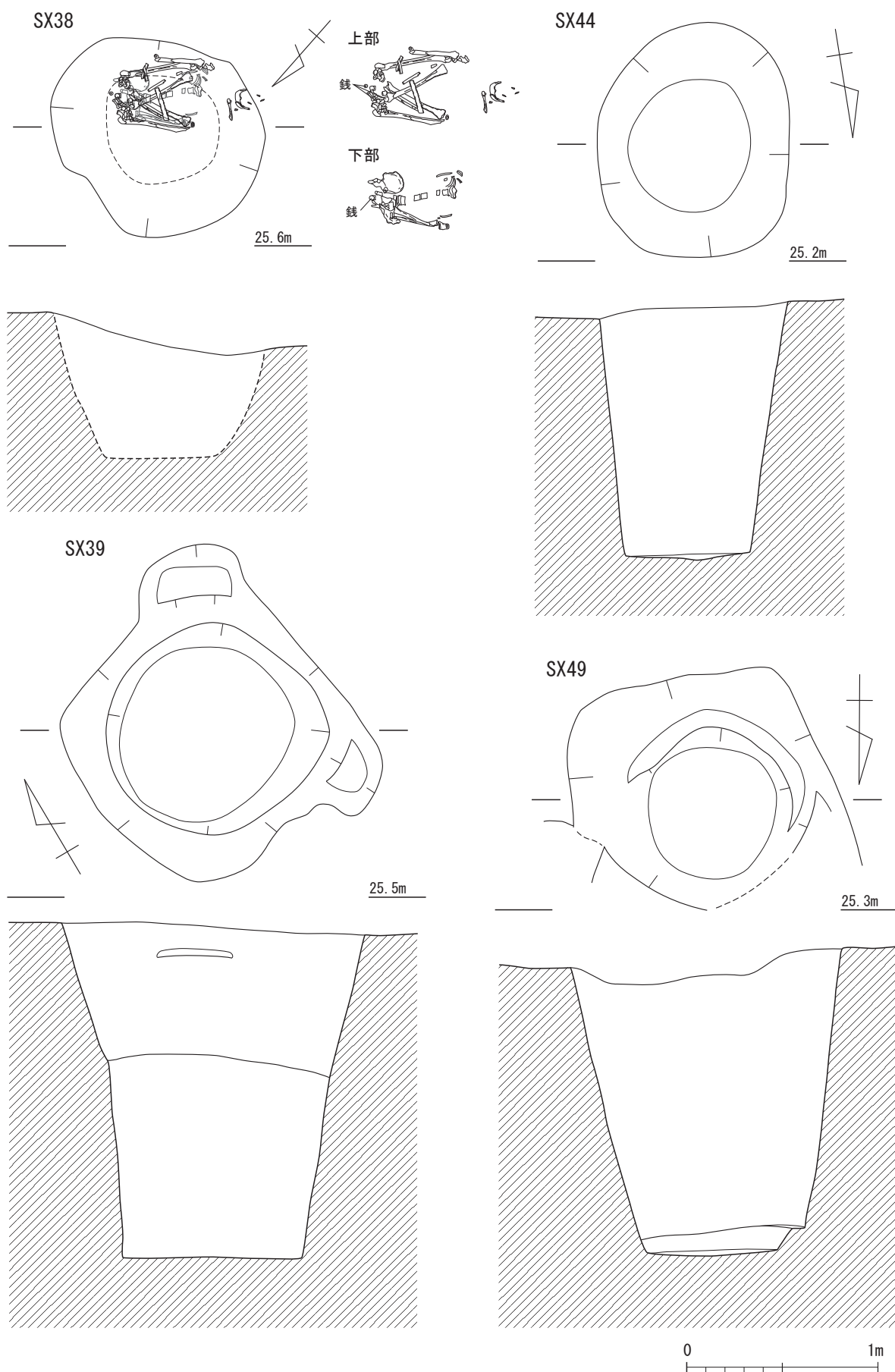
出土遺物（第83図、図版99）

銅製品（246～248） 246～248は銅銭の寛永通宝である。

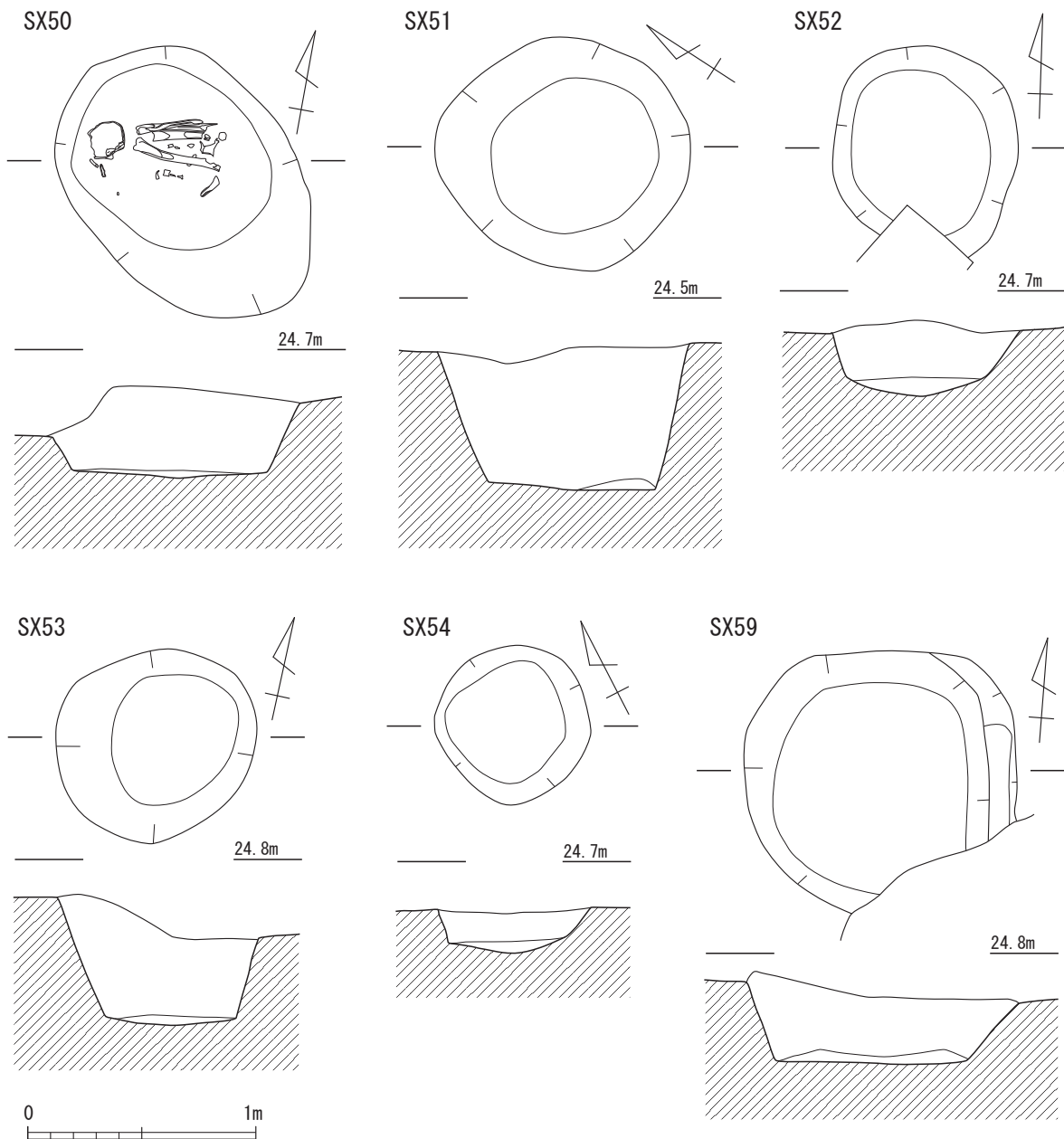
SX44（第80図）

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 1.0m の平面楕円形を呈し、深さは 1.3m である。副葬品はない。

SX49（第80図）



第80図 SX38・39・44・49実測図(1/30)



第 81 図 SX50 ～ 54・59 実測図 (1/30)

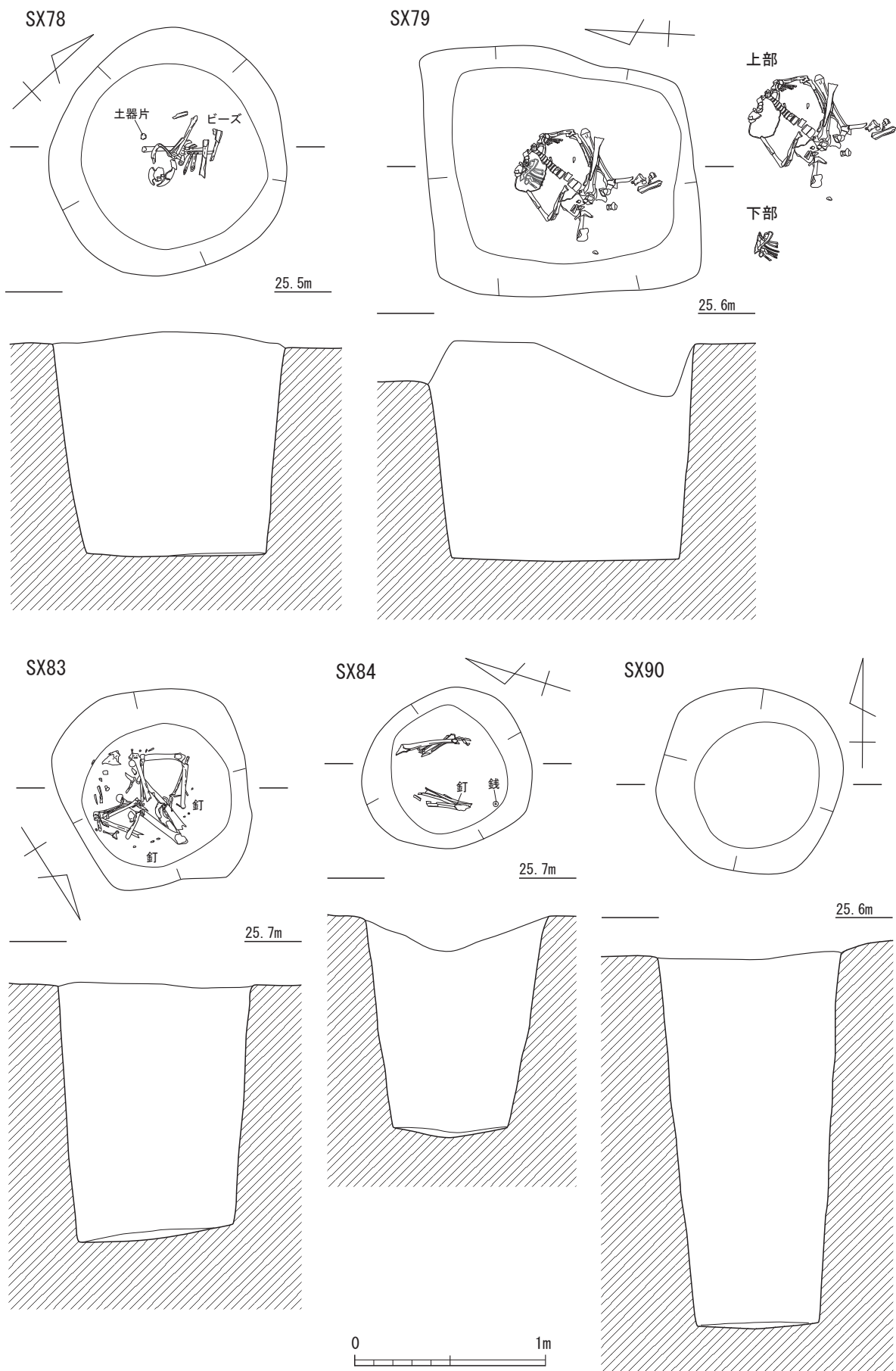
調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸は不明で、平面隅丸方形と考えられる。深さは 1.75m である。副葬品はない。

SX50 (第 81 図、図版 61)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 1.35m、短軸 0.95m の平面楕円形を呈し、深さは 0.4m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX51 (第 81 図、図版 61)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.0m の平面楕円形を呈し、深さは 0.65m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。



第 82 図 SX78・79・83・84・90 実測図 (1/30)

SX52 (第 81 図)

調査区南東部に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.8m の平面楕円形を呈し、深さは 0.35m である。磁器皿が出土した。

出土遺物 (第 83 図、図版 95)

陶磁器 (249) 色絵磁器の皿。口縁部は輪花で、全面に施釉の後、高台畳付の釉を剥ぎ取る。内面は編み籠状の型押文をつけ、見込みに赤い海老を線描きする。

SX53 (第 81 図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.8m の平面楕円形を呈し、深さは 0.6m である。副葬品はない。

SX54 (第 81 図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 0.7m、短軸 0.7m の平面円形を呈し、深さは 0.2m である。副葬品はない。

SX59 (第 81 図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m、短軸 1.15m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.4m である。副葬品はない。

SX78 (第 82 図、図版 61)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.25m、短軸 1.25m の平面円形を呈し、深さは 1.2m である。墓坑内に人骨が残る。玉・土器片が出土した。

出土遺物 (第 83 図、図版 97)

ガラス製品 (250 ~ 252) 数珠玉が 3 点出土した。250 は明黄褐色半透明の数珠玉。251・252 は白色に風化するが半透明の数珠玉。

SX79 (第 82 図、図版 61)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.4m、短軸 1.3m の平面長方形を呈し、深さは 1.1m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX83 (第 82 図、図版 61)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 1.0m の平面円形を呈し、深さは 1.4m である。墓坑内に人骨が残る。釘が出土した。

SX84 (第 82 図、図版 61)

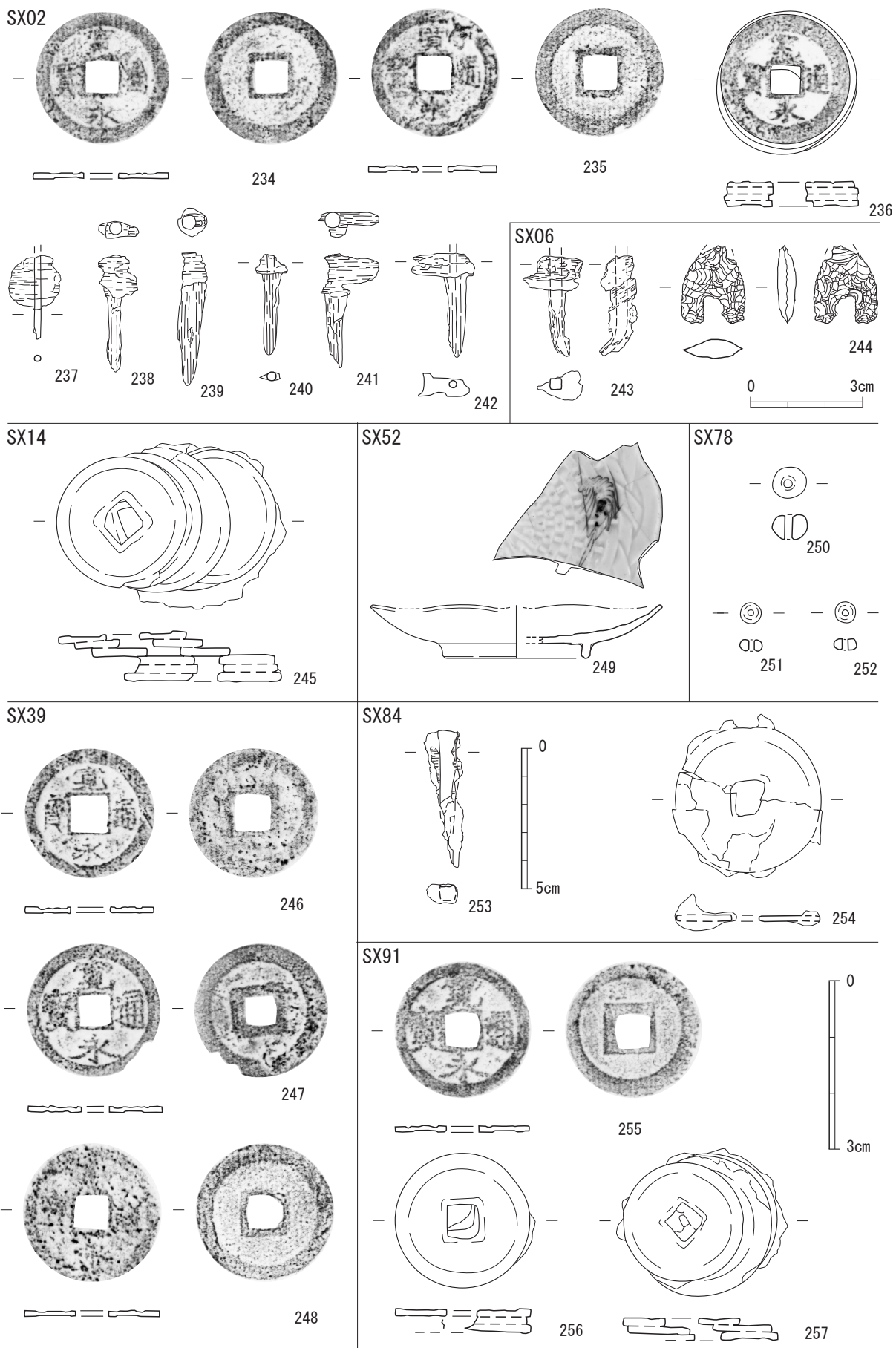
調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.85m、短軸 0.85m の平面円形を呈し、深さは 1.15m である。墓坑内に人骨が残る。銭・釘が出土した。

出土遺物 (第 83 図、図版 94・99)

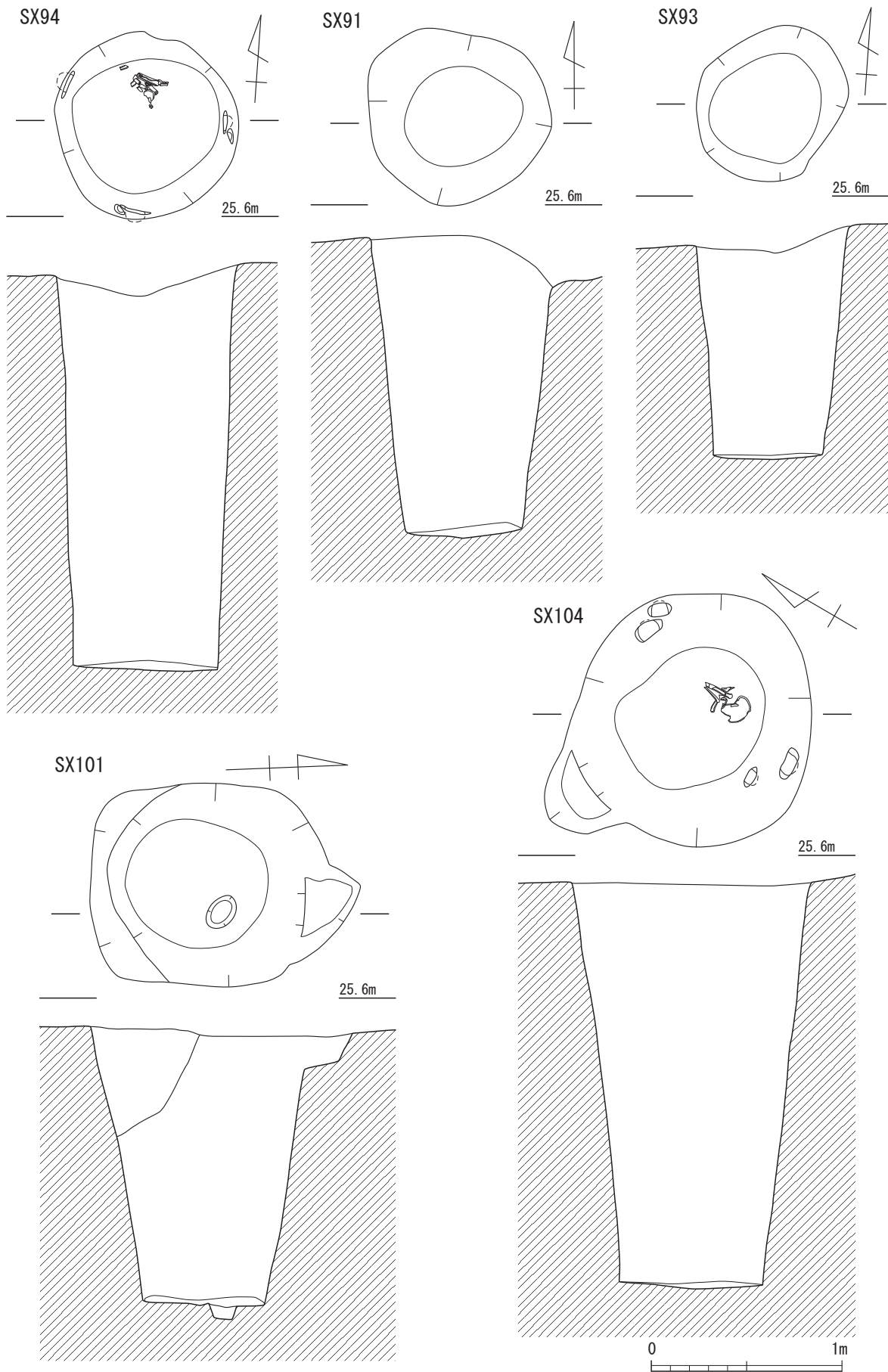
鉄製品 (253・254) 253 は角釘と考えられるが、劣化著しく剥離と膨張で本来の形状を復元し難い。254 は鉄銭で布状のものが付着する。

SX90 (第 82 図)

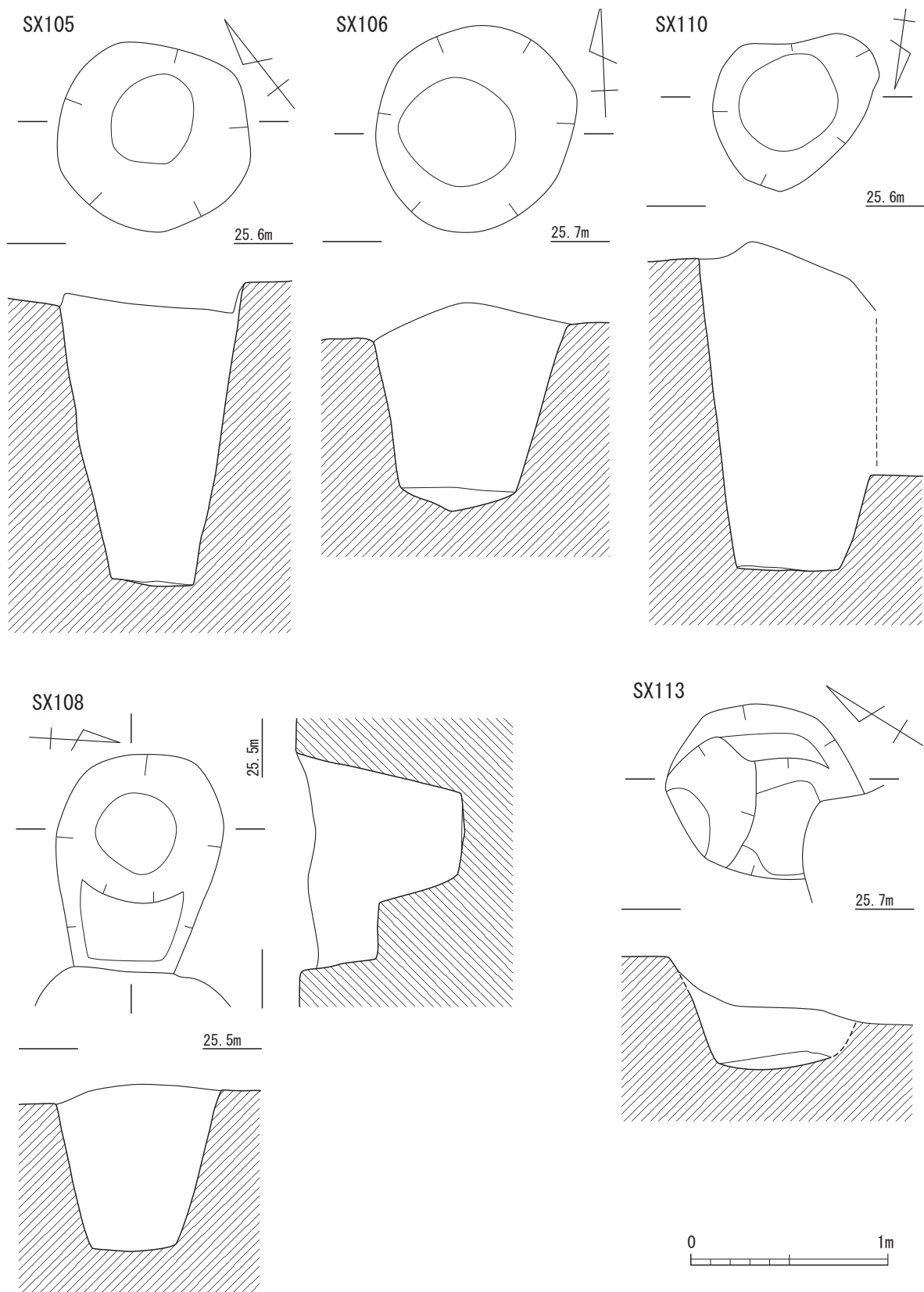
調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 1.0m の平面円形を呈し、深さは 1.95m である。副葬品はない。



第 83 図 SX02・06・14・39・52・78・84・91 出土遺物実測図
(237～243・253 は 1/2、244 は 2/3、249 は 1/3、他は原寸)



第 84 図 SX91・93・94・101・104 実測図 (1/30)



第 85 図 SX105・106・108・110・113 実測図 (1/30)

SX91（第84図、図版62）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 1.6m である。銭が出土した。

出土遺物（第83図、図版99）

銅製品・鉄製品（255～257） 確実ではないが、SX91 出土遺物として報告する。255 は銅銭の寛永通宝である。256 は3枚が錆のため重なって固着する。実測図の上1枚が銅銭で、下2枚が鉄銭である。銭文は不明。鉄銭は2枚とも 1/4 程の残存である。257 は錆のため3枚が重なって固着する。実測図の上から2枚が銅銭で、下1枚が鉄銭である。銭文は不明。鉄銭は 1/2 程の残存である。

SX93（第84図）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.85m、短軸 0.7m の平面楕円形を呈し、深さは 1.2m である。副葬品はない。

SX94（第84図、図版62）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.95m の平面円形を呈し、深さは 2.1m である。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受けているものと考えられる。金属片・土器片が出土した。

SX101（第84図）

調査区北東部に位置する。墓坑は長軸 1.25m、短軸 1.05m の平面楕円形を呈し、深さは 1.45m である。副葬品はない。

SX104（第84図、図版62）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.3m、短軸 1.3m の平面円形を呈し、深さは 2.1m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX105（第85図）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.95m、短軸 0.95m の平面円形を呈し、深さは 1.5m である。副葬品はない。

SX106（第85図）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m、短軸 1.0m の平面円形を呈し、深さは 1.05m である。副葬品はない。

SX108（第85図）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.1m 以上、短軸 0.9m の平面楕円形を呈し、深さは 0.85m である。銭が出土した。

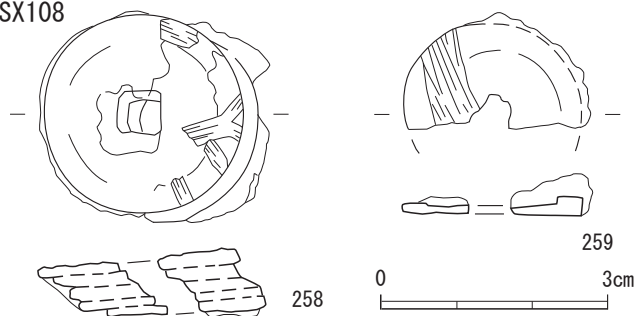
出土遺物（第86図、図版99）

銅製品（258・259） 258 は5枚が錆のため重なって固着する銅銭で、実測図の最下位のものは 1/2 以上欠失する。銭文は不明で繊維状のものが付着する。259 は銭文不明の銅銭で、繊維状のものが付着する。

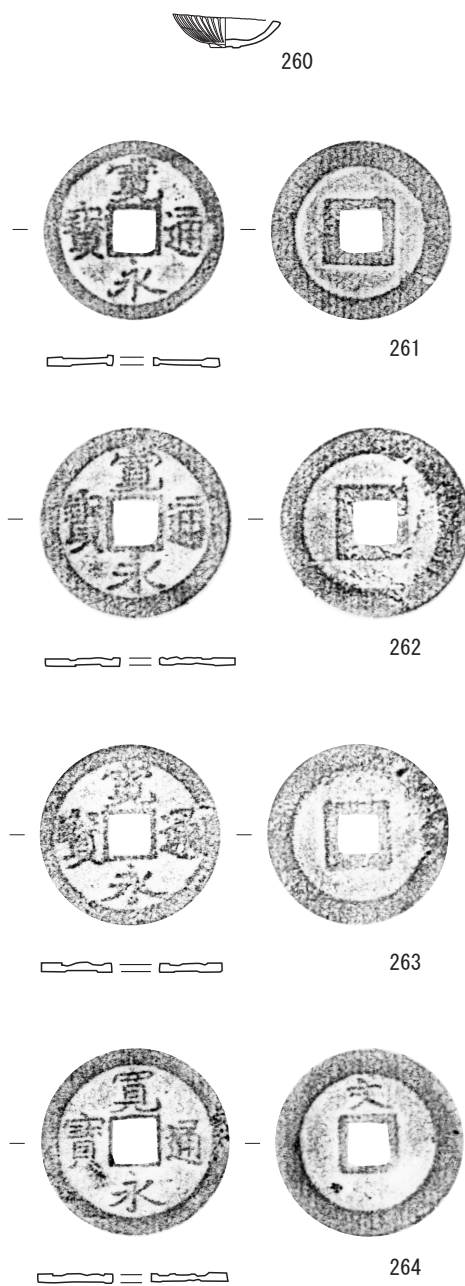
SX110（第85図）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.9m、短軸 0.7m の平面不整な円形を呈し、深さは 1.65m である。磁器紅皿・銭が出土した。

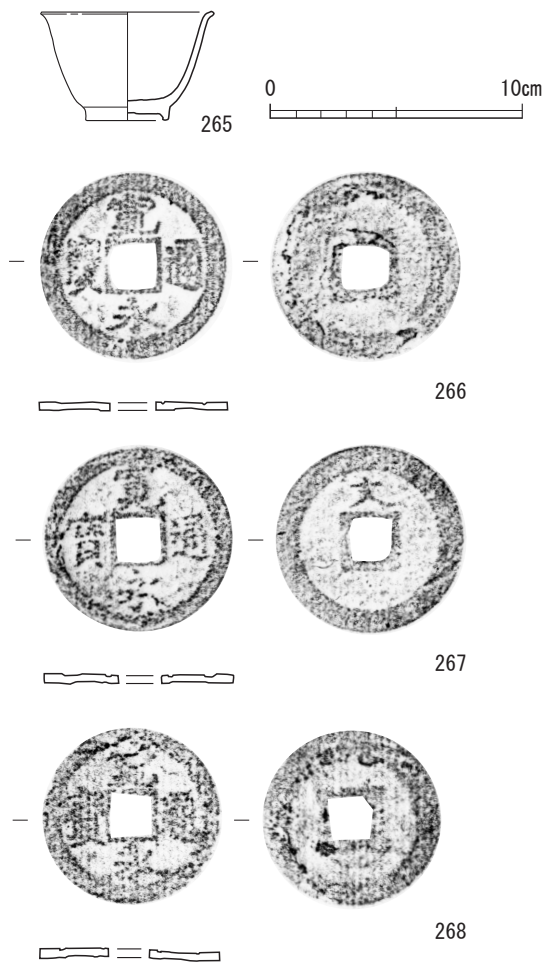
SX108



SX110



SX122



第 86 図 SX108・110・122 出土遺物実測図
(260・265 は 1/3、他は原寸)

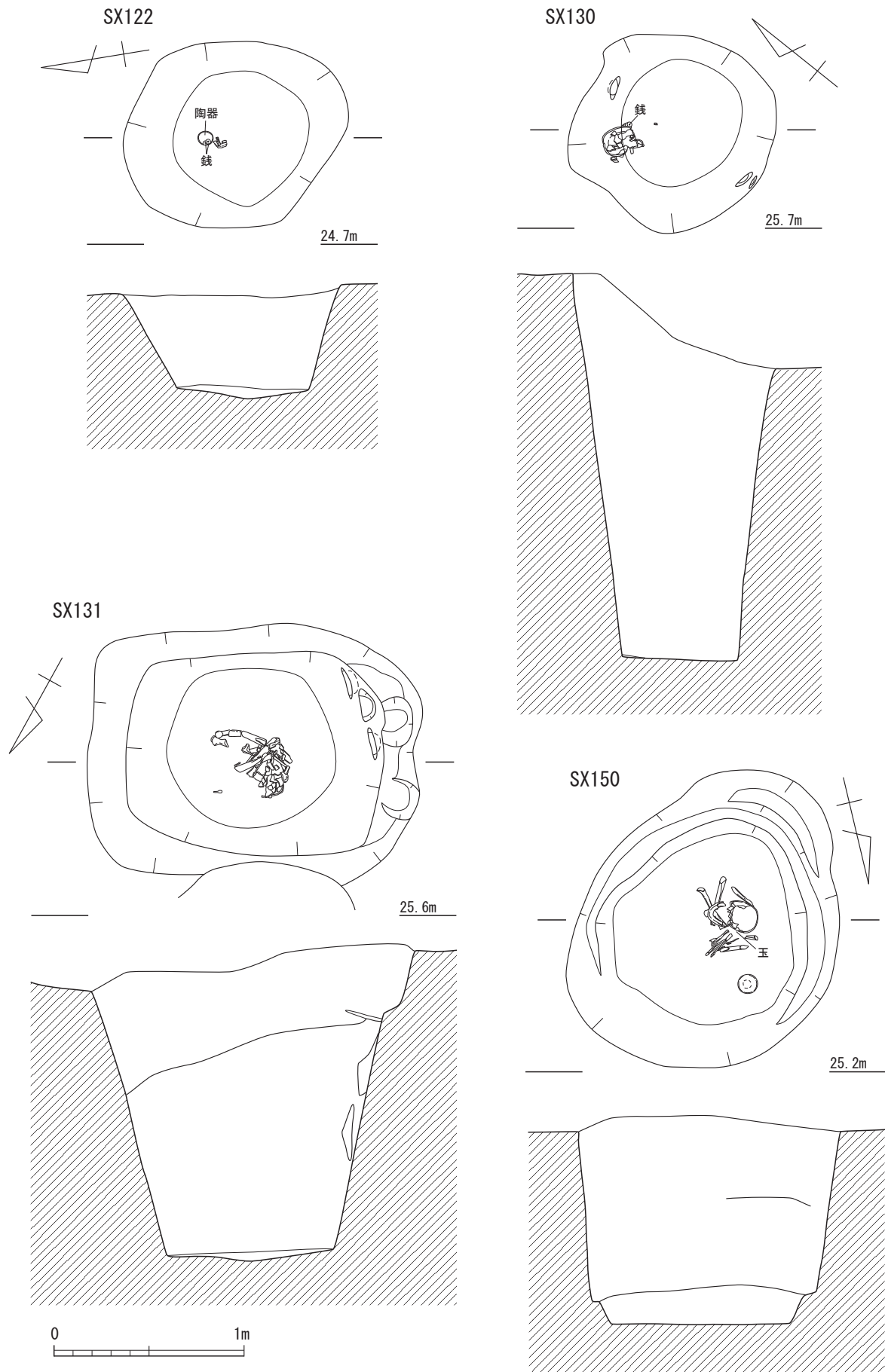
出土遺物（第 86 図、図版 95・99）

陶磁器（260）白磁の紅皿。底部外面以外は施釉する。

銅製品（261～264）いずれも銅銭の寛永通宝である。264 は背面に「文」の字を鑄出す。

SX113（第 85 図）

調査区北側に位置し、SX83 に切られる。墓坑は長軸 1.0m、短軸 0.85m の平面楕円形を呈し、深さは 0.5m である。副葬品はない。



第 87 図 SX122・130・131・150 実測図 (1/30)

SX122（第 87 図、図版 62）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.15m、短軸 1.0m の平面楕円形を呈し、深さは 0.55m である。墓坑内に人骨が残る。陶器・銭が出土した。

出土遺物（第 86 図、図版 95・99）

陶磁器（265） 磁器の猪口。全面に施釉した後、高台畳付の釉を剥ぎとる。畳付には砂が付着する。釉は淡い水色味をおびた透明釉である。

銅製品（266～268） 銅銭の寛永通宝。267 の背面には「文」の字を鋳出す。

SX130（第 87 図、図版 62）

調査区中央部に位置する。墓坑は長軸 1.1m、短軸 1.0m の平面不整な円形を呈し、深さは 2.0m である。墓坑内に人骨が残る。磁器小椀・銭が出土した。

出土遺物（第 87 図、図版 94・95・99）

陶磁器（269） 染付磁器の小椀。全面に施釉した後、高台畳付の釉を拭き取る。畳付には一部に砂が付着する。

弥生土器（270） 脚裾部を欠失する高杯で、脚部内面以外は全面丹塗りである。体部に 1 条の M 字突帯を貼り付ける。杯部は口縁部内外面と突帯がヨコナデ、体部はナデ。脚部は内外面ともにナデで、外面は面取りをする。

銅製品・鉄製品（271～273） 271 は 2 枚が銹のため重なって固着する。実測図の上 1 枚が銅銭の寛永通宝で、下 1 枚が鉄銭。鉄銭には木質が付着する。272 は 3 枚がずれて銹のため重なって固着する銅銭である。実測図の最上位の銭文は寛永通宝である。273 は銅銭の寛永通宝。

SX131（第 87 図、図版 62）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.9m、短軸 1.2m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 1.6m である。墓坑内に人骨が残る。磁器椀・煙管・数珠玉が出土した。

出土遺物（第 89 図、図版 93・97）

銅製品（274） 煙管で、羅字が一部残存する。雁首に布が付着する。

ガラス製品（275～279） 完形の数珠玉が 37 点と破片が出土し、5 点を図化した。275・278・279 は白色に風化した数珠玉。276・277 も白色に風化した数珠玉だが、無色半透明の部分がある。

SX150（第 87 図、図版 69）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.65m（床面で 1.0m）、短軸 1.35m（床面で 1.0m）の平面楕円形を呈し、深さは 1.1m である。墓坑内に人骨が残る。枕・ガラス玉・磁器椀が出土した。

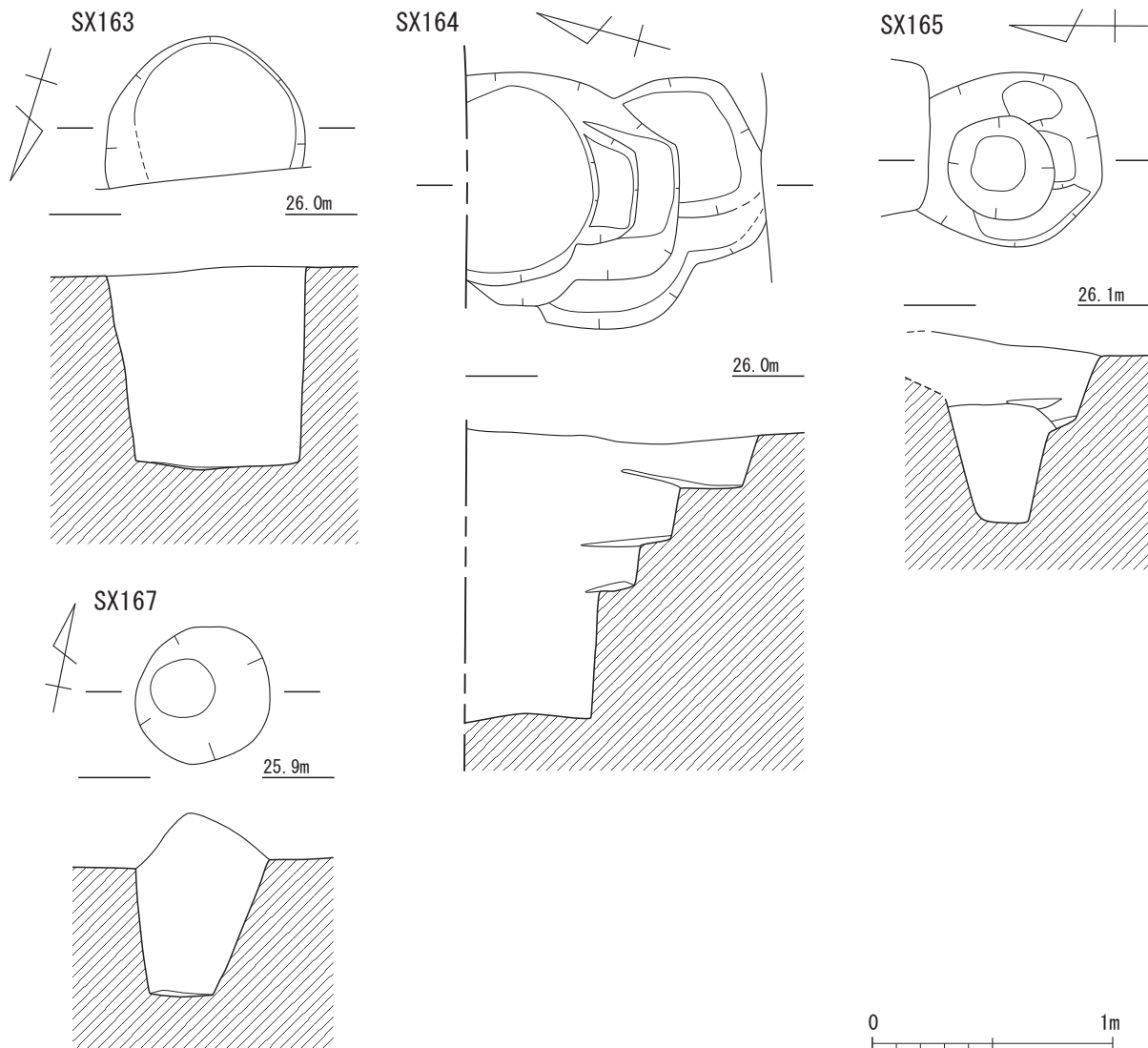
出土遺物（第 89 図、図版 95・97）

陶磁器（280） 染付磁器の小椀で、外面に草花文を描く。全面に施釉した後、高台畳付の釉を剥ぎとり、内面は輪状に釉を剥ぎとる。畳付には砂が付着する。

ガラス製品（281） 青緑色で半透明の数珠玉。表面は小部分であるが極く細かい斑点状や細い筋状に白色に風化する。

SX163（第 88 図、図版 57）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.75m、短軸 0.6m 以上の平面円形を呈し、深さは 0.8m である。



第 88 図 SX163 ～ 165 ・ 167 実測図 (1/30)

副葬品はない。

SX164 (第 88 図、図版 62)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.0m 前後、短軸 1.0m 前後の平面円不整な形を呈し、深さは 1.2m である。副葬品はない。

SX165 (第 88 図)

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 0.7m 以上、短軸 0.7m の平面楕円形を呈し、深さは 0.8m である。陶器片が出土した。

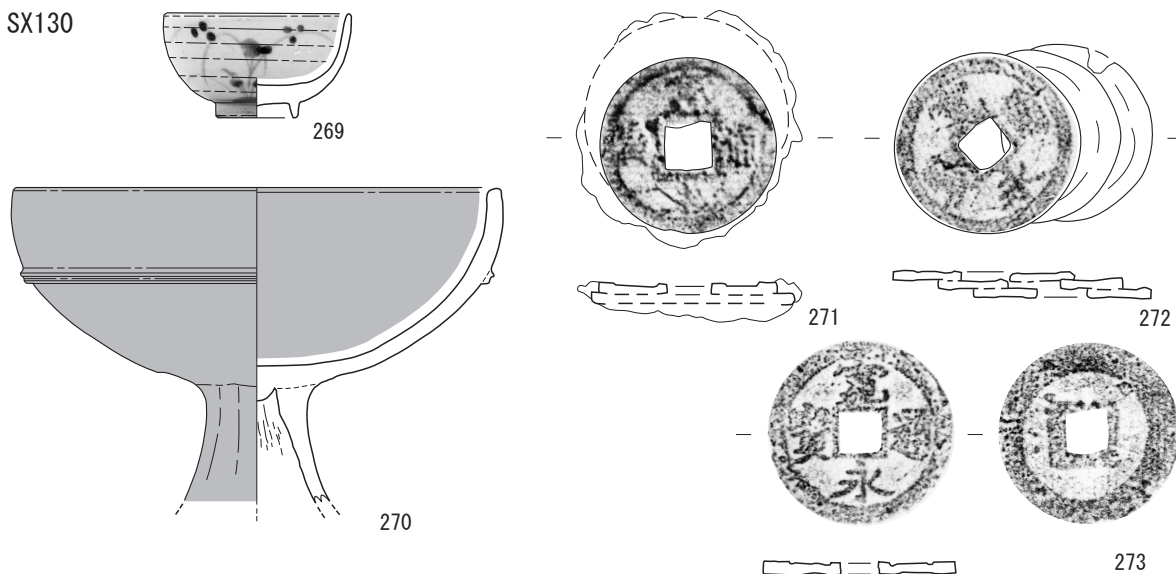
SX167 (第 88 図)

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸 0.55m、短軸 0.55m の平面円形を呈し、深さは 0.75m である。副葬品はない。

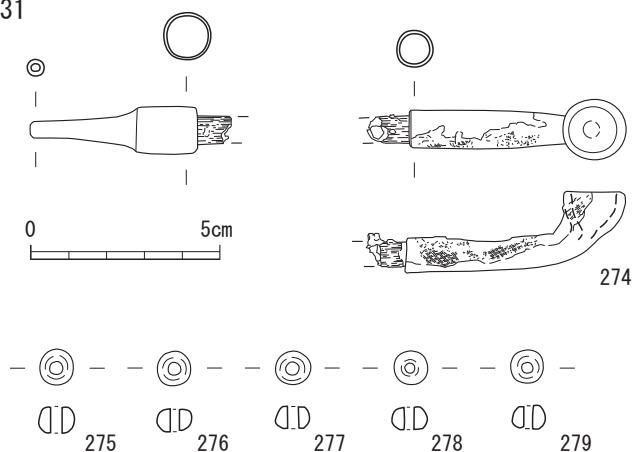
③木棺墓・土坑墓

SX03 (第 90 図)

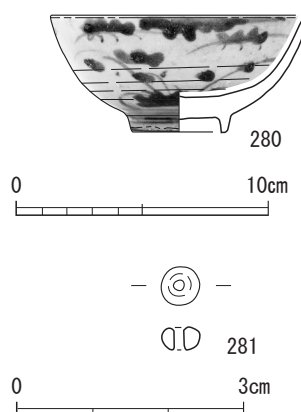
SX130



SX131



SX150



第 89 図 SX130・131・150 出土遺物実測図
(269・270・280 は 1/3、274 は 1/2、他は原寸)

調査区南側に位置する。墓坑は長軸 1.55m 以上（床面で 1.3m）、短軸不明（床面で 0.5m）の平面楕円形を呈し、深さは 0.4m である。副葬品はない。

SX18（第 90 図、図版 62）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸 1.4m（床面で 1.2m）、短軸 1.1m（床面で 0.8m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.6m である。墓坑内に人骨が残る。土師器皿が出土した。

出土遺物（第 95 図）

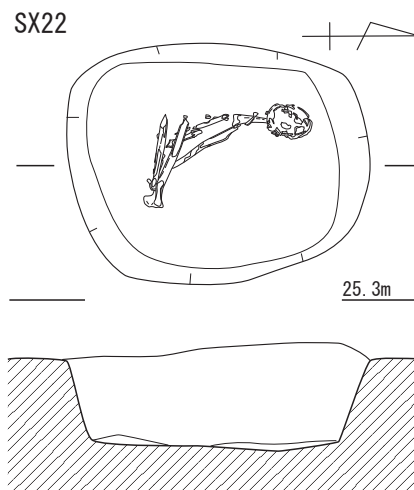
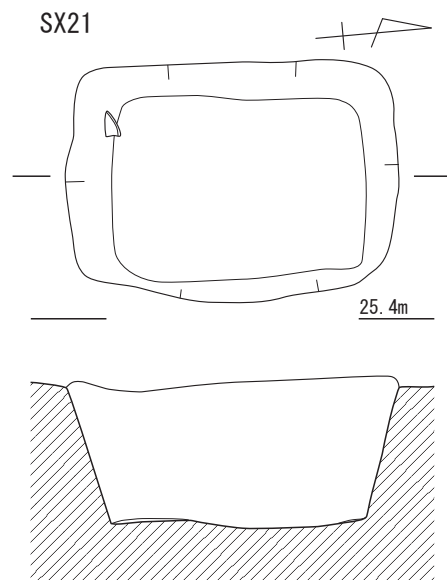
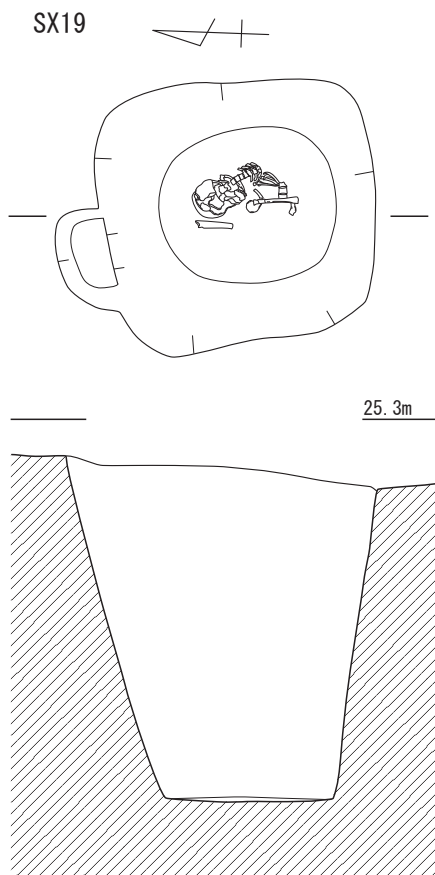
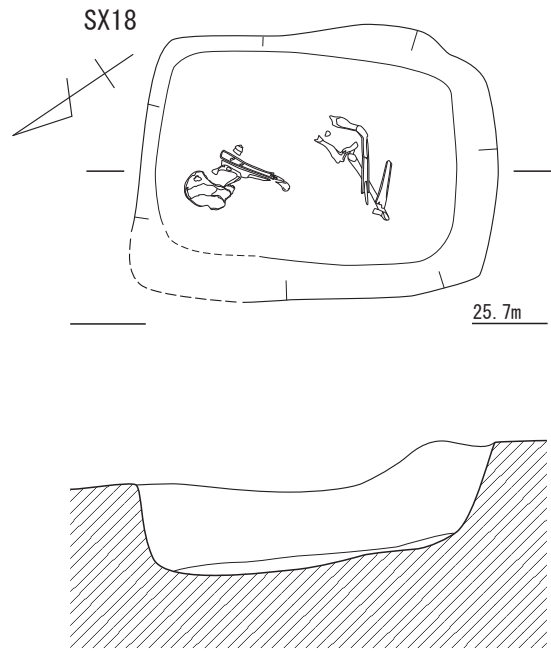
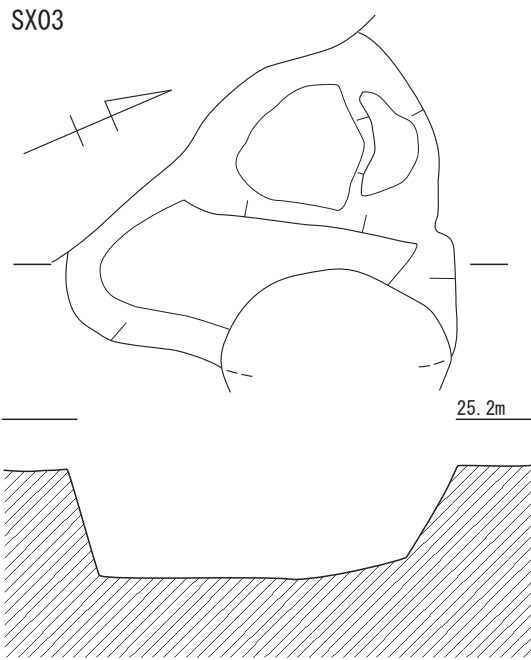
土師器（282）底部を欠損する皿の破片である。内外面ともに回転ナデで、体部内面下位は磨滅する。

SX19（第 90 図、図版 63）

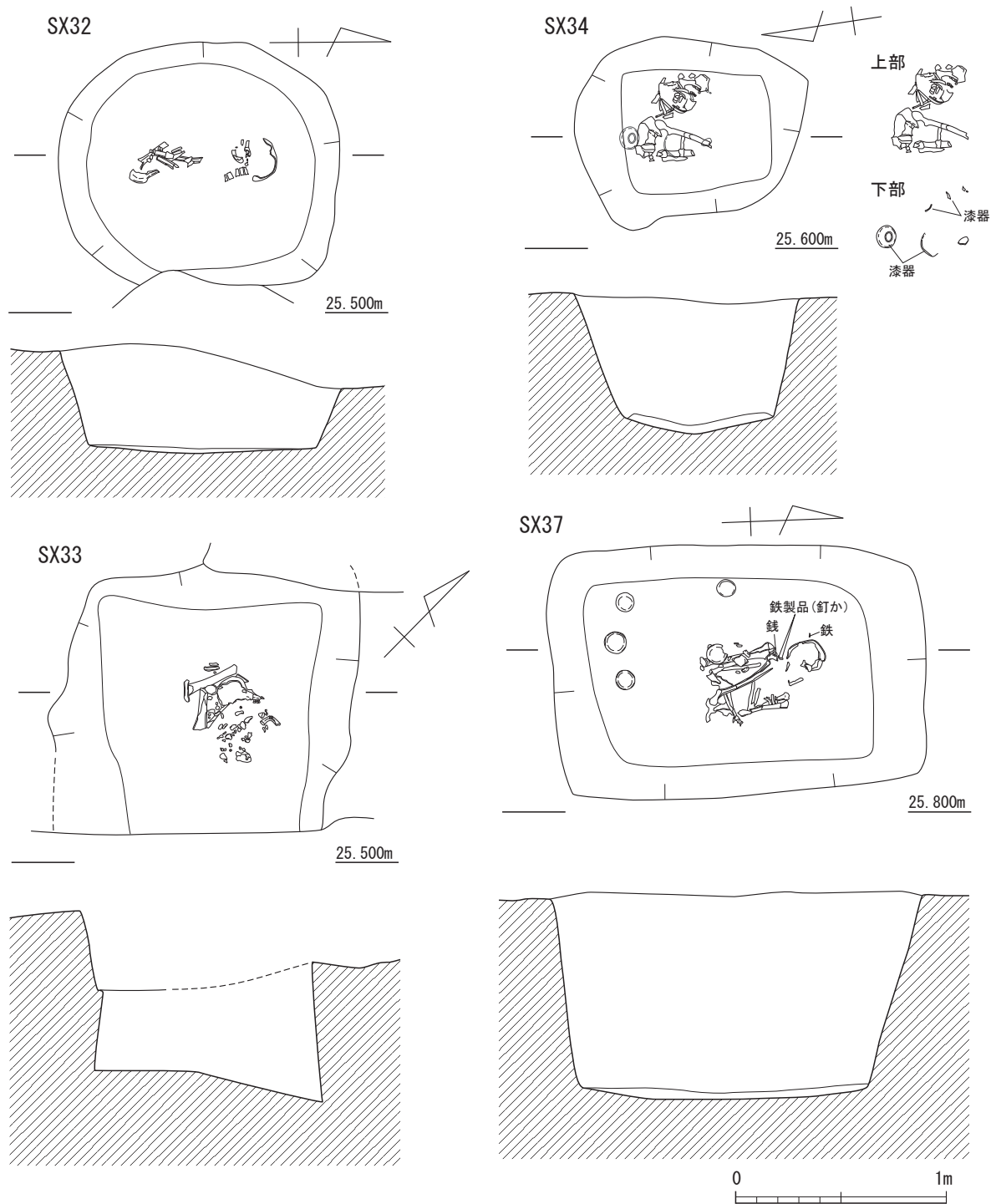
調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.1m（床面で 0.7m）、短軸 1.05m（床面で 0.6m）の平面隅丸方形を呈し、深さは 1.35m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX21（第 90 図、図版 63）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.3m（床面で 1.0m）、短軸 0.95m（床面で 0.7m）の平面



第90図 SX03・18・19・21・22 実測図 (1/30)



第91図 SX32～34・37実測図(1/30)

隅丸方形を呈し、深さは0.6mである。青磁碗・玉・金属製品が出土した。

出土遺物(第95図、図版94・97)

陶磁器(283) 同安窯系青磁の碗。体部外面には櫛目文を施す。

ガラス製品(284～286) 数珠玉が73点出土し、3点を図化している。284～286は明黄褐色で半透明の数珠玉。

銅製品(287) 確実ではないがSX21出土遺物として報告する。287は十字架のペンダントと思われる

る。銅地銀箔貼り金渡金のように見える。

SX22（第90図、図版63）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸1.2m（床面で1.0m）、短軸1.0m（床面で0.8m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは0.4mである。墓坑内に人骨が残る。玉・鉄製品・瓦質土器が出土した。

出土遺物（第95図、図版97）

ガラス製品（288～290） 288・290は白色に風化した数珠玉。289は明緑色で、半透明のガラス玉。

SX32（第91図、図版63）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.35m（床面で1.05m）、短軸1.15m（床面で0.95m）の平面不整な円形を呈し、深さは0.5mである。墓坑内に人骨が残る。土師器小皿・磁器片が出土した。

出土遺物（第95図）

土師器（291） 小皿。底部は回転糸切りである。口縁部から体部は回転ナデ、底部内面はナデ。

SX33（第91図、図版63）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.3m以上（床面で1.0m以上）、短軸1.4m（床面で0.95m）の平面長方形を呈し、深さは0.9mである。墓坑内に人骨が残る。玉・土師器片・鉄器片が出土した。

出土遺物（第95図、図版97）

ガラス製品（292～296） 数珠玉が51点出土し、5点を図化した。292・293・295は濃青色の数珠玉だが、風化して白色部分と縞模様になる。294は濃青色の数珠玉で、296は明黄褐色で半透明の数珠玉。

SX34（第91図、図版63）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.05m（床面で0.7m）、短軸0.85m（床面で0.6m）の平面不整な長方形を呈し、深さは0.65mである。墓坑内に人骨が残る。漆器・陶器皿・土器片・玉が出土した。

出土遺物（第95図、図版96）

陶磁器（297） 陶器の皿である。胴部が丸く外に張り、口縁部は立ち上がり端部で外反する。内面から体部上位に灰緑色味を帯びた釉を施している。底部外面には3か所の目痕がある。

SX37（第91図、図版64）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.7m（床面で1.3m）、短軸1.2m（床面で0.9m）の平面長方形を呈し、深さは1.0mである。墓坑内に人骨が残る。土師器小皿・銭が出土した。

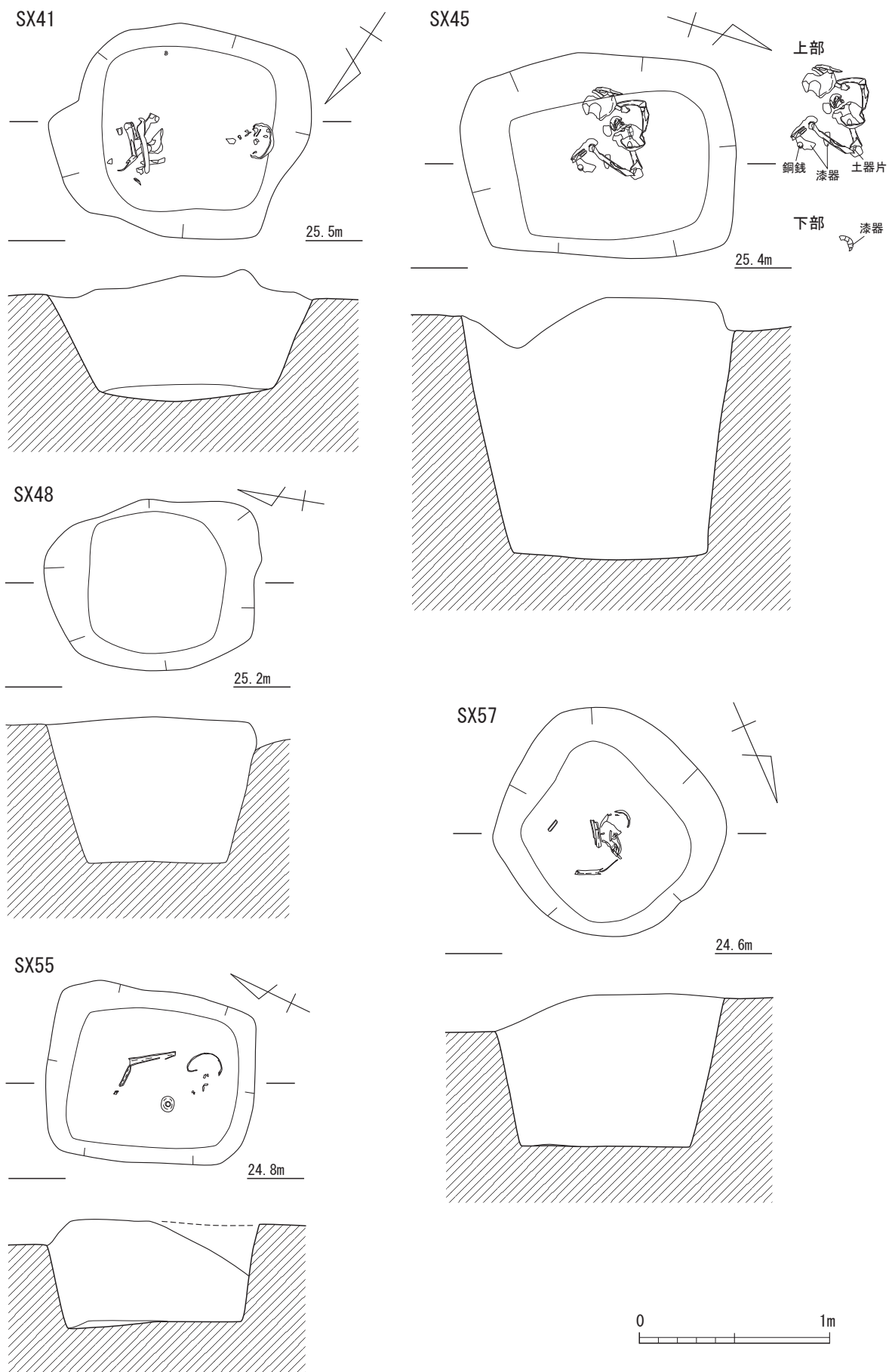
出土遺物（第95図、図版96・99）

土師器（299～304） いずれも小皿で、底部は回転糸切り。303は口径9.8cmで器高が1.8～2.2cmで、他の5点（299～302、304の口径9.2～9.4cm、器高1.35～1.7cm）と比べて法量が大きい。内外面回転ナデだが、303を除いて底部内面にナデを施す。301、304には板状圧痕、303には板状と考えられる痕跡、302には簾状の圧痕がある。

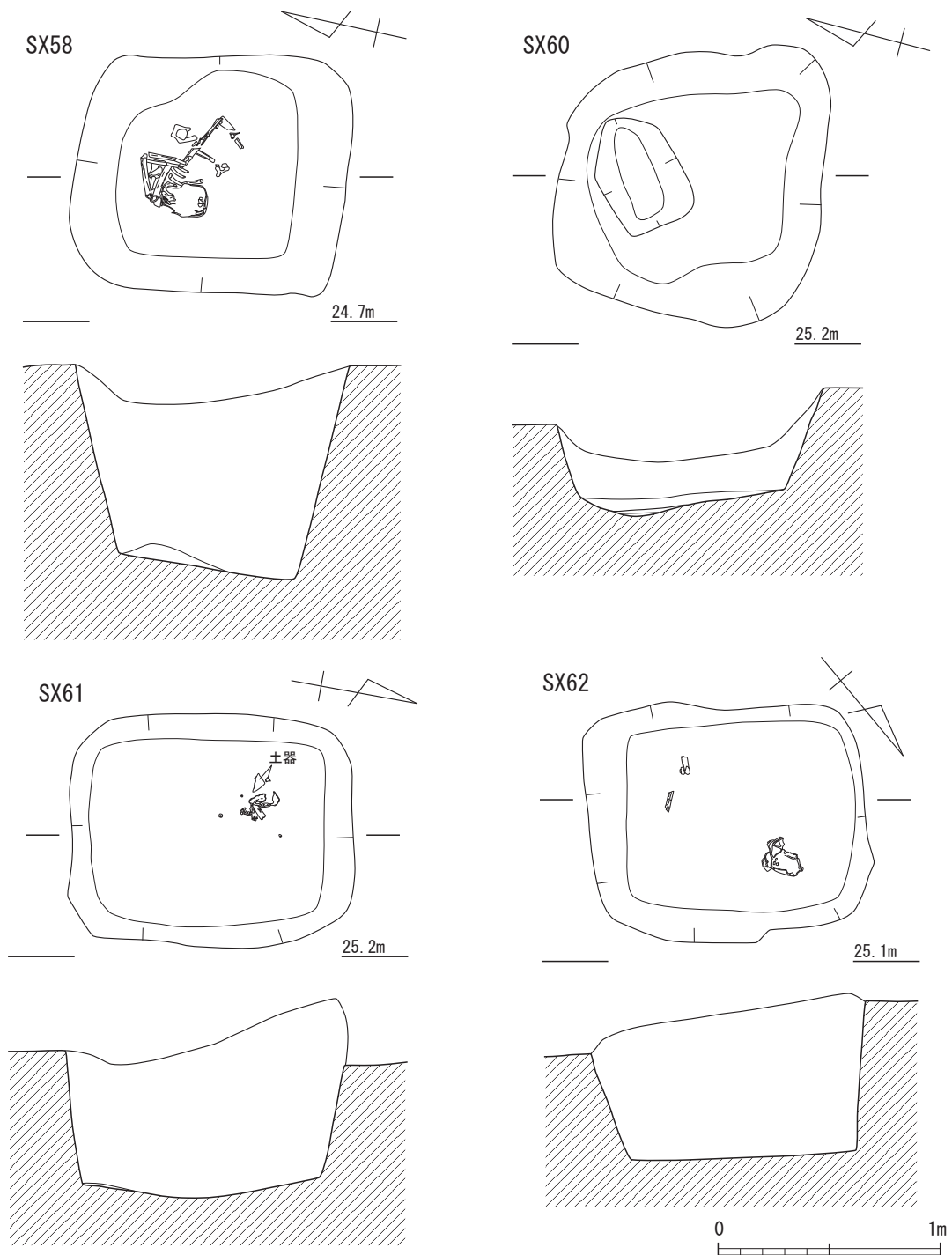
銅製品（305） 2枚が銹のため重なって固着する銅銭である。銭文は不明。

SX41（第92図、図版64）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.2m（床面で0.9m）、短軸1.1m（床面で0.85m）の平



第 92 図 SX41・45・48・55・57 実測図 (1/30)



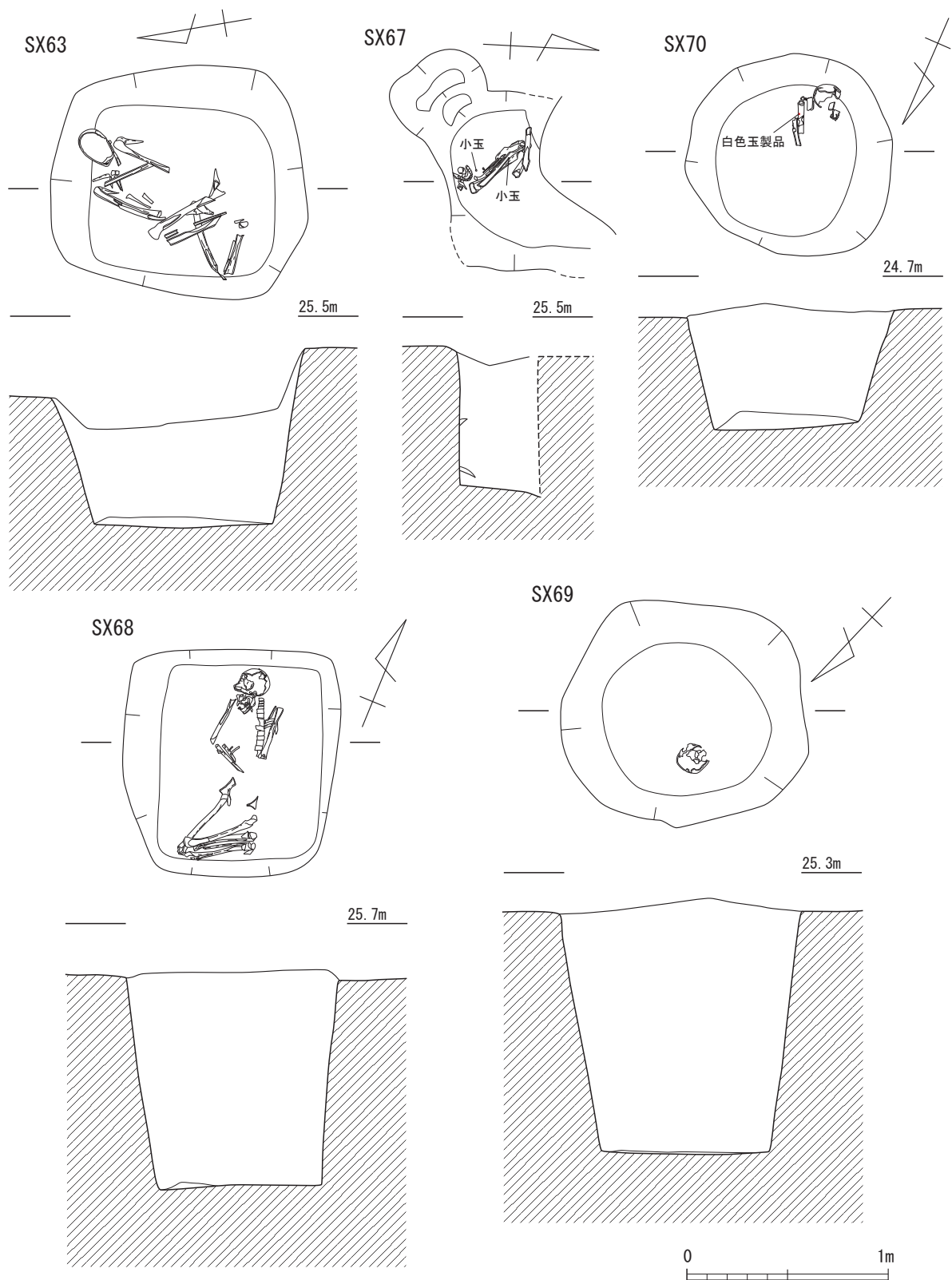
第 93 図 SX58・60・61・62 実測図 (1/30)

面不整な方形を呈し、深さは 0.7m である。墓坑内に人骨が残る。土師器杯・皿・銭が出土した。
出土遺物 (第 98 図)

銅製品 (306) 半分程欠損する銅銭である。銭文は不明。

SX45 (第 92 図、図版 64)

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.4m (床面で 1.05m)、短軸 1.1m (床面で 0.75m) の平面長方形を呈し、深さは 1.4m である。墓坑内に人骨が残る。漆器・磁器片・銭・顔料袋が出土した。



第94図 SX63・67～70実測図(1/30)

出土遺物（第 95 図、図版 99）

銅製品（307） 6枚が錆のため重なって固着する銅銭で、うち1枚の銭文は寛永通宝である。

弥生土器（308） 甕で、口縁部はT字状で内側に大きく突出する。口縁端部には刻目を施し、口縁下に2条の三角突帯を貼り付ける。口縁部と突帯はヨコナデ、他はナデ。

SX48（第 92 図）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.1m（床面で 0.7m）、短軸 0.9m（床面で 0.7m）の平面不整な楕円形を呈し、深さは 0.75m である。鉄製品・瓦質土器が出土した。

SX55（第 92 図）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.1m（床面で 0.9m）、短軸 0.9m（床面で 0.7m）の平面長方形を呈し、深さは 0.6m である。墓坑内に人骨が残る。磁器碗・須恵器片・土師器片・陶器片が出土した。

出土遺物（第 95 図、図版 95）

陶磁器（309） 淡い青緑色味の釉の小碗で、全面施釉の後、高台畳付の釉を剥ぎとる。高台には砂が付着する。

SX57（第 92 図）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m（床面で 0.9m）、短軸 1.1m（床面で 0.7m）の平面隅丸方形を呈し、深さは 0.8m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX58（第 93 図、図版 64）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m（床面で 0.85m）、短軸 1.1m（床面で 0.75m）の平面隅丸方形を呈し、深さは 0.8m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX60（第 93 図）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m（床面で 1.0m）、短軸 1.2m（床面で 0.75m）の平面不整な方形を呈し、深さは 0.55m である。木質・金属片が出土した。

SX61（第 93 図、図版 64）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m（床面で 1.05m）、短軸 1.05m（床面で 0.85m）の平面長方形を呈し、深さは 0.9m である。墓坑内に人骨が残る。玉が出土した。

出土遺物（第 95 図、図版 97）

ガラス製品（310） 白色に風化した数珠玉。

SX62（第 93 図、図版 64）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸 1.25m（床面で 1.05m）、短軸 1.1m（床面で 0.8m）の平面長方形を呈し、深さは 0.75m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX63（第 94 図、図版 64）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.25m（床面で 0.9m）、短軸 1.15m（床面で 0.85m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.85m である。墓坑内に人骨が残る。玉が出土した。

出土遺物（第 95 図、図版 97）

ガラス製品（311～313） 311 は明黄褐色半透明の数珠玉の親玉でT字状の孔がある。312 は黒褐

色の数珠玉。313は青緑色の小玉で、弥生時代か古墳時代遺物の混入品と考えられる。

SX67（第94図、図版65）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸0.7m以上、短軸0.9m（床面で0.6m）で、平面隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは0.7mである。墓坑内に人骨が残るが、改葬を受けているものと考えられる。小玉のほか、弥生甕棺の破片が出土した。

出土遺物（第98図、図版95・97）

ガラス製品（314～316） 314は淡青色の数珠玉だが、風化した白色部分と縞模様になる。315も淡青色の数珠玉で、314程は風化していない。316は白色に風化した数珠玉。

弥生土器（317・318） 317はおそらく甕の底部。内外面ともにナデ。318は甕。T字状口縁で、外側に低く傾斜する。胴部は直線的でやや内傾する。

SX68（第94図、図版65）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.1m（床面で0.95m）、短軸1.1m（床面で0.8m）の平面方形を呈し、深さは1.05mである。墓坑内に人骨が残る。袋状の遺物が出土した。

SX69（第94図、図版65）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸1.2m（床面で0.8m）、短軸1.1m（床面で0.75m）の平面不整な楕円形を呈し、深さは1.25mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX70（第94図、図版65）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸1.0m（床面で0.75m）、短軸1.0m（床面で0.7m）の平面円形を呈し、深さは0.65mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX73（第96図）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.2m（床面で0.8m）、短軸1.15m（床面で0.65m）の平面隅丸方形を呈し、深さは0.85mである。副葬品はない。

SX82（第96図、図版65）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.0m（床面で0.75m）、短軸不明で、平面方形と考えられ、深さは1.0mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX85（第96図、図版65）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.0m（床面で0.8m）、短軸0.8m（床面で0.7m）の平面円形を呈し、深さは1.5mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX95（第96図、図版65）

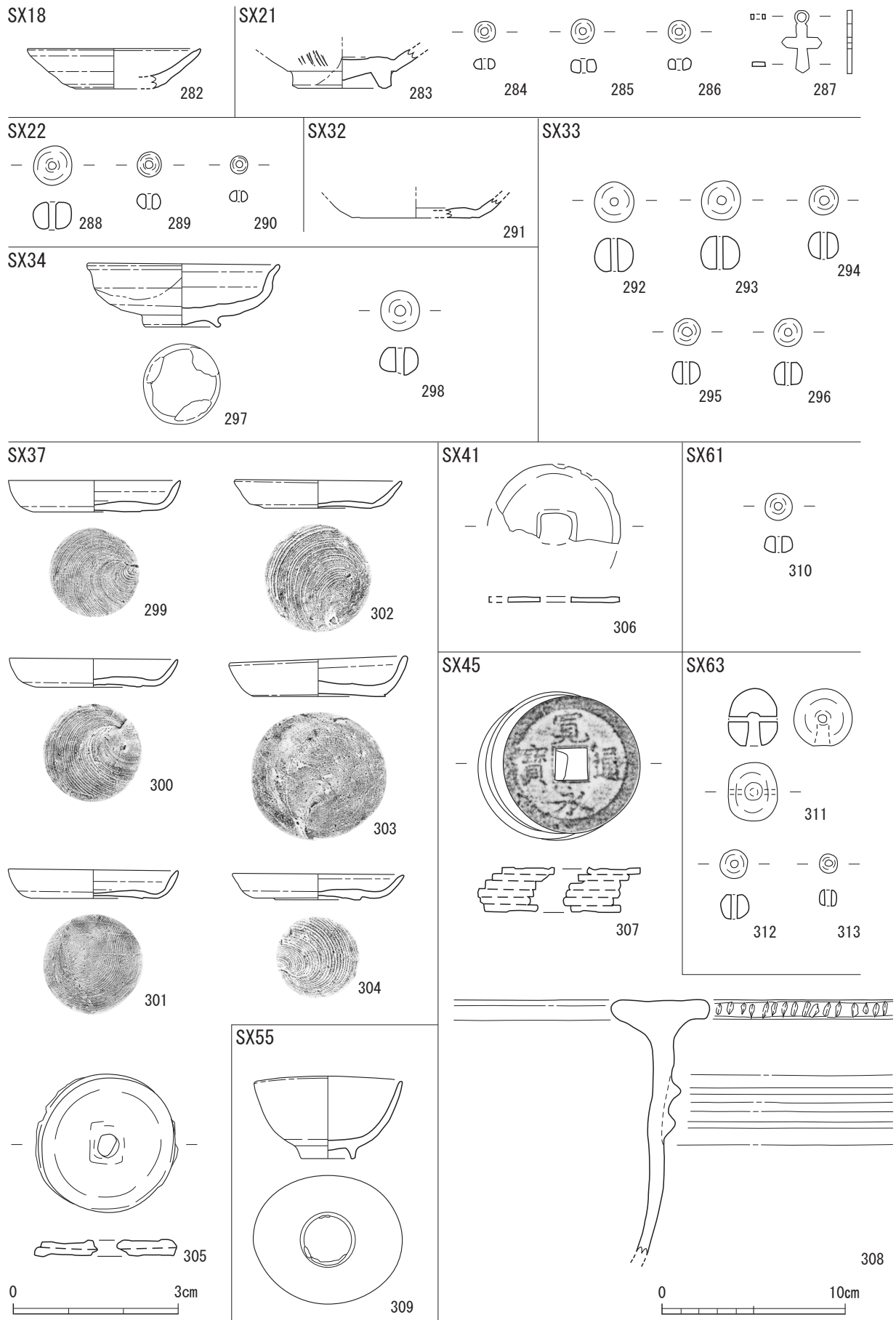
調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.85m（床面で1.15m）、短軸1.3m（床面で0.9m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは1.5mである。墓坑内に人骨が残る。銭が出土した。

出土遺物（第98図、図版99）

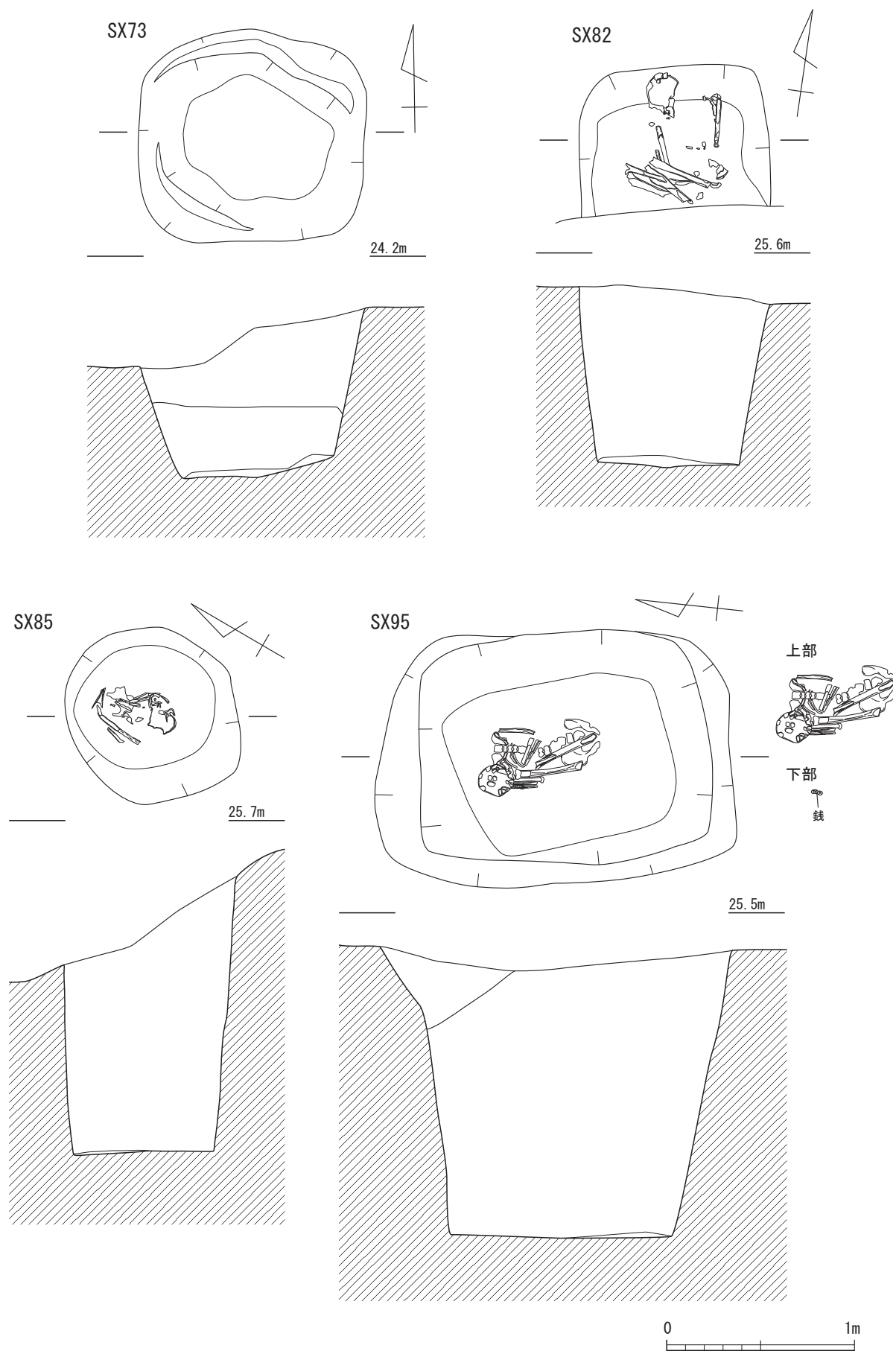
銅製品（319～322） いずれも銅銭で、320と322は2枚が錆のため重なって固着する。322は布状のものが付着する。322の実測図の下1枚を除き、銭文は寛永通宝である。

SX98（第97図、図版66）

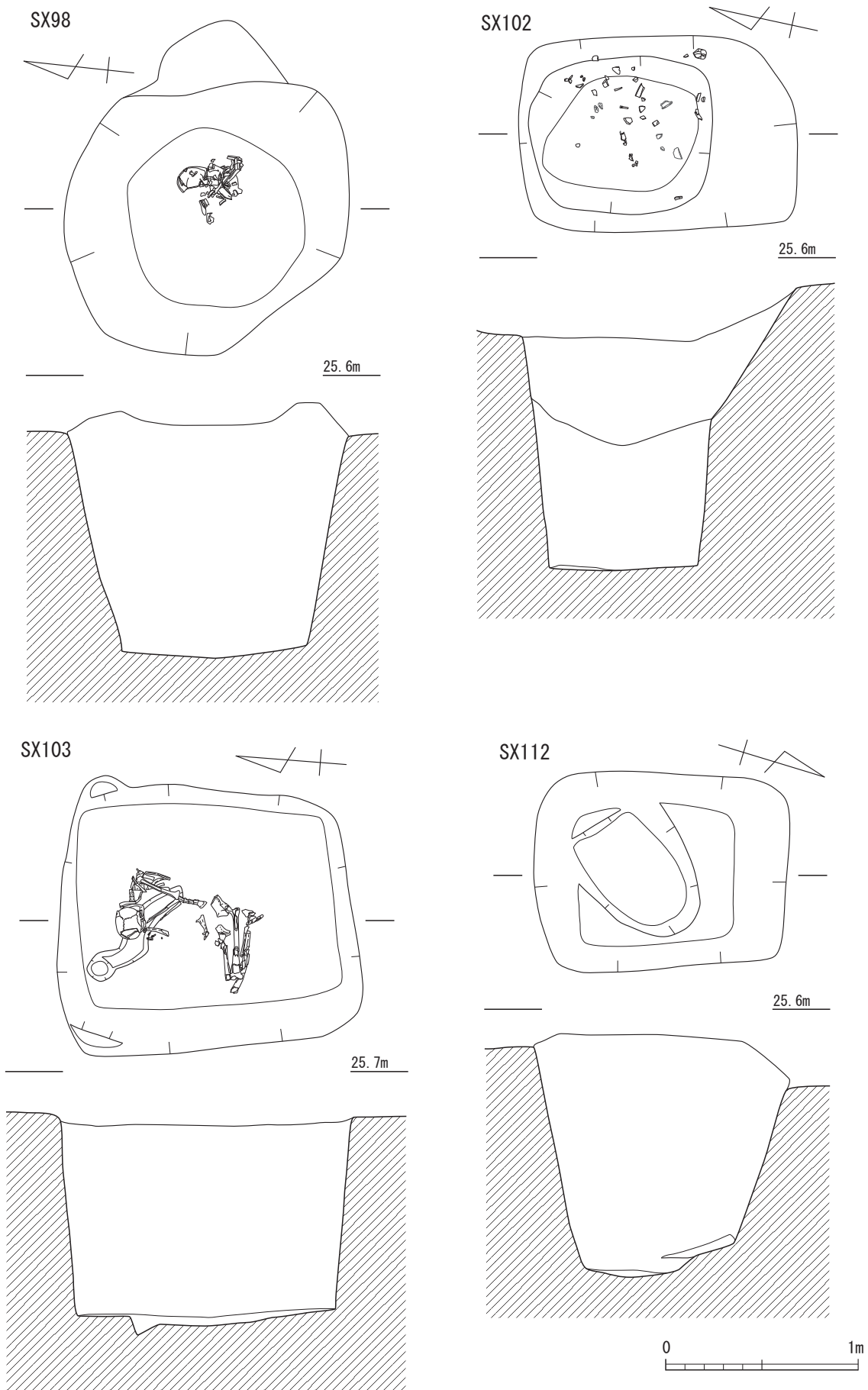
調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.5m（床面で0.9m）、短軸1.4m（床面で0.9m）の平面不整



第 95 図 SX18・21・22・32～34・37・41・45・55・61・63 出土遺物実測図
(282・283・291・297・299～304・308・309は1/3、他は原寸)

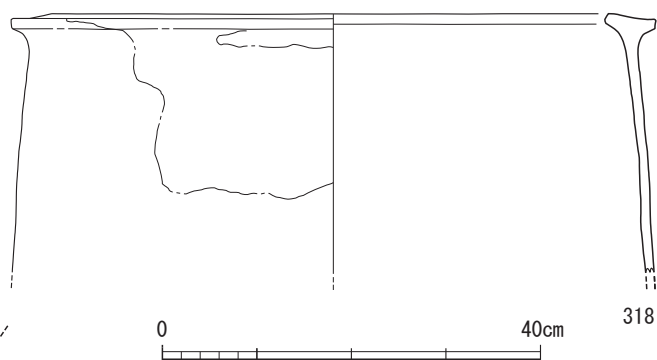
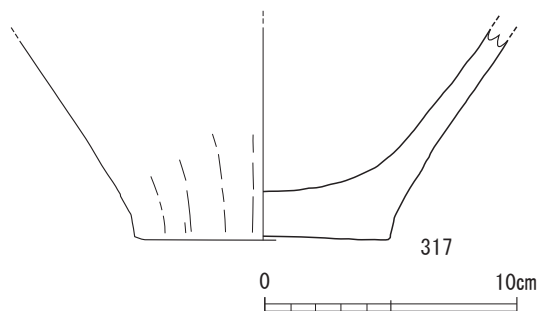
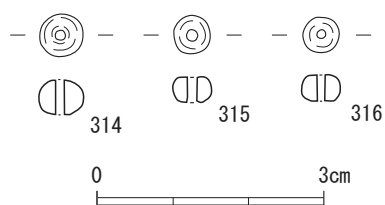


第96図 SX73・82・85・95実測図(1/30)

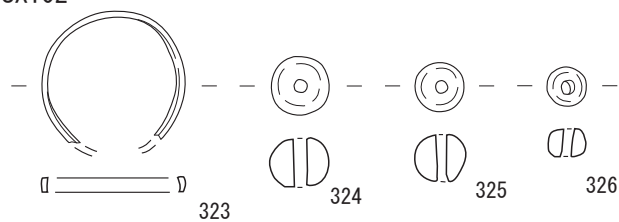


第 97 図 SX98・102・103・112 実測図 (1/30)

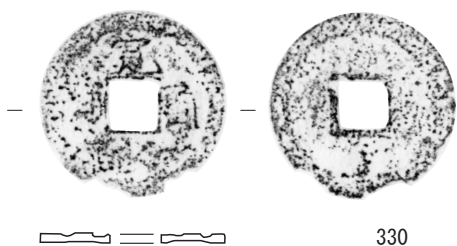
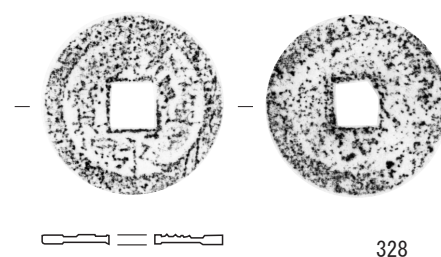
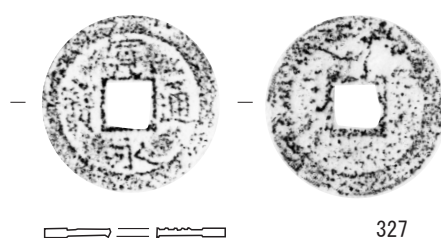
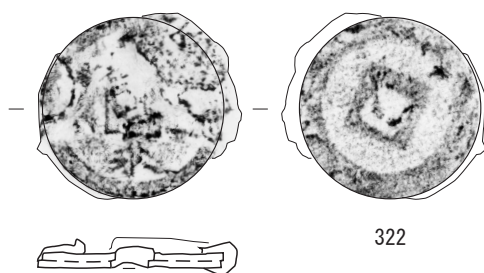
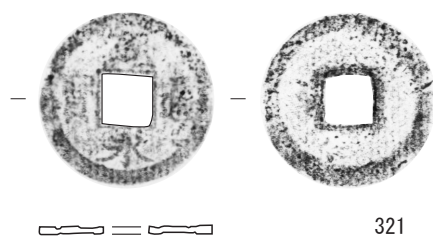
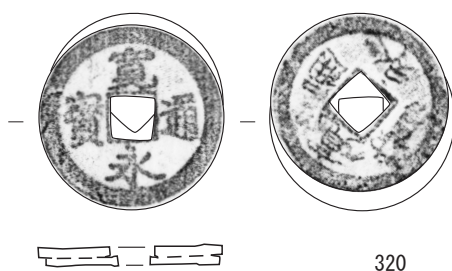
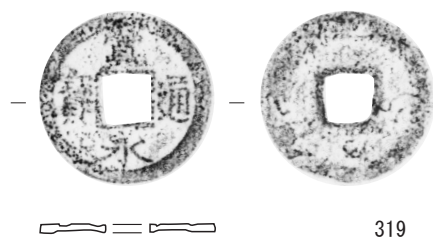
SX67



SX102



SX95



第 98 図 SX67・95・102 出土遺物実測図 (317 は 1/3、318 は 1/8、他は原寸)

な円形を呈し、深さは1.35mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX102（第97図、図版66）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.45m（床面で0.75m）、短軸1.0m（床面で0.6m）の平面長方形を呈し、深さは1.45mである。墓坑内に人骨が残る。銅製品・銭・玉・繊維等が出土した。

出土遺物（第98図、図版93）

銅製品（323・327～330） 323は外側が丸みをもつ断面蒲鉾形の円環であるが、用途は不明。327～330は銅銭の寛永通宝である。図化していないが、他に2個体分の銅銭が出土しており、1点は寛永通宝でもう1点の銭文は不明。

ガラス製品（324～326） 324は白色で半透明の数珠玉。透明なガラスが少し風化したもの。325は無色透明の数珠玉。326は青緑色の数珠玉。

SX103（第97図、図版66）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.5m（床面で1.35m）、短軸1.3m（床面で1.05m）の平面長方形を呈し、深さは1.1mである。墓坑内に人骨が残る。小玉・磁器が出土した。

出土遺物（第103図、図版97）

陶磁器（331） 磁器の猪口。全面に施釉した後、高台畳付の釉を剥ぎ取る。やや灰色味の釉を施し、貫入がある。口縁部の形態はSX99出土380と類似する。

ガラス製品（332～336） 完形の数珠玉8点と破片が出土し、5点を図化した。332～334は明黄褐色半透明の数珠玉。335は白色に風化した数珠玉。336も白色に風化した数珠玉だが、わずかに黄緑色味を帯びる。

SX112（第97図）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.3m（床面で0.6m）、短軸1.0m（床面で0.4m）の平面長方形を呈し、深さは1.25mである。陶器片が出土した。

SX114（第99図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸0.7m以上（床面で0.7m）、短軸0.7m以上（床面で0.6m）の平面隅丸方形と考えられ、深さは0.4mである。磁器が出土した。

出土遺物（第103図、図版96）

陶磁器（337） 染付磁器の猪口。笹の葉文様が1か所ある。全面に施釉した後、高台畳付の釉を拭き取る。高台には砂が付着する。

SX116（第99図、図版66）

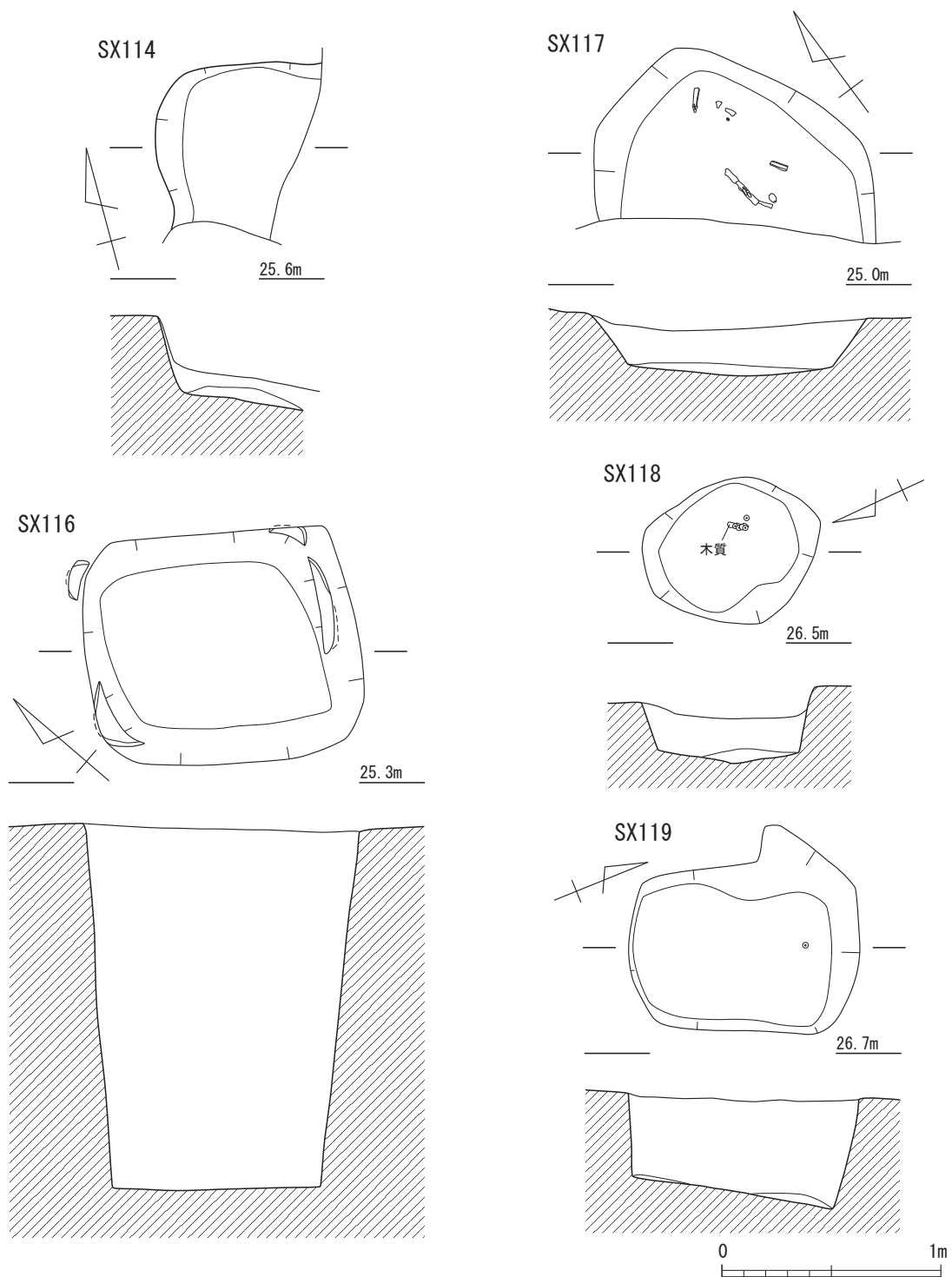
調査区北東側に位置する。墓坑は長軸1.25m（床面で0.95m）、短軸1.05m（床面で0.75m）の平面長方形を呈し、深さは1.65mである。磁器碗が出土した。

SX117（第99図、図版66）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.25m（床面で1.1m）、短軸0.7m以上（床面で0.65m以上）の平面不整形を呈し、深さは0.2mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX118（第99図、図版66）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸0.85m（床面で0.65m）、短軸0.65m（床面で0.5m）の



第 99 図 SX114・116～119 実測図 (1/30)

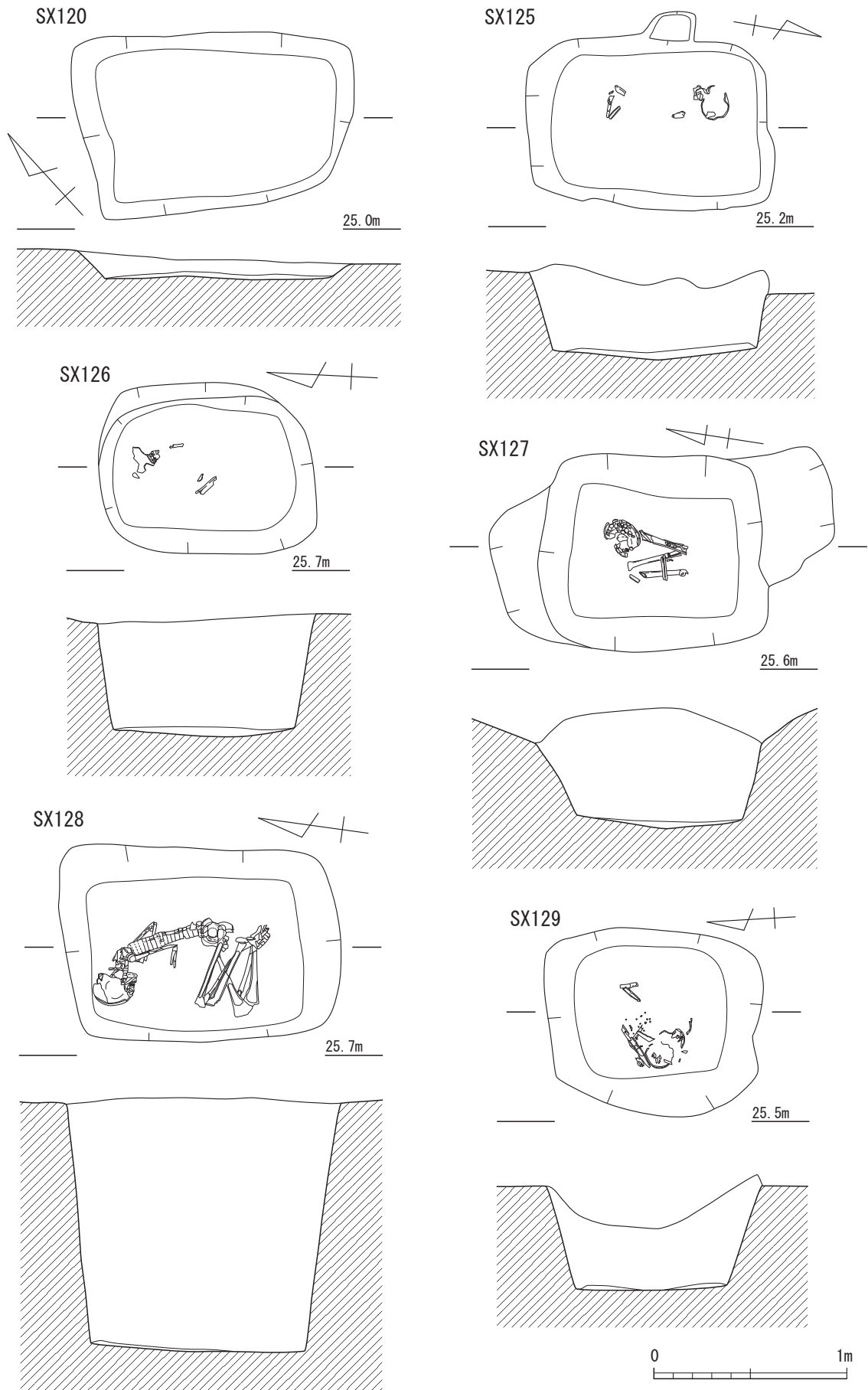
平面楕円形を呈し、深さは0.3mである。銭が出土した。

出土遺物 (第 103 図、図版 99)

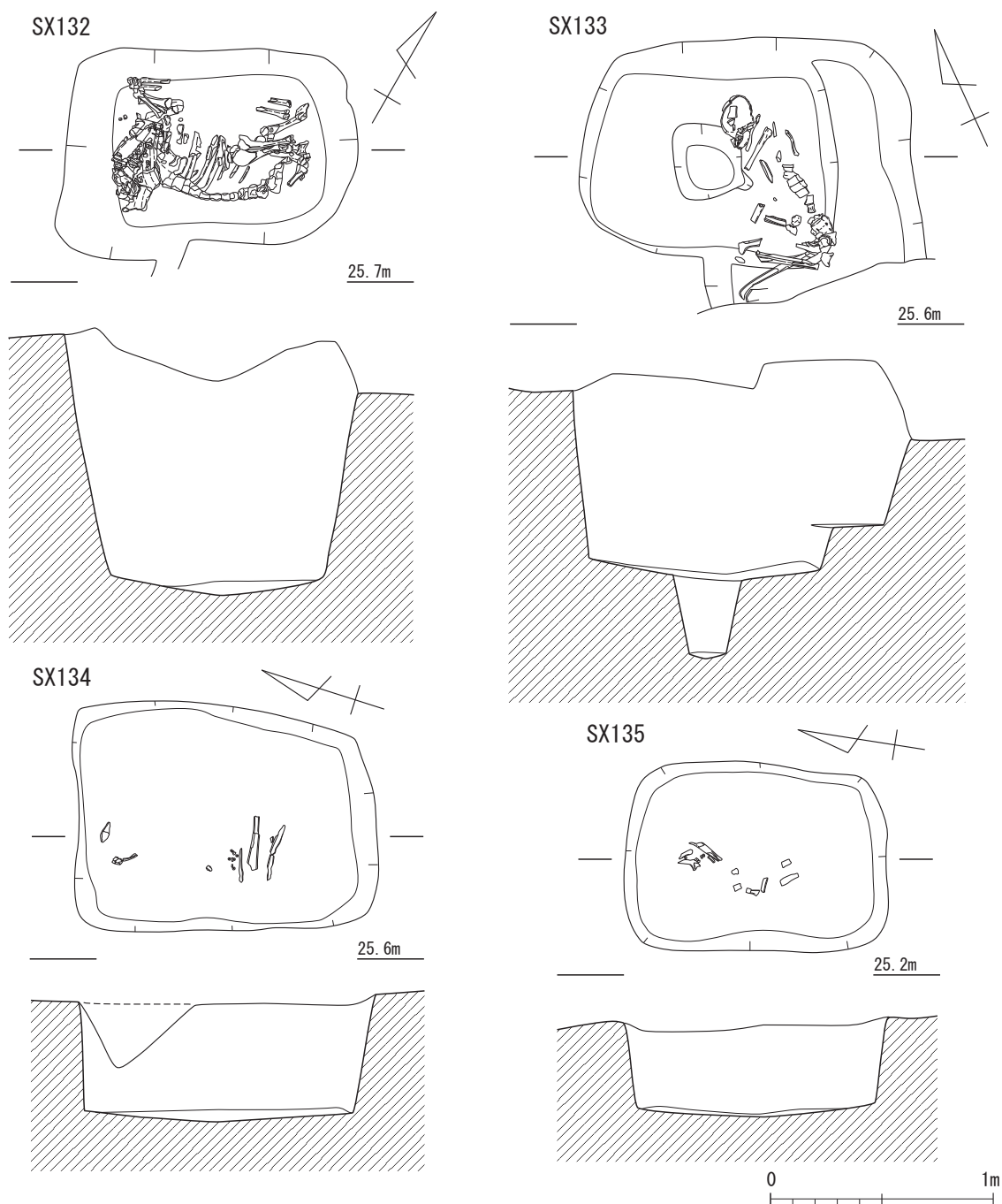
銅製品 (338～341) 338～341は銅銭で、338～340は寛永通宝、341の銭文は不明である。339は背面に「文」の字を鋳出す。340は3枚がずれて錆のため重なって固着する。

SX119 (第 99 図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.05m (床面で 0.9m)、短軸 0.85m (床面で 0.6m) の平面不整な長方形を呈し、深さは 0.5m である。土器片・銭が出土した。



第100図 SX120・125～129実測図(1/30)



第 101 図 SX132 ～ 135 実測図 (1/30)

出土遺物 (第 103 図、図版 99)

銅製品 (342) 銅銭で銹が進行して銭文が崩れているが、寛永通宝である。

SX120 (第 100 図)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.4m (床面で 1.2m)、短軸 0.95m (床面で 0.75m) の平面不整な長方形を呈し、深さは 0.1m である。土器片が出土した。

SX125 (第 100 図、図版 66)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸 1.25m (床面で 1.15m)、短軸 0.9m (床面で 0.8m) の平面長方形を呈し、深さは 0.5m である。316 は白色に風化した数珠玉。土師器杯・小皿・磁器碗が出土した。

出土遺物（第103図、図版95）

土師器（343・344） 343は小皿で、344は杯。ともに底部は回転糸切りで、板状圧痕がある。口縁部から体部は回転ナデで底部内面はナデである。

陶磁器（345） 染付磁器の椀。全面に施釉した後、高台畳付周辺の釉を拭き取る。ほぼ等間隔に3か所施文するが、高さはずらしている。

弥生土器（346） 高杯の杯部で内外面ともに丹塗りである。体部中位に1条のM字突帯を貼り付ける。口縁部外面から突帯がヨコナデ、突帯より下位がナデ、内面はナデである。SX130出土の270と攪乱5出土の397は同一個体と思われるが、接合しない。

SX126（第100図、図版67）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.1m（床面で0.9m）、短軸0.9m（床面で0.65m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは0.6mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX127（第100図、図版67）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.15m（床面で0.85m）、短軸1.0m（床面で0.7m）の平面不整な長方形を呈し、深さは0.6mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX128（第100図、図版67）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.45m（床面で1.1m）、短軸1.0m（床面で0.8m）の平面長方形を呈し、深さは1.3mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX129（第100図、図版67）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.1m（床面で0.8m）、短軸0.95m（床面で0.65m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは0.6mである。墓坑内に人骨が残る。小玉が出土した。

出土遺物（第103図、図版97）

ガラス製品（347～351） 完形の数珠玉が35点出土し、5点を図化した。うち1点は切断の失敗のためか連玉になっている。347・349～351は無色半透明のガラス玉で表面が部分的に白色に風化する。そのうち350は風化した白色部分が細かい筋の縞模様になる。348も無色半透明の数珠玉で表面に細かな亀裂が入る。

SX132（第101図、図版67）

調査区北側に位置する。墓坑は長軸1.3m（床面で0.95m）、短軸0.85m（床面で0.65m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは1.2mである。墓坑内で牛と考えられる骨が出土した。

SX133（第101図、図版68）

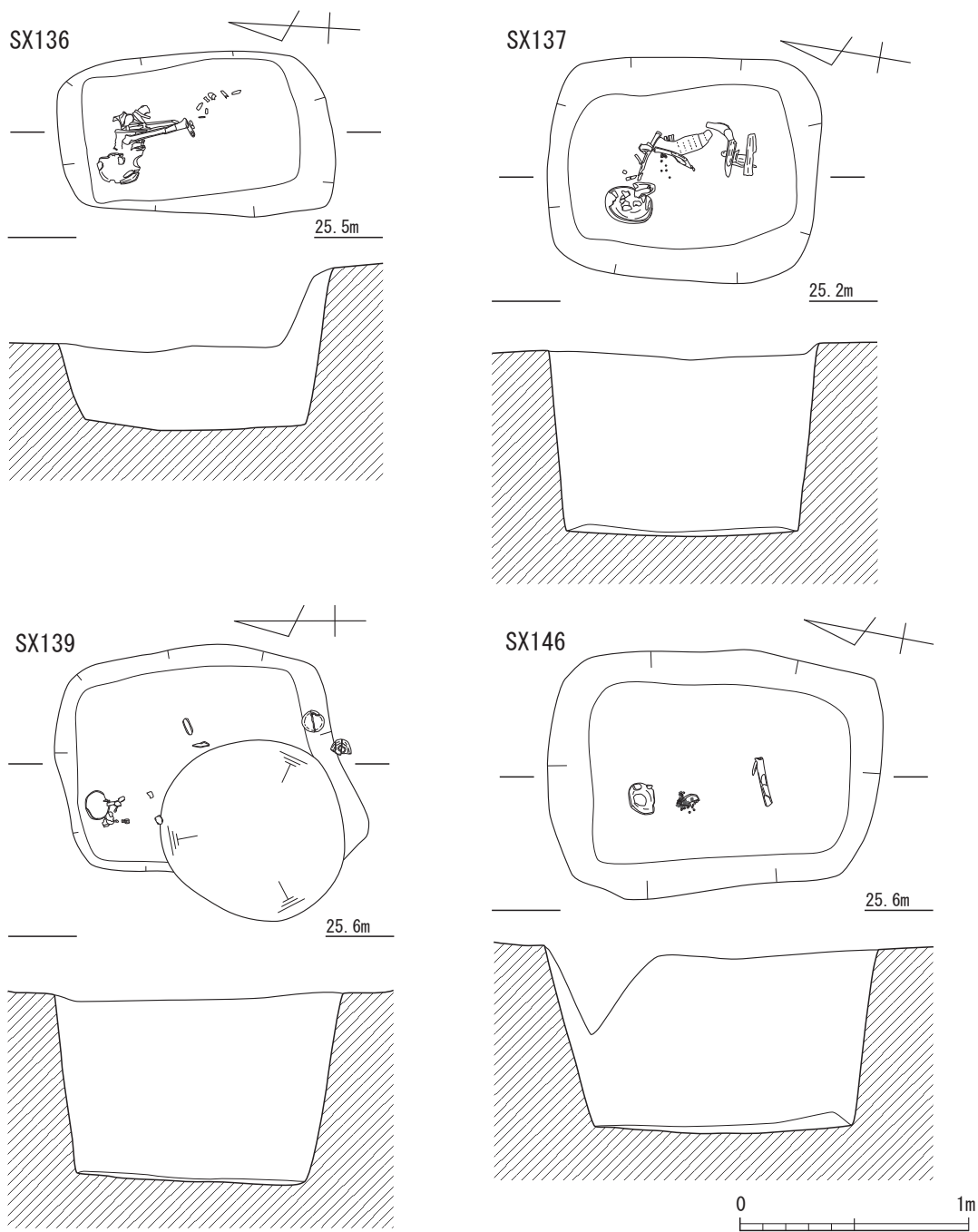
調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.5m（床面で1.0m）、短軸1.0m（床面で0.8m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは1.0mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX134（第101図、図版68）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.3m（床面で1.2m）、短軸1.0m（床面で0.9m）の平面長方形を呈し、深さは0.55mである。墓坑内に人骨が残る。土師器小皿・玉が出土した。

出土遺物（第103図、図版97）

ガラス製品（352） 完形の数珠玉が5点と破片が出土し、1点を図化した。352は白色に風化した



第 102 図 SX136・137・139・146 実測図 (1/30)

数珠玉。

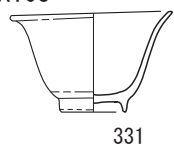
SX135 (第 101 図、図版 68)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.15m (床面で 1.05m)、短軸 0.85m (床面で 0.7m) の平面長方形を呈し、深さは 0.45m である。墓坑内に人骨が残る。土器片が出土した。

SX136 (第 102 図、図版 68)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m (床面で 0.9m)、短軸 0.7m (床面で 0.6m) の平面長方形を呈し、深さは 0.7m である。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX103



331



332

333

334

335

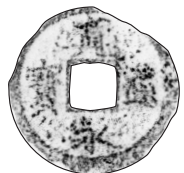
336

SX114

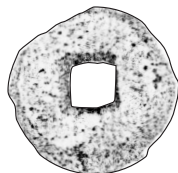


337

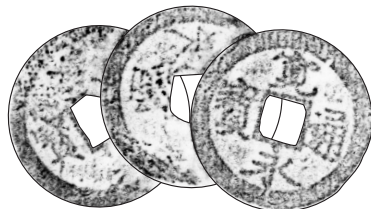
SX118



338



339

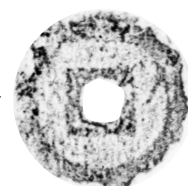


340

SX119



342

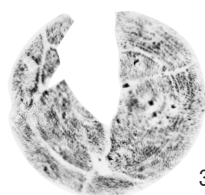


341

SX125



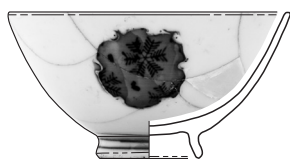
343



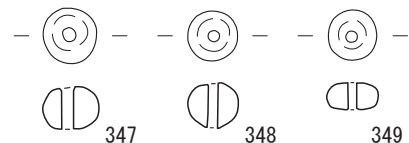
344



345



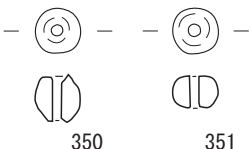
SX129



347

348

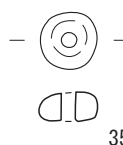
349



350

351

SX134

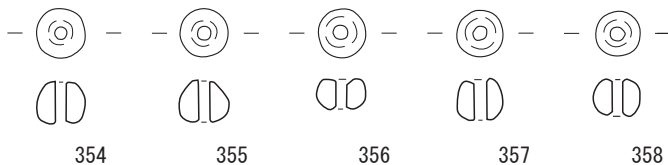


352

SX137



353



354

355

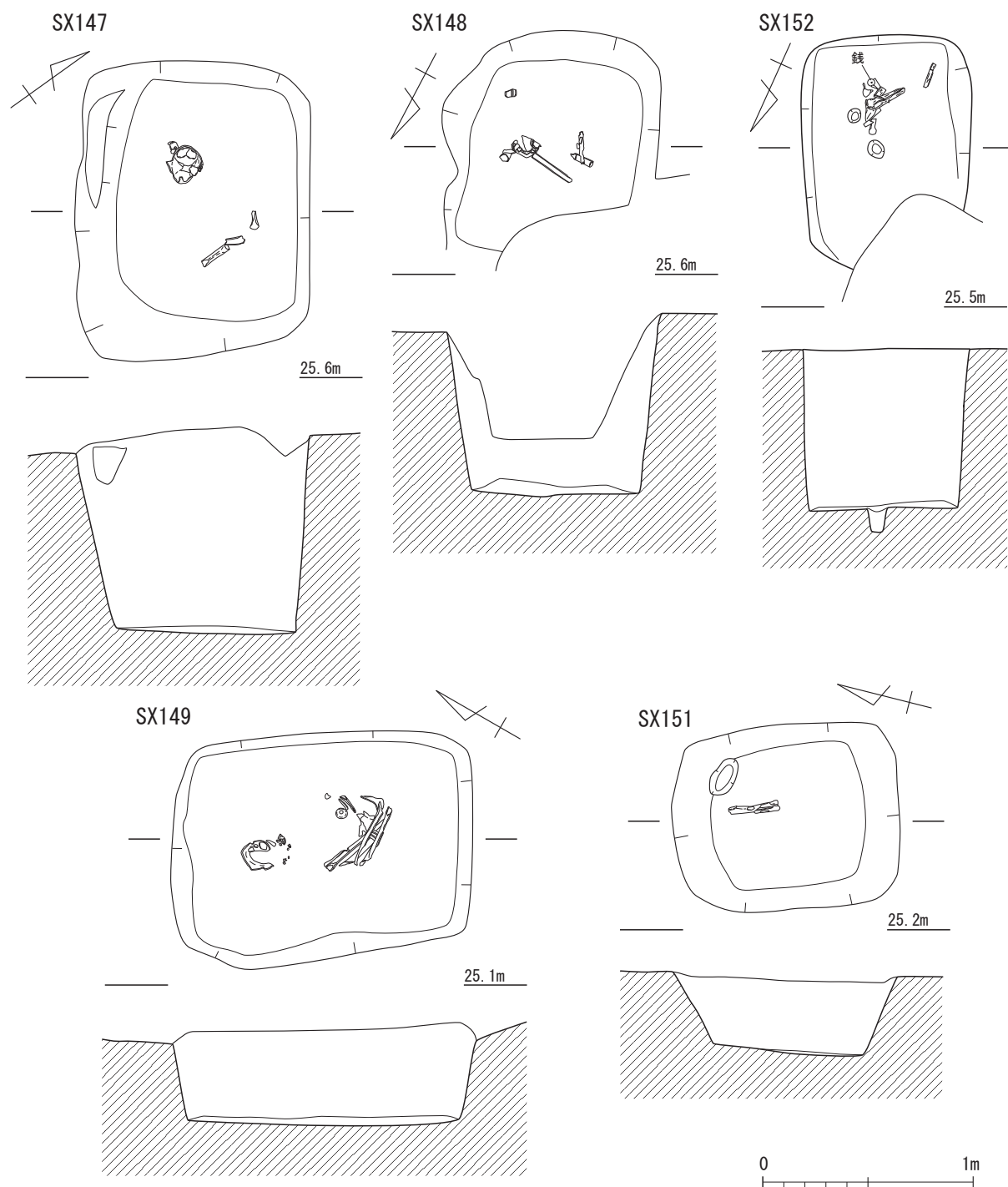
356

357

358



第103図 SX103・114・118・119・125・129・134・137 出土遺物実測図
(331・337・343～346・353は1/3、他は原寸)



第 104 図 SX147 ～ 149 ・ 151 ・ 152 実測図 (1/30)

SX137 (第 102 図、図版 68)

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸 1.2m (床面で 1.0m)、短軸 1.0m (床面で 0.7m) の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.8m である。墓坑内に人骨が残る。数珠玉・土師器小皿が出土した。

出土遺物 (第 103 図、図版 98)

土師器 (353) 小皿で、口縁部の一部にススが付着するため、灯明皿として使用されたと考えられる。底部は回転糸切りで板状圧痕がある。内外面ともに回転ナデ、底部内面はナデ。

ガラス製品（354～358）数珠玉が20点出土し、5点を図化した。354・357は無色透明の数珠玉で表面は白色に風化する部分が多い。355・356・358は白色に風化する数珠玉。

SX139（第102図、図版68）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.2m（床面で1.0m）、短軸0.95m（床面で0.8m）の平面長方形を呈し、深さは0.8mである。墓坑内に人骨が残る。土師器小皿・陶器皿・玉が出土した。

出土遺物（第106図、図版97・98）

土師器（359・360）ともに小皿で底部は回転糸切り、360には板状圧痕がある。

陶磁器（361）陶器の皿。胴部は屈曲し、口縁部は外反し、端部は小さく内湾する。内面から口縁部外面、一部は胴部下位まで施釉する。釉はにぶい灰緑色で光沢がある。見込みには3か所の砂目痕がある。

ガラス製品（362）黄褐色で半透明の数珠玉。

SX146（第102図、図版69）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.45m（床面で1.1m）、短軸1.05m（床面で0.8m）の平面長方形を呈し、深さは0.8mである。墓坑内に人骨が残る。数珠玉・土器片が出土した。

出土遺物（第106図、図版97）

ガラス製品（363～367）完形の数珠玉88点と破片が出土し、5点を図化した。363・366は白色に風化した数珠玉。364・365・367は無色半透明の数珠玉で、表面の大部分が白色に風化する。

SX147（第104図、図版69）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.4m（床面で1.1m）、短軸1.1m（床面で0.85m）の平面隅丸長方形を呈し、深さは1.0mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX148（第104図、図版69）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.1m以上（床面で0.9m）、短軸1.0m（床面で0.8m）の平面不整形を呈し、深さは0.85mである。墓坑内に人骨が残る。土器片が出土した。

SX149（第104図、図版69）

調査区中央東側に位置する。墓坑は長軸1.4m（床面で1.3m）、短軸1.1m（床面で0.9m）の平面長方形を呈し、深さは0.5mである。墓坑内に人骨が残る。磁器猪口が出土した。

出土遺物（第106図、図版98）

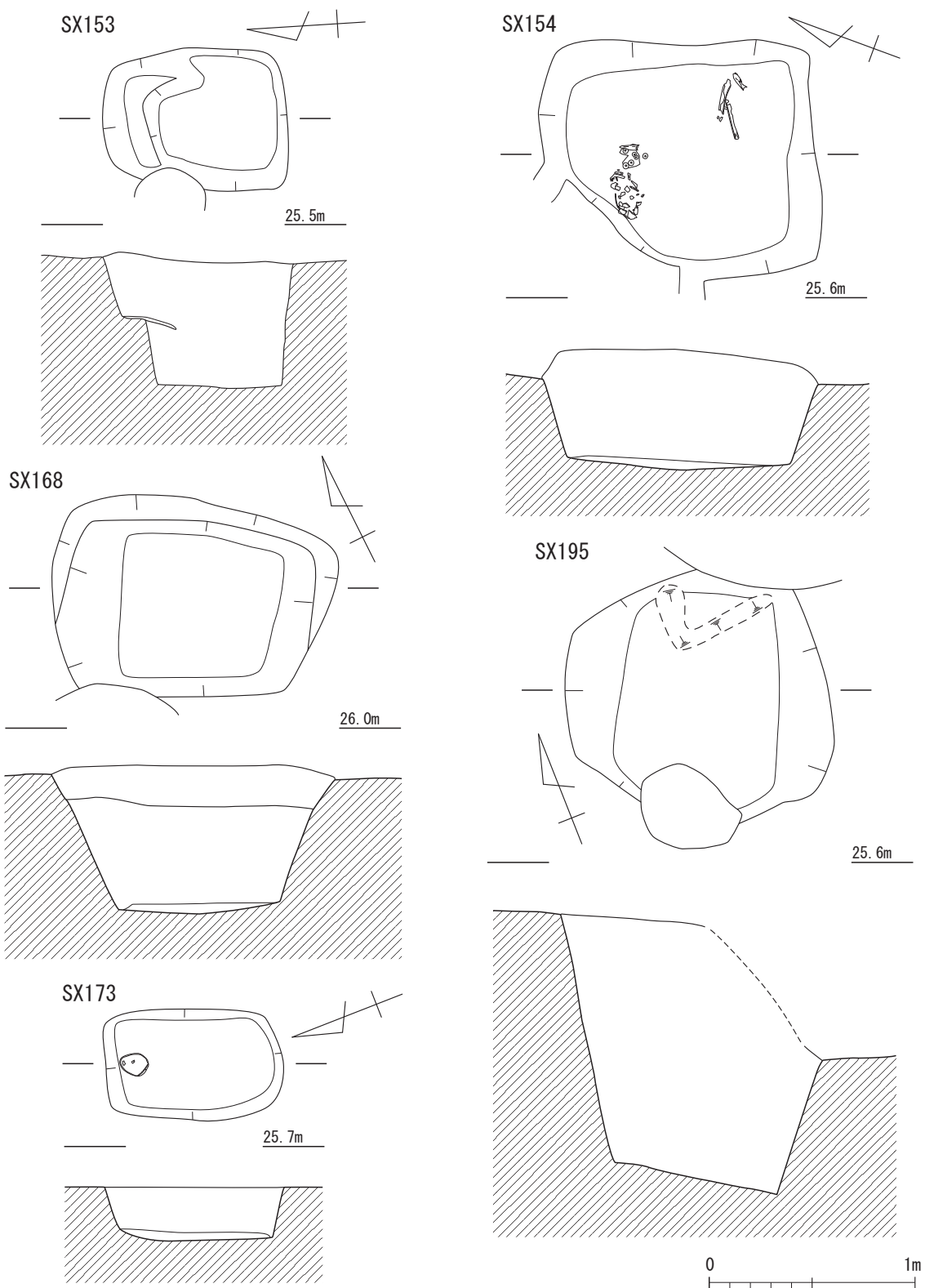
陶磁器（368）染付磁器の猪口で、外面に草花文を描く。内面から体部外面、部分的には高台部外面まで施釉する。

SX151（第104図、図版69）

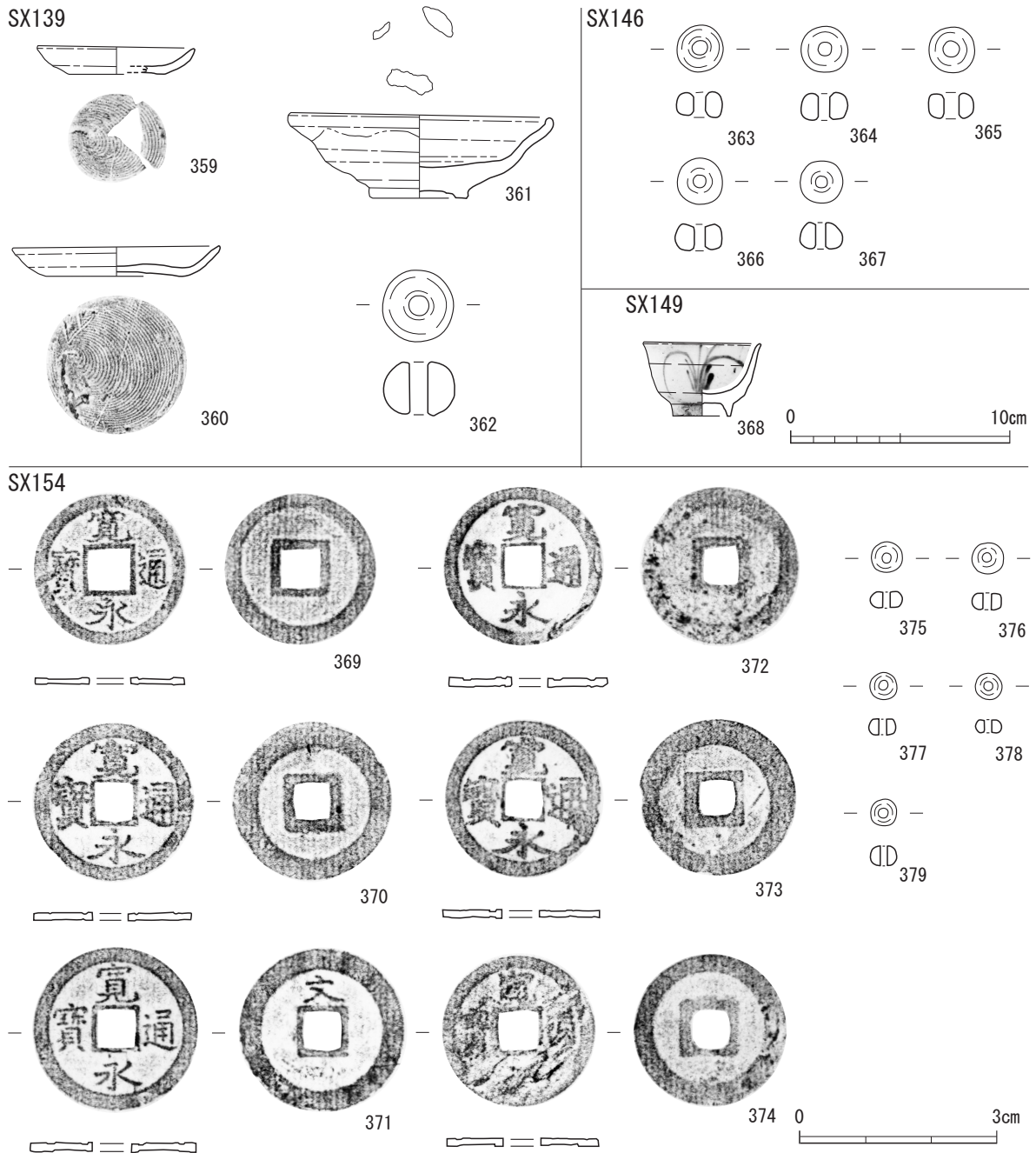
調査区北東側に位置する。墓坑は長軸1.1m（床面で0.75m）、短軸0.9m（床面で0.65m）の平面長方形を呈し、深さは0.35mである。墓坑内に人骨が残る。副葬品はない。

SX152（第104図）

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.1m（床面で1.0m）、短軸0.7m（床面で0.65m）の平面長方形を呈し、深さは0.75mである。墓坑内に人骨が残る。銭が出土した。



第105図 SX153・154・168・173・195実測図(1/30)



第106図 SX139・146・149・154 出土遺物実測図
(359～361・368は1/3、他は原寸)

SX153 (第105図、図版69)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸0.9m(床面で0.6m)、短軸0.7m(床面で0.55m)の平面長方形を呈し、深さは0.65mである。土器片が出土した。

SX154 (第105図)

調査区中央に位置する。墓坑は長軸1.3m(床面で1.1m)、短軸1.15m(床面で0.95m)の平面不整な長方形を呈し、深さは0.6mである。墓坑内に人骨が残る。銭・小玉・木質が出土した。

出土遺物（第106図、図版97）

銅製品（369～374） 369～374は銅銭の寛永通宝で、371の背面には「文」の文字を鋳出し、374には繊維状のものが付着する。

ガラス製品（375～379） 数珠玉が105点出土し、5点を図化した。375・376・377・378は無色半透明の数珠玉。375は細い筋状の白色に風化する部分が少しあるが、透明度が高い。378は375よりも風化部分が多く透明度が少し劣る。376・377は無色半透明で表面の白色に風化した部分が多い。379は青緑色と風化した白色部分とが縞模様になる数珠玉。

SX168（第105図）

調査区北東側に位置する。墓坑は長軸1.4m（床面で0.8m）、短軸1.0m（床面で0.7m）の平面不整な長方形を呈し、深さは0.75mである。副葬品はない。

SX173（第105図、図版69）

調査区北西側に位置する。墓坑は長軸0.85m（床面で0.75m）、短軸0.55m（床面で0.4m）の平面長方形を呈し、深さは0.25mである。副葬品はない。

SX195（第105図）

調査区南東側に位置する。墓坑は長軸1.3m（床面で1.1m）、短軸1.25m（床面で0.9m）の平面不整な円形を呈し、深さは1.35mである。副葬品はない。

④その他の遺構

SX71（第107図）

調査区南東隅に位置する。長軸1.5～1.7mの平面不整な円形を呈し、深さは0.4mである。出土遺物はない。

SX99（第107図）

調査区北側に位置する。長軸2.0m、短軸0.8mの平面隅丸長方形を呈し、深さは0.4mである。磁器・銭が出土しており、墳墓の可能性が高い。

出土遺物（第109図、図版99）

陶磁器（380・381） 380は磁器の猪口で、開き気味の胴部に端反りの口縁部をもつ。やや灰色味の透明釉がかかり、貫入がある。381は染付磁器の椀で、体部は丸みを持ち口縁部は直に立ち上がる。外面に草花文を描く。

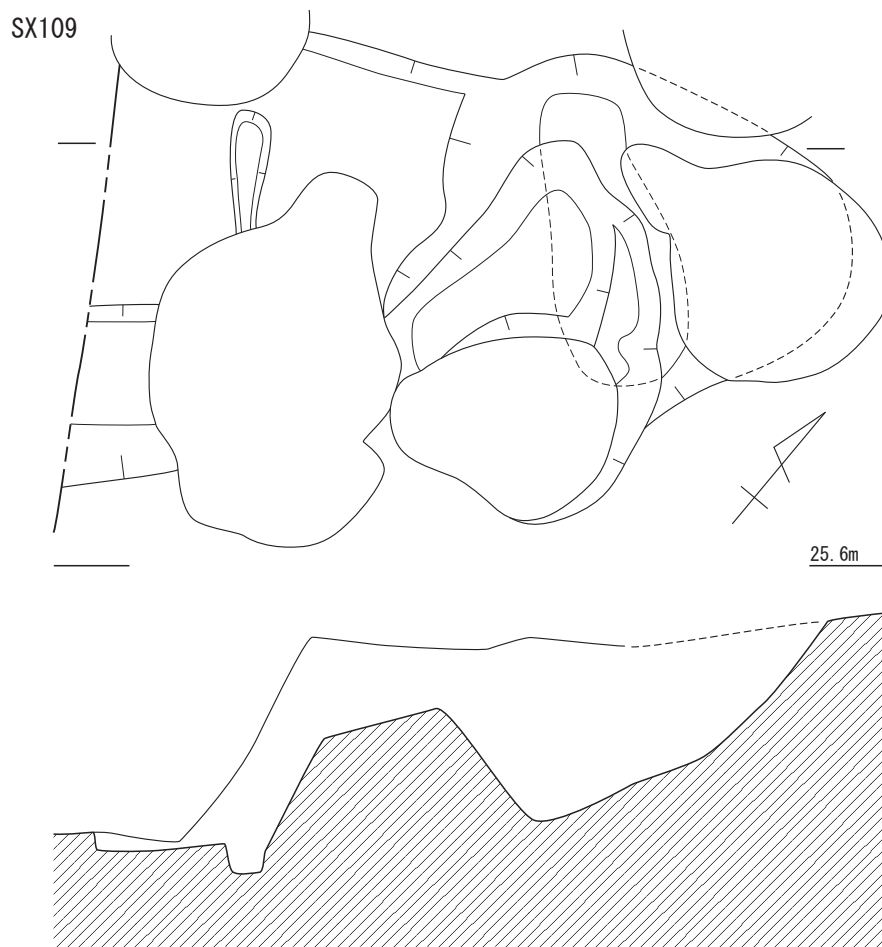
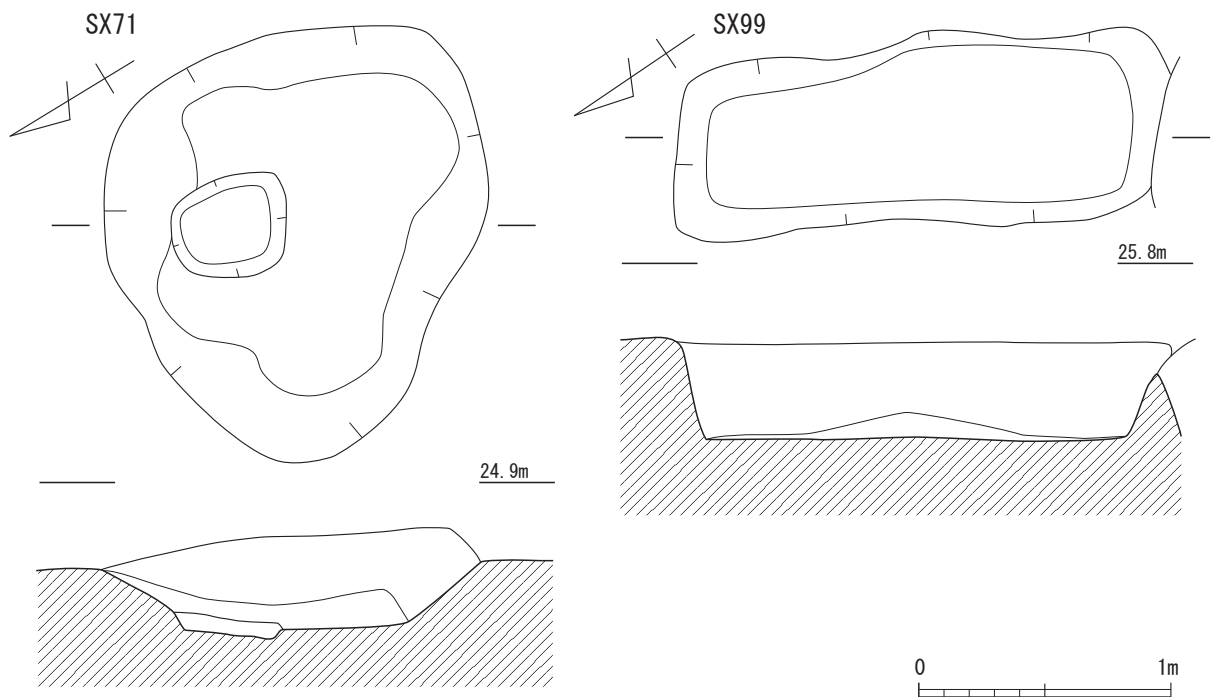
銅製品（382） 銭貨の模造品と考えられる。歪んだ円形で中央部を円形に打ち抜く。

SX109（第107図）

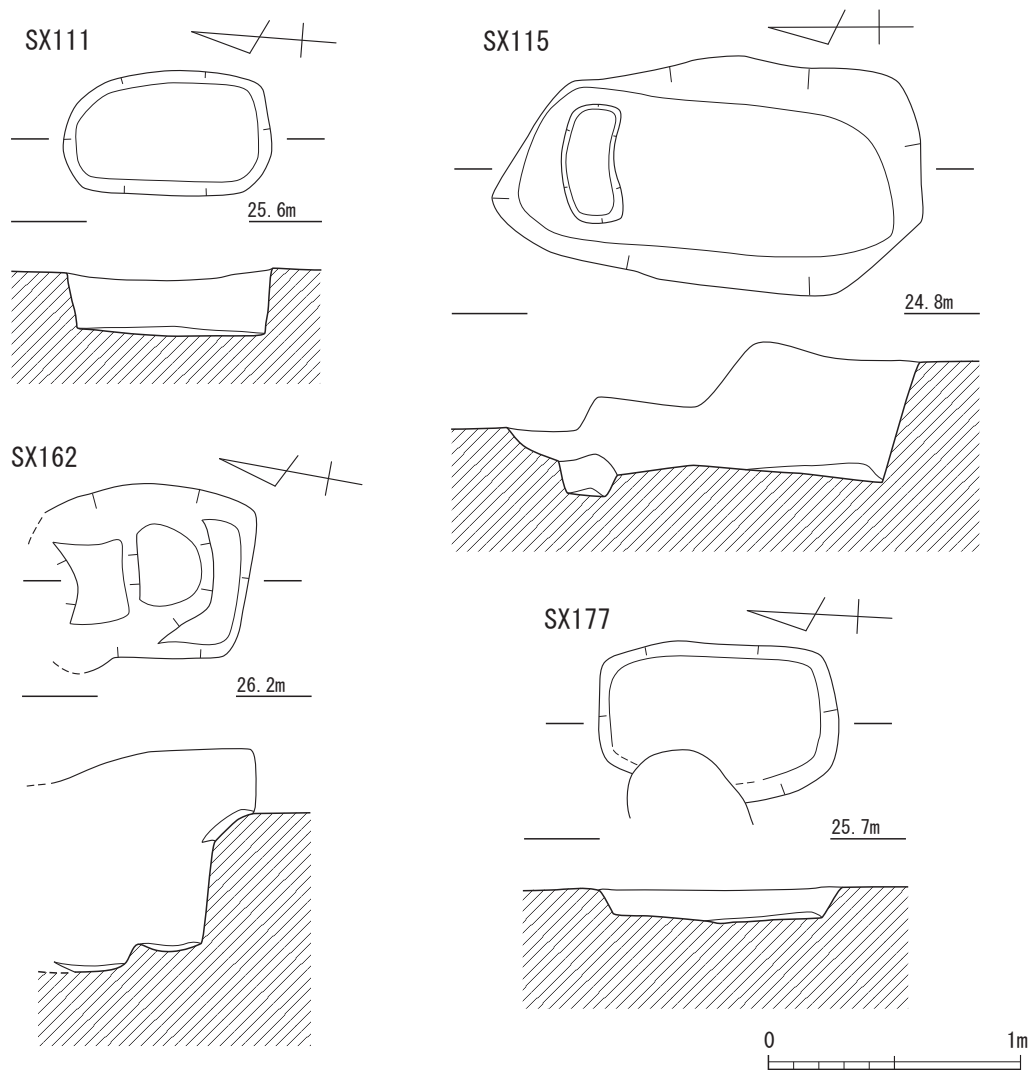
調査区北側に位置し、SX85・110等多くの遺構に切られ、西側は調査区外に広がる。遺構の全形は不明であるが、墓坑は長軸3.0m以上、短軸1.5m以上の平面不整形を呈する。深さ最深部では0.8mである。陶器等が出土した。

出土遺物（第109図、図版98）

瓦質土器（383・384） 383は蓋である。つまみは上部を凹ませ、受け部は直角に上方に立ち上がる。口縁部は逆L字状に屈曲する。つまみから口縁部にかけてはロクロナデ、底面はナデ。384は壺で、口縁部から胴部中程まで欠損する。底部内外面はナデ調整。胴部外面はハケ状工具によるヨコナデ



第107図 SX71・99・109実測図(1/30)



第 108 図 SX111・115・162・177 実測図 (1/30)

でそれより上は研磨している。胴部内面はロクロナデ調整。383 と 384 は焼成、胎土ともに同様に、合わせて蓋付壺になると思われるが、壺の上位が欠損するため断定はできない。

陶磁器 (385) 陶器の甕。肩部に最大径があり口縁部は短く立ち上がって端部を玉縁状にする。内外面に暗褐色の釉を施し、底部外面は露胎となる。内面の釉は極く薄く、口縁部内外面に重ね掛けをする。肩部付近に沈線が 3 条巡り、その上に貼花文が現状で 1 箇所残存する。

SX111 (第 108 図)

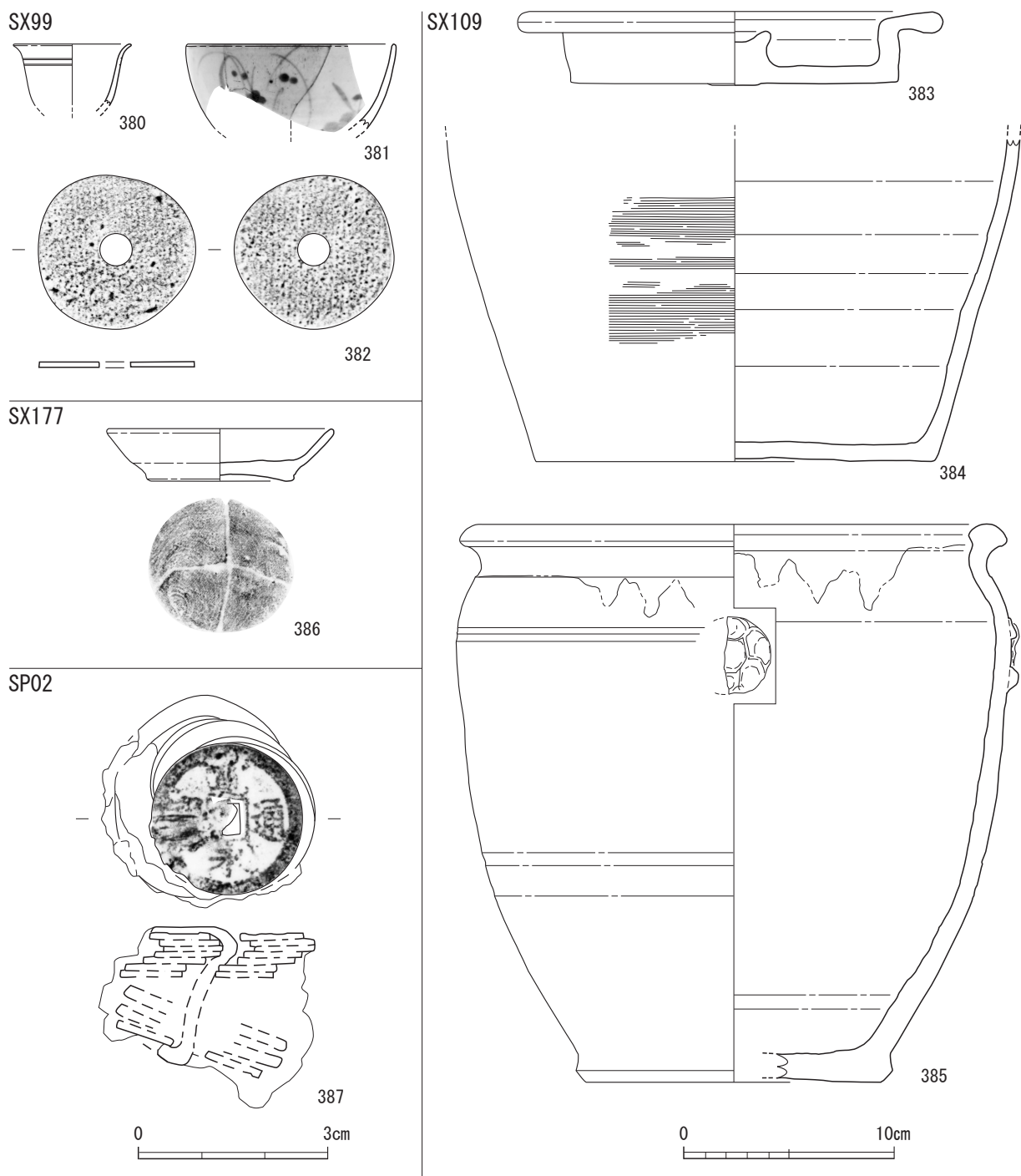
調査区北側に位置する。長軸 0.7m、短軸 0.5m の平面隅丸長方形形を呈し、深さは 0.25m である。出土遺物はない。

SX115 (第 108 図)

調査区中央部に位置する。長軸 1.7m、短軸 0.9m の平面不整な長方形形を呈し、深さは 0.5m である。床面北側がピット状に 0.1m ほど深い。出土遺物はない。

SX162 (第 108 図)

調査区北側に位置する。長軸 0.9m 以上、短軸 0.7m の平面隅丸長方形形を呈し、深さは 0.8m で



第 109 図 SX99・109・177・SP02 出土遺物実測図 (382・387 は原寸、他は 1/3)

ある。出土遺物はない。

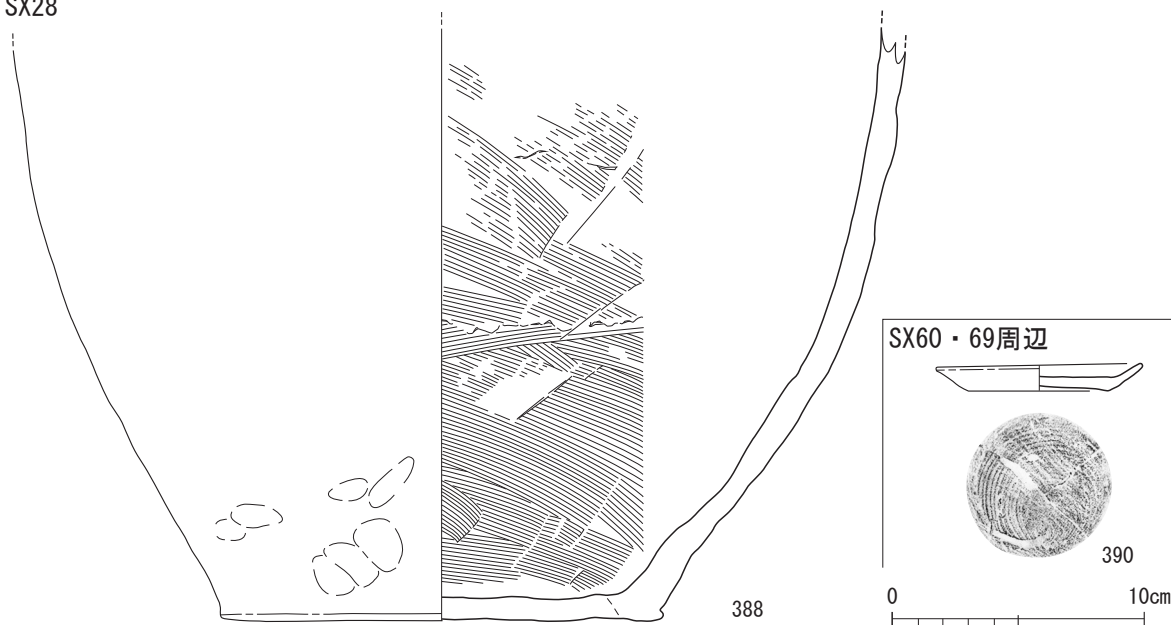
SX177 (第 108 図)

調査区北西側に位置する。長軸 0.95m、短軸 0.6m の平面隅丸長方形を呈し、深さは 0.1m である。

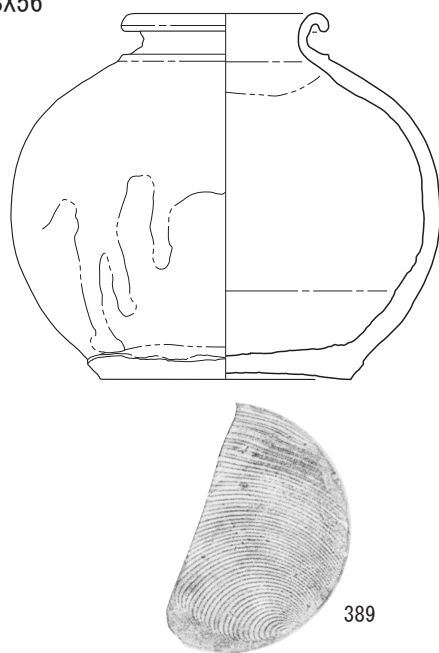
出土遺物 (第 109 図、図版 98)

土師器 (386) 杯で、底部は回転糸切り。口縁部から体部が内外面ともに回転ナデ、底部内面はナデ。

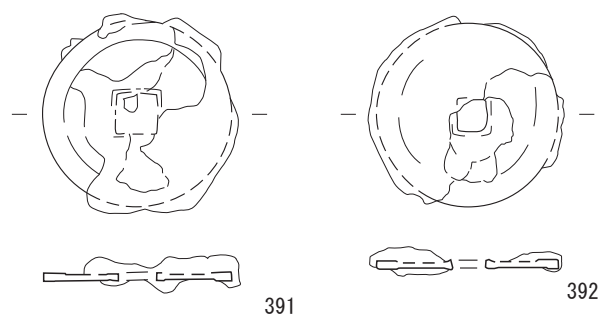
SX28



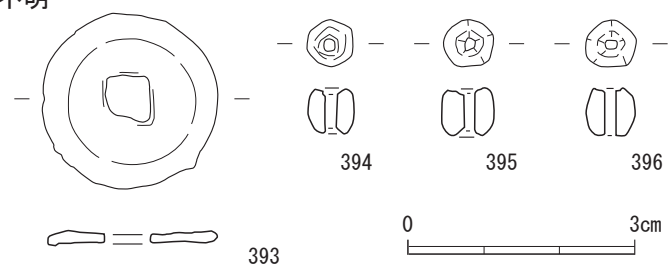
SX56



不明



不明



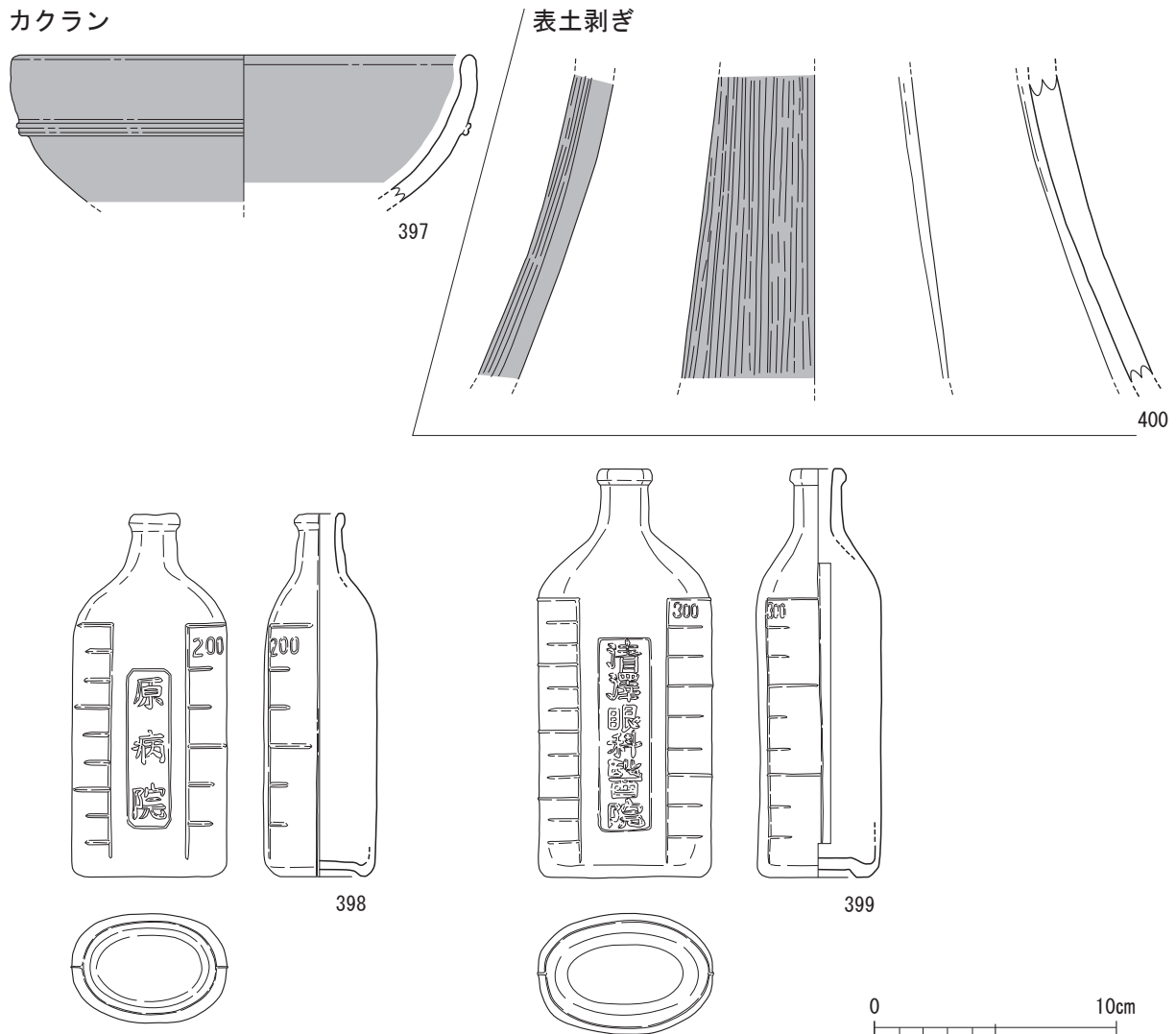
第110図 SX28・56・60-69周辺、その他の出土遺物実測図
(388～390は1/3、他は原寸)

(4) その他の出土遺物

SP02 出土遺物 (第109図、図版99)

銅製品・鉄製品 (387) 銅銭8枚と鉄銭2枚?が重なって錆のため固着する。実測図の上から7枚と最下位1枚が銅銭で、最下位1枚の上の2枚?が鉄銭である。上から1枚目の銭文は寛永通宝であるが、他は不明である。緒が残存する。

SX28 出土遺物 (第110図、図版98)



第 111 図 カクラン・表土・その他の出土遺物実測図 (1/3)

土師器 (388) 甕。胴部中位から底部が残存する。胴部内面がハケメで外面はハケメ後ナデ、底部は内外面ともにナデ。

SX56 出土遺物 (第 110 図、図版 98)

陶磁器 (389) 陶器の壺。口縁部は短く立ち上がり端部は外方に丸く折る。頸部に段がつき、胴部は底部から丸味をもって立ち上がる。底部は回転糸切り。体部外面から口縁部内面に暗褐色の釉を施すが、体部は重ね掛けをしており釉が垂れる。

SX60・69 周辺出土遺物 (第 110 図、図版 100)

土師器 (390) 小皿。底部は回転糸切りで、板状圧痕がある。調整は口縁部から体部が内外面ともに回転ナデ、底部内面はナデ。

出土地点不明遺物 (第 110 図、図版 99)

銅製品 (391～393) 391 は拓本ができる状態ではないが、「永」と「寛」の字の一部が判読できる銅銭の寛永通宝である。392・393 は銭文不明の銅銭。

木製品 (394～396) 数珠玉が 71 点出土し、3 点を図化した。394～396 は数珠玉で表面の色調

は黒褐色である。

カクラン出土遺物（第111図、図版100）

弥生土器（397） 高杯の杯部で、内外面ともに丹塗りである。体部に1条のM字突帯を貼り付ける。口縁部内外面と突帯はヨコナデ、体部は内外面ともにナデ。

ガラス製品（398・399） 398・399は気泡の多いガラスの薬瓶である。398には「原病院」、399には「清澤眼科病院」の名前が入る。398よりも399の方が容量が大きいこと以外、体部断面が楕円形で、口縁端部を肥厚させ上げ底であることなどの形態や、名前や目盛りのデザインなどは似通ったものである。

表土剥ぎ時出土遺物（第111図）

弥生土器（400） 筒形器台で、透かしがある。外面がタテ方向のミガキで内面がナデ。外面は丹塗りである。

3. 小結

ここでは、主要遺構の時間的位置づけについて概要を記述する。詳細はⅧ章総括を参照されたい。最もさかのぼる遺物として32号甕棺墓出土の石核があり、旧石器時代の資料である。

弥生時代の遺構としては、甕棺墓・土坑墓・木棺墓・石蓋土坑墓・石棺墓がある。前期末～中期初頭前後に土坑墓（木棺墓）が出現、中期前半には甕棺墓を主体とした列状墓を形成する。中期後半～後期初頭頃には甕棺墓による集塊状墓を形成するが、後期前半には甕棺墓が消滅する。後期前半～中頃では土坑墓、後期後半～終末では石蓋土坑墓・石棺墓へと変遷する。

古墳時代になると1～3号墳とした古墳が出現する。出土した土器より1号墳は古墳時代初頭（久住ⅡA期）、3号墳は古墳時代前期前半（久住ⅡB期）に位置づけられる。

古墳築造後、長期間にわたり土地利用の痕跡がなくなるが、近世になり再び墓地が営まれるようになる。17世紀には墓地（木棺墓主体）の形成がはじまったと考えられ、以後桶棺墓→甕棺墓へと変遷しながら、20世紀中頃まで継続する。

【参考文献】

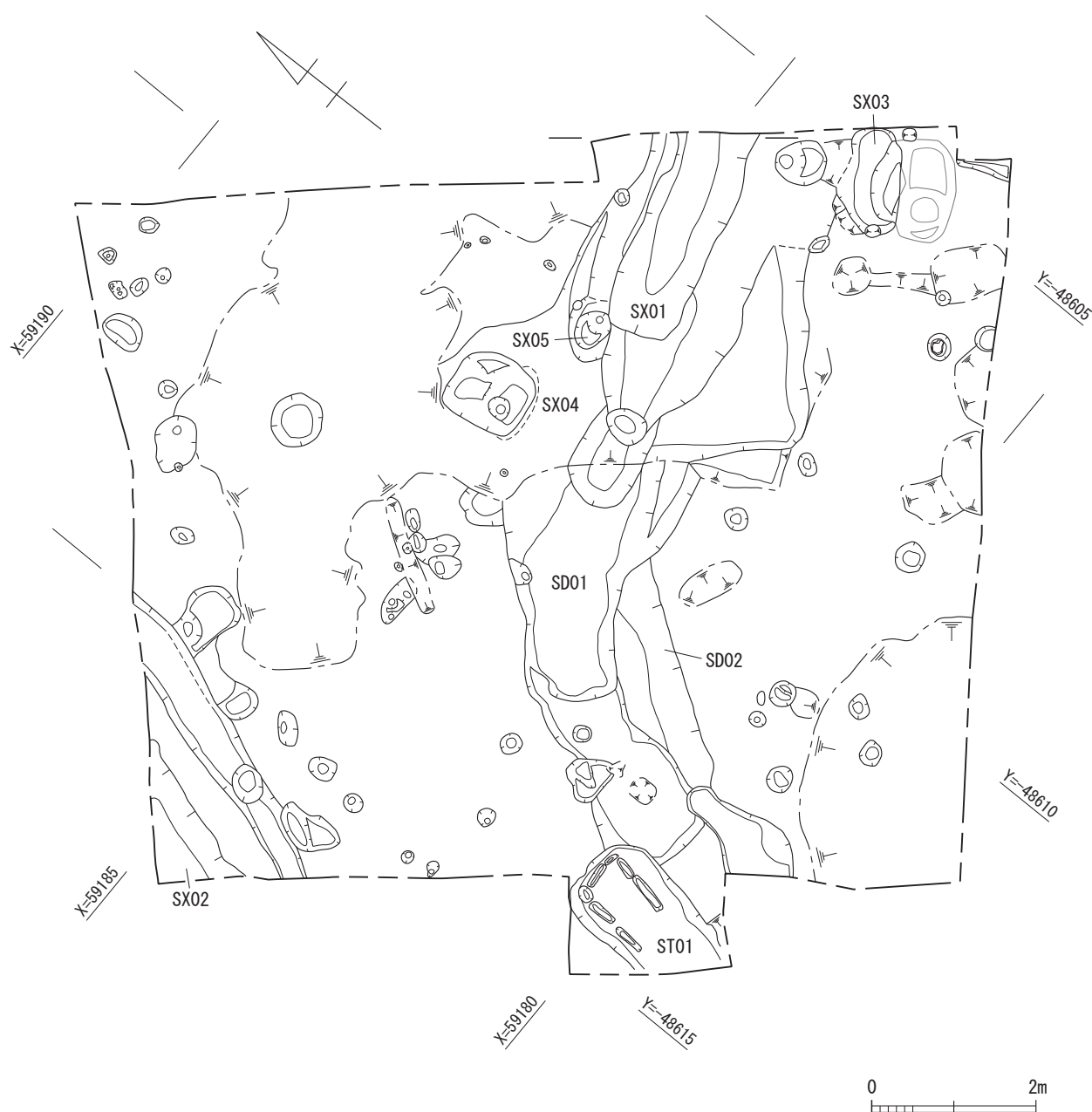
久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』

VI. 瑞穂遺跡第 10 次調査

1. 調査概要

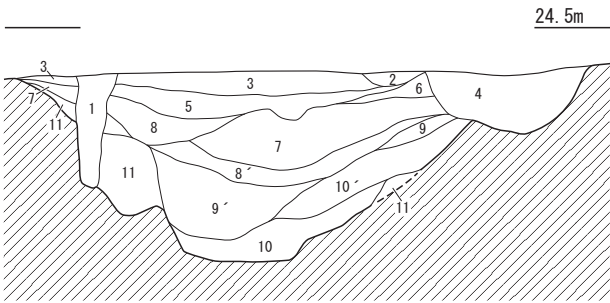
調査地は瑞穂遺跡の中央部、大野城市瑞穂町 2 丁目 31- 8、31-12 に所在する。調査面積は 100 m²である。微高地最高所付近から南西側の低地に向かって低くなっていく地点にあたる。

調査地の現況は宅地で、現地地表下 20 ～ 60 cm で橙色粘質土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、溝状遺構 2 条、木棺墓 1 基、土坑墓 1 基、その他土坑、性格不明の落ち込みのほか、複数のピットを確認した。遺物は多数の弥生土器や土師器・須恵器が出土した。なお、調査区東側を中心に攪乱があり、遺構面が消滅する。



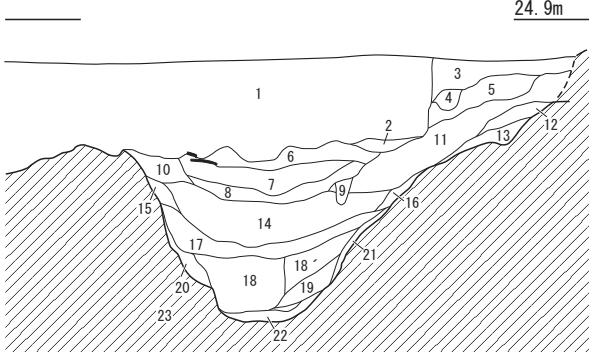
第 112 図 遺構配置図 (1/80)

SD01①(東側)



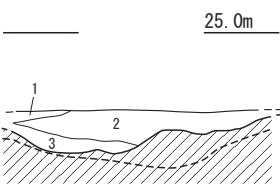
- 1. 黒色 (7.5YR2/1) + 灰褐色 (7.5YR4/2) + 黄褐色 (7.5YR7/8) ブロック
- 2. 黒色 (7.5YR2/1) + 褐灰色 (7.5YR6/1) ブロック 現代擾乱
- 3. 黒色 (7.5YR2/1) + 橙色 (7.5YR6/8) ブロック多い 締まり弱い 現代擾乱
- 4. 黒色 (7.5YR2/1) + 橙色 (7.5YR6/8) 締まり弱い 現代擾乱
- 5. 黒色土 (7.5YR2/1) 締まりあり 粘質 土路多い SD01 溝
- 6. 黒色 (7.5YR2/1) + 灰褐色 (7.5YR4/2) 締まりあり やや粒 ブロック (セメント) 含む 現代擾乱
- 7. 灰褐色 (7.5YR4/2) ~ 黒褐色 (7.5YR3/2) 固く締まる 粘質 細かい橙色の土を多く含む 弥生土器多い
- 8. 黒褐色 (7.5YR3/1) ~ 黒色 (7.5YR2/1) 締まりあり 粘質 細かい橙色の土を含む
- 9' 色等8層と同じ 5mm以下の礫を多く含む
- 9. 灰褐色 (7.5YR4/2) + 黒褐色 (7.5YR3/1) + 橙色 (7.5YR6/6) 締まりやや弱い 粘質 (5mm以下の礫が多く混じる)
- 10. 明褐色 (7.5YR5/8) + 灰褐色 (7.5YR4/2) 締まりやや弱い 粒、礫が多く混じる
- 11. 橙色 (7.5YR6/6) 締まる 粘質 地山

SD01②(東壁)



- 1. 黒色 (7.5YR1.7/1) + 橙色 (7.5YR6/6) + 褐灰色 (7.5YR4/2) 締まり弱い 現代擾乱
- 2. 橙色 (7.5YR6/6) + 灰褐色 (7.5YR4/2) 締まり弱い 現代擾乱
- 3. 黒褐色 (7.5YR3/2) + 橙色 (7.5YR6/6) 締まりあり 粘 埋土 ビット?
- 4. 黒褐色 (7.5YR3/1) + 橙色 (7.5YR6/6) (微細) 締まりあり 粘 埋土 ビット?
- 5. 灰黄褐色 (10YR4/2) + 黄褐色 (10YR5/6) + 橙色 (7.5YR6/6) (微細) 締まりあり 粘
- 6. 黒褐色 ~ 褐灰色 (7.5YR3/1 ~ 4/1) + 橙色 (7.5YR6/6) (微) 締まりあり 粘 土器多く含む 少量炭
- 7. 黒褐色 (7.5YR3/2) + 橙色 (7.5YR6/6) (ブロック) 固く締まる 粘土
- 8. 黒色 (7.5YR2/1) 締まりあり 粘 (砂混じる)
- 9. 黒色 (7.5YR2/1) + 灰褐色 (7.5YR4/2) 締まり弱い 粘 底の方のみ黒
- 10. 黒褐色 (7.5YR3/2) + 橙色 (7.5YR6/6) 8層より締まる 7より弱 粘 黒色 (7.5YR2/1) 少し混じる 堆積土
- 11. 10層よりやや黒色土減る 堆積土
- 12. にぶい橙色 (7.5YR6/4) + 黒褐色 (7.5YR3/2) 固く締まる 粘性強 炭
- 13. 褐灰色 (7.5YR5/1) + にぶい橙色 (7.5YR6/4) + 橙色 (7.5YR6/6) 粘 締まる
- 14. 褐色 (7.5YR4/3 ~ 4/4) + 黒色 (7.5YR1.7/1) + 橙色 (7.5YR6/6) (微) 締まりやや弱 粘
- 15. にぶい橙色 (7.5YR6/4) ~ 褐色 (7.5YR6/6) 締まり弱 粘 (粒子細かい)
- 16. にぶい橙色 (7.5YR6/4) + にぶい黄褐色 (10YR5/4) 締まりやや弱 粘 (粒子細かい)
- 17. 黒色 (7.5YR1.7/1) ~ 黒褐色 (7.5YR3/2) 固く締まる ~ やや締まる 粘 (粒子細かい) 北ほど固く締まる 一部地山ブロック (褐色 (7.5YR6/6))
- 18. 灰褐色 (7.5YR4/2) + 黄褐色 (7.5YR7/8) + 黄褐色 (10YR8/6 ~ 8/8) + 黒色 (7.5YR1.7/1) 締まり弱 粘 炭が入る
- 18' 18層とほぼ同じ ブロックが小さくなり、炭が入らない
- 19. 褐色 (7.5YR4/3 ~ 4/4) + 黒色 (7.5YR1.7/1) 締まり弱 (18層よりややある) 粘 炭ごく少しあり
- 20. 暗褐色 (7.5YR3/3) 締まり弱 粘 (粒子細かい)
- 21. 褐灰色 (7.5YR5/1) + 橙色 (7.5YR6/6) 締まり弱 粘 (粒子細かい)
- 22. 黄褐色 (7.5YR7/8) ~ 褐色 (7.5YR6/8) 締まる 粘
- 23. 黄褐色 (10YR8/8 ~ 7/8) ~ 灰白色 (10YR8/2) 締まる 粘 地山

SD02土層



第 113 図 SD01 ①・②・SD02 土層実測図 (1/40)

2. 遺構と遺物

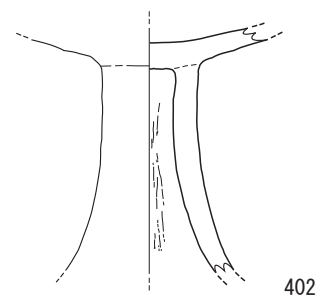
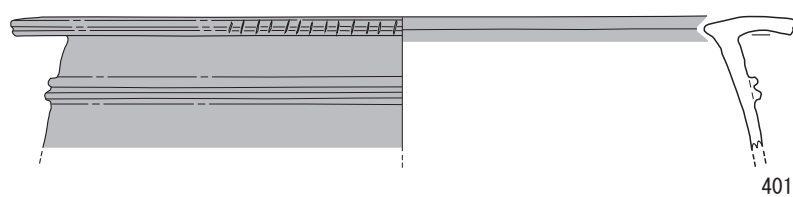
(1) 溝状遺構

調査区中央を東西方向にのびる溝状遺構である。西側をSD01、東側をSX01として調査したが、一連の遺構である可能性があるため、ここで報告する。

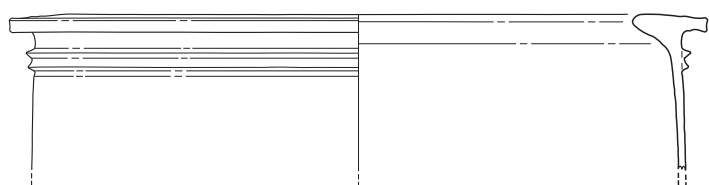
SD01 (SX01) (第 113 ~ 118 図、図版 71 ~ 72)

ST01・SX03・SX05に切られ、SD02を切る。平面はわずかに弧を描き、長さは現状で10m以上で、東は調査区外へと伸びる。深さは西側で0.2m、中央部から東側が1.0 ~ 1.3m程で、断面形はおおむね逆台形を呈し、一部二段掘り状となる部分もある。埋土は基本的には自然堆積した状況であるが、不整合面をなすところもある。平面的には土坑が連続したようにも見えることから、度重なる掘り直しの可能性もあろう。遺物は埋土上層から比較的量の弥生土器が出土し、甕棺

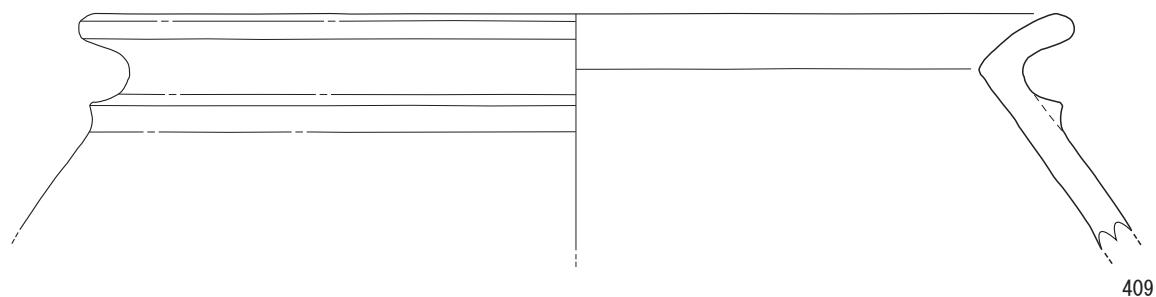
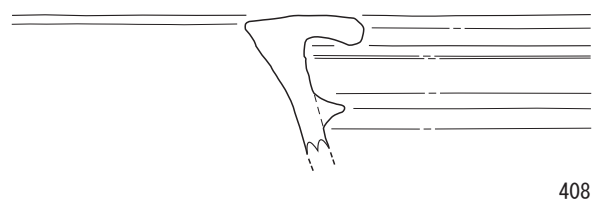
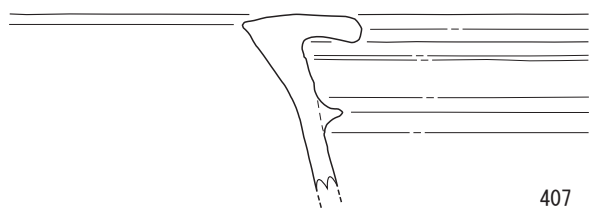
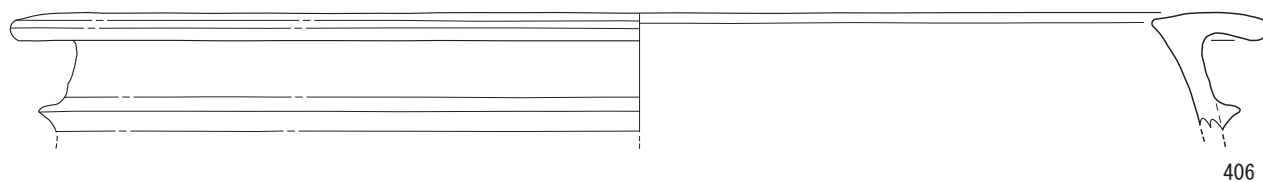
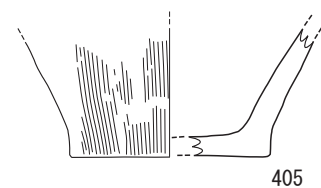
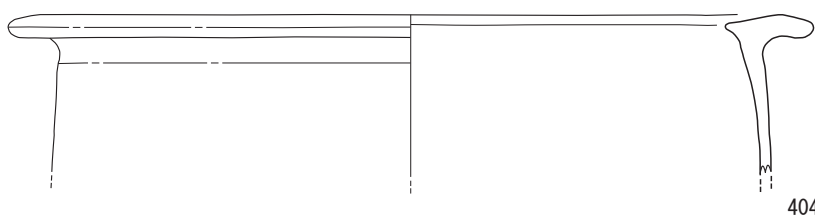
SX01(1層 カクラン)



SX01(2層 カクラン)

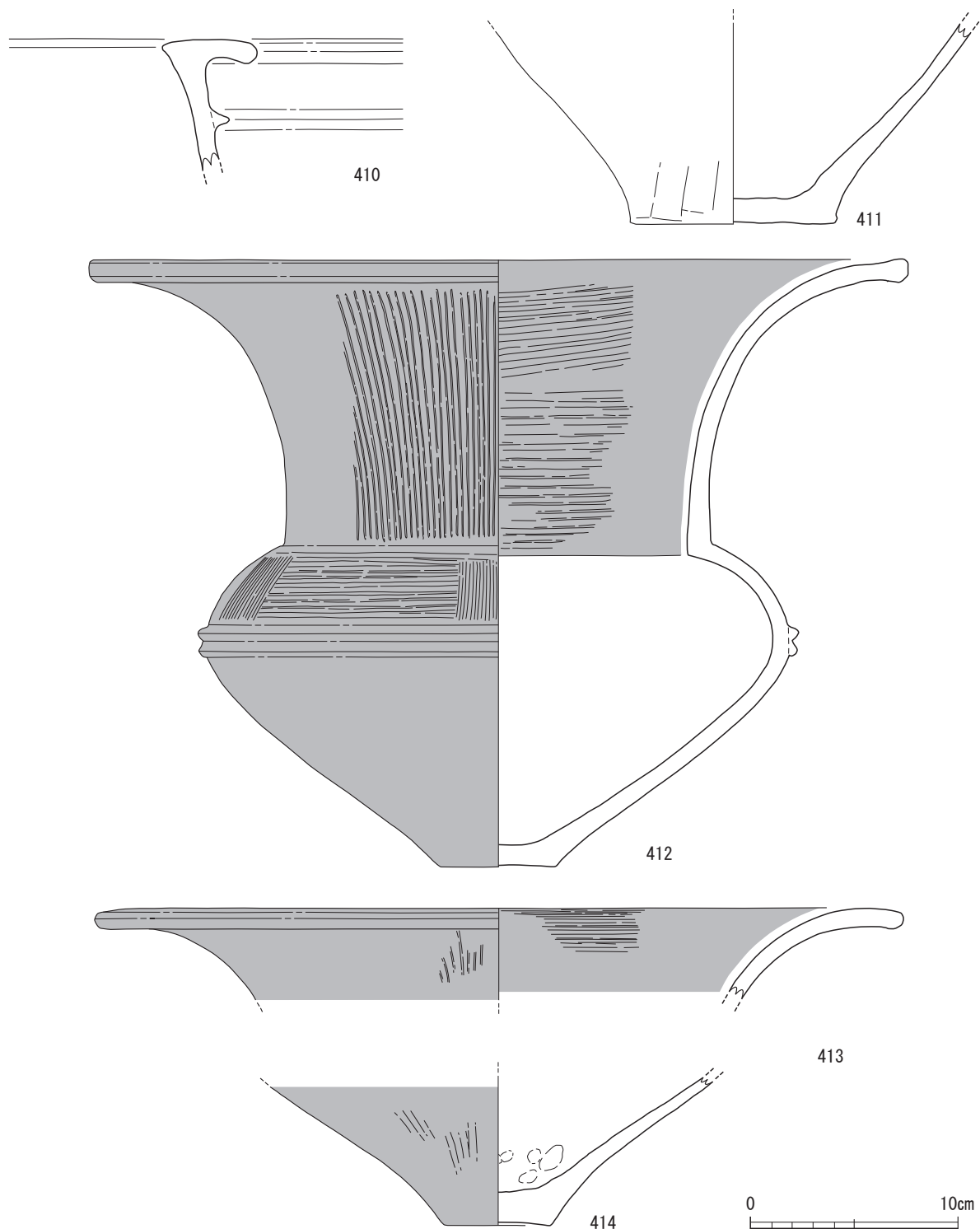


SD01(5層)



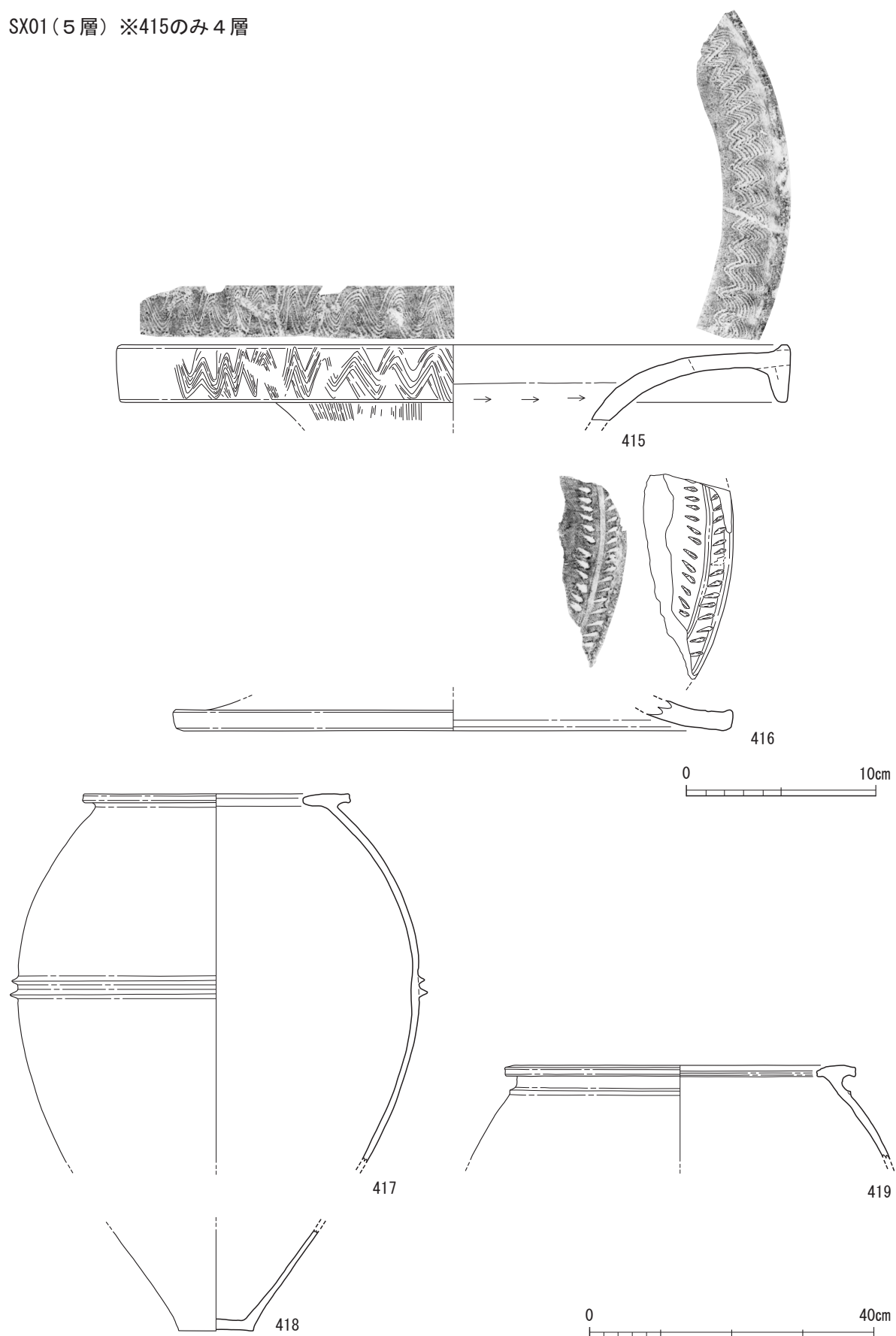
第114図 SD01 出土遺物実測図(1)(403は1/8、他は1/3)

SX01(5層)



第 115 図 SD01 出土遺物実測図 (2) (1/3)

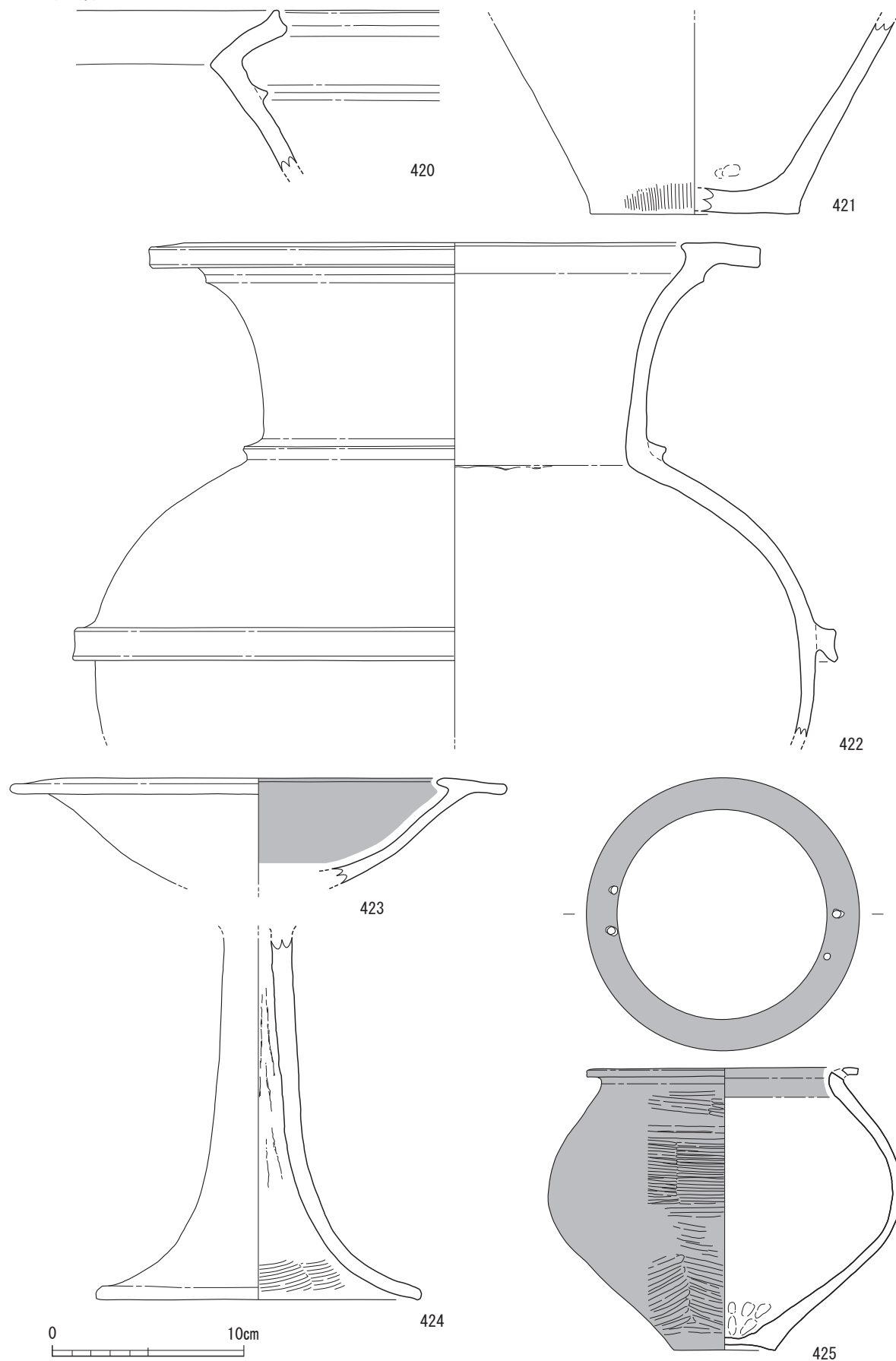
SX01(5層) ※415のみ4層



第10次
調査

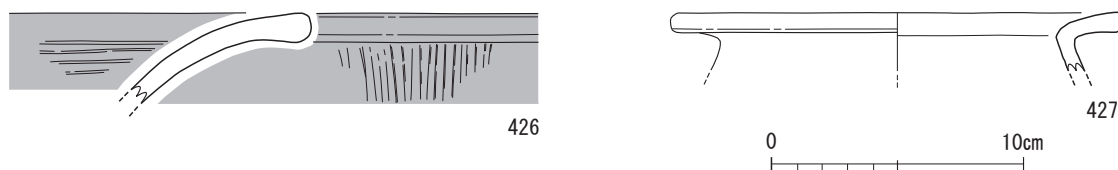
第116図 SD01出土遺物実測図(3)(415・416は1/3、他は1/8)

SX01(7層)



第117図 SD01 出土遺物実測図(4)(1/3)

SD01（その他）



第118図 SD01 出土遺物実測図（5）（1/3）

を含む。また、外来系と考えられる弥生土器も出土した。

以下では、現場の取り上げ時に付与したラベルの注記にしたがい、層位毎に遺物の報告を行う。なお、SD01 と SX01 が混在しているが、SX01 の1・2層は土層図（SD01 ②）の1・2層に、SD01 の5層は土層図（SD01 ②）の5層、SX01 の7層は土層図（SD01 ②）の7層に対応する。また、SX01 の4・5層は確実性に欠くが、土層注記との整合性から土層図（SD01 ②）の4・5層に対応する可能性がある。

SD01（SX01 1・2層）出土遺物（第114図、図版100）

弥生土器（401～403） 401は丹塗りの甕である。口縁部は鋤先状で口縁部と外面に丹塗りを施す。口縁端部に細い刻目を施す。402は高杯で、杯部の大半と脚裾部を欠失する。杯部内面はナデで脚部内面に絞り痕がある。外面の調整は磨滅のため不明。403は甕棺の破片で、口縁部から胴部上位しか残存しないが、砲弾形の器形になると考えられる。T字状口縁で口縁部下にM字突帯を貼り付ける。口縁部と突帯がヨコナデ、胴部内外面はナデ。

SD01（SD01 5層）出土遺物（第114図、図版100）

弥生土器（404～409） 404は甕の口縁部である。鋤先状口縁で、口縁部はヨコナデ。胴部は内外面ともにナデ。405は甕の底部。胴部外面はハケで、内面はナデ。406は甕で、407・408と同一個体の可能性がある。口縁部は鋤先状で、口縁部下に三角突帯を1条貼り付ける。口縁部から外面がヨコナデ、内面はナデ。409は大形甕の口縁部で、口縁部はくの字を呈し、肩の張りが強い。口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。口縁部と突帯はヨコナデ、胴部は内面がナデ、外面は磨滅するがナデと思われる。

SD01（SX01 5層）出土遺物（第115・116図、図版100・101）

弥生土器（410～419） 410は甕の口縁部。鋤先状口縁で、口縁部下に三角突帯を貼り付ける。口縁部から突帯はヨコナデ、内面はナデ。403・404・405と同一個体の可能性がある。411は壺の底部。底部側面は工具痕が残り他はナデである。412は広口壺。部分的に欠損するが、口縁部から底部まで残存する。外面と口縁部内面に丹塗りを施す。口縁部は素口縁で、頸部から口縁部は外湾して外に大きく開き、胴部最大径にM字突帯を貼り付ける。口縁部から突帯はヨコナデ。胴部内面と底部内外面はナデ。その他はミガキである。肩部外面はヨコ方向のミガキ後タテ方向の線刻を6か所施す。頸部外面はタテ方向の長いミガキで、内面はヨコ方向のミガキ。413は広口壺の口縁部で、内外面ともに丹塗りである。内面はヨコ方向のミガキで、外面には一部に暗文が残る。414は壺の

底部片である。胴部外面は丹塗り磨研で、他はナデ。415は垂下口縁壺の口頸部片である。外湾して外に大きく開き、口縁端部は上方に小さく、下方に大きく張り出す。口縁端部外面と上面に8条1単位の櫛描波状文を施す。口縁部はヨコナデ。頸部は外面がハケメ、内面はナデ。搬入品の可能性がある。416は器台の脚裾部か。外面に沈線と刺突文を施す。裾端部と内面はヨコナデ、外面はヨコナデ後、タテ方向のナデ。搬入品の可能性が高い。後述する432と同一個体である。417・418は甕棺の破片で、胴部と底部は接合しない。胴部は丸みを持ち、口縁部は上面がほぼ水平で内側の張り出しが強い。胴部中位に三角突帯を2条貼り付ける。口縁部と突帯がヨコナデの他はナデ。419も丸みを持つ甕棺で、口縁部から胴部上位が残存する。口縁部は外側の張り出しが強く、上面は丸みを持つ。

SD01 (SX07 7層) 出土遺物 (第117図、図版101・102)

弥生土器 (420～425) 420は甕の口縁部。くの字口縁で、端部を上方にはね上げる。口縁部から突帯がヨコナデ、他はナデ。421は甕の底部。底部側面にハケメが残る他はナデ。422は鋤形口縁の広口壺で胴部下位を欠損する。頸部付け根に三角突帯、中位に頂部を強くナデ凹ませた突帯を1条ずつ貼り付ける。胴部突帯は下方に張り出す。423は高杯の杯部で、内面に丹塗りが残る。鋤形口縁で外方は垂れ下がる。磨滅のため調整は不明。424は高杯の脚部。外面は磨滅するがタテ方向のナデと思われ、内面はナデで裾部にハケメが残る。425は短頸壺。口縁部内面から胴部外面は丹塗りで、口縁部上面に2個一対の穿孔がある。底部はわずかに上げ底となる。口縁部と胴部外面はヨコ・ナナメ方向のミガキで、他はナデ。

SD01 (その他) 出土遺物 (第118図、図版102)

弥生土器 (426・427) 426は壺の口縁部片で、内外面ともに丹塗り磨研で、外面には縦方向の暗文を施す。427は甕の口縁部。くの字に近い。内面下位はナデで、他はヨコナデ。

SD02 (第113図)

調査区中央に位置し、大半がSD01に切られるため全形は不明である。長さ3.0m以上、幅0.8m以上で、埋土は上下2層からなる。出土遺物はない。

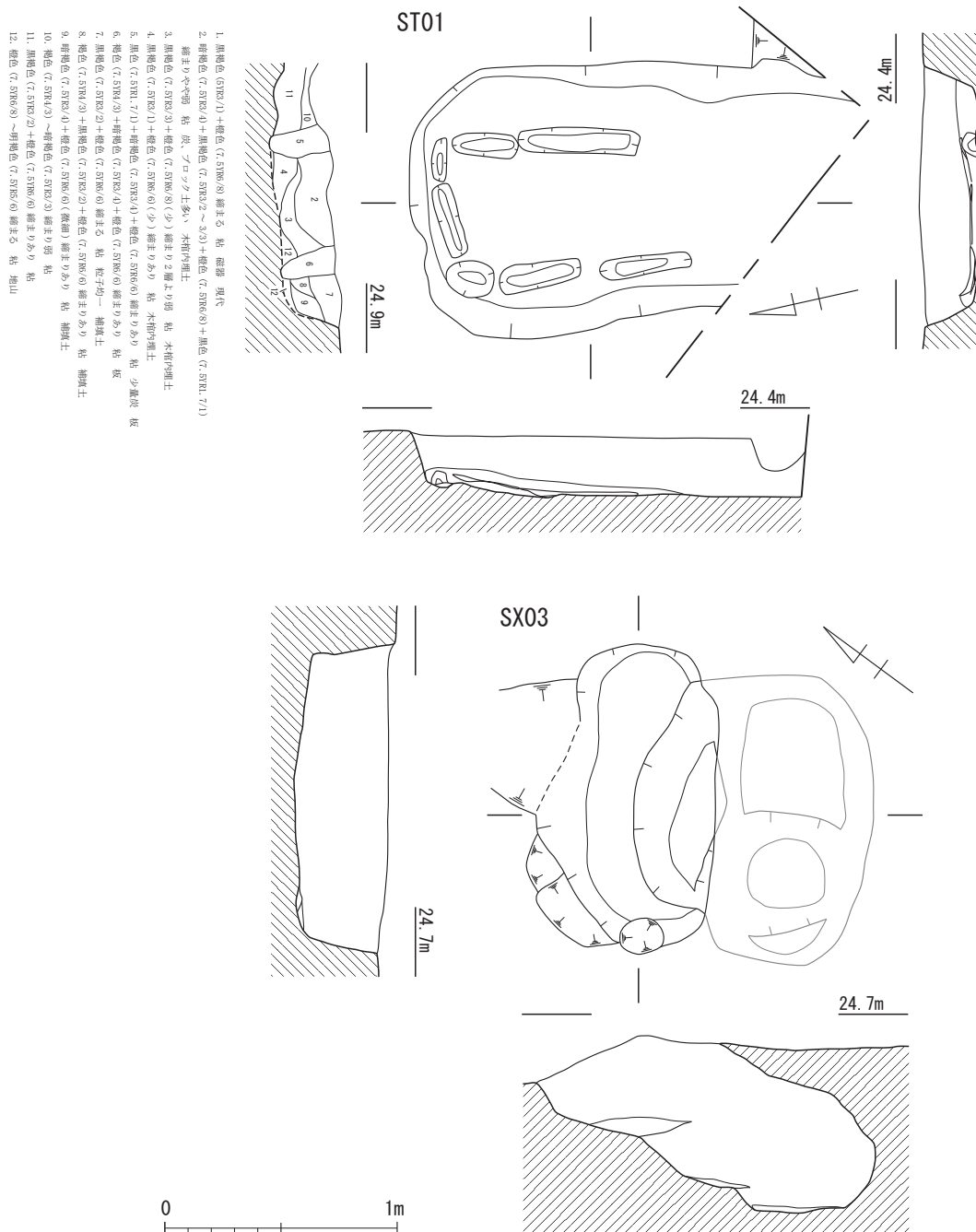
(2) 木棺墓

ST01 (第119図、図版73・74)

調査区中央西側に位置し、SD01を切る。南側は調査区外に展開するため全形は不明であるが、掘方は長軸2.0m以上、短軸1.15mの平面隅丸長方形を呈すものと考えられる。床面の壁面沿いに細長い溝状の掘り込みが連続することや、土層の状況から木棺墓と考えられる。これらから判断して、木棺の規模は幅0.5mと想定できる。南壁土層では、棺材が腐朽したと考えられる縦方向の痕跡があり(5・6層)、これより外側は裏込め土と考えられる土(7～9層・10・11層)、内側には木棺腐朽後に流入したと考えられる土(2～4層)が堆積する。床面北側から、完形品の土師器杯と須恵器杯B片が出土した。8世紀後半～9世紀前半の所産と考えられる。

出土遺物 (第120図、図版102)

土師器 (428) ほぼ完形の杯。底部外面から体部外面下位までは回転ヘラケズリ。体部は外面下位以外は内外面ともにヨコナデ、底部内面はナデ。



第119図 ST01・SX03 実測図 (1/30)

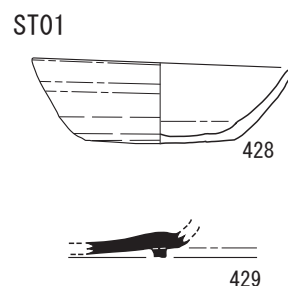
須恵器(429)杯Bの底部片。高台と体部は回転ナデ。

底部内外面はナデ調整。

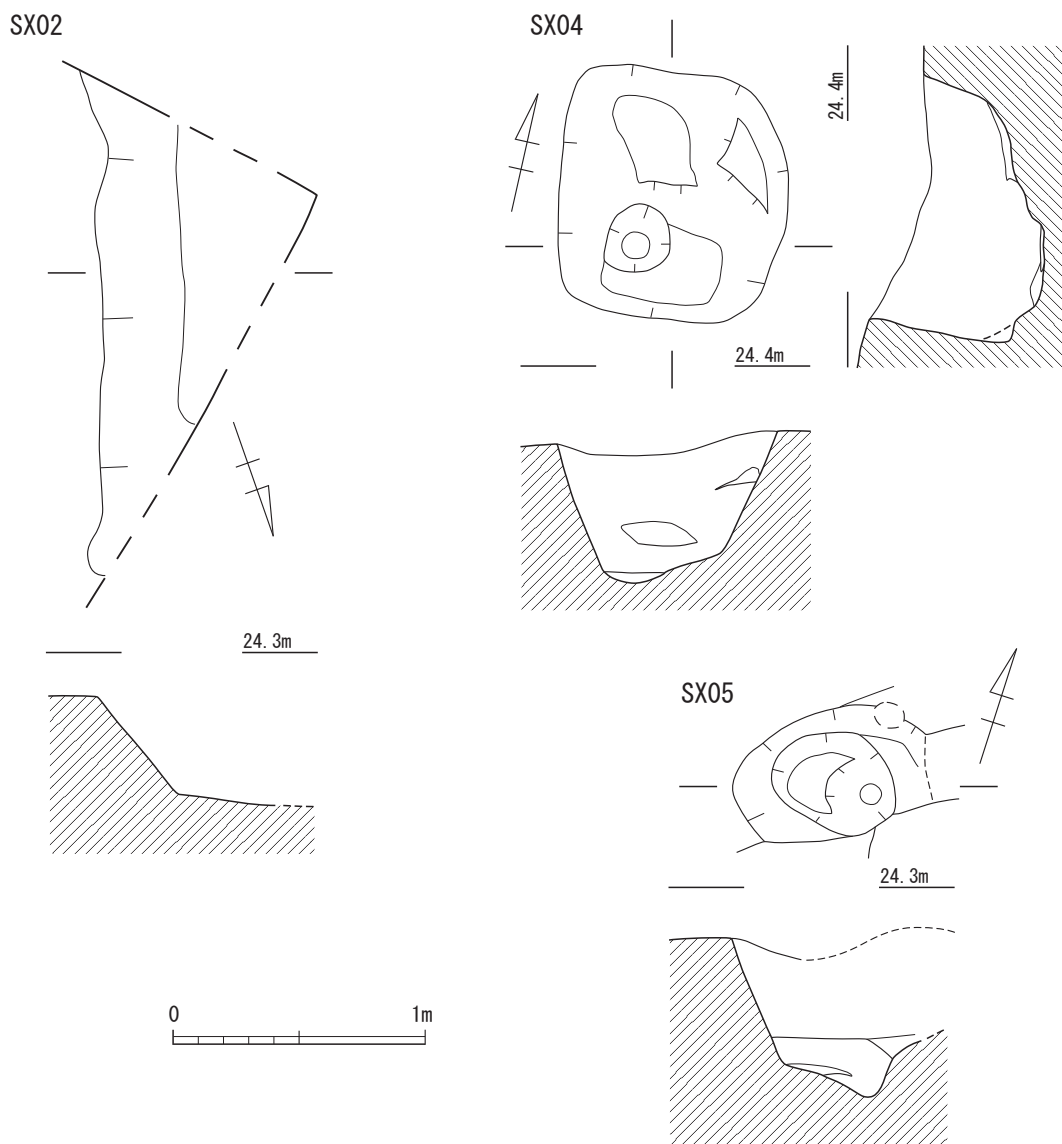
(3) 横口式土坑墓

SX03 (第119図、図版74)

調査区東端部に位置しSD01を切る。上面は長軸1.3m、短軸0.7mの楕円形を呈す。東壁を横穴状に掘り込み、床面は長軸1.1m、短軸0.4mの隅丸長



第120図 ST01 出土遺物実測図 (1/3)



第121図 SX02・04・05実測図(1/30)

方形を呈し、中央部がわずかにくぼむ。出土遺物はない。

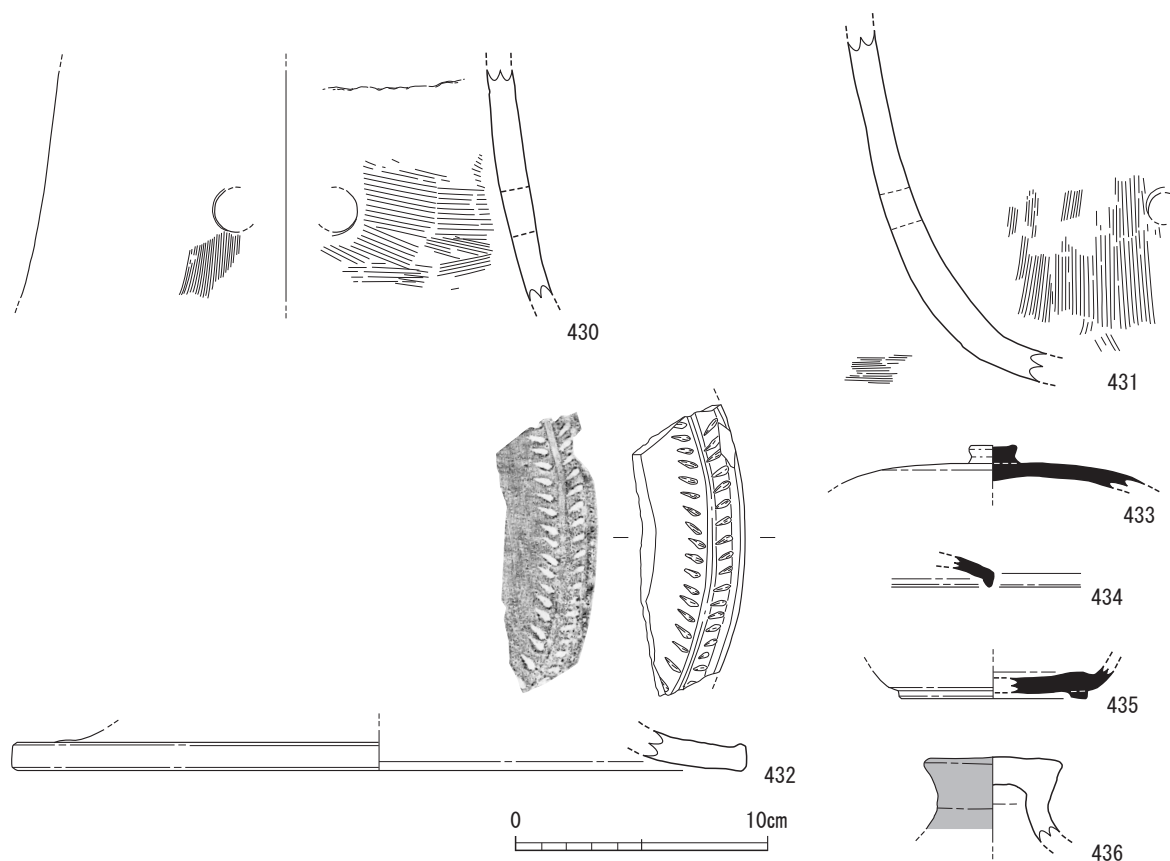
(4) 土坑

SX02 (第121図)

調査区西端部に位置する落ち込みで、大半が調査区外に展開するため全形は不明であるが、長さ2.0m以上である。東側は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。出土遺物はない。

SX04 (第121図)

調査区中央北側に位置し、東側にSX05が接する。長軸1.0m、短軸0.9mの平面隅丸方形で、床面付近は北側に複数のテラスがあり、中央部がピット状に窪む。深さは0.6mである。出土遺物はない。



第122図 その他の出土遺物実測図（1/3）

SX05（第121図）

調査区中央北側に位置し、西側に SX04 が接する。長軸 0.8m 以上、短軸 0.5m 以上、平面楕円形で、深さは 0.6m である。中央部がピット状に窪む。出土遺物はない。

（5）その他の出土遺物（第122図、図版102）

弥生土器（430～432・436） 430 は器種不明であるが、器台であろうか。円形穿孔を施す。外面は一部にハケメが残る。内面は上位がナデ、他はハケメ。後述する 431 と同一個体の可能性がある。431 は器種不明であるが、器台であろうか。円形穿孔を施す。外面はハケメ。内面は裾部がヨコ方向のハケメ、他はナデ。432 は SD01 出土遺物 416 と同一個体と考えられ、調整・施文ともに 416 と同様。436 は甕蓋の頂部付近の破片で、外面は丹塗り。外面は天井部がナデ、他はヨコナデと思われる。内面はナデ。

検出時出土遺物（図版102）

須恵器（433～435） 433 は杯 B 蓋の天井部。内外面は回転ナデで内面の中央部はナデ。434 は杯 B 蓋の口縁部。内外面ともに回転ナデ。435 は須恵器の杯 B 底部。底部は回転ヘラ切りで、高台部と胴部内外面は回転ナデ、底部内面はナデ。

3. 小結

SD01 では上層より弥生時代中期後半の土器群や須玖式甕棺が出土しており、当該期に埋没したことを示す。ST01 は副葬品の土師器より 8 世紀後半～9 世紀前半に位置づけられる。このほかの遺構については、出土遺物がないため時期不明である。

表2 第3次調査出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元< >は残存	形態・技法の特徴	A :胎土 B :焼成 C :色調	備 考
1	土師器	甕	SD01 埋土中	②<3.8>	内面 ナデ 外面 ナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共にふい黄橙10YR7/3	
2	土師器	不明	SD01 埋土中	①(1.8) ②<2.8>	内面 ケズリ 外面 ナデ	A:1.5mm以下の石英・長石を少量含む B:良好 C:内外共に 橙5YR6/6	
3	土師器	ミニチュア土器 高杯	SD01 埋土中	②<2.8>	内面 ナデ 外面 ナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや良好 C:内外共にふい黄橙10YR7/2	
4	土師器	杯	SD01 埋土中	②<1.6> ③(7.0)	内面 ナデ 外面 ヨコナデ	A:1mm以下の白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共に 灰黄2.5Y7/2	
5	土師器	高杯	SX01 埋土中	②<3.5>	内面 ナデ、一部ハケ、ヨコナデ 外面 ナデ、ハケ、ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内外共にふい橙7.5YR7/4	
6	土師器	高杯	SX01 埋土中	②<2.0>	内面 ナデ 外面 ハケ	A:2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや不良 C:内外共にふい橙7.5YR6/4	
7	土師器	高杯	SX01 埋土中	②<6.6> ③(9.0)	内面 ケズリ、絞り痕 外面 ナデ	A:2.5mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや良好 C:内外共にふい黄橙10YR7/3	
8	土師器	器台	SX01 埋土中	②<7.5>	内面 ナデ 外面 工具ナデ	A:2.5mm以下の石英・長石を多く含む B:やや不良 C:内面 黄灰2.5Y5/1 外面 にふい黄橙10YR7/2	
9	土師器	鉢?	SX01 埋土中	①(6.6) ②3.5	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内外共に 褐灰10YR6/1 にふい黄橙10YR7/3	
10	土師器	ミニチュア土器 高杯	SX01 埋土中	②<2.95> ③(3.0)	内面ナデ 外面ナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に 橙5YR6/6 にふい黄橙10YR7/3	
11	土師器	ミニチュア土器 高杯	SX01 埋土中	②<2.7>	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや不良 C:内外共にふい黄橙10YR7/4~7/3	
12	瓦器	碗	SX01 埋土中	②<2.6>	内面 ミガキ 外面 ミガキ	A:1.5mm以下の白色粒子を少量含む B:良好 C:内外共に 灰NS1 灰白N71	
13	白磁	碗	SX01 埋土中	②<3.0> ③7.2	内面 施釉、沈線 外面 ケズリ	A:精良 B:良好 C:釉調はやや黄色味をおびた透明釉、光沢あり、貫入あり	
14	土師器	高杯	P02	②<4.6>	内面 ハケ後研磨 外面 ハケ後研磨	A:1mm以下の白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共にふい黄橙10YR7/4	
15	土師器	高杯	SX02 埋土中	②<2.3>	内面 ヨコナデ、ナデ、ハケ 外面 ハケ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共にふい橙7.5YR6/4	

表3 第7・8次調査出土遺物観察表（甕棺）

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元< >は残存	形態・技法の特徴	A :胎土 B :焼成 C :色調・釉調	備 考
016	弥生土器	壺	1号甕棺墓	①(35.0) ②<39.9±α> ③(8.4)	内面 頸~口縁に横方向ミガキ 外面 不明(器面風化)	A:1~2mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 褐灰10YR5/1 外面 洗黄橙10YR8/3	上壁
017	弥生土器	壺	1号甕棺墓	①(22.3) ②52.2~53.4 ③11.8 ※器高は打ち欠き	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 ナデか(器面風化)	A:1~3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 洗黄橙7.5YR8/6 外面 橙7.5YR7/6	下壁
018	弥生土器	甕	2号甕棺墓	①(37.2) ②推定56前後 ③9.2	内面 不明(器面風化) 外面 不明(器面風化)	A:1mm以下の石英・長石を含む B:不良 C:内面 洗黄橙7.5YR8/6 外面 洗黄橙7.5YR8/6	上壁
019	弥生土器	甕	2号甕棺墓	①40.45 ②51.4~52.7 ③8.6	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:2mm程度の石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 洗黄橙10YR8/4	下壁
020	弥生土器	甕	3号甕棺墓	①42.2 ②49.65 ③9.45	内面 縦方向ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1~2mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 灰黄褐10YR4/2 外面 にふい黄褐10YR5/4	上壁
021	弥生土器	甕	3号甕棺墓	①(43.0) ②<26.5>	内面 縦方向ナデか 外面 不明(器面風化)	A:1~3mmの石英・長石を含む B:不良 C:内面 黄橙7.5YR7/8 外面 橙7.5YR7/6	下壁
022	弥生土器	鉢	4号甕棺墓	①59.5 ②42.0 ③12.0	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1~2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 黄橙7.5YR7/8 外面 にふい橙7.5YR7/4	上壁
023	弥生土器	甕	4号甕棺墓	②<53.8> 胴径57.0	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1~2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 洗黄橙7.5YR8/6 外面 洗黄橙10YR8/3	中壁
024	弥生土器	甕	4号甕棺墓	①63.8 ②91.8~94.0 ③11.6	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1~2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 橙5YR7/6~7/8	下壁 下半に黒斑あり
025	弥生土器	甕	5号甕棺墓	①63.4 ②85.6~87.4 ③11.8	内面 横・斜め方向ナデ 外面 縦・斜め方向ハケ	A:1~4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR6/6 外面 洗黄橙7.5YR8/6	上壁
026	弥生土器	甕	5号甕棺墓	①71.1~75.4 ②95.3 ③12.2	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1~3mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 橙5YR7/6 外面 橙5YR7/6~7/8	下壁
027	弥生土器	甕	6号甕棺墓	①29.3 ②34.4 ③7.5	内面 縦方向ナデか 外面 縦方向ハケ	A:1~2mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 明黄褐10YR6/6 外面 明黄褐10YR7/6	上壁
028	弥生土器	甕	6号甕棺墓	①29.8 ②36.35 ③7.5	内面 不明(器面風化) 外面 縦方向ハケ	A:1~2mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 洗黄橙10YR8/4 外面 にふい黄橙10YR7/4	下壁
029	弥生土器	鉢	7号甕棺墓	①(87.0)	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1~5mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい黄橙10YR6/4 外面 にふい黄橙10YR7/4	上壁
030	弥生土器	甕	7号甕棺墓	①(68.4) ②<64.2>	内面 ナデか(器面風化) 外面 ナデか(器面風化)	A:1mm以下の石英・長石を含む B:不良 C:内面 橙5YR7/6~7/8 外面 橙5YR7/6~7/8	下壁
031	弥生土器	甕	8号甕棺墓	①59.3 ②85.4 ③12.0	内面 横・縦・斜め方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1~4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい橙7.5YR7/4 外面 洗黄橙10YR8/4	上壁

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元<>は残存	形態・技法の特徴	A :胎土 B :焼成 C :色調・釉調	備 考
032	弥生土器	甕	8号甕棺墓	①71.8 ②90.3 ③10.2	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 ナデか(器面風化)	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 淡黄橙7.5YR8/4	下壁
033	弥生土器	鉢	9号甕棺墓	①(46.4) ②<12.8>	内面 横方向 ナデ 外面 ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙7.5YR7/6 外面 橙7.5YR7/6	上壁
034	弥生土器	甕	9号甕棺墓	①(44.8) ②(64.0) ③11.2	内面 ナデ 外面 不明(器面風化)	A:1～3mmの石英・長石を含む B:不良 C:内面 にふい橙7.5YR7/4 外面 淡黄橙7.5YR8/6	下壁 胴中位に大きい黒斑あり
035	弥生土器	甕	10号甕棺墓	①49.3～62.2 ②72.0～72.8 ③9.6	内面 横・斜め方向ナデ 外面 ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい黄橙10YR6/4 外面 橙2.5YR7/8～5YR7/6	上壁
036	弥生土器	甕	10号甕棺墓	①51.5～57.8 ②71.4～72.4 ③11.1	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい黄橙10YR7/3 外面 淡黄橙10YR8/4	下壁
037	弥生土器	甕	11号甕棺墓	①(34.5) ②<21.85>	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1mm程度の石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙5YR7/6	上壁
038	弥生土器	甕	11号甕棺墓	①35.8 ②46.9～48.4 ③8.7	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙10YR8/4	下壁
039	弥生土器	甕	12号甕棺墓	①(31.9) ②<17.0>	内面 斜め方向ナデ 外面 不明(器面風化)	A:1～3mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 橙2.5YR7/8 外面 黄橙7.5YR7/8	上壁
040	弥生土器	甕	12号甕棺墓	①63.0 ②85.3～87.2 ③12.1	内面 横・縦・斜め方向ナデ 外面 主に縦方向ナデ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 淡黄橙10YR8/4	下壁
041	弥生土器	甕	13号甕棺墓	①39.2 ②51.7～55.7 ③10.05	内面 縦・斜め方向ハケ後ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい橙10YR7/4 外面 橙7.5YR7/6	下壁
042	弥生土器	甕	14号甕棺墓	②<37.0> ④62.0	内面 縦方向ナデ 外面 横・斜め方向ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 橙7.5YR7/6	上壁
043	弥生土器	甕	14号甕棺墓	①(31.7) ②<88.4>	内面 不明(器面風化) 外面 縦方向ナデか	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 橙2.5YR7/8	下壁
044	弥生土器	甕	15号甕棺墓	①61.9～71.4 ②98.6～99.4 ③11.9	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ後ナデ	A:2mm程度の石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 にふい橙5YR7/4	下壁
045	弥生土器	甕	16号甕棺墓	①62.7 ②80.1 ③10.4	内面 ナデ 外面 ナデか(底部ハケ)	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 明黄橙10YR7/6 外面 明黄橙10YR7/6	上壁
046	弥生土器	甕	16号甕棺墓	①60.1 ②81.4～83.5 ③10.9	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 橙5YR7/6	下壁
047	弥生土器	甕	17号甕棺墓	①46.2 ②<75.2> ③(10.2)	内面 縦・斜め方向ハケ、ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR7/6 外面 橙2.5YR7/6	上壁
048	弥生土器	甕	17号甕棺墓	①65.6 ②83.8～84.2 ③13.0	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1～5mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙10YR8/3	下壁
049	弥生土器	壺	18号甕棺墓	①(37.4) ②<52.0> ④(59.4)	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 横方向ナデか	A:1～2mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 灰黄橙10YR6/2 外面 明黄橙10YR7/6	下壁
050	弥生土器	甕	19号甕棺墓	①(62.0) ②<56.8>	内面 縦・斜め方向ナデ(器面風化) 外面 器面風化	A:1～2mmの石英・長石を含む B:不良 C:内面 淡黄橙7.5YR8/4～6 外面 淡黄橙7.5YR8/4～6	上壁
051	弥生土器	甕	19号甕棺墓	①61.6 ②11.6 ③82.4～82.6	内面 縦・横・斜め方向ナデ 外面 ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR6/8 外面 明黄橙10YR7/6	下壁
052	弥生土器	甕	20号甕棺墓	①(37.4) ②<16.3>	内面 ナデ 外面 ナデか(器面風化)	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 淡黄橙7.5YR8/6	上壁
053	弥生土器	甕	20号甕棺墓	①(35.6) ②46.3～47.5 ③9.45	内面 ナデ 外面 ナデか(器面風化)	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙7.5YR7/6 外面 黄橙10YR8/6	下壁
054	弥生土器	甕	21号甕棺墓	①61.4 ②83.0 ③10.4	内面 縦方向ナデ(一部に縦ハケ残る) 外面 不明(器面風化)	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい黄橙10YR6/4 外面 にふい黄橙10YR7/4	上壁
055	弥生土器	甕	21号甕棺墓	①(71.2) ②98.7 ③11.6	内面 縦・横方向ナデ 外面 主に縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 にふい黄橙10YR7/3	下壁
056	弥生土器	甕	22号甕棺墓	①42.3 ②56.7～58.0 ③10.0	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 ナデか(器面風化)	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好(一部不良) C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 橙7.5YR7/6	上壁
057	弥生土器	甕	22号甕棺墓	①48.4 ②71.5～81.2 ③11.8	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR6/8 外面 橙2.5YR7/8	下壁
058	弥生土器	甕	23号甕棺墓	①28.6 ②<4.2>	内面 不明(器面風化) 外面 不明(器面風化)	A:1mm以下の石英・長石を含む B:不良 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 淡黄橙7.5YR8/6	上壁
059	弥生土器	甕	23号甕棺墓	①(31.4) ②38.1 ③6.35	内面 縦・横方向ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 にふい橙7.5YR6/4	下壁
060	弥生土器	鉢	25号甕棺墓	①(73.2) ②<30.7>	内面 縦方向ナデ 外面 不明(器面風化)	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 淡黄橙10YR8/4	上壁
061	弥生土器	甕	25号甕棺墓	①(62.2) ②91.4 ③11.4	内面 縦・横方向ナデ 外面 縦・斜め方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙7.5YR8/4	下壁
062	弥生土器	甕	26号甕棺墓	①63.2～67.2 ②91.0～92.4 ③11.1	内面 ナデ(器面風化) 外面 ナデ(器面風化)	A:1mm程度の石英・長石を含む B:やや不良～良好 C:内面 淡黄橙5YR7/6 外面 淡黄橙5YR7/6	上壁
063	弥生土器	甕	26号甕棺墓	①(69.0) ②94.0 ③(10.8)	内面 ナデ(器面風化) 外面 ナデ(器面風化)	A:1～3mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙10YR8/4	下壁
064	弥生土器	鉢	27号甕棺墓	①62.9～65.6 ②47.6～49.8 ③10.4	内面 横・縦・斜め方向ナデ 外面 縦・斜め方向ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR6/8 外面 橙2.5YR7/8	上壁 口縁平坦部に小黒斑あり
065	弥生土器	甕	27号甕棺墓	①64.3 ②99.0～100.8 ③12.4	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/8 外面 橙2.5YR6/8	下壁
066	弥生土器	甕	28号甕棺墓	①46.8 ②<51.5>	内面 不明(器面風化) 外面 横方向ナデか	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙7.5YR7/6 外面 橙2.5YR6/8	上壁
067	弥生土器	甕	28号甕棺墓	①56.8 ②(42.3)	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1mm程度の石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 橙5YR7/6	中壁
068	弥生土器	甕	28号甕棺墓	①54.5 ②78.0～79.9 ③10.5	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 横・縦方向ナデ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい橙7.5YR6/4 外面 橙2.5YR6/8	下壁
069	弥生土器	甕	29号甕棺墓	①(66.8) ②89.0 ③10.8	内面 縦・斜め・横方向ナデ 外面 縦・斜め方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:やや不良 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 橙5YR7/8	上壁
070	弥生土器	甕	29号甕棺墓	①(63.2) ②<36.8>	内面 横方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR6/8 外面 橙5YR6/8	下壁
071	弥生土器	甕	30号甕棺墓	①(28.8)	内面 ナデ 外面 ナデ	A:2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙10YR8/4	下壁
072	弥生土器	壺	31号甕棺墓	①(43.3) ②<33.1>	内面 不明(器面風化) 外面 縦・横方向ミナギ	A:1～5mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい橙7.5YR7/4 外面 橙5YR6/6	上壁
073	弥生土器	甕	31号甕棺墓	②(37.25) ③(10.4)	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙7.5YR7/8 外面 橙7.5YR7/4	下壁
074	弥生土器	甕	32号甕棺墓		内面 ナデ 外面 ナデ	A:細かい砂粒を含む B:不良 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 淡黄橙10YR8/4	下壁
075	弥生土器	甕	33号甕棺墓	①76.2 ②109.4 ③13.9	内面 ナデ 外面 ナデ(底部ハケ)	A:1mm程度の石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR6/8 外面 橙5YR7/6	下壁
076	弥生土器	甕	34号甕棺墓	①30.1～34.6 ②35.0～35.9 ③7.8	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1mm程度の石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/8～黄橙5/1 外面 淡黄橙5YR7/6	上壁
077	弥生土器	甕	34号甕棺墓	①30.4～33.5 ②35.3 ③7.8	内面 丁寧ナデ 外面 縦方向ハケ	A:2mmの石英・長石・雲母を含む B:良好 C:内面 黄橙7.5YR7/8 外面 淡黄橙7.5YR7/6	下壁

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元< >は残存	形態・技法の特徴	A :胎土 B :焼成 C :色調・釉調	備 考
078	弥生土器	鉢	35号壺棺墓	①68.0 ②51.1～52.15 ③5.8	内面 ナデ 外面 ナデ(底部ハケ)	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙7.5YR8/6 外面 橙5YR7/6	上壺 口縁平坦部に小黑斑あり
079	弥生土器	甕	35号壺棺墓	①71.0 ②91.0～91.2 ③12.0	内面 ナデ 外面 ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面にふい 黄橙10YR8/4 外面 橙5YR7/6	下壺
080	弥生土器	壺	36号壺棺墓	①34.7 ②36.9 ③8.0	内面 ミガキ(器面風化) 外面 ミガキ(器面風化)	A:1mm程の白色砂粒を含む B:良好 C:内面 明黄橙10YR7/6 外面 明黄橙10YR5/6	上壺
081	弥生土器	甕	36号壺棺墓	①31.8 ②36.2 ③7.75	内面 丁寧なナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～3mmの石英・細い長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙7.5YR8/6 外面 橙2.5YR7/8	下壺
082	弥生土器	甕	37号壺棺墓	①33.5～23.7 ②38.1～38.25 ③7.2	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい橙7.5YR8/4 外面 黄橙10YR7/4	上壺
083	弥生土器	甕	37号壺棺墓	①34.25 ②37.2～38.25 ③7.2	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい橙7.5YR7/4 外面 淡黄橙7.5YR8/6	下壺
084	弥生土器	甕	38号壺棺墓	①36.4～40.5 ②54.5～54.25 ③10.95	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:下位は良好・上位は 不良 C:内面 淡黄橙10YR8/3 外面 淡黄橙10YR8/3	下壺
085	弥生土器	甕	39号壺棺墓	①78.4 ②113.4～108.0 ③13.0	内面 縦・横方向ハケ 外面 縦方向ハケ・ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR8/6 外面 橙5YR7/6	下壺
086	弥生土器	甕	40号壺棺墓	①43.7(40.2) ②60.6 ③11.0	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙7.5YR8/4 外面 黄橙7.5YR8/8	上壺
087	弥生土器	甕	40号壺棺墓	①51.0 ②82.0～82.4 ③11.1	内面 ナデ(肩に横・斜めハケ) 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/3 外面 淡黄橙10YR8/3	下壺
088	弥生土器	鉢	41号壺棺墓	①73.6 ②51.2～53.5 ③10.2	内面 横・縦方向ナデ 外面 縦方向ナデ・ハケ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR7/6 外面 橙2.5YR6/8	上壺 口縁平坦部に小黑斑あり
089	弥生土器	甕	41号壺棺墓	①75.6 ②102.2～102.8 ③13.6	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 横・縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい黄橙10YR7/4 外面 黄橙10YR8/6	下壺
090	弥生土器	甕	42号壺棺墓	①35.6 ②36.2～37.7 ③10.3	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 橙5YR7/6	下壺
091	弥生土器	鉢	43号壺棺墓	①(53.8) ②47.0	内面 斜め方向ハケ 外面 縦・斜め方向ナデ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 明黄橙10YR6/6 外面 橙2.5YR8/8	上壺
092	弥生土器	甕	43号壺棺墓	①70.8～73.6 ②105.0～106.5 ③12.4	内面 縦方向ハケ・板状工具ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR8/6 外面 橙2.5YR7/6	下壺
093	弥生土器	甕	44号壺棺墓	①76.8 ②108.9～111.4 ③11.0	内面 ハケ後縦・斜め方向ナデ 外面 主に縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR7/8 外面 橙2.5YR7/6	下壺
094	弥生土器	鉢	45号壺棺墓	①81.5 ②45.8～47.6 ③11.4	内面 縦方向ハケ後ナデ 外面 横方向ナデ・ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR8/6 外面 橙2.5YR7/6	上壺
095	弥生土器	甕	45号壺棺墓	①78.1～86.8 ②119.6～121.6 ③12.4	内面 縦・横方向ハケ 外面 縦・斜め方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR7/6～6/8 外面 橙2.5YR7/6～6/8	下壺
096	弥生土器	鉢	46号壺棺墓	①68.3～72.4 ②46.0～42.9 ③12.4	内面 縦方向ナデ 外面 横方向ナデか	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 黄橙7.5YR8/8 外面 淡橙5YR8/4	上壺 口縁平坦部に小黑斑あり
097	弥生土器	甕	46号壺棺墓	①67.2～75.9 ②101.8～103.5 ③13.8	内面 縦・横方向ナデ(薄くハケが残る) 外面 横方向ナデ	A:1～4mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 明黄橙10YR7/6 外面 淡黄橙10YR8/3	下壺
098	弥生土器	鉢	47号壺棺墓	①65.5 ②50.3 ③12.2	内面 縦・横方向ナデ 外面 横・縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 淡黄橙10YR8/4 外面 にふい黄橙10YR7/4	上壺
099	弥生土器	甕	47号壺棺墓	①(68.0) ②<32.4>	内面 横方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙5YR7/6 外面 橙2.5YR6/8	下壺
100	弥生土器	甕	49号壺棺墓	①89.4 ②109.7～111.6 ③13.6	内面 縦・横方向ナデ(底部縦方向ハケ) 外面 縦方向ナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:不良(良い部分も有) C:内面 橙5YR7/6 外面 橙5YR7/8	下壺
101	弥生土器	甕	50号壺棺墓	①<49.6> ②<74.8> ③10.8	内面 ハケ後縦方向ナデ 外面 縦方向ナデ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR8/6 外面 橙2.5YR7/6	上壺
102	弥生土器	甕	50号壺棺墓	①65.3 ②105.8 ③13.05	内面 縦・斜め方向ナデ 外面 主にナデ	A:1～3mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 橙2.5YR8/6 外面 橙5YR7/6	下壺
103	弥生土器	甕	51号壺棺墓	①(32.0) ②(34.0)～33.8 ③7.05	内面 ナデ 外面 縦方向ハケ	A:1～2mmの石英・長石を含む B:良好 C:内面 にふい黄橙10YR7/4 外面 橙2.5YR7/6	下壺

表 4 第 7・8 次調査出土遺物観察表 (土器・土製品・磁器・瓦器)

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元< >は残存	形態・技法の特徴	A :胎土 B :焼成 C :色調・釉調	備 考
105	弥生土器	筒形器台	40号壺棺墓	②<6.0> ③(40.0)	内面 ヨコナデ・ナデ 外面 ヨコナデ・ミガキ	A:1mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや良好 C:内面 橙5YR6/6 外面 明赤褐2.5YR5/8	丹塗り
106	弥生土器	筒形器台	40号壺棺墓	②<4.8>	内面 ナデ 外面 ミガキ	A:3.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内面 橙5YR6/6 外面 明赤褐2.5YR5/4	丹塗り
107	弥生土器	筒形器台	40号壺棺墓	②<6.1>	内面 ナデ 外面 ミガキ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内面 橙2.5YR6/6 外面 明赤褐2.5YR4/8	丹塗り
112	弥生土器	壺	SX188	②<2.6>	内面 ミガキ 外面 ミガキ、ヨコナデ	A:0.5mm以下の白色砂粒と雲母を少量含む B:良好 C:内外共 明赤褐5YR5/6	丹塗り
113	弥生土器	筒形器台	SX188	②<13.3>	内面 ナデ 外面 ミガキ	A:4mm以下の石英・長石をやや多く含む B:良好 C:内面 橙5YR6/6 外面 赤褐5YR4/8	丹塗り
114	弥生土器	壺	6号石室土坑墓	②<5.7>	内面 ナデ、胴部に工具痕 外面 ヘラケズリ、ハケ	A:5mm以下の石英・3mm以下の長石・1mm以下の雲母を 含む B:良好 C:内外共 灰白2.5Y8/2	黒斑
118	弥生土器	壺	SX26	①(38.0) ②<19.7+3.8> ③5.8	内面 ナデ、ミガキ 外面 ナデ、下位マゼツ、ミガキ、ハケ、ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや良好 C:内面 明赤褐色2.5YR5/8 外面 明赤褐色2.5YR5/6 橙 5YR6/6	内外面丹塗り(底部は除く)、線刻 文あり
119	弥生土器	甕	SX74-75 周辺	②<4.5>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや良好 C:内面 にふい黄橙10YR7/4 外面 橙5YR6/6	
120	弥生土器	甕棺	SX74-75 周辺	①(52.0) ②<6.1>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	
121	弥生土器	甕棺	SX74-75 周辺	②<6.8>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	
122	弥生土器	甕棺	SX74-75	②<3.9>	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:1mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや良好 C:内外共 橙5YR6/6	
123	弥生土器	甕	SX74-75	②<2.6>	内面 マゼツ、ヨコナデか 外面 ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや不良 C:内外共にふい橙7.5YR6/4	
124	弥生土器	甕	SX74-75	②<6.6> ③10.6	内面 工具ナデ、ナデ 外面 ナデ	A:1mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内面 橙7.5YR7/6 外面 橙7.5YR7/6 黒7.5YR2/1	
125	土製品	不明	SX74-75 周辺	縦 14.8 横 10.5 高さ <5.7>	全体的に型押し、内外面に割れ	A:微細な白色粒子をわずかに含む B:やや良好 C:内外共 淡黄橙10YR8/3～淡橙5YR8/3～灰黄2.5Y7/2	胎土は空疎で軽い

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元()は残存	形態・技法の特徴	A : 胎土 B : 焼成 C : 色調・釉調	備 考
126	弥生土器	壺	SX138	②<11.2> ④(28.9)	内面 ナデ、指押え 外面 ナデ、間隔をあけてハケ様の繪文	A: 微細な白色粒子・雲母を少量含む B: やや良好 C: 内面 橙5YR6/6 外面 赤褐2.5YR4/6	丹塗り
127	弥生土器	無頸壺	SX191	①8.4 ②7.2～7.3 ③4.9 ⑤12.2	内面 ナデ、ミガキ 外面 ナデ、わずかにミガキの痕跡	A: 1mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B: 良好 C: 内面 橙7.5YR6/6 外面 赤褐5YR4/8	丹塗り、穿孔あり 内面に丹が垂れる
128	土師器	小型丸底釜	1号墳周溝 (SD03 5区上層)	①<10.9> ②<7.7>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 マゼツ、一部ハケ残る	A: 1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B: 良好 C: 内外共に ぶい橙7.5YR7/4	
136	弥生土器	壺	1号墳主体部 (SK01 3区上層)	②<5.5>	内面 ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A: 1mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B: 良好 C: 内面 橙7.5YR6/6 外面 橙7.5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/4	
137	弥生土器	瓢形壺	1号墳主体部 (SK01 3区上層) 棺? 検出面上層	②<4.2>	内面 ナデか	A: 2mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B: やや不良 C: 内外共に 橙5YR6/6	
138	弥生土器	筒形器台	1号墳主体部 (SK01 木棺 裏込め)	②<3.5>	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ミガキ、ヨコナデ	A: 2.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B: 良好 C: 内面 橙5YR6/6 外面 明赤褐2.5YR5/8	丹塗り
139	弥生土器	筒形器台	1号墳主体部 (SX160 1区 黒褐色土)	②<4.4>	内面 ヨコナデ 外面 ミガキ	A: 3mm以下の長石・石英をやや多く含む B: 良好 C: 内面 橙5YR6/6 外面 明赤褐5YR4/8	丹塗り
140	弥生土器	筒形器台	1号墳主体部 (SX160 1区 黒褐色土)	②<6.5>	内面 ヨコナデ 外面 ミガキ	A: 3mm以下の長石・石英をやや多く含む B: 良好 C: 内面 橙5YR6/6 外面 明赤褐5YR4/8	丹塗り、透かしあり
141	弥生土器	甕	1号墳主体部 (SK01 木棺 裏込め 3区 粘土直上)	②<3.3> ③(10.0)	内面 ナデ 外面 ナデ、工具ナデ	A: 1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B: やや良好 C: 内外共に 橙5YR6/6	
144	土師器	蓋	1号墳主体部 (SX160 3 区盛土・黒褐色土)	①<14.0> ②<3.0>	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ、回転ヘラズリ	A: 0.5mm以下の白色粒を少量、微細な雲母をやや多く含む B: 良好 C: 内外共に 橙5YR6/6	内面に墨書
145	土師質土器	壺	1号墳主体部 (SX160 3 区盛土・黒褐色土)	①<15.0> ②<15.6> ④22.0	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ	A: 2mm以下の長石・石英をやや多く含む B: 良好 C: 内面 明褐7.5YR5/8 外面 橙7.5YR6/6	口縁部～胴部上位部分と胴部を 器上で合成する
146	土師器	壺	3号墳周溝 (SD02-6)	①<15.0> ②<5.4>	内面 ミガキ、ハケ状工具のナデ 外面 ミガキ、口縁外面は粗いミガキ	A: 1mm以下の白色粒子をわずかに、雲母を少量含む B: やや良好 C: 内外共に 橙5YR6/6	
147	陶器	甕	SX04	①52.3 ②77.4 ③28.1	内面 格子目タタキ、ヨコナデ 外面 格子目タタキ、ヨコナデ、口縁部に沈線	A: 2mm程度の白色粒子をやや多く含む B: 良好 C: 暗褐色の釉を施す	口縁部に目アト
148	陶器	甕	SX05	①53.2 ②80.0～80.2 ③31.0	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ	A: 1mm以下の白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 明褐色を呈す鉄釉。素地は暗赤褐色	口縁部に目アト 外面に刻印あり
149	陶器	甕	SX07	①50.5 ②71.3～72.0 ③27.2	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 格子目タタキ、口縁部に沈線	A: 2mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 明茶褐色の不透明釉を施す。光沢はない	口縁部に目アト 外面に手書きで「十」
150	陶器	甕	SX10	①35.4 ②55.0 ③22.1	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 沈線	A: 2mm以下の白色粒子をやや多く含む B: 良好 C: 茶褐色を呈し柔らかな光沢(鉄釉)あり	
151	陶器	甕	SX12	①35.0 ②57.8 ③22.2 ④38.0	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、沈線	A: 白色粒子を少量含む B: 良好 C: 暗赤褐色の釉を施す	口縁部に目アト
152	陶器	甕	SX80	①53.45 ②74.2 ③29.7 ④58.6	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、沈線	A: 白色粒子を少量含む B: 良好 C: 暗赤褐色の鉄釉を施す	口縁部に目アト
153	陶器	甕	SX88	①55.6 ②81.1～80.7 ③28.5	内面 ヨコナデ 外面 格子目タタキ、沈線	A: にぶい橙褐色、微細な白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 暗褐色の鉄釉。光沢はない	胴縁2枚が付着していた痕が 残る 口縁部に目アト
154	陶器	甕	SX92	①48.7 ②72.5 ③27.5 ④55.7	内面 格子目タタキ、ヨコナデ 外面 格子目タタキ	A: 明赤褐色の素地に白色粒子を少量含む B: 良好 C: 暗赤褐色の鉄釉を施し、上から黄釉を掛け流す	
155	陶器	甕	SX97	①51.9 ②70.3 ③26.8	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 格子目タタキ、沈線	A: 1mm以下の白色微粒子を含む B: 良好 C: 暗赤褐色の釉を施す	
156	陶器	甕	SX107	①55.2 ②71.5～73.5 ③28.0	内面 ヨコナデ 外面 平行タタキか	A: にぶい赤褐色、1.5mm以下の白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 明褐色の鉄釉を施す、上から土灰釉を掛け流す	口縁部に目アト
157	陶器	甕	SX158	①53.5 ②81.5～83.0 ③30.7	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、口縁部に沈線	A: にぶい赤褐色、1mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 褐色の鉄釉を施す、胴部境より下に鉄釉の上 から薄く掛け流す	口縁部に目アト
158	陶器	甕	SX161	①50.6 ②75.6 ③26.9 ④57.1	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 口縁部に沈線	A: 1mm以下の白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 暗石灰の釉を施す	
173	陶器	甕	SX166	①49.0 ②74.0 ③26.4	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 平行タタキか、口縁部に沈線	A: 1mm以下の白色粒子を少量含む 明褐色 B: 良好 C: 褐色の鉄釉に黄釉を施す。光沢はない、釉を重ね掛け	口縁部に目アト
174	陶器	甕	SX169	①50.2 ②75.4～75.9 ③24.0	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、口縁部に沈線	A: にぶい赤褐色、微細な白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 明褐色の鉄釉を施し、上から土灰釉を掛け流す	口縁部に目アト
175	陶器	甕	SX171	①37.8 ②35.5～36.7 ③19.0	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A: 灰色の4mm以下の粒。2mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 明るい褐色を呈し光沢あり、黒釉を口縁下より 掛け流す	
176	陶器	甕	SX172	①39.0 ②61.5 ③25.0	内面 ヨコナデ、格子目タタキ、 底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、口縁部に沈線	A: 赤褐色に1mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 褐色の釉を施す	波状沈線
177	陶器	甕	SX174	①49.3 ②76.2 ③26.1	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、口縁部に沈線	A: 1mm以下の微細な白色粒子を含む B: 良好 C: 暗赤褐色の釉を施す	口縁部に目アト
178	陶器	甕	SX175	①34.0 ②43.6 ③22.0 ④36.1	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 沈線	A: 微細な白色粒子をわずかに含む、赤褐色の胎 B: 良好 C: 暗褐色を呈す、光沢はない	
202	陶器	甕	SX178	①52.3 ②81.5～82.0 ③28.0	内面 格子目タタキ、ヨコナデ、 底部内面 格子目タタキ 外面 平行タタキ、ヨコナデ、口縁部に沈線	A: 赤褐色、1mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 褐色の鉄釉を施す。内外に鉄釉(土灰釉か)を上から掛 け流す	ボタンの貼り付け 口縁部に目アト
203	陶器	甕	SX179	①46.4 ②76.8 ③24.0 ④56.4	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 口縁部に沈線	A: 白色粒子を少量含む B: 良好 C: 褐色の鉄釉を施す	口縁部に目アト
204	陶器	甕	SX180	①56.1 ②81.2～84.4 ③30.0	底部内面 格子目タタキ 外面 格子目タタキ、口縁部に沈線	A: にぶい赤褐色、微細な白色粒子を少量含む B: 良好 C: 暗褐色の鉄釉を施す、胴部最下位に	口縁部に目アト
205	陶器	甕	SX181	①35.0 ②59.2～60.2 ③23.0	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 沈線	A: 暗赤褐色、1mm以下の白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 褐色の鉄釉、鉄釉の上から明るい褐色釉を流 し掛け	口縁部に目アト
206	陶器	甕	SX189	①49.2 ②75.5～75.8 ③29.0	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 沈線	A: にぶい橙褐色、1.5mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 褐色を呈す鉄釉、上から重ね掛け(土灰釉か)	口縁部に目アト
207	陶器	甕	SX190	①50.1 ②76.0～76.4 ③25.0	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ	A: 1mm以下の白色粒子を少量含む、素地は赤褐色 B: 良好 C: 褐色の鉄釉を施す	口縁部に目アト
213	磁器(染付)	紅血	SX179 ①	①4.2 ②1.8 ③2.0	内外面共に施釉 高台先端釉を剥ぎとる、重ね焼き痕	A: 白色、精良 B: 良好 C: 光沢のある、やや水色味を おびた透明釉が内外にかかる	「京都」都紅「紅清」の文字
214	磁器	小椀	SX179 ①	①7.8 ②4.6～4.5 ③3.4	内外面共に施釉 高台先端釉を剥ぎとる、重ね焼き痕	A: 白色、精良 B: 良好 C: 光沢のある、白色の半透明釉が内外にやや厚くかかる	緑色と褐色の印刷線付け 高台内に「柏山精製」の文字
224	陶器	甕	SX196	①48.7 ②86.5 ③27.0	内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、口縁部に沈線	A: 赤褐色、1mm以下の白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 褐色の鉄釉、光沢はない	胴部中位下に凹みが2ヶ所 口縁部に目アト
225	陶器	甕	SX199	①34.6 ②32.5 ③19.1 ④35.3	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A: 微細な白色砂粒を少量含む B: 良好 C: 暗赤褐色の釉が掛かり、光沢がある	見込みを重ね焼き痕
226	陶器	甕	帰属不明	①36.3 ②55.0 ③22.0 ④40.3	内面 格子目タタキ、ヨコナデ 外面 格子目タタキ、沈線	A: 微細な白色粒子を少量含む B: 良好 C: 褐色の鉄釉を 薄く施す、口縁部内側は明赤褐色釉を施す	口縁部に目アト
227	陶器	甕	帰属不明	①55.6 ②71.3 ③27.5 ④55.6	外面 平行タタキか	A: 2mm以下の白色砂粒を少量含む B: 良好 C: 暗赤褐色の鉄釉を施した後土灰釉を重ね掛け	底部内面に鉄銑の痕
228	陶器	甕	帰属不明	①22.0 ②26.2～26.3 ③15.4	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、沈線	A: にぶい黄褐色、微細な白色粒子をわずかに含む B: 良好 C: 黄褐色を呈し光沢あり、胴部上位と口縁端部に 白釉を重ね掛け	指で花文
229	陶器	甕	帰属不明	①57.3 ②82.0～82.7 ③29.0	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 口縁部に沈線	A: 1mm以下の白色粒子を少量含む B: 良好 C: 暗褐色の鉄釉を施す、光沢はない	口縁部に目アト 底部外面に目アト
230	陶器	甕	帰属不明	①60.0(52.0～61.3) ②71.8 ③27.6	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、沈線	A: 橙褐色、1mm以下の白色砂粒を含む B: 良好 C: 褐色の 鉄釉を施す	口縁部に目アト

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元()は残存	形態・技法の特徴	A :胎土 B :焼成 C :色調・釉調	備 考
231	陶器	甕	帰属不明	①53.6 ②86.4 ③28.6 ④58.4	内面 格子目タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 カナ目、沈線	A:白色粒子を少量含む B:良好 C:褐色の鉄釉で施釉後 黄釉で重ね掛け	口縁部に目アト
232	陶器	甕	帰属不明	①50.4 ②74.8～75.3 ③26.6	内面 ヨコナデ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、口縁部に沈線	A:にぶい赤褐色、微細な白色粒子をわずかに含む B:良好 C:褐色の鉄釉を施す	口縁部に目アト
233	陶器	甕	帰属不明	①52.1 ②75.6～75.8 ③29.0	内面 平行タタキ、底部内面 格子目タタキ 外面 ヨコナデ、沈線	A:にぶい褐色、1.5mm以下の白色粒子を少量含む B:良好 C:明褐色の鉄釉を施す	口縁部に目アト
249	磁器	皿	SX52	①(15.6) ②2.85 ③(7.9)	内面 施釉、型押し 外面 施釉、高台先端釉を剥ぎとる	A:灰白 精良 B:良好 C:やや緑青色味を帯びた半透明の 釉が内外にかかる、光沢あり	内面 編みカゴ状の型押文様に 赤絵付(エビ)
260	磁器	紅皿	SX110	①4.3 ②1.0～1.3 ③1.2	内外面共 施釉	A:灰白、精良 B:良好 C:やや水色をおびた透明釉、光沢 あり	外面半分ほどは釉が薄い
265	磁器	猪口	SX122	①6.8 ②4.3 ③3.3	内外面共 施釉 高台先端釉を剥ぎとる、白砂付着	A:灰白、精良 B:良好 C:淡い水色をおびた透明釉、光沢 あり	
269	磁器(染付)	小碗	SX130	①7.5 ②4.15 ③3.2	内面 施釉 外面 施釉、高台先端釉を剥ぎとる、一部白砂 付着、体部下位に團縁、釉下に貝須で草花文 を描く	A:灰白 精良 B:良好 C:やや水色味をおびた透明釉、光沢あり	
270	弥生土器	高杯	SX130	①(19.4) ②<12.5>	内面 ナデ 外面 絞り痕、ナデ、ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:やや良好 C:内外共 赤褐2.5YR4/6	丹塗り(脚部除く)
280	磁器(染付)	小碗	SX150	①10.2 ②4.65 ③3.8	内面 施釉、釉を輪状に剥ぎとる 外面 全体に施釉、一部ケズリ、高台先端釉を 剥ぎとる、体部に團縁、施文(草花文)	A:灰白N81、精良 B:良好 C:やや水色をおびる 光沢あり	
282	土師器	杯	SX18	①(9.5) ②<2.2> ③(4.8)	内面 マメツ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/4	
283	青磁	碗	SX21	②<2.1> ③(5.3)	内面 施釉 外面 ケズリ、施釉、施文(菊目)	A:精良(空疎あり) B:良好 C:淡い灰緑色を呈する透明 釉、光沢あり	同安窯系
291	土師器	小皿	SX32	②<1.0> ③(7.0)	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 回転糸切り、ヨコナデ	A:0.5mm以下の白色粒を少量含む B:やや不良 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/3	
297	陶器	皿	SX34 P-2	①10.55 ②3.4～3.5 ③4.2	内面 施釉 外面 ケズリ、クロコナデ、施釉	A:茶灰色、精良 B:良好 C:灰緑色を帯びた半透明釉、光沢あり	
299	土師器	小皿	SX37 P-1	①(9.4) ②1.7 ③5.0	内面 ナデ 外面 回転糸切り、ヨコナデ	A:1mm以下の白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/3	
300	土師器	小皿	SX37 P-2	①9.2 ②1.5～1.6 ③5.3	内面 工具ナデ(ミガキ状) 外面 回転糸切り、ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/3	
301	土師器	小皿	SX37 P-3	①9.3 ②1.5～1.6 ③5.5	内面 一部ナデ、一部に指押え痕 外面 回転糸切り、ヨコナデ、板状圧痕あり	A:2mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内面 褐灰色10YR6/1～灰黄褐10YR4/2 外面 灰黄褐 10YR4/2	
302	土師器	小皿	SX37 P-4	①9.2 ②1.45～1.55 ③5.8	内面 ヨコナデ、一部ナデ、一部指押え 外面 回転糸切り、スタレ状圧痕か、ヨコナデ	A:1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/4～灰黄褐10YR5/2	外面スス付着
303	土師器	小皿	SX37 P-5	①9.8 ②1.8～2.2 ③7.3	内面 ヨコナデ 外面 回転糸切り(板状? 圧痕あり)、ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR5/3	
304	土師器	小皿	SX37 P-6	①9.4 ②1.35～1.45 ③4.6	内面 一部ナデ、条痕あり 外面 回転糸切り、板状圧痕あり、ヨコナデ	A:1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/3	
308	弥生土器	甕	SX45	②<13.9>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:3mm以下の長石・石英を多く含む雲母を少量含む B:良好 C:内面 にぶい橙7.5YR7/4 外面 灰黄褐10YR6/2	
309	磁器	小碗	SX55	①長径8.1 短径7.0 ②4.2～4.5 ③3.0	内外面共 施釉 高台先端釉を剥ぎとる、高台量付部に白砂付 着	A:白 精良 B:良好 C:淡い緑青色味をおびた透明釉が内外 に やや厚くかかる	口縁部のゆがみが大い
317	弥生土器	甕	SX67 上層	②<8.4> ③10.1	内面 ナデ、刷毛状工具ナデ、指押え痕 外面 ナデ、指によるナデ成形	A:1.5mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内面 明赤褐5YR5/6 外面 橙7.5YR6/6	
318	弥生土器	甕棺	SX67-68 一段下げ	①(68.2) ②<27.5>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや不良 C:内面 橙5YR6/6 外面 橙5YR6/6 褐灰5YR4/1	外面に黒斑あり
331	磁器	猪口	SX103	①6.4 ②3.8～4.0 ③2.6	内外面共 施釉 高台先端釉を剥ぎとる、一部白砂付着	A:灰白、精良 B:良好 C:やや灰色を帯びた透明釉、光沢あり	
337	磁器(染付)	小碗	SX114	①7.0 ②3.3～3.35 ③2.6	内面 施釉 外面 施釉、高台先端釉を剥ぎとる、白砂付着、 施文	A:灰白、精良 B:良好 C:やや灰色を帯びた透明釉、光沢あり	
343	土師器	小皿	SX125	①4.9 ②1.5～1.6 ③7.9	内面 ナデ 外面 回転糸切り、板状圧痕あり、ヨコナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母と茶色粒子を少量含む B:やや不良 C:内外共に にぶい橙7.5YR6/4	
344	土師器	杯	SX125	①(12.4) ②2.65 ③(8.8)	内面 ナデ(横方向の強いナデ) 外面 回転糸切り、板状圧痕あり、ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや良好 C:内外共に にぶい黄褐色10YR7/3	
345	磁器(染付)	碗	SX125	①11.2 ②5.8 ③4.2	内面 施釉 外面 施釉、高台先端釉を剥ぎとる、 高台部に團縁、施文	A:灰白 精良 B:良好 C:淡い水色を帯びた透明釉、光沢あり	雪の結晶文を型刷り 周りをイッチン描きする
346	弥生土器	高杯	SX125 (SD01.02 2・3区ベルト)	①(19.2) ②<6.0>	内面 ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石をわずかに含む B:やや良好 C:内外共 赤褐2.5YR4/6	
353	土師器	小皿	SX137	①(9.4) ②1.3 ③(6.8)	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 回転糸切り、板状圧痕あり、ヨコナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい橙7.5YR6/4	口縁部にスス付着、灯明皿
359	土師器	小皿	SX139	①7.2 ②1.15～1.3 ③4.4	内面 ヨコナデ 外面 回転糸切り、ヨコナデ	A:1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい橙7.5YR7/4	
360	土師器	小皿	SX139 I	①9.5 ②1.3～1.4 ③6.4	内面 ヨコナデ 外面 回転糸切り、板状圧痕あり、ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内面 淡黄褐7.5YR8/4 外面 淡黄褐7.5YR8/4	
361	陶器	皿	SX139 II	①12.1 ②3.65～3.9 ③4.5	内面 施釉 外面 施釉、ヘラケズリ、クロコナデ	A:にぶい橙5YR7/3 白色粒子・黒色粒子を少量含む B:良好 C:にぶい灰緑色をおびる釉、光沢あり	
368	磁器(染付)	猪口	SX149	①5.4 ②3.3～3.4 ③2.6	内面 施釉 外面 施釉、ケズリ、施文(草花文)	A:灰白N81、精良 B:良好 C:やや水色をおびる、光沢あり	
380	磁器	猪口	SX99	①(5.6) ②<2.9>	内面 施釉 外面 施釉	A:灰白 精良 B:良好 C:わずかに緑青味を帯びた透明釉 が内外にやや厚くかかる、光沢、細かい貫入あり	二条の沈線あり
381	磁器	碗	SX99	①(10.0) ②<4.0>	内面 施釉 外面 施釉	A:灰白 精良 B:良好 C:やや水色味をおびた透明釉が内 外にやや厚くかかる	染付花弁文
383	瓦質土器	壺	SX109	①(20.2) ②3.5 ③15.6	内面 ロクロナデ 外面 ナデ、ロクロナデ	A:2mm以下の長石・石英・微細な雲母片をやや多く含む B:良好 C:内外共 灰褐色7.5YR4/2	385の壺か
384	陶器	甕	SX109	①(26.0) ②26.5 ③(15.0)	内面 ロクロナデ、薄く施釉、口縁部重ね掛け 外面 ナデ、施釉	A:灰褐7.5YR4/2～にぶい橙7.5YR6/4、2mm以下の白色粒 子・黒色粒子を少量含む B:良好 C:暗褐色を呈し光沢あり	
385	瓦質土器	壺	SX109	②<15.3> ③19.0	内面 ナデ、ロクロナデ 外面 ナデ、ヨコナデ、ハケ状工具でヨコナデ	A:2mm以下の長石・石英・微細な雲母片をやや多く含む B:良好 C:内外共 灰褐7.5YR4/2	383とセット関係か
386	土師器	杯	SX177	①(10.8) ②2.5 ③7.0	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 回転糸切り、ヨコナデ	A:1mm以下の長石・石英・雲母を少量含む B:良好 C:内外共に にぶい橙7.5YR7/4	
388	土師質土器	甕	SX28	②<23.6> ③17.6	内面 ナデ、ハケ 外面 ナデ、ハケ後ナデ、一部指押え	A:3mm以下の長石・石英をやや多く含む B:良好 C:内外共に にぶい橙7.5YR7/4	
389	陶器	壺	SX56	①(8.2) ②14.5 ③10.0	内面 ロクロナデ、施釉 外面 回転糸切り、回転ヘラケズリ、施釉	A:灰褐7.5YR4/2、精良 B:良好 C:黒褐色の不透明釉が やや薄く掛かる、一部重ね掛け、光沢あり	
390	土師器	小皿	SX60-69 周辺	①8.2 ②0.9～1.1 ③ 5.6	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 回転糸切り、板状圧痕あり、ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石を少量含む B:良好 C:内外共 橙7.5YR6/6	
397	弥生土器	高杯	カクラン5	①(9.2) ②<6.0>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:1mm以下の石英・長石・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共 赤褐2.5YR4/6	丹塗り
400	弥生土器	筒形器台	表土剥ぎ	②<12.7>	内面 ナデ 外面 ミガキ	A:2.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内面 橙7.5YR7/8、明赤褐2.5YR5/8	丹塗り、透かしあり

表5 第7・8次調査出土遺物観察表（金属製品）

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm/g)	備 考
115	鉄製品	鉄鏃	1号石棺墓	長 6.70 幅 3.30	
116	鉄製品	穂摘鎌	1号石棺墓	長 8.70 幅(刃) 1.85	
129	鉄製品	鉄斧	古墳主体部南小口側墳丘盛土	長 9.95 幅 4.25	
130	鉄製品	鉄斧	1号墳主体部(SK01 本棺 7区 ※墳丘盛土内)	長 8.40 幅 4.15	
131	鉄製品	刀子	1号墳主体部(SK01 本棺 7区)	長 8.45	
159	銅製品	銅銭	SX01	長 2.80 幅 2.90 孔幅 0.50 厚 0.90 重 20.0	6枚重なる ※法量は6枚分
160	鉄製品	鉄釘	SX04 右脛骨近く	長 4.25(銹等込み)	
161	銅製品	銅銭	SX04 棺底出土	長 2.60 幅 2.90 孔幅 0.50 厚 0.40 重 4.70	2枚重なる 1枚完存、1枚1/2 ※法量は2枚分
162	銅製品	銅銭	SX04 棺底出土	長 3.60 幅 3.60 孔幅 0.60 厚 0.55 重 9.60	3枚重なる ※法量は3枚分
163	銅製品	銅銭	SX87	長 2.80 幅 3.00 厚 0.80 重 13.90	4枚重なる ※法量は4枚分
164	銅製品	銅銭	SX88	外径 2.50 孔幅 0.45 厚 0.10 重 2.60	
165	銅製品	銅銭	SX88	長 2.60 横 2.60 孔幅 0.45 厚 0.40 重 10.10	3枚重なる ※法量は3枚分
166	鉄製品	鉄銭	SX88	長 2.60 幅 2.70 孔幅 0.50 厚 0.50 重 1.70	2枚重なる 端部の1/4は欠損 ※法量は2枚分
167	鉄製品	鉄銭	SX89	長 2.70 幅 3.10 厚 0.60 重 8.90	3枚重なる ※法量は3枚分
168	鉄製品	鉄銭	SX89	長 3.20 横 3.10 厚 0.90 重 8.00	銭は3枚か ※法量は3枚分
169	銅製品	銅銭	SX97	長 2.90 幅 3.70 厚 2.50 重 18.50	銅銭は6枚 内1枚は鉄銭か ※法量は6枚分
170	銅製品	銅銭	SX107	外径 2.35 孔幅 0.65 厚 0.12 重 2.60	寛永通寶
171	銅・鉄製品	銅銭・鉄銭	SX107	長 3.10 幅 3.70 孔幅 0.55 厚 1.05 重 10.60	寛永通寶 4枚重なる 3枚完存、1枚1/2 ※法量は4枚分
172	鉄製品	鉄銭	SX107	外径 2.10 孔幅 0.60 厚 0.50 重 2.70	
189	金属製品	硬貨	SX169	外径 2.30 厚 0.15 重 3.50	大正九年十銭
190	銅製品	煙管	SX169	長 19.25	羅字のない延煙管 銅地銀鍍金か銅鍍金
191	金属製品	硬貨	SX170	外径 2.20 厚 0.15 重 1.20	昭和十七年十銭 アルミ製品
192	金属製品	硬貨	SX170	外径 1.60 厚 0.15 重 0.60	昭和十六年一銭
208	銅製品	銅銭	SX174 棺底出土	外径 2.75 厚 0.35 重 4.00	
209	銅製品	銅銭	SX174 棺底出土	外径 2.35 孔幅 0.55 厚 0.19 重 2.70	
210	銅製品	硬貨	SX176	外径 2.30 厚 0.13 重 3.40	「大日本」の文字
211	銅製品	銅銭	SX178 寛骨下出土	外径 2.45 孔幅 0.60 厚 0.15 重 2.50	
212	銅製品	銅銭	SX178 前腕下出土	外径 2.20 厚 0.10 重 3.20	「大日本」の文字
216	金属製品	指めき	SX179 ③	長 2.20 幅 2.05 幅 1.00	
217	銅製品	銅銭	SX180 ①	外径 2.3 厚 0.15 重 2.80	
218	銅製品	銅銭	SX180 ①	外径 1.90 孔幅 0.25 厚 0.15 重 2.50	
219	銅製品	銅銭	SX180 ④ 棺底出土	外径 2.30 厚 0.25 重 3.40	木質付着
220	銅製品	硬貨	SX180 ④ 棺底出土	外径 3.20 厚 0.25 重 12.60	二銭
221	銅製品	煙管	SX180 ①	長 6.85	布でくるまれている
222	銅製品	不明金具	SX180 ②	長 1.98 幅 3.56	銅地銀鍍金か銅鍍金
223	金属製品	硬貨	SX181	長 2.80 幅 2.80 厚 0.15 重 5.50	
234	銅製品	銅銭	SX02	外径 2.40 孔幅 0.60 厚 0.10 重 2.70	寛永通寶
235	銅製品	銅銭	SX02	外径 2.30 孔幅 0.55 厚 0.1 重 2.40	寛永通寶
236	銅製品	銅銭	SX02	長 2.60 幅 2.50 孔幅 0.55 厚 0.45 重 12.0	寛永通寶 4枚重なる ※法量は4枚分
237	鉄製品	鉄釘	SX02	長 3.00	
238	鉄製品	鉄釘	SX02	長 4.15	※法量は木質込み
239	鉄製品	鉄釘	SX02	長 4.75	※法量は木質込み
240	鉄製品	鉄釘	SX02	長 3.60	※法量は木質込み
241	鉄製品	鉄釘	SX02	長 4.05	※法量は木質込み
242	鉄製品	鉄釘	SX02	長 3.70	※法量は木質込み
243	鉄製品	鉄釘	SX06	長 3.55	
245	銅製品	銅銭	SX14	長 3.60 幅 3.70 孔幅 0.60 厚 0.90 重 16.50	6枚重なる 銅銭4枚、鉄銭2枚 ※法量は6枚分
246	銅製品	銅銭	SX39	外径 2.30 孔幅 0.65 厚 0.10 重 1.90	寛永通寶
247	銅製品	銅銭	SX39	外径 2.40 孔幅 0.55 厚 0.10 重 2.40	寛永通寶 外縁部を1/8欠損

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm/g)	備 考
248	銅製品	銅銭	SX39 木棺	外径 2.40 孔幅 0.60 厚 0.10 重 2.70	
253	鉄製品	出土釘	SX84	長 4.90(錆等込み)	
254	鉄製品	鉄銭	SX84	外径 2.60 孔幅 0.60 厚 0.70 重 3.30	
255	銅製品	銅銭	SX91 ?	外径 2.40 孔幅 0.60 厚 0.10 重 3.00	寛永通寶
256	銅製品	銅銭	SX91 ?	長 2.70 幅 2.70 孔幅 0.50 厚 0.40 重 7.50	3枚重なる 銅銭2枚完存、鉄銭1枚1/2 ※法量は3枚分
257	銅製品	銅銭	SX91 ?	外径 2.50 孔幅 0.60 厚 0.45 重 3.80	3枚重なる 銅銭1枚完存、鉄銭2枚1/4 ※法量は3枚分
258	銅製品	銅銭	SX108	長 2.80 幅 2.90 孔幅 0.55 厚 0.90 重 11.80	5枚重なる 3枚完存、1枚外縁部1/4欠損、1枚1/2 植物繊維付着 ※法量は5枚分
259	銅製品	銅銭	SX108	外径 2.30 孔幅 0.60 厚 0.60 重 1.90	残存1/2 植物繊維付着
261	銅製品	銅銭	SX110	外径 2.40 孔幅 0.55 厚 0.10 重 3.20	寛永通寶
262	銅製品	銅銭	SX110	外径 2.50 孔幅 0.55 厚 0.10 重 3.20	寛永通寶
263	銅製品	銅銭	SX110	外径 2.40 孔幅 0.50 厚 0.10 重 3.60	寛永通寶
264	銅製品	銅銭	SX110	外径 2.50 孔幅 0.50 厚 0.10 重 4.20	寛永通寶 「文」の文字
266	銅製品	銅銭	SX122	外径 2.50 孔幅 0.60 厚 0.11 重 2.90	寛永通寶
267	銅製品	銅銭	SX122	外径 2.50 孔幅 0.56 厚 0.12 重 3.30	寛永通寶
268	銅製品	銅銭	SX122	外径 2.40 孔幅 0.55 厚 0.12 重 4.00	寛永通寶
271	銅製品	銅銭	SX130	長 3.10 幅 3.00 孔幅 0.60 厚 0.50 重 5.10	寛永通寶 2枚重なる 1枚完存、1枚ほぼ完存か 木質付着 ※法量は2枚分
272	銅製品	銅銭	SX130	長 2.90 幅 3.20 孔幅 0.55 厚 0.35 重 7.00	寛永通寶 3枚重なる ※法量は3枚分
273	銅製品	銅銭	SX130	外径 2.50 孔幅 0.50 厚 0.14 重 3.40	寛永通寶
274	銅製品	キセル	SX131	雁首 長 5.75 幅 0.95 吸口 長 4.45 幅 1.25	布付着
287	金属製品	十字架	SX21 埋土 ?	長1.16 幅 0.72 厚 0.09	銅地銀箔貼金鍍金か
305	銅製品	銅銭	SX37	長 2.60 幅 2.60 孔幅 0.40 厚 0.30 重 5.70	2枚重なる ※法量は2枚分
306	銅製品	銅銭	SX41	外径 2.40 孔幅 0.55 厚 0.10 重 0.70	残存1/2
307	銅製品	銅銭	SX45	長 2.70 幅 3.00 孔幅 0.60 厚 0.80 重 21.00	寛永通寶 6枚重なる ※法量は6枚分
319	銅製品	銅銭	SX95	外径 2.30 孔幅 0.60 厚 0.10 重 1.70	寛永通寶
320	銅製品	銅銭	SX95	長 2.70 幅 2.40 孔幅 0.40 厚 0.20 重 7.30	寛永通寶 2枚重なる ※法量は2枚分
321	銅製品	銅銭	SX95	外径 2.30 孔幅 0.65 厚 0.10 重 2.20	寛永通寶
322	銅製品	銅銭	SX95	長 2.50 幅 2.70 孔幅 0.40 厚 0.40 重 6.70	寛永通寶 2枚重なる ※法量は2枚分 表面に布状の付着物あり
323	銅製品	環状	SX102 上層	長 1.75 幅 1.90 高 0.20	残存4/5
327	銅製品	銅銭	SX102	外径 2.40 孔幅 0.62 厚 0.13 重 1.80	寛永通寶 背面に和紙付着
328	銅製品	銅銭	SX102	外径 2.42 孔幅 0.60 厚 0.12 重 2.20	寛永通寶
329	銅製品	銅銭	SX102	外径 2.50 孔幅 0.60 厚 0.15 重 3.30	寛永通寶
330	銅製品	銅銭	SX102	外径 2.48 孔幅 0.68 厚 0.13 重 1.70	寛永通寶 一部欠損
338	銅製品	銅銭	SX118	外径 2.30 孔幅 0.50 厚 0.10 重 1.20	寛永通寶 縁が1/4欠損
339	銅製品	銅銭	SX118	外径 2.50 孔幅 0.50 厚 0.10 重 3.40	寛永通寶 「文」の文字
340	銅製品	銅銭	SX118	長 3.00 幅 4.80 孔幅 0.50 厚 0.30 重 8.60	寛永通寶 3枚重なる ※法量は3枚分
341	銅製品	銅銭	SX118	外径 2.40 孔幅 0.50 厚 0.10 重 2.60	
342	銅製品	銅銭	SX119	外径 2.35 孔幅 0.55 厚 0.14 重 2.30	寛永通寶
369	銅製品	銅銭	SX154	外径 2.27 孔幅 0.65 厚 0.10 重 2.20	寛永通寶
370	銅製品	銅銭	SX154	外径 2.40 孔幅 0.55 厚 0.10 重 2.40	寛永通寶
371	銅製品	銅銭	SX154	外径 2.50 孔幅 0.60 厚 0.12 重 2.90	寛永通寶
372	銅製品	銅銭	SX154	外径 2.40 孔幅 0.55 厚 0.13 重 4.10	寛永通寶
373	銅製品	銅銭	SX154	外径 2.38 孔幅 0.55 厚 0.10 重 3.00	寛永通寶
374	銅製品	銅銭	SX154	外径 2.30 孔幅 0.60 厚 0.10 重 2.30	寛永通寶 付着物あり
382	金属製品	模造銭か	SX99	外径 2.45 孔幅 0.50 厚 0.10 重 3.40	円形孔あり
387	銅製品	銅銭	SP02	長 3.40 幅 3.40 孔幅 0.50 厚 2.80 重 37.00	銅銭は寛永通寶 銅銭8枚 内1枚は端部欠損、鉄銭2枚か ※法量は一塊
391	銅製品	銅銭	SX	外径 2.50 孔幅 0.50 厚 0.40 重 2.30	寛永通寶か 裏に「文」の文字
392	銅製品	銅銭	SX	外径 2.40 孔幅 0.45 厚 0.40 重 2.40	
393	銅製品	銅銭	仮A	外径 2.25 孔幅 0.60 厚 0.20 重 1.60	

表6 第7・8次調査出土遺物観察表（玉・ガラス製品）

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm)	色調	備考
108	石製品	勾玉	SX156 東小口側床面直上 No.1	長 1.10 幅 0.65 厚 0.25	灰緑色	
109	ガラス製品	ガラス玉	SX156 東小口側床面直上 No.4	長 0.25 幅 0.30 厚 0.20	青緑色	
110	ガラス製品	ガラス玉	SX156 東小口側床面直上 No.3	長 0.35 幅 0.40 厚 0.20	青緑色	
111	ガラス製品	ガラス玉	SX156 東小口側床面直上 No.2	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20～0.25	青緑色	
132	石製品(碧玉)	管玉	1号墳主体部(SK01) 木棺 7区 褐灰色粘質土最下層	長 0.35 幅 0.35 厚 0.90～0.95	緑色	
133	石製品(碧玉)	管玉	1号墳主体部(SK01) 木棺 7区 褐灰色粘質土最下層	長 0.40 幅 0.40 厚 0.50	淡緑色	一部欠損
134	ガラス製品	ガラス玉	1号墳主体部(SK01) 木棺部 1区	長 0.35 幅 0.35 厚 0.20～0.25	青色	
135	ガラス製品	ガラス玉	1号墳主体部(SK01) 木棺部 4区	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20～0.25	青緑色	
180	ガラス製品	ガラス玉	SX161	長 1.90 幅 1.90 厚 1.60	白色～赤褐色半透明	孔の中に紐が残る
181	ガラス製品	数珠玉	SX161	長 0.80 幅 0.80 厚 0.80	白色半透明	面取り
182	ガラス製品	数珠玉	SX161	長 0.80 幅 0.80 厚 0.80	白色半透明	面取り
183	ガラス製品	数珠玉	SX161	長 0.80 幅 0.80 厚 0.80	白色半透明	面取り
184	ガラス製品	数珠玉	SX161	長 0.80 幅 0.80 厚 0.80	白色半透明	面取り
185	ガラス製品	数珠玉	SX161	長 0.80 幅 0.80 厚 0.80	白色半透明	面取り
186	ガラス製品	数珠玉	SX161	長 0.80 幅 0.80 厚 0.80	白色半透明	面取り
187	ガラス製品	数珠玉	SX166	長 0.90 幅 0.90 厚 0.90	白色	親玉
188	ガラス製品	数珠玉	SX166	長 0.90 幅 0.90 厚 0.90	白色	親玉
193	ガラス製品	ガラス玉	SX170	長 0.48 幅 0.48 厚 0.25	黒色光沢あり	
194	ガラス製品	ガラス玉	SX170	長 0.48 幅 0.48 厚 0.25	黒色光沢あり	
195	ガラス製品	ガラス玉	SX170	長 0.48 幅 0.48 厚 0.25	黒色光沢あり	
196	ガラス製品	ガラス玉	SX170	長 0.38 幅 0.38 厚 0.50	赤橙色	
197	ガラス製品	ガラス玉	SX170	長 0.40 幅 0.40 厚 0.45	赤橙色	
198	ガラス製品	ガラス玉	SX170	長 0.40 幅 0.40 厚 0.35	赤橙色	
250	ガラス製品	ガラス玉	SX78	長 0.60 幅 0.60 厚 0.45	明黄褐色半透明	
251	ガラス製品	ガラス玉	SX78	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20	白色半透明	
252	ガラス製品	ガラス玉	SX78	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20	白色半透明	
275	ガラス製品	数珠玉	SX131	長 0.45 幅 0.45 厚 0.35	白色	
276	ガラス製品	数珠玉	SX131	長 0.45 幅 0.45 厚 0.30	白色	
277	ガラス製品	数珠玉	SX131	長 0.45 幅 0.45 厚 0.30	白色	
278	ガラス製品	数珠玉	SX131	長 0.45 幅 0.45 厚 0.30	白色	
279	ガラス製品	数珠玉	SX131	長 0.45 幅 0.45 厚 0.30	白色	
281	ガラス製品	ガラス玉	SX150	長 0.55 幅 0.65 厚 0.30	青緑色半透明	
284	ガラス製品	ガラス玉	SX21	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20	明黄褐色半透明	
285	ガラス製品	ガラス玉	SX21 人骨首付近	長 0.45 幅 0.45 厚 0.25	明黄褐色半透明	
286	ガラス製品	ガラス玉	SX21 人骨首付近(図あり)	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20	明黄褐色半透明	
288	ガラス製品	ガラス玉	SX22	長 0.70 幅 0.70 厚 0.50	白色	
289	ガラス製品	ガラス玉	SX22	長 0.45 幅 0.45 厚 0.30	明緑色半透明	
290	ガラス製品	ガラス玉	SX22	長 0.35 幅 0.35 厚 0.20	白色	
292	ガラス製品	ガラス玉	SX33	長 0.70 幅 0.70 厚 0.60	青白色	
293	ガラス製品	ガラス玉	SX33	長 0.70 幅 0.70 厚 0.60	青白色	
294	ガラス製品	ガラス玉	SX33	長 0.55 幅 0.55 厚 0.50	濃青色半透明	
295	ガラス製品	ガラス玉	SX33	長 0.50 幅 0.50 厚 0.40	青白色	
296	ガラス製品	ガラス玉	SX33	長 0.50 幅 0.50 厚 0.45	明黄褐色半透明	
298	ガラス製品	ガラス玉	SX34	長 0.75 幅 0.75 厚 0.50	白色半透明	
310	ガラス製品	数珠玉	SX61	長 0.50 幅 0.50 厚 0.30	白色	
311	ガラス製品	数珠玉(親玉)	SX63	長 1.05 幅 0.95 厚 1.05	明黄褐色半透明	
312	ガラス製品	数珠玉	SX63	長 0.50 幅 0.50 厚 0.45	黒褐色	
313	ガラス製品	数珠玉	SX63	長 0.35 幅 0.35 厚 0.30	青緑色半透明	
314	ガラス製品	数珠玉	SX67 (1)	長 0.60 幅 0.60 厚 0.45	白色	
315	ガラス製品	数珠玉	SX67 (1)	長 0.50 幅 0.50 厚 0.35	淡青色	
316	ガラス製品	数珠玉	SX67 (2)	長 0.50 幅 0.50 厚 0.35	淡青色	
324	ガラス製品	ガラス玉	SX102	長 0.80 幅 0.80 厚 0.65	白色	
325	ガラス製品	ガラス玉	SX102	長 0.65 幅 0.65 厚 0.60	透明	
326	ガラス製品	ガラス玉	SX102	長 0.50 幅 0.50 厚 0.40	青緑色	

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm)	色調	備考
332	ガラス製品	ガラス玉	SX103	長 0.55 幅 0.55 厚 0.40	明黄褐色半透明	
333	ガラス製品	ガラス玉	SX103	長 0.40 幅 0.40 厚 0.25	明黄褐色半透明	
334	ガラス製品	ガラス玉	SX103	長 0.40 幅 0.40 厚 0.25	明黄褐色半透明	
335	ガラス製品	数珠玉	SX103	長 0.55 幅 0.55 厚 0.45	白色	
336	ガラス製品	数珠玉	SX103	長 0.35 幅 0.35 厚 0.25	白色	
347	ガラス製品	数珠玉	SX129	長 0.75 幅 0.75 厚 0.55	白色白濁	
348	ガラス製品	数珠玉	SX129	長 0.65 幅 0.65 厚 0.60	白色半透明 水晶か	
349	ガラス製品	数珠玉	SX129	長 0.65 幅 0.65 厚 0.35	白色半透明 水晶か	
350	ガラス製品	数珠玉	SX129	長 0.60 幅 0.60 厚 0.60	白色半透明	
351	ガラス製品	数珠玉	SX129	長 0.60 幅 0.60 厚 0.45	白色半透明	
352	ガラス製品	数珠玉	SX134	長 0.75 幅 0.75 厚 0.40	白色	
354	ガラス製品	数珠玉	SX137	長 0.65 幅 0.65 厚 0.55	白色半透明	
355	ガラス製品	数珠玉	SX137	長 0.65 幅 0.65 厚 0.55	白色	
356	ガラス製品	数珠玉	SX137	長 0.65 幅 0.65 厚 0.40	茶白色	
357	ガラス製品	数珠玉	SX137	長 0.60 幅 0.60 厚 0.55	白色	
358	ガラス製品	数珠玉	SX137	長 0.60 幅 0.60 厚 0.50	白色	
362	ガラス製品	ガラス玉	SX139	長 1.05 幅 1.05 厚 0.80	黄褐色半透明	
363	ガラス製品	数珠玉	SX146 下層	長 0.70 幅 0.70 厚 0.40	白色	
364	ガラス製品	数珠玉	SX146 下層	長 0.70 幅 0.70 厚 0.40	白色	
365	ガラス製品	数珠玉	SX146 下層	長 0.70 幅 0.70 厚 0.40	白色	
366	ガラス製品	数珠玉	SX146 下層	長 0.70 幅 0.70 厚 0.40	白色	
367	ガラス製品	数珠玉	SX146 下層	長 0.65 幅 0.65 厚 0.40	白色	
375	ガラス製品	数珠玉	SX154	長 0.45 幅 0.45 厚 0.25	白色半透明	
376	ガラス製品	数珠玉	SX154	長 0.45 幅 0.45 厚 0.25	白色	
377	ガラス製品	数珠玉	SX154	長 0.40 幅 0.40 厚 0.25	白色	
378	ガラス製品	数珠玉	SX154	長 0.40 幅 0.40 厚 0.20	白色半透明	
379	ガラス製品	数珠玉	SX154	長 0.40 幅 0.40 厚 0.30	青緑色	
394	木製品	数珠玉	板A	長 0.60 幅 0.60 厚 0.60		
395	木製品	数珠玉	板A	長 0.60 幅 0.65 厚 0.65		
396	木製品	数珠玉	板A	長 0.60 幅 0.65 厚 0.65		

表 7 第 7 ・ 8 次調査出土遺物観察表（石製品）

遺物 番号	器種	出土地点	法量 (cm/g)	石材	備考
104	細石刀核	32号甕棺墓	長 3.65 幅 1.70 厚 1.40 重 8.00	黒曜石	
117	石鏃	1号石棺墓	長 2.74 幅 1.73 厚 0.64 重 2.60	黒曜石	
142	石鏃	SK01 2段目1区	長 2.28 幅 1.93 厚 0.46 重 1.20	黒曜石	
143	石鏃	SX160 1区 黒褐色土	長 2.15 幅 1.67 厚 0.41 重 1.10	黒曜石	
244	石鏃	SX06	長 2.07 幅 1.72 厚 0.51 重 1.50	黒曜石	

表 8 第 7 ・ 8 次調査出土遺物観察表（その他の出土遺物）

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm)	備 考
179	木製品	櫛	SX161	長 3.10 幅 12.00 厚 1.00	柁目取り
199	革製品	指めき	SX170	長 1.85 幅 1.70 厚 1.05	
200	骨製品	ヘラ	SX170	長 12.05 幅 2.05 厚 0.60	クジラの骨か 赤・緑・白の塗料が残存
201	木製品	鉛筆	SX170	長 16.30 幅 0.75～0.80	
215	合成樹脂製品	蓋付瓶	SX179②	器高(蓋込み) 5.70 (瓶) 4.25 底径 4.60	化粧品の瓶か 内面の器壁に白い内容物が残る
398	ガラス製品	薬瓶	調査区北東隅カクラン	口径 2.10 器高 15.00 底径(長径) 6.40 (短径) 4.50	「原病院」の文字 壁内に気泡が多い
399	ガラス製品	薬瓶	調査区北東隅カクラン	口径 3.30 器高 16.90 底径(長径) 7.20 (短径) 5.00	「清澤眼科醫院」の文字 壁内に気泡が多い

表9 第10次調査出土遺物観察表

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm) ①口径②器高③底径④最大径 ※()は復元く>は残存	形態・技法の特徴	A:胎土 B:構成 C:色調	備 考
401	弥生土器	甕	SX01 拡張1層カクラン	①<31.2> ②<5.3>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ、刻目、沈線	A:1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内面 明赤褐2.5YR5/8 外面 赤褐2.5YR4/8	丹塗り
402	弥生土器	高杯	SX01 拡張1層カクラン	②<9.7>	内面 絞り痕、ナデ 外面 マツ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや不良 C:内面 灰黄褐10YR6/2 外面 にぶい黄橙10YR7/4	
403	弥生土器	甕棺	SX01 黒色土(2層)	①<74.0> ②<16.5>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内面 にぶい橙7.5YR7/4 外面 橙5YR6/8	
404	弥生土器	甕	SD01 5層(黒色シルト)	①<32.0> ②<6.4>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共 明赤褐5YR5/8	
405	弥生土器	甕	SD01 5層(黒色シルト)	②<5.1> ③<8.0>	内面 ナデ 外面 ナデ、ハケ	A:2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内外共 橙7.5YR7/6	
406	弥生土器	甕	SD01 5層(黒色シルト)	①<50.0> ②<4.7>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:やや良好 C:内外共 橙5YR6/6	
407	弥生土器	甕	SD01 5層(黒色シルト)	②<7.0>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	
408	弥生土器	甕	SD01 5層(黒色シルト)	②<5.5>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:2.5mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	404と同一個体か
409	弥生土器	甕	SD01 5層(黒色シルト)	①<39.6> ②<9.4>	内面 ナデ、ヨコナデか 外面 ナデ、ヨコナデか	A:3mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:やや不良 C:内面 にぶい黄橙10YR7/4 外面 にぶい橙7.5YR7/4	
410	弥生土器	甕	SX01 5層 黒色土	②<6.8>	内面 工具ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:3.5mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	
411	弥生土器	壺	SX01 ベルト5層	①<9.7> ②10.0	内面 ナデ、指押え 外面 工具ナデ、ナデ	A:3.5mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:良好 C:内外共 にぶい赤褐5YR5/4	
412	弥生土器	壺	SX01 ベルト(5層黒色土)	①<39.6> ②29.3 ③5.6	内面 ナデ、ミガキ、ヨコナデ 外面 ナデ、ミガキ、細いミガキ、線刻文 ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内面 にぶい橙 7.5YR7/3 外面 赤褐色2.5YR4/8	口縁から外面まで丹塗り
413	弥生土器	壺	SX01 5層	①<39.0> ②<4.3>	内面 ミガキ 外面 暗文一部残存	A:1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:やや良好 C:内外共 赤褐2.5YR4/8	内外面丹塗り
414	弥生土器	壺	SX01 拡張5層 (ベルト5層黒色土)	②<7.2> ③5.2	内面 ナデか、指押え 外面 縦方向のミガキか	A:1.5mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:やや良好 C:内面 浅黄褐10YR8/3 外面 赤褐2.5YR4/8	外面のみ丹塗り
415	弥生土器	壺	SX01(ベルト4層、拡張 1層カクラン) 試掘トレンチ 埴土 SD01 カクラン	①<35.6> ②<4.0>	内面 工具ナデ、ナデ、ヨコナデ 外面 ハケ、接合時の押さえ痕顯著 ヨコナデ	A:2mm前後の白色砂透明砂多い、0.3mmの丸い灰色砂含む B:良好 C:内外共 明褐7.5YR5/6	口縁内部、端に帯描波状文 外系系
416	弥生土器	器台脚裾部か	SD01 5層(黒色シルト)	裾部径<29.6> ②<1.6>	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、縦方向ナデ、沈線	A:1～2mmの白色砂粒、1～5mmの透明粘土多い、にぶい 黒色砂粒わずかに含む B:良好 C:内面 明黄褐2.5Y7/6 外面 にぶい黄2.5Y6/4	壺口縁部 刺突文 黒斑あり
417	弥生土器	甕	SX01 5層	①<37.5> ②<52.0>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共 にぶい黄橙10YR7/3	418と同一個体か
418	弥生土器	甕棺	SX01 5層	②<14.3> ③10.5	内面 ナデ 外面 ナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共 にぶい黄橙10YR7/3	417と同一個体か
419	弥生土器	甕棺	SX01 5層	①<49.6> ②<13.3>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデか、ヨコナデ	A:2.5mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:やや不良 C:内外共 にぶい黄橙10YR7/4	
420	弥生土器	甕	SX01 ベルト7層	②<8.4>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:3mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内面 橙5YR6/6 外面 にぶい橙7.5YR7/4	
421	弥生土器	甕	SX01 ベルト7層	②<10.0> ③11.0	内面 ナデ、指押え 外面 ナデ、ハケ、マツ	A:2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:やや良好 C:内面 橙5YR6/6 外面 橙7.5YR6/6 褐灰 7.5YR4/1	
422	弥生土器	甕	SX01 ベルト7層	①<32.0> ②<25.9>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ、ヨコナデ	A:4mm～5mm大の礫、3mm以下の石英・長石・雲母をやや 多く含む B:良好 C:内面 赤褐5YR4/6 明赤褐5YR5/6 外面 明赤褐5YR5/6	
423	弥生土器	高杯	SX01 ベルト7層	①<26.0> ②<5.5>	マメツのため調整不明	A:3mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:やや不良 C:内面 明赤褐2.5YR5/8 外面 にぶい黄橙10YR7/4	内面丹塗り
424	弥生土器	高杯	SX01 ベルト7層	②<18.9> ③17.0	内面 ハケ、ナデ、絞り痕 外面 縦方向のナデ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を多く含む B:不良 C:内外共 橙色5YR6/8	
425	弥生土器	短頸壺	SX01 ベルト7層	①14.2 ②14.7～14.8 ③5.4	内面 指押え、ナデ 外面 ナデ、ミガキ	A:2mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内面 にぶい黄橙10YR7/3 外面 明赤褐2.5YR5/8	丹塗り、口縁部のほぼ対称の位 置に穿孔あり
426	弥生土器	壺	SD01 サプトレンチ 地山上層	②<3.5>	内面 ミガキ、マメツ 外面 ミガキ、縦方向に暗文	A:2.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや良好 C:内外共 赤褐2.5YR4/8	丹塗り
427	弥生土器	甕	SX01 くい	①<18.0> ②<2.3>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	
428	土師器	杯	SK01 床直	①10.4 ②3.0～3.4 ③6.0	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 回転ヘラケズリ、ヨコナデ	A:1mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:良好 C:内外共 橙5YR6/6	
429	須恵器	杯	SK01 床直	②<1.0>	内面 ヨコナデ 外面 ナデ、高台貼付、ヨコナデ	A:微細な白色粒子を少量含む B:良好 C:内面 灰N51 外面 暗灰N31	
430	弥生土器	器種不明	カクラン②	②<9.1>	内面 ハケ、ナデ 外面 ハケ、マメツ	A:1mm以下の白色粒子・雲母を少量含む B:良好 C:内面 にぶい黄橙10YR6/4 明赤褐5YR5/6 外面 にぶい黄橙10YR7/4 明赤褐5YR5/6	穿孔あり
431	弥生土器	器種不明	カクラン③	②<14.0>	内面 ハケ、ナデ 外面 ハケ、マメツ	A:4mm大の礫、2mm以下の石英・長石・雲母をやや多く含む B:良好 C:内面 にぶい橙7.5YR6/4 外面 橙7.5YR7/6	穿孔あり
432	弥生土器	器台脚裾部か	表探	裾部径<29.6> ②<1.6>	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ後ナデか、沈線	A:微密、1～2mmの白色砂、1～3mmの透明砂粒多い B:良好 C:内面 明るい黄橙2.5Y7/6 外面 にぶい黄 2.5Y6/4	刺突文
433	須恵器	蓋	検出時	摘み径1.9 ②<1.2>	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共 黄灰2.5Y5/1	
434	須恵器	蓋	検出時	②<1.2>	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:黄灰2.5Y5/1	433と同一個体か
435	須恵器	杯	カクラン③	②<1.3> ③<7.4>	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 回転ヘラケズリ、高台貼付、ヨコナデ	A:微細な白色粒子・雲母をわずかに含む B:良好 C:内外共 灰5Y4/1	
436	弥生土器	蓋	SK01(南側)カクラン	①5.5 ②<3.3>	内面 ナデ 外面 ヨコナデか、ナデか	A:1.5mm以下の石英・長石・雲母を少量含む B:やや不良 C:内面 浅黄橙10YR8/3 外面 赤褐2.5YR4/6	蓋蓋、丹塗り

Ⅶ. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土人骨について

1. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土の弥生時代人骨の埋葬状態と形質的特徴

梶佐古幸謙¹⁾、富田啓貴²⁾、米元 史織^{3・4)}、舟橋 京子^{4・5)}

- 1) 九州大学地球社会統合科学府（現・福岡県教育委員会）
- 2) 九州大学地球社会統合科学府（現・北海道庁教育委員会）
- 3) 九州大学総合研究博物館
- 4) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
- 5) 九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

福岡県大野城市瑞穂遺跡の第7・8次調査において弥生時代に所属する人骨が出土し、調査を担当した大野城市教育委員会より九州大学比較社会文化研究院に人骨調査の依頼があった。そのため、九州大学比較社会文化研究院基層構造講座関連の教職員及び大学院生が現地に赴き、人骨の調査・取り上げを行った。人骨は取り上げ後、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターへと搬送され、本センターにおいて整理・分析を行った。以下に結果を報告する。

分析にあたって、歯牙の咬耗度は枅原（1957）を用い、性判定には、頭蓋・骨盤について Buikstra and Ubelaker（1994）の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部第二解剖学教室編、1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。計測はMartin-Saller（1957）、馬場（1991）に従った。

なお、人骨資料は現在、九州大学比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

（1）人骨の出土状態（表1）

【K4号人骨】

甕棺内部から人骨がまとまって出土している。下甕南側から頭蓋片が出土している。頭頂骨・側頭骨は前頭部を南西、後頭部を北東にした状態で、その南西部に前頭部の頭蓋片が出土している。頭頂骨の南側から、右上顎が口蓋を上にし、顔面側を南西方向に向け出土している。この北側からは左頬骨が出土している。下顎は上顎の南からオトガイを西に向け出土し、その南からは右頬骨が出土している。また、左上腕は右上顎の西側より、遠位を北東に向けた状態で出土し、右上腕は頭蓋骨の下位から近位を南に遠位を北に向け出土している。その西側より右橈骨・尺骨が出土しているが、関節状態にはない。右肩甲骨が上腕の南側、頭蓋片に近接して出土している。右脛骨が右上腕骨の東側より、右上腕骨に一部重なりながら、遠位を南、近位を北に向け出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を南にし、上肢は肘関節を強屈した状態で埋葬されていたと考えられる。頭蓋は軟部組織腐朽後前方に転落し、下顎も若干動き、その後棺内に土砂が流入した際、頬骨・上顎骨が流されたものと考えられる。

【K 5号人骨】

合口甕棺の下甕から頭蓋片、上甕から下肢骨が出土している。頭蓋骨が大きく破損しており、甕棺内に土砂が流入していることから、土砂流入の際に壊れたものと考えられる。また、上甕からは左右の大腿骨が、どちらも近位を北東に、遠位を南西に向けた状態で出土している。保存状態が悪く、土砂が流入してはいるものの、頭蓋と大腿骨の位置関係は解剖学的位置関係を概ね保っていると言える。

以上の出土状況から、本個体は頭位が北東であったと考えられる。

【K 8号人骨】

合口甕棺から人骨が出土している。上甕中央よりやや東側から下顎と頭蓋骨の細片が出土し、下顎は咬合面を下にしている。その他にも頭蓋片が棺内に散乱した状態で出土している。合口部から下甕にかけて下肢骨が出土している。合口部付近より大腿骨が出土し、その西側より脛骨が出土したが、いずれも関節状態にはない。

以上の出土状況から、本個体の頭位は東であったと考えられる。人骨の残存状況がよくないため、詳細な埋葬姿勢は不明である。

【K 10号人骨】

合口甕棺から人骨が出土している。下甕中央から頭蓋片が散乱した状態で出土している。その西側の最も甕底部に近い位置より下顎骨が出土している。また、上甕中央部からは下肢骨が出土している。右大腿骨が遠位を東南、近位を北西に向けた状態で出土している。その下位より左大腿骨、右脛骨が出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位を西にし、下肢を膝関節で強屈した姿勢であったと考えられる。

【K 16号人骨】

合口甕棺の上甕から、頭蓋および上肢が出土している。頭蓋骨は上甕口縁部付近から、顔面を東側に、頭頂部を下にした状態で出土している。頭蓋南西付近から、オトガイを北東に、咬合面を上にした状態で下顎骨が出土している。右上腕骨は頭蓋南側から、近位を西に、遠位を東に向けた状態で出土している。その北側から、右橈骨・右尺骨が近位を東、遠位を西に向け、近位が右上腕の遠位部と接するように出土している。左上腕骨は頭蓋の北西から、近位を南西、遠位を北東に向けた状態で出土している。左右上腕骨はどちらもやや内転した状態である。このことから、解剖学的に正位の状態から、肘を屈曲させた状態で埋葬されたと推定される。左右上腕骨がやや内転しているのはこのためだと推定される。以上の出土状況、特に、左右上腕骨と下顎骨の出土位置から、頭蓋骨は大きく動いているものの、仰臥位であったと推定される。

合口甕棺の下甕からは下肢骨が出土している。右大腿骨は下甕中央部より遠位を北西、近位を南東に向けて出土しており、左大腿骨は右大腿骨遠位部に接するように、近位を南に、遠位を北に向けて出土している。右脛骨は右大腿骨東側のやや離れた位置から近位を北に、遠位を南に向けて出土しており、右距骨は右大腿骨の近位付近から出土する。左脛骨は近位を左大腿骨の遠位に接するように、遠位は南東を向いた状態で出土している。下肢はいずれも関節状態にはない。

以上の出土状況から、本個体は頭位を西にし、上肢は回内して強屈し、下肢は股・膝両関節を屈曲させた立て膝の状態で埋葬され、軟部組織の腐朽に伴い、両脚とも北側に倒れたものと推定される。右の膝関節がやや離れているのは、左側の下肢の上に乗った右脛骨が背面を上に向ける状態に転がったためであると考えられる。

【K 17 号人骨】

合口甕棺より人骨が出土している。下甕底部付近より右大腿骨が近位を北、遠位を南に向けた状態で出土し、その西側からは上腕骨が出土している。さらにその西側から左脛骨が近位を南、遠位を北に向けた状態で出土している。いずれの部位も関節状態にはない。また、脛骨北側から頭蓋片が出土している。下甕東側の合わせ部に近い場所からも頭蓋片が出土している。この東側に位置する頭蓋骨片と左脛骨片の間から細片化した骨片や人骨の痕跡が出土している。

以上の出土状況から、本個体の頭位は東であったと考えられる。斜位に挿入された甕棺であるため、上甕が下甕よりも高い標高に位置する。そのため、軟部組織腐朽により、上甕から下甕の底部に人骨全体が崩れ落ちたものと考えられる。

【K 19 号人骨】

合口甕棺の下甕から頭蓋骨片、上甕から下肢骨片がまとまって出土している。上甕底部付近より前頭骨が内面を上に向け出土し、その上から下顎骨が後面を上、オトガイを東に向けた状態で出土している。前頭骨の南側からは、後頭骨が内面を上にして出土している。

上甕中央部より左大腿骨が近位を北西、前面を上にして出土している。そのすぐ北側より、右大腿骨が遠位を北西、前面を横に向けた状態で出土している。左大腿骨の南西から脛骨片が出土している。人骨の保存状態は悪いが、甕棺の埋置角度はほぼ水平であるため、埋葬時の位置を保っていると推定される。

以上の出土状況から、本個体の頭位は南西であったと考えられる。

【K 21 号人骨】

合口甕棺の下甕から頭蓋骨片のみが出土している。崩落した甕棺の破片と頭蓋片のレベルが等しく、その下位から崩落土と思われる地山土が堆積している。したがって、本来の頭蓋の位置は下甕の底部近くであったが、甕棺の崩落によって甕片および流入土とともに胴部付近に移動した可能性が推定される。

以上の出土状況から、本個体の頭位は東と推定されるが、人骨の保存状態が良好でないため詳細な埋葬姿勢は不明である。

【K 22 号人骨】

合口甕棺の下甕の底部から胴部付近にかけて骨粉と小骨片が出土している。保存状態が良好でなく、詳細な埋葬姿勢は不明である。

【K 26 号人骨】

合口甕棺の下甕から頭蓋骨片・上肢骨片が、上甕から下肢骨が出土している。頭蓋骨片は下甕の底部付近から出土しており、頭蓋の西より頸椎片が出土している。下甕口縁部付近北寄りから左右不明上腕骨片が出土している。上甕胴部付近からは、左右大腿骨が近位を南に、遠位を北にして出土しており、右大腿骨の東側より右脛骨が右大腿骨と長軸を揃えて出土している。右大腿骨の下位から左脛骨と推定される長管骨が出土している。下肢骨は関節状態に関しては不明なものの、それぞれの位置関係は大きく乱れていないことから、本来は両膝を屈曲していたものが北側へ倒れた状態と考えられる。

以上の出土状況から、本個体の頭位は西であり、下肢を強屈した立て膝の状態で埋葬されていたと推定される。

【K 27 号人骨】

合口甕棺の下甕から人骨がまとまった状態で出土している。口縁部付近から不明長管骨が長軸を南北にした状態で出土している。下甕の底部付近から左右不明上腕骨・部位不明骨片が出土している。これらの人骨とともに下甕口縁部破片が出土しており、この破片の直下およびその付近から頭蓋骨片や歯牙片が出土している。下甕胴部付近からは下肢骨が出土している。北側から右脛骨が近位を北向きに遠位を南向きにして出土しており、右脛骨下位からは右大腿骨が後面を北西側に向けて長軸を南北にした状態で出土している。右大腿骨と右脛骨との関節状態は不明である。下甕の底部付近から左右不明上腕骨・部位不明骨片・下甕口縁部破片が出土している。

以上の人骨出土状況に加え、右脛骨直下から上甕口縁部片が出土し、右大腿骨直下からも甕棺片が出土しており、甕の崩落に伴い人骨が攪乱を受けていることが推定される。

以上の出土状況から、本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K 28 号人骨】

三連甕棺の下甕底部付近から頭蓋骨が、中甕から下肢骨が出土している。頭蓋骨は右側頭骨が外側を上に向け、鱗状縫合側を西に向けた状態で出土している。側頭骨北西側からは左右不明頭頂骨が外側を上にした状態で出土しており、その西側からは後頭骨が出土している。後頭骨の西側からは下顎骨がオトガイを西、咬合面を上に向けた状態で出土しており、下顎の歯牙の上位から頭蓋骨片が出土している。下顎の南側からは上顎の歯牙が歯根を北西に向けた状態で出土している。下甕口縁部付近から右大腿骨が後面を上に向け、近位を北西に向けた状態で出土しており、その北西側からは左大腿骨が長軸を南西から北東に揃え、近位を北東に向けた状態で出土しており、左右不明脛骨が長軸をほぼ南西から北東にした状態で出土している。下肢骨は関節状態を保っていないことから、軟部組織の腐朽後に土砂の流入による攪乱を受けたと考えられる。

以上のことから、本個体は三連甕棺の下甕側に、頭位を南東に向けた状態で埋葬されたと推定される。

【K 29 号人骨】

合口甕棺から人骨が出土している。下甕の4分の3（底部側）は近世の墓壇に切られている。下甕口縁部付近は残存しており、その上位から右脛骨が近位を北東、遠位を南西に向けて出土している。上甕の口縁部付近からは大腿骨片、左脛骨片、部位不明四肢骨が出土している。

以上の人骨出土状況から、近世の墓壇に切られており残存状態が悪く、本個体の埋葬姿勢は不明である。

【K 33 号人骨】

単棺の甕棺口縁側（南東）から頭蓋骨が、頭蓋骨の北西側から右上肢骨および右下肢骨が、頭蓋骨の南西側から左下肢骨および左上肢骨が出土している。頭蓋骨は、後頭骨が南東を向き、顔面が北西を向いている。右側頭部を上に向けた状態と推定される。また、頭蓋骨の西側より、椎骨の痕跡が北西に伸びるように出土している。上肢は、右橈骨・尺骨が椎骨の北側より出土しており近位が北東、遠位が南西を向いている。左前腕はその南西側より痕跡が出土する。下肢は、右橈骨・尺骨北側より右大腿骨が前面内側を上に向け、近位が西、遠位が東を向いて出土し、右寛骨下位に近位端が位置する。右脛骨は右大腿骨北側より出土し、近位が東、遠位が西を向き、前縁が斜め上を向いている。右腓骨は右脛骨の下位に位置し、近位が東、遠位が西を向いて出土している。左大腿骨は椎骨南側から、

後面が上を向き近位が北西、遠位が南東を向いて出土している。左寛骨は左大腿骨近位端の北東に位置する。左脛骨は左大腿骨南側より出土し、近位が南東、遠位が北西を向いている。

以上の出土状況、特に、左右とも大腿骨は寛骨とほぼ関節状態を保っていることと、大腿骨と脛骨の位置より、膝関節は遺存しないものの、本個体の下肢はほぼ埋葬時の状態であると推定される。また、前腕、大腿骨、脛骨の位置より、本個体は肘関節を曲げ、下肢を屈曲した埋葬姿勢であったと推定される。

【K 35 号人骨】

本人骨は合口甕棺の下甕から出土している。頭位は西で、頭部から甕棺に挿入されており、下肢の姿勢は不明である。頭蓋骨は下甕中央部から、顔面が上を向き、頭頂部が西を向いた状態で出土している。頭蓋骨の南東側より右肩甲骨・右上腕骨・右尺骨が出土している。上腕骨は近位を南西に向け、尺骨は遠位を南西に向けている。右肩甲骨北西側の肋骨の下位より下顎が出土している。左前腕骨と上腕骨の可能性のある骨が、頭蓋骨の北西に接して出土している。頭蓋骨と右上肢骨の間には肋骨片などの小片が散乱している。頭蓋骨の南西側にも肋骨片などが出土している。また、合わせ口部近くの下甕から、左大腿骨が遠位を北西、近位を南東に向けた状態で出土している。その下位より右下肢が出土している。上甕口縁付近より下肢骨の痕跡が出土している。

以上の出土状況より、本個体は西を頭位にして頭部から甕棺に挿入されており、右上肢の位置関係から、肘関節を屈曲した状態で埋葬されたものと推定される。頭蓋は、合わせ口方向にやや転がった状態で出土しているため、本来は下甕底部付近にあったものと推定される。下肢の詳細な埋葬状態については不明である。

【K 41 号人骨】

本人骨は合口甕棺の下甕から出土している。下甕合わせ口部近くより頭蓋骨片などが出土している。左大腿骨が下甕底部付近より遠位を北、近位を南に向けた状態で出土している。左大腿骨近位付近から左寛骨が近接して出土している。また、左大腿骨の東側から、右大腿骨が遠位を北西に向け、近位を南東に向けた状態で出土している。遠位は左大腿骨遠位側の下位に位置する。右大腿骨近位に接するように右寛骨が出土している。右大腿骨の東側より右脛骨が近位を北、遠位を南に向けて出土し、その上に右腓骨片が乗った状態で出土している。上肢の詳細な埋葬姿勢は、人骨の遺存状態が悪いため不明である。下肢は立て膝が北側へ倒れたか、あるいは屈した膝を北側へ倒した姿勢であったと考えられる。

以上の出土状況より、本個体は西を頭位にして脚部から甕棺に挿入されており、膝関節を屈曲した仰臥屈葬であったと推定される。

【K 46 号人骨】

合口甕棺より人骨が出土している。下甕底部側より頭蓋骨が出土しているが、遺存状態が悪く、向きなどの詳細は不明である。頭蓋骨の南側より歯牙3点が出土しており、その南側より大腿骨骨体部および歯牙2点が出土している。大腿骨骨体部は後面が頭蓋側を向いており、その下位から長管骨らしき痕跡が出土している。頭蓋骨の西側より部位不明骨の痕跡が出土しており、その西側より肋骨片が出土している。これらの人骨は全て下甕片の上位から出土している。甕棺は西側から東側へ挿入されており、西側挿入部の方がやや高いことと、大腿骨が下甕片の上位にのっていることから、本来上甕もしくは下甕口縁部付近に下肢が位置しており、土砂流入により下甕の頭蓋骨近くまで動かされた

と考えられる。

以上の出土状況より、本個体は頭位を東にし、膝関節を屈曲した埋葬姿勢であったと考えられる。

【5号石蓋土坑墓】

長方形の墓坑の東端より 30cm 南側から頭蓋片が出土している。以上の出土状況から、頭位は東であると推定されるが、人骨の保存状態が良好でないため詳細な埋葬姿勢は不明である。

【7号石蓋土坑墓】

方形の墓坑内の北側側壁付近から頭蓋骨のみが出土している。頭蓋冠は、顔面部を西に向けた状態で出土している。頭蓋冠の周辺から左側頭骨・左頬骨・歯牙が出土している。四肢骨が遺存していないため詳細な埋葬姿勢は不明であるが、本個体は頭蓋の位置から頭位を東側に取った埋葬状態であったと推定される。

（2）形質的特徴

出土人骨の性別や年齢については表 1 にまとめた。計測可能な個体及び項目が極めて少なく、顔面部について検討することができなかった。そのため、主成分分析などの比較分析は行わず、計測可能であった個体について詳述する（表 2, 3）。

【K 16 号人骨】

〔形質的特徴：表 2〕

本個体で計測可能だった部位は以下の通りである。

頭蓋最大長は 194mm、頭蓋最大幅 142mm である。頭蓋は、北部九州の弥生時代人男性の集団（頭蓋最大長：183.7mm（N=118）、頭蓋最大幅：142.4mm（N=117））と比べて頭蓋最大長がやや大きい。

大腿骨は、骨体中央部矢状径が右 31.07mm・左 29.94mm、骨体中央部横径が右 26.66mm・左 27.22mm、骨体中央断面示数（左大腿骨）は 109.99 であり、やや柱状性が高く縄文時代集団に近い値を示す。骨体中央周は右 95.00mm・左 92.00mm である。大腿骨は、北部九州の弥生時代男性の集団（骨体中央部矢状径（左）：29.7mm（N=162）、骨体中央部横径（左）：28mm（N=166）、骨体中央周（左）：90.8mm（N=161））と比べて骨体中央周がやや小さい。

右脛骨は、栄養孔位横径が 26.86mm、栄養孔位矢状径は 34.36mm である。脛示数は 78.17 で扁平性は低く広脛と言える。右脛骨は、北部九州の弥生時代男性の集団（栄養孔位横径（左）：25.3mm（N=153））と比べてやや小さい。右脛骨の中央横径は 25.04mm、中央最大矢状径は 26.85mm であり、中央横断面示数は 93.26 である。横径が広く、扁平性は低いといえる。

【K 28 号人骨】

〔形質的特徴：表 3〕

計測可能部位は大腿骨のみであった。大腿骨は、骨体中央部矢状径が右 25.54mm・左 25.56mm、骨体中央部横径が右 27.13mm・左 27.67mm、骨体中央断面示数（左大腿骨）は 92.37 であり、粗線の発達認められるが、柱状性は低く、幅広の扁平な形と言える。骨体中央周が右 83mm・左 88mm である。大腿骨は、北部九州の弥生時代人女性の集団（骨体中央部矢状径（左）：25.7mm（N=112）、骨体中央部横径（左）：26.3mm（N=112）、骨体中央周（左）：81.5mm（N=111））であり、中央周と比べると、太く頑丈な傾向を示す。

表 1 出土人骨と性別・年齢・埋葬姿勢一覧

墓番号	性別	年齢	埋葬姿勢	特記事項
K4号	男性	熟年	仰臥屈葬	
K5号	男性	不明	不明	
K8号	不明	成年	不明	
K10号	女性	成年	仰臥屈葬	
K16号	男性	熟年	仰臥屈葬	赤色顔料付着。下顎右側第一小臼歯歯槽部に腫瘍。大腿骨近位骨体内側の一部に円形の隆起がみられる。
K17号	女性	成年	不明	
K19号	男性	成年	不明	
K21号	不明	不明	不明	
K22号	不明	不明	不明	
K26号	男性	成人	仰臥屈葬	
K27号	不明	成年	不明	
K28号	女性	熟年	不明	下顎隆起あり。
K29号	不明	成人	不明	
K33号	男性	熟年	仰臥屈葬	赤色顔料付着。腓骨遠位内側側に肥厚あり。
K35号	男性	熟年	仰臥屈葬	
K41号	女性	成人	仰臥屈葬	
K46号	不明	成年	仰臥屈葬	
石蓋土壙5号	女性	熟年	不明	
石蓋土壙7号	女性	熟年	不明	赤色顔料付着。

【K 33 号人骨】

〔形質的特徴：表 2〕

計測可能部位は大腿骨、脛骨、右尺骨のみであった。

右尺骨は、尺骨矢状径が 14.10mm、尺骨横径が 16.33mm である。尺骨矢状径に関しては、弥生時代人の男性集団（尺骨矢状径（左）：13.2mm（N=100））より大きい値を示し、尺骨横径に関しては、弥生時代人の男性集団（尺骨横径（左）：17.6mm（N=100））より低い値を示す。矢状径が極めて大きい値を示すため、骨体断面示数は 86.34 で北部九州弥生時代人の男性集団の平均（75.4）よりはあるかに大きい。

大腿骨は、骨体中央部矢状径が右 32.41mm、骨体中央部横径が右 26.58mm で骨体中央断面示数は 121.93、骨体中央周が 98mm、骨体上横径が右 30.77mm・左 32.81mm、骨体上矢状径が右 31.96mm・左 29.8mm であり、やや柱状性が高く縄文時代人に近い値を示す。大腿骨は、弥生時代人の男性集団（骨体中央部矢状径（左）：29.7mm（N=162）、骨体中央部横径（左）：28mm（N=166）、骨体中央周（左）：90.8mm（N=161）、骨体上横径（左）：32.6mm（N=115）、骨体上矢状径（左）：26.2mm（N=115））と比べて、骨体中央部横径、骨体上横径がやや低い値を示す。

脛骨は、栄養孔位最大径が右 31.53mm・左 33.59mm、栄養孔横径が右 24.82mm・左 23.89mm、栄養孔周囲が 92mm である。脛示数は 78.71 であり、広脛と言える。脛骨は、弥生時代人の男性集団（栄養孔位最大径（左）：36.5（N=153）、栄養孔位横径（左）：25.3mm（N=153）、栄養孔位周（左）：96.9mm（N=151））と比べて栄養孔位最大径、栄養孔位横径、栄養孔位周の全ての値において低い値を示す。

【K 35 号人骨】

〔形質的特徴〕

計測可能部位は頭蓋のみであった。頭蓋は頭蓋最大長が 183mm である。頭蓋は、弥生時代人の男

性集団（頭蓋最大長：183.7mm（N=118））と同程度の値を示す。

【K 41 号人骨】

〔形質的特徴：表 3〕

計測可能部位は大腿骨と右脛骨のみであった。

大腿骨は、骨体中央部矢状径が右 25.53mm・左 25.64mm、骨体中央部横径が右 25.65mm・左 27.22mm、骨体中央周が右 81.00mm・左 82.00mm である。大腿骨は、弥生時代人女性の集団（骨体中央部矢状径（左）：25.7mm（N=112）、骨体中央部横径（左）：26.3mm（N=112）、骨体中央周（左）81.5mm（N=111））と比べると平均的な値を示す。左右大腿骨の骨体中央断面示数は 94.20 で、縄文時代人の女性集団の平均が 110.6、土井ヶ浜の女性集団が 102.8 であることから、柱状性は低いと言える。

右脛骨は、栄養孔位最大径が 30.31mm、栄養孔位横径は 20.87mm である。弥生時代人女性の集団（栄養孔位最大径（左）：30.8mm（N=97）、栄養孔位横径（左）：22.3mm（N=98））と比べると平均的な値を示す。脛示数は 68.86 で中脛であり、弥生時代人の平均よりも扁平性が強いと言える。

おわりに

人骨の出土状況および人骨そのものから得られた瑞穂遺跡第 7・8 次調査出土弥生集団の埋葬習俗・形質的特徴（表 1）は以下の通りである。

- ・甕棺および石蓋土坑墓に人骨が埋葬されており、埋葬姿勢は、甕棺出土人骨に関しては、肘関節を折り曲げ、膝関節を屈曲させたものと考えられる。石蓋土坑墓に関しては、詳細な埋葬姿勢は不明である。
- ・頭蓋が計測可能であった個体は K 16 号人骨と K 35 号人骨のみであった。K 16 号人骨は弥生時代人男性の集団と比較して、頭蓋最大長が大きく、K 35 号人骨は弥生時代人男性の集団平均と同程度の大きさである。
- ・男性の四肢骨（K 16 号人骨）は、弥生時代人男性の集団と比較して、大腿骨骨体中央周がやや大きく、脛骨は栄養孔位横径がやや小さい。
- ・女性の四肢骨（K 28、K 41 号人骨）の周径は、弥生時代人女性の集団と比較して高い値を示し頑丈な傾向をもつ。
- ・計測値および四肢骨の筋付着部の発達程度から、男女ともに四肢骨は頑丈な傾向を有する。

謝辞

人骨の取り上げおよび本報告を行うにあたり、大野城市教育委員会諸氏に多くのご配慮を賜りました。深謝いたします。また、本出土人骨のクリーニング作業に従事した九州大学比較社会文化府（当時）、岩橋由季、早川和賀子、中井歩、福永将大、藤井恵美、地球社会統合科学府（当時）の梶原慎司、Carlos Verrecchia、犬童淳一郎、Floencia Botta に感謝いたします。

参考文献

馬場悠男（1991）人体計測法 II 人骨計測法。人類学講座別巻 1，雄山閣出版。

Buikstra, J. E., and Ubelaker, D. H. (1994) Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.

岩橋由季・米元史織・高棕浩史・石田智子・李ハヤン・谷澤亜里・早川和賀子・舟橋京子・田中良之（2010）横隈
 狐塚遺跡7における出土人骨の分析．横隈狐塚遺跡群7，小都市文化財調査報告書第250集：202-243，小都市教
 育委員会．

九州大学医学部解剖学第二講座編（1988）日本民族・文化の生成2．九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料
 集成．六興出版．

坂田邦洋（1996）比較人類学．青山社．

Martin, R. and Saller, K. (1957) Lehrbuch der anthropologie. Fischer, Stuttgart.

中橋孝博・永井昌文（1989）弥生人の形質、男女差、寿命．弥生文化の研究1 弥生人とその環境，雄山閣：23-51．

栢原博（1957）日本人歯牙の咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31．

Ubelaker, D. H. (1989) Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation (2nd Edition).
 Washington, D. C. : Taraxacum.

表2 瑞穂遺跡出土人骨の計測値（男性）

	K16号		K33号		横隈狐塚 (弥生)		横隈狐塚Ⅱ ⁽¹⁾ (弥生)		北部九州 ⁽²⁾ (弥生)		山口 ⁽²⁾ (弥生)		隈西小田 ⁽³⁾ (弥生)		大友 ⁽⁴⁾ (弥生)		津雲 ⁽⁵⁾ (縄文)		九州 ⁽⁶⁾ (現代)		
	L	R	L	R	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
尺骨																					
1 最大長							1	244.00	12	253.2	26	258.5	10	257.6	9	249.6	19	249.1	62	236.2	
2 機能長					1	220.0	5	221.20	15	224.7	21	226.2	14	228.8	13	222.9	25	219.7	64	209.2	
3 最小周					4	40.3	13	36.23	63	37.4	35	38.2	26	38.3	22	37.2	34	37.7	65	35.8	
11 尺骨矢状径				14.1	8	13.4	17	13.12	100	13.2	49	13.2	43	13.5	26	15	50	14.3	63	12.8	
12 尺骨横径				16.3	8	18.0	18	17.22	100	17.6	49	17.2	44	17.5	26	17.2	50	16.3	64	16.5	
3/2 長厚示数					1	18.6	5	16.17	15	16.8	21	17.2	14	16.5	13	16.8	25	17.4	63	17	
11/12 骨体断面示数				86.3	8	74.8	17	76.46	100	75.4	49	77.2	43	75.9	26	88	50	88.5	63	74.9	
大腿骨																					
1 最大長					2	415.0	8	431.38	60	430.9	37	434.4	48	437.8	15	420.1	19	414.1	59	406.5	
2 自然位長					2	412.0	6	427.00	18	427.7	26	432.8	6	427.5	17	413.9	19	411	59	403.2	
6 骨体中央部矢状径	29.9	31.1		32.4	7	31.3	23	29.96	162	29.7	72	29.1	92	30.8	41	28.6	47	29	59	26.5	
7 骨体中央部横径	27.2	26.7		26.6	7	28.4	23	27.52	166	28	72	27.2	92	28.1	42	26.4	47	26	59	25.6	
8 骨体中央周	92.0	95.0		98.0	6	94.7	23	90.44	161	90.8	72	88.9	92	92.6	41	87	47	87.4	59	82.4	
9 骨体上横径				32.8	30.8	7	32.3	24	31.75	115	32.6	74	32.7	78	32.7	38	31.6	43	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径				29.8	32.0	7	28.1	24	26.29	115	26.2	74	26	78	26.8	38	25.2	43	25.5	59	24.3
8/2 長厚示数					302.4	2	22.5	6	21.97	18	21.4	26	20.5	6	22.5	16	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7 骨体中央断面示数	110.0	116.5		121.9	7	110.2	23	109.22	162	106.4	72	107.6	92	110.1	41	108.6	47	111.8	58	103.8	
10/9 上骨体断面示数			90.8	103.9	7	87.3	24	82.96	115	80.5	74	80	78	82.2	39	80.1	43	83.1	58	82.8	
脛骨																					
1 全長					1	350.0	6	336.83	27	345.6	19	350.5	17	349	10	345.3	20	340	61	320.3	
1a 最大長					1	367.0	9	345.44	52	350.5	21	356.9	28	355.3	11	354.8	22	343.6	60	326.9	
8 中央最大径		26.3		6	31.2	25	31.44	74	32	36	30.6	38	32.9	43	31	46	32.3	61	27.8		
8a 栄養孔位最大径			33.6	31.5	7	36.0	24	35.83	153	36.5	60	35.7	79	37.3	35	34.5	38	35.2	60	30.6	
9 中央横径		25.0		6	23.1	25	22.36	72	22.9	36	22.3	37	23.4	43	21.4	46	20.4	61	21.1		
9a 栄養孔位横径		26.9	23.9	24.8	7	26.0	24	24.33	153	25.3	59	25.1	80	25.5	36	23.3	38	22.2	61	23.7	
10 骨体周				6	83.8	25	85.04	74	86.5	36	83.6	35	88.2	41	83.4	45	84.5	62	78.4		
10a 栄養孔位周			92.0	7	97.3	24	95.04	151	96.9	58	95.5	78	97.9	34	92.6	38	92.8	61	88.9		
10b 最小周				5	79.2	27	76.41	122	78.4	63	75.4	67	78.9	38	75.6	41	76.7	60	71.3		
9/8 中央断面示数		95.4		6	74.3	25	71.37	74	72.2	36	73	37	71.5	43	69.1	46	63.3	61	76.1		
9a/8a 栄養孔断面示数		78.2	71.1	78.7	7	72.7	24	68.00	152	69.5	59	70.5	79	68.5	35	67.7	38	63	60	77.5	
10b/1 長厚示数				1	23.1	6	23.03	26	22.7	19	21.5	16	22.7	10	21.9	20	22.9	60	22.4		

1)松下(1985) 2)中橋・永井(1989) 3)中橋(1993) 4)松下(1981) 5)清野・平井(1928) 6)阿部(1955)・鏑鍋(1955)・専頭(1957)・溝口(1957)

表3 瑞穂遺跡出土人骨の計測値（女性）

	K28号		K41号		横隈狐塚 (弥生)		横隈狐塚Ⅱ ⁽¹⁾ (弥生)		北部九州 ⁽²⁾ (弥生)		山口 ⁽²⁾ (弥生)		隈西小田 ⁽³⁾ (弥生)		大友 ⁽⁴⁾ (弥生)		津雲 ⁽⁵⁾ (縄文)		九州 ⁽⁶⁾ (現代)		
	L	R	L	R	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	
大腿骨																					
1 最大長					4	408.3	2	388.0	34	405.5	30	403.9	17	413.4	5	386.8	22	388.2	13	380.1	
2 自然位長					3	410.3			11	403.0	26	399.5	5	403.6	4	378.3	22	381.7	13	375.9	
6 骨体中央部矢状径	25.6		25.5	25.6	25.5	6	26.3	20	26.0	112	25.7	50	25.5	44	25.9	30	25.5	45	25.2	13	23.6
7 骨体中央部横径	27.7		27.1	27.2	25.7	6	26.2	20	25.1	112	26.3	50	26.2	44	26.6	30	25.2	45	24.2	13	23.2
8 骨体中央周	88.0		83.0	82.0	81.0	6	81.3	20	80.0	111	81.5	50	80.9	43	82.2	29	80.4	45	78	13	74.2
9 骨体上横径					6	29.8	20	29.4	86	30.5	50	31	38	31.2	30	29.7	42	28.4	13	27.5	
10 骨体上矢状径					6	23.2	20	22.5	86	23.2	50	23	38	23.2	30	22.7	42	22.2	13	21.3	
8/2 長厚示数					2	20.6	20		11	20.8	26	20.2	5	20.7	4	20.3	21	20.3	13	19.8	
6/7 骨体中央断面示数			106.2	110.6	6	107.4	20	103.6	112	98.3	50	97.5	44	97.7	31	102.1	45	104.5	13	102	
10/9 上骨体断面示数					6	71.1	20	76.6	86	76.4	50	74.5	10	74.9	30	76.5	42	78.2	13	77.1	
脛骨																					
1 全長							3	315.0	20	324.3	20	326.8	9	332.2	3	313	17	319.8	14	301	
1a 最大長					1	342.0	4	319.3	30	329.3	23	331	13	333.3	4	324.8	17	324.4	14	306.6	
8 中央最大径					5	26.8	23	26.7	46	27.0	31	26.9	19	27.3	24	27.6	42	27.3	14	24.7	
8a 栄養孔位最大径					30.3	5	30.4	20	31.2	97	30.8	42	30.5	39	31.3	19	30.4	37	30.5	14	28.1
9 中央横径					5	20.4	23	19.9	46	20.4	31	19.1	19	20.7	26	19.7	42	17.9	14	18.8	
9a 栄養孔位横径					20.9	5	22.8	20	22.0	98	22.3	42	21.6	38	22.7	20	21.1	36	19.4	14	21.1
10 骨体周					4	73.8	23	73.7	46	74.5	30	72.6	19	75.4	23	75.3	42	73.4	14	70.1	
10a 栄養孔位周					5	83.6	20	83.8	96	83.2	42	82.2	38	84	18	81.6	35	81.3	14	78.2	
10b 最小周					5	67.2	18	66.2	82	68.6	44	67.5	31	69.1	24	68.3	35	67.6	14	63.6	
9/8 中央断面示数					5	76.6	23	74.8	46	75.7	31	71.1	19	76.2	23	72.1	42	65.8	14	76.3	
9a/8a 栄養孔断面示数					68.9	5	75.7	20	70.4	97	72.4	42	71.2	38	72.6	18	70.4	36	63.6	14	74.9
10b/1 長厚示数					1	19.8	3	21.5	20	21.3	20	20.3	9	21.1	3	21.4	17	21.1	14	21.2	

1)松下(1985) 2)中橋・永井(1989) 3)中橋(1993) 4)松下(1981) 5)清野・平井(1928) 6)阿部(1955)・鏑鍋(1955)・専頭(1957)・溝口(1957)

2. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴

米元史織^{1・2)}、足達悠紀³⁾・松尾樹志郎³⁾・植野律子³⁾・白 楊³⁾・
Stephen Nguyen Si Minh³⁾・出見優人³⁾・小高蒼大⁴⁾・田渕朱莉⁵⁾・
松村祐奈⁵⁾・舟橋京子^{2・6)}

- 1：九州大学総合研究博物館
2：九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
3：九州大学大学院地球社会統合科学府
4：九州大学共創学部
5：九州大学文学部考古学研究室
6：九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

福岡県大野城市瑞穂遺跡は2011-2012年度に大野城教育委員会によって発掘調査が行われ、近世・近代に属する人骨が多数出土した。そこで、同教育委員会から九州大学比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、九州大学比較社会文化研究院基層構造講座関連の教職員と大学院生が現地で調査・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に搬送され、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて、出土人骨の整理・分析が行われた。なお、人骨は現在、アジア埋蔵文化財研究センター・九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

出土総数は93体である。人骨の年齢推定は、恥骨結合面はTodd (1920)を、耳状面はLovejoy (1985)、咬耗は栃原 (1957)を用い、性判定には、骨盤はBuikstra and Ubelaker (1994)を基準に、恥骨下角の角度・大坐骨切痕の角度・前耳状溝の有無、またPhenice (1969)の腹側弧、恥骨下陷凹、恥骨下枝内側面隆起に基づいて判定を行った。頭蓋はBuikstra and Ubelaker (1994)を基準に、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起で判定を行った。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部解剖学第二講座編，1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上（詳細は不明）とする。

（1）出土状況

人骨の出土状況に関しては、頭位あるいは躯体正面、想定される棺の種類、改葬の有無、改葬部位に関して記述する。屈葬に関しては、体軸を示す指標として頭位を記述しているが、坐葬に関しては頭位ではなく躯体正面を記述している。坐葬は通常頭部を上にして座した状態であり、体軸は地面に対して垂直に近く頭位は上方を指向された埋葬姿勢である。一方で、江戸の発昌寺においては、出土人骨の骨盤により判断される身体の正面が、内部施設の「前」など正面を記した記号と一致していることや参道や墓地形成を探る手掛かりとなることが指摘されており（井汲1991）、骨盤の向きを報告する必要性が指摘されている（谷川2004）。したがって、本報告では先述の通り、坐葬で躯体正面が明らかな場合はこれを記述することとする。ただし、坐葬の場合でも、背面に倒れこみ仰臥のような状態の場合や正座して上半身がその上に倒れこんだような状態のように、体軸が水平に近い状態になっている場合には頭位も併せて記載するものとする。

葬法に関しては、遺体の周辺に空隙があったことが確実にわかるような、人骨の崩落がみられる場合には棺ありと断定し、人骨の出土範囲の形状から棺の存在が想定される場合には棺の種類に「？」を付している。加えて、墓の再開口を行っているものの改葬による収骨が認められない事例に関しては、改葬不明で再開口ありと記している。

紙幅の都合上本文中に詳述するのは一部の出土事例に留まる。全出土事例の個別情報に関しては表1に挙げる。

【7次 SX04 号】

（躯体正面：西向き、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬、改葬：無し）

甕棺内から人骨が出土している。最も北側中央より、頭蓋が顔面を下にし、頭頂部を北に向けた状態で出土している。上下顎は咬合した状態で出土している。頭蓋骨の南西側からは左上肢が、北東側からは右前腕が出土している。左上肢は上腕が近位を北、前腕が遠位を北にし、長軸を南北に揃えた状態で出土している。右前腕は近位を南東に遠位を北西に向けた状態で出土している。これらの上肢は概ね解剖学的位置関係を保っている。頭蓋西側からは左下肢が、東側からは右下肢が出土している。左右股関節・膝関節は関節状態を保っており、屈した状態である。

以上の出土状況から、本個体は正面西向きの坐葬であり、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が腹部付近に転落したと推定される。

なお本人骨の右大腿骨直下および左寛骨外側付近から漆器と銅銭が出土しており、これらは、遺体の左側腰部付近に置かれていたと推定される。

【7次 SX05 号】

（躯体正面：西向き？、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり）

甕内から散乱した状態で人骨が出土している。最上層からは左大腿骨、左上腕骨、左肩甲骨、椎骨肋骨などが甕全体に散乱した状態で出土している。左上腕および左橈骨は棺内南側の近接した位置から出土しているが、関節状態は保っていない。右上肢は、右橈骨が甕内北側、尺骨は甕内南側から出土しており関節状態を保っていない。距骨・踵骨・趾骨はまとまった状態で甕内西側から出土している。

以上の出土状況から、本個体は本来西側に足を置いて埋葬されていた可能性も考えられるが、それ以外の人骨に関してはいずれも関節状態を保っておらず散乱した状態である。加えて残存部位の遺存状態は良いものの頭蓋・長管骨・骨盤など遺存していない部位が多数見られることから、埋葬後完全に軟部組織が腐朽した段階で改葬により骨が持ち去られたと考えられる。

なお、棺底付近から、銭および複数本の煙管、指輪が出土している。

【7次 SX07 号】

（躯体正面：西向き、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬、改葬：無し）

甕内から人骨が出土している。甕内東側より、頭蓋が出土している。頭蓋は蓋石の崩落により原位置を保っていない。躯幹骨は胸椎および肋骨が頭蓋下から出土している。胸椎の南東側に接した位置からは腰椎が出土しており、下部胸椎から腰椎および仙骨がほぼ関節した状態で腹側を北西にした状態で出土している。躯幹骨の西側からは左右上肢が長軸をほぼ北西－南東にし、肩関節を北西、肘関節を南東にした状態で出土している。肘関節は左右ともにほぼ関節状態を保っている。

左右下肢は躯幹骨および上肢の下から出土している。左右寛骨は仙骨の南北から仙腸関節が関節した状態で出土している。自由下肢は、右下肢が北側、左下肢が南側から、股関節側を南東、膝関節

を北西にし、股関節・膝関節を強屈した状態で出土している。

以上の出土状況から本個体は頭位を東にとり躯体正面を西に向けた立膝坐葬であり、軟部組織の腐朽の過程で上半身が下肢上に倒れこんだと推定される。

【7次 SX16 号】

（頭位：北向き、葬法：長方形木棺？、埋葬姿勢：仰臥屈葬、改葬：無し）

墓坑内の最も北側から、頭蓋骨が顔面を下にし頭頂を西に向けた状態で出土している。上下顎は咬合状態である。頭蓋の東側 20 cm 程度離れた位置からは椎骨が数点南北に連なった状態で出土しており、その直上から前腕片及び肋骨片が出土している。頭蓋の直下南側からは右上腕骨が長軸を南北にした状態で出土している。右上腕骨の南側からは右前腕が、上腕骨とほぼ解剖学的位置関係を保った状態で出土している。右前腕は、長軸を北東－南西にし、やや回内して肘関節を軽屈した状態で出土している。

墓坑内南側からは下肢が出土している。左寛骨が墓坑内南東側から出土しており、寛骨の西側から右大腿骨および脛骨が概ね解剖学的位置関係を保ち、大腿骨の近位および脛骨の遠位を南にし、長軸を東西にし、股関節および膝関節を強屈した状態で出土している。膝関節は右側に倒した状態である。左脛骨の直下からは上述の右前腕が出土しており、さらに右前腕の下からは右下肢が長軸を南北にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭部を右側に倒し、上肢を軽く曲げ前腕を左右下肢の間におき、下肢を右側に倒した、頭位北向きの仰臥屈葬であったと推定される。

【7次 SX18 号】

（頭位：北向き、葬法：長方形木棺？、埋葬姿勢：右側臥屈葬、改葬：無し）

墓坑内の最も北側から、頭蓋骨が顔面を西やや上方にし、頭頂を北に向けた状態で出土している。頭蓋と下顎はほぼ解剖学的位置関係を保っている。頭蓋の直下南側からは左右上腕骨が長軸を東西にした状態で出土している。上腕骨近位部の南側からは椎骨が数点出土している。

墓坑内南側からは下肢が出土している。左寛骨が墓坑内南東側から、腹側を北西、外側を上にした状態で出土している。寛骨の西側からは左大腿骨および脛骨が概ね解剖学的位置関係を保ち、大腿骨の近位および脛骨の遠位を南東にし、長軸を北西－南東にし、股関節をやや屈し、膝関節を強屈した状態で出土している。左寛骨の北西側からは、右寛骨が腹側を上にし外側を北西にした状態で出土している。右寛骨とほぼ解剖学的位置関係を保ち右大腿骨が長軸を東西にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は頭位北向きの右側臥屈葬であったと推定される。

【7次 SX19 号】

（躯体正面：西、葬法：円形木棺、埋葬姿勢：坐葬、改葬：無し）

墓坑内の最も北側から、頭蓋骨が顔面を西やや下方にし、頭頂を北に向けた状態で出土している。頭蓋の南側からは胸椎が南北に連なった状態で出土している。椎骨の東西からは左右肋骨がほぼ解剖学的位置関係を保った状態で出土している。墓坑内南側からは腰椎が東西に連なって上面を東、腹側を上にした状態で出土している。これらの躯幹骨付近から、上肢が長軸を南北にした状態で出土している。腰椎の西側からは左右の寛骨がそれぞれ腹側を上、腸骨翼を東にし、ほぼ解剖学的位置関係を保った状態で出土している。頭蓋の西側からは右大腿骨が長軸を上下にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は躯体正面西向きの坐葬であったものが軟部組織の腐朽に伴い上半身

が下肢上に倒れこんだと推定される。

【7次 SX22 号】

(頭位：北向き、葬法：長方形木棺、埋葬姿勢：仰臥屈葬、改葬：無し?)

墓坑内の最も北側から、頭蓋骨が顔面を南西やや上方にし、頭頂を上に向けた状態で出土している。頭蓋の直下南側からは上腕骨が近位を北、長軸を南北にした状態で出土している。上腕骨遠位南側からは、前腕が長軸を南北にした状態で出土している。

墓坑内南側からは下肢が出土している。墓坑内南東側からは寛骨片が出土している。この寛骨片と接した状態で西側から大腿骨および脛骨が出土している。寛骨の北西側からは、右大腿骨・脛骨が近位を南東と北西、長軸を北西―南東にした状態で出土している。右大腿骨の近位直上から左大腿骨が近位を東、遠位を西にした状態で出土している。左大腿骨の南側からは左脛骨が近位を西にし、大腿骨と長軸を揃えた状態で出土している。寛骨・左右大腿骨はほぼ解剖学的位置関係を保っており、股関節・膝関節を強屈した状態である。

以上の出土状況から、本個体は頭位北向きで膝を右側に倒した仰臥屈葬であったと推定される。加えて、本来上腕骨の北側から出土すべき頭蓋が上腕近位上から出土している。頭部側の墓坑壁までは 15 cm～20 cm 程度離れており、墓坑壁に上半身を立てかけていたとは考えられない。したがって、本来は遺体を埋葬した棺が存在しており、頭から頸部は棺の小口側に押し付けられやや立ち上がった状態であったものが、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が肩口付近にやや落下したと考えられる。

【7次 SX37 号】

(頭位：北向き、葬法：長方形木棺?、埋葬姿勢：仰臥屈葬、改葬：無し)

墓坑内の最も北側から、頭蓋骨が顔面を南にし左側頭部を上に向けた状態で出土している。頭蓋の東から南東にかけて椎骨の痕跡が遺存している。

これらの椎骨の痕跡の西側からは左右上腕骨がほぼ上下に重なった状態で、近位を北にし長軸を南北に揃えた状態で出土している。上腕骨の遠位西側および南側からはそれぞれ右と左の前腕が上腕骨とほぼ解剖学的位置関係を保った状態で出土している。左右前腕は、長軸を東西にし、回内して肘関節を屈し、手を腹部付近に置いた状態で出土している。右手の指骨が後述の左膝関節下位から出土している。

墓坑内南西側からは下肢が出土している。最も南東からは左右寛骨および仙骨が関節状態を保ち、腹側を上方やや西に向けて出土している。これらの左右寛骨と関節し、股関節を強屈した状態で左右大腿骨が遠位を北西に向けて出土している。左大腿骨直上及び西側からは左右下腿が、大腿骨とほぼ関節状態を保ち、長軸を南北にし、膝関節を強屈し右側に倒した状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は上半身を腰部でややねじり右側臥にし、上肢を屈し手を腹部付近に置き、下肢の股関節と膝関節を強屈し膝を右側に倒した、頭位北向きのやや右側臥に近い仰臥屈葬であったと推定される。

本個体の膝付近から銅銭および鉄製品が出土している。頭蓋の西側からも鉄製品が出土している。銅銭は手元付近に置かれていたと推定される。左下腿直上からは土師器皿も出土している。

【7次 SX38 号】

(頭位：南西向き、躯体正面：北東、葬法：方形木棺、埋葬姿勢：胡座坐葬、改葬：無し)

本個体は弥生時代の合口甕棺墓の下甕中に掘りこまれた墓坑内から出土している。最も南西側の合

口付近に落ち込んだ状態で、頭蓋骨が出土している。頭蓋の北東側から南西―北東に連なった状態で下部胸椎・腰椎・仙骨が腹側を上にし、上面を南西にした状態で出土している。椎骨の南北からはそれぞれ左右肋骨が一部遺存している。

これらの椎骨の南北からはそれぞれ右と左の上肢が出土している。右上肢は、最も南西側から右肩甲骨が出土し、右肩甲骨の北東側に接した位置から右上腕骨が近位を北西にし長軸を南西―北東にした状態で出土している。右上腕の遠位北側からは右前腕が長軸を北西―南東に揃えた状態で右大腿骨直上から出土している。左上肢は椎骨の北西側から左上腕骨遠位付近片が遺存しており、その北東側から左前腕が上腕とほぼ関節し肘関節をやや屈し回内した状態で長軸を東西に揃えて出土している。左手根骨および指骨は左前腕の遠位付近の左寛骨直上から出土している。

墓坑内北東側からは下肢が出土している。最も北東からは左右寛骨および仙骨が関節状態を保ち、腹側を上に向けて出土している。これらの左右寛骨と関節し、股関節を強屈した状態で左右大腿骨が遠位を南西に向けて出土している。左大腿骨内側からは左右脛骨・腓骨が、大腿骨とほぼ関節状態を保ち、膝関節を強屈した状態で出土している。下腿部は足首付近で、右下腿を上にして左右を交差した状態である。左右脛骨・腓骨の北東側からは左右距骨・踵骨以下の骨がほぼ関節状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は左上肢を腹部付近に置き右上肢を下肢外側に回し、下肢を強屈した、躯体正面北東向きの胡座坐葬であったものが、棺の腐朽に伴い、上半身が後方、即ち弥生時代の上甕側の空間に倒れこんだため、出土状況としては仰臥に近い姿勢になったと推定される。

本個体に伴い足元付近から銅銭が出土している。

【7次 SX63 号】

(頭位：北東向き、葬法：長方形木棺？、埋葬姿勢：仰臥屈葬、改葬：無し)

墓坑内の最も北東側から、頭蓋骨が顔面を南西にし、頭頂を上に向けた状態で出土している。頭蓋と下顎はほぼ解剖学的位置関係を保っている。頭蓋骨直下から南西方向に向けて椎骨の痕跡が認められる。上肢は頭蓋骨の南西側の南北から左と右の上肢が、それぞれほぼ解剖学的位置関係を保った状態で出土している。頭蓋骨の北西側から右鎖骨・肩甲骨および上腕・前腕が出土している。右上腕骨および前腕は長軸を北西・南東に揃え、肘関節を強屈し上腕骨直上に前腕がのった状態で出土している。左上肢は頭蓋骨の南東側から、左鎖骨・肩甲骨および上腕・前腕が出土している。上腕骨は近位を北東、長軸を北東―南西にした状態で出土している。左上腕骨の遠位側からは左前腕が、肘関節を屈し長軸を南北にした状態で出土している。

墓坑内南西側からは下肢が出土している。左寛骨が墓坑内南東側から、腹側を上方やや北西に向けた状態で出土している。寛骨の北西側からは左大腿骨および脛骨が概ね解剖学的位置関係を保ち、大腿骨の近位および脛骨の遠位を南にし、長軸を南北にし股関節を屈し、膝関節を強屈して右側に倒した状態で出土している。左寛骨の北西側からは、右寛骨が腹側を上にし外側を北西にした状態で出土している。右寛骨とほぼ解剖学的位置関係を保ち、右大腿骨が長軸を東西にし股関節をやや屈した状態で出土している。右大腿骨の北西側からは右脛骨および腓骨が、長軸を北西―南東にし、右大腿骨と解剖学的位置関係を保ち、膝関節を強屈した状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は上肢を胸部付近に置き、股関節を屈し、膝関節を強屈し膝を右に倒した頭位北東向きの仰臥屈葬であったと推定される。

【7 次 SX68 号】

(頭位：北向き、葬法：長方形木棺？、埋葬姿勢：仰臥屈葬、改葬：無し)

墓坑内の最も北側から、頭蓋骨が顔面を西、頭頂を北に向けた状態で出土している。上下顎は咬合状態を保っている。頭蓋の直下南側からは椎骨が南北に連なった状態で出土している。椎骨の東西からは肋骨片が出土している。肋骨のさらに東西外側からは左右上肢が出土している。椎骨東側の肋骨直上からは左上腕骨が近位を北にし長軸を南北にした状態で出土している。椎骨の西側からは右上肢が解剖学的位置関係を保って出土している。右上腕骨は近位を北にし長軸を南北にした状態で出土している。右上腕の遠位側からは右前腕が長軸を北西－南東にし、肘関節を屈した状態で出土している。

墓坑内南側からは下肢が出土している。墓坑中央付近からは左右寛骨が腹側を上にした状態で出土している。左右寛骨の南西側からは左右大腿骨および脛骨が概ね解剖学的位置関係を保ち、股関節をやや屈し、膝関節を強屈して右に倒した状態で出土している。大腿骨は近位を北東、長軸を北西－南東にし、左大腿骨の南側から左右下腿が近位を西、長軸を東西にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は上半身をやや右側臥気味にし、股関節を軽屈し、膝関節を強屈して膝を右に倒した、頭位北向きの仰臥屈葬であったと推定される。

【7 次 SX80 号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内の底部付近から人骨が散乱状態で出土している。椎骨・肋骨・尺骨・趾骨など様々な部位の骨が混在した状態である。頭蓋・四肢・骨盤の大部分が甕内から検出されず、甕内から出土した部位に関しても解剖学的位置関係を保っている部位は全く見られないことから、本個体は軟部組織が完全に腐朽した後に改葬を受け大部分の骨が持ち去られたと推定される。

骨に混ざって木片も出土している。

【8 次 仮 A (帰属不明)】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から人骨が散乱した状態で出土している。元も高い位置から恥骨片が出土している。甕内南側から頭蓋・左寛骨が出土している。甕内中央付近から左右大腿骨・脛骨が近位を東向きにし、長軸を東西に揃えた状態で出土している。これらの下肢の下からは、左前腕が近位を東西、長軸を東西にして出土している。これらの前腕のさらに下からは、距骨・踵骨・足根骨が出土している。甕内北側からは椎骨・右寛骨・右上腕骨が出土している。椎骨は一部連なった状態を保っている。甕内東側の底部付近からは仙骨が正面を西にした状態で出土している。

甕内から、左上腕・右前腕を除くほぼ全身の骨が出土しているが、解剖学的位置関係を保っている部位は椎骨を除いて見られず、恥骨片が最上位から出土することから、本個体は軟部組織がかなり腐朽した後に改葬を受けたと推定される。

骨に混ざって木片も出土している。

【8 次 SX83 号】

(躯体正面：西、葬法：方形木棺、埋葬姿勢：胡座坐葬、改葬：あり)

墓坑内の最も南東側から、軀幹骨および左右寛骨が出土している。これらの軀幹骨の北側と西側から付近からそれぞれ右上肢および左上肢が出土している。右上腕骨は近位を北西、遠位を南東にした状態で出土している。右上腕骨の遠位側から、右前腕が右上腕骨と関節状態を保ち、近位を北東、遠

位を南西にした状態で出土している。左上肢は、長軸を南北にし、上腕骨の近位および前腕の遠位を北に向け、解剖学的位置関係を保った状態で出土している。墓坑内西側からは下肢骨が出土している。墓坑内南西側から左下肢が、北西側からは右下肢が出土している。左右下肢はいずれも股関節がそれぞれ左右の前腕直下に位置しており、左右股関節・膝関節を屈曲し、膝関節を上方にし足首関節側を下方にした状態で出土している。左右下腿部は左下腿を前方にし、足首付近で交差した状態である。右下肢直上からは下顎骨が出土している。

以上の出土状況から、本個体は、上肢を肘関節で屈し手を腹部付近におき、膝関節を屈曲し左右の足を交差させた、躯体正面西向きの胡座坐葬であったものが軟部組織の腐朽に伴い上半身が前方に倒れこんだと推定される。加えて、頭蓋のみ遺存していないことから改葬により持ち去られたと推定される。

【8次SX87号】

（頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり）

甕内から人骨が散乱した状態で出土している。甕内中央付近には蓋石が落ち込んでおり、蓋石の上面からは左大腿骨・左上腕骨が長軸を南北にした状態で出土している。蓋石東側からは左右寛骨および仙骨が出土している。蓋石下位の南側からは、下顎骨・腰椎・肩甲骨片・左橈骨・腓骨片などが散乱した状態で出土している。棺底付近からは、膝蓋骨・足根骨・趾骨が出土している。

本個体は、解剖学的位置関係を保っている部位が見られず、長管骨や頭蓋骨など主要部位も一部しか出土していないことから、軟部組織が腐朽したのちに改葬を受けたと推定される。

頭蓋底付近からは銅銭が出土している。

【8次SX88号】

（頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり）

甕内から人骨が散乱した状態で出土している。甕内東北部より上腕骨が出土している。甕内南側からは頭蓋片や脛骨片・腓骨片・距骨が出土し、甕内西側からは寛骨片が出土している。

本個体は、解剖学的位置関係を保っている部位が見られず、長管骨や頭蓋骨など主要部位も一部しか出土していないことから、本個体は軟部組織が腐朽したのちに改葬を受けたと推定される。

頭蓋底付近からは銅銭が出土している。

【8次SX89号】

（頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり）

甕内から人骨が散乱した状態で出土している。甕内南側の最も高い位置から右寛骨が出土している。甕内中央付近からは長管骨が長軸を南北軸にし、まとまった状態で出土している。これらの長管骨の周辺からは胸骨・椎骨・鎖骨などが散乱した状態で出土している。甕中央東側の棺底付近からは左寛骨が出土している。

本個体は、解剖学的位置関係を保っている部位が見られず、長管骨や頭蓋骨など主要部位が殆ど出土していないことから、本個体は軟部組織が腐朽したのちに改葬を受けたと推定される。

頭蓋底付近からは銅銭が出土している。

【8次SX92号】

（躯体正面：北西、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり）

甕内東側から椎骨が、その下位から仙骨が出土している。仙骨の南側からは左寛骨が仙骨とほぼ関

節状態を保って出土している。仙骨の北側からは右寛骨片が出土している。右寛骨の西側からは、橈骨片・左尺骨・下顎片が出土している。左尺骨の直下からは右距骨と踵骨が関節状態で出土している。これらの距骨・踵骨の東側からは腓骨遠位部が出土しており、西側からは趾骨が出土している。甕内西側からは肋骨・橈骨片・指骨が出土している。

本個体は、下肢骨や頭蓋骨など主要部位が殆ど出土していないものの、左仙腸関節や右距骨・踵骨など一部関節した状態も見られることから、本来躯体正面を北西に向けて坐葬で埋葬されていたものが、軟部組織が一部腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

【8次SX94号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：早桶？、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

円形の墓坑内南側から、頭蓋骨・長管骨片が長軸を揃えまとまった状態で出土している。

本個体は、下肢骨や頭蓋骨など主要部位が一部破片で遺存しているのみであり関節状態を保っている骨も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

【8次SX96号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内底部付近から、人骨が出土している。甕内東側からは左寛骨片・肋骨片が出土しており、甕内西側からは前腕および腓骨が散乱した状態で出土している。

本個体は、主要な長管骨や頭蓋骨・骨盤の一部などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

【8次SX102号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：方形木棺？、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

墓坑内底部付近から、人骨が出土している。より上層からは頭蓋片・長管骨片が墓坑全体に散乱した状態で出土している。下層からは、北側から頭蓋片・歯牙が出土し、南側からは長管骨片が出土している。

本個体は、長管片や頭蓋骨片など小片が出土しているのみであり、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

墓坑底付近からは、銅製の指輪が出土している。

【8次SX107号】

(躯体正面：西向き、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬、改葬：？、再開口：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内中央より、頭蓋が顔面を下方やや南、頭頂部を西側にした状態で出土している。頭蓋の東側からは躯幹骨がまとまった状態で出土している。第1頸椎から第3頸椎は大後頭孔に関節した状態で出土しており、頭蓋の直下からは第4頸椎以下の頸椎が関節した状態で出土している。

頭蓋の南北からは、左と右の上肢がそれぞれ出土している。右上腕骨は遠位を北西、近位を南東にした状態で出土しており、近位東側からは右前腕が長軸を東西にし、近位を西に向けた状態で出土している。頭蓋骨の南側からは左上腕骨が近位を上にした状態で出土している。左上腕骨の西側からは左前腕が遠位を上にして立った状態で出土している。頭蓋骨の北側からは仙骨及び左右寛骨が出土している。仙腸関節は関節状態を保っていない。

頭蓋骨の南西側からは下肢が出土している。左大腿骨は近位を北西下方、遠位を南東にし、後面を

上にした状態で出土している。左大腿骨の遠位南東側からは左脛骨が近位を上にしてほぼ立った状態で出土している。左大腿骨の西側からは、右大腿骨が遠位を上にし、脛骨が近位を上にし、膝関節が関節した状態で出土している。

以上の出土状況から本個体は頭位を東にとり躯体正面を西に向けた立膝坐葬であり、軟部組織の腐朽の過程で頭蓋が腹部付近落下したと推定される。ただし、仙腸関節・股関節は解剖学的位置関係を保っていない。一方で左右肘関節および右膝関節も関節状態を保っていないものの解剖学的位置関係から大きく乱れてはいない。したがって、本個体はそれ程軟部組織の腐朽が進んでいない段階で再開口され、遺体が乱されているもののほとんど人骨は持ち去られていないと推定される。

【8次 SX127号】

(頭位：北、躯体正面：北、葬法：方形木棺？、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：なし)

墓坑内底部付近から、人骨が出土している。墓坑内北側からは顔面が南、右側頭部を上にした状態で出土している。上下顎はほぼ関節状態を保っている。頭蓋骨西側からは椎骨および上肢帯の痕跡が認められる。頭蓋の南側からは下肢骨が出土している。最も東側からは、右下肢が股関節を南、膝関節を北側にし、大腿骨が脛骨直下から出土している。右膝関節は強屈した状態である。右下肢の西側からは左下肢が出土している。最も西側から大腿骨が、近位を南、遠位を北にし内側を上にした状態で出土している。大腿骨の東側からは左脛骨が近位を北、遠位を南にし、後面を上にした状態で出土している。左下肢中央付近からは左前腕が長軸を東西にし、近位を西にした状態で出土している。

以上の出土状況から、本個体は躯体正面を北に向け、手を下肢上においた正座のような状態で、上半身が下肢上に倒れこんだ坐葬であると推定される。

【8次 SX158号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から骨が出土している。甕内東側からは椎骨・肋骨および左上腕骨が散乱した状態で出土している。西側からは、右上腕骨・右前腕・左脛骨などが散乱した状態で出土している。

本個体は、主要な長管骨や頭蓋骨・骨盤などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

本個体に伴い、甕内東側の左上腕骨付近から銅銭が出土している。

【8次 SX161号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から散乱した状態で人骨が出土している。甕内最上位のレベルからは上腕骨・前腕を主とする長管骨が出土している。甕内北東から中央にかけて右上肢が、甕内南西側からは左上肢が出土しているものの、いずれも関節状態は保っていない。右上腕の直上からは胸骨が出土している。甕内北東側からは左脛骨と腓骨が甕の内壁によりかかった状態で出土している。

本個体は、下肢など主要な長管骨や頭蓋骨・骨盤などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

本個体に伴い、甕内最上位から櫛が出土しており、最下層からは数珠玉およびかんざし様の金属製品が出土している。

【8次 SX166号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内南側からは椎骨・肋骨・仙骨・左寛骨および右上腕骨・左前腕などがまとまって出土している。仙骨下位からは軸椎および腰椎が出土している。甕内北側からは右寛骨片・左脛骨・趾骨が出土しており、より下位から環椎・右距骨などが出土している。

本個体は、主要な長管骨や頭蓋骨などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

【8次 SX169 号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内西側からは左上腕骨・右橈骨がやや長軸を南北に揃えた状態で出土しており、上腕骨の北側からは肋骨・椎骨および左橈骨が出土している。これら人骨の下位の位置からは距骨・踵骨が出土している。甕内東側からは肋骨・椎骨・胸骨および指骨などが散乱した状態で出土している。

本個体は、主要な長管骨や頭蓋骨・骨盤などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

本個体に伴い、左橈骨および肋骨の下位から煙管が出土している。

【8次 SX174 号】

(躯体正面：南西向き、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬、改葬：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内西側の上位の位置より、下肢骨がまとまった状態で出土しており、東側からは上腕骨・右鎖骨・骨盤片などが出土している。下肢骨は長軸を南北に揃えた状態であり、左右大腿骨が遠位を南上方に向け、左右脛骨が近位を南上方に向けた状態で出土している。下肢骨の下位の甕底部付近からは頭蓋骨が、顔面を南東にむけた状態で出土している。頭蓋の南東側からは下顎骨が出土しており、その下位からは椎骨・肋骨および肩甲骨が出土している。頭蓋の北西からは左前腕および右橈骨が出土している。左前腕の長軸は南北に揃ってはいるものの、橈骨は遠位が南、尺骨は近位が南を向いており、解剖学的位置関係を保っていない。

以上の出土状況から本個体は躯体正面を南西に向けた立膝坐葬であったと推定される。ただし、左右膝関節は解剖学的位置関係から大きく乱れてはいないものの、それ以外の部位に関してはほとんどの部位が解剖学的位置関係を保っていない。したがって、本個体はある程度軟部組織の腐朽が進んだ段階で再開口され、仙骨のみ取り去られたと推定される。

【8次 SX176 号】

(躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬、改葬：？、再開口：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内南東側の最も上位の位置より、左右寛骨と仙骨が出土している。これらの仙骨及び寛骨はいずれも背側を上にして出土しており、左右の仙腸関節は厳密には関節状態を保っていないが、仙骨の右耳状面と右寛骨の耳状面が近接した位置にある。右寛骨の西側からは右大腿骨が近位を上にし遠位が右寛骨の下に潜り込む形でほぼ立った状態で出土している。同じく右寛骨の直下北西側からは左大腿骨が、近位を南東、遠位を北西に向けた状態で出土している。

左寛骨直下の左大腿骨の北東側からは左前腕が長軸を南北に揃え近位を北にした状態で出土している。これらの左前腕近位直下からは、頭蓋骨が顔面を南、頭頂部を西に向けた状態で出土している。頭蓋の東側の近接した位置から下顎骨が出土しているが顎関節は関節状態を保っていない。下顎の内側からは環椎および軸椎が出土している。左寛骨の東側からは左右の上腕骨がほぼ長軸を北西－南東

にし、近位を互い違いにした状態で出土している。また、上腕骨の周辺からは肋骨・椎骨が多数出土している。

上記の人骨の下位からは、左脛骨・腓骨および右脛骨が出土している。左脛骨・腓骨は近位を北西にし、遠位を南東にした状態で出土している。さらに、右脛骨が遠位を左下腿部の遠位と交差させる形で近位を東側、遠位を西にして出土している。

以上の出土状況から本個体は躯体正面を北西に向けた坐葬であったと推定される。ただし、各部位は比較的まとまって出土しているものの、ほとんどの部位が解剖学的位置関係を保っていない。したがって、本個体はある程度軟部組織の腐朽が進んだ段階で再開口され、遺体が乱されているもののほとんど人骨は持ち去られていないと推定される。

本人骨に伴い、骨盤の下から銅銭が出土し、頭蓋下から毛髪および布片が出土している。

【8次 SX178号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内底部付近から散乱した状態で人骨が出土している。甕内北東側からは椎骨・肋骨片および前腕や寛骨片、膝蓋骨が出土している。甕内南西側からは腓骨・距骨・肋骨片が出土している

本個体は、主要な長管骨や頭蓋骨・骨盤などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

本個体に伴い、甕内北東側の尺骨下位から金属片が出土している。

【8次 SX179号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内北西側から、椎骨・肋骨片および左右の上肢・下肢が長軸を東西に揃えた状態で出土している。甕内南東側からは腓骨が長軸を北東―南西にした状態で出土している。

本個体は、頭蓋骨・骨盤などが出土しておらず、関節状態を保っている部位も見られないことから、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受けたと推定される。

本個体に伴い、甕内底部付近から腕・ガラス製の瓶・金属製の指輪および金属製品が出土している。

【8次 SX180号】

(頭位：不明、躯体正面：不明、葬法：甕棺、埋葬姿勢：坐葬？、改葬：あり)

甕内から人骨が出土している。甕内南東側からは左右上腕骨・左右橈骨・左右大腿骨などが出土している。甕内北西側からは下顎骨・肋骨・椎骨・左寛骨・左右尺骨が出土している。これら人骨の下位の位置からは肋骨・胸椎・腰椎・右肩甲骨・左脛骨・左腓骨などが出土している。左脛骨は甕内南東側から、長軸を北東―南西にし、近位を南西に向けた状態である。

本個体は、頭蓋骨・仙骨・右寛骨が出土しておらず、かつ主要な長管骨も一部欠いている。加えて、上層から左寛骨が出土しており、関節状態を保っている部位も見られないことから、本個体は、軟部組織が腐朽した段階で改葬を受け、一部人骨が持ち去られたと推定される。

本個体に伴い、甕内最下層から銭・銅製品・櫛が出土している。

【出土状況の全体的傾向】

本遺跡においては、坐葬・仰臥屈葬・側臥屈葬が認められる。

明らかな屈葬（27例）に関しては、24例が頭位を北東から北西に向けており、例外として西頭位

が2例（SX41、SX50）と南頭位が1例（SX95）見られる。加えて、右側臥屈葬のみならず、仰臥屈葬の場合でも膝を右側に倒し、頭部も右側を下にし、頭部或いは上半身を西に向け右側臥を指向したような事例が大半である（cf. 西新開遺跡（大川市教委 1997）など）。これに対し、下肢を左に倒した事例は、例外的な頭位をとる2例（SX41、SX50）と主要な頭位である北頭位の1例（SX154）のみである。また、下肢の埋葬姿勢のみに着目すると、膝関節は屈しているないしは強屈している事例のみであるが、股関節に関しては近世墓に典型的な股関節を強屈した事例が多くみられる一方で、股関節を強屈せずやや軽屈させた状態の事例（SX18、SX63、SX68）もみられる。

坐葬の躯体正面に関しては北4体、北東1体、東2体、南東2体、南1体、南西2体、西8体、北西2体と、基本的に北から西を主としているようである。ただし、それ以外の方位も見られることから、先行研究に見られる墓地の経営の様相などと関連する可能性も検討する必要がある。

本遺跡では、改葬に伴い軟部組織の腐朽がある程度進んだ段階で収骨を行った痕跡が多く認められる。一方で、墓を再開口、遺体を乱しているにもかかわらず収骨を行っていない事例も2例（SX107、176）認められる。後者に関しては箱崎キャンパス内遺跡（未報告）においても類例が認められる。類例の増加を待って行為の意味付けについて言及を行う必要がある。

（2）形質的特徴

瑞穂遺跡出土人骨の各計測項目の基礎統計量は表2・3に示す。近世江戸時代に関しては鈴木尚（1985a, b）以来、大名家や将軍などを中心に研究が進められてきた。近年、大名・将軍家の形質的検討が追加された（馬場・坂上 2012）だけでなく、さらに庶民層と中流程度の武士層の形質が明らかにされるなど江戸市中にみられる階層と形質の関連を探る研究が進められている（Sakaue 2012）。しかし、江戸市中を主な対象として研究が行なわれているため、近世の形質の地域性に関しては未検討な部分が多い。以下、本遺跡出土人骨の平均値と比較群との比較を行っていく。

頭蓋骨

【男性（表2）】

頭蓋最大長は、182.5mmと天福寺出土人骨と同程度の値を示し、比較群中において中間的な値を示す。頭蓋最大幅は141.5mmで武士階層の牧野家や稲荷谷出土人骨と近似し、Ba-Br高は133.0mmと比較群中では相対的に値が小さい。頭長幅示数（77.5）、頭長高示数（73.5）、頭幅高示数（96.4）を示しいずれも中頭であり、脳頭蓋の形態は古野・原口と同様な傾向を示す。

頬骨弓幅は126.0mm、比較群中において最小の値を示し、中顔幅は99.3mmと比較群中において中程度であり、上顔高は65.6mmと最も低い値を示す。コルマン上顔示数（54.8）は中上顔を示し、ウィルヒョウ上顔示数（67.0）は低上顔を示す。古野・原口に関しては上顔高の値が欠損しているため比較することはできないが、ウィルヒョウ上顔示数は比較群中最小の値を示し、顔高は低い傾向を示すと言える。

眼窩は、眼窩幅が40.3、眼窩高が31.5とやや広いため、眼窩示数（77.2）の中眼窩であり、高眼窩を示す古野や原口とは異なる。

鼻型は、鼻幅24.8、鼻高が49.8で鼻示数は41.3と狭鼻であり、開善寺・将軍家と近く、原口とは傾向を異にする。

以上、個体数が少ない計測項目も多いが、男性の顔面頭蓋の形質的特徴を概観すると、脳頭蓋のシェイプは古野遺跡や原口遺跡と大差なく、サイズはやや大きめ、顔面形態は低顔で眼窩もやや低めであるが鼻型は細長いという特徴をしめす。

【女性（表 3）】

頭蓋最大長 177.0mm・頭蓋最大幅 136.4mm、Ba-Br 高 135.8mm と、いずれも中間的な値を示す。頭長幅示数（77.1）は中頭、頭長高示数（76.9）は高頭、頭幅高示数（99.0）は狭頭を示し、脳頭蓋は幅径や長径に対しやや高い傾向にある。

頬骨弓幅は 135.3mm、中顔幅 98.0mm・上顔高は 67.8mm と、幅径が広く顔高は低い傾向を示す。コルマン上顔示数が 51.1 で中上顔、ウィルヒョウ上顔示数が 69.4 で低上顔を示す。

眼窩の形は、眼窩幅が 42.0mm、眼窩高が 31.4mm で、眼窩示数は 75.4 で低眼窩であり、比較集団より眼窩の幅が広く低い傾向を示す。

鼻型は、鼻幅は 24.8mm、鼻高は 49.0mm、鼻示数は 50.8 と広鼻よりの中鼻であり、瑞穂の男性と傾向を異にする。また鼻根部は、鼻根彎曲示数が 78.2 と比較群中で小さめの値を示し、やや高い鼻立ちである。

以上、女性の頭蓋骨の形質的特徴を概観すると、男性とは傾向が異なり、脳頭蓋はやや高く、顔面部の形態は顔高と眼窩、鼻型はいずれも低いという特徴を示す。

頭蓋骨の比較分析

・主成分分析

頭蓋 9 項目（頭蓋最大長・最大幅・Ba-Br 高・頬骨弓幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高）を用いて男女それぞれ主成分分析を行った。

【男性】

第一主成分（表 4 X 軸：固有値 3.87、寄与率 43.0%）は鼻幅とのみ負の相関を、それ以外の項目と正の相関を示すが、鼻幅の主成分負荷量は -0.21 と低いため、概してサイズファクターと考えられる。第二主成分（Y 軸：固有値 2.42、寄与率 26.91%）は、脳頭蓋は長・高径と、顔面部は頬骨弓幅と鼻幅と正の相関を、脳頭蓋の幅径と顔面部の高径・眼窩のサイズと負の相関を示す。第一主成分を横軸に、第二主成分を縦軸にとり二次元に展開したものが図 1 である。横軸で右に位置するほど頭蓋骨全体のサイズが大きい。縦軸で上方に位置すると脳頭蓋の長径が大きく顔面部の幅径が大きい傾向を示し、下方に位置すると脳頭蓋の幅径が大きく顔面部は高径、特に眼窩のサイズが大きく鼻型が高い傾向を示す。瑞穂遺跡出土の男性人骨は、第三象限に位置し、頭蓋骨のサイズが小さく、顔面部の形態は原田や天福寺、開善寺や京町のような福岡県内の諸集団と傾向が異なり、江戸の武士層や畿内・関東

表 4 男性主成分分析 主成分量負荷量

	主成分負荷量		
	1	2	3
1最大長	0.23	0.61	0.75
8最大幅	0.19	-0.87	0.34
17バジオン・プレグマ高	0.84	0.07	0.11
45頬骨弓幅	0.47	0.79	-0.29
48上顔高	0.90	-0.14	-0.06
51眼窩幅(L)	0.79	-0.22	-0.38
52眼窩高(L)	0.79	-0.35	-0.32
54鼻幅	-0.21	0.64	-0.04
55鼻高	0.86	-0.24	0.03
固有値	3.87	2.42	1.02
寄与率	43.00	26.91	11.38
累積寄与率	43.00	69.90	81.28

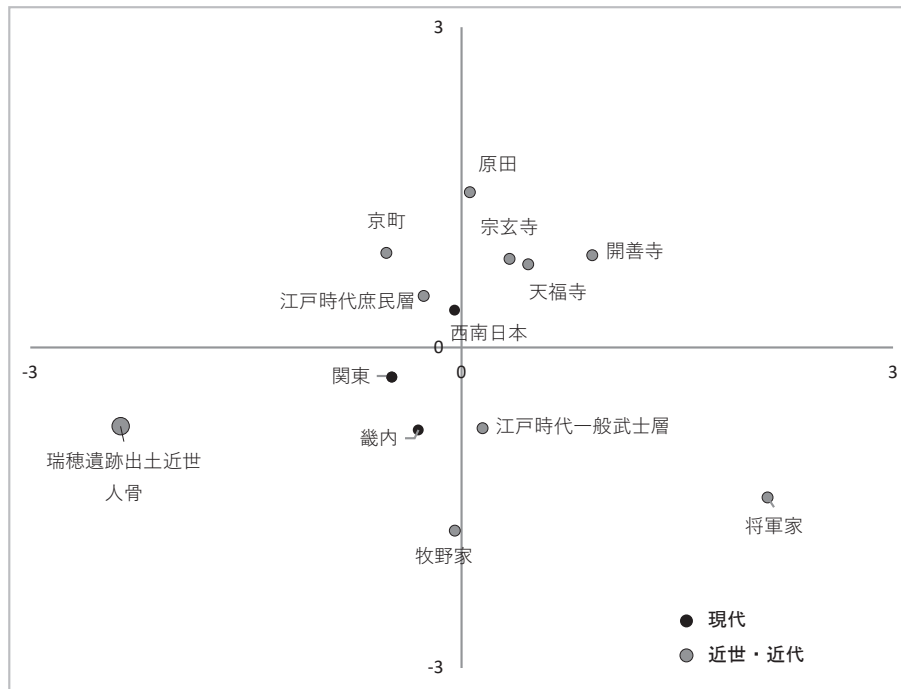


図 1 主成分分析結果（男性 頭蓋 9 項目）

の現代人集団と形態的に類似する傾向を示す。しかし、鈴木の一連の研究（1967, 1985a, b）をふまえ、坂上・馬場（2012）によって「典型的貴族形質」の特徴は以下のようにまとめられている。

- ①低身長・大形の頭・短頭型または中頭型で長頭型ではない
- ②顔高、上顔高の増大と顔幅の減少に基づく超狭顔型化
- ③前頭骨の頬骨突起の繊細化と垂直下垂
- ④高度の狭鼻型と高い鼻根の隆起、高く鋭い前鼻棘
- ⑤眼窩の高径、幅径の増大による入口面積の拡大、しばしば高眼窩型
- ⑥上顎骨の縮小：中顔幅の短縮、鼻棘点の後退、上顎歯槽突起のV字化、歯槽上溝の出現
- ⑦下顎骨体の縮小：歯槽下溝の出現、オトガイの強い突出、下顎枝の繊細化、咀嚼筋と咬力伝達機能の弱体化
- ⑧歯列の不整とかすかな歯冠咬耗

この形質的特徴は主として上下顎及び咀嚼筋の弱体化を要因とする可能性が高く、その程度に応じて形質の発現に若干の差が生じると述べられている（鈴木 1967）。この中で、瑞穂遺跡出土人骨に関して傾向として当てはまる項目は、①・④・⑤であり、中顔幅の短縮や頬骨突起の繊細化などはみられず、計測はできなかったが高い鼻根の隆起が観察された個体もなく、管見の限りにおいて鼻根部は扁平であった。また、下顎骨の脆弱化という重要な項目に関して検討できる個体がおらず不明であるという問題もある。そのため、将軍家や大名家のようないわゆる貴族的形質を顕現するわけではない。また、近世・近代の庶民層の多様な形質発現の一端に過ぎない可能性も捨てきれない。

大野城市内の古野遺跡や原口遺跡出土人骨は上顔高の値が欠損しているため、上記の分析に含めていないが、最も近郊の遺跡から出土した人骨との対比を行うため、上顔高の値を除いて主成分分析を

行った（表5・図2）。第一主成分（表5 X軸：固有値 3.51、寄与率 43.8%）は鼻幅とのみ負の相関を、それ以外の項目と正の相関を示すが、鼻幅の主成分負荷量は-0.43と低いため、概してサイズファクターと考えられる。

第二主成分（Y軸：固有値 1.65、寄与率 20.65%）は、脳頭蓋は長・高径と、顔面部は頬骨弓幅と鼻幅と正の相関を、脳頭蓋の幅径と顔面部の高径・眼窩のサイズと負の相関を示す。第一主成分を横軸に、第二主成分を縦軸にとり二次元展開した図が図2である。原口・古野・瑞穂遺跡出土人骨はいずれもサイズが小さいという点で共通するが、縦軸をみると、古野・瑞穂遺跡出土人骨は特徴が異なり、古野・瑞穂遺跡出土人骨は江戸時代武士的あるいは畿内や関東現代人的で、原口は福岡県内遺跡出土人骨や江戸市中庶民層に近い。

この点に関して、瑞穂遺跡出土人骨や古野遺跡の人骨の年代が比較的新しく近代に近い可能性と関連するかもしれないが、原田遺跡出土人骨も明治大正期の人骨を含み、年代的には大差ないと考えられる。古野遺跡出土人骨はその報告時に形質に関していわゆる江戸時代の貴族形質に近いことが指摘されており（中井・米元ほか 2012）、大野城市内に出土するこれらの集団の歴史的経緯や墓地を形成した集団の婚姻圏に何らかの特異性があり、例えば古野の場合は高原家と関連の深い関家の主な墓域であり、有力層であるがゆえに庶民層とは異なる交流があった可能性が高いことも想定することができる。瑞穂遺跡出土の男性も、その位置づけゆえにこのような形質的特徴を有する可能性も考えられよう。

【女性】

第一主成分（表6 X軸：固有値 3.80、寄与率 42.24）は眼窩高以外と正の相関を示し、サイズファクターと考えられる。

第二主成分（Y軸：固有値 1.54、累積寄与率 59.39）は主に脳頭蓋の諸径と顔面部の高径と正の相

表5 男性主成分分析 主成分負荷量

	主成分負荷量		
	1	2	3
1最大長	0.47	0.59	-0.64
8最大幅	0.67	-0.61	-0.07
17バジオン・プレグマ高	0.97	0.04	0.01
45頬骨弓幅	0.37	0.73	0.53
51眼窩幅(L)	0.76	-0.08	0.46
52眼窩高(L)	0.49	-0.23	0.56
54鼻幅	-0.43	0.55	0.24
55鼻高	0.87	-0.18	0.08
固有値	3.51	1.65	1.28
寄与率	43.85	20.65	16.03
累積寄与率	43.85	64.50	80.52

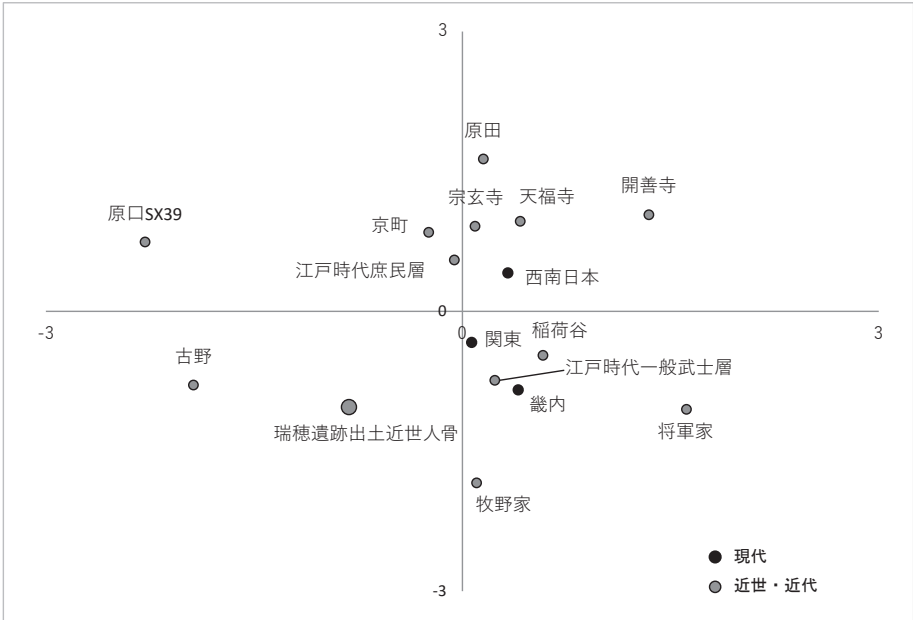


図2 主成分分析結果（男性 頭蓋8項目）

関を示し、頬骨弓幅と鼻幅と負の相関を示すことから、図の上方に位置するほど脳頭蓋のサイズが大きく、顔面部は高い傾向があり、図の下方に位置するほど低顔であることを示している。第一主成分を横軸に、第二主成分を縦軸にとり二次元展開した図が図3である。

瑞穂遺跡出土の女性は、第4象限に位置し、天福寺や開善寺などの福岡県内の各集団や江戸市中庶民層の頭蓋形質を示し、この点において男性と傾向が異なる。女性は周辺部の頭蓋形質と傾向を共有し、一方で男性は周辺部とはやや異なる傾向を示すという点は極めて興味深い結果である。

表6 女性主成分分析結果 主成分負荷量

	主成分負荷量		
	1	2	3
1最大長	0.75	0.09	-0.62
8最大幅	0.40	0.76	0.21
17バジオン・プレグマ高	0.68	0.51	-0.05
45頬骨弓幅	0.92	-0.34	0.17
48上顔高	0.48	0.14	0.73
51眼窩幅(L)	0.77	0.02	-0.07
52眼窩高(L)	-0.64	0.55	0.18
54鼻幅	0.58	-0.09	-0.20
55鼻高	0.44	0.51	0.27
固有値	3.80	1.54	1.14
寄与率	42.24	17.15	12.65
累積寄与率	42.24	59.39	72.04

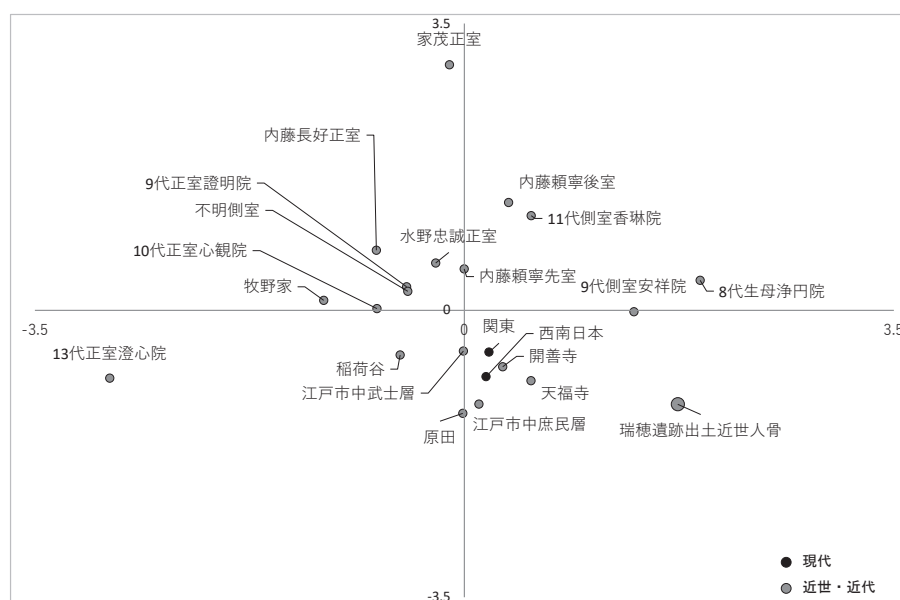


図3 主成分分析結果（女性 頭蓋9項目）

四肢

【男性（表7・8）】

上肢（表7）

- ・上腕骨：最大長は298.5mm、中央周や最小径・最大径も比較群中で中程度の値を示す。
- ・橈骨：橈骨は最大長がやや長めであるが、周径や横径・矢状径は中程度の値を示す。
- ・尺骨：尺骨も最大長はやや長めであるが、周径や横径・矢状径は中程度の値を示す。

下肢（表8）

- ・大腿骨：最大長が左側422.0mm、右側420.3mmと比較群中では値が大きい傾向にある。中央周は84.0と中程度であり、顕著に細いわけではないが、中央断面示数が95.1、上骨体断面示数が74.2

と小さく、断面形態からみると柱状性や粗線の後方への突出が顕著ではない。

・**脛骨**：全長・最大長は一個体の値ではあるが、345.0 mmと大腿骨と同様に比較群中では値が大きい傾向にある。中央最大径・栄養孔位最大径・栄養孔位横径・骨体周・最小周・栄養孔位周は比較群において小さめの値を示す部位が多い。中央横径が大きく最大径が小さいため、中央断面示数は比較群中において最大の値を示す。脛骨の扁平性は低く、ヒラメ筋線の発達も不明瞭であることを示す。

【女性（表 9・10）】

上肢（表 9）

- ・**上腕骨**：最大長は 261.7 mm、中央周や最小径・最大径も比較群中で中程度の値を示す。
- ・**橈骨**：橈骨は最大長が 199.7mm、周径や横径・矢状径も中程度の値を示す。
- ・**尺骨**：尺骨は最大長が 212.0mm、周径や横径・矢状径も中程度の値を示す。

下肢（表 10）

- ・**大腿骨**：最大長が左側 381.0 mm、右側 378.0 mmと比較群中ではやや大きい傾向を示す。中央断面示数は 91.7、上骨体断面示数は 75.3 と比較的小さい値を示し、相対的に矢状径が大きい傾向が指摘される。しかし、中央周が 70.5 mmと小さいため全体的に華奢な傾向を示す。
- ・**脛骨**：最大長が 286.0mm と比較集団中で小さい値を示す。中央断面示数は 75.9、栄養孔位断面示数は 76.6 と、いずれも中程度であり、脛骨の扁平性やヒラメ筋線の後方への突出は明瞭ではない。
- ・**腓骨**：最大長が 298.0 mm、最小周が 35 mmと比較集団中で中程度の値を示す。

身長比較（表 11・12）

大腿骨最大長に Pearson と藤井の身長推定式を適用して身長を算出した。男性の左側 422.0 mm、右側 420.3 mmから推定される身長は 160.6 cm（ピアソン式）159.1（藤井式左側）である（表 11）。女性は左側 381mm、右側 378 mmであり、推定される身長は 146.9 cm（ピアソン式）146.6 cm（藤井式左側）である（表 12）。四肢骨の形態的特徴としては男女ともに大腿骨の粗線やヒラメ筋線の後方への突出も明瞭ではない個体が多く、比較的華奢である。しかし、大腿骨の長さから推定した身長は原田と同程度で、古野や江戸時代の比較集団中では大きい。女性は江戸市中の各集団と比較すると大きく、天福寺や現代人（九州）と近い。

平本（1972・2004）が縄文時代から明治までの身長の変化を検討した結果、古墳時代から近世にかけて平均身長が低くなっていく傾向が指摘されており、江戸時代の平均身長は、近代初期と同程度であり、日本の歴史上最も低いとされている。しかし、瑞穂遺跡出土人骨に関

表 11 推定身長の比較（男性）

男性		M	
		n (Pearson式)	(藤井式)
瑞穂近世	L	1	160.6
	R	4	158.7
古野 (SX36)	(近世)	1	158.8
天福寺 ¹⁾	(近世)	24	159.4
原田 ²⁾	(近世)	30	160.4
稲荷谷 ³⁾	(近世)	12	157.9
蓆田青木 ⁴⁾	(近世)	30	160.2
八丁堀三丁目Ⅱ ⁵⁾	(近世)	13	159.3
天徳寺 ⁶⁾	(近世)	37	157.7
芝公園 ⁶⁾	(近世)	15	160.6
九州 ⁷⁾	(現代)	59	157.7

1) 中橋（1987）、2) 中橋・土肥（2008）、3) 岡崎ほか（2004）、4) 中橋（1993）5) 梶ヶ山・馬場（1993）、6) 加藤（1991）、7) 阿部（1957）＊比較集団の身長は平均値より算出。

してはやや平均より高い傾向がみられる。また、男性に関しては原田も同様の傾向を示し、やや高身長である。女性に関しては福岡県内出土の人骨は江戸市中の人骨と比較すると推定身長がやや高い傾向を示す。平本（2004）の値は江戸市中の、特に一橋高校遺跡を主体としたものであり、江戸市中全体を代表させていいかどうか検討の余地があるが、仮に江戸市中の傾向だとすると、瑞穂遺跡や原田のように地方にまで低身長化の影響は及んでいない可能性もある。これが江戸時代における東西の栄養状態の違い（速水 2000）に起因するものか、都市や農村部の集団構成の違いによるものかは未解明である。福岡県内で近年近世墓の発掘事例が相次いでいるため、今後比較検討を行っていく予定である。

表 12 推定身長と比較（女性）

女性		M		
		n	(Pearson式)	(藤井式)
瑞穂	L	1	146.9	146.6
	R	2	－	145.7
天福寺 ¹⁾	(近世)	18	146.9	146.5
原田 ²⁾	(近世)	12	147.3	147.0
稲荷谷 ³⁾	(近世)	8	147.1	146.8
蓆田青木 ⁴⁾	(近世)	15	148.5	148.5
八丁堀三丁目Ⅱ ⁵⁾	(近世)	6	142.9	141.8
天徳寺 ⁶⁾	(近世)	19	145.6	145.1
芝公園 ⁶⁾	(近世)	13	147.2	147.0
将軍家（成人） ⁷⁾	(近世)	8	146.2	
九州 ⁸⁾	(現代)	13	146.8	146.4

1) 中橋（1987）、2) 中橋・土肥（2008）、3) 岡崎ほか（2004）、4) 中橋（1993）、5) 梶ヶ山・馬場（1993）、6)・7) 加藤（1991）、8) 阿部（1957）
6) 馬場・坂上（2012） *比較集団の身長は平均値より算出。

おわりに

大野城市瑞穂遺跡出土の近世人骨についてその出土状況をまとめると以下のとおりである。

- ・本遺跡においては、坐葬・仰臥屈葬・側臥屈葬が認められる。
- ・明らかな屈葬に関しては、頭位を北東から北西に向けており、例外が3例見られる。
- ・右側臥屈葬のみならず、仰臥屈葬の場合でも右側臥を指向したような事例が大半である。
- ・下肢の埋葬姿勢のみに着目すると、股関節に関しては近世墓に典型的な股関節を強屈した事例が多くみられる一方で、股関節を強屈せずやや軽屈させた状態の事例もみられる。
- ・坐葬の躯体正面に関しては基本的に北から西を主としている。
- ・本遺跡では、改葬に伴い軟部組織の腐朽がある程度進んだ段階で収骨を行った痕跡が多く認められる。一方で、墓を再開口、遺体を乱しているにもかかわらず収骨を行っていない事例も認められる。

本遺跡出土の近世人骨についてその形質的特徴をまとめると以下のとおりである。

- ・男性の頭蓋形質は、サイズが小さく、上顔高は 65.6、上顔示数は 67.0 とやや低いが、眼窩のサイズがやや大きく鼻型は狭くて高い傾向をしめす。
- ・女性の頭蓋形質は、サイズが相対的に大きく、上顔高は 67.8、上顔示数は 69.4 とやや低く、眼窩や鼻型なども低い傾向を示す。
- ・男性と女性の頭蓋形質の傾向はやや異なり、男性が武士層や畿内などの現代人と相対的に類似し、福岡県内の各集団とは異なるのに対し、女性はその逆の傾向を示す。大野城市内でみていくと古野の男性も瑞穂の男性と同様に武士層や現代人集団に形質的に近いが、原口は福岡県内出土の各集団と類似する。男性の頭蓋形質については、下顎骨が未検討であるなどいわゆる貴族形質と全く同じ傾向を

持つと現段階で断定できるものではなく、多様な形質を有していたであろう近世・近代の庶民層のヴァリエーションの1つにすぎない可能性もあるが、男性と女性で形質的な傾向が異なるという点から、瑞穂遺跡から出土した集団の歴史的経緯や婚姻圏に何らかの特異性があったのではないかと考えられる。瑞穂遺跡の墓地を形成した集団は、瓦田村（大野城市史編纂委員会 2000）の共同墓地と推定されており、関家の墓地であった古野遺跡のような特異性を有する可能性は未解明である。大野城市内に立地する近世遺跡群の歴史的立場づけに関する検討を待ちたい。

・身長は男性 160.6 cm（ピアソン式）159.1（藤井式左側）、女性 146.9 cm（ピアソン式）146.6 cm（藤井式左側）であり、江戸市中出土人骨の平均と比較するとやや高身長であるが、筑紫野市原田遺跡出土人骨の推定身長とは近似している。

・椎骨を除いて重度の関節炎や骨膜炎、LEH や C0 などのストレスマーカーを持つ個体の頻度は低く、栄養状態が極端に悪い・身体的負荷が極端に高いなどの特徴は読み取れない。

謝辞

人骨の取り上げおよび本報告を行うにあたり、大野城市教育委員会の諸氏に多くのご配慮を賜りました。深謝いたします。

また、本出土人骨のクリーニング作業に従事した九州大学比較社会文化府（当時）、岩橋由季、早川和賀子、中井歩、福永将大、藤井恵美、地球社会統合科学府（当時）の梶原慎司、Carlos Verrecchia、富田啓貴、犬童淳一郎、Florencia Botta、文学部考古学研究室所属の今村竜平、矢崎空音、瀧内更朝、栗原悠里子、藤岡実優、野村華鈴、渡邊響、共創学部所属の筒井優菜、吉村篤哉、小高蒼大、有尾緒美、米山玲緒、佐々木真子、田代魁斗、湊姫に感謝いたします。

参考文献

- 馬場悠男（1991）人体計測法 II 人骨計測法．人類学講座別巻 1，雄山閣出版．
- 馬場悠男・坂上和弘（2012）第 4 章第 1 節寛永寺徳川將軍親族遺体の形態学的研究．寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編，東叡山寛永寺徳川將軍家御裏方霊．吉川弘文館．pp. 223-394.
- Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas :Arkansas Archaeological Survey Report Number44.
- Brooks S. and Suchey J.M. (1990) Skeletal age determination based on the os pubis: A comparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. Human Evolution 5, 227-238.
- 速水融（2000）歴史人口でみた日本 文春新書
- 平本嘉助（1972）縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代変化 人類誌、221-236
- 平本嘉助（2004）江戸時代人の身長と棺の大きさ．江戸遺跡研究会編，墓と埋葬と江戸時代，吉川弘文館，東京，pp. 201-223.
- 原田忠昭（1954）西南日本人頭蓋骨の人類学的研究人類学的研究．人類学研究 1，11-51.
- 井汲隆夫（1991）内部施設と葬法．発昌寺跡，新宿区南元町遺跡調査会．東京，pp135-138
- 欠田早苗（1959）畿内人頭蓋骨の人類学的研究—現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について—．人類学輯報 25，53-83.
- 加藤征（1991）江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究．平成 2 年度科学研究費補助金一般研究 B 研究成果報告．
- 川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦（2011）第 7 章 1：東畑瀬遺跡 9 区から出土した人骨について．東畑瀬遺跡 3 東畑瀬遺跡 6G・7・9 区—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6—．218-239.

- 河本美夫 (1959) 久世家歴代の頭骨に就いて 第2部頭蓋観察 人類学研究 6, 341-400.
- 九州大学医学部解剖第二講座編 (1988) 日本民族・文化の生成 2. 九州大学医学部解剖第二講座所蔵個人骨資料集成, 六興出版.
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. (1985) Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68, 15-28.
- Martin, R., Saller, K. (1957) *Lehrbuch der anthropologie*. Fischer, Stuttgart.
- 森田茂 (1950) 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究. 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集 3, 1-54.
- 中橋孝博・土肥直美 (2008) 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨. 原田第1・2・40・41号墓地下巻, 筑紫野市教育委員会.
- 中井歩・福永将大・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・舟橋京子・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之 (2015) 古野遺跡第2次調査出土近世人骨について. 大野城市教育委員会編, 乙金区画整理地内埋蔵文化財調査報告書 乙金遺跡群—古野第2遺跡調査—
- 小野千吉郎 (1957) 久世家歴代の頭骨に就いて 第一部頭蓋計測 人類学雑誌 95, pp. 89-106.
- 岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之 (2004) 稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨. 国道502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 262-323.
- 大川市教育委員会編 1997 大川市文化財調査報告書4: 西新開遺跡, 大川市教育委員会
- 大野城市教育委員会編 2017 薬師の森遺跡第43次・善一田遺跡第6・7次・古野遺跡第7次調査. 大野城市文化財調査報告書 第146集・乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書19・乙金地区遺跡群19, 大野城市教育委員会.
- Sakaue K. (2006) Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropol Sci* 114:59-64.
- Sakaue K (2012) Craniofacial Variation among the Common People of the Edo Period. *Bull Natl Mus Nat Sci, Ser D* 38:39-49.
- 坂田邦洋 (1996) 比較人類学. 青山社.
- 鈴木尚 (1985a) 骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと. 財団法人東京大学出版.
- 鈴木尚 (1985b) 江戸時代における貴族形質の顕現. 人類学雑誌 93 (1), 1-32.
- 谷川章雄 (2004) 江戸の埋葬施設と副葬品. 江戸遺跡研究会編, 墓と埋葬と江戸時代, 吉川弘文館, 東京, pp. 224-250.
- 枅原博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31.
- Ubelaker, D.H. (1989) *Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis, Interpretation* (2nd Edition). Washington, D.C.: Taraxacum.
- 米元史織・高椋浩史・李ハヤン・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・中井歩・舟橋京子・田中良之 (2013) 自然科学分析—福岡県大野城市原口遺跡第4次調査B区出土近世人骨について—. 乙金地区遺跡群7～原口遺跡第1～4次調査～ 大野城市教育委員会

表 1 瑞穂遺跡出土人骨一覧

調査次数	人骨番号	保存状態	性別	年齢	頭位	躯体正面		埋葬姿勢	改葬	持ち去り部位	備考（病変などの所見）
7	SX-04	○	女性	成年～熟年	－	西	襖棺	立膝坐葬	無し		前耳状溝あり、CO有、上顎左右第2大臼歯・下顎の右第2大臼歯う蝕
	SX-05	△	女性	成人	－	西？	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	胸椎にLipping、膝蓋骨関節面に関節炎
	SX-07	○	男性	老年	－	西	襖棺	立膝坐葬	無し		腰椎Lipping
	SX-09	×	女性	成人	－	北西	円形木棺	坐葬	不明		
	SX-10	×	不明	不明	西	東	襖棺	坐葬	無し？		
	SX-14	×	女性	成年～熟年	－	南東	方形木棺	立膝坐葬	無し？		
	SX-15	×	女性	成人	不明	不明	円形木棺	坐葬	不明		
	SX-16	×	不明	成人	北	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		
	SX-17	×	不明	熟年以上	－	不明	円形木棺	坐葬	不明		
	SX-18	×	不明	成人	北東	－	長方形木棺？	右側臥屈葬	無し		
	SX-19	×	女性	成年	－	西	円形木棺	坐葬	無し？		
	SX-22	×	男性	成人	北	－	長方形木棺	仰臥屈葬	無し		
	SX-32	×	不明	不明	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-33	×	不明	不明	－	西	方形木棺	坐葬	無し？		
	SX-34	×	女性	成年～熟年	－	南西？	方形木棺？	坐葬	あり？	四肢	
	SX-37	△	女性	熟年以上	北	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		上顎犬歯にLEH有り
	SX-38	△	男性	熟年	南西	北東	方形木棺	胡座坐葬	無し		上顎犬歯にLEH有り
	SX-41	×	不明	成人	西	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		
	SX-42	×	不明	熟年～老年	北西	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し？		
	SX-45	△	不明	熟年～老年	－	北	方形木棺	胡座坐葬			
	SX-47	×	不明	不明	北東	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し？		
	SX-50	×	男性	熟年	西	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		
	SX-51	△	男性	成年	－	東	方形木棺	坐葬	無し		上顎左小臼歯・下顎左第2大臼歯う蝕
	SX-55	×	不明	不明	－	－	不明	不明	不明		
	SX-57	△	女性	成人	－	不明	方形木棺？	坐葬	不明		
	SX-58	△	男性	成年後半～熟年前半	－	不明	方形木棺？	坐葬	あり	四肢(左側)	
	SX-61	×	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
	SX-62	×	不明	熟年後半以上	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		下顎犬歯LEH
	SX-63	○	男性	熟年以上	北東	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		
	SX-67	○	男性	成人	不明	不明	不明	不明	無し？		
	SX-68	○	女性	成人	北	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		下顎左右第一大臼歯う蝕
	SX-69	×	不明	成人	不明	不明	円形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-70	×	男性	熟年	－	不明	円形木棺	坐葬	不明		
8	SX-78	×	男性	熟年	－	南東	円形木棺	坐葬	無し		上顎左右中切歯LEH
	SX-79	○	男性	熟年	北東	南西	方形木棺	坐葬	無し		下顎犬歯LEH
7	SX-80	×	男性？	成人	不明	不明	襖棺	坐葬	あり	頸蓋・四肢・骨盤	胸椎にLipping
	SX-82	×	男性	成人	北	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		上顎左側犬歯LEH
8	SX-83	△	男性	熟年後半～老年	－	西	方形木棺	胡座坐葬	あり	頸蓋	
	SX-84	×	女性か？	成人	－	南	円形木棺	坐葬	無し？		
	SX-85	×	不明	熟年以上	－	北	円形木棺	坐葬	無し？		歯石沈着
	SX-87	○	男性	老年	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢	腰椎Lipping
	SX-88	×	女性	熟年	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	上顎左側犬歯LEH
	SX-89	×	不明	不明	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	
	SX-92	×	男性	熟年	－	北西	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢	第5腰椎・仙骨Lipping
	SX-94	×	不明	不明	不明	不明	円形木棺？	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	
	SX-95	×	男性	熟年～老年	南	－	長方形木棺	仰臥屈葬	無し		
	SX-96	×	女性	成人	不明	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	右桡骨骨折
	SX-97	△	女性	成年前半	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	
	SX-98	×	男性？	成人	不明	不明	円形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-100	×	不明	不明	不明	不明	襖棺	坐葬？	あり	ほぼ全身	
	SX-102	×	不明	成年	不明	不明	方形木棺？	坐葬？	あり？	頸蓋・四肢・骨盤	
	SX-103	○	女性	成年～熟年	北	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し		
	SX-104	×	不明	成人	－	不明	円形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-107	○	女性	老年	－	西	襖棺	坐葬	再開口		頸椎・胸椎Lipping、前耳状溝あり
	SX-117	×	不明	若年	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-122	×	不明	不明	－	－	円形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-125	×	女性	成人	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-126	×	不明	不明	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-127	×	不明	成人	－	北	方形木棺？	坐葬	無し		
	SX-128	×	不明	成人	北	－	長方形木棺？	右側臥屈葬	無し		
	SX-129	△	女性	成年	－	北	方形木棺？	坐葬	無し		
	SX-130	×	不明	成人	－	不明	円形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-131	△	女性	熟年	－	不明	円形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-133	△	男性	成年	北	－	長方形木棺？	右側臥屈葬	無し		下顎右側犬歯LEH有り、椎骨Lipping、歯石沈着
	SX-134	×	不明	不明	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-135	×	不明	成年	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		上顎右側犬歯LEH
	SX-136	×	不明	不明	不明	不明	不明	不明	あり？		
	SX-137	×	男性	成人	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-139	×	女性	成人	北西	－	長方形木棺？	屈葬	不明		
	SX-146	×	不明	不明	北	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-147	×	女性	熟年以上	北西	－	不明	不明	無し？		前耳状溝あり
	SX-148	×	男性	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
	SX-149	×	女性？	熟年	北西	－	長方形木棺？	仰臥屈葬	無し？		
	SX-150	×	女性	成人	－	西	円形木棺	坐葬	無し		
	SX-151	×	男性	成人	不明	－	長方形木棺？	屈葬？	不明		
	SX-152	×	不明	不明	－	不明	方形木棺？	坐葬？	不明		
	SX-154	×	不明	不明	北西	－	長方形木棺？	屈葬	無し？		
	SX-158	△	女性？	成人	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	頸椎Lipping、胸椎癒合、腰椎Lipping
	SX-161	△	女性	熟年	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	前耳状溝あり
	SX-166	△	男性	熟年以上	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢	
	SX-169	△	男性	成人	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	腰椎Lipping
	SX-170	×	不明	未成年	－	南西	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢	
	SX-172	×	不明	3～5歳	－	西	襖棺	坐葬？	無し		
	SX-173	×	不明	不明	北東	－	長方形木棺？	屈葬？	不明		
	SX-174	△	男性	熟年	－	不明	襖棺	坐葬	あり	仙骨	腰椎Lipping
	SX-176	◎	女性	若年	－	不明	襖棺	坐葬	再開口		前耳状溝あり、上顎右側第2大臼歯および上顎左側第2小臼歯・第1大臼歯齲蝕、右大腿骨頸部に骨増殖
	SX-178	×	女性	老年	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	腰椎Lipping
	SX-179	△	男性か？	若年	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・骨盤	左脛骨の近位外側に骨増殖有り
	SX-180	◎	男性	老年	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・四肢・骨盤	腰椎Lipping、前耳状溝あり
	SX-184	×	不明	不明	－	不明	円形木棺？	坐葬	不明		
	SX-190	×	不明	成人	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	頸蓋・恥骨	
	仮A	△	女性	熟年以上	－	不明	襖棺	坐葬？	あり	四肢	腰椎Lipping、前耳状溝あり、COあり
	人骨ごと取り上げたカメ	×	不明	不明							

表2 頭蓋計測値の比較（男性）（単位は cm）

Martin No.	瑞穂遺跡出土近世人骨			古野 ¹⁾			原口SX39 ²⁾			江戸市中武士層 (驥) ³⁾			江戸市中庶民層 (早稲) ³⁾			原田 ⁴⁾			開善寺 ⁵⁾			稲荷谷 ⁶⁾		
	男性			男性			男性			男性			男性			男性			男性			男性		
	N	M	S.D	N	M		N	M		N	M		N	M		N	M		N	M		N	M	
1 最大長	2	182.5	2.1	1	175.0		1	177	50	177.4	131	181.5	25	185.3		6	185.2		14	175.4				
8 最大幅	2	141.5	4.9	1	133.0		1	134	50	141.3	131	138.5	26	135.9		4	138.8		15	142.4				
17 バジオン・プレグマ高	1	133.0		1	130.0		1	126	50	138.0	131	136.2	20	138.4		1	143.0		8	138.9				
8/1 頭長幅示数	2	77.5	1.8	1	76.0		1	75.7	50	80.0	131	76.0	25	73.6		4	75.2		14	80.7				
17/1 頭長高示数	1	73.5		1	74.3		1	71.2	50	78.0	131	75.0	19	75.0		1	75.7		8	79.7				
17/8 頭幅高示数	1	96.4		1	97.7		1	94	50	98.0	131	98.0	19	101.0					8	96.9				
45 頬骨弓幅	1	126.0		1	127.0		1	135	50	133.1	131	134.9	19	136.1		3	136.3		8	137.4				
46 中顔幅	4	99.3	4.3	1	86.0		1	105	50	97.3	131	99.9	18	99.5		4	98.3		7	97.7				
47 顔高							1	102					11	121.6		1	133.0		6	128.0				
48 上顔高	5	65.6	4.2						50	73.7	131	72.2	17	72.8		3	71.0		7	75.6				
47/45 顔示数（K）							1	75.6					10	89.6					6	93.9				
47/46 顔示数（V）							1	97.1					9	122.5					6	131.1				
48/45 上顔示数（K）	1	54.8							50	55.0	131	54.0	14	53.3		2	51.4		6	56.1				
48/46 上顔示数（V）	3	67.0	3.5						50	76.0	131	72.0	11	73.4		2	72.4		6	78.3				
51 眼窩幅	3	40.3	3.2	1	40.0		1	41	50	43.4	131	43.3	24	42.2		4	43.0		8	44.6				
52 眼窩高	2	31.5	0.7	1	34.0		1	35	50	35.6	131	34.1	24	35.0		2	35.5		8	36.9				
52/51(L) 眼窩示数	2	77.2	6.3	1	85.0		1	85.4	50	82.0	131	79.0	24	83.0		1	78.7		8	82.7				
54 鼻幅	5	24.8	2.2	1	25.0		1	27	50	24.5	131	25.6	23	25.6		2	23.5		7	26.1				
55 鼻高	6	49.8	2.1	1	51.0		1	46	50	53.6	131	52.3	25	51.2		3	56.7		7	54.4				
54/55 鼻示数	6	41.3	20.8	1	49.0		1	58.7	50	46.0	131	48.9	23	50.0		2	40.8		7	48.1				
M50 前眼窩間幅	0			1	15		1	16	50	16.9	131	16.9	22	19.1		4	18.0		6	16.7				
F 鼻根横弧長	0			1	22		1	20					22	21.9		4	22.0		6	19.5				
50/F 鼻根湾曲示数	0			1	68.2		1	80					22	87.3		4	81.8		6	85.2				
M57 鼻骨最小幅	0			1	6		1	6	50	7.2	131	7.3	26	8.2		4	8.3		6	8.6				

Martin No.	天福寺 ⁶⁾			宗玄寺 ⁷⁾			京町 ⁸⁾			将軍家（計） ⁹⁾			牧野家 ¹⁰⁾ (近世)			鎌内 ¹¹⁾ (現代)			西南日本 ¹²⁾ (現代)			関東 ¹³⁾ (現代)		
	男性			男性			男性			男性			男性			男性			男性			男性		
	N	M		N	M		N	M		N	M		N	M		N	M		N	M		N	M	
1 最大長	38	182.6		36	180.8		37	180.3		6	183.5		9	174.8		37	177.3		108	181.4		143	178.9	
8 最大幅	38	138.6		44	135.2		30	135.2		6	145.7		8	141.5		37	142.9		108	139.3		143	140.3	
17 バジオン・プレグマ高	33	139.2		31	136.9		14	136.9		6	141.3		9	137.7		37	139.1		108	139.3		143	138.1	
8/1 頭長幅示数	37	76.0		35	78.3		23	74.6		6	79.5		8	81.3		37	80.7		108	76.6		143	78.5	
17/1 頭長高示数	33	76.2		26	75.1		11	75.7		6	75.8		9	78.8		37	78.4		108	76.9		143	77.3	
17/8 頭幅高示数	33	100.8		29	96.9		12	101.8		6	97.1		8	97.6		37	97.5		108	100.1		143	98.6	
45 頬骨弓幅	25	136.4		18	135.9		2	135.0		6	131.3		7	129.3		32	133.5		106	134.5		144	132.9	
46 中顔幅	24	101.8		31	99.0		24	98.1		3	90.0		8	93.0		32	97.2		107	99.9		143	98.6	
47 顔高	14	126.9		18	128.9		14	125.0		5	138.2		5	125.4					66	122.2		142	123.8	
48 上顔高	18	74.5		17	73.3		19	70.3		6	79.8		5	73.0		30	69.9		92	71.8		144	70.7	
47/45 顔示数（K）	13	93.2		10	93.3		1	93.3		5	102.6		5	96.9					64	91.4		142	93.1	
47/46 顔示数（V）	13	123.9		17	130.1		8	127.1		2	150.3		5	132.3					65	122.2		141	125.4	
48/45 上顔示数（K）	17	54.4		8	54.4		2	52.6		6	61.1		5	56.4		27	52.3		90	53.5		144	53.3	
48/46 上顔示数（V）	17	73.1		16	73.5		12	70.2		3	87.8		5	77.0		28	72.1		91	71.8		143	71.8	
51 眼窩幅	24	42.6		29	43.7		29	42.7		6	44.7		9	44.3		37	41.8		108	43.0		142	42.7	
52 眼窩高	24	34.1		34	36.1		32	35.0		6	38.3		9	37.8		37	35.1		108	34.4		144	34.3	
52/51(L) 眼窩示数	24	80.9		29	83.1		26	81.2		6	86.9		9	85.3		37	84.0		108	80.2		142	80.4	
54 鼻幅	24	26.5		28	25.4		32	25.5		6	24.0		9	22.9		37	25.0		108	25.9		144	25.0	
55 鼻高	24	52.9		31	55.5		32	52.4		6	58.7		9	54.3		37	53.4		108	52.2		143	52.0	
54/55 鼻示数	24	50.1		28	45.9		28	49.2		6	40.8		9	42.2		37	47.0		108	49.8		143	48.4	
M50 前眼窩間幅				27	17.67					3	14.7		9	15.6		37	18.3		108	17.4		142	17.8	
F 鼻根横弧長										3	19.0													
50/F 鼻根湾曲示数										3	77.367													
M57 鼻骨最小幅				29	7.38					9	6.2		36	6.3		108	7.1		144	7.0				

1) 中井ほか(2)米元ほか (2013) 3)坂上 (2012)、4)中嶋・土肥 (2008)、5) 松下 (2005)、6)岡崎ほか (2004)、6)中嶋 (1987)、7) 松下 (1995)、8)松下 (1993)

9) 鈴木尚 (1985a)、10)鈴木尚 (1985b)、11)加藤 (1991)、12)川久保ほか (2011)、13)欠田 (1959)

表 3 頭蓋計測値の比較（女性）（単位は cm）

Martin No.	環礁遺跡出土近世人骨																				西南日本 ⁷⁾ (現代)		関東 ⁸⁾ (現代)	
	江戸市中武士層 ¹⁾ (妻)				江戸市中庶民層 ¹⁾ (早稲)				原田 ²⁾		開善寺 ³⁾		稲荷谷 ⁴⁾		天福寺 ⁵⁾		牧野家 ⁶⁾							
	女性			女性			女性			女性			女性			女性			女性			女性		
	N	M	S.D	n	M		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1 最大長	5	177.0	3.5	48	169.1	70	172.3	26	172.8	6.0	172.3	14	164.1	38	174.7	3	167.0	42	172.8	82	170.8			
8 最大幅	5	136.4	7.7	48	135.3	70	133.2	26	131.1	5.0	136.2	15	135.8	38	133.5	4	133.8	42	133.8	82	135.9			
17 バジオン・プレグマ高	4	135.8	6.6	48	132.0	70	130.6	23	131.3	2.0	132.0	11	130.3	35	132.7	4	131.3	42	131.5	81	132.5			
8/1 頭長幅示数	5	77.1	4.2	48	80.0	70	77.0	24	75.5	5.0	78.7	14	83.4	38	76.5	2	80.4	42	77.5	82	79.7			
17/1 頭長高示数	4	76.9	2.9	48	78.0	70	76.0	22	76.1	2.0	77.4	11	79.5	35	76.1	2	77.7	42	76.2	81	77.7			
17/8 頭幅高示数	4	99.0	2.5	48	98.0	70	98.0	20	100.9	2.0	102.3	11	96.5	35	99.4	3	98.0	42	98.4	81	97.7			
45 頬骨弓幅	4	135.3	5.3	48	123.8	70	125.0	19	123.7	2.0	126.5	7	122.3	30	126.5	2	114.5	42	124.3	84	124.9			
46 中顔幅	5	98.0	8.3	48	92.2	70	93.3	19	94.5	2.0	90.0	5	88.8	25	95.5	2	83.5	42	93.6	84	93.5			
47 顔高	1	119.0	—	—	—	—	—	13	112.2	1.0	115.0	4	113.5	15	115.9	—	—	10	113.0	84	115.0			
48 上顔高	5	67.8	4.9	48	68.5	70	66.7	16	67.1	2.0	64.5	5	66.2	22	68.8	1	67.0	48	68.6	83	67.1			
47/45 顔示数 (K)	1	93.0	—	—	—	—	—	10	92.0	1.0	95.8	3	92.2	15	91.1	—	—	10	90.5	84	92.2			
47/46 顔示数 (V)	1	125.3	—	—	—	—	—	8	118.1	1.0	127.8	3	127.6	15	120.9	—	—	10	118.3	84	123.3			
48/45 上顔示数 (K)	3	51.1	3.9	48	55.0	70	53.0	12	54.6	1.0	51.7	5	53.6	22	54.3	—	—	40	55.1	83	53.8			
48/46 上顔示数 (V)	4	69.4	8.3	48	75.0	70	72.0	11	71.6	2	71.7	5	74.5	22	71.8	—	—	40	73.2	83	72.0			
51 眼窩幅(L)	3	42.0	1.0	48	41.2	70	40.8	19	40.4	2	40.5	6	41.7	30	40.5	2	39.5	42	40.7	84	41.1			
52 眼窩高(L)	5	31.4	1.1	48	34.6	70	33.3	17	33.9	3	33.7	6	36.3	30	34.3	1	35.0	42	34.0	84	33.8			
52/51(L) 眼窩示数	3	75.4	1.9	48	84.0	70	82.0	17	84.2	2	81.5	6	87.2	29	84.8	1	89.7	42	83.7	84	82.4			
54 鼻幅	5	24.8	2.2	48	24.5	70	24.4	24	25.0	2	22.0	7	25.9	26	25.3	1	24.0	42	25.2	84	24.5			
55 鼻高	5	49.0	4.2	48	49.4	70	48.5	25	47.2	2	49.0	7	48.9	28	49.9	2	49.0	42	48.7	84	49.0			
54/55 鼻示数	5	50.8	5.2	48	50.0	70	51.0	24	53.0	2	45.2	7	52.9	26	51.0	1	48.0	42	51.9	84	50.2			
M50 前眼窩間幅	2	18.0	1.4	48	16.3	70	16.4	25	17.0	1	14.0	7	16.3	—	—	2	14.0	57	16.8	84	17.4			
F 鼻根横弧長	2	23.0	1.4	—	—	—	—	24	19.1	1	17.0	7	18.5	—	—	—	—	57	19.6	—	—			
50/F 鼻根湾曲示数	2	78.2	1.3	—	—	—	—	24	89.0	1	82.4	7	88.9	—	—	—	—	57	88.7	—	—			
M57 鼻骨最小幅	2	4.5	3.5	48	7.8	70	7.0	25	7.5	—	—	5	7.7	—	—	—	—	57	8.6	84	7.1			

Martin No.	家茂正室 ⁹⁾	6代側室法心院 ¹⁰⁾	6代側室蓮淨院 ¹⁰⁾	9代側室安祥院 ¹⁰⁾	12代側室本寿院 ¹⁰⁾	14代生母美成院 ¹⁰⁾	10代正室心聴院 ¹⁰⁾	9代正室聖明院 ¹⁰⁾	13代正室澄心院 ¹⁰⁾	不明側室 ¹⁰⁾	11代側室香琳院 ¹⁰⁾	10代側室蓮光院 ¹⁰⁾	8代生母淨円院 ¹⁰⁾	内藤頼朝正室 ¹⁰⁾	内藤長好正室 ¹⁰⁾	内藤頼季先室 ¹⁰⁾	内藤頼家後室 ¹⁰⁾	内藤頼直正室 ¹⁰⁾	水野忠友正室 ¹⁰⁾	水野忠誠正室 ¹⁰⁾
1 最大長	173.0	174.0	171.8	172.1	161.4	169.9	166.0	166.9	159.0	164.8	170.0	174.8	173.3	165.0	172.0	167.0	176.0	172.0	183.5	175.2
8 最大幅	144.0	131.1	137.8	139.1	136.3	140.0	143.0	135.8	126.8	136.8	141.1	139.8	139.5	145.0	140.0	140.0	141.0	140.0	143.5	137.0
17 バジオン・プレグマ高	141.0	133.0	139.1	138.9	130.1	128.9	123.8	134.8	126.7	133.2	138.3	124.9	142.0	133.0	130.0	132.0	136.0	142.0	136.5	132.8
8/1 頭長幅示数	83.3	75.3	80.2	80.8	84.4	82.4	86.1	81.4	79.7	83.0	83.0	80.0	80.5	87.9	81.4	84.3	80.1	81.4	—	78.1
17/1 頭長高示数	81.5	76.4	80.9	80.7	80.6	75.9	74.5	80.8	79.7	80.8	81.3	71.5	81.9	80.6	75.6	79.0	77.3	82.6	—	75.8
17/8 頭幅高示数	98.0	102.1	100.9	99.9	95.5	92.1	86.2	99.2	99.9	97.3	98.0	89.3	101.8	91.7	93.5	94.3	96.5	101.4	—	96.9
45 頬骨弓幅	114.0	123.4	123.6	131.3	118.6	121.6	120.5	119.4	107.5	120.9	124.2	124.9	134.1	120.0	117.0	124.0	121.0	119.0	—	118.2
46 中顔幅	83.0	90.9	86.3	96.4	83.8	84.4	85.5	87.9	79.3	89.8	94.9	89.9	95.4	91.0	88.0	93.0	89.0	88.0	—	90.0
47 顔高	114.0	—	—	121.7	—	—	111.0	120.1	100.7	—	117.4	115.4	124.5	—	114.0	119.0	119.0	—	—	—
48 上顔高	66.0	—	—	69.6	—	—	70.0	67.8	64.8	71.2	72.8	70.5	74.1	—	65.0	72.0	67.0	—	—	65.7
47/45 顔示数 (K)	100.0	—	—	92.7	—	—	92.1	100.5	93.6	—	94.5	92.4	92.8	—	97.4	96.0	98.4	—	—	—
47/46 顔示数 (V)	137.3	—	—	126.2	—	—	129.8	136.5	127.0	—	123.8	128.3	130.4	119.8	129.6	128.0	133.7	—	—	—
48/45 上顔示数 (K)	57.9	—	—	53.0	—	—	58.1	56.8	60.2	58.9	58.6	56.5	55.3	—	55.6	58.1	55.4	—	—	—
48/46 上顔示数 (V)	79.5	—	—	72.2	—	—	81.9	77.1	81.7	79.2	76.7	78.4	77.7	—	73.9	77.4	75.3	—	—	—
51 眼窩幅(L)	42.0	40.1	42.1	41.4	37.9	40.7	38.1	41.0	35.5	39.7	39.8	42.3	42.7	37.0	37.0	39.0	40.0	42.5	42.5	39.8
52 眼窩高(L)	37.0	35.2	36.0	32.1	34.9	34.7	34.8	35.9	37.5	36.4	35.0	38.4	35.1	34.0	36.0	37.0	36.0	37.5	—	36.2
52/51(L) 眼窩示数	88.2	87.9	85.6	77.5	92.1	85.1	91.3	87.5	105.4	91.7	88.0	90.9	82.2	91.9	97.3	94.9	90.0	88.2	—	—
54 鼻幅	25.0	26.3	24.7	26.8	27.3	26.0	24.9	23.3	19.4	21.7	22.4	25.4	25.5	25.0	21.0	21.0	24.0	24.0	—	24.8
55 鼻高	51.0	52.2	47.8	49.7	51.1	50.3	47.7	47.8	46.7	49.8	50.2	51.6	50.9	50.0	48.0	54.0	51.0	54.0	52.7	49.5
54/55 鼻示数	49.0	50.4	51.6	53.9	53.5	51.7	52.2	48.9	41.5	43.5	44.6	49.2	50.2	50.0	43.8	38.9	47.1	44.4	—	—
M50 前眼窩間幅	17.0	17.5	16.9	15.0	14.9	15.5	14.1	16.7	12.2	15.3	15.5	18.3	18.3	19.0	15.0	20.0	14.0	16.0	—	16.5
F 鼻根横弧長	19.0	20.0	21.0	19.0	22.0	20.0	18.0	21.5	17.0	19.0	19.0	21.0	21.9	24.1	18.0	24.0	16.5	22.0	—	—
50/F 鼻根湾曲示数	89.5	87.7	80.5	78.7	67.7	77.5	78.4	77.7	71.8	80.6	81.8	87.1	83.6	78.8	83.3	83.3	84.8	72.7	—	—
M57 鼻骨最小幅	—	4.9	8.1	6.4	7.9	8.1	5.4	5.6	4.7	6.3	7.8	9.6	7.2	—	—	—	—	—	—	—

1) 坂上（2012）、2) 中橋・土肥（2008）、3) 松下（2005）、4) 岡崎ほか（2004）5) 中橋（1987）、6) 加藤（1991）、7) 原田（1954）、8) 森田（1950）、9) 鈴木尚（1985b）、10) 馬場・坂上（2012）

表7 上肢の計測値の比較（男性）（単位は cm）比較集団は左側の値のみ提示

Martin No.	瑞穂遺跡出土近世人骨																				久世 ⁸⁾	九州 ^{9・10)} (現代)	(現)					
	男性 L				男性 R				古野 ¹⁾		原口 ²⁾		天徳寺 ³⁾		芝公園 ³⁾		原田 ⁴⁾		稲荷谷 ⁵⁾					天福寺 ⁶⁾		小倉京町 ⁷⁾		
	N	M	S.D		N	M	S.D		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M				n	M	n	M	n
上腕骨																												
1最大長	2	298.5	4.9	2	299.5	2.1	2	287.0	2	287.0	42	289.5	14	301.4	15	294.4	6	293.2	21	296.9	5	278.8	1	301.5	106	295.3		
2全長	2	293.5	2.1	1	297.0		1	295.0	2	283.0	41	285.7	14	297.0	15	290.3	8	287.0	19	293.3	5	276.8	1	298	106	290.6		
5中央最大径	7	22.7	1.1	6	23.0	2.3	1	23.0	2	22.0	83	22.4	47	22.2	22	22.8	6	22.7	22	23.1	11	23.2	6	21.8	106	21.9		
6中央最小径	7	17.9	1.2	6	17.5	1.0	1	17.0	2	20.1	83	17.0	47	17.3	22	17.8	6	18.5	22	17.7	11	18.0	6	16.8	106	16.9		
7骨体最小周	6	64.8	3.2	5	65.6	2.1	2	63.5	3	61.0	-	-	46	62.0	28	63.5	16	62.3	22	63.8	9	65.9	5	64.6	106	61.8		
7a中央周	7	68.4	4.0	5	70.4	1.5	1	67.0	2	66.5	83	64.9	47	65.7	22	67.8	6	64.5	22	66.5	10	69.0	6	65.8	106	63.7		
6/5骨体断面示数	7	78.7	3.6	6	76.6	7.1	1	-	2	90.7	83	76.2	47	78.4	22	78.4	6	81.8	22	77.6	10	77.8	6	76.6	106	79.1		
7/1長厚示数	1	22.0		2	22.2	0.1	2	-	2	21.8	42	22.3	14	21.0	15	21.4	6	21.1	16	21.3	6	21.6	1	20.9	106	20.9		
桡骨								-	-																			
1最大長	3	230.7	12.1	2	229.5	17.7	3	220.3	3	216.3	54	222.8	23	226.9	14	225.8	5	219.6	23	228.5	4	215.8	5	230.4	64	219.9		
2機能長	4	215.0	8.8	2	215.0	15.6	3	209.0	3	206.0	55	208.4	24	212.8	17	211.8	7	207.7	23	212.2	2	196.5	6	211.7	64	208.2		
3最小周	4	44.8	2.9	2	43.5	0.7	3	41.3	4	41.5	82	39.9	50	40.4	30	43.6	12	39.8	23	42.2	10	43.3	6	42.1	63	40.1		
4骨体横径	8	17.1	2.0	5	17.0	1.2	3	16.3	4	16.4	84	16.5	51	16.2	32	17.1	14	17.5	23	17.5	12	17.6			63	16.0		
4a骨体中央横径	4	15.8	2.2	2	16.5	0.7	3	15.7	3	14.1	83	15.1	52	14.9	18	15.8	5	15.2	23	15.7	3	16.0	6	14.8	63	15.2		
5骨体矢状径	8	12.1	0.6	5	12.8	0.4	3	12.3	4	12.1	84	11.7	51	11.6	32	12.2	14	12.2	23	12.6	12	12.3	6	11.7	63	11.7		
5a骨体中央矢状径	4	12.3	1.0	2	12.0	0.0	3	12.7	3	11.6	83	11.9	52	11.8	18	12.4	5	12.2	14	12.6	3	13.0			63	11.9		
3/2長厚示数	3	19.9	0.6	2	20.3	1.1	3	19.8	3	19.3	55	19.3	23	19.4	16	20.5	6	18.9	21	19.8	2	22.1	6	19.9	61	20.4		
5/4骨体断面示数	8	71.5	8.2	5	75.5	3.3	3	75.6	4	73.8	84	71.2	51	71.9	32	71.7	14	70.0	23	72.0	12	69.8			60	71.4		
5a/4a中央断面示数	4	78.5	9.1	2	72.8	3.1	3	81.0	3	82.9	83	78.9	52	79.2	18	79.1	5	80.3	22	80.3	3	81.5			40	77.9		
尺骨								-	-																			
1最大長	2	247.0	12.7	4	247.8	8.3	2	237.0	2	229.5	51	239.2	25	243.0	10	247.8	6	236.2	18	244.6	3	231.0	4	244.8	62	236.2		
2機能長	3	214.0	8.9	4	216.3	7.5	2	210.0	2	206.0	58	209.1	27	213.1	14	216.7	11	206.8	18	214.6	3	203.7	4	211.5	64	209.2		
3最小周	3	40.3	2.5	4	40.5	1.0	2	33.5	2	35.0	78	35.4	46	35.8	24	40.9	12	34.8	20	37.5	4	39.3	4	35.9	65	35.8		
11矢状径	7	12.9	1.2	4	13.0	0.8	2	13.5	3	13.5	89	12.7	52	12.9	38	12.8	17	13.1	24	13.1	10	13.4	8	14.0	63	12.8		
12横径	7	17.0	1.2	4	18.3	1.5	2	16.0	3	16.8	89	16.4	52	15.9	37	17.0	17	16.4	24	17.0	10	16.9	7	15.0	64	16.5		
3/2長厚示数	3	18.9	1.9	4	18.8	1.0	2	-	2	17.0	58	17.0	27	17.0	14	18.7	11	16.8	18	17.5	3	18.9	4	17.7	63	17.0		
11/12骨体断面示数	7	75.7	5.7	4	71.7	7.9	2	-	3	80.7	89	78.3	52	81.8	37	75.5	17	80.2	23	77.9	10	79.8	8	86.8	63	74.9		

1)中井など、2)米元など、3)加藤 (1991)、4)中橋・土肥 (2008)、5)岡崎ほか (2004)、6)中橋 (1987)、7)松下 (1993)、8)九州大学医学部解剖学第2講座 (1988)、9)阿部 (1957)、10)藤崎 (1955)

表8 下肢の計測値の比較（男性）（単位は cm）

	Martin No.	瑞穂遺跡出土近世人骨																				久世 ⁸⁾	九州 ^{9・10)} (現代)					
		男性 L				男性 R				古野 ¹⁾		原口 ²⁾		天徳寺 ³⁾		芝公園 ³⁾		原田 ⁴⁾		稲荷谷 ⁵⁾				天福寺 ⁶⁾		小倉京町 ⁷⁾		
		N	M	S.D		N	M	S.D		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M			n	M	n	M	n
大腿骨																												
1最大長	1	422.0			4	420.3	25.1	1	412.0	1	418.0	41	405.2	18	415.8	24	420.2	9	407.4	19	416.9	10	410.2	2	430	59	407	
2自然位長					3	409.7	25.4	1	410.0	1	414.0	40	403.0	17	418.6	17	415.5	8	406.5	12	412.8	5	389.2	2	426	59	403	
6中央矢状径	3	25.7	3.2	7	26.4	2.9	1	29.0	1	25.0	93	27.3	51	27.2	43	28.2	20	28.4	18	27.7	26	28.0	6	28.3	59	27		
7中央横径	3	93.7	114.6	7	27.7	2.4	1	26.0	1	24.9	93	26.1	51	26.7	43	26.6	21	26.7	18	26.7	25	27.5	8	24.8	59	26		
8中央周	3	84.0	6.2	6	85.3	7.2	1	87.0	1	77.0	93	83.6	51	84.8	43	86.4	20	84.1	17	85.2	25	86.9	6	84.7	59	82		
9骨体上横径	5	31.2	2.8	8	32.0	2.5	1	32.0	3	30.1	92	31.3	51	31.2	42	31.6	20	30.6	17	30.2	20	31.8	8	31.8	59	29		
10骨体上矢状径	5	23.2	3.2	7	24.7	4.1	1	23.0	3	22.6	92	24.0	52	23.9	42	25.6	20	25.7	17	26.1	22	24.8	8	24.8	59	24		
8/2長厚示数	0				3	21.3	1.0	1	21.2	1	18.6	40	20.6	16	20.5	17	20.9	8	21.2	8	20.6	5	21.2	2	19.9	59	20	
6/7中央断面示数	3	95.1	11.7	7	95.7	11.4	1	111.5	1	100.4	93	105.1	51	102.1	43	106.3	20	106.7	17	103.4	25	101.9	6	114	59	104		
10/9上骨体断面示数	5	74.2	6.3	7	76.6	8.9	1	71.9	3	75.1	92	77.1	51	76.9	42	81.5	20	84.2	17	87.3	20	78.1	8	78.2	58	83		
脛骨																												
1全長	1	345.0			0				1	321.0	1	316.0	35	329.9	15	339.4	20	334.2	10	330.4	13	334.5	5	313.6	4	340	61	320
1a最大長	1	347.0			0				1	328.0	1	320.0	37	334.0	17	343.0	21	339.0	10	335.5	17	336.5	5	318.6	4	344	60	327
8中央最大径	4	26.0	2.4	3	28.0	4.6	1	27.0	1	26.8	83	27.7	48	28.7	25	28.7	10	28.7	13	29.6	6	27.7	9	27.4	61	28		
8a栄養孔位最大径	5	30.2	3.1	3	31.0	4.4	1	29.0	1	30.9	80	31.9	48	33.0	39	33.2	16	34.0	17	33.1	17	32.4			60	31		
9中央横径	4	21.0	2.0	3	20.3	3.1	1	20.0	1	19.6	83	20.7	48	20.8	25	22.5	10	21.6	13	22.0	6	21.3	7	20.1	61	21		
9a栄養孔位横径	5	22.4	1.9	3	21.3	3.1	1	23.0	1	20.9	81	23.2	49	23.5	39	24.7	16	24.6	17	23.9	18	23.4			61	24		
10中央周	3	74.7	8.1	2	75.0	14.1	1	74.0	1	74.0	83	76.8	48	78.8	25	80.9	10	77.2	13	79.5	6	76.8			62	78		
10a栄養孔位周	5	84.6	8.0	2	81.5	14.8	1	82.0	1	80.0	-	-	-	-	39	91.5	14	88.6	16	88.9	18	87.6			61	89		
10b最小周	4	69.3	5.9	2	68.0	8.5	1	69.0	1	67.0	80	69.9	46	71.9	41	72.3	17	70.6	15	73.1	13	71.0	7	70	60	71		
9/8中央断面示数	4	80.8	4.5	3	72.7	1.1	1	74.1	1	72.9	83	74.7	48	72.8	25	78.7	10	75.6	13	74.5	6	77.9	7	72.5	61	76		
9a/8a栄養孔断面示数	5	74.4	4.0	3	68.8	2.0	1	79.3	1	67.6	80	72.8	48	71.1	39	74.6	16	72.4	17	72.3	18	73.3			60	78		
10b/1長厚示数	0				0				1	21.5	1	21.2	35	21.3	15	21.5	20	21.7	10	21.1	11	22.6	4	22.0	4	19.8	60	22

表9 上肢の計測値の比較（女性）（単位は cm）

Martin No.	瑞穂遺跡出土近世人骨																将軍家正室 ⁷⁾		将軍家側室 ⁷⁾		江戸女性 ⁷⁾		近代女性 ⁷⁾					
	女性 L				女性 R				原口 ¹⁾		天徳寺 ²⁾		芝公園 ²⁾		原田 ³⁾										稲荷谷 ⁴⁾		天福寺 ⁵⁾	
	N	M	S.D		N	M	S.D		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	n	M	n	M	n	M	n	M		
上腕骨																												
1最大長	3	261.7	10.6	3	265.3	13.6	1	260.0	17	266.8	18	269.7	8	260.4	4	268.5	19	273.7	1	281.0	5	257	7	263	38	265	34	276
2全長	3	259.0	10.0	3	261.7	14.3	1	256.0	16	262.6	17	265.5	5	258.6	5	264.8	15	271.4										
5中央最大径	8	19.8	1.9	6	19.3	3.4	1	19.3	58	19.9	37	19.2	10	19.0	5	19.0	20	20.3	6	20.8	5	18.5	12	19.2	38	18.9	34	19
6中央最小径	8	14.9	1.6	6	14.8	2.5	1	15.9	58	15.0	37	14.4	10	14.8	5	15.2	20	15.5	6	15.7	5	12.8	12	14	38	14.7	34	14.7
7骨体最小周	6	55.2	5.6	5	54.6	6.5	1	56.0			36	52.9	14	52.9	11	51.4	21	56.0	4	54.5	5	50.5	10	53	38	53.7	34	54.2
7a中央周	7	59.6	6.0	6	60.0	8.6	1	57.0	58	57.6	37	56.4	10	56.3	4	52.5	20	59.3	6	60.2	5	53.2	12	55.4	38	55.9	34	55.6
6/5骨体断面示数	8	75.5	6.7	6	76.8	2.6	1	82.6	58	75.6	37	75.0	10	78.0	5	80.1	20	75.9	6	75.6	5	68.9	12	73.1	38	77.8	34	77.2
7/1長厚示数	3	20.8	1.0	3	20.2	1.9	1	21.5	17	21.3	18	19.9	7	20.2	4	18.8	17	20.7			4	20	7	19.8	38	20.3	34	19.7
桡骨																												
1最大長	6	199.7	9.3	7	204.1	10.7	1	193.0	29	199.1	20	204.4	10	196.4	5	196.2	12	187.9			4	188	9	194	38	196	34	200
2機能長	5	186.0	7.7	7	192.1	9.5	1	183.0	29	187.4	21	192.2	12	185.2	6	185.2	11	183.5			4	174	10	183	38	182	34	187
3最小周	6	37.7	2.3	7	39.6	5.1	1	34.0	57	34.7	38	34.2	16	37.8	10	33.4	16	35.7	3	37.0	6	33.4	11	33.8	38	34.2	34	34.1
4骨体横径	6	15.2	1.8	7	15.0	1.5	1	15.4	58	14.7	38	14.4	18	14.4	12	15.1	16	15.3	3	15.0	6	15.5	12	14.5	38	14.5	34	13.8
4a骨体中央横径	7	14.3	1.4	7	14.7	2.1	1	13.3	58	13.7	38	13.3	9	13.6	5	13.8	14	14.0			6	12.9	12	13.3	38	13.6	34	13.7
5骨体矢状径	6	9.3	1.2	7	10.4	1.3	1	9.6	57	10.1	38	10.0	18	9.8	12	10.1	16	10.3	3	10.3	5	8.8	12	9.4	38	10.1	34	10.1
5a骨体中央矢状径	7	9.9	1.3	7	10.3	1.1	1	9.7	57	10.0	38	10.0	9	10.0	5	10.2	14	10.2			5	8.8	12	9.4	38	10.1	34	9.9
3/2長厚示数	5	19.8	1.1	7	18.0	8.1	1	18.6	28	18.2	21	17.7	9	20.0	5	18.4	11	19.4										
5/4骨体断面示数	6	61.6	4.5	7	69.5	4.7	1	62.4	57	68.5	38	69.6	18	68.8	12	67.2	15	67.4	3	69.6	6	57.4	12	64.9	38	69.7	34	73.2
5a/4a中央断面示数	7	68.9	6.2	7	70.4	7.5	1	73.1	57	73.7	38	76.3	9	73.9	5	74.6	14	73.2			6	76.9	12	71.4	38	74.3	34	72.6
尺骨																												
1最大長	2	212.0	12.7	6	223.2	10.0	2	207.0	28	216.0	18	219.2	9	215.1	2	212.0	11	211.1			4	208	6	210	38	215	34	218
2機能長	2	185.0	8.5	6	195.3	9.2	2	183.0	34	190.1	23	191.5	12	191.5	4	188.3	11	184.3			5	180	6	184	38	189	34	190
3最小周	4	32.8	3.0	6	34.8	2.2	2	29.5	58	31.8	39	30.9	16	36.2	8	30.4	12	32.4			7	31.3	8	31.4	38	31.8	34	32.1
11矢状径	5	11.4	1.5	6	12.0	1.1	2	9.5	60	11.0	42	10.5	18	11.1	13	10.8	17	11.2	2	12.0	7	9.6	11	10.6	38	10.8	34	10.6
12横径	5	14.6	1.8	6	15.0	1.3	2	13.1	59	14.1	42	14.0	18	14.4	13	13.9	17	14.3	2	14.0	7	13.1	11	14	38	13.9	34	13.7
3/2長厚示数	2	17.3	0.8	6	17.8	0.7	2	16.1	33	16.8	22	15.9	11	18.5	4	15.7	11	17.6			5	18.4	6	17.5	38	16.8	34	16.9
11/12骨体断面示数	5	78.6	11.2	6	80.4	8.8	2	73.3	59	78.6	42	75.8	18	77.2	13	77.5	17	79.0	2	86.2	7	73.2	11	75.7	38	77.7	34	77.1

1) 東元など、2)加藤（1991）、3)中橋・土肥（2008）、4)岡崎ほか（2004）、5)中橋（1987）、6) 松下（1995）、7) 高橋・坂上（2012）

表10 下肢の計測値の比較（女性）（単位は cm）

Martin No.	瑞穂遺跡出土近世人骨																													
	女性 L				女性 R				原口 ¹⁾		天徳寺 ²⁾		芝公園 ²⁾		原田 ³⁾		稲荷谷 ⁴⁾		天福寺 ⁵⁾		小倉京町 ⁶⁾		将軍家正室 ⁷⁾		将軍家側室 ⁷⁾		江戸女性 ⁷⁾		近代女性 ⁷⁾	
	N	M	S.D		N	M	S.D		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨																														
1最大長	1	381.0		2	378.0	2.8			22	375.9	13	382.5	12	382.8	8	382.0	18	380.6	2	361.0	6	365.8	7	378	38	378	34	382		
2自然位長	1	378.0		1	371.0				19	371.6	12	376.9	8	378.8	8	376.9	16	376.7			4	362.8	5	375	38	374	34	379		
6中央矢状径	3	23.3	4.2	3	23.7	2.1			65	23.4	37	22.9	27	24.1	15	24.3	21	23.6	9	24.3	7	22.7	10	23.6	38	23.5	34	24.3		
7中央横径	3	25.3	3.2	3	27.0	2.0			65	23.5	37	23.3	27	24.3	15	24.5	21	24.0	9	24.6	7	21	12	22.4	38	23.1	34	23		
8中央周	2	70.5	0.7	1	78.0				64	73.7	37	73.1	27	75.7	16	74.6	21	75.2	9	76.4	7	68.6	10	72.6	38	73.9	34	74.3		
9骨体上横径	4	28.0	2.7	4	28.5	3.9			65	28.3	38	27.7	31	28.8	14	28.7	17	27.7	9	29.2	7	25.6	10	26.5	38	27.9	34	28.3		
10骨体上矢状径	4	21.0	2.2	4	22.0	2.9			65	20.9	38	20.2	31	22.4	14	21.6	17	22.7	10	21.4	7	21.2	10	22.4	38	23.4	34	23.6		
8/2長厚示数	1	18.8		0					19	19.8	12	19.7	7	20.6	8	19.3	15	19.8												
6/7中央断面示数	3	91.7	4.8	3	87.7	5.5			65	100.1	37	98.6	27	99.7	15	99.4	21	98.7	9	99.3	7	108.1	10	105	38	102	34	106		
10/9上骨体断面示数	4	75.3	9.0	4	77.8	11.7			65	74.4	38	73.3	31	78.0	14	75.4	17	82.3	9	73.9	7	83.1	10	85	38	83.8	34	83.4		
																					5	33.2	5	23.6	38	18.8	34	21.7		
脛骨																														
1全長	2	286.0	12.7	2	287.5	10.6	1	307.0	15	304.1	15	306.5	13	304.8	7	303.1	15	301.8			4	300.7	9	301	38	304	34	305		
1a最大長	2	292.5	14.8	2	296.0	17.0	1	300.0	14	307.6	15	310.3	18	306.4	7	307.6	15	305.6			5	308	10	306	38	308	34	309		
8中央最大径	4	25.0	3.7	3	24.0	3.6	1	28.2	58	24.0	36	23.4	15	24.5	7	25.3	17	24.4			7	22.1	12	24.6	38	24.3	34	25.1		
8a栄養孔位最大径	5	26.8	3.4	3	27.0	4.6	1	30.7	56	27.8	35	26.5	24	28.0	12	28.8	19	27.8	3	30.0	6	26.7	13	27.9	38	28.4	34	29.5		
9中央横径	4	19.0	2.9	3	20.0	2.6	1	18.4	58	18.0	36	17.5	16	19.0	7	17.9	17	18.6			7	16.9	12	18.4	38	19.2	34	19.6		
9a栄養孔位横径	5	20.4	1.7	3	21.7	1.5	1	19.8	56	20.1	35	19.1	23	20.7	12	20.0	19	20.7	3	21.3	6	19.2	13	20.6	38	21.5	34	23		
10中央周	4	70.8	9.0	3	70.3	10.7	1	74.0	58	66.8	36	65.1	15	69.5	7	66.7	17	67.5			6	62.1	12	67.3	38	68.4	34	69		
10a栄養孔位周	5	75.8	7.6	3	77.7	9.0	1	82.0					22	77.8	11	76.1	19	76.5	3	82.7	4	72.1	13	76.8	38	77.7	34	82.2		
10b最小周	4	65.0	6.7	3	65.3	8.1	1	66.0	57	61.3	35	60.3	24	62.3	13	60.4	17	62.7	2	68.0	7	56	12	61.5	38	64.4	34	65.2		
9/8中央断面示数	4	75.9	1.6	3	83.5	1.9	1	65.3	44	75.7	36	74.8	15	78.2	7	70.8	17	76.9			6	76.3	12	75.2	38	79	34	78		
9a/8a栄養孔断面示数	5	76.6	7.0	3	81.1	8.1	1	64.6	44	72.9	35	72.2	23	74.3	12	69.6	19	75.0	2	73.0	6	72.1	13	73.9	38	75.7	34	78		
10b/1長厚示数	2	21.0	0.6	2	21.2	0.7	1	21.5	13	20.6	14	19.9	11	20.4	7	19.9	14	21.2			4	19.1	9	20.6	38	21.2	34	21.4		
肋骨																														
1全長	1	298		1	298.0		2	294.0	17	300.1	13	302.5	9	301.4	4	298.0	6	300.0			4	292.8	6	299	38	296	34	303		
2中央最大径	1	12		1	12.0		2	12.5	53	12.5	35	12.4	11	12.2	4	13.0	11	12.8			7	12.8	10	12.8	38	13	34	13.6		
3中央最小径	1	9		1	9.0		2	9.6	54	8.9	35	8.7	11	9.5	4	9.0	11	9.2			7	8.5	10	9.5	38	8.9	34	10.3		
4中央周	1	35		1	35.0		2	36.5	53	35.7	35	35.7	11	37.1	4	34.8	11	36.6			7	35.1	10	37.8	38	36.9	34	38.5		
4a最小周	1	33		1	33.0		2	31.5	48	30.9	34	29.9	15	33.9	5	29.4	4	32.9												
3/2中央断面示数	1	75		1	75.0		2	77.9	53	70.9	35	70.3	11	77.8	4	69.8	11	71.9			7	66.9	10	74.2	38	68.5	34	76.2		
4a/1長厚示数	1	11.1		1	11.1		2	10.7	17	10.5	13	10.4	8	11.0	4	10.1	5	11.0												

3. 瑞穂遺跡出土弥生時代人骨の歯牙のストロンチウム同位体比分析

米元史織^{1・3}・足立達朗^{2・3}・舟橋京子^{2・3}・中野伸彦^{2・3}・小山内康人^{2・3}

1: 九州大学総合研究博物館

2: 九州大学大学院比較社会文化研究院

3: 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

はじめに

ヒトの歯や骨から検出されるストロンチウム同位体比をもちいて、ヒトの移動や通婚圏や生活圏、さらには交易や交換を読み取ろうという研究はEricsonによって1985年に開始され、その後、現在まで数多くの研究者によって研究が行われている(e.g. Bentley et al., 2003, 2004; Slovak and Paytan, 2011)。日本においては縄文時代に主に研究が集中しているが(Kusaka et al., 2008等)、弥生時代の人骨に対する研究もおこなわれ始めている。本稿では、瑞穂遺跡から出土した弥生時代人骨の歯牙のSr同位体比分析($^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値)を行った。

Srは岩石に比較的多く含まれている元素であり、自然界には主に4つの同位体がある(^{84}Sr , ^{86}Sr , ^{87}Sr , ^{88}Sr)。そのうちの ^{86}Sr と ^{87}Sr の含有量の比を用いて示されるのがSrの同位体比(以下 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$)である。Sr同位体比は基盤地質の構成鉱物・岩石の生成年代によってそれぞれ異なる値を示しており、一般的には、海洋底の玄武岩は均質で低い $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値(約0.703)を、花崗岩は高いRb/Sr比をもつため、相対的に高い $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を示すと考えられている(Bentley, 2006)。また、形成年代の古い基盤地質の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は高く、比較的新しい基盤地質の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は低い(Faure, 1977)という傾向を示す。このように形成年代や岩石の化学組成によって基盤地質中に含まれている $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は異なるということがわかっている。さらに、基盤地質の影響をうける地下水やその水を摂取する動植物を通して人体、特に歯牙や骨に土地特有の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値が取り込まれる。中でも歯牙は一度形成されると骨ほどにはリモデリングされないため、歯牙の形成時期である幼少期に生育した場所の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を反映する可能性が指摘されている。さらに、歯牙の主成分はアパタイト($\text{Ca}_5(\text{PO}_4)_3(\text{F}, \text{Cl}, \text{OH})_2$)であるため、Caの濃度はほぼ一定である。そこで、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値とともに、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値を分析することで、Srの相対的な濃度を把握し、Caの溶脱など二次的変質の影響を加味したうえで検討することが可能となる。

方法

分析には九州大学比較社会文化研究院・アジア埋蔵文化財研究センターに設置されているレーザー溶出型二重収束型高分解能ICPマルチコレクタ質量分析装置LA-MC-ICP-MS(MC-ICP-MS: Thermo Fisher Scientific社製Finnigan Neptune plus, LA: Photone Machines社製Analyte G2)を用いた。このレーザー溶出装置を用いることで、準非破壊で、かつ歯冠における測定部位をより厳密に限定して局所分析することが可能となる。これは、幼児期のある年齢段階において他地域で育った個体群を識別しえる画期的な方法であるといえよう(Porhaska, 2002)。分析手法としては、まず、測定にあたって電子顕微鏡を用いて歯牙表面の状態確認を行い、測定部位を決定する。レーザーのフォーカシングに問題となる歯牙表面の風化や歯牙表面の曲面は歯科用エンジン(円柱形極細ダイヤモンドポイント)によって表面研磨(3mm×7mm程度)を行った。そして、LA-MC-ICP-MSで $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ お

よび $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ の分析を行った後、低真空走査型電子顕微鏡（SEM、Keyence 社製 VHX-D510）で分析痕の観察を行った。解析には、マイクロソフト社の表計算ソフト Excel 用アドインモジュールである Isoplot/Ex3.70 (Ludwig 2008) を

ストロンチウム同位体比分析の結果

計測を行った歯牙は表 1 の通りである。基本的には年齢と性別を推定できた個体を分析対象としており、3～4 歳あるいは 5～6 歳の段階で形成される部位を測定した (Hillson 1996)。本分析では対象人骨の幼児期の生育環境を測定しているといえよう。対象個体のうち 46 号甕棺出土人骨のみ性別の判定ができていない。

Sr 同位体比分析の結果を表 1 に示す。 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をグラフにしたものが図 1、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値を横軸に、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を縦軸に展開したものが図 2 である。図 3 には、比較対象として大野城市古野遺跡出土人骨の Sr 同位体比の値 (中井ほか, 2015) を載せている。

4 号甕棺出土人骨 (男性熟年) の上顎左側中切歯は 5 ケ所分析を行い、加重平均値は 0.70851 ± 0.00018 で MSWD は 2.8 である。分析番号 1 の値がやや高いが、誤差の範囲は重複しており、4 号人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値に大きなばらつきはないといえる。 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられずまとまっているといえよう。

19 号甕棺出土人骨 (男性成年) の上顎左側第 2 小臼歯は 5 ケ所分析を行い、加重平均値は 0.70881 ± 0.00021 で MSWD は 2.5 である。分析番号 1 の値がやや低い、誤差の範囲は重複しており、19 号人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられない。

28 号甕棺出土人骨 (女性熟年) の下顎左側側切歯は 5 ケ所分析を行い、加重平均値は 0.70875 ± 0.00014 で MSWD は 2.9 である。分析番号 1 の値がやや低い、誤差の範囲は重複しており、28 号人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられない。

33 号甕棺出土人骨 (男性熟年) の上顎左側側切歯は 5 ケ所分析を行った。分析番号 1 の値が 0.70949 と著しく高く、誤差の範囲も他 4 回の分析とは全く重複していない。そのため、この値を外れ値として加重平均値を算出した。結果は、 0.708981 ± 0.00024 で MSWD は 3.7 である。33 号人骨の $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値には大きなばらつきはみられない。

46 号甕棺出土人骨 (性別不明成年) の上顎右側中切歯は 6 ケ所分析を行った。分析番号 1 の値が 0.70941 と著しく高く、誤差の範囲も他 5 回の分析とは全く重複していない。そのため、この値を外れ値として加重平均値を算出した。結果は、 0.70807 ± 0.00044 で MSWD は 13 である。46 号人骨の $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値には大きなばらつきはみられない。

5 号石蓋土坑墓 (女性熟年) の上顎右側第 2 小臼歯は 5 ケ所分析を行い、加重平均値は 0.7089 ± 0.00017 で MSWD は 2.2 である。本個体の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられないといえよう。

7 号石蓋土坑墓 (女性熟年) の上顎左側第 1 小臼歯は 5 ケ所分析を行い、加重平均値は 0.70885 ± 0.00014 で MSWD は 1.8 である。本個体の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値にも大きなばらつきはみられないといえよう。

以上の結果から、瑞穂遺跡出土弥生時代人骨各個体の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値、 $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値は極めて安定しており、特に $^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$ 値は各個体内でのばらつきが少ないことから Ca の溶脱など二次的変質の影響

を受けている可能性は低い。

図1をみると46号甕棺出土人骨のみが他の6体よりも明らかに低い値を示す。他の6体は男女・埋葬形態を問わず0.70850以上の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を示すことがわかる。

考察

分析した6体のうち5体が0.708504-0.70893の値を示す。したがって、この値を瑞穂遺跡に埋葬された人々の多くが育った瑞穂遺跡周辺の在地の値と考えることができよう。この中には時期的に甕棺墓に後出する石蓋土坑墓の女性も含まれることから、埋葬時期の差に対応したSr同位体比の違いが認められない。さらに、0.708504-0.70893という在地の値を示す個体群には男女ともに含まれることがわかる。この在地の値を示す個体に関しては、瑞穂遺跡の墓地経営集落出身者の可能性が考えられる一方で、同一基盤地質に所在する別集落出身者が婚入・移住してきた可能性も考えられ、類似する $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を示す基盤地質の範囲内を男女どちらとも移動を行っている可能性もある。

さらに、分析の結果から46号甕棺出土人骨のように大きく異なる $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を示す個体が、地元の値を示す同時期のK33号甕棺や後出する5号・7号石蓋土坑墓と同一墓域内に存在することを指摘することができよう。46号甕棺出土人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値の評価を行うために、瑞穂遺跡と同じ大野城市所在の古野遺跡出土近世人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値との比較を行った(図3)。Sr同位体比値の確率密度分布の中に、正規分布に従うピークがいくつあるか、すなわち異なるクラスターがいくつあるかを計算するため、確率密度計算を行った結果、大きく0.70757、0.70804、0.70878をピークとする3つのクラスターが確認された。図3をみると0.70757、0.70804をピークとするクラスターの差は誤差範囲を加味すると極めて小さい。そのため、0.70757-0.70804と0.70878をそれぞれピークとする2つのクラスターとしてとらえると、値が低い方のクラスターには46号甕棺出土人骨と古野の人骨(7・11・27号)が含まれる。また、古野41号人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値は、46号甕棺以外の瑞穂遺跡出土弥生時代人骨と同様の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値を示す。古野遺跡は乙金地区の総庄屋である高原家と関係の深い関家の家族墓地であり、構成員の多くは埋葬された地域で生まれ育ったと考えることができ、7・11・27号墓の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値がまとまる0.70757-0.70804がこの地域で育った人の値と考えることができよう。ここで、両遺跡の基盤地質を見てみる(図4)と、瑞穂遺跡は大野城市の中でも平地の完新世に堆積した沖積地ないしはAso4上に居住域・墓域が位置していたと推定される(大野城市教委2001など)。一方で古野遺跡に関しては早良花崗岩帯の丘陵の落ち際に居住域・墓域が存在する。古人骨歯牙のSr同位体比に大きく影響していると考えられる飲料水について考えると、瑞穂遺跡は遺跡近在の井戸などの湧水もしくは牛頸川の流水の使用の可能性があり、古野遺跡に関しては近世という時代性から井戸の使用に限定できよう。瑞穂遺跡において牛頸川の流水を使用していた場合、遺跡から約1キロ上流には古野遺跡周辺と同じ早良花崗岩帯からなる丘陵が存在しており、瑞穂・古野両遺跡に埋葬された人々は同じ花崗岩帯の影響を受けた飲料水を接取していた可能性が高い。しかし、分析結果にみられるように両遺跡出身者と考えられるSr同位体比は異なっている。この相違の要因として、瑞穂遺跡において遺跡近在の湧水を使用していた場合や、同じ早良花崗岩であるが岩帯の相違によりSr同位体比が異なっているなど、様々な可能性があげられよう。

次に、Sr同位体比分析結果と墓域における各個体の出土位置と埋葬様式を見てみよう。本遺跡の甕棺の分布は北東-南西方向に列状に墓域が営まれ、一部先行する甕棺を切る形で新たに埋葬が行わ

れており、全体としては列状の埋葬を指向しながらも一部集塊状を呈するようになりつつある過渡期的な様相の墓地である。調査区の北東側で検出された甕棺墓のうち出土人骨の Sr 分析が可能であったのは K 19・24・28 である。これらはいずれも地元の値を示している。一方、調査区南西側で検出された墓から出土した人骨のうち Sr 分析が可能であったのは K 33・46 号甕棺と 5・7 号石蓋土坑墓出土人骨である。このうち、46 号のみが生育地が他所の可能性を示す個体である。K 46 号は、瑞穂在地の値を示す K 33 号甕棺墓と近接して埋置されており、他所生育者であっても空間的に分けられることなく、同一列状に近接して埋葬されていると言えよう。

また、土坑墓出土人骨と甕棺出土人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値に大きな違いは見られない。このことから、時期が変わっても当該地域で育った人々の生育圏に大きな変化はない可能性が指摘できよう。

まとめ

個体数や保存状態の問題が大きく、暫定的な結果の読み取りではあるが、46 号甕棺出土人骨の $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値の結果から、幼少期にやや異なる環境で育った個体が当該地域に移入し、同じ墓地に埋葬列を違えることなく埋葬されていたと考えられよう。また、土坑墓と甕棺墓で $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値に大きな変化がないことからこれら被葬者の生育圏に大きな差はない可能性が高い。人の移動や婚姻圏、墓制との関係をより詳細に明らかにするためには今後のデータの収集が急務である。

謝辞

本報告を行うにあたり、大野城市教育委員会諸氏には多くのご配慮を賜りました。深謝いたします。

参考文献

- Bentley R.A. 2006 Strontium Isotopes from the Earth to the Archaeological Skeleton: A Review. *Journal of Archaeological Method and Theory*, 13:135-187
- Bentley R.A., Krause R., Price T.D., Kaufmann B. 2003 Human mobility at the early Neolithic settlement of Vaihingen, Germany: evidence from strontium isotope analysis. *Archaeometry*, 45: 471-486.
- Bentley R.A., Price T.D., Stephan E. 2004 Determining the 'local' $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ range for archaeological skeletons: A case study from Neolithic Europe. *Journal of Archaeological Science*, 31: 365-375.
- Ericson J.E. 1985 Strontium isotope characterization in the study of prehistoric human ecology. *Journal of Human evolution*, 14:503-514.
- Faure G, 1977 Principles of isotope geology. Wiley, New York.
- Horstwood M.S.A., Evans J.A., Montgomery J. 2008 Determination of Sr isotopes in calcium phosphates using laser ablation inductively coupled plasma mass spectrometry and their application to archaeological tooth enamel. *Geochimica et Cosmochimica Acta*, 72: 5659-5674.
- Hillson S. 1996 Dental Anthropology. Cambridge University Press, Cambridge.
- Kusaka S, Igarashi T, Hyodo F, Yumoto T, Katayama K. 2008 Variability in stable isotope ratios in two Late-Final Jomon communities in the Tokai coastal region and its relationship with sex and ritual tooth ablation. *Anthropological Science* 116, pp.171-181.
- 大野城市教育委員会 2001 『瑞穂・原の埴遺跡』 大野城市.
- Porhaska T., Latkoczy C., Schultheis G., Teschler-Nicola M., Stingeder G. 2002 Investigation of

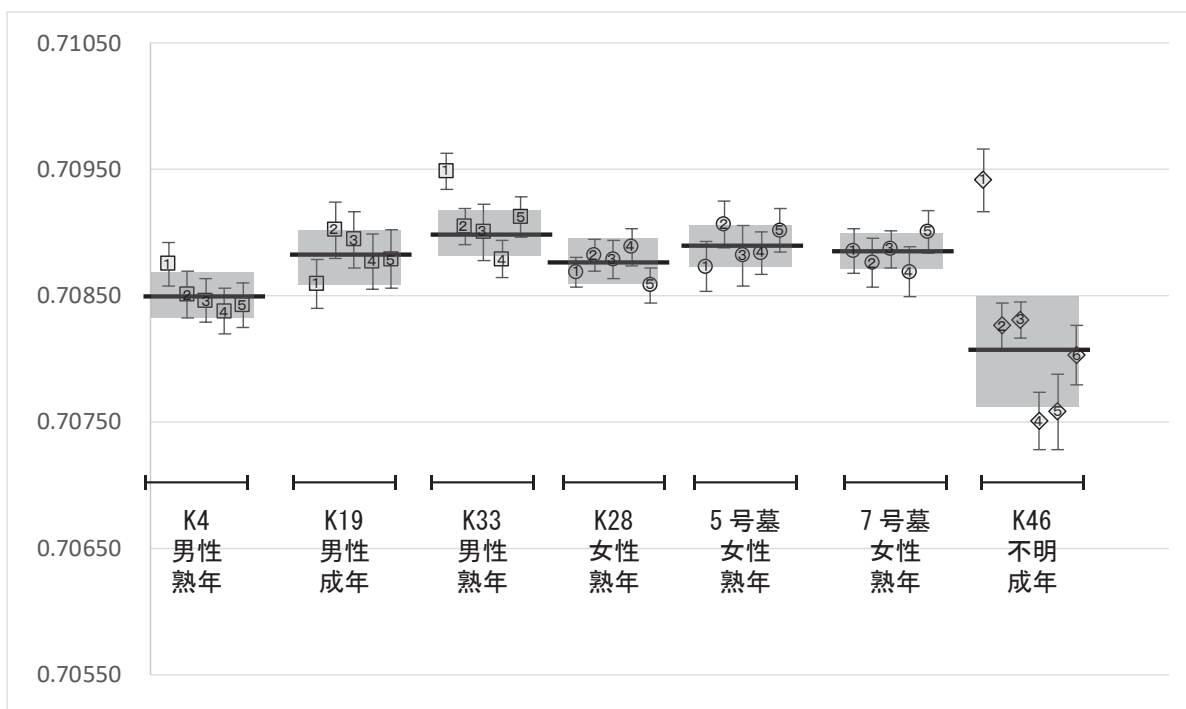
Sr isotope ratios in prehistoric human bones and teeth using laser ablation ICP-MS and ICP-MS after Rb/Sr separation. Journal of Analytical Atomic Spectrometry, 17:887-891.

Slovak NM and Paytan A. 2011 Applications of Sr Isotopes in Archaeology. M Baskaran(ed) , Handbook of Environmental Isotope Geochemistry, Advances in Isotope Geochemistry. Springer-Verlag Berlin Heidelberg, 743-768.

表 1 ストロンチウム同位体比分析の結果

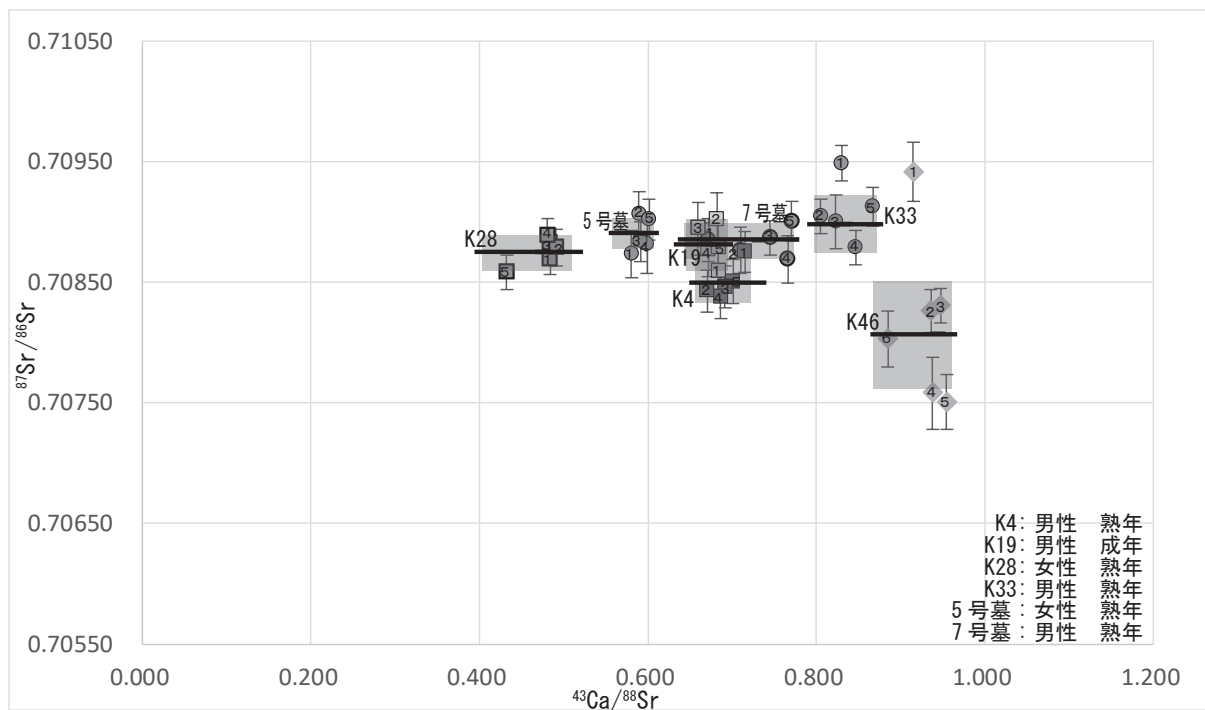
遺跡名	資料番号	性別	年齢	分析箇所	分析箇所 推定年齢	分析番号	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	StdErr (2 σ)	43Ca/88Sr	加重平均(全分析値)	誤差	MSWD
瑞穂	K4	男性	熟年	左上顎中 切歯		1	0.70875	0.00017	0.71510	0.70851	0.00018	2.8
						2	0.70851	0.00019	0.70085			
						3	0.70846	0.00017	0.69170			
						4	0.70838	0.00018	0.68629			
						5	0.70843	0.00018	0.67027			
	K19	男性	成年	上顎左第 2小臼歯		1	0.70859	0.00020	0.68385	0.70881	0.00021	2.5
						2	0.70902	0.00022	0.68198			
						3	0.70894	0.00022	0.65928			
						4	0.70877	0.00022	0.67176			
						5	0.70879	0.00023	0.68360			
	K28	女性	熟年	下顎左側 切歯		1	0.70869	0.00012	0.48364	0.70875	0.00014	2.9
						2	0.70882	0.00013	0.48429			
						3	0.70878	0.00015	0.49119			
						4	0.70888	0.00015	0.48074			
						5	0.70858	0.00014	0.43206			
	K33	男性	熟年	上顎左側 切歯		1	0.70949	*	0.00014	0.70898	0.00024	3.7
						2	0.70904	0.00014	0.80526			
						3	0.70900	0.00022	0.82271			
						4	0.70879	0.00014	0.84666			
						5	0.70912	0.00016	0.86692			
	K46	不明	成年	上顎右中 切歯		1	0.70941	*	0.00025	0.70807	0.00044	13
						2	0.70826	0.00018	0.93577			
						3	0.70831	0.00014	0.94754			
						4	0.70751	0.00023	0.95460			
						5	0.70758	0.00030	0.93814			
						6	0.70803	*	0.00023			
	土壌墓No.5	女性	熟年	上顎右第 2小臼歯		1	0.70873	0.00019	0.58036	0.7089	0.00017	2.2
						2	0.70906	0.00019	0.58937			
						3	0.70882	0.00024	0.59917			
						4	0.70884	0.00017	0.59153			
						5	0.70902	0.00017	0.60116			
	土壌墓No.7	女性	熟年	上顎左第 1小臼歯		1	0.70885	0.00018	0.67161	0.70885	0.00014	1.8
						2	0.70876	0.00019	0.70997			
						3	0.70887	0.00015	0.74491			
						4	0.70869	0.00020	0.76622			
						5	0.70900	0.00017	0.77053			

* は外れ値あるいは分析痕が粗なため平均値からは外している



瑞穂遺跡出土人骨：Kは甕棺を示し、@号墓表記は石蓋土壌墓 図中の番号は表1の分析番号
墓番号・性別・年齢の順に上から表記する
黒い線は各個体の重みづけ平均値。 網掛けは誤差範囲を示す。

図1 瑞穂遺跡出土人骨の Sr 同位体比分析の結果： $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$



瑞穂遺跡出土人骨：Kは甕棺を示し、@号墓表記は石蓋土壌墓 図中の番号は表1の分析番号
黒い線は各個体の重みづけ平均値。 網掛けは誤差範囲を示す。

図2 瑞穂遺跡出土人骨の Sr/Ca 同位体比分析の結果： $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}/^{43}\text{Ca}/^{88}\text{Sr}$

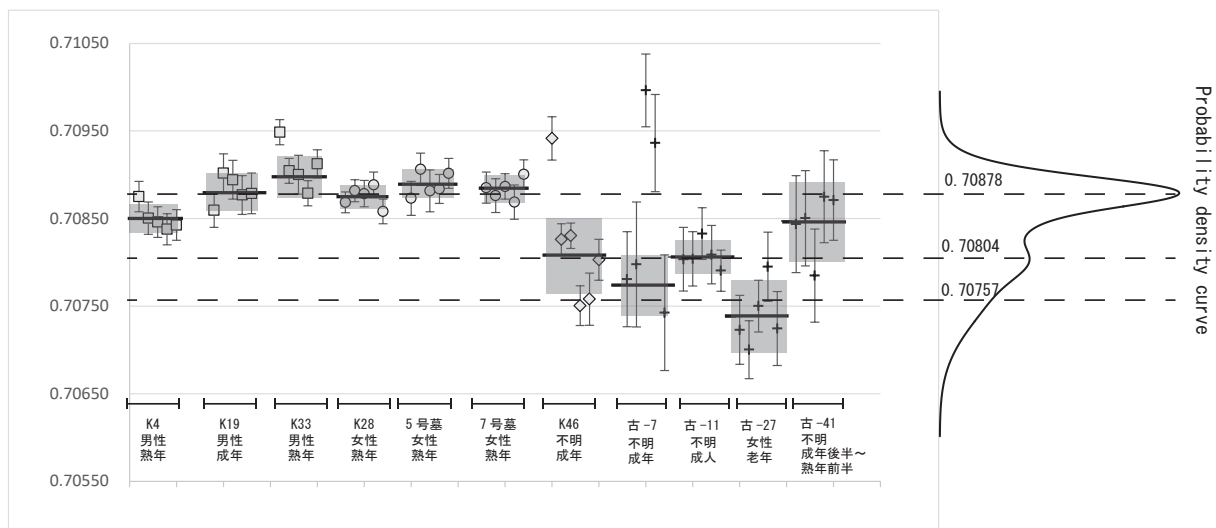


図3 瑞穂遺跡出土人骨と古野遺跡のSr同位体比の結果の比較 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$

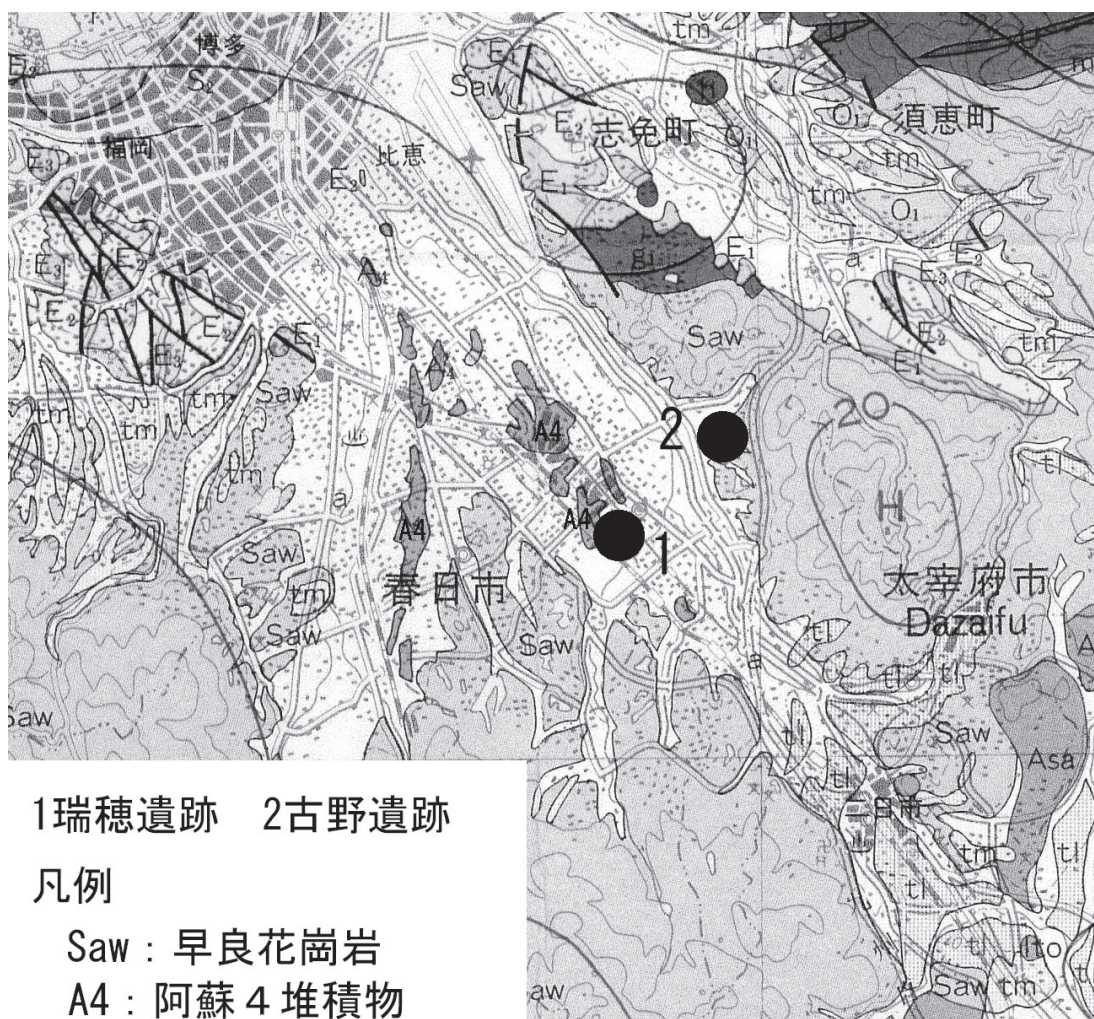
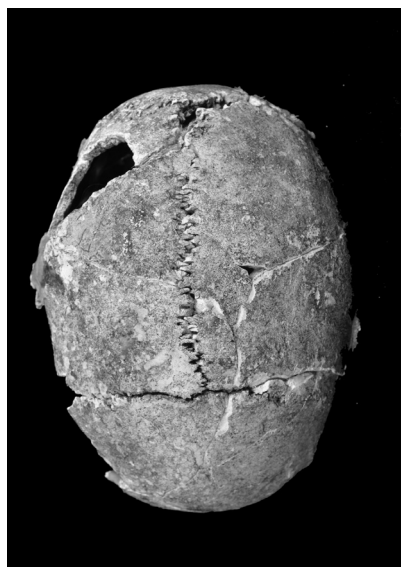


図4 地質図（産業総合研究所地質調査総合センター 20万分の1地質図幅 福岡一部改変して引用）

写真図版 1



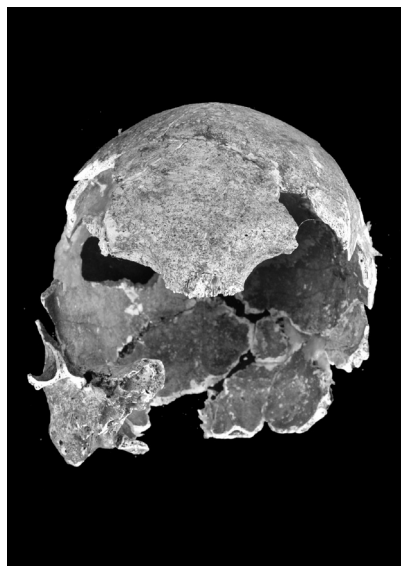
K4 号上面観



K16 号上面観



K35 号上面観



K4 号正面観



K16 号正面観



K35 号正面観



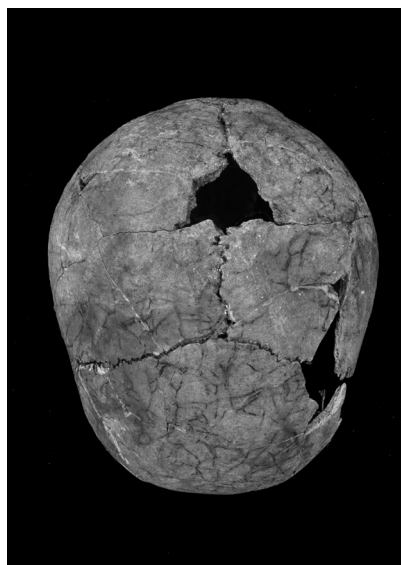
K4 号人側面観



K16 号側面観



K35 号側面観



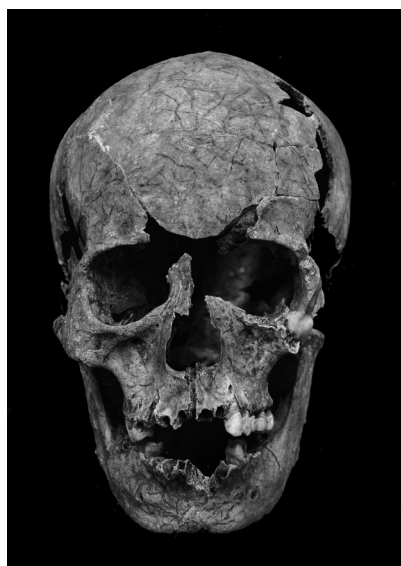
SX04 号上面観



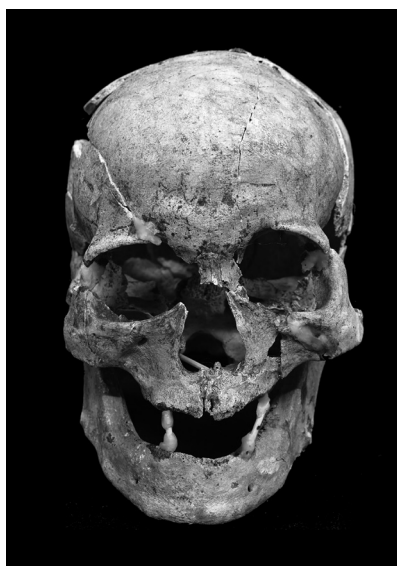
SX07 号上面観



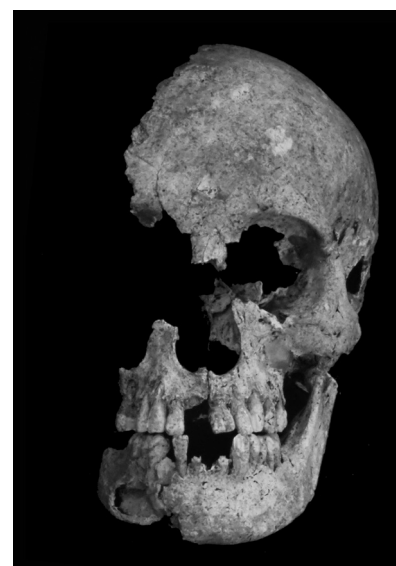
SX51 号上面観



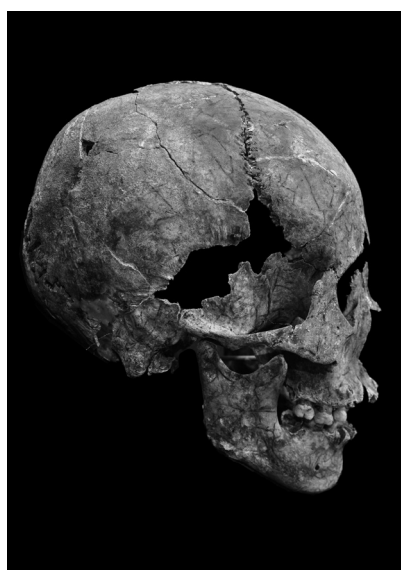
SX04 号正面観



SX07 号正面観



SX51 号正面観



SX04 号側面観



SX07 号側面観



SX51 号側面観



SX63 号正面観



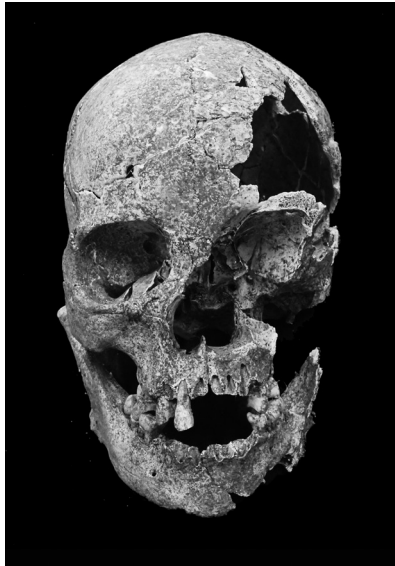
SX68 号上面観



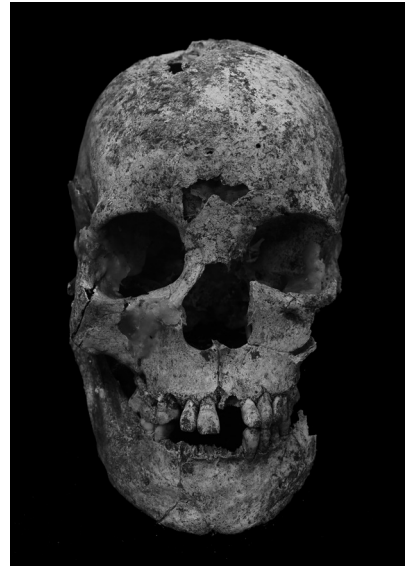
SX103 号上面観



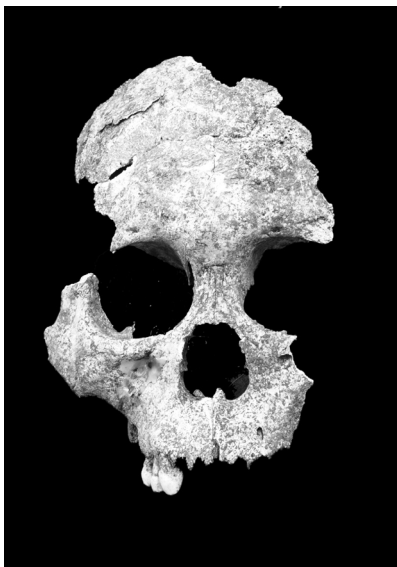
SX63 号側面観



SX68 号正面観



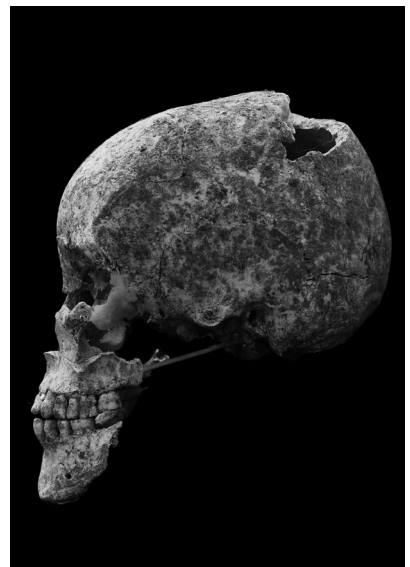
SX103 号正面観



SX67 号正面観



SX68 号側面観



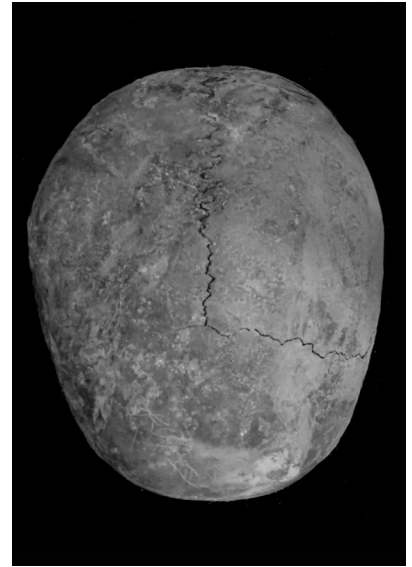
SX103 号側面観



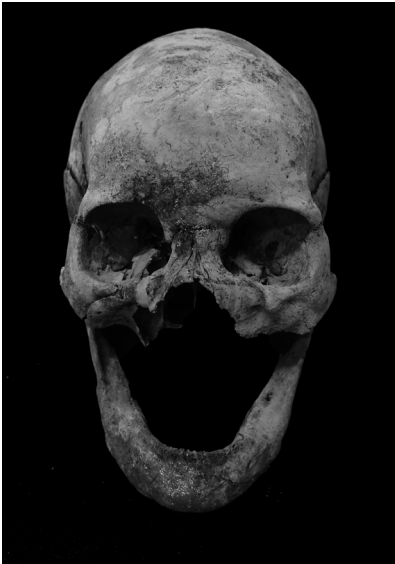
SX107 号上面観



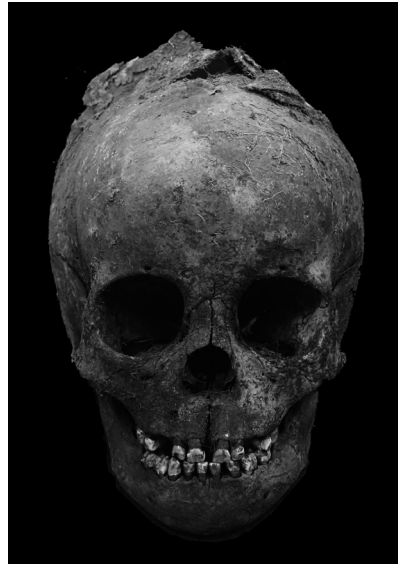
SX172 号上面観



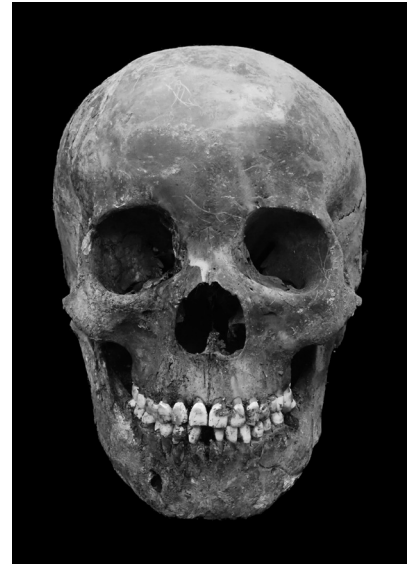
SX176 号上面観



SX107 号正面観



SX172 号正面観



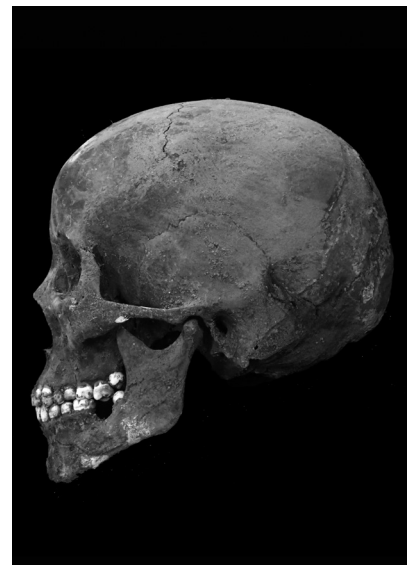
SX176 号正面観



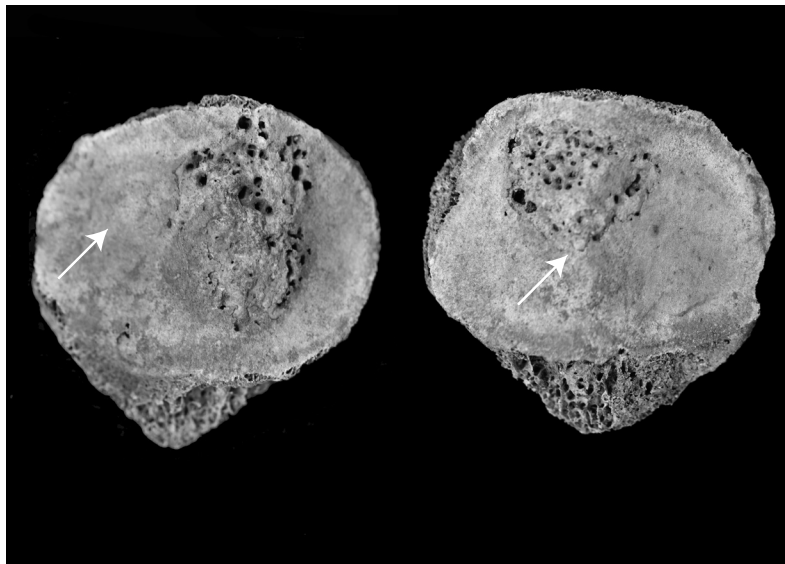
SX107 号側面観



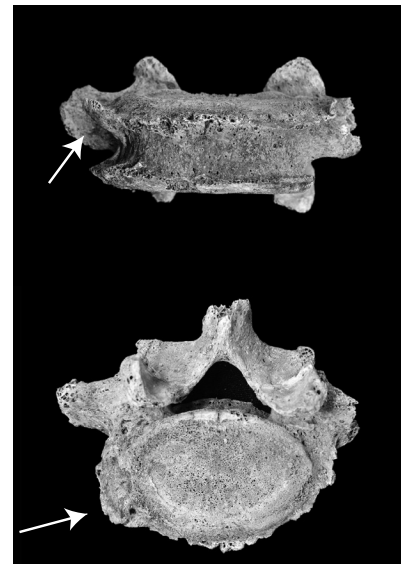
SX172 号側面観



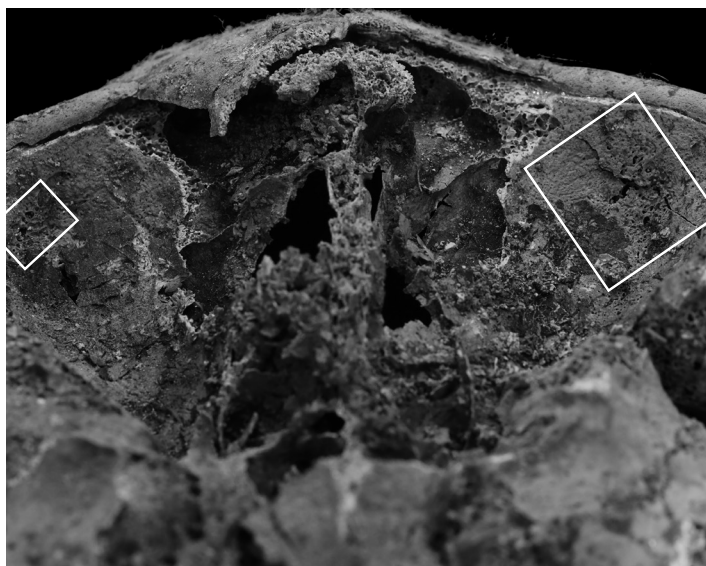
SX176 号側面観



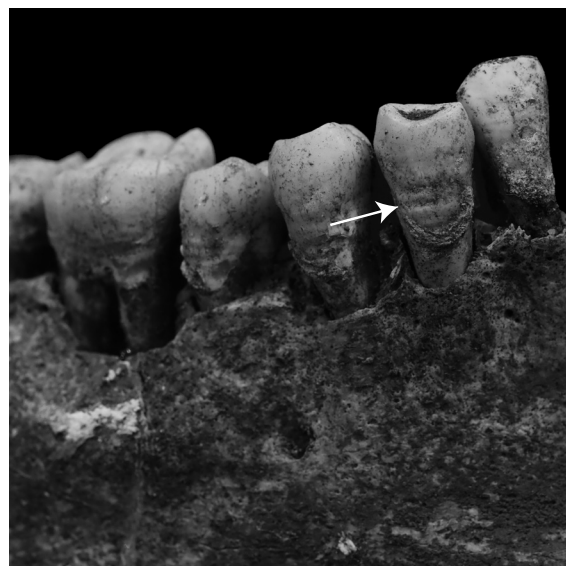
SX05 号膝蓋骨に見られる関節炎



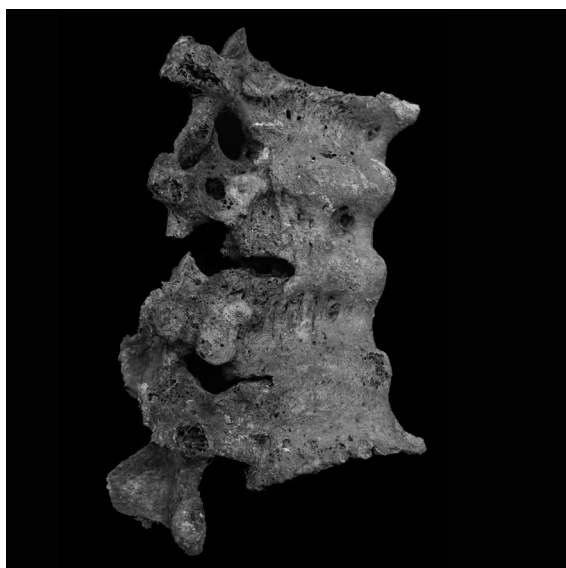
SX07 号椎骨の骨棘形成
(上：腹側・下：上面))



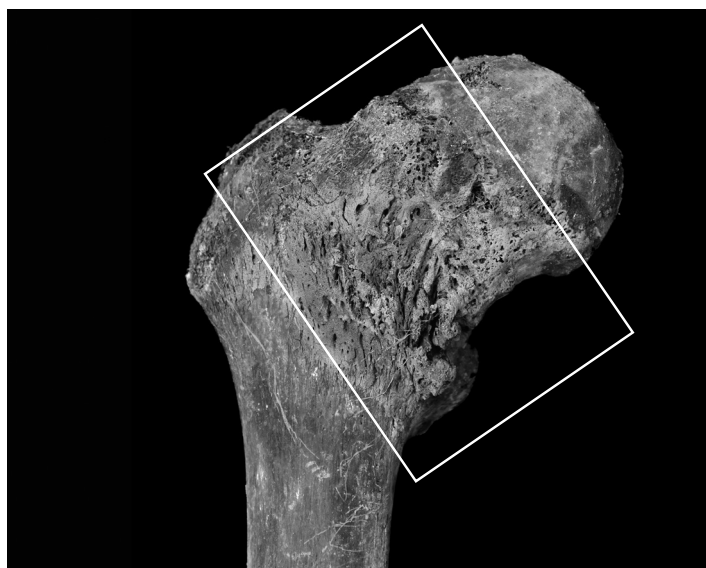
仮 A 号クリブラ・オルビタリア (CO)



SX79 号右下顎犬歯の LEH



SX158 号胸椎の癒合



SX176 号右大腿骨骨頸部の著しい骨増殖

VIII. 総 括

1. 瑞穂遺跡における土地利用の変遷

ここでは、既往の調査成果も含め瑞穂遺跡における主要な遺構・遺物を取り上げ、当地における土地利用の変遷について整理する。

【旧石器時代】 6次で細石刃があるほか、7・8次で細石刃核（第47図104）が出土した。明確な遺構はなく遺物量も限定的であることから、活発な人類活動は認められない。

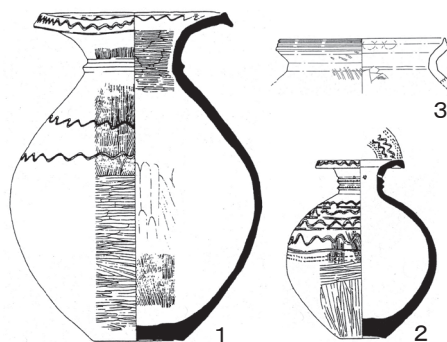
【縄文時代】 現在のところ、縄文時代の確実な遺構・遺物は確認されていない。隣接する石勺遺跡・原ノ口遺跡・駿河遺跡では落とし穴状遺構や縄文早期・晩期の土器などが確認されている。

【弥生時代】 本書で報告した7・8次で墳墓がある。中期初頭前後に出現し、終末期まで連綿と継続する。また、10次では中期後半の溝がある。性格は不明であるが、瑞穂遺跡では当該期の居住関連遺構がないことや甕棺の破片を伴うことから、墳墓に関連した遺構の可能性はある。この溝からは瀬戸内系と考えられる土器が複数出土しており注目される。1点はいわゆる「垂下口縁壺」、ほかの1点は器台もしくは高杯脚部の可能性がある破片である。いずれも胎土からみると搬入品の可能性が高い。現状で明確な類例は確認しきれていないが、西部瀬戸内の可能性を想定しておきたい（口縁端面・上面に波状文を有す壺を下に図示）。凹線文ではないことから中期中葉頃の所産であろうか。当該資料は、弥生土器の並行関係の推定や対外交流という点でも重要で、引き続き類例の探索を進める必要がある。なお、隣接する石勺遺跡でも瀬戸内系の凹線文土器が出土している。

【古墳時代】 7・8次で古墳3基が確認され、古墳時代初頭に位置づけられる。その後は、居住域が展開し、古墳時代中期前半を中心とした時期の竪穴住居などが確認されている。5世紀後半以降は遺構・遺物が希薄となり、隣接する石勺遺跡が集落の中心となると考えられる。なお、6次では須恵器提瓶・土師器鉢・鉄刀子を副葬する土坑墓があり、6～7世紀に位置づけられる。

【奈良～平安時代】 10次ST01は奈良時代後半～平安時代初頭に位置づけられ、9次SK04も奈良時代後半の土坑墓の可能性はある。この他は遺物が散見する程度で、遺構・遺物は希薄である。

【中世～近世】 5次調査地（SD01・02）から9次調査地へと伸びる大溝については、中世末には開削され近世後期に埋没したと考えられるが、性格については不明である。埋土中から美濃焼の灰釉陶器が出土しており注目される。7・8次調査では近世～近現代までの墓地がある。



1：愛媛県大峰ヶ台遺跡
2：広島県中山貝塚
3：石勺遺跡M地点
(S = 1/10)

※ 1は菅原康夫・梅木謙一編 2000『弥生土器の様式と編年―四国編―』（木耳社）、2は正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』（木耳社）、3は大野城市教委 2013『石勺遺跡6』より転載

第123図 波状文を施す壺と石勺遺跡の凹線文土器

2. 弥生時代～古墳時代墳墓の変遷とその背景

本文中で報告したように、瑞穂遺跡第7・8次調査では弥生時代中期～古墳時代前期に至るまで連綿と墓地が営まれている様子が明らかとなった（以下、瑞穂墓地）。ここでは、瑞穂墓地の変遷について大きく6段階に分けて整理する。さらに、溝口孝司氏の一連の研究成果を参照しながら、その構造の背景について説明を加える。また、周辺遺跡の動態を整理することにより、瑞穂墓地に埋葬された被葬者たちがどのような集団であったのかについて推論したい。

（1）変遷と構造

【1段階（中期初頭前後＝KⅡa式期前後）】 甕棺墓の中で最もさかのぼるものとしてK10があり、KⅡa式とKⅡb式を組み合わせた合口甕棺である。K10は他の甕棺墓群とは離れた調査区南東部に位置し、主軸を東西方向に向ける。同様の選地・主軸をとるものにSX13・186・194がある。いずれも組合箱型Ⅱ型式木棺と考えられ、前期末～中期初頭に多い（柳田2003）。木棺墓は次段階に継続しないことから、瑞穂墓地は前期末～中期初頭に木棺墓からはじまった可能性が高い。なお、当段階は造墓数が少ないものの列状を呈す。成人墓のみで構成し、次段階には継続しない。

二列構成にはなっていないものの主軸を揃えて列をなし、溝口氏の「列墓a」に該当する。

【2段階（中期前半～中頃前後＝KⅡb～Ⅱc・KⅢa式期）】 最も造墓数が多い段階で、すべて甕棺墓で構成する。前段階の列状墓の北側に北東-南西方向に二列に展開する、いわゆる二列埋葬墓である。東側に古相の甕棺が多く、西側に新相の甕棺が多い。成人棺＋これに寄生する小児棺で構成し、成人棺同士の切り合いがなく、土饅頭の存在を示唆する。また、列墓の外側に平行して、SX26・191など当段階の弥生土器を包含する不整形土坑があり、祭祀土坑の可能性が高い。

甕棺墓が主軸を揃えて二列に並ぶ溝口氏の「列墓b」に該当する。列墓bとセットとなることが多い区画墓Ⅰ（例えば、吉野ヶ里遺跡北墳丘墓など）の被葬者たちが、地域社会を構成する複数の集団から選別された代表者と考えられることから、2段階の墓群の被葬者たちは複数の集団で形成するものと想定したい。なお、瑞穂墓地では区画墓Ⅰは確認されておらず、被葬者たちは「一般層」で構成すると考えられる。

【3段階（中期後半～後期初頭＝KⅢb・KⅢc・KⅣa式期）】 前段階の列墓を踏襲する位置に、甕棺墓のみで構成する。少なくともKⅢb式期までは列墓を踏襲している可能性が高いが、甕棺の挿入方向は列墓の主軸に直交するものが多い。このうち、列墓西側では列墓と重複しながらも集塊状を呈す墓群がある。甕棺の型式差から見ると、K44→K39→K43→K40・K50の順で累代的に造墓していく状況が認められる。いずれも成人用の大型棺であり、数世代に亘り系列的に造墓している可能性が高い。お互いが近接しているにも関わらず切り合うことがないことから、前段階同様に土饅頭の存在を示唆する。また、これ以外の甕棺墓はほぼKⅢb式に限定することから、墓群ごとに造墓の連続・非連続の差異があったとを示す。この段階は列墓から集塊状墓への変遷を良く示し、その画期はKⅢb式期とKⅢc式期の間に求めることができる。なお、各段階の時間幅の設定の問題もあるが、前段階と比べると造墓数が減少する可能性がある。

3段階のうち、西南の群は溝口氏の「系列墓」に該当する。財や権利の相続・継承の系列意識の



第 124 図 墓地変遷 1・2 段階 (1/300)

表出と理解され、墓群の単位は、「単位集団 / 家族集団」もしくはさらに小さな「世帯」に相当するものと考えられる。瑞穂墓地ではこうした系列墓は現状で 1 群のみに留まり、他では造墓の継続性が不明確であることから、造墓集団の不安定さを示唆する。なお、瑞穂墓地では 3 段階並行期に出現する、「区画墓Ⅱ」（立岩堀田遺跡など）や厚葬墓（須玖岡本 D 地点など）はない。

【4 段階（後期前半～中頃前後）】 時期不明確なものが多いが、墓の形式と調査時の所見に基づき位置づけを行う。SX183・187 は足元掘り込み式土坑墓 Ba 1 式（江崎 2009）で、当段階に位置づけられる。SX185 は SX186、SX188 は K 41 に後出し、当段階か 5 段階の可能性が高い。SX64・65・66 や SX56・72 は調査時の所見により当段階に位置づけておく。SX183・187 等は 3 段階の西南群からの連続性が認められるのに対し、調査区東側の 2 つの群は前段階から継続しない可能性が高い。SX64～66 の重複関係や SX183・187 が前段階の甕棺墓に近接することから、系譜関係を意識したと想定される。副葬品を持つ墓はないが、墓坑の大きさから西南群に優位性が認められる。

この段階は、北部九州の多くの墓地で埋葬数が減少したり終焉を迎える。一方で、溝口氏の「区画墓Ⅲ」（須玖唐梨遺跡など）が出現する時期にあたるが、当段階の瑞穂墓地では「区画墓Ⅲ」は明確ではなく、西南群の様相から前代以来の集塊状墓・系列墓の様相を継承している可能性が高い。

【5 段階（後期後半～末）】 4 段階の土坑墓群をおおむね踏襲し、3～4 群（北群：土坑墓 2 基、東群：



第 125 図 墓地変遷 3・4 段階 (1/300)

石蓋土坑墓 3 基、南群：土坑墓 3～4 基、西群：石棺墓 2 基・石蓋土坑墓 4 基・土坑墓 2～3 基) で構成する。このうち、北群 SX156 は勾玉・ガラス玉を副葬、西群では鉄器の副葬や赤色顔料の散布が認められる。特に西群では、短軸 4.5m、長軸 8.5m の範囲に 10 基程度の墓が主軸を揃えて並んでおり、何らかの区画が存在した可能性がある。石蓋土坑墓を中心に石棺墓や土坑墓も含み、小児墓と考えられる墓がある点も特徴である。このうち、5 基の墓に朱の散布が認められ、1 基の墓に鉄器を副葬する点で他の墓群とは明らかな優位性を示す。

西群は乳幼児 / 小児を含む少数の墓が一定の範囲でまとまり、朱の散布や副葬品を伴うことから、溝口氏の「区画墓Ⅲ」に該当する。いわゆる「単位集団」に該当する規模の被葬者たちの墓域と考えられ、「特定集団墓」に位置づけられる。瑞穂墓地では、朱や副葬品の存否・墓群の規模・石棺墓を含む埋葬施設の特徴から、他の墓群とは優位性が認められ、この段階に至り明確な階層性を読み取ることができる。

【6 段階 (古墳時代初頭前期)】 2 段階の列墓の北側に方形周溝を有す古墳が東西方向に 3 基並ぶ。列墓とは重複しないことから、この段階まで土饅頭等地上の施設が顕在化していたか、甕棺墓群が



第 126 図 墓地変遷 5・6 段階 (1/300)

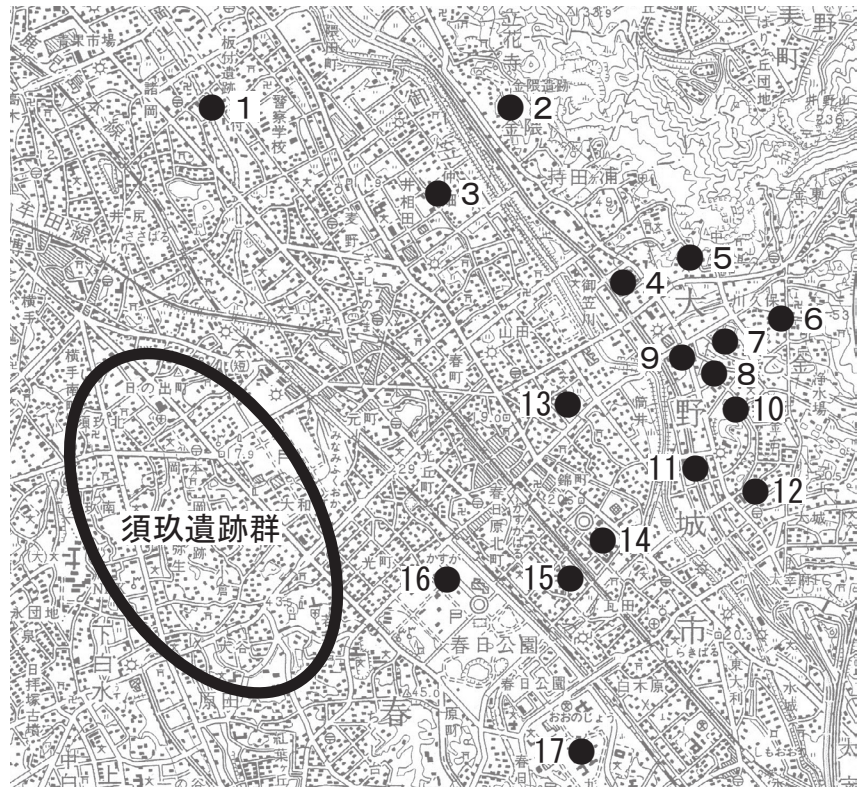
存在することが認識されていた可能性がある。このうち、1号墳が最大規模で、主体部に割竹形木棺を採用し副葬品を有することから、他の2基の古墳とは優位性が認められる。墳丘はほとんど失われており、3号墳は主体部が消滅することから詳細は不明であるが、現状では1・2号墳ともに主体部は1つのみである。この段階でようやく「特定個人墓」が出現する。

(2) 瑞穂遺跡周辺における弥生時代集落と墳墓の動態

瑞穂墓地は複数集団の共同墓地としてはじまり、次第に特定集団・個人が析出していく状況を確認した。以下では、大野城市域周辺を大きく3つの地域に区分し、弥生時代の墓地と集落の動態や対応関係を整理する。

【北部：御笠川左岸】 仲島本間尺遺跡や川原遺跡で早期の土坑や溝が確認され居住域と想定されるが、墓地は明確ではない。前期末以降は仲島遺跡で居住域が成立し、以後中・後期を通じて中心的な集落となる。墳墓の形成は低調で、仲島遺跡において土坑墓・木棺墓・甕棺墓からなる小規模な墓地がある。集落規模と墳墓規模がアンバランスであり、主体となる墳墓は別の地点に形成した可能性がある。もっとも近い墓地として御笠川を挟んだ東側の金隈遺跡があり、候補地となろう。

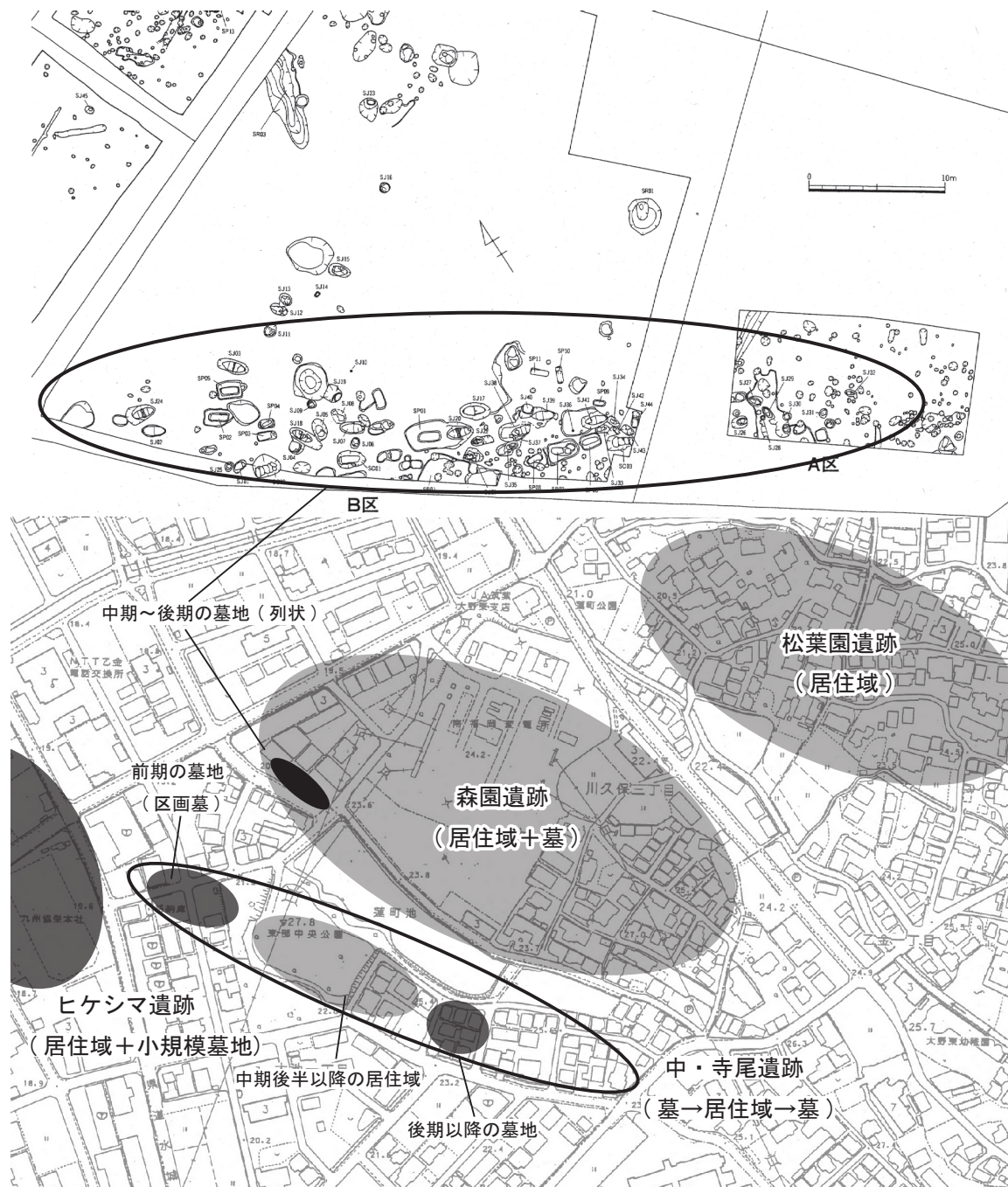
- 1：板付遺跡
 - 2：金隈遺跡
 - 3：仲島遺跡
 - 4：塚口遺跡
 - 5：御陵前ノ椽遺跡
 - 6：松葉園遺跡
 - 7：森園遺跡
 - 8：中・寺尾遺跡
 - 9：ヒケシマ遺跡
 - 10：平隈遺跡
 - 11：榎町遺跡
 - 12：原門遺跡
 - 13：村下遺跡
 - 14：石勺遺跡
 - 15：瑞穂遺跡
 - 16：駿河A遺跡
 - 17：御供田遺跡
- (九州大学筑紫キャンパス)



第 127 図 大野城市周辺における弥生時代の主要遺跡分布図 (1/50000)

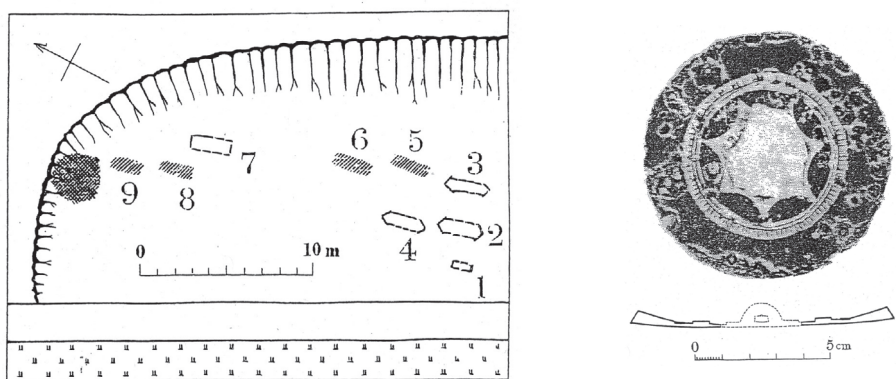
【東部：御笠川右岸～四王寺・乙金山麓部】 北側（月隈丘陵南端部）と南側（乙金山麓）で遺跡を形成する。北側は御陵前ノ椽遺跡で前期中頃から甕棺墓地を形成し、前期後半～中期初頭には塚口遺跡で土坑墓・木棺墓・甕棺墓からなる墓地が展開するが、いずれも小規模である。集落は前期を中心とした御陵遺跡があり、対応関係が想定される。一方、南側では中・寺尾遺跡で前期後半に一边 20 × 20m、15 × 15m の区画墓の出現を契機に、中期前半まで墓地が継続する。周辺に同時期の集落が不在で墓地の規模が大きいことから、比較的広範囲の地域集団が造墓した可能性がある。前期末～中期前半には墓地の中心が中・寺尾遺跡に近接する森園遺跡に移る。森園遺跡の墓地は、木棺墓（前期末～中期初頭：列志向）→甕棺墓（中期前半：明確な列墓ではないが列状を呈す→中期後半：集塊状墓）→土坑墓・木棺墓（中期前半の列を踏襲：後期前半か）→石棺墓（中期前半の列を踏襲：後期後半～終末か）へと変遷する。森園遺跡の墓地に対応する集落として同遺跡の居住域のほか、近接する中・寺尾遺跡、ヒケシマ遺跡、松葉園遺跡が想定できる。したがって、森園遺跡は周辺にある複数集落の共同墓地と捉えることができる。なお、後期後半～終末期には、平隈遺跡・原門遺跡など鏡を副葬する墓地があり、これらに近接する榎町遺跡で集落が出現する。前代からの脈絡が追えず、後期後半～終末期に新興集団が勃興した可能性がある。このうち、原門遺跡は区画墓Ⅲに該当する可能性が高く、区画墓を欠く森園遺跡の墓地とは、格差が認められる。

【中央部：牛頸川左岸】 前期では遺跡の形成が希薄であり、前期末頃から石勺遺跡や村下遺跡で居住域の形成が明確になる。これに呼応するように瑞穂遺跡でも墓地が開始し、中期前半には列墓を形成する。当該期の集落は瑞穂遺跡に近接する石勺遺跡、駿河A遺跡（中期後半～終末期主体）、



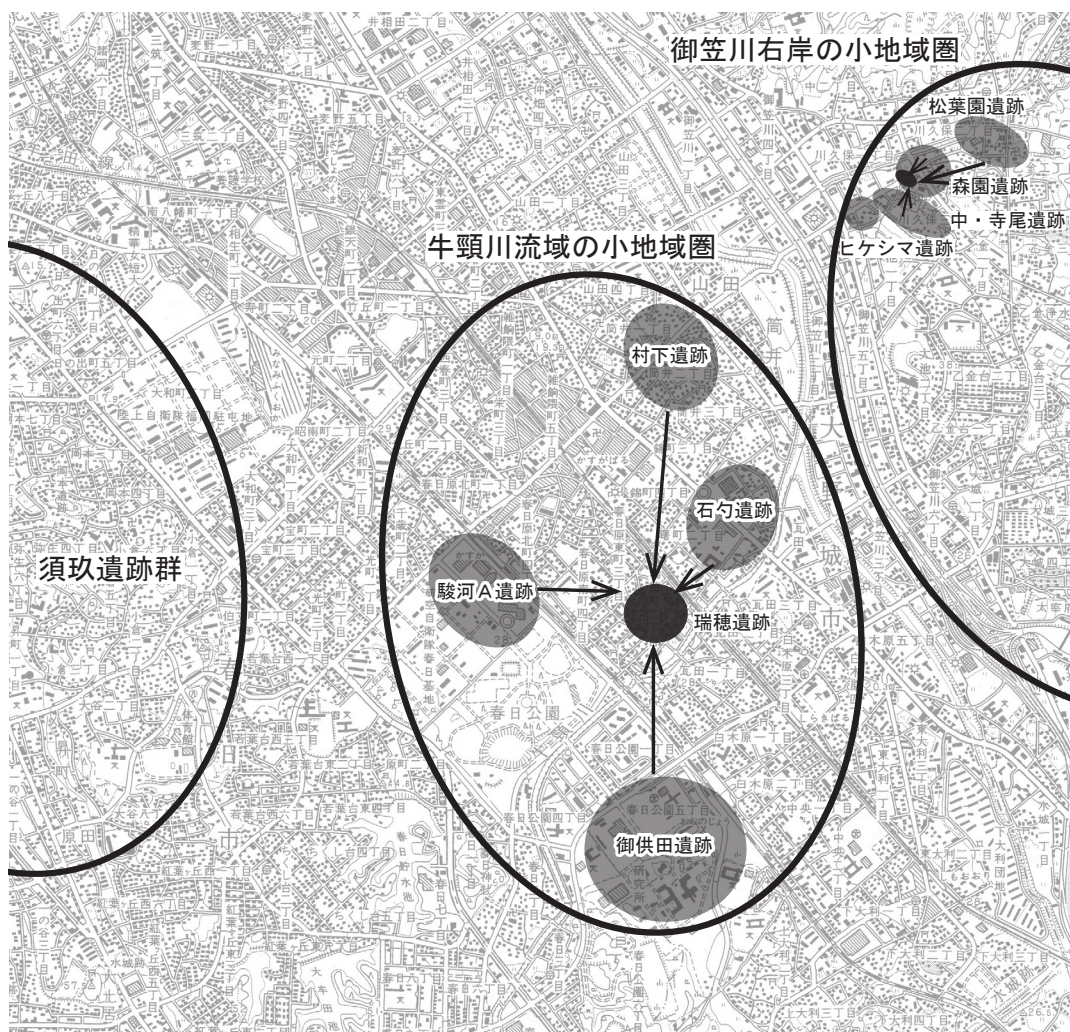
第 128 図 森園遺跡の墓地（上）と周辺の集落と墳墓（下）

やや離れて御供田遺跡、村下遺跡がある。御供田遺跡・村下遺跡は周辺に墓地がないことから、瑞穂遺跡の墓地はこれらを含めた集落構成員の共同墓地の可能性はある。中期後半には瑞穂遺跡で集塊状墓が出現するとともに、石勺遺跡で甕棺墓地が出現する。前者は引き続き周辺集落の共同墓地である可能性があるが、後者は石勺遺跡の居住域に近接しており両者の対応関係が想定できる。なお、石勺遺跡の甕棺墓地は瑞穂墓地の列状墓の延長線上に位置し、列の方向も一致する。瑞穂遺跡で造墓数が減少する時期と重なることから見ても、両者の関連性を示唆する。明確な二列埋葬墓ではないが列状を呈し、集塊状墓（系列墓）も明確ではない。前代的な様相を残す点で、瑞穂遺跡と共通した様相を示す。後期～終末期では瑞穂遺跡・石勺遺跡で土坑墓→石蓋土坑墓・石棺墓へと変



1号：小型石棺墓、2～4号：石棺墓（赤色顔料あり）、5・6号：土坑墓
7号：石棺墓、8号：？（赤色顔料あり、鏡・ヤリガンナ副葬）、9号：？

第 129 図 原門遺跡遺構配置図（左）と 8 号墓出土内行花文鏡（右）



第 130 図 瑞穂基地と対応する集落の想定

遷する。瑞穂遺跡では明確な区画墓Ⅲが出現するものの、石勺遺跡には区画墓Ⅲが認められない。したがって、後期後半～終末期では一つの墓地内における格差とともに、異なる墓地間においても明確な格差が認められる。

(3) まとめ

以上のように、瑞穂墓地の変遷・構造およびその背景について整理した。おおむね、北部九州の弥生時代墓地の一般的な変遷・構造と一致する点が多く、弥生墳墓から古墳への変遷過程を一つの遺跡で明確に跡付けることができる点は非常に重要な調査成果といえる。一方で、墓地としての長期的な永続性にくわえ、区画墓Ⅰ・Ⅱや厚葬墓の不在、列墓の残存性、系列墓の不安定さ・区画墓Ⅲの後出性などが特徴として指摘することができる。特に、区画墓Ⅰ・Ⅱ・Ⅲや厚葬墓は、瑞穂墓地に近い須玖遺跡群といった奴国中枢域や各地の中心的な墓地ではいち早く出現するものであるが、これと比べると瑞穂墓地は後出性が認められる。したがって、瑞穂墓地は奴国中枢の縁辺部的な様相、言い換えるならば北部九州における弥生墓地の一般的な姿を示しているものと評価したい。また、集落と墳墓の動態より、瑞穂墓地は周辺の複数集落の構成員が埋葬されたことが想定され、市域東部（森園遺跡周辺）でも同様の結果を得た⁽¹⁾。一つの共同墓地を構成する集団の範囲は半径1～2km程度と推測される。なお、各集落は複数の居住域で構成し、複数集落の構成員が共同墓地を経営したとするならば、瑞穂遺跡の共同墓地は牛頸川流域における小地域社会の紐帯として機能していたことを示唆する。

※本稿は、溝口孝司による調査指導をふまえ、早瀬賢が九州古文化研究会（2013年11月）において発表した内容を基に、上田が執筆したものである。末筆ながらご指導賜りました溝口氏に深く感謝申し上げます。

【註】

(1) 北部九州の弥生集落の動態を検討した小沢佳憲氏は、特に春日丘陵の詳細な分析結果より、弥生集落の基本的構造として居住域と墓域は一对一の関係にあると指摘している。これは、奴国中枢域における様相と今回対象とした大野城市域のような縁辺部の様相の差異を反映している可能性もある。今後の課題としたい。

【参考文献】

江崎靖隆 2009「九州地方の弥生時代後期墓制」『弥生時代後期の社会変化』第58回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集

小沢佳憲 2000「弥生集落の動態と画期 - 福岡県春日丘陵域と対象として -」『古文化談叢』第44集

小沢佳憲 2008「①集落と集団1 - 九州 -」『弥生時代の考古学』8（集落からよむ弥生社会）

鈴木基親・渡辺正気 1958「福岡県筑紫郡大野町原門所在箱式石棺群出土の内行花文鏡」『九州考古学』第5・6号

溝口孝司 1998「カメ棺墓の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』（平成10年度福岡市博物館特別企画展図録）

溝口孝司 2000「墓地と埋葬行為の変遷 - 古墳時代開始の社会的背景の理解のために -」『古墳時代像を見直す』

溝口孝司 2008「④弥生社会の組織とカテゴリー」『弥生時代の考古学』8（集落からよむ弥生社会）

柳田康雄 2003「4木棺墓」『伯玄社遺跡』（春日市文化財調査報告書第35集）

3. 近世墓地の変遷

7・8次調査では近世～近現代の墓地を確認した。ここでは、これら墓地の変遷について言及する。なお、墓地は甕棺墓・桶棺墓・土坑墓（木棺墓）で構成し、詳細な時期が分かる資料や切り合い関係が明確な資料が少ないことから、墓の形式毎に出土遺物からみた前後関係を整理することとする。

最もさかのぼる遺物として、SX34（木棺墓）・SX139（木棺墓）で出土した唐津系の陶器皿がある。砂目痕が残るもので、17世紀代の所産と考えられる。SX130（桶棺墓）・SX149（木棺墓）・SX150（桶棺墓）では、いわゆる「くらわんか碗」が出土し、18世紀中頃～19世紀前半頃に位置づけられる。近代以降の銭は甕棺墓のみに伴い、SX169（大正9年一銭）、SX170（昭和17年十銭）などがある。

以上より、少なくとも17世紀には墓地の形成がはじまり（木棺墓（土坑墓）、18世紀には桶棺墓、19～20世紀には甕棺墓へと変遷したと考えられる。



第131図 瑞穂遺跡7・8次調査近世墓 (1/300)